

ヴィルヘルム・ラーベ：『著作集』（Ⅰ）

ラーベ, ヴィルヘルム

恒吉, 法海
九州大学大学院言語文化研究院：名誉教授：ドイツ文学

<https://hdl.handle.net/2324/7178865>

出版情報：pp. 1-485, 2024-06-05
バージョン：
権利関係：

ヴィルヘルム・ラーベ：『著作集』（Ⅰ）
恒吉法海訳

九州大学リポジトリ翻訳研究・第二期
Nr.2. 2024年 6月 5日

Wilhelm Raabe (1831-1910):Werke(Ⅰ)

目次

| | |
|---|-------|
| 雀路地年代記 | 3 頁 |
| (Die Chronik der Sperlingsgasse 1856) | |
| 黒いガレー船 | 105 頁 |
| (Die schwarze Galeere 1861) | |
| 史的物語 (Geschichtliche Erzählung) | |
| ビュッツォーの鷺鳥 | 139 頁 |
| (Die Gänse von Bützow 1866) | |
| 飢餓牧師 | 190 頁 |
| (Der Hungerpastor 1864) | |
| 三巻の長編小説 (Ein Roman in drei Bänden) | |
| 解説 | 460 頁 |
| あとがき | 477 頁 |
| 付録 | 478 頁 |
| Brief von Matthias Claudius an seinen Sohn Johannes 1799 | |
| 息子ヨハネス宛のマティアス・クラウディオゥスの手紙 1799 年 | |

雀路地年代記
(Die Chronik der Sperlingsgasse 1856)

十一月十五日

元来、邪悪な時代である。この世で高笑いは貴重なものいとなって、額に皺を寄せ、溜め息を吐くことは、全く二束三文である。遠方には、戦争の雷雲[1853-56、ロシアとのクリミア戦争]が暗く血走って横たわっている。近辺では、病気や飢餓、困窮のヴェールに覆われている。 — 邪悪な時代である。その上、秋で、悲しく、メランコリックな秋であり、冷たい冬の先駆けの小ぬか雨が、すでに数週間この大都会にしとしと降っている。 — 邪悪な時代である。人間達は落胆した顔と重たい心とを有し、二人の知人が出会っても、互いに両肩を竦めて、ほとんど相手に挨拶もしないで通り過ぎる。 — 邪悪な時代である。 — 不機嫌になって私は新聞を投げ棄て、新たに煙草をパイプに詰めて、一冊の本を棚から下ろして、開いた。それは単純な昔の本で、名手ダーニエール・ホドヴィエツキー[1726-1801]のとても可愛い銅版画が描かれている。『身一つのアスムス』[直訳すれば、全ての動産を携帯しているアスムス、キケロにちなむ、身一つで逃げる賢人アスムスの意味]で、昔のヴァントヴェックの文士、老マティアス・クラウディウス[1740-1815]の立派な『ヴァントヴェックの使者[通信]』全集[1775-92]である。まことにそれをめくるに相応しい一日である。雨、それに暖炉の火の燃えて爆ぜる音、床や壁へのその炎の反映、 — すべてが、外の世界を一切忘れるよう手伝ってくれる。そして私は自分の眼前の頁の心と情緒の世界にすっかり没入した。[クラウディウス、巻末付録参照]。

当てずっぽうで私は或る頁を開けた。ほら見よ、 — するとヴァントヴェックの秋の庭園であった。今日と同じ霧の多い陰気な一日である。あたかも目に見えぬ手で手折られたかのように、こっそりと黄色の葉が大地に、次々に落ちて行く。通路を上がって花柄のカラフルなナイトガウンを着て、耳の上に白いとんがり帽を被ってやって来るのは誰か。 — 彼だ、 — マティアス・クラウディウス、実直なアスムス本人。 — 憂わしげに彼は歩き回り、時々立ち止まる。あるときは枯れた一枚の葉を手にとって、その葉の可愛い葉脈に見入っている。あるときは霧状の大気を見上げている。彼は物思いに沈んでいるように見える。ひょっとしたら彼は従兄弟のこと[アンドレス、『使者』の人物]か、死神ハイン[『使者』の最初の銅版画]のことを考えているのか、[つばのない]ブードル帽と棒義足の傷病兵ゲルゲル[『使者』の第三部にゲルゲルの書いた「ゲルゲル集成」がある]のことを考えているのか。新しいカノン砲のことか[第三部の1777年8月の書簡、誕生日等の祝砲への当てこすり]、それとも悪漢の侍従、アルビゴゴイ[第三部の「日本の将軍への我が謁見報告」]の耳のことを考えているのか。誰が分かる。 — ほら見よ。彼はまた立ち止まっている。何を思い出したのだ。陽気に彼は白いとんがり帽を空中に投げて、軽く跳び上がった。大きな考えが彼の「心に撃ち込まれた」のだ。 — 偉大な新しい「秋一番」の祝祭が考案された[第四部で、クラウディウスは、秋最初に雪が降ったとき、焼き林檎でお祝いすると発案している]、 —

最初の雪が降ったとき、格別優雅にお祝いをするという秋一番だ。老いも若きも顔に微笑を浮かべて、子供の歓声と焼き林檎でお祝いをするのだ。 —

最初の雪が降ると、 — — — 私がこの瞬間、また視線を灰色の天の天井に上げると、すると — 雪が降って来る、 — 本当に降って来る、最初の雪が。

雪だ、雪。最初の雪。 —

大きな、水っぽい雪片で、雨も混じっていて、雪が窓ガラスに打ちかかる。離れた遠方から長い不在の後、また戻って来た古い知人のように挨拶する。素早く跳ねて私は窓際へ

行く。外は何と変貌していることか。丁度まだ自分や世間に対しぶつくさと不満げに忍び歩いていた人々も今や全く別人に見える。雨に対しては誰もが手段を選ばず外套や傘で身を守ろうとする。しかし雪に対しては陽気に大胆に顔を向ける。

初雪だ、初雪。

窓辺には笑っている子供の顔が見える。小さな両手を楽しげに打ち合わせている。白い屋根と緑の、煌めく樅の木々に対する何という思い出か。雀路地[元来はSpreegasse、この作品でSperlingsgasse]がこの旋回する白い吹雪の中で何と空想的に見えることか。井戸泉で水汲みの小間使いの娘達がなんとくすくす笑っていることか。いやに風が吹く。 ー

「光栄です、ニーペグック教授殿、最初の雪と言うのに」。

「医師からの指示だ」とこの賢人は眩き、威厳を損なわぬよう、憂鬱症の中、精一杯微笑して私を見上げた。

ゾフィー教会でこの時、時が打たれた。 ー ようやく四時か。すでにほとんど夜である。 ー 「四時」と町全体に鈍く鐘が繰り返した。今や学校が終わる。万歳、 ー 外の立冬の中に出よう。少年達は荒々しく乱暴だ。少女達は不安げに小走りに歩き、家の壁の方に密着している。

すでのあちこちの暗い鎧戸の中で、明かりが煌めき、ますます雀路地の外見が靈的になって行く。

すると教師本人がやって来た。本を腋に抱えている。注意深く彼はそのすり切れて糸目の見える黒い上着の袖に落ちて来る雪片の解ける様子を観察している。今や時節はメルヘンの語り手、詩人のためのものだ。 ー 全く興奮して私はあちこち歩き回る。邪悪な時代は忘れ去られた。 ー 私にとっても昔正直者のアスムスのように、偉大な考えが「心に撃ち抜かれた」。「実行してやるぞ、実行してやるぞ」とあちこち歩き回りながら私は思わず知らず呟いていた。いかに不思議そうにすべての私の四つ折判や二つ折判が私を見つめていようとも、いかに嘲笑的に開かれたままの分厚い本の扉のアロンジュ[男性用鬘]の顔がにやりと笑っていようとも、構わない。

「雀路地の絵本だ」。

「雀路地の年代記だ」。

向こうの家で窓ガラスに子供の顔が押し当てられた。そしてその奥のランプの明かりが丸い影を路地を越えて、私の暗い窓の中、その反対側の壁の書架にまで投げかけた。立派な、幸いなる予兆だ。にやりと笑うがいい。二つ折判や四つ折判の中の諸兄ら巨匠よ、諸兄らアルダイン版[15,6世紀、ヴェネツィアのAldus Manutiusによる]やエルゼビル版[16,7世紀、ネーデルラントの印刷業者]の豪華本よ、雀路地の絵本だ、雀路地の年代記だ。私は本当に腰掛けなければならない、とにかく興奮が老骨の身の中で湧き上がって来て、これをすぐに利用して、私の偉大な考えのために二十四全紙の紙の束を折って冊子にし、そして最初の雪の中に最後に視線を投じてみた。バーカ、 ー 雪はどこに残っているか。雪はその親方、厳しい主人ヴィンター[冬]氏の到来を告げた後、立派な従者のように、何の痕跡も残さず帰っていた。 ー ー ー

私は孤独な老人になっていた。世間と呼ばれるこの偉大な絵本のカラフルな、永遠に交替して行く、永遠に新しい画像は、私の老いた目にはますます暗くなって行く。段々とこ

の画像は消えて、段々と互いに混じり合っていく。私は人生で覚醒から睡眠への移行過程の中、疲れたこの者の脳内で、一日の諸体験がまだ鈍く交錯するようでありながら、しかし既に薄暗い、夢や霊の多い夜が善悪万般の上にそのヴェールを広げるというその時に達していた。私は年老いて疲れている。思い出が希望の代わりに登場する時節である。

私は私の夢想から判断するに、私は確かに遠い昔の花咲く年月と同様、周囲の人間の顔に同じ微笑や、同じ苦痛に歪む痙攣を見いだす。しかしたとえ喜びと苦しみは昔の母たる大地に同じものとして残っていても、それらの顔自体は、私には馴染みのないものとなっている。 — 私は一人っきりだ、 — 一人っきり、 — しかしだが一人つきりではない。忘却の薄明かりの夜の中から、それが浮かび上がり、聞こえる。私が面識があって耳にした形姿や音色、声が再び目覚めて、活発になる。私が以前、過去の良き日々や悪しき日々、好んで見聞きした死んで埋葬された春がまた緑となって花咲き始める。私は忘れていた子供のメルヘンを思い出し、私は若返り、 — 跳び上がり、 — 目覚める。

それから思い出の世界は沈んでしまい、私はこの冷たく悲しい現在の中で凍える思いである。私は自分の孤独を一層切なく感ずる。私の二つ折判も私の他の苦勞して積み上げられた学的宝物も老年の湧き出て来るコーボルト[悪戯妖精]や厄介精霊を追い払うことが出来ない。彼らを追放するために私は諸頁を記す。私は高齢者のお喋りのように記述する。私はこれらの全紙を一人の友として見るつもりである。一緒にお喋りする友であり、私に辛抱強い友であり、反復を耳にしても嘲笑しない友、 — いや、高齢者は好んで反復する、 — 何らかの甘美な思い出の枯れた花に私が執着しても、出発へと急かさない友、過去の灰の中に物悲しい思い出がなお微かに微光を発している、留まるよう強要しない友である。しかし私はこの全紙を一つの年代記と呼ぶ。その内容が、関連性に関して言うと、とても素朴なかの記録に似ているからで、これは様々な順序で、過去や、現在、未来からの出来事を語るなのである。あるときは戦争を伝えて、あるときは不思議な天体の星の出現に目を留める。間近の世界の没落について説教するかと思うと、またドイツの皇帝夫人が修道院の庭で披露させる山嵐[動物]について珍しがり、興ずる。昔の僧侶達がここかしこで、彼らの物思いやミサの本の羊皮紙の間に、可愛い多彩な綺麗に彫り込まれた聖人画を置くように、私も類似の頁[葉]を編み上げて、私の晩年の日々の単調で、色彩のないスケッチから、より新鮮で、より豊かに花々の見られる蔓を絡み合わせたい。

老人の私は、 — 第二の幼年時代に間近で、一人の子供について語ることにしたい。この子供の生涯は、私の生涯を陽光のように進むもので、この陽光は雨の日には風や雲によって野外を追われる。この陽光は滑って行きながら、花々や星々に接吻をし、同じ瞬間、揺り籠の上の母親の幸せな顔、自分の本の上の思索家の熱い額、臨終の者の青白い面影に触れるものである。私は長編小説を書かないし、作家としての対位法を余り気かけなくて良い。私に対し過去がもたらしたこと、私に対し現在が恵むもの、これを私はここに可愛い縁取りの中、まとめることにしたい。私は疲れたら、 — このノートを閉じて、更に私の豚革製の学術世界での詮索を重ね、陽気に私の重要な作品、『人間ノ虚栄ノ営ミニツイテ』、例外的に — 分厚い対象に取り掛かり、寄せ集め仕事を続けるのである。

十一月二十日

私は大都会の、陽光がこっそりとしか覗き込もうとしない、狭く曲がった路地を有する

こうしたかなり古い一角が好きである。その切妻の家々や、奇妙な軒樋、角に衝突避け緑石として置かれる古い四十ポンド砲や筒長野砲を有するこうした一角が好きである。一つの過去の時代のこの中心点を私は愛しており、これを中心点として周りに新しい人生が直線の、パレード行進がなされる通りや広場となって展開されていた。私は我が雀路地の角を曲がるとき、一五八九年の年号のある古い、そこに収められている砲身を手で愛撫して触れずにはおれない。このかなり古い町の一角の住民からして、近代的一角の住民よりも、より風変わりで、より奇妙な民衆に思える。こちらのこの片隅の路地には、仕事と真面目さの民衆のすぐ側に軽薄な民衆が住んでいて、この密集した付き合いのため、より上品な、しかしまたより素っ気ない通りでよりも、もっと人々は刺激されて、より頓狂な、より喜ばしい光景を見せている。こちらにはまだ古い名家の家々があって、一 勿論その一族自体は大方とうに消滅しているが、家々の建て方の独自性にちなんで、あるいは或る特徴にちなんで、何らかの素朴な珍しい呼称で民衆の口頭で伝わっている。薄暗い、燻された古く重要な取引商会の事務所があるかと思えば、地下室や屋根裏部屋の真の帝国があったりする。黄昏や夜になると、こちらでは他のどこよりも、ランプの明かりや月光によって一層風変わりな照明や、一層奇妙な音色が生じている。錆びた風見の軋み、喘ぐ音、風による屋根瓦のかたかた音、子供の泣き声、猫のにゃあお、女達のガミガミ声、こうした狭い路地のここよりもどこがより一層似合って、一 あるいはその地に一層適した具合にと言えるかもしれないが、一 聞こえるものだろうか。つまりこの高い家々の間にある路地のことで、そこではどこの片隅であれ、どこの角であれ、どこの先端であれ、音色を掴まえて、屈折させ、変化させて投げ返すのである。一

ほら、聞かがいい、私が、この瞬間、このことを書き記すと、下のかのドーム状の門道で手回しオルガンが始まった。このオルガンがその嘆くような、この地でまことにメロディー豊かな音波を仕事中の鈍い回転やゴロゴロ音の上を回転して来る。一 確かに神の声は、風のざわめき、波のどよめき、雷音の中で十分聞こえるように話されているが、しかしこの人間世界の営みが生み出すこの定かならぬ音色の中で聞かれるほどに明瞭ではない。私は主張する、駆け出しの詩人とか画家は、一 音楽家に関しては、これは勿論別で、一 ここより他に住んではならない、と。すべての芸術の中で、最も新鮮で、最も独創豊かな創作はどこでなされて来たかと汝がお尋ねになるならば、大方答えはこうであろう、屋根裏部屋だ、と。一 ワインオフィス・コートの屋根裏部屋で、オリヴァー・ゴールドスミス[1728-1774]は、滞納していた家賃のせいで女将によってそこに閉じ込められていたが、すべての古い書類、色褪せた上着、空になったマデイラ・ワイン瓶[ポルトガルの島]や、あらゆる種類のガラクタの中、汚れた原稿を仕上げている、ジョンソン博士[1709-1784]が見つけたのである。『ウェイクフィールドの田舎牧師』[1762]という表題である。

ジャン・ジャック・ルソーはある屋根裏部屋で極めて輝かしい世を震撼させる書物を書いた。ジャン・パウル[1763-1825]は、屋根裏部屋で貧民弁護士『ジーベンケース』[1796]の描写の術を学び、学校教師『ヴッツ』[1793]と『フィーベルの生涯』[1812]の描写法を学んだ。一

雀路地は短く、狭い通路であって、川[シュプレー川、モデルのSpree路地は後、1931年9月8日、

Sperling雀路地となった]の岸辺のあるクローネン通りと結ばれていて、この川は多くの支流や運河となって、大都会を取り巻いている。この路地は十分に住民が多く、活気があり、神経質な頭痛持ちは気が狂いそうになって、精神病院でその終末を迎える。しかし私にとっては、この路地は、数年前から世俗生活の得がたい舞台となっていて、ここでは戦争や平和、悲惨さと幸福、飢餓と過剰、すべての生活の対立物が反映される。

「自然では万物が無限に離れ離れになります。精神の中で宇宙は一点に集中します」と以前論理学の我が老教授が講義された。私はこのことを当時、確かに良心的にノートに書き写した。しかしこの命題の真実性に関してさほど気にしなかった。当時私は若くて、マリー、可愛い小さな装身具女工が私の向かい側に住んでいた、大抵窓辺で縫っていた。一方私は、カントの『純粹理性批判』を鼻先に置いていて、目を――ただ彼女の許に向けていた。私はとても近視で、余りに貧しく、この遠距離調査のために眼鏡とか、望遠鏡、あるいはオペラグラスをあつらえることは出来ず、私は絶望していた。私はこの文の意味を理解した。自然では万物が無限に離れ離れになります。

そこで私はある午後、いつものように窓辺に立って、鼻を窓ガラスに押し当てて立っていた。向こうでは花の下、陽気な明るい陽光を浴びて、私の真実に「崇拜する影」[『クライスレリアーナ』の一表題、E.T.A.ホフマン[1776-1825]作が座っていた。彼女がこちらへ微笑しているか知るために、私はどんなことでもしたい思いであった。

突然私の視線は、しばしばガラス窓に見られるかの小さな気泡の一つを通過した。偶然私はそれを通じて、我が可愛い装身具女工の方を見た。そして――私は宇宙は一点に集中し得ることを理解した。

雀路地のこの夢の本、絵本も同じである。舞台は小さい。そこに登場する者達は少ない。しかしその人々は自らの中に書き手にとって興味ある世界を有すると理解出来るだろうし、いつかこの頁を手にする事になっても、余所者、お呼びでない者にとっては退屈な世界となると理解していよう。

十一月三十日

雨は静かに私の窓ガラスを叩いている。一昨日向こうの十一番地に引っ越して来たあの奇妙な背の高い若造は誰で、何の仕事をしているのか。私もかつて住んでいたかの住まいで、以前ヴィンマー博士の活躍した部屋であるが、私はまだ聞き出せていない。――まことに今は夢想の時である。私は頭を片手で支えて、窓辺に座って、次第に外の雨の単調な音楽に一層調子を合わせながら、遂には現在のことを完全に失念した。一つの映像が次々に幻灯機の中でのように私の側を通り過ぎ、私がそれを引き留めようとしても、消えた。いや、実際、私を最も引き留め、魅了したものは、私が紙上に定着できるようなものではなかった。――これを定着するためには、私は全く別な画家でなければならないであろう。

これは絡み合って、消えて行くものである。濃密になって、かくて消え失せる。これは光を発して、逃げ去る。次の瞬間ごとに、何か別のものとなる。しばしば私は記述すると子供っぽく、馬鹿げて、瑣末に見えるであろう考えに襲われる。これらの考えは、老人の私にとって、その取り留めのない変転がとても甘美で、馴染む深く、幸多く思えるもので、私は絶対その考えから目覚めたくないのである。

ただ最も具体的なものだけは、時に固定化できる。今回それは私自身の生涯からの画像で、これをこの紙に再現して見よう。

緑のブナの木が生えた山々の間にある小都市は一体どんな町であろうか。赤い屋根が夕陽を受けて微光を放っている。ここかしこで穀物畑が山腹に伸びている。谷からは小さな小川がざわめき、音立てて流れており、この小川は町を抜けて跳ね、小さな池を作り、縁には藺草や黄色の睡蓮で覆われていて、そして別の谷へ消えて行く。私はこうしたことすべてを承知している。私は大抵の家々の住民の名前を呼ぶことが出来る。かの可愛く古い教会の先端の尖ったスレート葺きの塔で鐘が鳴り始めると、どのような音色か私には分かる。私は度々鐘の綱にすがって左右に揺られた経験がないだろうか。

これはウルフェルデン[モデル、Stadtoldendorf]で、私の子供時代の町である。 — これは私の父祖の町である。

そして見給え。向こうの庭園の中、これはかの砕けやすい、まだ建っている市壁から山の上方に広がるものだが、花咲くニワトコの灌木の下、囲まれた三人の子供達が見える。一人の小さな少女が大きな輝く目をして、森からの野生児フランツの話すことを聞いている。フランツ・ラルフは、森で育って、今は小さなマリーの父親、厳格なラテン語の町の校長、フォルクマンの許で躰を受けていて、手に大きな囓られたバターパンを持っていて、噛みつきながら、彼の風変わりな話しの一つを話していて、同時に自分の話しに酔っている。この話しは彼が森の孤独の中で考え出したもので、この話しをして彼は我々小さな者どもをいつも「身の毛のよだつ」思いにさせるか、そうさせようと試みていた。

すると見よ、草の中で手足を伸ばしている私もいる。小さなハンス・ヴァハホルダーで、牧師館の息子で、目を瞬かせて、青空を見上げており、純然たる大気中の小さな白い「子羊」の夢に耽っている。

家路に就く家畜の鈴の音が山々の間で響く。周辺でぶんぶん音がし、草や木々の中、大気中で、無限の生命が音を発する。子供の心はすべてを了解する。その心は実際まだ自然と一体となっており、 — 神と一体である。

しかし何故、下の褐色のドアは開かないのか。明るく輝く窓のある可愛く、ブドウの木の密集した家から庭園に通ずるドアである。

立派な灰色髪その老公はどこにいるのか。彼は夕方はいつも花に水をやる習慣なのだが。

どこに — どこに私の母はいるのだ。私の母は。

親しげな声が返事をすることはない。私自身がその灰色の髪になっている。父親と母親は、長いこと、ウルフェルデンの小さな町の教会墓地の忘れられて沈んだ墓塚に眠っている。より若い世代もその後すでにあの世に逝っているのである。

突然その陽の当たる夏らしい画像が変わった。

するとすでに大都会[Berlin]である。今回は春ではなく、盛夏でもなく、嵐のような、暗い秋の夜である。 — ひょっとしたら、今日の一日に類似の夜が来るかもしれない。

— その夜、暗い上階の、小さな、四角というよりは三角の屋根裏部屋に一人の学生が巨大な豚革製の二つ折判を前に座っている。彼の視線はこの本の先に凝固している。彼は何を思案しているのか。外では風が月の前の雲を追い散らして、屋根瓦をガタガタ言わせ、この創意工夫のミュージズの息子[学生]が自分と自分の勉強を外界から完全に遮断す

るために、窓の十字棧に固く釘付けにした襦袢のナイトガウンを揺すっている。――要するに、この風は、庭園や森の木々の最後の葉を奪うべく委託された風のみが働けるような狼藉を仕掛けていた。長いことこのミューズの息子[学生]は深い物思いに耽っていて、座っていた。今や彼は突然飛び上がって、その顔を私に向けた。――これはまた私である。ヨハネス・ヴァハホルダー、この大きな首都、大学町の哲学[文学部]の学生である。我が青春時代のこの二重自我はとても興奮しているように見える。この窮屈な、奇妙な調度の部屋の中、かろうじて許される強引な足取りで彼はあちこち歩いている。

突然彼は窓の方へ突進した。この即興のカーテンを引き下ろし、この瞬間に千切れた雲間から射して来る華美な月光を中に入れた。

「マリー、マリー」と我が影絵は小声で囁いた。両腕を向こうの弱い照明の窓の方へ差し出していた。向こうの窓の垂れたカーテンに人影と覚しき影が動く気配がする。そして、――

尋常ならざる興奮の時に、―― 歓喜であれ、苦痛であれ、憎しみであれ、愛であれ、―― 月の澄んで白い明かりに身を晒すのは、危険なことである。月光で乱心すると、民衆は言っている。実際、この純粋な明かりは、奇妙な考えをもたらす。精神を乗っ取り、精神を解体し、将来、日常生活からはみ出した通路を更に心地よく邁進して行くというあらゆる頓狂な素質を励起させる。「月光で乱心する」。―― 空想的、霧深い地底の中に、魔法のような展望が両方の側に開ける。聞いたこともない声が生じて、サイレンの歌声で誘い、抗い難く囁きかけ、旅人を安全な道から踏み出よう仕向ける。やがて魔法をかけられた者は、妖精ファンタジーの逃れがたいアルミダ[妖精]庭園[『解放されたエルサレム』タッソー作、1581]をさまようことになる。

「おまえを愛しているのだ」と我が影絵が囁く、「私はおまえを金持ちにし、おまえを幸せにし、おまえを有名にするつもりだ、私は」、―― この記述している老人は今はまだ微笑するばかりである、―― 「マリー、おまえのために世界を勝ち得るつもりだ」。

額を窓ガラスに押し付け、向こうの小さな部屋に向かって、更にもっと我が二重自我は囁く。そこでは幼馴染みが、人生の冷たい腕で森に囲まれた平和な故郷から拉致されて、孤独に、薄暗い、嵐の夜働いているが、別人の影が幸福と名声の彼の夢に斬りかかる。

別の人影である。黒く、密な巻き毛が日焼けした顔にかかって、両目は生命欲、生活力で輝いている。画家のフランツ・ラルフで、彼はイタリアから戻って来て、古代の神々しい世界と、また同じく神々しい若々しい時代の偉大な考えに満ちた姿で、友を抱擁する。

そして更に私の精神はさまよう。―― 私は相変わらずこの若い孤児の娘が、花の下、小さな部屋で働いているのを見ている。私は二人の男が、人生の奔流の中、彼女から微笑を引き出すために戦うのを目にする。私はようやく咳き込む胸の男が岸辺を勝ち取って、立派な褒賞を得るのを見る。―― 一方別の男は更に流され、無気力に呆然と荒涼たる懐疑的な砂州に至っている。―― 私は自分が、鈍重な物思い屋になっているのを見る。この者は、単に借り物の偽善の棘で身を守る術を心得るだけであるが、最後に、世間での長い遍歴の後、その戦いから一人の真面目な、洞察の男となって出現する。自分の友とその友の若い妻、この二人の友となっている。

私は、短い歳月の間、幸福に安静に暮らした。私はこの数年の間、上品なブロンド髪の人影が微笑して、我らの立派な守護霊のように、フランツと私の周りに漂って、彼女の庇

護する手を彼の容易に燃え上がる野生の上に、そして私の物思いの悲しみの上に差し出すのを見ていた。 — 私はやがて小さな子供、 — この年代記の頁ではエリーゼと呼ばれるが、 — 夕方、母親の両腕の中から父親の両腕の中へ、そしてこの父親の両腕の中から友の両腕の中へ移るのを目にした。大きな、訝しげな目で我々を見上げている。 —

突然雨は、窓に打ちかかるのを止めた。私は驚く、 — 夜は更けている。私は最後の視線を下の路地へ投げかける。路地は暗く、荒涼としている。 — 一つのガス燈の不十分な明かりが、舗石のたまり水や下水溝に反映している。ゆっくりと用心深く顔を覆った人影が家々のすぐ側を忍んで行く。時々この人影は周囲を見る。これは犯罪のために歩いているのか、それとも善行のためか。別の人影が角を曲がって現れる。 — 軽い口笛、 —

「リークヘン、長いこと待たせるじゃないか」。

「だって早く来られなかったの、母親がやっと寝てくれて、 —」。

遠くで転がっている馬車の音で残りは聞こえない。これらの人影が影の中から出て行った。暗い外套の下に舞踏会の晴れ着が見える。

二人は角を曲がって消えた。私は窓を閉める。

かくてこの年代記の最初の頁が終わる。この年代記は人類の歴史同様に、また個々人の歴史同様、 — 一つの夢で始まっている。

十二月二日

今日は私にとって大きな痛みの記念日である。しかし今朝は諧謔が私に敷居に現れて、その鈴を鳴らし、その[道化師の]打ち篋を振って、言った。

「笑うがいい、笑え、ヨハネス、君は老人だ。もはや一刻の猶予もない」。

向かい側のかの奇妙な背の高い人間が、色褪せた灰色の厚手ウールの上着を着て、かなり赤く、みすばらしく見える帽子を腋に抱えて、私のドアをノックして、諷刺画家のウルリヒ・シュトロローベル[作者の面影を有す]と自己紹介し、私の目の前のテーブルに大量の素敵な紙片を広げて、冬の間、 — 夏は外でぶらぶらするから、 — 当地の絵入り新聞の一つに素描家としての職を斡旋して欲しいと頼んだ。彼は、私の太った友、ミュンヘンのヴィンマー博士と昵懇であり、その本当の証拠として、この立派な作家の陽気な顔を、そこにあった本の表紙の裏側に描いた。私はまことに見事なペン画を描くこの風変わりな素描家に、当地の文学界における私のなけなしの声望を彼のために出来るだけ有効利用したいと約束した。彼はドアの所で、別れに私に手を差し出して、甘く慄然とする微笑を浮かべて、言った。

「尊敬する殿方、ご恩には報いたい所存です。健気な隣人として、とても立派に見える幾つかの貴方の快適な面を、私は発見して紙面に致しましょう。まあ、この冬、得がたいヴァハホルダー殿、私どもは仲の良い隣人となれましょう。と申しますのは、 — 貴方は良く窓から覗いておられるからで、これはある意味、また別な意味で、一緒に気楽に暮らせるようなすべての人々の一つの独自性なのです。良い朝を祈念致します」。

一人の風変わりな知人を得て、知人が増えて、私は私の年代記に戻りながら、名匠シュトロローベルには時々またこの年代記で出会うだろうと確信した。

午後

今日は記念日である。私はこの思い出を忘れないであろう。私がどこへ行こうと、この思い出が付いて回る。

今と同じように陰気な、雨模様の冬の午後であった。私はあそこの向こうのかの窓辺に座っていた。 — 何年も前のことである、 — あそこの向こうのかの窓辺、丁度そこから素描家のシュトローベルが私に頷きかけているが、 — 私は悲しげに、灰色の、単調な天の天井を見上げていた。路地は当時も多分今とさほど変わらないと思う。それでも、今でも全く良く覚えている多くの顔が消えていて、代わりに新たな顔が現れて、ただ個々の顔のみが、例えば下の地下室の、老銅釜製造工のマルクヴァルトが、彼は今日でも昔と同様に陽気にその鉄をハンマーで鍛えているが、この絶えざる往来の流れの中で残っている。これらの人々は、やはり、私が回想の際、私の年代記の所々で欠落している糸をまた結ぶときに一緒に支点となってくれる人々である。

私はこの年代記をある小川に喩えたい。大地の懐からようやく湧き出て着て、最初は陰気に、まだその薄暗く苦痛に満ちた生誕の地の痕跡を浮かべている小川である。しかしやがてその小川は明るい陽光の中を跳ねて行き、花々を映しだし、小鳥がそのくちばしを突っ込んで浸す。或る箇所ではほとんど小川は消滅しているように見えるが、しかしまた別の箇所で楽しげに息を吹き返す。岩を大胆に越えながら、自ら独自のお喋りをし、抜け道を巧みに求めて、探そうとする。 — ただ砂の中に消滅しないで欲しいと思われる。...

かくて私は続けて行く。

それは申したように、悲しげな、不気味な一日であった。しかし当時私の心のかくも重く押し潰したのは、その天候のことではなかった。かの日、私はあそこの向こうの窓から、私の現在の住まいの部屋の窓が、冷たさにもかかわらず、雨にもかかわらず、広く開けられているのを目にした。白いカーテンが降りていて、側面が固定され、激しくあちこち揺らしている風にカーテンがもぎ取られないようにしていた。

死神はその陰気な冷たい手を幸せな同棲生活を分割するように置いた。向こうの木蔭格子の下、ニッチの床の上、裁縫台の前の小さな椅子には座る人がいなくなった。

マリー・ラルフが亡くなった。 — —

私は自分の窓からこちらで一人の人影が部屋の中をあちこち歩き回るのを見ていた。哀れなフランツ、哀れな少女。哀れな — ヨハネス[ハンス、自分]。 — 彼女はとても愛らしく、腕に幼子を抱いた乙女の聖母のようであった。

この都市の美術館では小さな聖母像が掛かっていて、その絵では「不可侵の女性」がその膝の中で立つ小さなイエスをとても愛らしく・驚嘆して、母親らしく・誇り高く、眺めていた。この絵画に彼女は似ていた。彼女は同じようにブロンドの巻き毛で、同じように神聖で、同じように美しかった。私はしばしば十分にこの絵の前に立って、昔の過ぎ去った素敵な時代を偲んだ。この絵はスペインの巨匠モラレス[1510頃-1586]の作品で、同時代の者達が神々しい者と呼んだ画家である。

いや、私は彼女をととても愛した。私は彼女が私を単に「お友達」と呼び、私の友、フランツ・ラルフを「愛しい人」と呼んだとき、とても苦しんだ。しかし今や彼女は亡くなった。彼女は私ども二人をただ残して去った。その夕方は更に更けていった。黄昏が私と向

こうの間に沈んで来た。私は耐えられなくなって、向こうへ行かざるを得なかった。私が入ると、フランツは相変わらずあちこち歩き回っていた。彼は私に気付いていないように見えた。私は静かに揺り籠の隅に腰を下ろした。そこでは子守女のマルタが、子供に身を乗り出して見守っていた。その子供は静かに眠っていて、その小さな両手を口許へ当てられていた。

私はどれほどそこに座っていたか、覚えていない。かの晩私は何を考えていたか何も定かでない。この大都会を覆う深い静寂で、ただ次のような感情に襲われていた、あたかも生命は一つの大きな国全体の中で鼓動しているこの心臓から去ったかのようであり、あたかも壁時計の微かなカチカチ音が世界の歯車の最後に消えて行く物音であるかのようであり、そして永遠の静寂が今や瞬時のうちにすべての残りの生命を飲み込みそうである、と。

私の側で子供が小声で泣いて、私はようやく目覚めた。フランツは私の肩に手を置いて、それから突然疲れ果てて、私の側の椅子にくずおれた。

「お休み、ヨハネス」と彼は、私の胸に頭を置いて、言った。「明日彼女を埋葬することにしよう」。 —

それが彼がその日に話した最初の言葉であった。

十二月三日

いや、愛しい、愛しいマリア、さらば、
さらば、愛しいマリア、
愛しい、愛しいマリア、さらば。

[出典不詳]

愛しい亡き女性の墓石にこう記したのは、偉大な詩人であった。彼は偉大な、強力な、心を揺さぶる歌を歌っていた。ここでこの詩人はこの三つの言葉しか記していない。心を揺さぶって反復している。そしてかの朝[フランツの言う明日]が白んだ。大都会の生命は再び通常の進行を開始した。富める者はその枕の上であくびをするか、あるいは貧しい者と同じように心が重たかったかもしれない。貧しい者は今やその暗い片隅から急ぎ出て、その苦難の鎖の新たな環を、新たな一日をその生活から鍛接する。生業のその手職の道具が握られる。偉大な機械はまた叩き始め、呻り始める。馬車は通りを転がって行き、洗礼の行列が葬儀の馬車に出会う。というのは人間が一杯いる町では、最後の眠りに就くのは、向こうの小さな寝室の死骸が唯一というわけではないからである。

私は向こうへ出掛けた。鍋釜製造工のマルクヴァルトは、 — 彼は当時今よりも若くて、力強かったが、 — 自分のハンマーを置いて、悲しげに自分の地下の工房へ通じている低いドアにもたれ掛かっていた。彼はマリーを、生前彼女と接触のあった皆と同様に、愛していた。彼女はすべての他人の痛みに対し一粒の涙を、すべての他人の喜びに対し共に喜ぶ一つの微笑を見せなかつただろうか。彼女はこの薄暗い雀路地で、いつでも自分が踏み込む大地から一つの花を呼び寄せる、かの朗らかな、善良な、小さな妖精のようではなかつただろうか。

玄関の間には、私が通り過ぎるとき、悲しげに顔をかける女達が囁きながら立っていて、ある階段では小さな少女が嗚咽して座っていた。膝には破れた人形を抱いていた。いや、私はまだありありと思い出す。そして私は入った。 —

彼女は赤い蝶結びリボンのある白い服を着て、一本の開いた薔薇を胸に挿して、黒い棺の中にいた。いつもはとても澄んで、親密そうな両目を閉じて、死神の永遠の真面目な休息がその純な顔に見られた。フランツは泣きながら私の首筋に倒れ込んだ。白い晴れ着の若い近所の娘達が黒い棺の周りに樅の枝と常盤木の花綵を固定した。その花綵からはそこかしこに個々の花が見えた。

いや、貧乏と冬のために、余りに多くの

「甘美なものを甘美な女性に」[『ハムレット』、オフェリアの墓に、5,1]撒くことは出来ない。[美しいものには美しい花を、福田恒存訳]

若い指物師ルドルフは、家から出て、左手で目を覆って、右手には槌と釘を持って、下の方、脇に立っていた。その若い妻は嗚咽しながら頭を彼の肩に置いていた。いや、私はまだすべてをまざまざと思い出す。 — 最後の、長い、長い、視線を私は私の子供時代の美しく青白い静かな幼馴染みに投げかけた。我が青春時代の聖女であり、我が壮年時代の慰め手の女性である。それから私はこっそりとフランツを彼女の胸から持ち上げた。フランツは身を乗り出して、その胸に沈み込んでいた。そして彼をその子供の揺り籠へ導いた。 — 指物師のルドルフがその悲しい仕事を始めた。鈍い槌音の下、一人の人間の生命のこの聖遺物の上に蓋が収まった。冷たい戦慄に私は襲われた。さらば、さらば、愛しいマリア。

運び手がやって来て、その軽い荷を肩に担いで、狭く窮屈な階段を下へと運んで行った。女達は嗚咽し、子供達の頭が訝しげに、真面目に玄関から覗いていて、葬列が路上に出て来ると、臆して脇へ退いた。友人達や知人達がこの画家の夫人の最後の道を同伴するためにやって来ていた。鍋釜製造工はその帽子を脱いで、その黒い、胼胝のできた手を目の上に持って行き拭った。邪悪な夢の中を歩いているようなフランツを私は導きつつ、我らの最愛の者を覆っている棺の後に従って歩いた。いや、私はまだすべてを正確に覚えている。人間の心はそのようなものである。かの悲しみの一日以来、何年も過ぎ去った。しかし今日もなお私は、当時私の胸を去来した陰鬱な想念を覚えている。一方私は最近の幾多の喜びごとを忘れていたのである。

このような葬列では、出会う人達や見物人の顔色を読み取る術を心得ている者にとって、多くのことが学ばれ、明らかになる。

向こうの隅に哀れな、襤褸を着た民衆の出の女性がいる。その女性は自分の子供を一層しっかり抱き寄せて、囁いている。「私が今日あそこに運ばれている女性のように倒れ伏すとしたら、愛しい子よ、そなたはどうなることでしょうか」。

向こうから優雅な儀装馬車、ボタン穴に花束を挿した華美なお仕着せの御者や従者達がやって来る。馬の頭部馬具にはカラフルな結婚式リボンが舞っている。若い高貴な男がその美しい花嫁と結婚式に向かっている。彼女の目がゆっくりと担い手の肩に担がれてこちらへゆらゆら進んで来る棺に留まる。その若い許嫁は震えながらその宝石の煌めく頭を側の胸元に隠している。

あそこで、斧を休ませて、まじまじと死神の葬列を見送っている労働者を見よ。更に働くがいい、プロレタリアートよ。汝の妻も家で臨終の床だ。更に働くがいい、汝には一刻の猶予もないのだ。死神は素早い。しかし仕事の男よ、汝の妻をその末期のとき、空腹から守ってやりたいなら、そなたは死神よりももっと素早くしなければならない。

頭を垂らして、脇へ退くがいい。汝ら鎖の音をがちゃがちゃさせている犯罪者どもよ。死神のお通りだ。死神はいつか、汝らをも汝らの鎖から解放することだろう。頭を垂らせ、汝ら哀れな夜の被造物よ、死神のお通りだ。汝らの借り物の金ぴかのおめかしも、哀れな汚れた肉体も、社会における罰当たり行為も剥ぎ取りながら、死神は暗闇の中から、汚辱と悲惨の中から、純粹に神聖に汝らをもいつか持ち上げてくれよう。

唇に色褪せた微笑を浮かべた嘲笑家よ、そなたに対し、私は脇に退けと要求しない。死神のお通りもそなたを避けるかもしれない。 — そなたは、そなたの生涯の二倍も三倍も生きればいいのか。

大都会の中心部から郊外のヨハニス教会墓地までは長い道のりである。私にとって一つの道がかくも長く、それでいて同時にかくも短く思われるものはない。処刑場に近付いて行きながら、それぞれの分秒が永遠であり、数時間の道のりが一瞬である死刑囚のことを私は思い出した。いや、我々哀れな人間にとって、全生涯は処刑場へのこのような行進ではないのか。それでも我々は道端の花々について喜び、歓声を上げて、その花に掛かっているすべての露の玉に、天と地とを見るのである。まことに人間の心は哀れで幸せである。

我々が市門から出ると、重たくて多量の雨雲が地上の上を密に転がって行った。灰色の天と地の中、灰色である。灰色の心と世界の中、灰色である。

木々はその葉の落ちた枝を憂鬱そうに上に伸ばして、葬列の前を一羽の四十雀が枝から枝へ飛んだ。

そして今や我々は墓地の小門前に着いた。ゆっくりと葬列は道に沿って、新たな塚や沈み込んだ塚、誇り高い記念碑や貧しく素朴な飾りの側を通り過ぎ、亡きマリーの亡骸が埋葬されるべき箇所に向かって行った。翌年の春、我々は金鎖の茂みとその香りの良い実を揺らし、小鳥が薔薇の藪の間でさえざる可愛い故郷のような所に仕立てた。しかし当日、その周辺はとて物悲しく不気味であった。我々の最愛の女性を受け入れるその墓穴の底には、小さな雨水のたまりが見られて、しかしそこでは突然上の天の移り過ぎる雲間から見える明るく青い空が反映されていた。 — 私は何一つ、何一つ忘れていない。

それでは、男衆よ、棺を下ろすがいい。老いた創造の母たる大地にその美しい子供を返すのだ。それでは、フランツ、両手三度の土を汝の喜びの沈降して行く世界に投げかけろ。

— 道化師どもよ、シャベルを握って、汝らの仕事を終わらせろ。汝、古参の、赤鼻の若造よ、無理して悲しそうな顔をするな、ヨーンの店で瓶に酒を入れて来るよう汝の連れに合図しろ[『ハムレット』V,1]。そしてこっそりと古い墓掘り人の歌を口髭の中で呟け。

土塊が段々と鈍い音となって棺に当たる。音のたびに、哀れな心はその奥底で震える。目が黒い棺の最後の色合いが、覆ってしまう土塊の中から微光を発しているのを確かめているが、遂にはその痕跡もすべて消えてしまい、投げ落とされた土塊はただ土塊に当たるのみである。次第に窪みは満たされて、最後に墓塚が盛り上がる。これがこれからは我らの記憶の中で愛しい埋葬された故人と一体化する。

人間の民は奇妙だ。同じ時にかくも偉大であり、かくも卑小である。すべての人生は、何という悲劇、何という戦い、何という、 — 人形芝居か。子供の人生に始まって、この人生は「私」という言葉を発し得ないうちに、輝かしい満月を求めて、空しく枯れてしまうが、遂には、詮索家の哲学者の人生に至る。これは同じ小単語「私」[自我]に宇宙を置き、そして瓦解する。一人の肉体も精神も脆くなった老人、ほとんど温かさと冷たさの

感情も有しない老人となっている。

ヨハネスよ、汝の周りを見ろ。反対向きに「時」という灰色のロバに乗って、人類はその目標に向かっている。耳を澄ませ、何と陽気に鞍飾りの鈴や、小鐘は響くことか。これは王冠や、教皇冠、フリギア帽[ジャコバン三角帽]、 — 男達や女達の帽子の許で見られるものである。この灰色の動物はどんな目標に向かって進むのか。楽園の再獲得か、それとも断頭台か。騎乗の人類は知らない。人類は知ろうともしない。頭を進んで来た道、暗い過去の方に向けて、人類は小鐘に聞き耳を立てている。ロバが花模様の平和な沃野をぶらつこうと、流血の戦場の中を徒渉して行こうと構わない、 — 人類は耳を澄まして、夢見ている。いや、人類は夢見ている。夢想が人類の生活である。夢想が個々人の生活である。目覚めはいかにして生ずるか、どこでいつ生ずるか。

ベルリンの墓地では、一人の民衆的作曲家[Albert Lortzing、1801-1851]の遺灰の上の一つの墓石があって、これに友人[Philipp Düringer]の手でこう記されている。

彼の歌はドイツ風で、彼の苦しみもドイツ風であった、
彼の生涯は、困窮と嫉妬との戦いであった、
苦しみはこの墓地から消え去った、
戦いは終わり、 — その歌が生き続けている。 —

私はペンを置き、小声で上の行を繰り返している。 — 私は今日これ以上書けない。

十二月五日

私は約束通りに、「枯葉新聞」の編集部にも、 — ヴィンマーのことを思い出して、
— 我が隣人シュトロベルの何枚かのペン画を呈示して、今日早速彼がこの機知的ジャーナルの素描家の一人として採用されるという旨彼に知らせることができた。私は彼の鼻が彼の窓ガラスの奥から何度かこちらを窺っているのを目にしていたので、私は私の昔の住まいの方へ出掛けた。この住まいには、私が去って以来、多くの人が入れ替わっていた。

太ったピンパーネル夫人は、食料品店の備蓄の間で、重みのある本人として自ら王座に就くことを諦めていた。彼女は暖炉の背後の強大な、クッションのある肘掛け椅子に退いて引退していて、そこから彼女は十分頻繁にドロッテ、 — レットヘンとも呼ばれるが、
— チーズ、バター、牛乳帝国における彼女の痩せた娘、後継人を絶望させることが出来た。

十一番地の家の中階は、差し当たり空になっていた。階段を上がったり、下がったりの一階との激しい戦いの後、先の女性住民達は、つまり未亡人の枢密上級財務書記官トランペル夫人と、その二人のとても年老いて、とても酸っぱい娘達、ヘロイーゼとクララが、
— ピンパーネル夫人はエルリーゼ[油娘]、クナレ[がらがら]と呼んでいたが、 — 引越して行った。ピアノとハーブ、ギター、この雀路地の三台拷問具を彼女達は幸い一緒に持って行き、それに高貴な雄猫エーロスと同様に高貴な、びっこのダックスフントのアンテロスも連れ去っていた。これらは新たな、しかしすでに時代遅れのアベラール[エロイーズとの書簡で有名、1079-1142]やエグモント[ゲーテ作]の輩の贈り物であった。

何としばしば私は昔この急な、狭い階段を上ったり、下りたりしたことか。一山の本を腋に抱えていたり、あるいは上着ポケットに、大喝采を博するに間違いなしの論説を入れていたりした。何としばしばマリーの小さな両足がこの汚れた階段に乗ったことか。彼女はいつも私が非の打ち所のない家父長的威厳を持って主宰する立派な茶話会の夕べのたびに、フランツと一緒にやって来たのである。何とそのとき、私は彼女の明るい笑い声を期待していたことか。その声は湿って黒い壁に陽気に反響したものである。何と彼女は魅力的に私のだらしない部屋を嘲ったことか。それから彼女は私が前もって何時間かけても上手くゆかなかったのに、着いてから五分も経たないうちに、人間の滞在し得る所に変えてみせたのである。何とそれから深更、この可愛い拷問者に強要されて、私は不幸なフルーツを取り出して、石をも泣かす流儀で、「お月さん、あなたの歩みはとても静か」を拙劣に模倣して、遂にはフランツが異議を称えるか、私の息が上がるか、あるいはこの小さな暴君が笑い終えるかなのである。それは浄福な夕べであった。私はその思い出を胸に素描家のドアまで上がった。私がノックすると中では不明瞭な呟き声が響いた。私は中に入った。

何人かの独身若者の生計を私は見て来ており、この点に関しては私はかなり我慢強い。ヴィンマー博士、俳優ミュラー、音楽家シュミット、神学の聖職候補生シュルツェの暮らしぶりを目撃して来た。私自身の無頓着は言うまでもない。しかしこのような画家的自堕落は私には想像の外であった。一つの絵空事で、ユスティヌス・ケルナー[『当代の憑依者の歴史』1834]の悪霊憑依磁気催眠によって混乱状態にあり、一凍結、石化、具体化されて解剖学的博物館に陳列されるや、一これ以上ない酔狂な光景となるであろう。言いようもなく滑稽なソファーに、彼にとっては余りに短いもので、頭をドアの方に向けて、脚を肘掛けを越えて突き出し、両足を窓壁に押し当てて、背の高い素描家が、葉巻を、この一九世紀の偉大な慰安婦を、口にくわえて、膝に画板を置き、手に筆を持っていた。以前は四本足類であったろう三本足のテーブルが、この寝床に引き寄せられていた。空のビール・ジョッキ、半ば空の葉巻箱、墨入れ鉢、書き散らした紙、その他の色々な品が、珍しい混淆物となって、テーブルを覆っていた。三種類の様々な形姿の椅子がこの「下宿」には展示されていた。ロココ時代からの一つの椅子は文庫の役目を担っていた。別の椅子は、緑色に塗られた庭園用椅子で、衣裳棚の役目を果たしていて、三番目の椅子は、その以前のクッションの残りがわずかに檻褻となって垂れ下がっていたが、いや、おお、こわ、一化粧台に成り下がっていた。そして洗面器や、石鹸、櫛、歯ブラシが、本来必要である以上に大きな顔をしてそこに見られた。部屋の隅に歩き回るのが好きな戯画作家のツィーゲンハイン[イエナ近郊]の散歩杖が立てかけられていて、その上には緑の広い帽子があった。別の隅には、容量の大きな旅行バッグがあって、壁に沿って、ピンで頓狂なスケッチが次々に留められていた。全体は諧謔と途方もないナンセンスの真のパンダイモニオン[万魔殿]であった。

「おや、我が隣人」とシュトローベル巨匠は叫んだ。私が入ると、ソファーから飛び起きて、一方の手で画板を押し退け、もう一方の手で、揺れるテーブルが倒れないようにした。「私の訪問にかくも速やかに返答を持参され、まことに高貴な振る舞いで恐縮です。衷心からご挨拶申し上げます。お掛けください」。こう言って、彼は文庫椅子の荷を滑落として、椅子をテーブルに寄せ、テーブルからは同様に大方の品を随所に投げ飛ばした。

「シュトロベールさん、貴方の画は枯葉新聞の編集部が大変好評で、編集部は貴方を協力者の一人に数えることを誇りにする存念であることをお知らせに参ったのです」。

「忝いことです」と素描家は言ったが、丁度彼は暖炉の所で得体の知れない仕草をしていた、「葉巻をお一つどうぞ。それに出来れば、貴方に一杯のコーヒーを差し上げたい」。

彼は、暖炉の煙道から取り上げた、とても怪しげに見える鍋を覗いていた。「いや、残念」と彼は叫んだ、一方私はカレンダーのすべての聖人に賛嘆の声を上げていた、「お湯は残っていない」。

「どうぞお構いなく、貴方の煙草は素晴らしい」。

「いや」とシュトロベールは言った、今や再びソファーに腰掛けていた。「それが私には欠かせない唯一の贅沢です。私は『レディーなくして何の幸せか』の言い回しを、同じくもっと適切な『葉巻がなくして何の幸せか』に変更したそんな時代に私を生んでくれた星の巡り合わせに感謝しています」。

「貴方は女嫌いですか」。

「全然、その反対です。私はフランス人の言葉、『一人ノ女ノ望ムコトハ、全テ神ノ意志』に全く抵抗しません。しかし、 — まさにそれ故に — 同様に燃えるよう要求しないで、我々のために燃えてくれるそれほど要求がましくない葉巻の方が好きですし、葉巻は、興味を持って貰いたいと望まないでいて、興味深いものでありますし、更にまた云々なのです」。

「貴方は本当に我らの時代の真の申し子ですな。我らの時代は、全体、余りに緊張が過ぎて、それも様々な緊張であって、個々人においては、神聖さへの放棄、無関心、無気力が生じています」。

「何を仰有る」と素描家は言って、強力な煙草の煙を吹き続けた、「思いますに、すでにこんな会話をしていることが、今日日いかに共同生活が難しいかの証左です。ちなみに我らの時代は少しも無気力ではありません。個々人が、真の原理、つまり事は事に任せるにしかずということを理解し始めています。必ずしも誰でもが勝手に舵取り役を演じてよろしいわけではなく、腕を上げて、こう叫んでよいわけではありません。おい、見ろよ、あそこが本当の道だぞ、あちらの方向が目標だ、と」。

「それに脇道に逸れて行く見当違いの道であれば、...」。

「皆が何らかの結構な、珍しい、教訓に満ちた箇所を通り過ぎた後で、また大きな通りを目指します。徒歩旅行者の私は、迷い道に入ったときほど、精神にとってとても多くのことを経験したことがなく、私の画帳にとって沢山のスケッチを仕上げたこともないのです」。

「貴方は独自の生活を送られて来ていて、現に送っているに違いありませんな」と私は、目の前の風変わりな人間を見つめて言った。彼は手で日焼けして皺だらけになった顔を撫でて、微笑した。

「好んで迷い道に逸れる人生は、いつも独自のものです」と彼は言った、「ちなみに誰もが何らかの独自さを有して生まれて来ます。この独自性は、育てて行くと、 — これは通例難しいことですが、 — 全生涯を通じて、絡み這って行けるもので、花を咲かせたり、棘を作ったりしながら、 — 外部から刺されると、 — 没食子になったりします。私に関しましては、とても若い時分から、人生を仰向けに寝て過ごし、立ったり歩い

たりするときは、両手をズボンのポケットに入れておくという癖に抗い難く付きまとわれていました。貴方は微笑されますが、一　しかしこう申している私は、このことで出来上がったのです」。

「私はただ貴方のご意見の正しさに微笑しているだけです。私どもは皆、幸運な日曜日生まれの子供で、誰もが精霊の民に耳を傾ける能力の芽を有しています。しかしこれは勿論華奢な芽で、この可愛い植物は軍用道路の埃の下や、市場の騒音の中では上手く育ちません」。

「おや、おや」と素描家は叫んだ。突然起き上がって、窓辺へ駆け寄った、「ご覧なさい。何という光景でしょう」。

向こうの私の住まいの上の屋根裏部屋で一つの窓が開いていた。そこに住んでいる小柄のバレエの踊り子は、その可愛い子供がこっそり舞い落ちる雪片に掴みかかるのを抱いて見守っていた。その子供は小さな両腕を差し出して、歓声を上げていた。その大きな白い雪はその子供の両手の上や鼻の上に落ちていた。貧しい、舞台化粧なしに青白いその母親はとても幸せそうに見えたので、誰もこの瞬間、この若い女性の悲しい物語に気付かなかったであろう。

「私は、貴方の書き物机に『雀路地の年代記』というタイトルの冊子を見つけました」とシュトローベルは言った、「向こうのこの光景はその中に収まることでしょう、私のスケッチブックにも収まっていますように」。

「暗い頁となることでしょう」と私は答えた、「この年代記にはそういうものがたっぷりとあります。しかし貴方がこの雀路地年代記の協力者になっていただけるならば、どんなものでしょう。貴方の眼力は素晴らしい」。

「そう思われますか」と戯画素描家は言った。彼は衣装棚椅子を窓辺に引き寄せ、熱心に一枚の紙に描き上げていた。「貴方は暗い頁をお望みでない。一　ひょっとして貴方は、鏡の前で自分の顔を参考に、人間の情熱の愚行を研究したかのイギリス人の戯画素描家の話しをご存じですか」。

「いや、私はその話しを知らない。彼はどうなったのです」。

「彼は一　自分の喉を切りました」と素描家は、自分の完成したスケッチを片付けながら、こもった声で言った。

訝しげに私は見上げた。シュトローベルの顔は悲哀の色を浮かべていた。私はほとんど驚いてしまった。彼はその先を語らず、静寂が生じた。一方向こうではその子供が笑い、歓声を上げて、踊り子は、さえずりながら雨樋に止まっている雀どもにパン屑を撒いていた。私は、素描家が一人っきりになりたいのであると察して、出て行った。この奇妙な男は階段の所まで私に同伴した。そこで彼は私に手を差し出して、微笑しながら言った。

「私は貴方の年代記の協力者になりたいと存じます、シニョール」。

このように戯画素描家ウルリヒ・シュトローベルの許への私の最初の訪問は終わった。

十二月十日

今や完全な冬となっていた。雪は余りに高く路上に積もって、夜更けの歩行者や馬車の回転音は聞き取れなかった。深更であった。

私の前に浮かんで来る青白い、色褪せた顔は一体誰か。これはあのフランツ、私と以前

昵懇の活気のある生命力旺盛なフランツ・ラルフなのか。

亡きマリーをその静寂の墓地に運んでから三ヶ月過ぎていた。私は私の友人の側に座っていた。友人は、眼前の灰色地のカンバスを見つめていたが、突然口をきいた。

「いいかい、ヨハネス、私は君に一つ話しをしなければならぬ。この話しは知っている方が良いでしょう。私の子供がこの話しを知らなければならぬ場合も生じよう。ヨハネス、この場合は君に任せるつもりなのだ。

話しは大きく遡る必要がある。我らの最初期の青春時代まで遡らなければならない。我らが幸せな、無邪気な子供であった頃まで。ヨハネスよ、この時期を、この至福の日々を思い出すのを許してくれ。この日々を思い出すたびに、かの森の中で消えた教会の鐘の音を聞く思いがしないだろうか。いや、私の青春の森の生活だ。 — 今眼前に思い浮かべるのは、緑の香り高い、人里離れた、あの古い褐色の朽ちた猟師の家だ。側には澄んだ小川が音立てて流れており、小川はそれから一層低く流れて森の中で池を形成し、それには不思議な伝説がまわりついている。子供心に神秘的震えを感じながら、私は何度まばゆい月光の夕べ、猟師の家の住民達がドアの前に座って、ブルヒハルト老公が猟笛を吹き、

— とても素敵で音色と君も覚えておろう、 — 暗闇の中、煌めく小川に沿って忍んで行き、静かな池を目指して、水の精や妖精の営みに聞き耳を立てるのだ。草むらのトカゲが動いたり、夜鳥が不器用な翼で池の輝く水面の上を飛ぶと、私は何と竦み上がったことか。私は今度こそ不思議な秘密が照らし出され、澄んで静かな流れの中に反映している月の丸い円盤の周りでその正体が明らかになろうと思ったものだ。後になってようやく、私はどこからこの私の中の深い、神秘的森の池に対する衝動が生じているのか知ったのだ。

嵐が木々の間でざわめくと、何度も私は高い樅の木によじ登って、両腕を固く、荒くて樹脂のある幹に巻き付けて、心は不安と言いやうもない浄福とで一杯になって、 — その風で左右に揺らして貰ったものだ。

それから、外の世間が暑い七月の太陽を浴びる時には、この陽光は、この森の夜には、ただ慎重に興味深く敢えて覗き込むだけであったが、しかしこれは何という夢であったことか。草むらに横たわっていることは、何という歓喜であったことか。一方、荒々しい小川は、私の側で音立てて、呟きながら、その小石をゆっくりと押し流し、陽光はほっそりしたブナの幹や、小川のさざ波の上に戯れて、震えて、トンボが私の上を飛んで行き、周囲ではカンパニュラがその青い萼を大地の方に傾けて、誇り高いジギタリスはその萼を反抗的に持ち上げて、あたかも太陽の道に迷った光線をその中に閉じ込めたいかのようである。

私が伯父と呼んでいる老いた白髭の男の膝に、私はあの冬の夕べ座っていたが、あの夕べは一体どのようなものであったのか。私は彼の短い猟笛の総と戯れていて、彼の話しや伝説に聞き入っていた。一方犬どもは我々の足許で眠って、夢見ており、ただ外で老カーロが吠えるたびに、時々耳をそばだてていた。

森の中でのこの生活は幸せな生活であった。そしてこれは私の後の画家としての生長に大きな影響を及ぼした。まだ十分に良くあの日のこと、つまり馬小屋のドアに私の最初の作品を仕上げた日のことを覚えている。それは我らの老ブルヒハルトとその忠実な連れ、小さなダックスフンドの肖像画であった。この犬は名前は持たないのに、ただその主人の特別な口笛に反応するという特性を持っていた。

私の話しの次の期間は、ヨハネスよ、君も私同様馴染みであろう。それでこれについてはより手短に済ませよう。彼女の肖像が浮かぶと、いつでも私は未練がましく執着するけれども。

伯父は泣くのが好きでなくて、――私は秘かに沢山の涙を自分の目から拭いていた。私が私の緑の森の夜に別れを告げなければならない日が来た時のことだ。私は森から外界に通ずる道の途中にある木や灌木を目にするたびに、すがりつきたくなった。世間は何と広大で偉大に思えたことか。暗い洞穴から陽光の中へ引きずり出された一羽のフクロウのように、私は最初ウルフェルデンで戸惑っていた。この慣れない生活に適応するまで、私は十二歳の子供に相応しく不幸であった。

我らの子供時代の町での最初の晩は、まだ記憶の中に明瞭に残っている。伯父はその人里離れた森の家へ戻って行き、校長夫人は台所で炊事をしていて、老校長は上の小さなその書齋で、タキトゥスを読んでいて。後に私は知ったのだが、タキトゥスが彼の好みの作家なのだ。――私は一人っきりで目に涙を溢れさせて、家の前のベンチにうずくまり、ぼんやり物思いに耽って、飛び過ぎて行く燕を目で追っていた。突然、小さな、少し汚れた手が、囁かれて赤い頬の林檎を私に差し出して、巻き毛の小さな頭が私の鼻先に迫って来て、上品な小声でこう言った。

『泣かないでよ、...お兄ちゃん、...ママがクレープ焼いているのよ』。

そのときは、この小さな慰安の娘を突き飛ばしたい気持ちに駆られていた。しかしこの娘は拒絶を意に介しなかった。そして私が彼女の共感に対し一層強く嗚咽し始めると、彼女も泣き始めた。この涙の洪水のとき、老校長が不意に出現し、彼は赤い花柄のナイトガウンをまもっていて、――彼の肖像画は向こうの私のスケッチの中に収まっているのだが、――口に長いパイプをくわえて、我らの背後に立っていた。

『まあ、幼い民よ』と彼は微笑して言った、『これはまあ、二人の結構なご交誼だな、嗚咽と同時進行だ。どちらが相手に悪さをしたのかな』。

この件をこのように外交的に転換させられて、突然私の涙の洪水は止まって、小さなマリーも早速また明るい滴の中から微笑した。滴は彼女の両頬の上を転がって行った。

『直に収まろう、直に収まろう』と老校長は呟いて、手で私の髪を梳き上げ、それから家の中へ戻って、彼の妻のクレープ作りを見守った。

しかし小さなマリーは、隅の彼女の庭に私を案内して、芽生えている豆を掘りだして、それを歓声を上げながら見せて、類似の畑を私用にと約束してくれた。それから我々二人はスイカズラの園亭に戻った。そこにはテーブルクロスが掛けられていた。そこで私は校長夫人の裁縫道具の他に、ベンチに一冊の本を見つけた。――一冊の絵本で、それで私は森や、獵師の家、伯父、老ブルヒハルト、私の郷愁全体をようやく忘れることになった。それは世間や子供には馴染みのベルトッフ[1790-1822]の作品による何度も読み返されて千切れてしまった一巻本であった。何という新しい世界が私に開けたことか。――そして小さなマリーも、私の横で寄りかかって笑い、説明し、私を麦わらの茎でくすぐった。それから校長夫人がクレープを持ってやって来た。校長はそのタキトゥスを手放していた。古い町の教会の鐘が、明日の日曜日を告げていた。――ハンスよ、この日曜日の朝をまだ覚えているだろう。ウルフェルデンでの私の最初の一日に続く日のことだ。君は教会で私に頷きかけたのを覚えているだろう。そして家に帰るとき、我らの友情は君が私の髪の

毛に投げ付けた手一杯のゴボウの頭花で始まったのだ。ヨハネスよ、私が内気な森の少年から、辺り一帯の最も頓狂な、大胆極まる腕白に育って、ただ小さなマリーが私をその大きな目で悲しげに見つめるときにのみ、しょんぼりしたのを覚えているだろう。素晴らしい時だった。そして、――ラテン語も全く猩紅熱ほどにはお手上げと言えない病気に過ぎなかった、――私は森の中でラテン語をそんな風に思っていたのだが、――実際せいぜい軽い鼻風邪程度だな、直にまた汗かいてお仕舞いだ。

それから老画家グルナーの許でのスケッチの時間となった。彼が私に初めて美しいもの世界をより明瞭に私の目の前に示してくれた。彼はその素っ気ない痛烈なやり方で、彼の熟知している人生を私の側に呼び寄せて、私はこの美しく花咲く世界を求めて憧れた。この世界はただ手を差し出しさえすれば、幸運や名声、富を得られるのだ。

私は森をほとんどすべて忘れていた。私は少しも振り返って見なかった。私は世間に出て行き、画家になりたかった。千もの夢を私は見て、そしてすべての夢の中でマリーの優しい肖像が漂っていた。

すると或る日、私は人里離れた猟師の家に呼び戻された。――私の老伯父が臨終の床にあるのを知った。彼は、自分が蒙っていて、気に留めずにいた風邪のため、高齢故に、致命傷となっていたのであった。すべての医師や聖職者の加勢を蔑んで、彼はただ私だけを求めていた。この男のベッドで或る恐ろしい打ち明け話しが私を待っていた。この男の側にはただブルヒハルト老公だけがいて、この猟師小屋の年老いた女中、ヴァルトグレーテ[森のグレーテ]は、あちこち歩き回っていた。

私が、――今や十九歳の若者であったが、――私の伯父の臥所に近寄ると、伯父は、丁度短く、休めない微睡眠から目覚めて、私を凝視した。

『彼はあの男にますます似て来る』と彼は呟いた。私が彼の上に屈み込むと、この厳しい老人は私に接吻をして、生気のない声で言った。

『フランツよ、――分かるだろう、私はお仕舞いだ。私はこれから旅立つために、猟の背囊に詰め物をしたり、猟具の手配をする必要はない。少年よ、泣くな。めそめそするのは嫌いとお知れよう。それは女どもの流儀だ。狩の待場から離れる前に、そなたにまだ若干話しておきたい。それはそなたの好きなように解釈すればいい。腰掛けて、聞いてくれ。――奥の方を見ろ』、――老人は開いた窓から示した。そこには緑の小枝が伸びていて、陽光が震え、一羽のブナのアトリがさえずっていた。――『あそこの森の奥、そなたは大きな平原を目にするだろう。そこではそなたが一日中歩いても、一つの山も見えない。人々はそれを素敵な国と呼んでいる。――そうかも知れない。しかし私はそこを好きになれなかった。森の方がむしろ好きだ。しかし向こうにも一つの丘はなる。平らな陸と穀物畑の中にもな、一つの城があって、ゼーブルクと呼ばれている。その丘の麓にも同じ名前の村がある。我らの家系はそこの出身だ。そこで私は生まれた。ブルヒハルトも同じ出身だ』。

このとき、言及されたブルヒハルトも頭で頷いた。彼は思わず呟いた、『両家とも上等だ、ラルフ家にブルヒハルト家』。

『この男も』(彼は私を指した)『変わり種とならないことを望んでいる。たとえ不当な血が流れていようともな。少年よ、更に聞いておけ。昔そこをめぐらしていたゼーブルク伯爵家は高慢な民であった。私は古い年代記の中で、いかに彼らが人々を苦しめて、

商人どもを掴まえたか読んだ。当時、絹の靴下や靴を履いていた新種の者達も、やり方は違っても、大してましなことをしていなかった。ブルヒハルト、黙っておれ、そなたの言いたいことは承知している。 — 私は昔、いかした若者で、銃の扱い方の手練れで、教会堂開基祭や射的会で名手アンドレーアス・ラルフとして世間に幅広く知られていたし、フ란ツよ、私の妹、そなたの母親も国中で最も美しい娘として知られていた。昔、丁度旅から戻った若い伯爵が、私に言ったのだ、＜アンドレーアス、いいか、私に仕えろ。立派な給金を出そう。損にはならんと思うぞ＞。そこで私は悪魔に掴まって、私はこのことを幸運と思い、手を打ったのだ』。

ここで老人は大きな声で呻いて、頭を枕に沈めた。一方ブルヒハルトは起き上がって、小声で獵師風に窓から口笛を吹いた。私は伯父に、その話しを中断して、先に延ばすよう説得した。

『そんなことはしたことがない』と老いた、頑固な男は言った、『撃たれた生き物をのたうち回らせるのは、正しい獵師の作法ではない。綺麗な銃を使って、綺麗に仕留めるのだ。邪悪な敵のお蔭で、伯爵があのおルーゼを見てしまったのだ。 — それで — ブルヒハルトよ、この少年にその先を話してくれ。...』

再び自分の昔からの友のベッドの側に座っていたブルヒハルトは、陰気に頷いて、視線を床に留めたまま、途切れ途切れに話しを続けた。

『我々二人は一緒に育っていて、私はルーゼがとても好きだった。黒い髪、黒い目だ。しかし彼女にこう言う勇気がなかった。愛しい娘、私を夫にする気がないかい、と。両手でおまえを運びたいぐらいだ、と。私はいつも立っていて、彼女が教会へ行く道を見守って、どこでも笑い声を上げていた、彼女が村の中を飛び跳ねて、巫山戯て、のろじかのように敏捷に、ツグミのように陽気な時に、...』

病気の男は嘆息し、ブルヒハルトは彼の枕を直した。それから自分の思いに圧倒されて黙っていた。数分間、外では小鳥がいや陽気にさえずっていて、太陽はますます輝かしく没落に向かっていった。

突然話し手がほとんどぶっきらぼうに跳び上がった。

『これ以上話すことがあるか。彼女は若い身空で、牧師は人間について邪悪なことよりも立派なことを語っていたのだ。...アンドレーアスは伯爵の勧めでこちらの森の中へ送られた。アンドレーアスは歓声を上げた。以前から獵師となるのが自分の望みであったのだから。そしてアンドレーアスは早速ゼーブルクから引っ越すと、この古い朽ちた家に、ルーゼが後を追って来られるよう、修理をした。私は当時故郷にはいず、異国のフランスだった。そこでは貴族治世の難儀に嫌気が差していて、綺麗に清算されていた。私はヴァイマル胸甲騎兵連隊のシャンパーニュ戦役[一七九二年]に参加していて、結局、ブラウンシュヴァイク公爵やプロイセン軍、皆が雨や困窮の中、退却せざるを得なかった。私は休暇で戻ると、黄金の鹿亭で馬を止めて、丈高い編み上げ長靴の埃を払い、胸甲を出来るだけ磨き上げて、大胆に横っちょに三角帽子を被って、一つの決心をして、 — 第六騎兵中隊の曹長であったから、 — 私の秘かな想い人のその可愛く白い手に結婚を申し込むことにした。私が村を通過して、私の想い人が住むその小さな家に向かって歩むと、人々はとても奇妙な風に私を見つめ、私を嫌っている城の代官も私に出会うと、とても嘲笑的に私を見つめて笑い、私は一層固くパラッシュ[重いサーベル]を握り締め、フランス語で呪い

を呟いた。しかし私は何も予感していず、すべてを私の軍人風外見への訝しみのせいであろうと想って、半ば歓喜して、半ば臆して動悸する心と共に、ラルフ家の周りにある生垣の中の小さなドアに向かって行った。私は小部屋からある歌声を聞いたが、それはとても聞き慣れぬ風に、また馴染みのある声の風に想われた。その声はいつも単に古い歌の冒頭を歌っていた。

私の良い人[娘]は黒い服を着ていて、
その下には大きな悲哀を抱えている、
若い日々、...』

私は帽子を取って、玄関に入った。今日は、ミス・リースヘン、フランスから戻ったのだ、と私は言うつもりだった。しかし一言も言えず、私の帽子は床に落ちた。私は門柱を掴まなければ、自ら倒れるところだった。青白い女性はこけた頬をして、隅に座っていて、両手を膝の中で組み合わせて、激しい悪寒に震えているかのように揺れていた。

<ルイーゼ、ルイーゼ>と私は叫んで進み、彼女の前でくずおれ、途方もなく不安になった。

その人影は起き上がり、よろめきながら私に向かって来て、言った。彼女はその凍り付いた手で私の額を撫でた。

「おや、私の素敵な良い人、異国から戻って来たの。長いこと、あなたを待っていたのよ、真っさらの心の愛しいあなた」。

私の心臓は動悸して、彼女が触っている私の胸甲を弾き飛ばしそうであった。彼女は胸甲の輝きを喜んでいるように見えた。

その先、どうなったか、覚えていない。またしばらく私はぼんやりとあの歌を聞いていた。

<私の良い人[娘]は黒い服を着ていて、
その下には大きな悲哀を抱えている、>

— それから私の記憶がなくなった。 — それがフランス戦役からの私の帰還であった。私は夕方自分の家で目覚めた。私が借りていた家で、当時その家に住んでいた老いた女性が私の側に座っていた。私は夢を見ていたと思った。 — ひどい、邪悪な夢を。ようやく段々とまた正気になって、神の加護で、私は泣けてきた。その善良な女性が私にその件の発端と結末を語ってくれて、私はピストルを探して、悪漢の伯爵を神の裁きの前に引きずりだそうとした。しかし伯爵は遠い国々に逐電していることを知った。もはや一刻も伯爵には猶予も休息も許すものか、自分の滞在について、何の痕跡も残さず、突如行方不明になっていようとも、...』。

『それで、神の御加護で、彼は我らの眼前に現れなかった』と私の伯父がそっぽを向いたまま言葉を挿んだ。

『私は翌朝アンドレーアス宛にこの出来事を書き送った。彼はまだこのことについて何も知らなかったのだ、...』。

『我らは、我らの身のまわりのものを売却して、ルイーゼとそなた、フランツ、彼女の小さな子供をこちらの緑の森へ連れて来た。彼女は相変わらずただ静かなままで、次第にますます静かになって行った。彼女はもはや古い歌の節も歌わず、陽光を浴びて座っているのを最も好み、自分の瘦せた哀れな指を陽にかざしていた。それから彼女は多分笑って、こう言った。

＜相変わらず、　－　相変わらず、　－　流れている、流れている＞。

そして或る朝、　－　いや、昔フランスで将校達に或る人が朗読するのを聞いたからかもしれないが、私がテント前で見張りをしていたときにな。それを読み上げたのは、ゲーテ殿か、そんな風に人々は呼んでいたと思うが（彼はヴァイマル公爵閣下と一緒に遠征であった）、そしてデンマークの狂気になった皇太子妃の話しであったが、その最愛の皇太子が狂気の振りをしたと言ってな、[『ハムレット』、オフェリア]、...』

『横道に逸れるな、ブルヒハルト』と私の伯父は突然起き上がって叫んだ、　－　『ある朝、彼女は飢餓池[雨期に消え、乾期に出現]の畔に溺死していたのだ』。

私は大きな声を上げて、くずおれ、頭を臨終の老人の枕に隠した。老人は今や肘で支えて、体を起こし、泣いている森のグレーテに支えられながら、その目は輝いていた。彼は私の頭に手を置いて、小声で言った。

『伯爵はブルヒハルトや私よりも若い。彼は存命であろう。　－　－　彼を探せ』。

そう言って、彼は疲れて沈み込んだ。私は麻痺してじっとしていた。

ようやく老ブルヒハルトが私の肩に手を置いて、私を連れ出した。

『そなたに印のものを与えよう』と彼は我々が緑の木々の下に来たとき、言った。木々はかの悲劇の時と同様に緑色で陽気に眺めていた。再びまた私も緑の原野の中、小川の流れて沿って行った。何という気持ちであったことか。　－　今や私は静かな森の池に対する私の深い内奥からの衝動の由縁が分かった。するとその澄んだ表面が夕陽の中、眼前に横たわっていた。藺草に小声で風が囁いていて、黄色のアイリスの鐘形花を打ち合わせ、その幅広の水気の多い葉の上に漂う睡蓮を揺すっていた。すべてはとても平和で、内密で、美しく、それでいて　－　何という名状しがたい戦慄に私は襲われたことか。

『私が彼女を見つけたとき』とブルヒハルトは言った、『彼女は一方の手を固く握り締めていた。その強張った指の間から一個の指輪の金縁が微光を発していた。一緒に行こう』。

老公は私を森の中、ある脇へ案内した。そこには苔の中、一個の石が十字架を記されて、置かれていた。彼は跪いて、石を退け、しばらく大地を掘っていた。

『これだ』と彼は突然言って、小さな黄金の指輪を、蛇にでも触れたかのように、草の中へ投げ出した。それは実際蛇の形で、紋章を飾ったルビーを頭部と尾の末端とで巻き締めていた。ヨハネスよ、それはこの小箱に収まっている。

かの晩のうちに私の伯父は亡くなった。私は彼の亡骸を君も承知しているように、ヨハネス、ウルフェルデンへ運んだ。この老人の死が、私に打ち明けられた恐ろしい話と比較して、取るに足りないことに思えたか、知るよしもない。　－　ちなみに奇妙な行列であった。我々は黒い棺を低い馬車に乗せ、小枝や森の花々で飾った。木樵はその斧を持って、周りの炭焼き達は、その火かき棒を持って、彼の伴をした。棺のすぐ後を老ブルヒハルトが歩き、肩に銃と猟笛を担ぎ、犬どもが周りにいた。時々彼は陽気な威勢の良い猟師のメロディーを吹いて、そのメロディーをそれから感動的に珍しい具合にコラールへと移

していた。最後の木々の下で、彼は立ち止まり、木樵や炭焼き達を周りに呼んだ。今一度彼は陽気な獵師の挨拶を吹き鳴らして、それから彼は私と黙って握手して、くぐもった声で言った。『達者でな、フランツ・ラルフ』、そしてゆっくりと森の中へ戻って行った。次第に私は彼の獵笛の音色が遠ざかって消えて行くのを聞いていた。伯父はウルフェルデンの教会墓地に、すぐ彼の妹、つまり私の母の側に埋葬された。ブルヒハルト老公に私は再会しなかった。私はもはや自分の周りの狭い世間が嫌になっていた。私はイタリアに行った。ブルヒハルトの方は、自分の親戚の住むハルツ地方に移って、そこで彼も間もなくして亡くなった。

これが、ヨハネスよ、我が友の君自身も知らなかった私の話の一部だ。これについていつか君が私の子供に対してどのように利用するか、それは君に一任する。かの伯爵については何の手がかりも得られなかった。沈み、忘れられた。ゼーブルクの城は今や工場になっている」。

私の目の前に、古く、黄色くなった冊子があって、これを基に私は雀路地年代記のこの全紙を書き写した。かの日、私は長いこと、私の友の側に座っていた。彼は自分の死について沢山話し、しばしば悲しげに思わず知らず微笑していた。彼は話しの間、デッサン用木炭である頭部の輪郭をキャンバスに描いていた。「ヨハネスよ、君のためにこの肖像をまず描いておこう」と彼は言った。私はその穏やかな輪郭を十分に承知しているから、この軽い線描であっても、自ずと見分けよう。

実際そうであった。色彩がキャンバス上で、より明るく輝くように花咲くにつれ、一層愛らしく、マリーの巻き毛の頭部が灰色地から浮き上がるにつれ、更に一層我が友の両頬は青ざめて行った。そして或る朝、一彼は彼女に冥界へと従って、彼の小さな子供とその友だけを後に残して去った。

十二月二十四日

クリスマスだ。何と華麗な言葉か。一雪は路上でますます高く積もった。軒樋の氷柱はますます長くなった。凍った窓ガラスは朝方、ますます溶けがたくなった。いや、多くの哀れな住まいでは、もはや溶けることはなくなった。一大方の窓の奥では、期待に満ちた子供達の顔が外を覗いていた。ここかしこ、舗石の白い覆いの上には迷子の樅の枝があった。沢山金箔が売られ、側を運ばれて行く薄い鉄板の蓋付き皿からは素晴らしい香りが広がっていた。

「真のハンブルクの黒アシカとは何です」とシュトローベルが尋ねた。彼は私の許に入って来て、帽子を取りながら、細密画の吹雪をまき散らした。

「ハンブルクの黒アシカだって」と私は訝しく尋ねた。「長老参事会のメンバーといったものではないか」。

「そうかもしれない」と素描家は笑った、「ハンブルクの黒アシカとは、その上に人間らしい顔がくっつけられている[広がった指の]犬の前足です。このようなものは、テーブルの縁でとても愛敬ある動きを心得ています。これをご覧下さい」。

そう言って、彼は話題の品を取りだして、それを私の書き物机の端に書けて、一一種の振り子の運動をさせた。

「とても不思議な発明品でしょう」。

「素晴らしい」と私は言った、「私の若い頃は、同じ仕掛けを焼き鷺鳥の囀られたあばら骨から作ったものだ。その骨に一本のフォークを突き立ててな。しかし文化は進歩する必要があるでしょう」。

「いや、文化は進歩して行きます」と素描家は嘆息した、「単純な樅でさえ、次第にこのカラフルな紙屑ピラミッドに席を奪われています。紙です、どこでも紙です。しかし私が言いたいのは、元来『枯葉新聞』の二人の協力者は、今やクリスマス散策に出掛ける義務がありましようと言うものです」。

「いや、私もまさに貴方に要請しようと思っていました」と私は言った。

「では、出発」とシュトロローベルは叫んで、そのフェルト帽を再びすっぽり被った。一方私は外套と赤い、木綿の雨傘を取り出そうとした。

我々は出掛けた。ハンブルクの黒アシカを我々は静かにテーブルの端に、シュトロローベルが最後の突きを与えた後、そのままぶらぶら揺れさせていた。クリスマスの季節には私はよくこのような玩具を手許に置いていた。この時期、白髪になったジャン・パウルも木製の子供用ラッパの絵具の香りを喜んだものである。

頓狂な戯画素描家と一緒にこの黄昏に行った散策とは一体どんなものであったことか。何とこの兄さんは沢山の地下の窓や他の窓を覗く必要があったことか。隅や、門道から我々の方へ差し出される何と沢山の小さなかじかんだ両手に四グロッシェン貨幣を渡すことになったことか。何という散策か。Boz親方[ディケンズ]の老Scrooge[スクルージ、吝嗇家]をクリスマス世界に案内する精霊達といえども[『クリスマス・キャロル』]、私をこのウルリヒ・シュトロローベル殿よりも上手に案内は出来なかったことであろう。我々はある店の風変わりな展示を見物したり、その前のびっくりして、物欲しげな顔を見物したり、あるいはシュトロローベルがある玩具の完成について新たな発明をするかと思うと、私とその発明をしたりするのであった。全く素晴らしい。

クリスマス市の隅に我々は立ち止まっていた。そこで行き交う楽しげな群衆を眺めていた。絶え間ない行列となって、人々が我々の側を流れて行った。父達は、どの腕にも、どの上着の裾にも、一人の子供を従えていて、職人の若者達は、「恵み深い」親方夫人のキッチンから盗み出した恋人を連れており、立派な、言いようもなく上機嫌で、愚かに微笑している歩兵達、上品でお洒落な近衛兵射手、不器用な竜騎兵、それに「無骨な」砲兵隊。

一 あちこちに若い娘達が可愛く人混みの中を縫っている。どの年齢の者、どの身分の者も出て来ており、いや最上流の世界も一度その境界を踏み越えて、その子供達に、一民衆の喜びを見せている。

素描家は突然とても真面目になった。「ご覧なさい」と彼は言った、「子供達はその最初のクリスマスを汲み出す源泉が流れ出ています。子供達に神について、あるいはその他理解できないことを、教え込まずとも、聖書の詩や賛美歌を暗記させずとも、子供達に

一 いややお襦袢をしたまま、一 教会に引っ張って行かずとも、聖なる宗教の芽をその心に植え付けられるのです。屋台の前の雑踏に、緑の煌めく樅の木に若い心の情緒はその最初の真実の、一 もっと詳しく言えば、まことに子供らしいその概念を結び付けるのです」。

私はまさにこれに対し返事をしようと思ったとき、突然、暗い外套に覆われた、腕に一

人の子供を抱いた人影が我らの側を通り抜けようとした。間近のガス燈ランタンの条光がその顔に落ちた。それは雀路地の小柄な踊り子であった。私はこの出会いを喜んで、彼女に声をかけた。

「貴女に出会うとは素晴らしい、ロザリーエお嬢様。ご同伴を申し出ても、お許し頂けますでしょうか。クリスマス市場の神秘に迫るためには、いずれにせよ、一人の子供が側にいる必要がありますから」。

踊り子は膝屈めの礼をして、言った。「おや、殿方、ご親切に。アルフレートは一日中じっとしてなくて、それに劇場はお休みでして、子供に素敵なものを見せる必要があったのです」。

「おや、おじさん、 — とアルフレートは言った、厚いプードル帽[丸い毛糸帽]の下から大胆に覗いていた、 — 「一緒に行こう」。

私は踊り子に隣人の素描家を紹介した。かくて四枚のクローバーの葉となった我々は、直ぐにクリスマス市場に相応しい気分となった。何という才能を今や戯画素描家は発揮して、子供達を歓喜の余り夢中にさせたことか。彼は母親からその太った子供を早速取り上げて、絶えずその子に金切り声を上げさせて、肩に高く乗せ、雑踏の中に分け入った。「まことに、ヴァハホルダーさん、感謝申し上げます。感謝申し上げます」と小柄な踊り子は囁いた。私はこの踊り子の守り神然として、はなはだしかつめらしく反っくり返っていた。

「よろしいかな」と私は言った、「私とか、私の友のような若造二人は、このような晩、明白に一つの摂理の監視がなければ、らちもない夜となってしまいましょう。我々が今晚更にどのようにクリスマスを祝うか、貴女にもご覧頂きましょう。 — まあ、アルフレートの歓声をお聞きなさい。どんなに誇らしげで、幸せそうに、 — とんがりのある黒革ヘルメットの下から覗いていることでしょう。たった今シュトローベル殿が被せてやったヘルメットです」。

戯画素描家は、この折、自らスケッチをしたかったことであろう。 — 彼は実際そうしたが、しかし後になってからであった。彼は奇妙な風に見えた。ボタン穴に巨大な体操人形をぶら下げている、右手に大きながらがらを持ち、それを勢いよく振り、一方左腕にはアルフレートがいて、全力で太鼓を叩いていた。

「小柄なレディーの方」と今や素描家が我らの連れの女性に言った、「私の上着ポケットにあの袋を突っ込んでください、自分では出来ません。よろしいかな、老ヴァハホルダーさん」と彼はそれから私に呼びかけた、「私はプロイセン首相[Manteuffel,1850-58]の両議院交渉にそっくりではありませんか。右手にはがらがら、左手には太鼓で、甘いものが好きでも、取ったり、詰めたりするのは、余力も場所もありません」。

「ママ、このおじさんは本当のおじさんだよ」と小さな坊やはその王座から夢中になって叫んだ。ロザリーエがシュトローベルの要請に従って、また私が同様にポケットを様々なもので満たしてやったときのことである。

そのようにして時が過ぎたが、とうとう冷たさが厳しすぎるものになってきた。素描家は解体した、 — そう自ら称した、 — そして私に玩具の下がった左手を差し出して、しかし右手にはがらがらを持ったまま、人々や明かりで一杯の通りを抜けて、家に帰った。今晚は昔からの暗い雀路地がいかに輝いていることか。地下室から七階まで、極小の屋根裏部屋まで、クリスマスの時が侵入していた。勿論必ずしもどこでも同じ「楽しく、浄福

な、恩寵をもたらす」具合ではない。さて我々は何という夕べを祝うことになるろう。我々は勿論小柄の連れをその冷たくなった小部屋に上がらせはしなかった。私はすでに大学で、私の著名なポンス酒作りで有名ではなかったろうか。(私に父がその人生行路で授けてくれた一つの技である)。戯画素描家は通りで拾った一本の樅の枝を取り出して、それを明かりに当てた。

「これは本物のクリスマスの香りだ」と彼は言った、「もっと良いものが欠けているが、工夫して凌がなくてはならない」。

しっ。突然、外の階段で何か足音がする。控えの間で小声の忍び笑いが聞こえ、更に一階上に上がるつもりのものである。「私の所かしら」とロザリーエが言って、訝しげにドアの方へ飛んで行った。

「おや、彼女はそこか」と外で声がして、私も頭を突き出した。

「今晚は、老公。今晚は、ロザリーエ。今晚は、レースヘン」と明るく、陽気なコーラスが響いた。

「アルフレートはどこなの。彼にクリスマスツリーを持って来たんだ」。

「万歳、それがまさに入用なのだ」と素描家は叫んで、そのがらがらを振った。「素敵な晩です。我がレディーの方々、クリスマス、おめでとう」。

暗い外套や、ショール、毛皮の襟から、今や半ダースほどの小柄な劇場妖精達が出現し、皆歓声を上げながら、笑って、私の部屋に詰めかけ、一皆が突然様々な楽器を取り出した。それはクリスマス市で各人が購入したものであった。ものすごい騒音となった。がらがら、くわっくわっ、ぎゃあぎゃあ、どンドン、それで壁は反響し、ロザリーエはこの小さな鼠どもの一匹一匹に宥めて駆け寄り、結局耳を塞いで、一番遠くの隅に身を潜めた。

ようやくこの狼藉は息切れしてきて、収まり、戯画素描家も力尽きた。彼はこの万魔殿に対する歓喜の余り、ほとんどそのがらがらを振り上げることが出来ずにいた。

何というポンス酒であったことか。何と乾杯がなされたことか。何と沢山話されたことか。プロンプターのフリュスターフォーゲル[囁く鳥]からバレエ教師のスポルパートー、いや劇場監督の閣下殿に至るまで。

今晚シュトロベルは一枚の戯画も描かなかったが、しかし自分自身をしばしば十分に一枚の戯画とした。床に逆向きに瓶を据えて、その上に座って回転しようと試みたり、角砂糖を擦ったり、消した蠟燭の残り火の芯に再び息を吹き付け点火しようとしたり、その他の手品の戯画となった。

プーフェンドルフ[Samuel Pufendorf,1632-94,自然法学者]やベール[Pierre Bayle,1647-1706,史的批判辞書作成]の博識な豚革製の様々の厚い巻の教育理論を下敷きにして、小柄な母親の側に座って、テーブルの上を覗き見ることの出来たアルフレートは、歓声を上げていたが、とうとう両目が閉ざされて来て、この子供は私のソファーに十一時まで更に眠り続け、その時に祭日はお開きとなって、小柄な客人達は再び外套の中に収まって、私のことを「篤信の爺や」と呼び、レースヘンに接吻し、何人もが「お休みなさい」と言って、階段をちょこちょこ下りて行った。その後シュトロベルが眠っているアルフレートを一階段上に運び、(その際私が足許を照らして)、かくて一雀路地のクリスマス・イヴも終わった。

一月一日

新年元旦である。ー 私は遠方のイタリアから一通の手紙を貰った。得がたい新年の贈り物である。この手紙は昔の薄暗い雀路地と賀詞と再会を述べており、一人の女性の手がこの上品な、可愛い文字を綴っていた。この記述した女性の名前を私はまだ言わない。私は私の思い出を書き続けることにする。この為に今回は、新しい冊子を探し出すことにする。ー

かくて私は、小さなエリーゼと二人っきりになった。エリーゼは私がああ葬式から、この最近まで楽しかったが、今は寂しい雀路地七番地の住まいに戻って来たとき、マルタの膝の上で踊っていた。自分が孤児となったことも、頼りない養父のことも自覚していなかった。すると、ー まだそれはあるが、ー 窓のニッチにマリーの小さな裁縫台が未完成の作品や、撚り糸の玉、針やリボンと一緒に見えた。彼女はかの晩、頭痛を訴えながら、そこを離れたまま、二度とその前に座ることはなく、二度と薔薇の木や木犀草の木、木蔦の格子越しに外の暗い路地を覗くことのない定めであった。まだ至る所に彼女の可愛い手仕事の痕跡が残っていた。フランツは最後の三ヵ月、アルゴス[百の目の巨人]しながら、その痕跡維持に努めていた。ー 向こうのかの椅子には、彼女の小さな帽子が掛かっており、向こうには彼女が買い物の時、持参する手籠もあった。

二番目の窓の所にフランツの画架が立っていた。完成したマリーの肖像が、ー 精一杯、ー 微笑して、画架に立てかけられていた。その横に彼の絵具の詰まったパレットが掛かっており、彼のスケッチ帳やロールが至る所に立てかけられ、置かれていた。ドアの背後に彼の草臥れたビーバーの帽子が掛かっていた。これに我々はしばしば散歩のとき、花々や木の葉の輪を飾ったが、マリーにとっては、その情けない、幾多の嵐をくぐり抜けた外観[劇Leonore,1828より]は、目の上のたんこぶに他ならなかった。

その物悲しい、甘美な思い出の見られない地点や器具は何一つなかった。床の砕けた子供用の玩具、...私一人がこの子供と一緒に失われた幸福の小さな世界に残っていた。ー 多くの痛みと涙、そして見棄てられた状態の継承人であった。

しかし今や行動が肝腎で、夢想の時ではない。私は奮闘しなければならなかった。私は子守婆やから小さなリースヘンを取り上げ、接吻し、小声で、私の友人達のこの子供に、幸運のときも、不運のときも、夜であれ、昼であれ、誠実な保護者となることを約束した。そしてー この誓約を守って来たと信じている。その子供は、私をその大きな、青い、ー 母親にととても良く似た、ー 目で微笑して見つめ、小さな両手で私の髪を掴み、陽気に引っ張り始めた。老マルタ婆やはそのとき両手を組み合わせて、見守っていた。マルタはすでにウルフェルデンの校長宅でマリーの子守女であって、彼女と一緒に町へやって来て、マリーの死の時まで離れなかったのである。この小さな娘の世界すべてを受け入れるには、向こうの十一番地の私の住まいは余りに窮屈であったので、私はまずマルタと相談して、結論として、私が私の本や植物標本、パイプ、判読しかねる文字原稿を七番地の方へ移すことになり、更にマルタがすべてを上手に整えることになった。私はその両親に対するすべての愛を今や子供に集中させて、瓦解した幸運の瓦礫の上に、新しい幸運が花咲くのを見ようと期待した。向こうの住まいは長いこと空のままにはならなかった。私の太っちょの友人、ヴィンマー博士が越して来て、かなりの期間、雀路地の主役英雄、道

化役となった。

一月五日

エリーゼよ、―― 私がこの名前を書き記すたびに、これはまた我が高齢時のますます暗く垂れ込めて来る夜の中、一つの子供のメルヘンのように響いて来る。雲雀の歓声、小夜啼鳥の嘆きの如く、私の周りをととても香り高く、軽快に、妖精のように舞ってくれる。エリーゼよ、エリーゼ、戻って来い。ほら、私は高齢で、孤独だ。私がそなたを両腕で揺すったこと、私がそなたを長い夜の間、見守って、自分の子供を見守る母親さながらであったことを覚えていないのか。―― するとはるか遠方から、しばしば優しい、音楽のように響く声が聞こえるように私は思ったものである、すぐに行きます、行きます、辛抱して、後ほんのしばらくです。

私は待って、期待し、この紙片を我が子エリーゼの名前で満たす。

かくて、暗闇から浮かび上がれ、汝、牧歌よ、汝と共に汝のメルヘン世界を、涙越しの汝の微笑を持って来い。やって来い、我が小さな心よ。―― 豚革製の二つ折判からとても可愛い人形の部屋が作られる。一度覗いて見るがいい。私の紙の籠は一体何という立派なベッドを乙女のアンナ、ラウラ、ヨゼフィーネ、その他数を詰められたドンナ[貴婦人]がそう呼ばれる通り、彼女らに提供していることか。私はそなたが泣かずに、愛らしく、いそいそと褐色の薬で一杯のスプーンを飲み干すならば、一羽の可愛い金色のカナリアをプレゼントするぞ。―― 泣くな、愛しい子、ほら、そなたの母親の故郷の森からの木蔭は葉を一枚ずつ伸ばして、ますます高く窓辺の壁を這い上がって行く。ほら、陽光が震えながら差し込み、床で踊って、煌めいている。緑の森の中にいるようだ。―― 陽光に青い空。そなたも微笑してくれ。

木蔭が高く、より高く上がって来るように、そなたも、我が可愛い娘よ、育って来る。すでにそなたの頭には、かの肖像画と同じ、上品な、明るい褐色の巻き毛が見える。誰がそなたに教えたのだ。母親がしていたように、左側に頭部を傾げるその仕草を。

そんなに巻き毛を揺すって、そなたの大きな輝く目から、そんなに悪戯っぽく私を見つめるな。これが、この奇態なものが、Rの字だと言うのか。いや、何というインクの染みだ、女流書家よ。両手から鼻先まで何とふんだんにインクを使っているのか。マルタ婆やは何度洗い流さなくてはならないことか。もう十分に練習したから、もう下に降りて良いかとそなたは聞く。蠅でさえ、室内はうんざりと言うのだろう。蠅が頭を窓ガラスにぶつける様をそなたも見ていよう。

お転婆よ、そんなに駆けて、転ぶなよ。私は察している、そなたをじっと座っておれるよう、学校のローダー氏の許に送り出す潮時だ、と。

一体また突然何と明るい声か。向こうの私の古い十一番地の住まいの窓から叫び声がする。

「ヴァハホルダー叔父さん、ヴァハホルダー叔父さん、外出よ、外出」。

この小さな魔女は、またしても哲学博士のハインリヒ・ヴィンマーを煩わしているのか。向こうで主筆論説と劣等な長編小説を執筆している彼の邪魔をしているのか。まことにそうだ。低いバスの声がこちらに吠えて来る。

「ヴァハホルダー、堪りません。貴方の少女がこちらの印刷工の若者と書評家、――

(書評家というのは、博士の犬のことで、立派な黒いプードルである) — 一緒に悪さする狼藉に遭っては、書き続けられません。最もセンチメンタルなフレーズの箇所、襲われてしまった。 — この尻っ子は羽目を外しています。隅には若衆フリッツェがにやりと笑って、明日の号の原稿を望んでいます。

「その少女を外に出しなさい、博士。貴方のミューズの神殿にその後、門を掛けることです」と私は笑って声をかけた。

「困ったことだ」と博士は呟いた。博士は生粋の新聞記者のずぼらな性格で、この妨害は満更でもなかった。「困ったことだ。私は『続く』と書き記して、この娘をシュライヤー[わめき屋]の犬や猿の喜劇に連れて行きます。書評家も、此奴の美学上の教養を更新補強する必要があります。隅の忌々しく奇妙な臭いの新聞諸号の束が十分に証明していますように。用意はいいですか、貴殿」。

こう言って、博士は窓から消えた。私は向こうの階段で小さな足の靴音を耳にした。リーゼが玄関に現れ、書評家が後に従っていた。一気に彼女は路地を越えて、同じように素早く私の許へ来て、そして必要ならば、手の向きを変えさえすれば、世界一周への旅に踏み出す按配であった。

数分後にフリッツェ、印刷工の若者も十一番地のドアから一枚の紙を持って駆けて来た。この紙はまだとても湿っているように見えた。彼はとても用心深くそれを持っていて、両手で出来るだけ自分から離していた。今や博士も同様に路地に現れた。オーストリアの[鈍い]国民軍を口ずさんでいて、葉巻を口にくわえ、一本の鉤の杖を仮想の敵に対し、不羈奔放に振り回し剣の練習としていた。彼はその後、吠えた。

「いやはや、哲学者殿、ドイツの新聞社を無茶に長く待たせてはいけません」。

半ばリースヘンに引かれ、半ば書評家に投げ飛ばされ、この書評家の犬は、見るからに、より高度な自らの教養学校へ堪らず突進していたが、私は、バケツや箒の上、子供達や籠の上を転がって、階段から落ちた。すべてのドアから、老いも若きも、男も女も覗き見ていて、この人々は皆、小さなリーゼ・ラルフに優しく頷きかけていた。実際彼女はやはり、

— 昔の母親同様、ただ今はまた別な具合に、 — すべての宿の仲間の、関心対象原理となっていた。路地では、その洞穴から板金工のアルクヴァルトが出て来て、リーゼから挨拶され、握手を受けたが、しかし書評家は構わず、書評家の犬は、この火夫を嫌っていて、よく世間で見られるように、この道具役を主犯と見なしていた。アルクヴァルトは高度な警察指示に従って、この犬、実直で堅気な書評家、すべてのプードルの鑑であるこの犬に鑑札付きの口かごを髭の鼻面に当てはめたのではなかったか。この犬が鬱然と憤慨して、地下室の前、軽騎兵の羽根飾り風に裁断された尾を両脚の間に入れて、よそ見して、忍び歩き、ゾイメと我が友ヴィンマーが言うように、「藪に逃げた」[Seumeの詩、野蛮人1793]としても、この健気な犬のことを誰が悪し様に考えよう。さて路地を抜け出せるか。いやはや、我々はこの小さな娘に何でも約束したのではなかったか。蠟の顔をした、「魅力的な」人形のモデルが、かの店にはまた「素敵な」小さな描かれた磁器製の人形食器があって、博士は全く憂鬱そうに帽子を横に退けて、耳の後ろを引っ掻いた。

「まあ、ご覧なさい、ヴィンマー叔父さん。あなた仰有ったでしょう、私にはこんな可愛いコーヒー食器を買ってやりたい、と。私がまたあなたの古い汚れたお書物から、書評家用に羽根飾り帽子を作らないでいたら、と」。

「ヴァハホルダーさん、いいですか」、一と博士は私に言った、一「このヘロストラート[神殿に火を放って名前を残そうとした]お嬢は、一昨日一全紙すべての原稿、つまり『フロドアール集成』の二十章すべてを、まさにこのお嬢の述べた目的のために悪用したのです。私の当惑をお考えください。この犬が飾られて、その隅から私に勿体ぶって向かって来て、私の向かい側の椅子に飛び乗り、軽蔑する視線を書き物机の上とまだ残っている全紙の上に投げかけて、こう言いたげであった時のことです。『バーカ、別なガラクタからでも、上等のジャケットができますぜ、と』」。

「私は食器を買って貰えるの」とこの小さなお嬢様は我々の間で苛立って叫んだ。

「そうだね」と博士は勿体ぶって言った、「『フロドアール集成』の第二版のときだな」。

「あら」と小さな娘は口をとがらせた。この不明瞭な、自分には得心の行かない慰め方を悲しんでいた。「私には分かるわ。あなたはまたお金がないのね」。

私は笑って、更に行軍して行った。一方博士は同様に何か判じがたいことを口髭の中で呟いていた。

すると我々はカラフルに飾られた露店の入口に達して、瞬時にその中に入っていた。雌雄の猿や犬が曲芸をしていた。ここでも板は一つの世界を意味していた[シラーの詩、『歓喜に寄す』より]。雄猿と雌猿、雄犬と雌犬は人間のようになまじ合っていた。小さなエリーゼは歓声を上げて、書評家は驚いて、舞台上の自分の同胞を凝視していた。この犬はとても当惑しているように見え、時折、大きな声で吠えた。その声を博士は通訳した。

「レポーターは我を忘れて夢中だそうです」。

この学識あるプードルが短く素っ気なく吠えると、博士はこの意味だと述べた。

「レポーターは、我々首都の観客のように、とても批判的素養のある観客を前にして、かくも未熟な芸術家のくせに、厚かましすぎるとあきれているのです」。

この犬が軽騎兵の飾りの尾を振ると、この意味であった。

「この若い雌の芸術家は激励に全く値しよう。続けて、熱心に精進すれば、何か偉大なことを達成する可能性がある」。

この犬があくびをすると、博士は言った。

「レポーターはこの機知に富んだ作家に対し、その愚かな捏造品を演劇的詩作と称しないよう勧告しています。悲劇とは単に五幕という共通点しかない、と」。

この上演の結末で、大人や子供の観客が立ち上がって拍手し、しかしこのプードルが、大きな責務から解放されたかのように、ベンチの下に飛び込むと、博士はこの意味だと説明した。

「やれやれ、話しがやっと終わった。これから気楽に葉巻を吸ってよかろうし、鷺鳥市場のブッターとヴァーゲナー亭[Lutter und Wegener亭のもじり]に行ってもよかろう」。

そのように博士もした。しかしその前に博士は小さなエリーゼを自ら抱き上げ、彼女に一とても彼女は抗ったが、一したたかに大きな音の接吻をした。

「それでは『フロドアール年代記』の第二版のときには、新たなお茶食器を購入しよう」と彼は笑って言った。

書評家はこの両党派のどちら側に従ったものか、まず逡巡しているように見えた。しかしソーセージの皮や等々の考えが重きを占めた。この犬は博士の後に従った。

しかし我々は鷺鳥市場のブッターとヴァーゲナー亭に行かなかった。我々は角の露天商

の老婆から果物を買って、その小さな娘は心をランタンを持ったケッツや、スピッツのフディヴドリ、陽気なボンパドゥール夫人やその他すべての不思議造物で一杯にして、幸せに我らの雀路地へ戻って来て、歩行や高笑い、歓声で草臥れて、すでに服を脱ぎながら眠り込んでいた。

それから純な満月が屋根の上に上がった。夕方の風がより新鮮な風を大都会に吹き付けた。日中の騒音は消えた。幾多の圧迫された胸も黄昏の冷氣の中、呼吸がより楽になった。日中はハンマーや斧、ヤスリを握る幾多の筋肉質の男の腕も穏やかに親しい相手の周りに置かれている。この親しい相手が物質に対する厳しい闘いへの新たな勇気を自分に注入してくれる。幾つもの厳しい手が小さな寝惚けた子供をそのみずぼらしいベッドから持ち上げて、その小さな唇の許で新たな仕事への希望と勇気とを吸い込む。それで私もそれから眠っているこの養女の上に屈み込んで、この小さな胸の小声の安らかな呼吸に耳を傾ける。一方マルタ婆やはベッドの脚許で編み物をしている。

この子供の巻き毛頭は右側の小さな腕の上であって、小さな顔は枕に沈んでいる。私はその愛らしく、純な面影を目に出来ない。――――

すると見よ。突然その子供は寝返りを打って、私に顔全体を向けた。――何か口ごもっている。「ママ」と小声でこの顔がささやく。神聖な、浄福な微笑がこの小顔の上に広がる。

誰がこの孤児に甘い言葉を囁きかけたのか。――マルタ婆やは両手を組み合わせて、小声で祈っている。――「ママ、愛しい、愛しいママ」と子供が再び、小さな腕を差し出して、囁いた。

それは一つの夢なのか。それともこの世で亡くなった母親が戻って来て、その子供の上に漂っているのか。

すると多分、月光が輝きながら、木蔭格子越しにマリーの肖像画に射し込んだのであろう。カナリアも夢を見ているかのように、さえぎった。月の前に一枚の雲が掛かって、月光が消えた。――その子供は、向きを変えながら、小さな頭をまた枕に沈めた。

「お休み、エリーゼ。そなたが今日滞在している素敵なイタリアの言葉では、フェリチッマ・ノッテ[素晴らしい夜を、しっかりお休み]。幸せな、愛する妻となっているエリーゼ、フェリチッマ・ノッテ」。

一月十日

私が、「ある子供の生活」と上書きされているかの冊子を取り出して以来、私のこれまでの窓辺観察、路地観察は休憩となっていた。外はととても冷たい冬と言われている。ロザリーエもそれに反対ではない。私はこれに関し大いに熟知しているとは言えない。ここの私の前にあるこの黄ばんだ頁の中は、陽光の春であり、花咲く夏である。この中に紛れ込むことは楽しいし、それ故語り続けることにする。

とても古い頁に書かれている。

我々はととてもついていない。老いて、太った、微笑を浮かべた紳士がやって来て、我らの娘の脈拍を調べて、更に微笑を浮かべていた。何度か、その鏡のようにピカピカの杖の握りをその鼻先に当てて、インクと紙を要求し、しばらく長目のその紙片に書き記していた。マルタがこの紙片をその後[薬局に]持って行った。この老公は我々の娘の頭を小突い

て、言った。「汗をかくことだ。汗をかくこと」。

「ブルブル」。　ー

このように小さな、手足をばたつかせているお転婆を分別正しく、ベッドに入らせるのは、ヴァハホルダー叔父にとってまことに難儀なことであった。実際、両腕を静かに布団の下に置かせ、ただ頭だけを自由にさせるのは、難しいことである。　ー　いやはや、マルタは一体何という小さな、褐色の若造を連れて来たのだ。此奴はほとんどノアの方舟のセム、ハム、あるいはヤベテに似ている。赤い丸帽を目深に被っており、一本の糸を巻き付けていて、自分の背後に長い紙製の弁髪をぶら下げている。我らがその上の文字をまだ読めなかったのは、幸いであった。

エリーゼ・ラルフ嬢、

二時間ごとに、大きじ一杯。

この少年は娘のベッドから十分不審げに見つめられていたが、手伝いに駆けつけていたヴィンマー博士は（勿論書評家も連れていて）私に向かってこう言った。

「ヴァハホルダー、注意なされよ。一騒動なしでは済まされません。この娘の民は、風邪か高熱でしょう。同じことです。汗をかくことです。汗を。汗と血を出す。証明済みのことです」。

さてマルタがスプーンと、一杯の水と、一個の砂糖を持って来た。一方娘はベッドでますます落ち着かず、書評家[犬]はますます緊張して、事象の展開を見守っているように見えた。

「私は服用しない」と、私がセム親方から赤い丸帽を脱がせたとき、今やリーゼが訴えた。　ー　「とても嫌な味がするわ」。

「そうか」とヴィンマー博士が笑った、　ー「強制憲法か」[一八四八年十二月五日、フリードリヒ・ヴィルヘルム四世による]。

私が薬で一杯のスプーンを持って娘に近寄ると、娘はますます遠くへ尻込みして、私は素早く飲み込んだ方がよい根拠をすべて述べて、空しい有様であった。

「書評家にやってよ、この犬も昨日一緒にいたのよ」とリースヘンは最後に泣き声で叫んだ。

「いや、それもそうだ。ヴァハホルダー叔父さん、こちらへどうぞ。編集局のプードルも少なくとも味わってみて、問題は喉ではないとリーゼに分かって貰いましょう」。

そして博士が、娘に背中を向けて、犬を膝の間に掴まえて、犬に混合薬で一杯のスプーンを流し込む振りをして、同時にプードルを愛撫して、犬が喜んで跳びはね、陽気に吠えるようにした。

「ほらね、お嬢さん、犬もとても美味しかったのです。さあ、行こう、可愛いドンナ。元気に飲み込もう。　ー　一、二、三、はて、...」

飲み込んだ。素早く一杯の水と砂糖がその後続いた。

「嫌味な犬」と小さな娘は苛立って言った。口を上布団で拭い、マルタ婆やが娘にまたしっかりと上布団を掛けた。

そこで博士は自分の校正刷りへ戻って行ったが、今回犬は博士に従わず、不平たらたらの遊び友達のベッドの側の椅子に飛び乗って、いとも恭しく彼女を見下ろしていた。

「まあ、私をただ見ときなさい、そして口髭を舐めなさい」とリースヘンは言った、「で

も苦い味がしたわよね。待ってなさい、また私がベッドから出られるようになったら、…」
書評家は答えず、それでこの犬の代わりに私が言葉を述べた。

「ひょっとしたら、この犬も自分がやがて元気になるだろうと思って、喜んでいるのかもしれない。そなた同様、ずぶ濡れだったし、きっとまた夜通し、咳き込んでいただろうからな」。

「違うわ」と娘は言った、「この犬が咳をしたのはね、私が私の前掛けをこの犬の頭に結んでやったからでした。ほらね、この犬は喜んで、とても口髭を舐めているわ」。

この編集局の犬が実際極めて心地良げに鼻面を舐めているのは、反論出来なかった。私はむしろ道徳的面を展開することを選んだ。

「エリーゼ、それはそなたの良くない面だよ。この哀れな犬がそなたに何をしたかね。本来なら私が良く知っている素敵な話を聞かせてやりたいが、これじゃ聞かせられないな」。

「また仲良くしましょうね」とエリーゼは悲しげに言って、プードルに頷きかけた。「犬のあなたもそう思うでしょう」。

幸い書評家は勿体ぶって、その黒い前足をベッドの上布団に置いた。かくて私は仲直りが出来たものと解した。

「ではよろしい。そなたがとてもお利口して、静かに寝ていて、手も足も外に出そうとしないでいたら、私はとても不思議なお話を聞かせてやろう。それにこれは正真正銘、本当のお話なのだ。

いいかな

昔々だ。 — 一台のキッチン箆筒があって、とても立派な、古い、頑丈なキッチン箆筒であった。それは今も昔も、 — 外の我々のキッチンにあって、明日それをしっかり見てみようじゃないか。 — 箆筒はしっかりと施錠されていて、この施錠のことを、箆筒の前に立っているととても重要で声望のある人物二人とも、この箆筒に対する唯一の悪行と見なしていた。しかしマルタがその鍵をポケットに持っていたのだ。私がそなたにすぐにもっと詳しく説明するつもりはこの両者とも一致して、 — 二人が一致することは稀であったが、 — この施錠をととても不愉快なこと、とても不正なこと、とても不信と軽蔑とを買うことと見なしていた。

すでに私が話した通り、箆筒の前に立っている人物は、とても声望と威厳があって、キッチンでも中庭でも屋根裏でもそうであった。両者ともしばしば有益で、しかししばしばまた無益でもあった。どちらも一つの職責があって、実際努めていた。 — それは彼らの義務であった。しかし両者とも、自分達に全く関係しない事柄に介入することが大好きだった、しかしこれは — とても不作法なことであった。例えばキッチン箆筒に対して、二人はこの時、全く関係がなかった。しかし二人はそこにおいて、箆筒を見つめ、その下を覗いたり、その上の方を覗いたりした。しまいました、箆筒からは、とても可愛い匂いが漏れて来たりした。

この二人のうち一方は、美しく白い毛皮で覆われていて、団子鼻の周りに小さな口髭を持っていて、全くこっそりと歩き、こっそりと鋭い爪を持った四本の足で歩き回った。それに美しく、長い、鋭く尖った尾を持っていて。とても怒ると、その瞬間には激しくこの尾を左右に振った。怒るのは三つの事柄に対してであった。

第一に、施錠された筆筒に対して、

第二に、別に相手に対して、

第三に、自分自身に対して。

それは、それは、だ。...さて、リースヘン、これは誰だ。

「猫よ、猫」。

「その通り、猫だ、にゃんこ、ピンパーネル夫人の猫だ。(いや、書評家。そなたは何も立ち上がる必要はない)。別の相手はにゃんこよりも少し大きい。褐色の毛皮を着用しており、やはり四本足で、にゃんこ同様歩き回る。しかしとてもこっそりとではなく、やはり三つの事柄に対して怒っている。筆筒の施錠と猫と自分自身に対してだ。その尾も同じように左右に振りたがるが、しかし残念ながらそうは出来ない。だってほんのちびた尾っぽでしかないからで、お話しにならない。そのためににゃんこよりもほとんどもっと怒りっぽい。というのは少なくとも怒れば、怒りを発散[尾振り代わり]できるからな。

それでは、リーゼ、この二番目の者は誰だろうか」。

「犬よ、マルクヴァルトのベロ」とエリーゼは全く夢中になって、叫んだ。

「当たり、ベロだ。高貴な者、書評家の遠縁の者だ。その他またとても素敵な奴だが、しかし申したように、一筆筒の中に探す必要のあるものは何もないのだ。

『それで』とベロを見つめながら、にゃんこが言った。

『それで』とにゃんこを見つめながら、ベロが言った。

『ニャン』と筆筒を見つめながら、にゃんこが嘆いた。

『ワン』と筆筒を見つめながら、ベロが吠えた。

二人はそんな具合であった。しかし二人ともここで終わりたくなかった。

『中庭へ消えたらどうです』と猫は言った、『ここで何を眺める必要があるのです』。

『貴殿を掴まえたものだ』と犬は叫んだ、『どうぞ屋根裏へ消えなされ。そして鼠どもを捕まえたらいい。筆筒は開けられないでしょうもん』。

『バーカ』と猫は言って、その立派な尾を犬に振ってみせた。これはこんな言い草に等しかった、『哀れなちびた尾っぽのくせに、これ見んしゃい』。しかしこれは哀れなベロには我慢ならなかった。というのは、自分のちびた尾を当てこすられるといつでも頭に来るからで、あの針鼠同様であった。この針鼠は、ブクステフーデの荒野で兎と競争しても、少しも自分の曲がった脚のせいにならなかったのだ。[グリム童話、針鼠は妻と共謀]。

そこでベロは跳び上がった。恐ろしく吠えて、まさににゃんこのその立派な滑らかな毛皮に届こうとしたその時、突然、...「チュウ、チュウ、チュウ」と筆筒の中で声がした。

『ネズミだ、ネズミ、ネズミが中の焼き肉の側にいる。一でもこちらは、入れネー、入れネー、入れネーコだ』と猫は嘆いた。

『ワン、ワン。これは貴殿の珍妙な洒落と貴殿の不注意への天誅』と犬が忠言した。すると一マルタが市場から戻って来て、犬と猫は、自らの元の場所へと帰って行った。

でも今は、我が娘よ、眠って、しっかりと汗をかきなさい。そして明日、この珍しい出来事の起きた場所を確認することにしよう」。するとその通りになった。リースヘンは眠り込んだ。しかし私はまたしても一つのメルヘンを、真のメルヘンの結末にまさに相応しく、つまり何の結論もなく、何の道徳もなく、終わることが出来て、喜んでいた。博士が私の物語のとき居合わせなかったのも、私にはただ好都合であった。いずれにせよ博士な

らば、またつまらぬ比較や当てこすりを放っていたであろうし、これは私には好みでなかったろうからである。

「ヴァハホルダーさん」とマルタが突然とても誠実に言った、 — 「箆筒の穴をもうまた指物師のルドルフが塞いでくれました。鼠どもはもはや入れません」。

「鼠どもがまた齧りきるまでの間ですよ、マルタ」。私は博士と彼の当てこすりを思い出した。

一月十一日

ウルフェルデンの森からの木蔭が次第に高く窓の壁を這い上がって行くように、温かい太陽に接吻され、すべての枯れた黄色い葉を摘み取る小さな世話好きな両手から、いつも新鮮に若々しく育つべく、水を受けている。

日々は週となり、諸週は月となり、諸月は年となり、若い人間の子は得がたく、とても風変わりな植物よりもより立派に育ち、より盛大に花咲いて行った。マルタ婆やはますます老いて、屈み込み、私は白髪がますます多く褐色の髪に混じって来た。子供は最初の死骸に対し泣いた。可愛い、黄金色のカナリア、とても従順で愛らしい小鳥が、ある朝、冷たく硬直してその小さな鳥籠の床に横たわっていた。

エリーゼはその鳥を見つけて、叫び声を上げ、両手に掴んで、息を吹きかけて、鳥を温めようとした。 — いや、哀れな娘、死者達は戻って来ないのだ。

小鳥を下ろす方がいい、そなたの小さな友を。そなたのように若い者でも、もはや自分の好きなように嘆いたり、悲しんだりすることは、今や許されない。人生はそなたをもわしづかみにして、その渦巻きの中へ引き入れた。 — そなたの圧迫された小さな心と共に行くがいい。 — 学校に遅れてはいけない。 — 我が娘は今やこの年代記の紙片では十一歳となっている。丸い小顔はすでに段々とかの卵形になっている、これは向こうの壁際の肖像で可愛らしく思えるものだ。リースヘンの子供の声も、今や時々、 — 彼女が不思議がったり、喜んだり、嘆いたりすると、 — 或る声調を帯びて聞こえ、それで私はほとんど驚愕して飛び上がることになる。あの彼女が自らに帯びていた叫び声と同じである。可愛い心の娘よ、誰がその声をそなたに教えたのだ。私が永遠に消え去ったものと思っていたその声が、今や何年もしてからまた爽やかに、今活気付いているではないか。

リースヘン、もはや泣くな。そなたをもっと真面目な墓場へ、町の郊外へ連れて行こう。花咲く薔薇の茂みの下に跪くことにし、世界はとても大きくて、無限に大きくて、 — 何一つ消滅しないのだということを考えることにしよう。そこで亡き小鳥のためにその小さな墓を掘ることにし、来年の春にはこの小さな亡骸から可愛い黄金色の花が芽生えて来ると想像することにしよう。そしてこれを多彩な、小さな蝶が喜び、偉大な永遠の神が喜ぶのだと考えることにしよう。

バターパンをそなたの籠バッグに入れなさい、リースヘン、(今日はそれを[友達に]プレゼントするつもりであっても)、 — 私に一回接吻をして、ローダー先生に挨拶しなさい。先生に明日日曜日一緒に森へ散歩に、ひょっとしたら更に遠くへも行く気はないか尋ねなさい。

リースヘンは頷いて、行った。 — 相変わらずすすり泣いている。しかし私は『枯葉新聞』の広告部へ出掛けた。しかしこの一日を重要な日にすることになる新たな悲劇的出

来事について何も予期していなかった。

モーレン通り六十六番地に当時すでにこの周知の新聞の事務所があったし、今日でもそうである。私は直ぐに編集部部長のブルマー博士と私の仕事を片付けた。部長は金縁眼鏡と赤い鬘の小柄な、水銀質[落ち着きのない]個人で、一 現在とうの昔に亡くなっているが、一 更にその場にいた、両性の者達、褒められることを望んでいるジャーナリストや芸術家達とお喋りをしてしたが、突然ドアが開けられて、ヴィンマー博士が現れた。我々にはとても馴染みの太った、とても赤ら顔の警部、シュトゥルプナーゼ[上向き鼻]と同伴であった。一緒に二人は入って来たので、両者のうちどちらが本来相手を連行しているのか、分からなかった。

「諸君」と一枚のスタンプのある紙を振りながら、博士が叫んだ、「追放された」。

「追放されたって。それってどういうこと、博士の旦那さん」とルチア・ポラストウラ夫人が尋ねた。最近来たばかりの低音の歌手である。

「追放された、一 追放された、一 つまり一 こういう意味だな、一 除外された」と編集部部長は言った。彼はすべての言語を知っていると思っていた。

「おやまあ」と以前同様合点が行かない歌手が叫んだ。

「ヴィンマー、ほれ見なさい。私はとうにそう思いましたよ」と編集部次長、『ドレスデン』出身のフルスマンの上品なザクセン語の声が叫んだ、一 「貴方は何故あんなものを書いたのです」。

その新聞記者は『枯葉新聞』の最近の号を取り上げて、読んだ。

...仮にすべての阿呆がこの措置に拍手喝采を浴びせるならば、私ことヴィンマー[哀泣]はただ皆を哀泣せざるを得ない。

「それで彼には当然の報いが生じて、自ら処分されたわけ」と博士は言って、心地良くに、帽子を横に被って、口に葉巻をくわえて、三脚椅子に座っていた。

「私も君のことを思って、受け入れるべきではなかったな、ヴィンマー」とブルマーは言った。

「そんなことをしたら、老公、あなた自身拍手喝采野郎です」。

しかしこのとき上級警察が介入して来た。彼はそれまで静かに黙っていて、ただ威厳をもって深く息をしていた。

「それでは二十四時間したら、博士殿、...」

「私はねぐらを後にしている、尊い方、ご心配なく」と博士は笑った、「しかしちょっと、お偉い方、貴方に今しばらく少し話しをすることをお許し頂けませんかな。一 若衆のフリッツェ、警部殿に椅子を一つ差し上げろ」。

果てもなく浄福ににやりと笑ったフリッツェが指示に従った。深く息をして警察は腰掛け、その犠牲者が、一 話し始めた。

「私はイエナの大学で学びました、警部殿。これは一般的歴史的事実です。しかしこれには珍しい点が付随しています。当時そこには洗練された粗野な俗物がいまして、デッペ[白痴]と呼ばれていました。この人はいかなる時でもとても激烈な調子でがなり立てるのです。しかしちなみにこの人は、すべての野蛮な学生組合、つまりヴァンダル人とか、フン族、アラン人、ヴィーゴート人、メーゾゴート人、東ゴート人等々の神様でした。い

とも尊い警部殿、私などドイツの学生は、大変繊細な感覚でして、アルベルティ [Alberti] の社交会話の本に大変馴染んでおりまして、この話し方にはなかなかついて行けなかったものです。しかしまたこの話し方は大学管理人や、煩わしい債権者、同様のならず者達に得がたい効果を及ぼすもので棄てがたいものがあります。さて学生ならばどうするでしょうか。 — 学生はイモリに薔薇を置き、こう言います。デッペ [白痴] — 至る所、デッペ [白痴] です。どの大学総長もデッペ、どの教授もデッペ、どの教授の娘もデッペと言えましょう。従って、警部殿もデッペです。 — 良い朝を、諸君。アデオ、ポラストゥラ夫人、元気に吠えてください。私は荷をまとめなければならない」。

こう言って、哲学博士ハインリヒ・ヴィンマーは立ち上がり、『枯葉新聞』の広告部室を去って、二度と足を踏み入れることがなかった。

しかし私はこの高貴なシュトゥルプナーゼの顔の類いも二度と見たことがなかった。彼は黙って座っていた。しかし彼は突然飛び上がって、三脚椅子を転倒させて、叫んだ。

「上級官庁に冗談を仕掛けて、許されるものか」。こう言って、彼も飛び出て行った。

「デッペの意味が分からなければ、良かったが」と編集部長は編集者達や居合わせる者達の果てしない哄笑の中、言った。集まっていた者達は解散した。 —

家に戻ると、私は小さなリーゼに出会った。リーゼはすでに学校から戻っていて、マルタが小鳥を入れていたカラフルなボール箱を覗いていた。博士は向こうで盛大な騒音を立てている。時々彼は窓辺に現れ、青い夏の空へ煙草の煙を吹き付けたり、自分の大好きなオーストリア国民軍の一節を口笛にしたりしていた。小さなリーゼに私はその太った友の運命についてまだ何も話していなかった。私は彼女の心を更に辛いものにしたくなかった。正午、彼女はすでに悲しみの喪の余り、何も食べられなかった。もっとも彼女はバターパンを正しくプレゼントして手放していた。彼女の目はいかなる時も、亡き動物の横たわるカラフルな箱に向けられていた。

夕方我々はこれをフランツとマリーの墓塚足許の花咲く薔薇の茂みの下に埋葬した。赤い夕方の雲が我々の上を帆掛けて進み、薔薇は香り高く匂って、至る所明かりや花が見えた。私は墓塚の側の小さなベンチに座っていた。エリーゼは小さな頭を私の胸に置いて、彼女は悼みの余り疲れて、 — いや、幸せな子供時代だ、 — 両目を閉ざして、微睡みの寝息であった。

美しく、青白い、黒い服のレディーがやって来て、簡素な記念碑の前で跪いた。貧しい子供達が、遠く離れた教会墓地の壁際で亡き父親の墓に森の花輪を置いていた。一人の老人が背中を屈めて、石碑や十字架の周りを行き来して、銘文を読んでいた。

町ではすべての鐘が明日の日曜日を告げていた。荘重な音色が一杯にまた純粹に波打って、路上の仕事のざわめき音や回転音の中で窒息しながら、この静かな世界の上に広がって行った。西側の天はますます黄金色に輝き、ますます深く地平線に太陽は沈んで行った。この回転する地球の片側半分は夜となり、一方大きな大西洋ではひょっとしたらまさに今一隻の船が、若いアメリカへ帆掛けて進みながら、日の出の太陽に歓迎の挨拶をしているかもしれない。今この若い朝、帆掛けて進むのはほんの一隻の船かもしれないが、一方こちらでは何百万人の上に夜が沈降している。向こうでは上甲板に船長が、手に望遠鏡を持って立っよう。マストの見張り座では喜ばしげな目が待望の陸地を探し見つけている。至る所に生气と活気が見られる。 — こちらでは孤独な思索者がそのランプに点火して、

過去の諸本を広げて、その中から未来の謎解きをし、ひょっとしたら諸民族の上にあるこの夜は永遠に続くであろうと思っているかもしれない。しかしこの瞬間にかの孤独な船上では、歓迎の号砲が放たれて、「アメリカ」と船の端に駆け寄る移民の群れが叫び、一人の母親が彼女の小さな微笑している子供を朝日の中、そして新しい祖国の方へ差し出す。

草は湿って来始めた。私は小さな眠っている娘を起こさなければならない。青白い女性も同様に起き上がる。彼女は我々の方へ向かって来る。我々は互いに面識はない。しかしここ教会墓地では彼女は臆することなく、私と微睡んでいる子供の上に屈み込んだ。

「この娘に接吻させてください」と彼女は言った。

私は彼女が木々の間に消えて行くのを見ていた。彼女はハンカチを目の前に持っていた。エリーゼは目覚めた。「まあ素敵」と彼女は叫んだ。夕方の輝きを眺めていた。

「お休み、フランツ、お休み、マリア」。

「おやおや、雀路地では一体何があったのだ。我々が家に戻って来ると、私がまだ体験したことのない一騒動があった。どの木戸口でもグループになった人々がお喋りしていて、仕事はすべて中止されていた。サラダ菜洗いも、靴の手入れも、靴下繕いも、ハンマー打ちも、鋸引きも、ペン削りも、すべて休みとなっていて、ただ一舌先は休んでいなかった。

「いや、いや、ヴァハホルダーさん、まあ上をご覧なさい」と我らの木戸口の階段上に、一群れの近隣女性達に囲まれて、歩哨に立っていたマルタが、すでに遠くの方から私を見つけていて、叫んだ。

「マルタ、何があったのだ。どうした」と私は彼女に向かって叫んだ。

「ヴァインマー博士が出発した」と私の周りで二十人の声が歓声を上げた。そして二十本の指が立派な若者の窓の方を示した。この若者はこの路地全体の「有名人[カラフルな犬]」であった。

大きな一枚の紙がその上ではためいていて、その紙には強烈な文字でこう記されていた。

ヴァインマー博士

P. P. C.[別離記念]

しかし開いた窓から、一シュトゥルプナーゼ警部の立派な満月顔が乗り出していて、その白い手袋をした両手が、その紙片を片付けようと骨折っていた。

私は素早く不思議がるエリーゼをマルタ婆やに預けて、博士の住まいへの階段を上があった。これは長い時間を要した。というのは私の前を衣装の言いようもなく不可解な塊が、喘ぎながら、呻きながらその狭い道をゆっくりとゆっくりと上がっていたからである。

それは太ったピンパーネル夫人で、この出来事のため、長年経って初めてまた自分の家の上の階へ上がったのであった。

この部屋のことは、最近素描家のシュトロベールを訪問した際に描写したので、それ故今はただこう言うのみである。博士の残したものは、壊れた脱靴器、空の葉巻箱のフマドレス・レガリア[喫煙者の王座、スペイン・キューバ葉巻]、それに『フロドアール集成』の一部であった、と。

シュトゥルプナーゼはその椅子に座って、空のねぐらを鬱々、憤然と見つめていて、喘いで言った。

「追放された。それどころか今やずらかった。何ということだ。まずは『デッペ』と発したからには監獄行きだったのだが」。

「何てことをしたの。哀れな未亡人からその最良の借り手を追い出すなんて。正気の沙汰ですか、警部さん。貴方の奥方にはいつもバターを三ペニヒお安くして差し上げていたのですよ」と太ったピンパーネル夫人は愚痴った。彼女も同様に警部に向かい合って椅子の上に沈み込んだ。

「女将、だまんなさい」とシュトゥルプナーゼは怒鳴りつけた。これに対し太った夫人は、使徒パウルの言葉を聞いたとき、昔すべての健気なコリントの女達がしたに違いないしかめ面をした。つまり、婦人たちは教会では黙っていなさい[「コリントの信徒への手紙」、14,34]。

数分間の荘重な静寂の後、シュトゥルプナーゼが鈍い唸り声を発して、自らに嘆息した。「デッペ」と。しかし突然、自分の胸ポケットを憤然と叩きながら、彼は叫んだ。「ここに私は逮捕状を用意している。役人に対する公務執行妨害、それなのに、――ずらかった」。

私は、敢えて、激昂した獅子を高笑いで更に刺激することを避けた。姿を消して、階段で初めて弾けた。威厳のあるお二人を互いに向かい合って座らせていた。

路地で私にマルクヴァルトが一枚の紙片を渡して、神秘めかして、博士の窓を示しながら、囁いた。

「ヴァハホルダーさん、彼は貴方のためにこれを残されました」。

その紙片にはこう記されていた。

「最愛の友よ、

上級警察も、『デッペ』の意味を知った。社交会話辞典には載っていないけれども。一人の友が――姿を消すよう、――私に警告してくれた。――ボヘミアの森でまた再会しよう[シラーの『群盗』もじり]。

ヴィンマー博士

追伸。編集部プードルは私の伴をする」。

「叔父さん、一体全体どうしたの、博士叔父さんはどこにいるの」と小さなリーゼは尋ねた。彼女はすでに寝間着を着ているが、窓から離れない。

私は一枚の紙に、pour, prendre, congé と書いた。するとリースヘンは今やすでにちびっ子学者で、一冊の辞典の助けを借りて、寝床に就く前に解読した。「為に、――取る、――別れを」。

「ヴィンマー叔父さんはちょっとした旅行をしなければならないのだ、愛しい娘」。

かくてエリーゼは納得してベッドに入り、眠り、そして穏やかに自分の最初の悼みを夢見て忘れた。この年頃では、一晩あれば、悼みを埋葬できる。

一月十二日

これらの冊子を折るとき、すでに大方考量していたことであるが、多分これらの内容に

は余り関連性は見られないだろうと私は道々記してきている。私は短い分秒にこだわったり、数年を飛ばしたりする。私は映像を描くが、筋を記さない。私は昔からの調子を最後まで奏でないまま中断してしまう。私は教訓を垂れない、私は忘れたのである、私は、
一 長編小説を書かない。

今日私は初めて吟味する視線を過去に向けて、自ら微笑せざるを得なかった。老公よ、そなたは何をしているのだ。この草紙が不幸にして分別ある人士の手に落ちることになったら、この分別ある人士は何と云うことだろう。

いや、一 構わない。奴等には、言いたいように、言わせておけ。私は自分がこれらの紙片に書きなぐりながら、片足を現実に、もう片足を夢と過去に入れると決心した時間のことを祝福している。一 何と多くの陰鬱で孤独な時間が、そうすることで、日の当たる明るいものに滑り落ちて行かなかったであろうか。映像を次々に変えながら、この絵を固定するかと思うと、別の絵を外して行く。多彩な親しみのある交代劇である。このように私はこれからも書いて行く。

幾多の古い、埃を帯びた書類ばさみがそこに置かれていて、その中には本類やノート、スケッチ、干涸らびた花々やリボンが収まっている。私は手を伸ばせば、甘美な思い出や悲しい思い出を呼び寄せることが出来る。しかし次のように上書きされている思い出ほど、香り高く、森の新鮮な匂いのするものはない。

森での一日

「馬車で行くの、それとも歩いて行くの」とリースヘンはかの先の頁で記されて、盛り沢山の出来事の一日の夕方、なお尋ねていた。

「馬車で行こう」と返事であった。そしてこのことを幸せに思って、彼女は小さな鼻を壁に向けて、眠り込んだ。

翌朝果たして馬車でローダーは現れた。エリーゼの教師で、頭に軽い麦わら帽を被り、背中には緑色の植物採集箱を負って、すでに角の所で、陽気に窓の方へ合図していた。

マルタ婆やはコーヒーを準備していた。そしてリースヘンは、同じように準備完了としたい余り、今回はいつもより多くの加勢を要していたが、階段を飛び下りて行き、今や教師を後に従えて、現れた。

ローダーは、ただドイツでのみ見られるような、かの民衆的教師の一人である。彼は、ほとんど自明と思われるが、一人の学校教師の息子で、この父の学校教師はまたしても一人の学校教師[祖父]の息子であった。諸世代を通じて伝播して行く一つの身分が存在するならば、ドイツの民衆的教師世界がそうである。それで田舎の父親がその通常とても数多い息子達の一人を、一冊の聖書、賛美歌本、とりわけ文庫として一冊のコラールの本を持たせて、町へ連れて来るのである。その少年は父親の誇りである。オルガンを演奏するというより偉大な才能を誰が有しよう。一 たとえ丁度その声が低くなったとしても、より良い声を誰が有しよう。かくも準備を整えて、この若き学者は、そのより広大の教養世界の舞台へ赴く。最初その息子は、野蛮な一味の同級生達の下、強烈な郷愁に襲われる。同級生達は、彼が世間知らずで、お人好しなので、彼をからかい、なぶるのである。人生はこの息子にとって、最初、ただ四月の一日[エイプリルフール]であり、阿呆どもが、一
「四月に虚仮にされる」のである。彼の文庫の増大でさえも、それらはクラスの教科書

やフンケ[1752-1807]の博物誌から成るもので、感謝も中程度でしかない。息子にとってより偉大な友は、実存のこの時期、昔からの実直なピアノであって、これは父親が息子のために借用して、息子の屋根裏部屋に置いたものである。哀れな息子はその前に座って、自分のコラールや民衆のメロディーを演奏する。ー 民衆のメロディーは耳を頼りとしていて、そして自分の村や、自分の両親、兄弟姉妹を思い出して偲び、とりわけ、自分がトップであった学校時代、いや収穫時には時に父親の代わりを許された学校時代を偲ぶ。ー 然るに息子はこちらでは、ー 大きくなった坊やで、ー 最も小さな者達や怠け者達の中に混じって、席順は全くの下位なのである。

哀れな息子よ、待ちなさい。ー ほら、そなたの暗い実存の中へ、最初の喜ばしい光線が屈折して来る。通常どこの学校でも一人の教師が、つまり変わり者、収集家、ひょっとしたら情熱的な博物好きかもしれない者がいて、大抵この者には伝達の才能が賦与されており、この教師に、そなた、哀れな孤独な情緒の者は出会うといいのである。するとそなたは一人の友を得ることになる。すると万事が変わる。

さて今や山を越え、谷を渡るといふ何という散策か。大気の中、水の中、そして陸上や地下での、すべての小さな、微小な、強力な不可思議への何という沈潜か。屋根裏部屋が、甲虫や喋々、植物標本等々で何と一杯になることか。夕方ごとの何という淨福な疲労、夜の何という夢想、朝の何という目覚めか。

さて一つの学問が次々に他の学問を招き寄せる。クラスが飛ぶように変わって行く。ー 我々はあのシラーを暗記したし、世間は我らの前でますます美しく、ますます広くなって行く。ー いや、一人のファウストたるには、すべてを研究し尽くす必要はない。意志さえあれば十分で、霧の中からメフィストフェレスを呼び出せる。

汝、ドイツの息子よ、片手の上に熱い額を載せて、長い夜の間、目覚めているがいい。古代や近代の精霊達を呪文で呼び出すのだ。いつでも精霊達は汝の側に控えている。これらは生活困窮と懷疑、空しい努力の精霊達だ。

必然性の腕力に汝は捕らえられて、汝はその知識欲と共に、小さな辺鄙な森の村か、あるいは大都會の貧民学校へ投げ飛ばされる。そこで汝の一杯の心を埋葬するか、ー その心を忘れようとするがいい。

汝がそう出来るならば、幸いである。しかしひょっとしたらもっと幸いかもしれないのは、汝がこの点でも更に先を試みる状況にある場合である。世界靈の脈拍は至る所で脈打っている。「求めよ、されば与えられん」と本の中で最も素晴らしい本が言っている[マタイ、7,7]。この本はとても理解するのに容易で、またとても理解が難しい本でもある。

御者は苛立って、下の戸口前で手をパチッと叩いた。エリーゼは苛立って、駆り立てた。マルタは相変わらず、北極への旅をするかのように、準備をしていた。しかしようやく我々は乗り込んだ。

我らの日曜日のオデュッセイアが始まる。

「博士叔父さんは明日旅立っても良かったのじゃない」とリースヘンは、向こうの紙片を眺めながら、なおも尋ねた。その紙片にはピンパーネル夫人がこう告知していた。

「ここにキャビネット付きの貸間があります」。

ローダーは微笑して、何か気にかかることがあるが、しかし差し当たり詳しいことには介入したくない風に見えた。かくて我々はまだ静かな通りを市門の方へ向かって進んだ。

平日ではこの時間の頃、すでに十分活気があるのであるが、しかし今日、労働の民は日曜日の朝方まで眠っている。この民は六日の創造の日々の後、その権利を有している。

今や我々は、都会の周りに環状にある緑の公園の中にいる。別荘と庭園とが通りの両側を縁取っている。鉄道線路が路上の真ん中を走っていて、我々は停車しなければならない。或る列車が丁度駅を目指して、鼻息荒く、音立てて飛んで来るからである。市民達が郊外へ出て行く日曜日には、同郷の者達が待ちに入ってくる。今日飛ぶように入出入りする何千もの人々は皆、享樂のそれぞれ別の目標を求めていて、誰もが別々の方法で、喜びを探している。

すでに我々は最後の庭園を後にして、今やゆっくりとポプラ並木を高台に向かって進んでいる。この高台は広大な環状で大きな平原と大都会とを取り巻いている。太陽が森の上に昇った。蕾や、葉、花々が皆一滴の露を夜間の贈り物として帯びている。雲雀が歓声を上げて、新鮮な青空に飛び、雲雀もまたその翼から露を振り落とす。我々が振り向くと、大都会はまだ銀灰色の靄のヴェールに覆われている。このヴェールは大都会自らが織り上げていて、ペーネロペー[『オデュッセイア』、求婚者を断る]がその織物を断ったように、ヴェールを新たに結ぶために、まず断ちきるのである。織り込まれた黄金の星々のように諸塔の十字架が、一 苦難の象徴が、一 その上で煌めいている。しかし我々はすでに陽光を一杯に浴びて進み、今や森の縁に達した。もう我々は馬車を必要とせず、馬車は素早くまた、町に向かって高台から下りて行く。

我々の前に突然、歩み寄ってくるのは何か、大地を覆っている去年の枯れ葉の中をがさごそとやって来る。何が茂みの中から出現するのか、朝の露で両耳と黒い毛皮を濡らして、陽気に我々の周りを今や吠えながら、飛びながら、明るく煌めく滴を振りまきながら出現する。

「万歳、森へようこそ」と馴染みのバスの声が叫んだ。

誰が笑って駆け寄ってくるのか。一 小さな煙草の煙の背後、帽子に高く揺れるモウズイカを付けて、脇へより低く林の方へ導く歩道を駆け寄ってくるのか。

「ようこそ、遍歴の勇士」とローダーが、帽子を振りながら、叫んだ。

「皆さん、美しい朝です」と追放された博士が挨拶した。プードルの外された口籠を高く投げ飛ばしながら、また捕まえていた。

「あなたは森の中で書評家と眠ったの」と小さなリーゼが尋ねた。

「ヴィンマー、警部殿が貴方によろしくとのことですよ」と私は笑った。

誰もが同時に尋ね、答えることがあって、誰もがそうした。一方書評家はいつでのエリーゼの側に密着していて、時々短く誠実な吠え方を披露して、いつでも我らの食料籠に目を留めていた。

今や情熱的身振りで博士は高台の縁に歩み寄って、都会に対し腕を突き出し、朗詠した。「いや、忘恩の都会よ、汝、私が夜を徹して、目覚め、一 男性歌手や女性歌手、俳優や女優、男女のバレエ・ダンサーを称えて、またこき下ろした所よ、一 私が幾多の主筆論説を起草した所よ、私が何本もパイプを吸った所よ、汝はそこに横たわっている。汝は朝の微睡眠の中、悦樂の夢に耽っているが、一方私はさまよい、追放され、迫害され、大気に晒され、ブルマー博士の言では除外されて、つまり追われ、処分されており、一 鋭い北風の中、子羊に他ならない。ねぐらよ、汝の憲兵達を、汝の有名なミューズ劇場

を、これは向こうの屋根の上、胡椒樽[フランス大聖堂]と塩樽[ドイツ大聖堂]の間に聳えているのが見えるが、これらを誇るがいい。 — 私は汝を軽蔑するぞ、私はドイツ人新聞記者なのだ。汝の警察監視下リストに記載されている者達の中で、この名前の後には太い十字架を記すがいい。ハインリヒ・テオベルト・ヴィンマー哲学博士だ、その後には三回下線を引いて、追放だ。私は私の両足から汝の埃を振り落とす[マタイ、10,14]。私は汝を軽蔑する。 — 私はイーザル河畔のミュンヘンを故郷とする権利を有していないか。高貴な『ドイツ人の祖国とはどこか』[広大なドイツ語圏を志向、E. M. Arndtの詩,1813]には、明らかに多くの穴があるのではないか。この堅牢な腹は」(ここで博士は言及された体の部位を叩いた)「バイエルン産ではないか。ミュンヘン万歳。 — ほら、私は、かくも豊かな馬の尾飾りの追放権のあるパシャとして、汝に予言として伝えておく。より華奢な男、 — しかし、より有毒な男が、私の職に就くことになる。新聞監視の当局よ、汝は知るべきであろう、汝らが雑草と呼んでいるものは、少なくとも雑草の良き面を有しているのであって、つまり腐らないし、消えもしないのである。我が未知の共闘者よ、突破口に進め。我が祝福が汝の伴をする。以上、私の話しは終わり。 — 行こう、リースヘン」。

こういって、博士は口籠を山の下、町の方に投げた。小さな娘を抱き上げ、彼女をそのバッグと、彼の話しの間、彼女が摘んだ最初の花々と一緒に肩に乗せ、叫んだ。「諸君、行こう、森の中へ。古巣には背中を向けよう」。

こういながら、この頓狂な若者は、自分がやって来た歩道を駆けて、森の中へ戻った。ローダーと私は笑いながら、従った。先の編集部プードルは我々の後を狂ったように飛び跳ねて来た。「陽気ニ過ゴソウ」[学生歌]の博士のバスが小鳥のさえざり始めるコンサートに響いて来て、我らの森の中の夏の日曜日が始まった。

何という一日であったことか。

緑の葉叢世界へのこの最初の登場、 — 胸一杯のこの深呼吸。博士は強力に逆らうリーゼを伴って、正規のギャロップに加速していて、我々の視界から消えた。しかし我々の聴覚は捉えていた。小さな娘は笑い、 — 苛立って、 — 懇願した。プードルは全力で吠え、博士はその学生歌を次々に歌っていた。

自分が追放されたことで、この昔のイエナ大学の若造は、すべての社会的絆が解かれたと思っっているように見えた。

「彼は妙なタイプの人間です」とローダーは、我々がよりゆっくりと追って行くとき、微笑して言った。「この頓狂なバロックの仮面の下には、人の良さが擬人化されています。奇妙に見えるでしょうが、私どもは青春の友です。彼がルンペンハウゼンでギムナジウムに通っているとき、私は教員養成所で学校教師に蛹化しました。同様にフィレンツェでもその不満分子通りを教皇派の若者と皇帝派の若者が腕を組んで散歩していたようなものでしょう。 — しかし、そんなものでして、彼は私に葉巻の巻き方を教え、私は彼に一本指で、次の有名な歌のピアノ伴奏の仕方を教えました。

我が定めは、

飲み屋で死ぬことなれば、...

後に彼は私の視界から消えました。私はラムズドルフで助教師となり、彼は大学に行きました。私が或る夕べ、座って、ルーペで苔を調べているとき、突然或る者が私の肩を叩きました。そして一人の低いしゃがれ声で、 — 以前ライブゲーバーが貧民弁護士ジー

ベンケース[ジャン・パウル作]に呼びかけた具合で、一 『ローダー、お早う』と私の背後で言いました。ヴィンマーで、彼は、決闘法違反で退学処分となっており、彼の言い分では『大旅行中』だったのです。彼は当時からすでにからっけつで、しかし諧謔は盛り沢山、勇気もあって、運命は私どもをよく互いに出会うよう計らってくれました。そしていつでもヴィンマー博士は、一 変わらなかった、...」。

「この種の者達はドイツでは死に絶えません。これらの名詞、つまりビール、ロマン派、政治がまだ口にされるのを耳にする限り」と私は言った。

「ちょっと」と教師は叫んだ、「何と立派なトリカブトでしょう。済みません」。こう言って、彼は茂みに飛び込んで、その植物を引き抜いた。その間、私は髭の中で呟いていた。

「それにそなたの類いも、ドイツの魂よ、消えることはないだろう。ドイツ人の情緒が、ヴァイクセル[ヴィスワ]川とライン川の間でまた一つの花に没頭出来る限り」。

「ヴァハホルダー叔父さん、ヴァハホルダー叔父さん。皆、直ぐに来て、直ぐにこちらへ来て」と今やリースヘンが遠方から叫んだ。

「どうしたのだ、リーゼ」とローダーが、植物標本箱に自分の花を入れながら叫んだ。

「博士叔父さんがとても奇妙な素敵な鳥の巣を見つけたの」とまた声が響いて、我々は駆け出した。

脇の方、小さな陽の当たる場所に博士は立っていて、歌声と駆歩のせいで顔を真っ赤にしている、小さな娘にニワトコの茂みを見せていた。リーゼは息を止めて、小さなヒヨコの巣を邪魔しないようにしていたが、小枝の中から夢中になって覗いていた。一方書評家の犬は、更に下の方に不可思議のものを探して、頭部や体を葉叢に隠して、ただ後脚と振り回す軽騎兵羽根飾りの尾を見せていた。

「そうだろう、リーゼ。そなたに見せなきゃと思っていたのだ。警察がかくも早朝、森へ追いやったにしても、これはすごい」。

博士の背後、上着のポケットから一冊の本が覗いていた。教師はその本を取りだした。それは『ヴォスのライネッケ』で、これは博士がどこへ旅行しようとも、いつでも永遠に伴をしている本であって、彼はほとんど語んじていた。教師が触れると、彼もすぐに振り返って、こう始めた。

悪いことを行ふ者は、明かりを避ける。
それで悪漢のライネッケも、
町で沢山悪事を行っており、
そちらへ旅することをはなはだ恐れている。
彼は宮廷で憎まれており、
ここでとても評判が悪い。

「しかしこちらでは、リーゼ、少し違うぞ。こちらで、我々は鳥の巣を見つけたら、我々は覗いてもいいし、それついて我らの意見を言っても良い」。

「まあ、とてもこれは奇妙に素敵」と小さな娘は叫んだ。彼女は博士の言葉を全く聞いていなかった。「ほら、この親の鳥は何も恐れていない。一 まあ、何と大きなくちば

しでしょう。 — この鳥は全く静かにその籬の間に座っていて、ただ下の方の書評家の犬の方だけを見ている。 — 小鳥さん、この犬は何もしないよ。静かにしていなさい」。

すると博士は子供を地面に滑り下ろさせた。「では足で歩いてごらん」と彼は言った、「草は乾いている」。

何という一日か。まだ白い雲が木々の上を移って来ていたが、しかし直に太陽が雲を片付けて、永遠の青空が、純粹に明るく、微笑して我々を見下ろしていた。ますます深く我々は香る原野の中に没入して行った。「リースヘン、我々が摘んだ花は皆、どこに置けばいいか」 — 娘の両手はすでに一杯で、我らは歩くたびに、一つの花を失う按配で、博士はこう言わざるを得なかった。

「童話の中の話しのようではないか、父親が行方不明の子供達と撒かれた小石を手がかりに再会するという。一人の迫害された新聞記者、 — 恐ろしいことだ、 — 追っ手の者達が記者にすぐ迫る、 — 奴はどこに逃げたのだ、 — 『これを見ろ』と追跡者達の中で最も俊敏な者が、放浪者狩りの真の探偵者が、 — 『これらの花々を見ろ、 — 葉巻の端が混じっている、兄弟、この痕跡を追って行くのだ。 — ほら、こちらの柔らかな地面には犬の足跡があるぞ。 — 間違いない、彼だ。 — 行こう、彼を追うのだ』、 — 恐ろしい」。

「すごい、ヴィンマー」と教師は笑った。彼は進みながらまた植物の一つ引き抜いた。「君の次の作品はどんな題材だ。君がそれをどこで仕上げようと、私は一冊期待しているぞ」。

「尊い友よ、私はミュンヘンで書くつもりだ。『書誌蕾』の書店と所有者、 — ガーブリエル・ピュンペルと私は契約書を交わしていて、それをポケットに有する。ガーブリエル・ピュンペルは私の叔父だし、ナネッテ・ピュンペルは私の従姉妹だ。いやはや、ほんとにナネチャンが恋しゅうなった」。

「博士よ、博士」と私は微笑して、叫んだ。

「まことに」と除外された作家は嘆息した、「私は今日本気で堅く生きたいと思う」。

名誉ある古参の若者だ。

「それではそれが君の考えだな」と教師は微笑し、感動して言った。「君は昨日、午後ずっと、私のソファーに横になっていたが、そう考えていたのか。私は煙草の煙のために君の姿が良く見えなかった。しかし君はいつになく物思いに耽って、夢想的に思われたものだ。この追放がそのような結果になれば、悪くないかもしれない」。

「万歳」と博士は、帽子を空中に投げながら、叫んだ。『書誌蕾』万歳、山羊ビール[黒ビール]万歳、ピュンペル家とその商会万歳」。

先の編集部プードルは我を忘れていた。今やこの犬は喜びの余りエリーゼを台無しにしてやろうと意気込んでいて、自分の主人に対し高く飛びかかるかと思うと、茂みの中に消えたり、再びまた別な側から出現したりした。 — 草の中に寝て、回転し、それでどこが上で、どこが下か、脚の方か、背中の方か、頭なのか、尾なのか分からない具合であった。

「時計を誰か持っているか。誰もいないのか。ならばなお結構、胃が時計代わりだ。これらの立派なブナの木々の下、ここに陣取ることしよう。苔がとても柔らかい。バッグや籠、植物標本箱を開けてみよう。一本ワインがあるぞ。コルク栓抜きがあるかい。誰も

持っていないのか。ならばなお結構。この瓶の首を叩き折ってしまえ。エリーゼが可愛いグラスを持参して来ている」。

「おや、ローダー、注意しろ、書評家の犬が頭を貴方の上着ポケットに突っ込んでいるぞ」。

「このような柔らかな草の上に手足を伸ばすのは、何とも快適だ。緑の森の中では、食べ物が美味しい。 — マルタ婆やには長生きして貰おう。とても気配りだ」。

「娘っ子、こちらへ来なさい。可愛い小さな足も疲れてしもうたろう。これらの糸は何だ。そうか、これから花輪を作るのか。何とも立派な野生の薔薇だ」。

「ほら、リースヘン、テントウ虫がそなたの腕に這っている。 — 羽根を広げて、一ぽんと、飛んで行った。陽光の中の小さな赤い点々」。

エリーゼはその虫を目で追って、歌い始めた。

「小さな、テントウ虫、
そなたの脚を動かして、
私の指の上に這い上がれ。
天辺にボタンとなって止まりなさい。
この指は、小さな赤い虫さんには、
高い塔に見えないかしら」。

それから全く上品な声で歌った。

「私は赤いマントを着て、
四枚の羽根を広げます。
そなたには羽根一つなく、
ただ二本の脚を使うのみ。 —
私は八本の脚を動かし、
七つの点を運びます。
この塔よりも高く飛ぶ、
この小さな虫は誰でしょう、 — エッヘン」。

外の太陽はとても暑くて、圧迫的に違くない。太陽は高く南中している。しかしこちらでは太陽はその支配を影と共有しなければならず、しかもどこが暗がり、どこが明かりか、もはや判然としない具合で、そのように明暗が入り混じってちらちら点滅した。

「リースヘン、疲れたかい。可愛い心よ、森の香りを堪能したか。お出で、そなたの小さな頭をこちらへ置きなさい。蚊も蠅もいない。まだ陽光が黄金色であれば、微睡みの邪魔となろう。大胆に両目を閉ざして、蝶や花々や小さな小鳥達の可愛い妖精の夢を見ていなさい」。

プードルは何とも心地よさそうに欠伸して、頭を前足の上に置いて、目を瞬きさせていた。

「書評家の犬よ、口籠がないのは、全く別の趣であろう、そうだろう」。

博士はいとも物思いの風情で、青い煙草の雲を自ら放っていた。彼は『書誌蕾』での自分の最初の論考を考えているのか。ミュンヘンの従姉妹のことを考えているのか。

教師は何と目を輝かせて、自分の植物標本箱の宝物の植物に没頭していることか。

「おや、ローダー、葉っぱと根っこの間で覗いているノートは一体何だ」。

「それを寄こしな」。

教師は赤面して、微笑してそのノートを渡した。

「これはしたり。教師風情がこのような詩華をものに出来るのか」。

にんまり笑ってヴァインマー博士は、私の肩越しに頭を差し入れて、原稿を何度か覗いた後、それを『書誌蕾』に独占掲載しようと早速、準備にかかったが、しかし教師はそれに強力に反論した。後に彼はそれを私に贈ってくれた。その中から一枚を年代記に挿入しようか。

そうしよう。一枚を紹介する。

「私は小川の縁にいて、諸民族と諸王の歴史について考え、 — 私の恋愛について考えていた。トルコの奥の方ではかの諸民族が互いに髪をつかみ合っていて、向こうの小さな園亭には私の恋人が座っていて、むくれていた。いやはや。

リップベ・デトモルトが私の祖国で、 — オリエントの問題、サバルカンスコイ[バルカン越え将軍、von Diebitsch,1785-1831]やナヴァリノの海戦が私と何の関係があろう。

しかし向こうの女性はどうだ。

偉大な牧羊神パンにかけて、この女性とは無関係というわけに行かない。

恋愛のように、夕方の天は赤い。黄金色の小さな雲や白い鳩が天の中を行き来している、愛の思いのように。...私の外交官達はどこか、私の内閣の急使はどこか。

草が揺れて、 — うごめき、 — 走り、這い、よじ登り、跳ね、舞い、飛ぶ。多足類のもの、多翼類のもの。さえずり、ざわめき、 — 千もの声となる。

詞藻豊かな大臣、春の参事官、恋愛の公使が私の周りに集まって会議を開く。

よろしい、 — 公会議が開催される。すべての現行議員、将来の議員の方々、よろしく。私はまず誰を向こうのニワトコの花々の背後の女性に送ろうか。

いや、そなただ、 — 彼女の許へさっさと行くがいい。 — 我が軽快な羽根付きの、胃のない[蝶の]伝令よ、そなたは赤い目玉模様と呼ばれているが、その白い羽根の上の二つの緋色の点を彼女に示し、これは心の血の痕と言うがいい。 — 愛を求めての、赤い愛を求めての、荒々しい戦い故の心の血の痕だ。するとこの伝令は園亭に向かって舞って行く。我が心が、 — 私の不安な心臓が震える、 — (彼女は — くしゃみした!!!) いや、有り難う、有り難う。汝ら、永遠の善良な神々よ、予兆に対して感謝する。(ルイーゼ、風邪を引くな。ショールをまとえ、聞いているか)。

私の二番目の使者は誰か。急げ、急げ、私の小さな、勤勉な蜜蜂よ、 — 彼女の許へ急げ、 — その耳の周りで呻って、蜂蜜への思い、家政への思い、亜麻織りやドリル織りへの思いを吹き込め。

(女性は小さな園亭でその縫い物について何故笑うのだろう)。

そして私の最後の使者は、私の黒い黄縁蛺蝶だ。彼女の許に舞って行け。彼女に向かってこう言うのだ。こう言え、ルイーゼ、ルイーゼ、一日が終わる。 — カゲロウも疲れ

た、死ぬほど疲れた。 — 小川はカゲロウの哀れな小さな骸を揺すって運び、花々の許を通り過ぎて行く。一時間前、まだその花々の上でカゲロウは踊って戯れていたのに。ルイーゼよ、ルイーゼ、人生は短い。ルイーゼ、夜になった。西側の赤く陰気な条光を見るがいい。東側で不気味にぴくつき、輝く様を見るがいい、 — ごろごろと鳴るぞ。

(小さな園亭で何か動いた。彼女は溜め息を吐いている)。ルイーゼ、ルイーゼ。

(彼女が出て来た)。

ルイーゼ、ルイーゼ。

木々がその花々を彼女の上に振りまいた。アヴェ[合掌]・ルイーザ。夕方の風が彼女に囁きかける。アヴェ[合掌]・ルイーザ。昼咲きの花々が彼女の方に傾ぐ。アヴェ[合掌]・ルイーザ。夜咲きの花々がその乳香の萼を彼女に対し開く。 — アヴェ[ようこそ]・ルイーザ。アヴェ[さらば]・ルイーザ。(彼女は合図し、...彼女は微笑する、...)

和平か。

和平だ。

和平だ。帝国の鐘が鳴っている。大都会や村々を照らし出せ。孤独な家々をすべて照らし出せ。すべての大聖堂や教会、礼拝堂のオルガンの音色よ。すべての民よ、跪くのだ、跪くのだ。男達も女達も、老人達も、子供達も、青年達も、乙女達も。

主なる神、我々は御身を称えます。

主なる神、我々は御身に感謝します。

平和だ、天と地に平和があれば、そして人々には満足感があれば[いと高きところには栄光、神にあり、地には平和、御心に適う人にあり、ルカ、2,14]。

私は教師のこの「ルイーゼ」をととても良く知っていた。彼女はジルバーハイム男爵の子供達の許での家庭教師ではなかったか。彼女は後に教師ローダーと結婚したのではなかったか。彼女は彼と、幸福、苦悶、追放を共有したのではなかったか。

ようこそ、オットーとルイーゼのローダー夫妻、君らがどこにいようとも。

「まあ、素敵だったわ」とリースヘンは、目覚めて、頭をを起こしながら言った。彼女は緑の野での自分の夢を思い出していて、教師の空想のことを思い出したのではなかった。

— その空想のとき、彼女は眠りこけていた。

「リースヘン、何の夢を見た」と博士は尋ねて、その娘の子は彼をびっくりして見つめた。

「私は眠っていたの」と彼女は尋ねた。

「ルイーゼよ、そなたのような小さな娘の場合、眠っていたか、決して良くは分からないものだ。そなたは何を見て、聞いたかな。まあ、話しなさい」と私は言った。

「あら、私が見たのは、とても素敵だったわ。草の向こうを覗くこと私には出来なかった。小さな森のようだった。その中で何と一杯の小さな動物が走り回っていたことでしょう。私が目を閉ざすと、すべてが全く赤くなって、空一面が燃えているようで、それでまた私は素早く目を開けなければならなかった。私は全く一人っきりと思っていたら、突然とても素敵な黄色い蝶々が、羽根には二つの大きな目玉模様があって、その羽根の下の方は鋭く尖っていて、その蝶がすぐ私の顔の前、一本の茎に止まって、とても上品な声でこ

う言ったの。

『小さな御令嬢、素敵なお招待です。森の薔薇の女王の許での茶会にいらっしゃいますか』。

教師殿は、その時、何か朗読なさっていて、私もその先を聞きたいと思って、その蝶にも言ったの。でも蝶はこう言った。女王の許では、学者の殿方、ブレネッセル[イラクサ]という名前の方がいらっしゃいますが、その方は何も物語りません。だから物怖じせずお出でなさい。私は蝶に、そこはとても遠いのと尋ねました。蝶は言いました、遠くではありません。でも回り道をする必要があります。そこの草むらに大きな黒い動物が横たわっていて、この動物は私[蝶]が飛び過ぎて行こうとしたとき、ぱくと残忍に私に食いつこうとしました。これは哀れな書評家の犬のことなのです。それから蝶が言いました。私はその有毒な雲も避けなければなりません、辺りに漂っていて、私の可愛い羽根を全く黒ずんだものにしてしまいます、と。これはヴィンマー叔父さんの葉巻の煙のことなのです。 —

私は突然とても小さくなって、その美しく黄色の蝶が私を全く軽々と背中に乗せて、運んで行きました。ブナの木の所のあの薔薇の茂みまでです。そこは女王の許で、とても可愛らしい高貴な社交場となっていました。ぶつくさ言う邪険な、老ブレネッセル[イラクサ]殿がいて、誰もが彼を避けていました。太ったヒナゲシ夫人は、すぐ可愛い女王の背後に立っていました。『エリーゼお嬢さん』と女王は言いました、『貴女と知り合いになれて、とても嬉しく思います。下であの憎たらしい煙を吐いているのは、貴女の叔父さんですか』。 — 『違います』と私は言いました、『町から追放された博士叔父さんです。この人は色々な本を執筆していて、不作法なことをし、余りに沢山の下手な字、誤字を書いたのです』。 — 『そうか色々な本を執筆するのか。それではいつか私は訪ねてみよう』と利口なブレネッセル[イラクサ]殿は邪険に言いました、...

「おやまあ」と博士はここで笑った。半ばリーゼの夢に怒っていて、起き上がるために、背後に手を伸ばした。「いや、忌々しい」と彼は突然叫んだ。彼は本当に手でイラクサの茂みに掴みかかっていた。

我々は心から笑った。ただリースヘンだけは全く真面目に言った、「ほらね、ヴィンマー叔父さん、彼はイラクサだったのです」。それから彼女は続けた。

「そこで私どもはとても可愛らしい食器でお茶を飲みました。(ヴァハホルダー叔父さん、もう一個バターパンを頂戴)。そして各々、春や夏、あるいは秋について素敵なお話しをしました。でも冬については誰も話さなかった。 — 冬は皆眠ります。そのときいつも教師殿の朗読が聞こえました。するとブレネッセル殿がぶつくさ言うのです。ブレネッセル殿は冬について話したがっていた唯一の者です。でもその話しは好まれません。

— 突然ローダー殿が朗読を中止しました。すると私はまた、あなた、ヴァハホルダー叔父さんの許、草の中に横たわっていて、書評家の犬が私の顔の間近で、その黒い鼻を草の茎の間に突っ込み、そして私を大きな目で見つめました。これを私は見たのです、 — これは素敵でしょう。そこでローダーさん、 — 今一度先生のお話しを聞かせてください、 — お願いします」。

「有り難よ」と教師は笑って言った、「利口なブレネッセル [イラクサ]殿は全く正しい。こうなると私にも分かる。私のお話しは少しも素敵ではない」。

いかほど長く、我々は、緑の草や柔らかな苔の中において、夢想し、物語っていたのであ

ろう。 — すでに太陽は再び青い天で傾いている。博士は今日のうちにも森を通して、次の鉄道駅まで行く必要があるのではないか。 — さあ、リーゼ、書評家の犬の黒い毛皮に最後の花輪を巻いてやれ。そなたらの品の何一つ残すのではないぞ。進め。 — 狭く、影の多い森の小道は今や林の中を通過して行き、ようやく大きな街道上の馬車の回転音が聞こえて来、最後に幹の間から白い条光の微光が見える。聞き給え、バイオリンとホルンの音楽だ。国道沿いの森の最中の白馬亭でダンスがあるのだ。玄関は木の葉花輪で飾られている。町の住民、田舎の住民が、その館の前や中、屋内、庭園に詰めかけている。我々はそれでも影になった園亭を占拠して、博士はその本領を発揮する。今や彼は上の広間にて、陽気にピチピチした田舎娘や、町からの小柄な青白いお針子の間を飛び回っていて、九柱戯をしている者達の間で、上等の機知で甲高い笑い声を引き起こすかと思うと、再び彼はまた我々の許にいたりする。上着を脱いで、熱く火照っており、息切れしたり、扇いだりしている。博士がどこに行こうと、プードルはどこへでも付いて行く。上の広間で狂ったように踊り手の間を跳ねているかと思うと、その主人同様、町から追放されて、その湿った鼻面を我らのテーブルの下から突き出している。

ますます深く太陽は沈んで行く。博士よ、博士、我々は別れなければならない。

そして博士はまた上着を着て、旅行カバンを掛けた。我々は皆立ち上がった。

「では、あなたとは本当にお別れの、ヴィンマー叔父さん」とエリーゼが泣き声で尋ねる。

「そうだね、愛しい娘っ子」とこの奇妙な人間は突然真面目に言った。彼はこの小さな娘を持ち上げた。娘は今回逆らわず、自ら心のこもった接吻をした。

「リースヘン、時々プードルや私のことを思い出してくれるかい」。

「大丈夫、きっとそうします」とリースヘンは嗚咽した。「そして私は手紙も書きます、それでプードルも、 — いや、あなたも手紙を書いてね」。博士はその娘を丁寧にまた椅子の上に置いた。「さようなら、ヴァハホルダー」と彼は言った、「さらば、ローダー、昔からの友よ」。

プードルは全く当惑して、その真面目な主人の方から我々の方を見つめ、また見返した。何か全くいつもと違うと感じていよう。

「諸君、達者でな。楽しい再会の時を期すことにしよう。諸君、書評家の犬、前進だ」と博士は叫んで、庭園の生垣と国道の溝を越え、そして振り返らず森の方へ駆けた。森の縁で彼は今一度立ち止まって、帽子を振った。

「兄弟ノ印ニ」と教師は、彼に一杯のグラスで合図して、叫んだ。「ミュンヘンの従姉妹、可愛いナネちゃんによろしく」。

「オ誓イ申ス」と博士は叫び返し、茂みの背後に消えた。書評家の犬はまだ森の縁に立っていて、我々の方を眺め、短い雄叫びを發した。

今やこの犬も消えた。

我々はまだしばらく静かにそのまま座っていた。

「実直な古参の若衆に幸運のあらんことを」と教師は思わず発していた。一台の乗合馬車が丁度町の方へ出発しようとしていた。我々はこちらにまだ何の用があろう。我々は席を確保し、乗り込んだ。

埃っぽい国道を下って、今や大都会への帰還である。詰め込まれた車内にすべての年代

や性別の楽しげな顔が見える。太陽は何と華麗に沈むことか。さらば、汝、美しい森よ、さらば、汝、昔からの友、ヴィンマーよ。 —

すでに我々は公園地帯に来ていた。何と日曜日らしくおめかしした多くの人々が今なお流入、流出していることか。我々は市門の前の空き地で下りた。町を通過して、我々の雀路地までの道を、我々はまだ歩いて帰れよう。

丁度黄昏れたとき、我々は着いた。ほら、マルタ婆やが編み物をしながら、ドアの許に立っている。彼女が我々を見つけた。

「今晚は、今晚は」。

「あら、マルタ、素敵だったわ。 — それに、 — 博士叔父さんが去ったの」と小さなエリーゼは疲れた声で言った。教師も今やお休みと言い、自分の孤独な部屋へ戻って行った。これから労多し長い、仕事の一週間が待っている。

これは今こちらの荒涼たる寒い冬の夜、私が書き留めた森の中の夏の一日である。

一月二十五日

極端に寒さが募った。雀路地で突き出されている鼻は少ない。鼻は突き出すと、赤色と青色を帯びる。冬は何という芸術家か。冬には雀は黄色になり、冬に自由なドイツ人は叫ぶ。我が家は我が砦、と[イギリスの諺]。

このような事情であれば、年代記作家としては、自分の家を単に唯一、自分のスケッチの対象として、外部の大世界、一般的な路地の歴史を、その欲するまま放置するよりましなことが考えられようか。

[エホヴァの]恵みの一六一九年に人々はローマで[トゥールーズの間違い]で一人の無神論者、ユーリウス・ツェーザル[カエサル]・ヴァニーニ[1585-1619]と呼ばれる者を火刑にしたが、彼は火刑台に立って、丸太の間に一本の麦わら[人知では作成出来ない巧妙な自然]を置いて、微笑して言った。「私がたとえ神の存在を否認しようと、この麦わらはその存在を証明することだろう」と。 — ある家の歴史は、その住民達の歴史である。その住民達の歴史は、その住民達が生きて、生き続けた時代の歴史である。この諸時代の歴史は人類の歴史であり、人類の歴史は、 — 神の歴史である。これは我々をどこへ導くか。我々は素早く振り返って、階段を下りて、最も下の階へ行こう。

すると家の亭主であった、指物師親方ヴェルナーの以前の部屋に、白髪背の曲がった夫人が暖炉の背後、肘掛け椅子に座っていて、朝から晩まで糸を紡いでいる。これはこちらの主婦の老いた母親で、この家の建設者の娘である。彼女は礎石が置かれるとき、そして破風の先端に宝珠が据えられるとき、目撃しており、この家と共に、この歴史と共に育って来ている。

彼女はその生涯の長い歴史の中、幾多の死体が運び出されるのを見て来た。彼女の両親、すべての彼女の兄弟姉妹、彼女の夫、一人を除く彼女の子供を見送っており、除く一人はアンナ、今の所有者の妻である。彼女はマリーの棺、それにフランツの棺の飾り付けの手伝いをした。彼女は彼女の女友達、我がマルタ婆やを見送って、ヨハニス教会墓地まで足を運んだ。マルタ婆やはそこで自分の女主人の側に埋葬された。屋根裏部屋から地下室の至るまで、彼女は幾多の他の人々を見送った。

以前彼女は路地で最も美しい娘であった、 — 彼女は今でも最も美しい老夫人である、

一 そして家の宝珠が閉ざされることになり、当時数多くいた家族の一人一人が思い出の品を入れることになったとき、彼女は赤面して、こっそりと小さな紙片を添えた。それは遠い国から寄せられたもので、その上書きにはこう記されていた。

「この小さな書簡は最愛の女性の
愛の心の許に届けられる」
そして結ばれていた。

「...更に我が最愛の女性に挨拶と接吻を送り、春には燕達と共にやって来て、我が至宝の女性と喜びの結婚式を挙行したいと念じ、至宝の女性に思慕を添えて挨拶し、接吻します。

衷心より愛する

ゴットフリート・カルステン

指物師職人」

しばしば風が古い風見を軋ませ、回転させると、多分彼女は宝珠のこの紙片を下の方で思い出し、夫を思い出したかもしれない。夫はこの紙片を書いた人で、今や彼もすでにとうに亡くなっており、埋葬されているのである。

しかしまた何と多くの子供ベッドにこの老マルガレーテ・カルステンと呼ばれて、何と多くの若い命が雀路地のこの七番地の家で花咲くのを見たことであろう。

彼女ほどに多くの揺り籠の歌を知っている人がいようか。彼女ほどに「昔々あるところに」で始まって、誰かが釘やマムシの詰められた一つの樽の中に入れられて、山から下に転がされる結末になるお伽噺を知っている人がいようか。家の中で他に誰が、どんな日中時間でもお話しに耳を澄まして、呻る糸車を見守る子供達を、そして夕方黄昏が募ると、ますます密集して大きな肘掛け椅子に詰め寄る子供達を周りに有していたであろうか。何としばしば、私は以前、そこに小さなエリーゼが敬虔に聞き入って、書評家の犬と一緒に彼女の側にいるのを見いだしたことか。そして何としばしば、エリーゼを連れ戻すという最良の意図でやって来ながら、私自身が座り込んで、あるお話しの結末を待っていて、とうとう最後にはマルタ婆やまで下りて来て、我々もまたプードルを連れ戻しにヨッヘンを送り出したその主人とほとんど変わらない具合であったことか。

勿論今日私は、小さなエリーゼが肘掛け椅子の側の足置台に座っているのを見ないし、我々兩人を連れ戻しにマルタ婆やももはや下りて来ない。しかし先の秋の半ば以降、十分頻繁に一人の別の若者と出会う。この別人は我らの友にして、隣人の、戯画素描家シュトロローベルに他ならない。親方と職人の工房であれ、主婦のキッチンであれ、至る所でこの素描家は歓迎される客人である。彼は職人達をその立派な恋人達のためにスケッチするし、親方とは政治談義をし、親方夫人とは新しい料理の製造を伝授する。一 彼はその文庫に厚い料理本を有するのである。一 そして祖母の話しに 一 彼は耳を傾ける。

それで私は今晚、借用した竊鍋をまた返しに下りて来たとき、彼に出会った。仕事仕舞いの夕べであったので、家族全員が部屋に集まっていて、素描家はすべての会話材料を取りそろえていて、その中を幸せに喋って回っていた。

「...それでは、親方」と私が入ったとき、彼は言った。「そのときどちらが殴られたと思いますか」。

「ロシア人ではないな」と少し間を置いて、慎重に親方が答えた。親方は鼻に眼鏡を乗せて、新聞をより良く見ようと、明かりの背後にかざしていた。

「それでは同盟軍の方ですか」。

親方は[嗅ぎ煙草を]一つまみした。彼の記憶は単に[ナポレオンとの]解放戦争までであったので、彼は不思議そうに見上げた。それも有り得ないように見えた。しかし彼は突然こう思い付いた。

「いやはや、フランス人が参戦するわけだ」と彼は叫んで、「何てことだ。突然すべてが逆転してしまう」。

「その通りです、親方」と素描家は言った、指物師親方の肩を叩いていた。「その通りです。世のすべてが、時々逆転します」。

「親方夫人、ジャガイモが焦げています」と見習のアントンが政治の話しを中断させた。

「すぐに行くとしよう」とシュトロローベルが笑って、叫んだ。 — 「親方夫人、私も行きます。子供達も一緒だ。前進、進め、少年よ、大志で急げ。ここから、 — キッチンへ」。

かくてジャガイモは救出されて、親方はその新聞を更に念入りに読み、隅の方でいつものように糸車がぶんぶん呻った。ようやくシュトロローベルとアンナ夫人、子供達が戻って来て、老夫人が尋ねた。

「それではあのフランス人がまた来ているの。一八〇六年[1806年10月14日、イエナとアウエルシュテットでフランス勝利]にこちらへ来たフランス人と同じなの」。

「違います」とシュトロローベルは言った、「今のフランス人のズボンが赤い」。

「それでナポレオンは、 — あの人はどうに亡くなっていると思うけど」。

「その通りです、母上」と親方は、自分の新聞から目を上げて、言った。「別のナポレオンです」。

「まあ」と祖母は言った、「あの小柄で、黄色や黒服の民がこちらに来て、通りで妙な言葉を話していたのを思い出すと、中には帽子に大きな料理用スプーンを差し込んでいるのもいて、この家には八人来ていましたよ」。

シュトロローベルは、老夫人が彼にとって興味深い話しを始めるのを今耳にして、夫人の肘掛け椅子の側に床几を引き寄せて、言った。「お祖母さん、まだ早い時間です。私どもに更にこの八人について何か話してください。親方は新聞を読み出すと、気難しくなって敵わない。ヴァハホルダーさん、こちらへどうぞ。若い衆、席は自分で見つけて、口を閉じていなさい。お祖母さんに一八〇七年の八人のフランス人について話して貰いますから」。

老夫人は微笑して、自分の糸車をまた回し始めた。「このような学のある殿方らに私が話すのですか。この方々らは皆本を読んでらして、はるかにもっと良くご存じでしょう。それにこの八人すべてについて私は何も知りませんし」。

「お祖母さん、私は本で読んだものは、有り難や、すぐにまた忘れるのです」と素描家は言った、「たとえ貴女がこの八人すべてについては何もご存じなくても、その中の四人だけでも、あるいは貴女の話されたい数であっても、それで私どもは満足することでしょう。どうぞ話してください」。

「では、貴方がそう仰有るのであれば、まあ考えてみましょう。 — よろしい」。

そうですね、一八〇六年の、あのフランス人が国中で騒ぎ立てて、この国に恐ろしいことに宿営することになった年のことです。フランス人が戦いで大きな勝利を得て、その権利があると思ったからなのです。人々は皆恐がって、自分達のスプーンを棄てて隠し、子供達の上着の裾には、それぞれ一枚の金貨を縫い付けたものです。子供達が行方不明になったり、連れ去られたりした場合に備えてのことです。でも私の亡き連れ合いは、そんなことには馬耳東風でした。 — 『奴等が来たら、奴等がいるだけだ』 — と言って、その主張を変えず、隣人達がやって来て、嘆き、めそめそ言っても、夫はただこう言うだけでした。『我らの番もあれば、彼らの番もある』。そして人々が夫の耳に余りに甲高く叫ぶと、彼は白いナイトキャップを、これはその頃、私が妙なことと思ったことにいつもそのポケットに入れていたものですが、これを耳の上まで被せて、眠り込んでいる振りをしました。アンヘン、あなたの父親はいつも風変わりな連れ合いでしたよ。

それでですね。ある朝、一騒動起きました。彼らがやって来たのです。神様、私は膝ががくがくしました。私の息子達は（神様、安らかな眠りを給え）どこの路地にいるのか分かりません。私にはただアンヘンが揺籠にいるだけです。私の夫はまたナイトキャップを取り出して、耳まで覆って、中庭で鋸引きです。

『ゴットフリート、ゴットフリート』と私は叫びます、『彼らがやって来るのよ、彼らがやって来るのよ』。夫は、私がすぐ側に立っているのに、何も聞こえないかのような振りをしていました。私は不安になり、また怒りも湧いて、夫のつまらぬ帽子を剥ぎ取って、それを地面に投げ、また叫びました。『息子達は通りにいるのよ、 — 神様、仏様、 — それに私どものスプーンはどこに、 — ねえ、 — ねえ』。

夫は全く平静に自分のキャップを持ち上げて、鋸屑を私の服で叩き払って、また平静にキャップを被って、言いました。『そうだな、 — それならば、彼らは多分水門を通って来るだろう。イエナからの道はそこに通じている』。そんなことを言ったように思いません。それからまた夫は鋸引きをしました。

その通りです。すでに水門からの長い道を下って、太鼓の音が聞こえて来ます。 — 私の心臓は更に一層震えました。 —

『カルステン親方、カルステン親方。急いで、急いで』、と突然何人かの隣人達が叫びました。最良の晴れ着を着て、中庭に駆け込んで来ます。『貴殿も行こう、貴殿も一緒に、フランスの将軍の出先司令部に行こう』。

『そうかい』と私のゴットフリートは言いました。鋸を置いて、ゆっくりと家の中に入り、隣人達が付いて行きます。書記のシュライバー殿、参事官のプステバック殿、煙突掃除人のブラハドルフ、鍛冶屋のプルスター、その他です。皆、私の夫と一緒に部屋の中へ入りました。人々は夫もすぐに礼服を着て、一緒に駆けつけるだろうと考えたのです。でも御折角様です。私の夫は煙草箱の所へ行き、パイプに詰めて、ゆっくりと点火して、言いました。

『それでは、行きますか、皆の衆』。

人々は皆、口を開けて、立っていました。しかし私のゴットフリートは迷いません。ナイトガウンとスリッパ姿で、彼は平静に、 — 私は今日でもその姿が目には浮かびます、 — 先頭に立って、次の通りの角まで行軍しました。そこで彼は立ち止まり、隣人達が彼の周りに立ち止まると、彼はパイプの先で一枚の紙片を示しました。そこに貼り付けられ

ていたもので、こう記されていました。

平静にすることが市民の第一の義務である。

とか何とかで、 — 私は忘れてしまいました、 — 夫はパイプの蓋を閉ざして、ゆっくりと向きを変えて、家に戻りました。夫は私の二人の息子達を連れて来て、私はとても嬉しかった。『ほら、お母さん』と夫は、二人をドアの中に押し込んで、言いました、『二人を上げなさい』、そして夫は言ったのです、『いつか二人が必要になろう』と。

これがどういう意味か、当時私には分からなかった。後にそのことが分かりました。

この時、老夫人の目から涙がこぼれ落ちた。そして夫人の糸車は軋むのを止めた。部屋はひっそりと静寂に包まれた。

「そうです。この時から、私の亡き連れ合いはもはや外部のことを何も気にしなくなりました。再び鋸台に向かって、宿営者達が来るまで、鋸引きを続けました。それからまあ、何てことでしょう。夫の変わりようには目を疑います。家中が天手古舞いです。キッチンや地下室にある最良のものが食卓に出されました。小柄の黄色いフランスの男らが、法螺を吹き、悪態を付けば、私の老いた連れ合いは一層上機嫌になりました。

『これはまっとうな輩だ』と夫はいつも叫んで、両手を揉んでいました、『こんなでなければならん。こんな輩ばかりだと良いのだが』。

夫は遍歴時代に少しばかりフランス語を習い覚えていました。それで直に夫はフランス人と互いに最良の友となって、親しくため口をきいて、近隣の人々からしっかりとしかめ面をされていました。しかし近隣の人達は全ての出先司令部へ赴き、その家々を飾光や花輪で飾り、それで、 — そんなことをしない私のゴットフリートは、町の参事官を見ると、その度に実直にナイトキャップを耳たぶまで被るものでした。いいですか。それで、その中に、ドイツ語を半分、フランス語を半分話す地方出身者が一人混じっていて、この人なら私も理解できました。これがとても上手く行って、あたかも私はフランス語が出来るように思えたものです。何が起きたでしょう。或る晩フランス人が皆一緒に座っていました。私の連れ合いもその中にいて、皆てんでに話して、目は盲、耳は聾状態でした。私は隅に座って、編み物をし、息子達は隅の方で遊んでいます。私の夫が突然このドイツ語フランス人に語りかけました。『それで、戦友よ、言ってくれ。諸君らは一体まだドイツにどれほどいるつもりなのか』。

このドイツ語フランス人は他のフランス人達と頭をつき合わせました。彼らはフランス語で何か喋っています。それから喉全体で笑いました。

『永住するぞ』とこのドイツ語フランス人は言いました、『我らは一度居座ったら、二度と出て行かない』。

『その通り』と他の人々は叫んで、腹を抱えています、『出て行かない、出て行かない』。

『ずっと』と私の連れ合いは言います、『出て行かないのか。確かに貴方らは来ていて、我らも主に、貴方らを主が遣わしたことに感謝しているが、しかしずっとだと、 —』

『出て行かない、出て行かない』とフランス人達は叫びます。

『交渉させてくれ』と私の連れ合いは言いました、『私は十二年を提案しよう、 — せいぜいだ』。

『出て行かない、出て行かない』と彼らはまたはやし立てます。

『ヴィレム[ヴィルヘルム]、ルートヴィヒ、こちらへ来てみなさい』と今や私の夫は息子達に呼びかけました。二人はすぐに飛んで行き、彼の膝の所に立ちました。

『気を付け』と私の夫は叫びました、『頭右[右を見よ]。息子達よ、そこにフランス人がいるのが見えるだろう。彼らは本来、この我らの部屋の住人ではない。小さなアンヘンは彼らの騒動で眠れやしない。 — それでも、ずっとここに留まる気なのだ、息子達よ。

— おまえらが十分に強かったら、何と言うかな』。

私の息子達はまことに不思議そうに目で覗いていて、フランスの男達を見つめ、それから自分達、それから私の夫と見つめました。

『それは勿論、 — 私が大きくなったら、 — 私はもうプステバックのテーオドルに負けないし』、と私の次男のヴィレムは言いました。私の長男のルートヴィヒは全く何も言わずに、しかし突然大粒の涙が頬から流れて、父親が長男の肩を叩いて言いました。

『少年、まあ待っておけ、まずおまえからだ』。

フランス人達は異教徒風の歓声を上げていて、或る男は、 — フランス人達はこの男をピエールとか何とか呼んでいましたが、 — 笑い転げていました。でも私の連れ合いはとても真剣になっていて、その晩は一晩中もはや一言も話さなかったのです。何週間か経って、フランス人達が去って行きましたが、彼らは私ども皆と握手して、きちんと良き接待に対し感謝を述べて去る際にも笑っていました。

『出て行かない、出て行かない』。

『思い知ることだろう』と私の夫は言いました、『思い知ることだろう』と私の二人の息子達も叫びました。

それで、さて長年経って、毎回別なフランス人達がやって来ました。

『もう十分だ』と私のゴットフリートは呟きました。そしてあるとき彼らは皆、上の北の方へ出掛けて行って、誰も戻って来なかったものです。それから突然、国中で騒動が始まって、通りの角には全く別の紙片が掲示され、私の連れ合いはそれを毎度読んで頭を頷いていました。夫はその時分、余り家にはいなかった。

すると夫は或る日戻って来て、工房からルートヴィヒを呼び、二人揃って、キッチン私の所に来ました。

『ほら、お母さん』と私のゴットフリートは言いました、『そなたの竈に火があるのは、結構なことだ。気を付け、ルートヘン』。そう言って、私の連れ合いは自分のナイトキャップをポケットから取り出して、それを私の鍋の下に投げ、キャップはくすぶって、家中が煙だらけになりました。それから夫はルートヴィヒと一緒に去って、そして一人っきりで帰って来て、また物静かになりました。

翌朝、黒い騎士達の一団が町へやって来て、 — これも水門を経由していました。一人の騎士が馬に乗って、こちらの雀路地の我が家まで来て、馬から下り、 — 私は心臓が膝に沈む思いで、 — それは私のルートヴィヒだったのです。

『母さん、さようなら、父さん、さようなら』と彼は叫びました、 — 『神の御加護のあらんことを』、 — そして他の方々を追って、騎乗して行きました。他の方々はすでに緑の市門を通過していました。

『フランスへ行くのだ、お母さん』と私の夫は叫びました。私は嘆いて、吠えていました。でもまだそれほどひどいものではなかった。

長いこと、何の連絡もなかったのですが、ある日町中の鐘が鳴って、人々が言うには、国中の鐘も鳴りました。大きな戦争があって、私どもの方は勝って、そして私のルートヴィヒは — 亡くなったのでした。

『まず長男だ』と私の連れ合いは言いました。

再び一年が経って、あるとき砲撃が大変間近であって、人々は市門の前まで走って、それを確かめに行きました。勿論私のゴットフリートも私も一緒です。やがてごろごろ鳴っている一帯から、敵、味方入り乱れて、負傷者を乗せた馬車がやって来て、ますます増えて行きます。これらは皆、町へ運ばれました。

『おや、びっくり』と私は突然叫ばざるを得なかった、『あれは以前、一八〇六年のピエールじゃない』。

その通り、彼でした。脚を撃ち抜かれて、彼は麦わらの上に横たわっていて、全く情けない声でめそめそしています。『奴を連れて行こう』と私の連れ合いは言って、彼を貰い受け、私どもは彼をこちらの家まで連れて来ました。 — 貴方の部屋です、ヴァハホルダーさん。そこで私どもは彼の治療をしました。彼が快方に向かうと、夫はよく彼とお喋りしました。あるときはこのフランス人が威勢良くて、あるときは私の夫です。突然こういう話しになりました。ドイツ人はまた負けて、もう一度ナポレオンが勝った、と。私の夫はヴィレムをあたかも自問自答しているかのように、憂わしげに見つめていました。夜、警報がすべての村々で鳴ったとき、私はこの先どうなるか分かりました。そして一晩中泣き、翌朝果たして私のヴィレムも緑服の狙撃兵と一緒に徒歩で向かって行きました。そしてミーンヘン・シュミットは、彼女は老いた母親と一緒に向こうの貴方の部屋に住んでいたのですが、シュトローベルさん、やはり泣いていて、ハンカチを振ってくれました。私の連れ合いはその前に、彼をこのフランス人のベッドへ連れて行き、言ったのです。『こちらは次男だ』。 — このフランス人は全く珍しそうに見つめていて、憤然となりましたが、何も言わず、壁の方を向いてしまいました。

砲撃がかくも間近なことは二度となく、ヴィレムは、何千人もが亡くなったけれども、

しかし彼は死ななかつた大きな戦闘について手紙を寄越しました。そして手紙はますます遠方になって行き、一度全くフランスの名前ばかりになりました。この手紙を私の連れ合いは上のフランス人の許に持って行きました。このフランス人は今や全く上手にドイツ語が出来、それで夫は笑いながらこのフランス人に言いました。『それで、おいちゃんよ、出て行かないか、出て行かないか』。するとフランス人はとても情けない顔をして、この手紙を手にとって、言いました。『これ、私、故郷の地。ここに私の父、私の母、住んでいる』と。しかし私の連れ合いはベッドの縁に座って、指で計算しました。『一、二、四、

— 八、八年だ。フランス人のおいちゃんよ、何故貴殿らは昔、私の言う十二年を取らなかったのだ』。

私どものヴィレムからの手紙は届くのがますます稀になって来て、あるとき、全く途絶えてしまいました。そして或る日、 — 私の連れ合いは家に戻って来て、テーブルの許に腰掛け、頭を両腕に乗せ、 — 泣きました。私は天が私の上で崩れるのを感じました、 — — — 連れ合いが、泣くなんて。

『次男だ』と私の連れ合いは自らに呻き声を吐いていました。私は床に崩れ落ちました。偉大なフランス人の町、パリの前には一つの山があるに違いありません、 — 私はそ

の名前をきちんと発音できません[モンマルトル、1814年3月30日、プロイセンとロシア軍侵攻]、

— そこからこの町を一望出来るそうです。そこで最後の撃ち合いが行われて、そのときヴィレムも胸に弾を受けたと、戦友の方が書いて来ました。そして多くのドイツ出身の、沢山の他の人達と一緒に彼は埋葬されたのです。— これが私のお話しです。でも私どもはこのフランス人を治療しました。私の連れ合いは彼に路銀を渡して、彼をフランスまで通じている道の市門まで連れて行きました。私の息子達も通って行った道です。夫は足を引きずって行くこのフランス人を見送り、またこう呟きながら家に戻って来ました。『出て行かない、出て行かない』。— 神様、夫に安らかな眠りを給え、アンヘン、あなたの父親は、風変わりな方でしたよ』。

そのように老マルガレーテ・カルステンは話した。そして、我々は皆、彼女が話し終えた後、各人各様の物思いに耽って、彼女の周りに座っていた。親方はどうにその新聞を脇に置いていて、職人達も、段々に入室して来ていて、普段はかなり陽気で、甲高いのであるが、今回は全く物静かに周囲にたむろしていた。

「それではもう少し話すことにしましょう」と老夫人は突然叫んだ。その目は、思い出しが蘇って、奇妙な輝きを帯びていた。「その後長く経ってから起きたこと、でもそのことと関係のあることを話すことにしましょう。— 窓ガラスがそれほど凍てついていなかったら、皆さんは新しいゾフィー教会の塔を目にすることが出来ましょう。これは古いゾフィー教会が焼け落ちてから建てられたものです。古い教会には、壁に一枚の黒板が掛けられていて、その黒板にはこの街区出身のフランス戦役戦没者の名前が記されていて、その中に私の二人の息子もありました。ルートヴィヒ・フリードリヒ・カール・カルステンとヴィルヘルム・ヨハネス・アルベルト・カルステンです。その黒板は私どもの教会椅子の丁度向かい側にありました。日曜日には、私どもはいつもそれを見つめて、私どもの健気な若者を偲びました。私の連れ合いはこの黒板が誇りで、私もそうでした。たとえ私がそのことで十分に泣いていて、今でも泣いているとしても、誇りに思っていました。でも私のゴットフリートはそうではなかった。あるとき、夫はそれを見つめることをせず、その黒板を見過ごすのです。私どもが自分らの席に座っても、彼の視線はその上に落ちることもありますが、素早く目を逸らしたり、床を見たり、私には分からないことを何か口ごもったりしました。

そうです、或る日の夕方頃、恐ろしい雷雨が町を襲いました。雷が鳴り、絶えず稲光りし、突然こう噂されました、ゾフィー教会に雷が落ちた、と。— その通りです、— 教会が炎々と燃えています。私の連れ合いは、いつもこのようなとき、決まって先頭に駆けつけますが、今回は手も足も働かせず、それにどうしようもなかったことでしょう、夫は私を腕の下に抱いていて、私どもは群衆の間に立っていて、見守っていました。突然、塔が松明のようになって、左右に揺れ、それから下の方へ、教会の屋根の上に物音高く崩れ落ち、人々や馬はくずおれて、私も同じでした。しかし私の連れ合いは真っ直ぐに立ったままで、回れ右をし、私を家へ連れて帰りました。私どもが部屋に入ると、夫は一晩中、行き来して、突然私の前で立ち止まってこう言いました。

『お母さん、有り難いことに、黒板が焼け落ちた、お母さん、もはや黒板を見つめられなかったのだ、— お休み、お母さん』。— 私は、彼の言うことがさっぱり分からず、一体どういうことか、夫に尋ねました。しかし夫はただ頭を振って、ベッドに就きま

した。私もそうすることにしましょう。私の亜麻も終わりです。お休みなさい、旦那様方、お休みなさい、若い方、一 行きましょう、アネッヘン[アンヘン、アンナ]、一 こう言って、老夫人は起き上がって、その杖と娘の腕にすがって出て行き、自分の小さな寝室に向かった。鉄の心の老ゴットフリートについて、二人の撃ち抜かれた解放戦士の息子達について更に夢を紡ぐためであった。戯画素描家は今晚もはや機知を飛ばさず、親方は火の消えたパイプを口にしたままであった。誰もその席から動く勇気がないかのようにであった。すぐにドアが開いて、強靱な老公が黒服の騎士と緑服の狙撃兵とを脇に従えて入ってくるかに思えた。その一方はオーダー河畔で、もう一方はパリのすぐ手前、モンマルトルに埋葬されているのである。

「何故カルステン親方がもはや黒板を見ておれなかったのか、私には分かる」と突然、声量豊かな男の声が叫んだ。それで皆がほとんど驚愕して見上げた。それは古参の職人、ルドルフで、彼はその隅で立ち上がっていた。

「私も分かる」とベルンハルト、二番目の職人が、その同僚の肩に手を置きながら、叫んだ。

「私もだ」とシュトロベールは飛び上がって、叫んだ、「後何人分かっているかな」。

「私もだ」と親方が叫んだ、「私も」と私は言った。そして、それから 一 一 親方夫人がじゃがいもを持ってやって来た。

二月十日

そして再び私は年代記のために一枚の紙片に上書きする。

エリーゼ

我々は歓声を上げたり、疑ったり、また多分に、小さな痛みや台無しになった喜びについて泣いたりしたことであろう。一 歳月の移り変わりに応じて。

今や木蔭はしっかりした影の多い緑の植込みを形成した。赤色や青色の蠟人形を小さな娘の手はこの木蔭植込みの間に飾って掛けていた。再び室内ではおとなしいカナリアが飛び回っていて、私の諸本や原稿から、窓辺の可愛い丸い肩とか、招くように差し出される優しい指に向かっている。一 エリーゼは今やこの年代記の頁では、十三歳になっている。しばしば陽気な陽光がこの葉叢の作品に差し込むと、多分に炎[ほむら]ちゃん、一 そう新しい小さなカナリアの友は呼ばれるが、一 楽しげにさえずり、その小さな頭を、きらきらする炭のように黒い目と共に何度か左右に振り回し、それから開いた窓から外に舞い飛ぶ。一瞬この小鳥は陽光の中の黄金の点のようにあちこち揺れて輝き、それから向かい側の家並みへ舞って行き、十二番地の中階の或る窓の中へ消える。そこからこのカナリアは連れて来られたのであって、そこでもこの小鳥は小さな真鍮の鳥籠を所有している。

新しい顔が浮かんで来て、新しい糸が不思議なことに我らの人生に絡み合い、かくて今日、この雨の多い、風の強い二月の日にこれらの頁とも絡み合う。

死んだものが、蘇り、呪詛であったものが、祝福となる。父祖の罪は、子供達の、第三代目や第四代目で悪さをする事はない。[『出エジプト記』20,5の逆]。

一つの明るい、元気な声が、下の家の中で響く。或る軽快な足取りが階段を上がって来る。一 エリーゼは聞き耳を立てる。数分して、突然外部で物騒な物音がする。マルタ

婆やの声が聞こえる。嘆いた、苛立った声だ。彼だ、一 路地の悪ガキだ。

ドアが半分開けられ、中を一人の高笑いの、芯から元気な、無数の雀斑のある少年の顔が覗いている。

「グスタフか、またどうした」。

「いや、何でもありません」とこの悪太郎は言う。口を耳許まで引き上げ、にんまりしている。一方マルタは外で、情けない声でエリーゼを呼んでいる。「また彼、何をやらかしたの」とエリーゼは飛び上がって、外に出ながら言う。甲高い笑い声が生じ、エリーゼが外で腹から吹き出しているのが私の耳に聞こえ、私は、自分の本から起き上がって覗かざるを得ない。するとグスタフは全く正直にベッカー[1777-1806]の世界史一卷に没頭していたように見える。私は出来るだけごく厳粛な顔をして、外に踏み出す。何という光景を目にしたことか。

善良な老婆は、多分昼の休憩に入っていて、膝に編み物道具を置いて、眠り込んでいたのであろう。この悪ガキは、この好都合な瞬間を見逃すはずもなく、ひょっとしたら立派な心がけで階段を上がろうとしていたかもしれないが、この瞬間を利用したのであろう。

この不幸な老婆はその椅子に縛られていて。ハンカチや荷造り紐、編み物道具の撚り糸、要するに考えられる限りの捕縛材が利用され、老婆は動けず、動作不能になっていた。彼女の、その上とても可愛く覆われた小さな卓には、一 牛乳の入った大きなボールがあって、これは多分最も大事な料理目的のためであったろうが、このボールの周りに輪状に、啜りながら、味わいながら、この家のすべての猫どもが集まっていて、時々嘲のような視線を肘掛け椅子に投げかけていた。このとき捕縛されたキッチンの女暴君は、地団駄踏んで脅していたが、まことタンタロスの苦しみ[飢渴の呵責]を味わっていた。

「リースヘン、一 猫どもを追い払って、一 」(エリーゼは笑う余り、力が全く抜けて、息も吐かず床几に座っていた)「ならず者、一 でも、ヴァハホルダーさん、猫どもを追い払ってくださいよ、一 何も残らない、一 私の大事な牛乳が、一 あの悪漢」。いや、あの悪漢は、一 この悲喜劇が終わって、この張本人を見回したとき、どこにいたか。勿論、ベッカーの世界史一卷はまだ開かれていた、しかしグスタフは、一 どこにも痕跡がなかった。

このグスタフとは誰か。

これは或る男の孫で、その名前はすでに一度、全く不気味にこの頁の中で呼ばれたことがあるもので、フリードリヒ・ゼーブルク伯爵の孫である。

一八四二年のことであった。向こう側の十二番地の住まいに、後にカナリアがその窓目がけてしばしば飛んで行くことになる住まいだが、黒い服の、青白い女性が越して来た。ヘレーネ・ベルクと名乗って、最近亡くなった医者未亡人であった。彼女は、我々がヨハニス教会墓地で小鳥の亡骸をフランツとマリーの墓塚の間近に埋葬した一八四一年の夏の夕べ、この年代記の頁で言及され、すでに我々の生活と遭遇したことがある女性であった。彼女は当時、幼いエリーゼに接吻した。しかし我々は互いに面識がなかった。一 彼女が跪いて、涙を流した墓石には、一 「ゲオルク・ベルク」と記されていた。そして狭くて、薄暗い雀路地の、向かい側、十二番地の貧しい住まいの中で、厄災に満ちた野蛮な歴史[話し]、昔、臨終の獵師が画家のフランツ・ラルフに語って聞かせたその歴

史[話し]の最後の弦が響き止むことになる。 — この歌は終わっただろうか。一人の若い、より一層楽しげな、孤児の娘が、この最後の音色を引き受けたのであって、そして「グスタフとエリーゼのベルク夫妻」として新しいメロディーを奏しよう。

ゼーブルク伯爵の誇り高い家からの最後の女性は、どのようにして私の側の小さな少女とのその運命の纏れ合いを知ることになったのか。 — 彼女の歴史を知ることになったのか。

かくもほとんど忘れられないし、埋葬できない厄災に被されている覆いを再び剥がすことを、私はほぼ恐れていた。

「ほら、素敵指輪でしょう」とあるとき、エリーゼは、我々の許に座っているヘレーネ夫人にかの指輪を見せながら言った。この指輪は、何年も何年も前に、老ブルヒハルトがウルフェルデンの森の飢餓池[雨期に消え、乾期に出現]で、亡きルイーゼの硬直した指から手から抜き取っていて、長年かの十字架を彫られた石の下に置かれていて、フォン・ゼーブルク伯爵の紋章を有しているものである。 — その後のことは私は書き記す必要はないだろう。 — — — 我々は当時そう速やかに別れなかった。一晩中、涙のヘレーネは小さなエリーゼをその両腕から離さず、グスタフ、 — 路地の悪ガキのグスタフは、自分の従姉妹に、彼なりのやり方で歓声を上げて挨拶した。

伯爵フリードリヒ・ゼーブルクは、長年、落ち着きなく遍歴した後、イタリアで一人の美しく、高貴な、しかし貧しいイタリア女性と結婚した。彼女はヘレーネの母親となり、彼女を産むとき、亡くなった。結婚生活の二年目であった。ギリシア人達は、神と人間界の断絶は、或る仲介のもの、つまり魔神的なもので埋められると考えていた。そこで、「全体が自らの中で結合されるべく」[1824年の辞典より]、精霊達が「沢山、多様に」漂い活躍することになり、神々の処罰し、褒賞する使者となり、誰もが自らの行為の責任を免れなくなった。これらの精霊が伯爵を迫害した。後悔と、落ち着きのなさ、人生反吐とこれらは呼ばれ、精霊達はすべての人生の歓喜に対し、殺害の手を添えた。再び伯爵はアルプスを越えて、ドイツへ越した。ゼーブルクの城は売却されていた。 — 彼はウィーンへ移った。その孤独な小さな家で、彼は人間を嫌って、陰気に暮らした。しばしば彼の娘は、夜、父の彼が家の中を歩き回るのを耳にしている。娘には知人の女性も、友人の女性もいない。彼女の母親の老いた召使いの女性だけが、唯一の付き合いの相手であった。そのようにしてこの娘は最初の娘時代をほとんど一人っきりで過ごした。一方彼女の父親はますます陰気になって行った。父親は娘に歌うこと、演奏することを禁じた。彼女は嘆息して、それに従った。すると或る朝、老ゼーブルク伯爵はベッドで死んで見つかった。誰一人、彼の最期の時に居合わせなかった。彼は、ヘレーネが父親のことを理解していたように、

— 孤独で、一人っきりで亡くなった。今や彼女も孤独で、見棄てられていた。彼女は大きな異郷の町での若い娘で、そこは娘には馴染みのない、誰も知る人のいない町であった。彼女の父親の遺産は、ウィーンに滞在している間に出来た借金を支払うにはほとんど足りない分かった。

時々、彼女の父親の家を訪れた少数の人の中に、ドクトル・ベルクがいた。もはや全く若いとは言えない男で、老伯爵の臨終の床に呼ばれて、伯爵の両目を閉じた後、この若い孤児の娘を引き取った唯一の男性であった。彼が彼女の財産関係を整理清算して、彼女を、同様にほとんど人間嫌いになっていたこの女性を、立派な人々の許、自分の老いた親

切な母親の許に連れて行った。彼は自分のすることすべてを単に自分の義務と見なしているように見えた。そして彼女にとって最初無関心な存在であった彼は、次第に彼女の好意を得て行った。そこで彼は彼女にプロポーズした。そしてヘレーネ・ゼーブルク伯爵令嬢は彼の自足した幸せな妻となり、やがて一人息子を生んで、更に幸せになった。息子はグスタフと名付けられた。しかし諸事情のため、一彼の母親も亡くなっていて、一ドクトル・ベルクはヴィーンを離れることになった。彼はこちらに越して来て、開業医となろうとした。丁度これが軌道に乗りそうに思えたとき、東側から壊滅的に襲来して来て、国中に致命傷を与えていた激しい疫病に彼も奪われてしまった。彼がその妻と息子とに残したのはほとんど無一文であった。ヨハニス教会墓地の、フランツとマリーのラルフ夫妻の墓から二十歩離れた地に彼は埋葬された。

これが、ヘレーネ・ベルク夫人が物語ったことであった。一方、ゼーブルク伯爵の紋章付きの指輪、蛇がルビーの周りがある指輪は、彼女の前のテーブルにあって、輝いていた。同じ晩のうちに、私はこの指輪をケーニツヒ橋まで持って行き、それを遠く奔流の中に投げ入れた。私はその前にこの指輪を二つの部分に割っていた。ヘレーネは私の側、手摺りに寄りかかっている、その後、我々は黙って雀路地、我々の子供の許へ戻って行った。

二つの住まいの間を行き来して、舞い飛び、向こうとこちらに住まいを有するこの小さな黄金色の小鳥は、可愛く、幸せな予兆ではなかろうか。しばしば小さな誠実な使者となって、その揺れる小さな首には重要な知らせ、質問や返答まで運んで往来するのである。

「ご覧、リーゼ、炎[ほむら]ちゃんはまた首に紙片を運んでいる。今度はあの悪太郎が、外でまだマルタ婆やがぶつくさ嘆いている相手だが、どこに潜んでいるか分かることだろう」。

さえずりながら、炎[ほむら]ちゃんはエリーゼの手の上に飛び乗った。小鳥から紙片を彼女が取ると、斜線の長い少年らしい筆跡はこう告げていた。

「リーゼよ、

私は、明日にもなっていないのに、おまえさんの許に姿を現す度胸はないし、その上残念ながら（おぞましい）、三頁、まこと三頁だよ、ラテン語のナンセンスを翻訳させられている。（私は、何故画家たる者が、私は画家志望だ、ラテン語を必要とするのか、さっぱり分からん、何故だ?????）それでおまえに頼むが、叔父さんを（この手紙を叔父さんに見せる必要はない）私がマルタ婆やをそうしたように、同じように肘掛け椅子に縛って、出来るだけ早くドアの前に姿を見せて欲しい。一 おまえに何か大事なことを言うつもりなのだ。

グスタフ

追伸。私は見張っている。おまえの鼻先を目にしたら、私は家々に沿っておまえさんのドアまでこっそり行く。すぐに出てくれ。

追伸。おまえの籠バッグを持参すること」。

「一体何をする気かしら」とリースヘンは尋ねた。彼女はすでに自分のバッグが掛かっている釘の方を覗いていた。一方私は警告書きにもかかわらず、狼藉者の手紙と彼のまことに三級生[中学二年]らしい理屈を調べていた。まことに堂々たるものである。三頁の演習をしなければならないので、出来るだけすぐに来い、だ。それにこの小さな偽善者の娘

の方も、この物臭太郎の欲することをまことに良く理解しているのである。

「一体今日は何曜日かな、リースヘン」。

「あら、一 土曜日」とエリーゼは叫んだ、「分かった。彼は小遣い銭を貰ったのだわ」。

「それは本来マルタ婆やが没収して然るべきものだな。いいか、リースヘン、そなたが行く条件として、こう指定しなさい。『おぞましい』勉強が片付いていなければなりません、と」。

「叔父さん、それにはどれぐらいかかるかしら」とリーゼは全く憂わしげに尋ねた。彼女は「出来るだけ早く」を是非とも優先したい所であろう。

「そうだな、一 二時間、少なくとも」。

「まあ、二時間も」。

「そうだ、それでもまだそれは間違いがうようよだろう。次第に間違いはひどくなる一方で」。

「叔父さん、でもグスタフは言っているわ。自分は勉強で長く座っているほど、ヘマが多くなると」。

「そうか、そう言っているなら、勉強をまずは片付けて、そしてそれを持参してこちらに来ることだな。そう書きなさい」。

エリーゼはそこで、私のペンの中から、大層な選択をして、「我らの」劣等なインクについて嘆いてみせた。一方炎[ほむら]ちゃんは、椅子の背に止まって、最初辛抱強く待っていたが、しかし自分にとって時間がかかりすぎると、テーブル越しに飛びながら、同じようにインク壺を見つめようとし、遅滞の理由を探ろうとした。しかしようやくリーゼはその準備を完了させて、こう書いた。

「親愛なるグスタフ、

あなたの手紙は無事届きました。炎[ほむら]ちゃんが、手紙を持って来ました。マルタ婆やは濡れた手ぬぐいを窓に掛けています。あなたが来たら、あなたを存分に洗うつもりです。私は叔父さんを縛れません。叔父さんは今日はいつも部屋の中を歩き回っていて、一時も静かに座っていません。あなたはまずあなたの演習を片付けて、それを持って来てください、それ以前には私は出られません。素早くして頂戴!!! 私は自分のバッグを持って行きます。

エリーゼ」。

この知らせも炎[ほむら]ちゃんの首に掛けられた。一 小鳥はこれまで実地練習させられていた。さえずりながら、小鳥は頭を振った。こう言いたげであった。でも、もう十分です。今度はもう戻って来ません。そして、一 小鳥は消えた。エリーゼは待機して、木蔭植込みの下、自分の裁縫テーブルの前に座っていた。私は再び自分の本に没頭した。しかし三十分もしないうちに、窓の下で明るい口笛が響き、エリーゼが飛び上がって、外を見た。

「もう彼が来た」と彼女は半ば振り返って私の方に呼びかけた。

「グスタフ、上がって来て」と彼女は下の方に叫んだ。

「そうは行かない」と下の方で生徒らしい話しぶりの声がした。私はこの若造が今回更に付随する賢い知らせをこの言と結び付けていないのを不思議に思った。でも、我が兄弟がフルートの音で知らせているのだ、と[その手は桑名の焼蛤、伊藤武雄注]。

「演習を持って来た？」(つまり、演習帳)とエリーゼが叫んだ。

「当たり前だ、完璧に終了。下りて来な。叔父貴に持って上がればいい」。

エリーゼは私を問い質すように見つめた。私は頷いた。彼女は稲妻のように下りて行き、私は開いた窓辺に行き、勿論私の御尊体を晒さないよう用心じた。

「でも、グスタフ、あなたは素早くそれを片付けたわね」とエリーゼは言った。私はこの悪ガキが自分のやっつけ仕事を手渡すときのどや顔を上の方で鮮明に想像した。

「石の上にも

三年と言うわな」、

という返事であった。「ほら、注意しな。まだインクで濡れているぞ。いいか、リースヘン、— またすぐに下りて来い。叔父貴にこちらを覗かれないうちにな。叔父貴は私を呼び戻すかもしれん」。

「物臭ね、直して貰えばいいのよ」とエリーゼは説教した。私は彼女が今や階段を上がって来る物音を耳にした。

「叔父さん、これです」と彼女はほとんど手の幅もない程にドアを開けて叫び、その立派な原稿を間近の椅子に投げ、ドアを閉めた。— 三回、跳ねて、彼女は階段を下りた。

「リーゼ、リースヘン、エリーゼ」と私は叫んだ。しかしエリーゼ・ヨハンネ・ラルフ令嬢は聞くような娘ではない。

「早く来い、叔父貴はもう叫んでいる」と下の方で悪ガキが、彼女の腕を掴んで、言い、二人は角を曲がって去った。

そこにあったのは青色のノートで、表紙には「グスタフ・ベルク」とあり、その下に天才的な翻訳で、グスタヴス・モンズとあり、住所と日付、年号が記されていた。私はそれを開けた。それは、臨時教師のベーゼンマイヤーが赤いインクで記しているのか、グスタヴス・モンズ親方が黒いインクで書いたのか、まことに判然としないものであった。—

こちらに最新の頁が見つかった。面白い。カクテ同時ニ四ツの地点デ[locibus - 正しくは、locis] (悪ガキ!) 戦闘ガアツタ。学校教師としては私はこう発せざるを得ないであろう。「この少年の行く末は案じられる」。しかし学校教師でない者としては、— 吸取紙を根拠に、こう叫ぶことになる。「この少年の行く末は頼もしい」。— この四地点では、彼らは同様に、つまりローマ人や、カルタゴ人、マケドニア人、ザルデーニャ人が戦っているが、それもラテン語でよりも立派に戦っている。馬や人間、市門に迫るハンニバル、第三列[精鋭兵]、軽装備兵、重装備兵である。素晴らしい。私はこの悪ガキに対し、彼のlocibusに対し、またこのように描きなぐった吸取紙を含むノートを提出しようと思った破廉恥精神に対し、存分に説教をすることにしよう。でもこの吸取紙は没収することにしても、この少年にはスケッチの練習もさせて良からう。この旗手は若干長すぎる腕[手腕]を有しているぞ。

さて私は更に三十分間仕事をしながら、座っていた。それからゾフィー教会では六時の鐘が鳴った。私に提出された劣等な例のせいなのか、それとも青い夏の空、そして外の太陽のせいなのか、私には分からない。私の紙片での進捗はなかった。椅子の上で落ち着か

ず、左右に揺れているばかりであった。ちなみにエリーゼも正しい。「我らの」インクはまことに良くない。私は自分の諸本を閉ざして、上着を着て、ピアノの音色の方へ向かった。向こうから聞こえて来るピアノである。私が十二番地で階段を上がると、その二階の簡素で、しかし可愛らしい調度の部屋で、一人のレディーがピアノの前に座っていた。彼女は私に好意的に頷いたが、その空想に浸った演奏を止めずにいた。私は窓辺の薔薇の植木鉢や木犀草の植木鉢の側に腰掛け、音楽を傾聴しながら、同時に部屋を点検する眼差しを送っていた。こちらの、私のすぐ側には、花の下に、炎[ほむら]ちゃんの真鍮の鳥籠があって、その中で小さな小鳥はすでに止まり木に止まって、羽根の下に頭を引き入れていた。日中の緊張に疲れて、小鳥は早くに休んでいた。私の向かい側の二番目の窓には、座っている私の眼前にあるものと類似の裁縫台があった。その上には取り掛かったばかりの作品の刺繍枠が置かれていた。これはエリーゼの場所である。彼女も炎[ほむら]ちゃんと同じくこちらに二番目の住まいを有している。両窓の間に、光に対して近寄せられて、以前は朱色の塗料であったテーブルが置かれていた。本や筆記用具、ノート、ペン削りナイフ等々があって、引っかかれ、切り刻まれ、傷付いていて、グスタフの「静かな喜び」[シラー『オルレアンの乙女』プロローグ、第四場]の舞台となっていた。

ここでこの天才は自分のlocibus変化について、頭を両拳で支え、髪の毛をかきむしりながら、思い悩んだのである。ここで諸頁が、ラテン語のフレーズの代わりにあらゆる種類の不作法で一杯になったのである。ここであらゆる愚行が考案され、路地は仰天し、震撼させられることになったのである。ここで、母親がその王座からこの路地のろくでなしの頭に振り注ぐ警告や非難が、最も謙虚な顔で、後悔に満ちた表情を浮かべて聞き入れられ、そして正しく一十五分後に頓狂ないたずらによって清算されたのである。要するにここが、ここ一グスタフ・ベルクの書き物机がそうなのである。

ヘレーネ叔母さんがその演奏を終えたとき、私は彼女に猫どものディナーの話をした。勿論彼女はこれについて何も存知していなかった。

「私にはもはや手に負えません」と彼女は半ば笑って、半ば絶望して叫んだ。「それに息子はエリーゼもすっかり駄目にしてしまいます。刺繍をしたり、語彙帳を広げたりする代わりに、二人は紙鉄砲の撃ち合いをします。息子が彼女のうなじに甲虫を這わせたかと思うと、今度は彼女が息子に弁髪を差し込んだり、息子の背中にロバの頭を描くのです。私は話して叱りつけながら、声がかがらがりになり、疲れ果ててしまいます。でもどうしようもない、『叔母さん、彼が始めたのよ、私は全く静かに座っていたのに』、一『お母さん、それは本当じゃない。彼女がまず撃ったのだ』。そんな風に一日中続くのです。今はまた二人してどこに潜んでいるのでしょうか」。

「狼を壁に描けば、狼が角にやって来る」[噂をすれば影]と諺は言う。我らの先祖はこの言葉を広めたとき、自分達が何をするか承知していた。ヘレーネの問いかけと共にドアが開いた、あるいはむしろ開け放たれ、真っ赤になって駆け込んで来た、軽薄風袋とお転婆である。しかしグスタフ君は私を見かけると、向きを変えて、素早くまたドアを閉めようとした。しかし今回は私の方が素早かった。

「ちょっと、殿下、お待ちあれ」。

「そう、こちらにいなさい、グスタフ」と母親が叫んだ。

そこで私は尋問を始めた。

「グスタフ、そなたは今何歳だ、答えなさい」。

「十四歳と半年」。

「今クラスで何番だ」。

「私は上から二十四番目です」。

「で、下からは」。

「ええーと、五番目」、　　－　　（間）。

そこで私はゼウス・クロニオン[クロノスの子、ゼウス]のような顔をした。長く蒸し暑くなって、ゼウスが雷を落とす気になったときの顔で、私がそなたの年齢の時にはと始まる文で始め、(ちなみにアダムがその長男を「叱りつけた」時以来、すべての父親や教育者が始めた流儀であって)、私は牛乳の話を織り込み、それからlocibus変化形と先の勉強に移り、エリーゼにも当てこすりを入れて、最後に、感動的、情熱的側面、　　－　　つまり母親の苦悶を露わにして終えた。

この「お説教」が続く間ずっと、我が犯罪者は、一方の足だけで立ったり、もう一方の足だけで立ったりしながら、愚かに口笛吹きつつ後悔しきりの憂鬱な顔をして、緊張して上の天井の一点を見つめていた。彼にとってとても奇妙に思っていた一点に違いない。しかし私が終えると、この一点もこの悪ガキにとって興味の一切を失って、「大地は再び彼を取り戻し」[「ああ。涙が涌く。下界は己を取り戻した」。『ファウスト』第一部、夜、鷗外訳]、彼はエリーゼの背後に行き、エリーゼは絶えず自分のエプロンを弄っていて、それから彼の母親の許に逃げ、こう意見された。

「分かるでしょう。私がよくあなたに言っていたことです。でも、あなたは私の言うことを聞かない。二人とも熱が高いわ。風を避けなさい。エリーゼ、あなた風邪引くわよ。二人ともどこにいたの」。

「ただ泉の広場に行っただけよ」とエリーゼは手の甲を口に当てて、言った。

「そうなの、　　－　　それで何をしたの」。

「金魚に餌をやったのです」。

「金魚って、　　－　　グスタフ、小遣い銭は後どれほど残っていますか」。

会話のこの展開で、グスタフは突然また片足で立って、自分が鷺鳥のように後足で耳の後ろを引っかけないのは、とても遺憾である風に見えた。ゆっくりと彼は片手をポケットに入れて、しかし思案して、すぐに引っ込めた。

「仰有い」。

「ママは、支払うために私にくれたのだろう」と悪ガキは尋ねた。彼は学習して、女達の論理を習得していた。

「勿論よ、　　－　　でも、　　－　　でも、　　－」。

「それで、私は支払ったよ。リーゼは証言できるよ」。

「そうよ、私は証言できます」とリースヘンは全く熱心に叫んだ。「この点について彼を叱る必要はありません」。

そこで私は困った叔母さんに助け船を出した。

「勿論支払うことはできよう。しかし今問題は何のために支払ったかだ。その金で二人は何をしたのかな」。

二人は黙って見つめ合った。突然リーゼは自分のバッグに手を伸ばし、サクランボの種

を取り出し、それをグスタフの鼻に弾き飛ばし、それで問いは解けた。

「そういうことね」とベルク叔母さんは叫んだ、「済んでしまったことは、仕方ありません。それでグスタフは少なくとも先週のようにまた葉巻を買うことは出来ませんね」。

私もすべてこのことを了承した。一方エリーゼはこの従兄弟に肘鉄砲を突いて、こう囁いた。「明日、私は自分の分を貰うから、待ってなさい」。

幸せな子供時代よ、晩年には皆、孤独な時、楽しい夢を見たくなったら、汝、子供時代を眼前に思い浮かべるものだ。そして私、―― 高齢のこの老人は、これらの頁をとうに過ぎ去った子供の思いや、とうに忘れた子供の心配事で満たしている。人類でさえも、或る「黄金時代」や、夙に埋没した幸せな子供世界について夢想していないだろうか。

二月二十八日

この二月は少しも悪い月ではない。ただこの月を解釈する術を心得ている必要があるろう。

―― 第一に日数が欠けるという途方もなく珍しい点がある。私は以前、何年も前に、この欠損について頭がいかれてしまった。他の別の月は、手の関節と共に、正確に三十一日であり、手の溝と共に、三十日であり、ただこの二月だけが、―― 余りに顕著になっている。―― これはこの月の長所に関し、形式的面からの一点である。しかしまた更に内容的面を考察してみよう。この[二月という、Februar、洗滌月]雨について非難すべき点は何か。この月は出来る限りのことをして、健気な雨という義務を果たしていないか。この月は精一杯頑張って、濡らしていないか。地下室にいる老マルクヴァルトは勿論これには立腹して、彼がぶつくさ言いながら準備するバリケードは押し流され、彼の階段はナイアガラの滝に変貌する。穴と呼ばれるものをすべて、雨は神の恩寵により所有する。雨はずっと降り続いて、その持久力はほとんど頑迷固陋に近い。夜間になると雨は落ち着くだろうと言われるかもしれない。ところがどうして。そこで本格的な土砂降りである。すると雨は夜遊び人が内面を[アルコールで]洗った後、外面も洗ってやることになる。雨はドクトルや助産婦が仕事で出掛ける途中、御見舞をする。雨は御者や馬、紳士、淑女を、―― 仮装していようと、仮装していまいと、洗浄する。雨は屋根の猫や側溝の鼠を洗う。雨は夜警人や哨舎の歩哨を洗う。雨は自分が触れることの出来るものすべてを洗う。要するに、「日夜、普通の磨き洗いの日であって、主婦たる自然にとって、とても面白くない日で、或る土曜日の午後三時の主婦をただ想起させるものである」。これは、以前洗滌月[mensis purgatorius]と呼ばれた二月の報告者である。―― 今私は更に大都会の外見との一比較を思い付いた。私は長いこと、適した比較はないと思っていた。しかし今思い付いた。正確にこの大都会は、土曜日の磨き上げの洪水によって、自分が座っている冷たい暖炉側の椅子を洗われている不幸な家父長に類似している。―― これは新たなロビンソン・クルーソーであり、―― 子供や犬、猫、鸞の鳥籠も一緒に、両脚を高い床几に置いて立ち、その波の中にナイトガウンの裾を垂らしているのである。

ブルル。―― これはまたひどい天候で、私は古い紙挟みをあさりたくなる。実際私はすでに長いことあさっているのである。一通の手紙を見つけたいのである。これを私は探して徒労に終わっているのであるが、この手紙は本来もっと早くこの年代記に挿入されて然るべきものであったのである。同じ差出人の後年の日付の手紙は十分見つかっている。これらの手紙は子供の洗礼を報じている。その一つはまた立派なプードル、「書評家」と

呼ばれる犬についても報じている。しかし私はまだ子供の洗礼についても語っていないもっと古い書状を見つけない。有り難や、ここにあった。この年代記は、申したように、これをもっと早く掲載しなければならなかったであろう。しかし構わない。これらの手紙は古くなるほど、そして書き手自身が年を取れば取るほど、一層新鮮にこれらの手紙は響くものである。

ここに書状がある。

「編集部の責任の下、

親愛なる誠実な[方々、あるいは女性]、

丁度私はこの冒頭『親愛なる誠実な[方々、あるいは女性]』を書いたところ、突然私の肩に小さなお手々が置かれ、褐色の巻き毛の頭が屈み込んで、可愛い声で全く上品にこう言った。

『ご免なさい、愛しい子』（『愛しい子』とは私のこと、ヴィンマー博士であります）、
— 『ご免なさい、愛しい子、一体どんなレディー宛にこれを書こうと思っているの』、
私は訝しく見上げ、見つめた、— 小柄な丸みのあるレディーが（彼女は今や私の側に座って、『丸み』はなくて、私の耳たぶを引っ張って）、とても可愛いふくれっ面をした。

『愛しい子、正直に仰有い』。

言いますよ、恋しい人、と私は笑って言った。いいかい、とても珍しい話した。— 昔々、一人の男がいて、世界を遍歴していました。人々は彼のことをハインリヒ・ヴィンマー博士と呼んでいた。勿論何人かは『ロバ』とか類似の肩書きも付けていた。しかし、これは、彼がそれと同じ付加語形容詞を呈上していた人々に過ぎなかった。— 彼はそれどころか、しばしばこのことを文書で、活字にもしていたのである。それで、この人間にはほんのわずかな友人しかいなかった（知人は十分にいた）。彼は一種放浪者であった。もっともこの言葉の最も劣等な意味においてはではない。彼は一廉の文士であった。彼のことを我慢し、『ロバ』とは呼ばない友人達の中に、まず第一にローダーという名の学校教師がいて、第二に初老の紳士、ヴァハホルダーと呼ばれる人がいて、第三に— 一人の若い娘（ナネッテ、安心してくれ、彼女は我々が別れたとき、せいぜい十一歳であった）、エリーゼ・ラルフという名前の娘がいた。我々は大都会に住んでいて、ここは、大変埃がして、埃がすると私は決まって咳をするから、私はこの大都会から追い出されたのだが、我々はこの大都会でかなり密に暮らして、互いに仲の良い友人達の間での儀礼にかなった振る舞いをしてきた。プードルの書評家でさえ、これは私の第四の友人だが、しばしばこの振る舞いに人間的感動を覚えていたもので、まことに見上げた犬と言うべきものだ、ナネちゃん、君が何と言おうとも。

そこでいいかい、— 岡焼きの女性オセロ、この『親愛なる誠実な』は方々と続くもので、この三人の友人に妥当し、『残念』、一人のレディーには続かないのだ、恪気の虫さん。

しかしまあ話し始めたから、更に続けさせてくれ、親愛なるナネッテ。この友人達と私は、私が足から最後の埃をかき除いた都会に振りまいた日、ある森の中で一緒だったのだ。我々はその中で一日中、鳥の巣を探したり、花々を摘んだり、お伽噺をしたりした。しかし突然私は、底なしの孤独感と倫理的に二日酔い等々の感情に襲われた。そして突如、緑の森

の中、小鳥が陽気に歌い、太陽が明るく楽しげに小枝の間から射し込む所で、私の中に一つの考えが浮かんだ。小さな可愛い少女に対する想いで、この娘と私は以前一緒に遊んでいて、この娘のことをしばしば私は、――しばしば後年に思い出していたのだ。――しかし私はこのとき、この森の一日との間には、長い時間が経過していることを考えていなかった。――私は考えていた、――こう考えていたのだ、ハインリヒよ、何故汝は、汝の生まれた所、ミュンヘンに帰らないのか、汝のピュンベル叔父の住む、汝の――小さな可愛い従姉妹のナネッテの住む所に、と。

一条の光線のように、太陽よりも明るく楽しげに――このことが私を中を震撼して行った。私は飛び上がり、帽子を空中に投げ、叫んだ。『万歳、私はミュンヘンの私の叔父さん、ピュンベルの許へ、私の従姉妹のナネッテの許へ帰るぞ』と。――友人達は私を訝しげに微笑して見つめていた。そして教師のローダーが言った、『少年、そなたが堅気になるのであれば、刮目すべきことだ』と。

(恋しい人よ、一つ接吻しておくれ、そしたら更に話そう)。

すると小さなリーゼ・ラルフは、プードルの体に可愛い森の花輪を巻き付けて、彼らは皆、私と握手して、――小さな少女はそれどころか泣き出して、――そして――私はミュンヘンへ向かった。

私が自分の父祖の町を後にしてから、何年も経過していた。全く憂鬱な気分で、私は黄昏、旧市街地の古い馴染みの路地を歩いて行った。すると私の両親の家があった。――その中には余所の人達が住んでいた。私は一つの鎧戸の隙間から中を覗いた。二人の子供が二人っきりでランプの側のテーブルの許に座っているのが見えた。二人はとても熱心に鶯鳥のゲーム[双六風]に没頭していて、私は、ナネちゃん、我々の青春を思い出した。そして私の心はますます重くなった。――そしてザイデル路地第二十番地、今や私は別の家の前に立っていた。そこには古い、周知の看板、『ピュンベル書店』描かれて、掛けられていた。店はすでに閉まっていた。叔父さんはいずれにせよ、すでにホーフブロイハウス[ピアホール]であろう。一つの照明が更に上の階の窓を照らしていた。

私はほとんど呼び鈴を引く勇気がなかった。それでも仕舞いにそうした。いやはや、この鐘はすでに十年前、同じように惨めな響きに聞こえたものであった。足音が擦られて近寄って来た。――ドアが開いた。すると太ったベッティーがまだいて、年取るというよりもむしろ若返っていた。プードルと私がほとんど茫然とさせたのであろう。彼女は私のことが分からず、恐怖と不審の念で凝固していたが、私は四本足の同伴者と一緒に階段を二回跳ねて駆け上がった。

小柄な、丸みのある、(痛、私の耳を。いいかい、ナネッテ、この耳は私の場合、『聞き入れる』耳なんだ。君が私のこの耳を摘み取れば、一体どんな結婚生活になるだろうか。私が君だったら、別の『出て行く』[馬耳東風の]方を奪うだろうな)、レディーが私に向かって来た。

『父は家にいません、殿方』、――私は返事をしなかった。私は彼女の明かりを手から取り上げて、――小柄な丸みのあるレディーは、同じようにとても驚いていた、――そしてそれを持って、その明かりが私の顔すべてを照らすようにした。

『あらまあ、従兄弟のハインリヒ』と小柄なマルル...レディーは、(ナネッテ、覚えているか、私はその瞬間君に接吻をしたと思うぞ)。

『まあ、恐ろしい髭、—— それに眼鏡も掛けている。ベッティー、ベッティー、ブ
ロイハウスまで急いで。従兄弟のヴィンマーが来ています、と』。

そう、従兄弟のハインリヒ・ヴィンマーだったのだ。老叔父さんもやって来た。彼はこ
の浮浪者を抱擁して、浮浪者に晴れのナイトガウンを着せてくれた。彼は思うに、——
いやはや、彼は何でも恵んでくれた。プードルは狂ったように跳ねて、すぐに分別ある
犬として、太ったピュンベル家の雄猫ヒンツと交誼を結んだ。

それから、—— それから、私は『書誌薈』の編集者となったが、まず前もって致命的
な咳払いを一切停止するという条件付きであった。それから、私は君のパパ、私の善良な、
太った、立派な叔父さんによってドイツの書籍取引に『はめ込まれた』、それから——
さて、ナネッテ、それから、————— 私の友人諸君、
私はここで何を書いてしまったか。—— まあ、婚約していて、その許嫁の側で手紙を書
こうとしたら、こんな具合になります。全く無茶なことです。堅牢な、論理学と書簡作法
のすべての規則に従った報告を仕上げる代わりに、私は貴方らに私の女房殿とのお喋りを
書きなぐっている。ご馳走様でしょう。

さて、—— どうしよう。私の話しの肝腎の点を貴方らはこの機会に承知されたわけ
です。私は私の人生の新たな頁を開きました。そしてこの『新生』を働きかけたのは誰か。
高等警部のシュトゥルプナーゼとミュルミドナーネ人[その用心棒ども]で、それに—— 私の
ベアトリーチェ、人呼んでナネッテ・ピュンベルであります。ピュンベル家とその商会に
弥栄あれ、その末代に至るまで。——

私は擱筆する。私の恵み深い奥方も同様にこの頁に一筆所望されている。何と奥方は書
かれるか、私には興味深い。その目はまことに策謀的に煌めいている。

ヴィンマー博士

親愛なるエリーゼ嬢ちゃん

私どもはまだお会いしたことはないけど、私は、可愛いあなた、あなたにこのとても短
い手紙を書きたくてたまりません。邪険な人が余りスペースを残していないけど。でもこ
の人は勿論芯から邪険というわけではありません。だってこの人は私に沢山あなたの良い
点、素晴らしい点について話してくれましたから。でも二人の殿方には、私は同様に存じ
上げませんが、この人が書き散らした一切の阿呆な御託を必ずしも信じないようお伝えく
ださい。私はこの人が仰有るほどそんなにこの人の耳を引っ張っていません。—— 愛し
い子、いつか貴女らは皆こちらにお越しください。私は二羽のカナリアと一羽のゴシキヒ
ワを飼っていて、このヒワは自らその餌を引き出します。これらの小鳥の一羽をあなたに
送ろうと思ったのだけど、でも博士叔父さんはこう言います。これらは旅に耐えられない
だろう、我が輩の醜いプーデルでさえも難しいだろうから、と。この黒い犬が私の美しい
三毛の雄猫フィンツをととても恐れているのは、小気味の良いことです。この二匹は確かに
まあ噛み合いはしないけど、横目でにらみ合いをしています。愛しい子、一度私どもの所
にお出でなさい。そしてヴァハホルダー叔父さんと教師殿に呉々もよろしくお伝えくださ
い。

あなたの未知の女友達

ナネッテ・P.

追伸。いとも尊敬する方、どうか私の太った女友達、ピンパーネル夫人に同封の五ターラー紙幣三枚を渡して頂きたい。これで、決済されるべき滞納分となりましょう。

W.博士

追伸。私はこれからキッチンに用があります。この用がなければ、まだもっと博士について苦情を書けるのですが。この人は本当に邪険です。昨日この人はそのインク壺を私の最上等のテーブル・クロスにぶちまけました。これは私の生涯元通りにならないでしょう。

一 でもこれは取るに足りないことです。一 おかげさまで、私は煙草の噴煙に慣れました。私のパパも恐ろしくこの噴煙を作ります。カーテンを間もなくもう一度洗う必要があります。またね。

ナネッテ

追伸。ピュンベル叔父は、ナネチャンが書いているように、哀れな『プーデル』に一その晩年の日々、なおも『死んだふり』を教えようと企んでいる。

W.博士

追伸。この人はもうビールを飲みたいのです。(私はただプーデルと思っています、一こちらが多分正しい書き方でしょう)。あら、私は本当にキッチンに行かなくちゃ。

N.

追伸。ナネッテが行った。我が親愛なる友の方々、私はとても幸せで、陽気だ。私は貴方ら皆様からのお便りをすぐに願っています、御同輩、よろしく。

貴殿らの

H. ヴィンマー」。

昔、この連名の手紙は、その追伸共々、雀路地で何という歓声を呼び起こしたことか。この手紙が届いた一八四一年のかの八月の午後、何と教師ローダーは小さなエリーゼと部屋の中を踊り回ったことか。今日、この手紙をまた取りだした日、ローダーは私の許にはいない。一 彼は一八四八年アメリカへ追放された、人々は彼のことはなはだ恐れていた。一 小さなリースヘンも、椅子に立って、私の肩越しに覗いていない。しかし私はそれでも再読の際、一人つきりではなかった。雨にもかかわらず、素描家のシュトローベルがこちらへ勇敢に訪れて、冒険家には幸運が微笑するため、無事に、若干ずぶ濡れではあったが、私の許へやって来た。

「素晴らしい夫婦になっていました」と彼は言った。私が年代記の記録をとり合わせようとするとき、彼は私のために糸を針に通してくれていた。「博士が、以前悩みの種であった、邪悪な政治的咳を止めてから、彼は恰幅のいい男となりまして、これにはただ小柄な陽気なナネチャン博士夫人の肥満のみが比肩し得たのです。まことにこれらの小さな、肥えたヴィンマー一家と来たら。ハンスにフリッツ、それにエリーゼで、エリーゼは博士の言では『末っ子』です。一 それに高貴な犬の書評家の子孫です。一 どのヴィンマーさんにも一匹のプーデルがいて、それが次第にもっと黒々と、もっと立派な口髭とな

ります。名前を聞かれていますか。そうです、シュトゥルプナーゼ（通常短縮してシュトゥルプ[上向き]）、それにティンテ[インク]にクヴィル[渦]です。この一家の散歩を見守るのは、神々の観劇に等しい。先頭を博士が老祖父のピュンベルと歩きます。それからティンテ[インク]とクヴィル[渦]が続きます。これらは『赤ん坊』のエリーゼが寝ている籠の乳母車を引きます。これらの側をシュトゥルプが博士の帽子と杖を持って速歩で行きます。最後はナネチャンで、右側にハンス、左側にハンスがいます。時々彼女は日傘で引き獣のペアを急ぎ立て、博士に呼びかけます。

『ヴィンマー、あなたのハンカチは落ちそうよ』

とか、

『ヴァイマー、そんなに父親と急がないで。一緒に行けないわ』

とか、

『ヴィンマー、シュトゥルプが持っているのは、あなたの杖だけよ』。

それから博士は重々しく振り返り、ゆっくりとこちらへ移動する軍勢に將軍の眼差しを送り、息切れしたり、扇いだり、チョッキのボタンを外したり、スカーフを解いたり、あるいはそれどころか上着を脱いだりして、言います。

『愛しい人、散歩を我々は中止する必要があるだろう、ゼウスにかけて。これは我らにとってきつすぎる。 — シュトゥルプ、悪太郎、私の帽子を取って来い。 — あそこだ、そら行け』。

さて行列が長く止まって、シュトゥルプが紛失物を持って戻って来るまでの間、老公が多分こんなことを言います。

『ハインリヒ、注意しろ、新しい会話作法指南は売れないぞ』。

『何故でしょう、父上』。

『我々この土地の者はそのようなものに慣れておらん』と返事があります。

『それに関しては、私はニーベルンゲンやパルツィヴァルの頃から承知しています』と博士は言います。もうもうたる煙草の噴煙を吹かしています。『しかしきっと上手く行きます、ピュンベル叔父さん、義理の父上。慣れないもの、馴染みでないものは、大抵運が良、....フリッツ、蛙を放しなさい、また草の中へ戻すのだ。 — 行くぞ、ヤンキー、ドゥードル[阿呆]、ドゥードル、ダンディー[いかすぜ、アメリカ俗謡]、こう言ってピュンベル家とその商会は再び行軍に移ります。

私は心からこの描写に笑った。「ピュンベル家とその商会が花と栄え、緑の葉の生い茂らんことを、例えば、 — 例えば、 —」。

「ホップの如く、 — 万歳」と素描家は叫んで、帽子を取って、また駆けて行った。彼の座っていたところには、雨水の浅い沼が出来ていた。従って、私は[ずぶ濡れの]彼に雨傘を差し出す必要がなかった。

夕方十一時

この一日は何と悲しい晩で終わったことか。以前クリスマス市で私が同行した私の階上の哀れな踊り子の話しを私は語りたくなかった。この絵本に暗い頁が多くなるのを恐れていたのである。しかし『世界と人生』という本の巨大な頁を、その散り散りの世代や、殺戮された諸民族、亡くなった諸個人共々、次々にめくって行き目に見えぬ手は、このちっ

ぼけなスケッチする人間とは別な風に思っている。しかしこの頁は暗い、 — 死神のように暗い。

「ヴァハホルダーさん」とアンナ・ヴェルナー夫人が言った。夫人は夕方九時に私のドアをノックした。「ヴァハホルダーさん、踊り子の子供は今夜亡くなるそうです。丁度、上にいらっしゃるドクトル・エールハルトがそう仰有いました。母親が今この時踊っていないければならないのは、残酷なことではないでしょうか。関係者は、ひどい人達で、今夜彼女が外れることを許そうとしなかったのです。今日は王妃の誕生日で、彼女は踊らざるを得ないのです」。

哀れな、哀れな母親よ。可愛い、軽薄な蝶よ、汝は試練が来て、 — 試練に屈するまで、舞うがいい。汝は、見棄てられ、嘲笑されて、汝の幸せを、ただ汝の子供の眼とその微笑とに求めて来た。今や死神は汝からこれさえも奪う。

哀れな、哀れな母親よ。紅を差した頬と心に死神を抱いて踊るとは。汝は群衆の何千もの歓声を耳にしないし、千もの音楽も耳にしない。遠くの屋根裏部屋の小さな瀕死の子供の喘ぎ声が、このすべてに勝って響いて来る。 — 私は踊り子の住まいに至るその狭い、薄暗い階段を上がって行った。アンナ夫人と善良な老ドクトル・エールハルトが病気の子供の小ベッドの側に座っていた。この小さな部屋に笠のあるランプが鈍い明かりを投げかけている。あちこちの椅子の上にはお伽噺の飾りがあって、テーブルの上には薬用グラスの間に黒い半マスク[仮面]がある。ドクトルは耳を少年の胸に当てて、重たくて不安げな呼吸に聞き耳を立てている。私は窓辺に立って、外界の夜の中を覗いた。雨が相変わらず窓ガラスに叩き付けている。最下層の民衆のダンスホールから、或るヴァイオリンの甲高い引き裂くような音色がこの上の方まで浸透して来る。 — 今やドクトルは時計を取り出して、小声で真剣に言った。

「彼女は急ぐ必要があるだろう」。

その子供は休めない眠りの中、呻き声を上げる。死神の手が重く、より重く、小さな何も知らない心を圧迫している。この子供の心に間もなく、この世のすべての英知も手に届かない或る秘密が開示されようとしている。

ゾフィー教会で、鈍く十時の鐘が鳴った。風が突如起こり、建て付けの悪い窓を揺すった。二月の夜は、ますます不気味に、陰気になった。

花輪の下、お辞儀しながら、今や劇場では、大柄の著名な女性芸術家が立っていて、群衆は歓呼して、拍手した。国王、王妃、観客が起き上がった。 — 重厚な、黄金の星々の縫い付けられたカーテンがゆっくりと下に転がり落ちた。青白い顔の王妃は疲れて、馬車に乗り込み、偉大な女性芸術家が周囲の人々の賀詞と追従とを拝受した。たった今まで大勢が詰めかけていたオペラ劇場も空になって、 — 哀れな合唱団踊り子は、半ば意識を失って、書き割りの許、床に崩れ落ちて、野蛮な夢から更に一層野蛮な現実を目覚めるかのように、心をかきむしる叫び声を上げ、「我が子よ、我が子よ」と駆けて行く。 —

我々はこの小さな屋根裏部屋にいて、この様を目撃していないし、耳にもしていない。しかし瀕死の子供のより短くなって行く息遣いのすべてが、大都会の別の端の、向こうの明かりの輝く、音楽の充満した建物の中で何が起きているか、我々に語っていた。

耳を澄ませ。一台の馬車が近寄って来る。この下で止まった。

「母親だ」とドクトルが起き上がって、言う。「今際の時だ」。

階段を或る足音が急ぎ上がって来る。黒っぽい外套を着た一人の女性が死人のように青ざめて、息も吐かずドアの許に現れた。彼女は雨で濡れた外套を脱ぎ捨て、我々が『サタネラ』『『悪魔の恋』]で目にするような、お伽噺のような衣装で、小ベッドに駆け寄る。

「我が子よ、我が子よ」と彼女は囁き、途方もない不安に駆られてドクトルを見つめる。彼女は屈み込んだ。子供の微かな呼吸を耳にした。まだ生きている。 — ガラスのダイヤモンドの安物の飾りと真っ赤なりボンを付けた黒い巻き毛の頭が、哀れな枕の上に沈んだ。

「ママ、愛するママ」と瀕死の子供が叫んだ。高熱で熱い小さな手で、母親の黒い髪を掴み、その髪の宝石が煌めき、輝く。 — この時、小さな体に一つの慄きが走った。

——

「逝った」、 — と老ドクトルがくぐもった声で、私の手を握りながら、言った。

アンナ夫人と一人の近隣女性がその夜、哀れな気を失った母親の許に残った。

三月七日

昨日の午後から、数週間この大都会の上に掛かっていた重たい雨雲が上がり始めた。雨雲は北方でカーテンのように千切れて、ゆっくりと不器用に南方へ転がって行った。一条の陽光が矢のように素早く、私の向かい側の窓や壁を越えて滑り込んで来て、同じように素早く消えた。更に若干もっと長く続く別の陽光が続いて、今や華麗極まる春の陽光が、町の屋根の上や通りに見られる。まことに今やこの町は掃除に悩まされる夫には似ていない。むしろ妻[ベターハーフ]に似ていて、今や自分の義務は済ませたという顔をして、疲れてコーヒーを飲もうと椅子に腰掛け、こう囁いている。「やれやれ、難儀したわ。でも有り難や、またしても綺麗になった」。

いや、綺麗になった。雪が消えたし、この雪は最後、余りに灰色にくすんで、見栄えがしないものになっていた。沢山の不興げなうんざりした顔も、明るくなって、それに —

上の亡骸も運び去られた。カルステン老祖母もこの亡骸を見送った。彼女はその棺が下に運ばれるとき、哀れな母親の額に接吻をして、あたかも何か合点できないという風に長く頭を振っていた。彼女がどれほどまだより若い生命を見送ることになるか、誰が知ろう。

私はこれらの頁を以前、或る夢の本と呼んだと思う、 — まことにこれは実際そうである。

影のようにこれらの絵はあるときは明るく、晴の日で、あるときは、陰気に悲しく移り過ぎる。あるときは、これらの絵が浮き出ているその暗い背景が全く生命と歓声とで覆われる。あるときは、再びこの不気味で陰気な裏地が浮かび上がる。歓喜は黙し、歓声は消え、至る所、死せる夜となり、それを破るのはただ時折の嘆きの声となる。しかし夜がどんなに暗くなろうと、絶えず一つの星がこちらに輝いている。エリーゼだ。 — 私はただ私の古い紙ばさみと思い出の冊子に浸りさえすればいい。幽霊は逃げ去り、霧は沈み、私の中に再び楽しい日中が生じて来る。

エリーゼ

百もの香り高い花卉をその緑の覆いの中に閉じ込めている蒼みが、甘美な愛らしい秘密のように開花する。更に太陽の温かい接吻があると、胸の中に青春と無垢の純なる露の滴

を秘めた西洋薔薇となり、これは大地の花の中で最も美しい。

私は愛しい人間の目の中に読み取る啓示の他は何の啓示も信じない。そのみが真実であり、そのみが嘘ではない。愛の目の中にのみ、我々は、「面と向かい合って」[顔と顔を合わせて見る、コリントの信徒へ、上、13,12] 神を覗く。舌は弱く、人間の言葉は完全ではない。文書は更に弱く、更に不完全である。一枚の紙を永遠の精神の認識の源泉にしようと欲することは、哀れに愚かな試みであろう。私は両目を閉ざす。すると、一 彼女が私の前にその甘美な微笑と共に現れる。彼女は両目を、その大きな青い目を開ける。私はこの両目の中に慰めを求め、見いだす。エリーゼよ、エリーゼ、さて、そなたは大柄の美しい娘となった。そして、そなたの亡き父親がそなたの亡き母親を描いた向こうの肖像画は、そなたが思案げにその前に立って、甘く切なそうに微笑してその絵を見上げるとき、鏡のようにそっくりだ。家の中や路地での野蛮な戯れや頓狂ないたずらは過ぎ去った、(完全に消えたわけではないが、わやく好き)。エリーゼ、以前そなたが高笑いとなる時、今は微笑している。以前そなたが泣いて、訴えていたとき、今は両目を伏せて、夢想している。以前そなたがエプロンの端を口にくわえ、背中で両腕を絡ませていたとき、今はそなたの両頬にさっと朱色が挿す。一 そなたはこの年代記の頁で乙女になったのだ、エリーゼ。

しばしばそなたは、木蔭植込みの下、母親の裁縫台の前に座って、その細工仕事を膝の中に、聞き耳を立てて、落とし込みながら、その頭を最も密な葉叢に隠す。すると向こうの方から、明るく威勢の良い声が聞こえて来る。学生歌を歌い出しながら。エリーゼ、炎[ほむら]ちゃんはどこへ行くのか。一 一瞬小鳥は彼女の肩に止まって、彼女の耳にさえずる。あたかも彼女に、大事な、とても大事な秘密を伝えなければならないかのようで、それから小鳥は窓から消える。どこへ行ったのか。

向こうの声は、突然その歌の最中、途切れて、その解答を与えた。馴染みの、余り変わらない褐色の顔が、黒っぽい巻き毛に包まれて、十二番地の窓辺に現れる。若い画家、グスタフ・ベルク、従兄弟のグスタフ、以前の路地のろくでなし、今や「瞑想的」芸術家で、人々がひそひそ話すように、しばしば十分にローゼン通りのフライ巨匠の許の「アトリエのろくでなし」である。

「従姉妹、従姉妹のエリーゼ、ヴァハホルダー叔父さん」と彼は叫ぶ、「ママが頭に来ています。炎[ほむら]ちゃんが亜麻オイルグラスを倒してしまって、一 混乱につぐ混乱、一 床がとても快適に美化されたばかりでなく、私のスケッチにとても無様な改善を施しました。更に仕事をする事は不能。散歩に出掛けるのはいかがでしょう」。

私は微笑しながら、ヴィンマー博士を思い出す。彼も以前十分に度々、向こうから類似のことを叫んで来たものである。雀路地の年代記は世間のすべてと同様にその反復が見られる。一 エリーゼは麦わら帽を被り、我々は向こうへ出掛ける。階段ですでに我々をグスタフが出迎えるが、まだ軽装の絵具で汚れた画家服のまま、指にカナリアを乗せている。

「これが犯罪者だ」と彼は笑った、「ほら、リースヘン、全く無実の振りをしているだろう、おまえそっくりだ。おまえもこの小鳥より上等とは少しも言えないぞ」。

「何ですって？ 一 私が何か犯罪を犯しましたか」とエリーゼが尋ねる。

「邪悪な人を相手にしてはいけません」とヘレーネ叔母さんが、この時ドアの中に現れ

て言う。

「そうですか、一 ママ、結構な言い草です。邪悪な人を相手にするな。素晴らしい。ヴァハホルダー叔父さん、女性の民はピッチのように結託します。私は貴方を裁判官に招聘します。しかし中に入ってください。この件は余りに重要で、階段では片付けられません」。

我々は中に入り、各人が席に着いて、グスタフが始めた。

「叔父さん、聞いてください。今朝私は、自分のスケッチブックを腋に抱えて、ここから全く堅い決意で出発しました。私は胸の中に最良の計画と志操を温めていました。私は今日発揮しようと思う莫大な勤勉のために、様々な無為無策を役立てようと策しました。自分が行っている自己問答を速記できたらと願うほどで、今となればこれはとても役立つことでしょう。私の立派な計画が普段、時折、失敗に終わっていた幾つかのスキュラとカリュプデイス[前門の虎と後門の狼]で、今回は無事帆かけて通過しました。トーマス・ヘルドルフが窓から私に呼びかけても、私は聾の振りをしましたし、シュノリーの菓子店からレオポルト・ドゥンケルが私にウインクしても、私は盲目の振りをしました。リヒャルト・ブライミュラーが、三十二連隊の志願兵達、不道德な人間どもの振る舞う豪勢な朝食に私を引きずり込もうとして、私の腕を脱臼させそうになった時も、私は無感覚な風を装ったものです。私はとてつもなく倫理的に向上したのです。私は自分の倫理性に全幅の信頼を置ける気持ちで、野菜市場へ通ずる角を曲がり、そして一一つの籠、あるいはむしろ籠を持っている女性とぶつかりました。この女性は私の方に向かって来ていて、私の道を、問答無用、その日傘で遮ったのです、...」。

「まあ、嘘つき」とここでエリーゼが割り込んだ。「誰があなたの道を遮りましたか。あなたが私を引き留めたのでしょうか？あなたが私の籠を奪ったのではないかしら？まあ、あなたは、...」。

「...つまり、私の道を遮ったその女性は、...」。

「中傷です。一あなたは私の籠を全部あさって、最も大きな人参を取り出して、早速その場でナイフで、...」。

「...申しましたように、私の道を遮った女性は、こう言いました、『ほら、すごいでしょう、グスタフ。今度こそ、あなたは自分の意志に反して、幾らか役に立つわよ。ほら、私の籠を持ちなさい』。一リーゼ、これを否定するのか」。

「叔父さん」とエリーゼは言った、「彼は話し全体をねじ曲げています。私がこの人に籠を持って貰うでしょうか。この人こそは、その籠を再び渡さなかった人です。その上この人は、人参を噛みつきながら、いちいちその間に、一本の薔薇の花束の匂いを嗅いでいるのです。同じように中から探し出した花束です。それで私は言いました、『時間がもうないのよ、それで、...』」。

「ヴァハホルダー叔父さん」と今度はグスタフが遮った、「私は実用的なもの美しいものとを共に味わったのです。ママ、粗い人参は虫下しに何か有用じゃないですか」。

「...私はもはや時間がありません。あなたがその籠をどうしても渡さない気なら、それを持っていて、それを運んでも構わないわ」。

「ほら、聞きましたか、皆さん。彼女が自ら自分のひどさを白状しているでしょう。そうでしょう、ヴァハホルダー叔父さん、突如彼女は向き直って、ガゼル[カモシカ]のよう

に駆け、私をその角に、シラス[ペルシアの詩人Hafisの生誕地]の薔薇とシャーム[シリア]の谷からの野菜を担ったラクダのように立たせておいたのです。『エリーゼ、リースヘン、従姉妹のラルフ』と私は喉一杯の声で叫びました。『リーゼ、籠を持ったままでは、アトリエへ行けないぞ。天上的な従姉妹のリースヘン、私をこの静物画から解放してくれ』。

— しかし聞く耳を持たないのが、エリーゼです。どうしたらいいか。私は駆け出しました。籠と画帳、人参と薔薇を持って、彼女の後を追いました。大変な狩猟です。時々私は彼女の麦わら帽と彼女の青い服を、マッチ売り、ニシン売り、バター売り、チーズ売りの露店の間に目にしました。— 彼女に追いついたと思うと、— 錯覚です。またある屋台の背後に消えます。私は、相変わらず人参を震える手で握っている者として、買い物客や商売人達の周りの目に滑稽に映じ始めていました。私は卵籠を踏んづけた。とんでもないスキャンダルです。— 警察が現れて、『青物を売りたいなら、静かにお願いします』と警察六十九番がにやりと笑って言います。『ゆっくりをいつも心掛けて』、— 私は卵籠のお代を、心は出血しながら、編上靴は黄色になって、支払いました。エリーゼは跡形もない。— 新たな狩猟です。— 私はキャベツの茎に滑ってしまいました。—

— すってんてん、私は籠と画帳共々転がって、私の周りにはスウェーデン蕪、薔薇、玉ねぎ、私のスケッチやエリーゼの市場勘定書が絵のように散らばっています。『あらあら、哀れな子』と太った野菜売りの女将が言います、『たった今、卵の中に入ったかと思うと、今度はここか、...起こそうかね、若え衆』、— 『ゆっくりをいつも心掛けて』と再び警察六十九番がにやりと笑います。彼は私の邪悪な原理の如く、私を追って来ます。—

— 私は、失せやがれと願いたいこれらの大事な品々を、すぐ転がったまま拾い集め、それからまことに優美な気分で立ち上がります。息を切らし、びっこひきひき、私は群衆の中を分け進み、私の受難が始まった丁度その同じ角の角石に座ります。私は両脚の間に籠を置き、極度に苦い感情を抱いて、その中を凝視しました。私はこの化け物を本当に雀路地まで引きずって行くべきなのか。三十二連隊の兵舎やシュノリーの菓子店の側を通り過ぎて行くべきか。— 私と私の子孫全体が、綽名を、— 三エレの長さの綽名を得ることであろう。私の内心がこれには逆らいました。辻馬車を頼むことは出来ない。だって、私の手持ちの金を、卵の災難の際に支払ったからで、それで私は新たな人参の汚れを拭って、私の絶望を人参にぶつけてかぶりつくしかなかったのです。これが堅い計画を抱いて家を出発してからの帰結であります。この時には、この悪運の角石に座ってはずに、志願兵達の朝食に座っていたら、どんなに心地良かったかしれません。いかほどかくも物思いに沈んで座っていたか、覚えていませんが、突然、空を見上げに、目を開けると、しかし半ば凝然として、目を据えることになりました。— 彼女が座っていたのです。—

— くすくす笑って、彼女は私の向かい側の通りのその角石に寄りかかって、手に大きな、緑色の、囓った梨を持っています。『お早う、従兄弟さん』と彼女はその地点から動かず、笑いました。『ひょっとしたら今なら私の籠を返せますか。私は本当に家に帰らなくちゃ。叔父さんは、さもないと何も食べ物がないの』。— 私は手で額を撫でて、まずは本当に気を落ち着かせなければなりません。私が深い溜め息を吐くと、— 彼女はまた駆け出しそうな素振りで立ち上がります。私は死ぬほど不安な思いで飛び上がり、一っ飛びで忌々しい籠と一緒に彼女の側に行き、籠を彼女の腕に掛け、かくて彼女の側の角石に腰掛け、この石も座れるか試したのです。— 『でも、私は、グスタフ、あなたをずっと探

したのよ』とこの意地悪な女性は嘲って微笑します。『まあ、何て恰好。どこに潜んでいたの』。　ー 『ダイモニエ[悪魔の女]』と私がくぐもった声で呟くと、合同教会で十一時の鐘が鳴り、アトリエの時間はその終了間近です。エリーゼはいつもくすくす笑っていて先頭で、私はびっこひきひきその後をいき、自分の上着の裾を用心して遭わせています。乱れた身だしなみ、空の財布、疲れた脚、致命的人参のぞっとする後味の悪さ、どうしようもなく自分で滑稽な振る舞いをしたという底の抜けた感情、これらが今朝の総決算です。それではヨハネス叔父さん、裁いてください。

「叔父さん、裁判は必要ありません」とエリーゼは言った、「彼が自らをすでに裁いています。そうでしょう」。

「私もそう思う」とベルク叔母さんが言った。

「私も同様だ」と私は私の判決を下した。

「私も同感でありましょう」と瞑想的芸術家が呟いた、「かつて無実の者が勝利したことがありますでしょうか。一件落着。それでは散歩はいかがでしょう」。

「そうね、どこへ行きましょう」とエリーゼが叫び、グスタフが言った、「和解案、ヴァッサーホーフ[河岸の茶屋、『ファウスト』、鷗外訳]へ行きましょう。野外ダンスがある。リースヘン、どう思う」。

「そこへ行っていいの」とベルク叔母さんが疑わしげに尋ねる。

「何故行けないのです。我々は行ったこともあります」と瞑想的芸術家は言った。重々しく襟を高く引っ張り上げていた。「ちなみに今日はアトリエもその姐さん達と来ます。同じくフライ教授もその六人の姪御を連れて来て、それに、...」。

「ヴァッサーホーフへ行こう」と私は電気が流れて、叫んだ、「ベルク叔母さんそこへは行けます」。

かくて我々は向かった。　ー

ヴァッサーホーフを知らない人がいようか。ゲータが『ファウスト』で不滅にしなかったろうか。「そこへ行く道は少しも素敵ではない」[あっちは途中がまるで詰まらないぜ。鷗外訳]。この町周辺の道で素敵な道があろうか。ヴァッサーホーフ万歳。そこは日中、日陰や涼しい園亭があり、夕方には音楽、カラフルなランプ、漂う蛍が見られる。ウェイターもいて、以前は白かったナプキンをズボンの右ポケットに差し込んでいる。そこにはとりわけ、　ー 野原に素晴らしいダンス場がある。

「リースヘン、今朝は私に一つの籠を渡した[肘鉄を食わせた]、今日ここで私に肘鉄を食わず気でなければ、今朝のことは許そう。御令嬢、最初のワルツを所望してよろしいかな」。

「従兄弟さん、まずは到着しましょう」とリースヘンは言った。彼女はその全道中、グスタフが同じ歩調で彼女に並ばない限り、いつも先頭を望んだろう。　ー

そして我々は着いた。すでに老フライ巨匠は長いパイプをくわえて、ワインの瓶を前にしており、心地良く、陽気な営みを眺めて、微笑しながら、白い長髪の上の黒いキャップをあちこち持ち上げていた。我々が群衆の中を進むと、すでに遠方から彼が手招きをして、我々に彼の「ようこそ」を呼びかけた。これは結構だ、グスタフの言うように、アトリエがその姐さん達と来ており、それに教授の六人の姪御がいる。陽気なグループだ。長い髪に、黒いビロードのスカート、強力な総飾りの付いたソンブレロ、それからまた白い服、

多彩なりボン、麦わら帽、そしてグスタフとエリーゼが勿論この中に入って行く。嘘偽りなく、そこで、「女性ノ心ヲ勝ち取ルノニ巧ミデ」、太った校長夫人ディッペルマンのために一つの椅子を確保しているのは、背の高い高等学校教師のベーゼンマイヤーではないか。そしてそこにいるのは校長自身ではないか。彼は[ローマの官吏の象徴たる]鞭と斧とを完全に取り外して、どの二級生[高校二年生]でも、ひどい仕打ちを気にせずに、
— 自分の葉巻への火を校長に頼むことが出来るのではないか。ここにいるのは誰か。私は自分の目が信じられようか。神学の国王お抱えの教授、宮廷説教家にして大聖堂説教家のニーベグック博士ではないか。
— その通り、彼本人だ。妻と子供達と一緒に人混みの中を縫って来る。「教義を棄てろ」と学生歌が聞こえる。ハレの老公がこの歌をこのような華麗な夕べ、今一度
— 二重顎の中でハミングしてもいけないことがあろうか。いやはや、大学の揃い踏みだ。すべての学部や関連の教授達に、私講師達、学生達だ。仰天するではないか。「不道德な人間ども」、志願兵達もいる。勿論彼らも欠かすことができないだろう。

「今晚は、ツェツィーリエ、アンナ。今晚は、エリーゼ、ヨハンネ、クレールヘン、ヨゼフィーネ。あなた達も来たなんて、すごいわ」と口々に言い合って、ハミングしている。

「あら、私の踊りの相手はどこに行ったのかしら。嫌な人、私を居残りにするつもりじゃないでしょうね」。

「とんでもない、お嬢様」と司法官試補のクリッペンシュターペルが言う。びっくりした話し手の女性の肩の上にその神々しい頭を持ち上げて、何か「ただの人的拘留に遭って」と呟いている。

「リースヘン、断らないでくれ、
— 頼む」とグスタフは叫び、対の素晴らしい手袋を嵌めながら、ボタン穴に薔薇の蒼みを差し込む。

「では、従兄弟さん、他に相手がないのであれば、
— 急いで行きましょう。すでに音楽が始まっている」。

「いいか、ペーター・ヴァン・ラール[Peter van Laar、ここでは綽名]」とグスタフはすでに駆けながら肉付きの良い画家見習に言う。「おまえがまたこの前のように私の足を踏ん付けたら、明日おまえの鼻をテレピン油に押し込むぞ。行こう、リースヘン」。

さっと、
— 二人はもういなくなる。「悪ふざけの蝶だ」[夏の小鳥のように元気な人達だ。『ファウスト』 鳴外訳]

私はその間、ヘレーネ叔母さんと一緒にフライ巨匠のテーブルの許に腰掛けた。巨匠は丁度甲高い高笑いの中、自分のイタリアでの遍歴生活からの滑稽譚を話し終えたところであった。大聖堂説教家は、白ビールの彼の体質への影響について語り、彼の子孫のペトゥルスとパウルスは、テーブルの下で転がり、つかみ合いをし、大聖堂説教家夫人はウエイター達が手で涙をかむのを嘲っていた。

「ナプキンでするよりはまだずっとましだ」とディッペルマン校長は言い、嗅ぎ煙草を摘まんで、ぼんやりしてその缶をヘレーネ叔母に差し出していた。同じ一つの点に今や二組の会話が交錯していた。女達は偉大な洗濯物について話し、大聖堂説教家はディッペルマン校長と
— 神学について話した。

「ヴァハホルダーさん、行きましょう」とフライ教授が言った、「むしろ子供達の踊りを見物しましょう。私は気が抜けた想いと、蒸し暑さを同時に感じます」。

私も実際同じようなことを自分の裡で感じたので、私は喜んでその提案を受け入れ、色とりどりのランプと葉叢の花輪の通りを散策しながらダンス場へ向かった。これは楽しいことであった。

「何とも素晴らしい反射です」と老画家は全く夢中になって叫んだ、「ご覧なさい、ベルクがやって来ます。彼を私は、時にその無為無策や怠慢ぶりが目立ちますが、真の芸術家に育てています。おい、ムネアカヒワ」と彼は側を急いで行く男の方を見て言います、「諸君らは、我が娘達が『干涸らびて』しまわないよう、頼むぞ。 — これは娘達の言い回しだが」。

瞑想的芸術家が、名状しがたい仕草でにやりと笑います。

「教授殿、我々は最善を尽くします。ペーター・ラールをご覧ください。彼は真の至急筆法でユーリエ嬢と帆掛けて飛んで行きます。ここでは、彼には進歩が見られないと嘆くことはまこと出来ません。その発展ぶりをご覧ください。どうぞ、いや — 何だ。そんなことだろうとと思っていましたよ。あそこで彼は司法官試補のクリッペンシュターペルをその姫君共々転がしています。おやまあ、とんでもない光景だ。私が救出しましょう」。

「貴殿は」と国王お抱えの司法官試補は、怒って飛び上がり、自分の踊り子を惨めに滑稽に『尻餅』をつかせたまま、叫んだ、「貴殿は、目が見えないのか、顔に目がないのか、貴殿は、...」。

「待ちな、クリッペンシュターペル」とここでグスタフが割り込んだ。法学者のこの倒れた天使を助け起こしながら、「貴女の復讐はすさまじく果たされましょう、私が誓って申し上げます。ペーター・ホルツマンめ、このバンボッチョ[馬鹿]、化け物め。明日汝を恐ろしい運命が待ち受けているぞ。 — 我が御令嬢、痛みはございませんか。冷たい真鍮の刃を当てるのはいかがでしょう。これは瘤に効くと言われております。 — ユーリエ令嬢、貴女の側のその太った怪物の鼻先にパチンと先触れのお仕置きを弾いて頂けませんか。 — クリッペンシュターペル、お利口しているよ、騒ぎ立てないでくれ。こちらへ来て、貴方のレディーから留め針を貰い受けなさい。また踊る前にな。これを忘れちゃいけないぞ、大事なことから。拙者は美学者として、その確認をしなければならないのでな」。

皆がどっと笑って、この件は快適に収まった。クリッペンシュターペルは自分の留め針と共に憤然と藪の中に忍んで行った。彼のレディーはそのハンカチに隠れて、冷たい真鍮の刃は使いたくないと告げた。ペーター・ホルツマンは、ユーリエ令嬢と共によろけながら歩き、座った。他のカップルはすべて新たなダンスのために並んだ。

この光景の出来事の間、すでにどこにもエリーゼの巻き毛の頭が覗かれないことを私は奇異に思っていた。さて、新たなダンスが始まって、彼女が現れないので、私はこの件が憂わしく思われた。

「グスタフ、こちらに来なさい。私のリーゼをどこに置いて来たのだ」。

「私がですか、 — 叔父さん、むしろこうお尋ねください。リーゼはそなたをどこに置き去りにしたのだと。彼女は腹が立ったと主張しまして、ヘンリエッテ・フライ嬢と一緒に去って行きました。その前に彼女は私のことを — 湯沸かし[馬鹿]と呼んでいました」。

「そうかい、 — また何を二人はやらかしたのだ」。

「私にはそれ以上分かりません」と「瞑想的芸術家」は言って、然るべく憂鬱な顔をして、人混みの中に消えた。

「まあ、そんな次第ならば」と老フライ教授は笑った、「娘達は今頃、多分洗濯や神学の話の許に座っていよう。行きましょう、この喧嘩仲裁者が、(彼はその仕事を見事に果たしていますから)、災難や不満を仕掛けたのであれば、調べて見る必要がありますでしょう」。

「私にも思い当たることがあります」と私は髭の中で呟いた。かくて我々は藪の中を通過して、我々のテーブルに戻った。

「その通り、小雉鳩どもが座っている」と教授は叫んだ、「いかにも敬虔に彼女らは高等教師ベーゼンマイヤーを傾聴しているように見えるが、しかし全く上の空だ。[雌]七面鳥、[雌]七面鳥のエリーゼ令嬢、私の小鳩さん、貴女にあの　ー　そうだな、あの湯沸かし[馬鹿]は何をしましたか」。

「誰のこと？」とリースヘンは尋ねた。彼女は叔母さんに密着していて、叔母さんに大きなショールを巻いて貫っていて、一方ヘンリエッテはその反対側で熱心にお茶を淹れようとしていた。

「誰のこととそなたは尋ねるのか」と私は言葉を引き取った、「それで、たった今、かなり、　ー　『沸きすぎていた』人に出会ったところなのだ」。

「あら、従兄弟のこと、　ー　パーよ、あんな人」。

「では、何があったのだ、ヘレーネ叔母さん、ひょっとして打ち明けて貰いましたか」。

「いいえ」と叔母さんは言った、「二人はまた喧嘩したのですか」。

「そうらしい。ヘンリエッテお嬢さん、何か詳しいことをご存じでしょう」。

「リースヘン、言っていていい」とくすくす笑ってヘンリエッテが尋ねる。女友達の耳をつまんでいた。

「構わないわ」とエリーゼが言った。人間嫌いと後悔[コッツェブーのドラマ、1789]のような顔をして、一匹の蛾を追い払っていた。蛾は彼女の頭の周りにおいて、どうしても彼女の巻き毛の中に突入しようとしていた。

「あの人は　ー　つまり、グスタフさんは言いました、　ー　自分が彼女に踊る相手を紹介派遣して、彼女のために宣伝に努めなければ(そう言ったと私は思います)、彼女は　ー　生涯自分以外誰も見つけられないだろう。だから彼女は有り難く、忝く思っ、自分に対し愛想良くしなければならんぞ、と」。

驚きの叫び声が皆から生じた。

「厭わしい」とベルク叔母さんが叫んだ、「世も終わりだ」とディッペルマン校長が笑った。「恥知らず」と校長夫人が呻いた、「ひどい」と大聖堂説教家夫人、「魂消たな、これは強烈」とその夫が言った、「これは想いもよらなかった」と私は呟いた。「応分の懲らしめだな」とフライ教授が叫んだ、「それで、...」。

「きっと懲らしめを受けることでしょう」と一人の声が出た。そしてこの犯罪者が藪の中からエリーゼの席の背後を見つめていた。「それどころか、すでに一部懲らしめを受けました」。

こう言いながら、神聖冒涇者は完全に姿を現して、全くこっそりと母親とエリーゼの間に体を割り込ませ、エリーゼが素早く反対側を向くと、彼も素早くそちらへ従った。自分

の腕を彼女に回しながら、彼は次のように話した。「リースヘン、天使のような従姉妹ラルフ、おまえに誓って申し上げる、聞いてくれ。ー おまえは思うかい、おまえが儂い喜びのかの舞台に背を向けた後、私がダンスを続けた、と。それは違う、それは違う。私は、自分の罪を償うために、立派な仕事を続けたのだ。ー ホルツマンよ、こちらへやって来て、私に炎の涙の箱を渡してくれ。ー この高貴なホルツマンを私は復讐にいきり立つクリッペンシュターベルの爪から救出したのだ。テークラ・シュティッヘル令嬢を私はあらゆる姿勢の中で最も楽しい姿勢、あるいはむしろ座りっぱなしから引き上げた。コントロールダンスの最中、志願兵のブライミュラーのズボンの裾ストラップが外れて、彼の膝まで名を呼ぶわけに行かないものが縮んだとき、私は彼のために辻馬車を口笛で呼んだのだ。要するに、涙を乾かす必要のあるとき、私は参上して、ー 申したように、単に我が罪を償うためのことをしたのだ。さて、ここにリースヘン、(ホルツマンよ、その箱を渡してくれ)、私は涙を乾かしてやったばかりでなく、涙をも集めたのだ。ー ご覧、リースヘン」。

訝しさと歓喜の一つの叫び声が、その憤懣にもかかわらず、エリーゼから漏れた。この悪漢がその箱の内容物を彼女の膝に撒くと、無数の煌めき、輝く蛍が彼女の周りに這って、ぶーんと舞った。

諸ランプは十分遠くに離れていて、蛍どもはその輝きのすべてを発揮できて、実際素敵な眺めであった。ー この星々で飾られたエリーゼは。

「これは私の後悔の涙だ、それにおまえには、ー 私がいなくても、ー 残念ながら仰山の踊り相手がいる、ー そして私はただの湯沸かし[馬鹿]で、云々然々だ。ー リースヘンよ、ー リースヘン、私の方を見てくれ」。

「ろくでなし」とエリーゼは言って、この罪人の髪の毛を掴んだ、ー かくて和平が結ばれた。

老フライ教授はこの晩全く羽目を外したのではなかったか。突然彼は、自分は明日六十九歳の誕生日で、(それは彼の生涯で最後の誕生日となった)、それを今から祝いたいと思う。このような機会、即興が真に楽しく、歓声を呼びますから、と告げた。彼は半ば、アトリエの過半を酩酊させ、女性達を皆陽気にさせた。彼は、大いに逆らいながら、一つの花輪を被った、ただその場でのみ然るべき花輪であった。大聖堂説教家が祝辞を述べた、「いとも尊敬する老公」と始まり、同様に終わるものであった。祝辞が次々に続き、乾杯が十二時まで発せられた。それから花輪を被った誕生日の老御子が夜の冷たさ、夜露を嘆いて、ー 祝典はお開きとなった。

過ぎ去った。この祝典を行った者達は今日皆どこにいるか。

老フライ巨匠は亡くなった。彼の弟子達は全世界に散った。ペーター・ホルツマン、人呼んでペーター・ヴァン・ラール[1590頃-1658]、あるいはバンボッチョ[馬鹿]は一八四九年、あるローマの別荘で、フランス人の略奪兵に刺された。彼はラファエロの聖母像を彼らの破壊衝動から守ろうとしたのであった。大聖堂説教家は相変わらずまだモルモン教へ転向していない。そして高等教師ベーゼンマイヤーはユーリエ・フライ令嬢と結婚して、「[花嫁の]ベルトとヴェールと共に美しき[結婚生活の]妄想は千切れて」、ー すさまじく[女房の]尻に敷かれている。ディッペルマン校長校長夫人はまだいつものように、毎朝、

夫のネクタイを結んでやり、彼の上着ポケットに、昨日の新聞に包んだバターパンを押し込み、窓から、校長が平和橋を越えて、白馬町のギムナジウムへ歩いて行きのを誇り高く見送っている。

そしてグスタフとエリーゼはどうか。―― 私は後で年代記のこの頁を雀路地の十二番地のかの美しい初老の夫人の許に運ぶつもりである。夫人のピアノの音色がすでにこの午後の間ずっと私の想いの中に織り込まれていた。そのとき我々はグスタフとエリーゼについて話すことにしよう。

三月十四日

「ヴァハホルダーさん、お聞きください」と今日シュトロローベルは年代記の綴じ合わされた台本を膝の上で広げながら、言った、「いつか死神ハインが貴方の生命の明かりを吹き消して、他の誰かが、貴方の遺稿の中からこれらの紙片をあさって、これらを皆にとって有益な目的のために使用する前に、点検の労を取るとしたら、この人はこの場合、老アルブレヒト・デューラーと同じ思いがしましょう。つまり彼は一種の狩猟の絵を褒めているのですが、同時に犬どもはどちらで、兎どもはどちらかまことに区別できないと嘆いているのです。貴方は実際、夢と史実、過去と現在とを余りに酔狂に混在させています。立派な御仁、これに混乱しない者は、すでに混乱している頭です。例えば、貴方が貴方の絵を単純に、老いて、理性的な、退屈した紳士や、回想録作者のように並べてくださっていたら。いや、お手上げです。『枯葉新聞』の協力者が貴方の脚の間に駆けて来たかと思うと、その執筆時の貴方の心に浮かんで来たもので、貴方の思い出を飾り付けていて、こちらで一つの鐘を掛けたかと思うと、向こうで一つというわけで、いつの間にか貴方はある物を置いてしまっていて、―― 子供の積木箱からのカラフルな積木の建物のような按配です。これは可愛く、多彩です。しかし―― 何か適切に結合していませんし、正確に見てみれば、―― いやはや、―― 悪く受け取らないでくださいよ、―― 時々貴方の年代記は初心者の文芸愛好家の拵え物に似ています。ルソーの言葉が慰めとなった愛好家です。つまり、ドノヨウナ才能ヲ持ッテ生マレヨウトモ、執筆ノ技法ハ、一気ニハ習得出来ナイ」。

私はこの戯画素描家の長い演説を辛抱して傾聴していた。私は腹が立って、私のパイプを叩き出しながら、今やこう言った。「貴方はしばらく前に、私の年代記の協力者になる意志があると約束されました。私は今、貴方の詳細な批評を早速文字通り受け入れましょう。―― インク、ペン、紙片を貴方お一人に任せて、この年代記への貴方の寄与を即刻仕上げて貰いましょう。混乱するであろう将来の読者は、貴方についても若干詮索することになりましょう、良い晩を」。

戯画製作者は笑って、「了解」と言い、ペンを削り始めた。私は帽子と杖を取って、活気のある通りを、自分の背後に飾り胸当てから上着の襟を越えて得体の知れない、エレの長さの綱が掛かっていると固く確信して下って行く一人の人間の感情を抱いて去った。「しかし彼の言う通りだ」と私は呟いて、階段を下りた。「リーゼがまた現れさえしたら。戻って来い、与太のグスタフ、彼女と一緒に連れて来い、汝らの老叔父貴が静かにまた儂い作品を更に書き続けられるように」。

こう言って私は家から出て、まさに手袋を嵌めたとき、上の私の窓が開いて、戯画素描家が頭を突き出して、下へ叫んだ。

「老先生、お聞きなさい、このまま外出させません。 — 私は良心の呵責を感じて、まずは貴方の傷に香油を塗ります。お聞きなさい。私の叔母は本を二種類に分類します。立派な本と、これを読むと食後眠り込める本です。そして劣等な本です、この場合、そうできません。貴方の年代記は、詮索されて、たまたま叔母の手に落ちたら、最初の方に分類されることでしょう。さようなら」。

私は厚かましいこの独身男に、笑いながら、背を向けて、行軍した。

夕方

私は散歩から戻って来て、再び一人っきりで、孤独に私の年代記の散らばった台本を前に座っている。戯画素描家は実際、一枚の紙片に一杯書きなぐっていて、私のすべてのインクを台無しにして、床にはインクの染みを付け、私の封印道具をかき回し、引っ掻き、壊して、 — 私の書き物机の一端は削り取られている。 — お蔭で、私は自分の空想のスケッチを続けることがほとんど嫌になった。しかしそれはやはり甘美なもので、視線が私の部屋の何らかの対象物に、向こうのかの小さな空の真鍮鳥籠とか、裁縫台の前のかの椅子、古い紙片、枯れた花、私の紙挟みの中のカラフルなスケッチに目が据わり、次第に思い出が次々に昇って来て、花盛りとなり、緑に茂って絡みつく場合、甘美である。我々はやはり、馬鹿げた人間だ。何としばしば、滑稽に思われはしないかという恐怖が、我々の内奥の最も優しい感情の中に混じることだろう。人々は涙を恥じて、 — 嘲る。人々は楽しい高笑いを恥じて、 — 退屈な顔をする。人生の悲劇を人々は喜劇的仮面の背後で演じようとする。悲劇的仮面の背後で喜劇を演じようとする。人は欺瞞者であると同時に自己苦惱者である。 — 一個の積木箱と、シュトロローベルは関連に欠けるこれらの多彩な紙片を比較したからと言って、それがどうした。よろしい、よろしい、 — そうかもしれない、 — 私はこれから先も戯れを続けよう。更に、空中楼阁の、酔狂な建物を建てよう。最も多彩な積木を私に」供給してくれた人々は遠方にいるのだから。私は過去について現在形で、現在について過去形で話すことにしよう。私はメルヘンを語り、真実のことを一つのメルヘンにすると信じて、まずは — 年代記のシュトロローベル親方の書きなぐった紙片を綴じ合わせることにしよう。ここにある。

シュトロローベル集成

三時である。 — 私は葉巻に火を点け、台本を私の側の窓に置き、私の観察を始める。まずは勿論天候を紙片に記す。無上に優しい天上の青であり、極めて華麗な陽光である。私が自らの裡に詩的炎の一片でも有していたら、この両者を美しく若いカップルで擬人化することだろう、二人は上の高い天のテントの中で、その白く、柔らかな雲の寝椅子の上でいちゃつき、愛撫し、更に何十万ものドイツの主婦達が、石鹸作りのために — 三月の雪を待っていることを、すっかり忘れていたのである。まことに、そこに一匹の蠅がいるのではないか。年代記作家にとって何と立派な発見か。ぶんぶんと陽の当たる窓ガラス目がけて行く、この窓ガラスを素早く閉めて、出来るだけこの哀れな蠅が外の偽善的春めかしに騙されないようにしよう。この蠅は今や自分の愚行を察知したと見え、外を諦め、私の周りを飛んでいる。ちょっと、今や蠅は、何度か私の鼻先への空しい突進を試みた後、私の膝に止まった。両前足の間に頭を入れ、両耳の後を掻いていて、 — — — ちょこっ

と、…。かくてこの蠅は、私の膝に或る痕跡を残して、一 雀路地年代記に収まる。こんな諺があればと願いたくなる、「壁の蠅の目は節穴ではない」。これらの小さな羽根生物は何と多くの人間的愚行、頓狂を目にしていることか。この小さな旅行者がまさに落とした斑点は、本来何を意味しているか、誰が知ろう。それは、機知溢れる注解で一杯の寄託された日記ではあるまいか。ただ、エジプトのパピルスのように、広げて、解読して見さえすれば、不思議な、前代未聞の事柄を知ることができる日記ではあるまいか。そんな具合になって、壁の蠅の目は節穴ではなくなれば、何という革命が生じることになるだろう。蠅叩きが活躍することであろう。哀れな蠅どもよ。「縞のウール地のジャケットの実直な老人」[Vo8,1751-1826]が汝らをもはや「冬の社交の友」として大事に遇することはなくなろう。鳥のドーデー[モーリシャス島に過去生息]のように、人々は汝らを根絶させ、せいぜい一 何匹かを、制服を着用させて、すべての羽根に徽章を付けて、政府の役人として雇用することだろう。恐ろしいことだな、それで私は中断する。一

三時十五分。一 この青空はすでにまたしても何という旅心を私に抱かせてくれることか。精神が冬の荷物をまだすっかり振り落としているわけではない、このような春の先駆けの日々には、遠方への憧憬が最も強大になる時である。どんなに年を取ろうが、我々が忘れないこの憧憬には奇妙な点がある。その時には、我らの最も内奥で何か蠢動する。出て来い、出て来い、何故そんなに静かに座っているのだ、阿呆め、何故そんなにぼかんと口を開けている。漠然と、何かについて物思いに耽ろうと、何かに対して憧れようと、こちらでは、発見できないぞ。ほら、遠方は何と青く、何と香り高いことか。それははるか、はるか、遠くにある。出て来い、出て来い。

バーカ、この青い、香り高い遠方よ。何としばしば私はこの遠方からの誘惑を受けたことだろう。大地は我々を手放さない。我々は大地の子供だ。大地は我々なしには無であり、我々も大地なしには無である。一 今、この誘惑の声に従ってみろ。汝の両足はきっと柔らかな地面に沈むことだろう。汝は滑稽な跳躍を編上靴にくっついた土塊と一緒に行くことになる。憧れが最も強烈な時にこそ、その束縛も最も強烈であると知るがいい。引き返せ、スリッパを履いて、昨日の新聞を鼻先に広げよ。幸福は遠方にはない。「交替する月」[無常世界]の上方にはない。

三時三十分。一 私は丁度下の路地で、一人の日雇いの口から奇妙な言辞を耳にした。この日雇いはもう一人のとても不機嫌そうに見える男の肩を叩いて、こう言った。「調子が悪いのであれば、具合が悪くなるものだ」。丁度同じ時、隣りの窓が一つ開いた。黒い髪の毛の森の上の汚れて赤いビロードの帽子が屈んで出現した。私の畏友、アナスターズ・トゥルビヨンで、職業、フランス人語学教師である。彼は下の話しを聞いていたと見えて、一 合点したのか、欠伸して言った。「イヤ、馬鹿ナドイツ人ダ。マア、何が起キヨウト、誰モガ、息ノ絶エルマデハ、生キテイル」。

それで両国民はこんなもので、…いやはや、一 私は気付かなかった。一 先ほどの蠅がぶんぶんとしてまた開けた窓から逃げて行った。この蠅はもはや私の友ヴァハホルダーの周りを飛ばないだろう。二度と砂糖缶の縁をぶらつかないだろうし、窓目がけて飛ばないだろう。蠅は欲するもの、無制限の自由を得た。しかし、嗚呼、一 今晩はもはや温かい暖炉はなく、それで暖を取れない。雀路地の排水溝には牛乳も蜜も流れていない。

一 自由よ、呪われてあれ。アーメン。一

三時四十五分。 — 最新の大抵の文芸作品は、自分の恋人をヘローディアス[ヘロデの妻、サロメの母、ヨハネを憎む。マタイ14,3f.]として描き、自らを鉢の上の洗礼者[ヨハネ]の頭部として描くかのイタリアの名手の画像に似ている。そこで作家先生は、自分達が崇拜していると称する一人の女性像を傾向と名付けて描き、差し出す盆にそのご立派な作家自身の歪んだ頭部を載せて、いとも恭しく丁重に我々に進呈するのである。このような営為の有用性は除外されず、従って、ただ — 増えるのみである。 — 私がこれにどう対処できよう。

四時。 — 奇妙なことだ。私はこの紙片に描いて以来、この年代記にとてもばらけて、ぼろぼろの外見を与えていた同じ至福の夢想に私は襲われている。ヴァハホルダーは正しい。精神を余り悩ませず、便秘のプードルのように回転せずに、自分の想念の戯れに徹底的に浸ることには、独自の快適な感情がある。

下の通りで子供の叫び声がして私が目覚めたとき、それまで私の心はどこに行っていたのか。私はそのことを年代記に記入することにしよう。それには、同時に、私の尊敬する友、ヴァハホルダーにとって、先の私の演説への最大の償いとなるものが見られよう。

それは七月の或る日曜日の朝のことで、私はヴェーザー河畔のブラウンシュヴァイクの大地の上に横たわっていて、向こう岸のヴェストファーレンの方を眺めていた。日の出よりも早く、私は山や谷を渡って歩き、東に最初の光線が輝いたとき、取るに足りない村の中へ下りていた。私は村の居酒屋の前のシナノキの下でコーヒーを飲んでいて、快適に日曜の朝の村の営為に耳を傾け、敬虔に、先の尖ったスレート葺きの教会の塔から鳴る小さな鐘の音を聞いていた。何人かの可愛い、ずんぐりしたニーダーザクセンの娘達に私は微笑して頷いていた。娘達は風変わりな、村に突然出現した余所者を訝しがっていた。私はこの居酒屋のすべての子供世界、鶏や鷺鳥、家鴨の世界と馴染みになっていて、白いスピッツの体を撫で、「どこから来て、どこへ行く」の幾つもの質問に答えていた。この亭主と（彼は同時に土地の村長であったが）、一緒に私は養蜂舎を訪ね、その後、教区民や楽長、牧師が教会へ入るのを眺め、最後に一人この敷地のシナノキの下にいて、ただ家禽のクワックワツ、ギャーギャーの翼の群れに囲まれていた。このように甘美な「楽しき閑暇[ドルチェ・ファール・ニエンテ]の中から突然一人の子供の泣き声で私は目覚めさせられた。それは私の背後の家から聞こえて来て、私は立ち上がる気になって、低い、ブドウの木絡まった窓の中を覗いた。丁度一人の老婆が、嫌がって泣き叫び、手足をばたつかせている四歳の坊やを水や石鹸、ウールの布切れでしっかりと洗っているところであった。この進展を三人から四人の他の小さな「小僧ども」が不安げに見守っていて、自分達の番になるのを待っていた。

「で、おっかさん」と私は、窓台に寄りかかって、言った、「あなたは教会へは行かないのですか」。

老婆は見上げて、言った、「いつもじゃないが。私や、こんな小さな子を洗って、拭いてやるのが好きだね。 — 旦那さん、 — 子供の泣き声、これも賛美歌の一つだね」。

私は帽子を取って、思わず一步退いた。この老婆の短い言葉には、何と不思議に美しい説教が見られることか。一羽の燕が丁度私の周りで弧を描いて、低い屋根の縁の下の巣に向かい、くちばしに餌をくわえて、その小さな住まいの入口にしがみつき、その羽根のない雛の喜びのさえずり声を浴びていた。私は老婆にもはや一言も言えなかった。

「子供の泣き声、これも賛美歌の一つだね」と私は小声で呟き、シナノキの下の私のテーブルに戻った。私は札差から一枚紙を千切って、その上に書き留めた。「子供の泣き声、これも賛美歌の一つだね」。そしてそれを森の花の一束と一緒に帽子のリボンの下に挟んだ。

私はそれから夢見ているように、村の教会墓地の扉を抜けて、色とりどりの飾られた墓塚の側を通り、開いた教会の門まで行き、(田舎では新教は礼拝の間、その教会をまだ閉める必要はない)、そしてその前のトネリコの木に敬虔に寄りかかった。私は若い牧師が、ゲレルト[1715-69]の寓話を、遠方のオリエントの比喩と結び合わせるのを大変喜んで拝聴した。その間、燕どもは神聖な建物の中へ出入りし、迷い込んだ一匹の蝶が開いた教会のドアからまさにまた戻り道を見いだしていた。

「子供の泣き声、これも賛美歌の一つだね」と私は叫んで、低い壁を越えて野外へ飛んで行き、黄色い穀物の波とその縁のひなげしの花輪を抜け、ヴェーザー河畔を歩いて行った。そして私は或る柳の下、草むらに身を投げ、側の古い奔流のざわめきの中、夢想していた。一方向かい側のカトリックの土地では、一つの行列が歌いながら、礼拝堂の丘を聖母像まで登っていて、私の背後では新教のオルガンの音色が静かに消えて行った。兩岸の上、両宗教の上には、何と不思議な、青い、滑稽な天が広がっていることか。老百姓女の短いあの言葉と結び付いて、胸の中に何と波打つ感情世界があることか。私は当時今よりも若くて、顔を両手の中に埋めた。

幸福と呼ぼうと、心、愛、神と呼ぼうと、

私はそれを明示できない。

感情がすべてであり、　　――

[それを幸福だとも、情だとも、愛だとも、神だとも、お前の勝手に名づけるが好い。己はそれに附ける名を知らない。感じが総てだ。[『ファウスト』 鷗外訳]。

間近に迫って来る歌声で、突然私は目覚めた。私は見上げた。轟々と、鼻息荒く、黄色の奔流を強引に鞭打ちながら、あの「ヘルマン号」がヴェーザー川を下って来た。船長が外車囲いの上に立っていて、一船がさっと通過するとき、挨拶して帽子に手をやった。蒸気船が何百人もの移住者を私の側、運んで行った。本流を下ってで、この本流は昔、多くのローマ人の死体も北海へ転がして行ったのである。或る男性コーラスが歌った。「ドイツ人の祖国はどこか」。そして古い檜の木々は悲しげに梢を揺すっているように見えた。木々はこれに返事する術を知らなかった。そして船は更に飛び過ぎて行った。ヴェーザー川はもはや異国人の死体を北海へ運ぶことはないが、しかし悲嘆の声を上げながら、自らの不幸な息子達や娘達を運んでいよう。――私は自分の箇所を去って、ブナの森を抜け、近くの山を登り、視野が遠く、美しい土地ザクセンガウまで開けている見晴らしの地点まで行った。ドイツの大地の何という地点か。向こうにはかの青く、高台の列が見える。トイトブルクの森である[紀元9年、アルミニウス(ヘルマンとも)率いるゲルマン人がローマ軍を破った]。向こうにはかのほっそりした諸塔が見える。――偉大なゲルマン人の文化の地、修道院コルヴァイである。また向こうにはかの山脈の群れ、イートだ、ソノ名前ハIdistavisoイディスタヴィーゾとタキトゥスは言っている[年代記II、16、ヴェーザー右岸の盆地、ここで16年ローマの将軍ゲルマニクスはアルミニウスに勝利した]。私はその地帯を前世の人々の姿で

一杯にした。私は第十八、第十九、第二十のローマ軍団が、前執政官ヴァールスの下、ヴェーザー川に進軍して来て、遠方で消えて行く彼らの破滅の叫び声を耳にした。私はローマのゲルマニクスが同じ道をやって来るのを見、イディスタヴィーゾでの戦闘の雄叫びを耳にし、遂には偉大なアルミニウスが、このゲルマン人の扇動者[年代記、I,55]がローマ軍団や原生林を白馬に拍車を掛けながら抜け、自らの滴る血で顔も見分けられなくなって[年代記I,17]、打ち負かされ、死ぬほど疲れているのを目にした。私は彼が新たにケルスキ人達に都会[ローマ]への新たな闘いを呼びかける様を、そして民衆が武器を手取る様を見た。彼ラハ、戦イヲ欲シタ、民衆、高貴ナ者達、青年達、老人達が武器ヲ取ツタ[年代記、II,19]。

しかし人形はどこか[アルミニウス (ヘルマン)記念像、金不足で1875年やっと完成]。そのことを私は突然思い出した。私はタキトゥスを草むらへ投げ、爪先だって、出来るだけ首を伸ばし、トイトブルクの方、その上方を見上げた。前方の山の連なりBergdruffel[ヨアヒム・ハインリヒ・カンベ1746-1818、ドイツ語純正主義者の影響]が遠方の青い高台の一部を隠していたので、私はわざわざ高いブナの木に登って、そこで望遠鏡も使って見た。駄目だ。どこにもヘルマン像の痕跡がない。私が見ることのできた一切は、カッセル近郊のクリストッフェル[ヘラクレス記念碑]で、軽く私は呪いを発して、空中の展望台から下りて来た。しかし丁度軽い落胆を発した後で、今度はもっと大きな落胆を発することになった。私はとてもご立派に見えた。「こんな姿になった」と私は呟いて、傷付いた親指から血を吸っていた。「偉大なドイツを探して見回すと、こんな結果になる。指には茨が刺さり、ズボンに千切れ、見えるものはただ、一偉大なクリストッフェルだけだ」。苛立って私は望遠鏡を折りたたみ、タキトゥスをポケットに突っ込み、びっこを引きながら山を下り、またヴェーザー川に戻った。苛立って私はまた草の中に、河畔に到着すると、身を投げた。何と一切が先ほどの至福の感情の気分と今のこの瞬間の間に侵入して来たことか。空はまだ同じように青く、山々はまだ同じように緑色で、先ほどのたたんだ紙切れはまだ私の帽子に、森の花の側に挟まっていた。しかし一一切が何と変わって私を見つめていることか。移住者を乗せたあの蒸気船はもっと遅く通過しても良かったのではないか。普段はいつも長く待たせているのだから。ヘルマンの像を眺めるという阿呆なことはしなければ良かったのではないか。今頃は草の中で、何と静かに昼寝をしていたことであろう。多くの健気なカッテン族[ヘッセン人の祖とされる]が血税を支払ったあの偉大なクリストッフェルに立腹しないで済んだらうに。[ヘッセン・カッセル方伯はアメリカ独立戦争の際イギリスに兵士二万人を売った]。一私は、自分の平常心をまた取り戻すために、色々試みた。私は草の茎を一本取って、鼻の隅をくすぐった。私は、毬の茂みで日に当たっている太った、上機嫌の蛙を写生した。一何の甲斐もない。一不機嫌の魔王は私から去らなかつた。私は憤然と飛んで、叫んだ。経済は糞食らえ。そしてぶつぶつ言いながら、リュール[ヴェーザー河畔の村]へ行軍して行った。一いやはや、これは、雀路地で何の騒ぎだ。大変だ、一犬荷車が食料地下室へがたがた下りて行く。そして私は一戯画素描家ウルリヒ・シュトローベルはここにおいて、ナンセンスなことをまとめている。雀路地年代記も糞食らえ。一バイバイ、ヴァハホルダー」。

三月二十一日、夕方

或るメルヘンがあって[ディケンズ、『憑かれた男』] — 私は誰が物語ったのか知らないが、 — 大きな不幸の後、記憶喪失を願った男の話で、この男の願いは或る暗い夜、かなえられたのであった。彼はこの時からもはや何の痛みも、何の喜びも感じなくなった。彼は泣くのを忘れ、笑うのを忘れた。彼が花の蕾を踏み潰そうが、人間の心を踏み潰そうが、関係なくなった。人生がその子供達に揺り籠から墓場までのその道中に付与する可愛い玩具が、彼の手の中で、記憶と一緒に壊されてしまった。これは一つの恐ろしい考えである。君達、民衆の賢者にして説教者よ、未来における幸福や不幸について考えることが、人を愛らしく、純粋に、神聖にするのではない。この考えは利己主義と無縁ということはない。人間の心が目指すどの花にも、この考えは利己心といううどん粉病を据える。すべての徳操の、すべての真の犠牲の、真実なる純粋な源泉は、その消えた画像と一緒に、その全く音色の消え去った、あるいは半ば音色の消え去った行為や夢想と一緒に悲しくも甘美な過去にある。自分が自ら昔、母親の胸にかじりついて、母親の目が自分を微笑して見ていたことを思い出す者が、一人の子供を侮辱できようか。思い出は、揺り籠と墓場を結び付ける花輪である。たとえ受難や錯誤の、暗い、突き刺すような緑色がまだ支配的であろうとも、決して、ここかしこに明るく輝く一本の花が欠けることはないであろう。この花の許に我々は留まって、こう囁くことができるのである。「何とここは愛らしく、神聖なことか」と。

私は私の小さなランプに火を点して、再び私の年代記の頁について夢想した。私に今日、若い蕾の莖の花束を持参してくれた初老の、好意的で美しい女性が、そのメロディーの波に身を任せて揺すられるように、私も単にこのようなやり方でのみ、身を保てよう。 —

私はこれまで我らの子供達の子供の生活から画像を描いて来た。今日私は別な多彩な頁を描くことにしよう。花咲く生命で一杯の、甘美な囁きで一杯の、夢見るような憧れと微笑む夢想で一杯の魔法の鏡のように、 — 心の春の充実した煌びやかな一枚の頁を、若い恋愛[初恋]の時から一枚の頁を描くことにしよう。

若い恋愛の美しい時よ、
永遠に緑色に茂らんことを。

と詩人[シラー、『鐘の歌』]は歌った。そして至る所、我々はこの格言に出会う。コーヒーカップや記念帳、パイプの首に見られる。これは嘲笑ではない。民衆の心を捉えたもの、これを民衆は眼前に欲し、これと戯れる。民衆は自分の所有物としたこの韻文の思考を、しばしば確かに、唇に微笑を浮かべて発声するが、しかし民衆はそれでもなお心の奥深くこの思考を蔵している。民衆は真実のもの、美しいものの許へ上昇して行くのではなく、それを自らの中へ引き下げる。しかしそれを両足で踏み付けるのではなく、それを心の中で温め、愛撫するのであって、永遠に交替する戯れの中、その考えを回転、変転させて、その輝きに驚嘆し、喜悅するのである。永遠の子供「人類」の揺り籠の上には、善良な守護霊、偉大な世界詩人が漂っていて、彼らの宝角から黄金のクリスマスの果実を振りまき、醜い黒い腕白妖精が脅しながら覗き込んだとき、揺り籠の歌を歌っていつも立ち塞がるのである。

若い恋愛の時は美しい。これは彼者誰時[かわたれどき]に似ていて、東の空が微かに赤み

を帯び、苔みや花々、すべての生命が来たる朝の両腕の中で微睡んでいて、ただ時折、一羽の雲雀が、翼から露を払いつつ、歓声を上げて、幸運を告げながら舞い上がる。まだ霧の層は魔術的に神秘的に、すべての深淵を、人生の荒涼たる箇所を覆っている。若々しい心は、ただ花々や、舞い飛ぶ蝶々や、多彩な巣作りの小鳥が未来のヴェールの下に隠されていると信じている。

「愛されることは甘美で、愛することは更に甘美である」と別の詩人がかつて叫んだ。そして私、老いた、孤独な男は、目を手で拭って、ヨハニス教会墓地の墓塚を思い出し、私の青春の星を思い出す。「マリアよ」。―― 私はすべての苦痛と一緒にこの思い出を、権力や富、英知の全世界と引き換えにするであろうか。―― 私はそんなことはしない。――

月がまた屋根の上に昇って来て、その白い明かりを私のランプのささやかな輝きの中に混入する。古い、常緑の、ウルフェルデンの森由来の木蔭越しに、その木蔭を通じて、月はその明るい光線を射し込み、珍しい影を床や壁に投ずる。月は自ら、雀路地年代記の今日の頁を持参する。

向こうの窓台の椅子の上に、エリーゼの上品な、可愛らしい姿が薄暗く、とうに過ぎ去った夕べの薄明かりの月の時に浮かび上がって来る。一方別の椅子にはより低く、彼女の横に別の姿が座っている。この両者は何をかくもこっそりと、かくも小声でひそひそ話しているのか。何をくすくす笑っているのか。リースヘンの裁縫台から落ちる撚り糸の玉が、床を転がって、椅子や他の脚の周りに絡み、迷い込んだ蛾や、側を飛び過ぎるコウモリ、それに通りから部屋の中へ一個ボールが飛んで来て、それを渡すために、グスタフは不用心の持ち主と一緒に頭を下げる。すべてが、すべてが、この月明かりの薄明かりの中では、一片のメルヘン、一片の夢となる。この薄明かりはメルヘンの時ではないか。若い恋愛の時は、夢想の時ではないか。――

「親愛なる小柄のエリーゼ」とグスタフが囁く。月の明かりを受けて、下の彼に屈み込んでいる顔を覗いている。

「親愛なる大柄の少年」とエリーゼは微笑する。彼女は以前の路地のろくでなしの額の巻き毛を撫でている。二人は互いに更に語ることはない。しかしこの中断された言葉は、人間の心をその最も神聖な瞬間に感動させるものすべてを含んでいる。

「私はおまえをととても愛しているのだ」とグスタフがまた囁く。これに対し、エリーゼは何も答えず、頭をその木蔭の葉の中に隠す。月はこの瞬間多分、青い目の中に掛かる微光の真珠の滴の中に反映していたことであろう。そして彼女の頭がまた緑の葉叢から浮かび上がると、今度はグスタフの番となって、エリーゼの額の巻き毛を撫でるのである。

「ほら、月がぼっかり上に浮かんでいる」とエリーゼが言う、「何故月は度々私どもに深い郷愁を呼び起こして、あたかもこの地球は少しも自分達の里ではないような気にさせるのかしら。グスタフ、ほら、後はただ小さな星が一つ、全くの一人っきりで、黄色の火花のよう、ほら、―― 月の右手に」。

「私には更に二つ見える」とグスタフが言う、「すぐ間近だ、だから郷愁を感じないぞ、

―― ブロンド娘よ、―― また両目を開けてくれるなら、―― ほら、見えるだろう。もっと気の利いたことを言いたかったが、もうすっかり忘れたな」。

「あら、嘘ばかり、褐色髪さん」とエリーゼは笑って言った、「では起き上がってよ、叔父さんと叔母さんは夕方ずっとそこの暗がりには座っています。ー 私どもがそのことを案じないのは、良くないわ。行きましょう、あの人達が眠り込んでいないか、本当に見てみなきゃ」。

きっとあの人達は眠り込んではいなかったろう。マルタ婆やの糸車だけは呻るのを止めていて、婆やはその隅に微睡んで座っていた。

「あなた方に明かりを点けましょうか。それともまた月明かりの散歩に行きますか」とエリーゼは尋ね、そして私の肩に腕を置いた。

「あなた方って」とヘレーネ叔母さんは尋ねる、「何故あなた方だけに明かりを点すの」。

「ママ、ママには言いましょう」とグスタフが割り込んで来た、「ママが鼠を見たくないのは良く知られています。しばらく前からこのヴァハホルダー叔父さんの許では鼠がうようよですから、ママのために我々は犠牲心を発揮して、暗闇の中にいるのです」。

「そこの窓辺でポリポリ囁って、囁くように聞こえたのは、鼠の類いだったのか」と私は尋ねる。

「私には何も聞こえなかったわ」とリースヘンは誠実に言う。一方グスタフは「当たり前だ」と叫んで、果物籠の中身を自分のポケットに入れる。

「何をしているの、鼠の王様」と彼の母親が尋ねる。

「我らの月明かりの旅のために、食料を準備しているのです、ママ。リースヘンの質問は勿論、そもそも余計です。リーゼ、残りを取ってくれ。ー 私にはもはや入らない」。

エリーゼはこれを二回も言わせることはせず、そして実際、自分の質問を不要であったと見なしているようであった。叔母さんが冷たい夜風等の反論を幾つか口にした後、我々は夏の夜、月明かりの外界に出掛けた。

舗石の上と家々の壁への鋭い陰影、窓ガラスの煌めき、暗い夜空に移って行く照らし出された雲々、家の玄関や通りの角での囁き声の群れ、一切が今やグスタフにとって、一幅の絵となり、エリーゼにとって一編のメルヘンとなった。通りや路地、広場ではとても不可思議な人影で活気があった。隅石にはうづくまって穴熊風な腕白妖精が潜んでいた。古い名門貴族の邸宅の暗い門道から、羽根飾りを揺すって、広い外套を着た奇妙な若者達が現れ、美しいレディー達が婦人用白馬に乗って、夜陰に騎乗して行く。甲冑を着けた傭兵が、肩に鎌槍を担いで、市場を横切って行く。覆面をした僧侶達の行列がゆっくりと大聖堂の正面から練り歩く。そしてー これらはすべて明日、極めて美しいスケッチに収められて、エリーゼの裁縫台の上に置かれているか、床に散らばっているであろう。

勿論グスタフとエリーゼはいつも我々の数歩先を歩いていて、ほんの時折、私は二人の談笑の切れ端を把握出来るだけである。私はモーリシャス島の棕櫚の木の下のポールとヴィルジニーを思い出した。[Bernardin de Saint-Pierre, 1737-1814作]。私はドイツのメルヘンの甘美な兩人、ヨリンデとヨリングル[グリム童話]を思い出した。二人についてはこう言われる。「二人は婚約の日々にあって、一緒にいることが最大の楽しみでした」。ー 我々が幾多の通りを通過して、照明されたオペラハウスの前で、出入りする人の群れや、待機している儀装馬車、花々や砂糖菓子を販売する子供達を眺めた後で、最後に我々は宮殿広場の陽気に月光の中、跳ねている噴水の水盤の側に落ち着いた。芝の広場から温かい風がハナダイコンやニワトコの茂み、キングサリの茂みの香りを我々の許に届けてくれた。

南の空では、暗い雲が華麗に、月の夜、稲光りした。そして我々の側では、一 あたかも噴水が一 自ら寝言を言うかのように、パシャパシャと呟いていた。素晴らしい夏の夜である。

エリーゼは何を考えているのであろう。彼女は手の中に顎を置いて、物思いに耽り、ざわめく噴水仕掛けを見守っている。

「リースヘン、何を考えているの」とヘレーネ叔母さんが尋ねる。

「笑われることでしょう」とエリーゼが答える、「一片の夢、一編のメルヘンです」。

「話してくれ、話してくれ」とグスタフは、腕を彼女の腰に回して叫ぶ。

今日のこの孤独な夕べ、私は何の話しを語ろう。私は少女のような可愛らしい筆跡で覆われた、薄赤色の紙片の冊子を手取る。可愛らしい上品なペン画が織り込まれている。これだ。我々の側で噴水の音が続く、かの遠い昔の夕べ、エリーゼはこう語った。

「私は最近夕方全く一人っきりで座っていました。叔父さん、あなたは外出してました。グスタフはすでに朝早く、その大きな画帳を持って、木々や百姓の家々を描くために出掛けていました。叔母さんはどこにいらしたか、私には分かりません。要するに私は全くの一人っきりでした。ただ私の善良な、太った雄猫だけが、私の側の足台で喉をゴロゴロ鳴らして、鼻面を撫でていました。私は編み物で沢山の編み目をやり損なっていて、再び取り掛かる気がなくなっていました。それで私はランプの芯を深く下げて、窓から月を眺めました。月は今日ほど満月ではなかったけど、屋根や煙突の上に昇っていました。部屋は全く薄暗くなって、ただ時折向こうの窓から壁の方に光線が舞い込みました。突然、月は十分に高く昇っていて、一 輝かしい、陽気な光線が白い稲光のように私のハナダイコンの植木鉢や、私の側にある森の花々のグラスに射し込みました。そして、一 この光線と共に、私のメルヘンというか、私の夢が始まりました。余りに可愛いものです。最初私は、かなりしばらく、床の輝かしい光線を眺めていました。その光線はますます遠くへ延びて、一 突然、一 皆さんはきっと信じないでしょうが、一 無数の、小さな、可愛らしい、透明な羽根類の光線全体となって活気付き、それらが光線の中、あちこち漂い、その輝きそのもので軌道を作りました。半ばびっくりし、半ば喜んで、私がこの奇妙な生き物を見つめていますと、突然窓台の上の花のグラスが甲高い、長く響く音を自ら発しました。これは指でグラスの縁をこするとき生ずるような音です。グラスの中の水は高くなったり、沈んだり、稲光りしたり、煌めいたりし、森の薔薇をあちこち揺すります。ハナダイコンの花が開花し、その一つ一つから同じように可愛らしい羽根類が浮かんで来ます。あの光の精霊達よりもほとんどもっと繊細です。四方八方にそれらは舞って、この世ならぬ香りを撒きます。その間、甲高いグラスの音色は鳴り続け、最後に突然鳴き止んで、一本の糸が切れたようで、その後深い静寂が続きました。一 今や、叔父さん、月光はこの書き物机に達して、小さな精霊の民は、陽気にあなたの本や書類の上で踊ります。しかし私はすでに自分の驚嘆からは覚めていて、私は心から、これらの小さな精霊達の幾人かの風変わりな奇想を笑うことが出来ました。つまりこれらはなんとかして私どもの大きなインク壺の中を覗き込もうとしながら、それに近づく勇気がないままだったので。他の精霊達はまたペンの上を漂い、更に他の精霊達はまことに恐ろしいインクの染みと格闘していました。それらはその染みの生命の火を懸命に吹き消そうとしているように

見えました。私はどれほど長くこれらの摩訶不思議な生物を眺めていたか分かりませんが、一群の小さな声が、『付いて来い、付いて来い』と叫び、突然私は、小さくなりながら、遂には自らこのような羽根のある生物となって、踊りに加わっていて、月光の精霊達と森の花々やハナダイコンの香りの精霊達と一緒にゆっくりと窓の方へ浮遊して行きました。というのは月が高く昇るにつれ、光線もまたその輝く住民達と共に短縮して、壁沿いに、下の路地の方に沈降して行ったからです。外界は魔法の世界のようになっていたけれども、私は少しも恐怖を感じなかった。一 路地全体が音色と光の混淆となっていて、精霊の民の生命と活動はもはや私にとって紛れもなかったのです。一切が精霊の民によって生かされ、動いています。同時に私は、粗野な通常の世界を覗き、感知する能力も喪失していません。私は玄関の人々や窓辺の子供の頭部、ねぐらにいる眠れる雀や燕を見知っていて、聞き耳を立てました。とても素敵なことでした。一 今や住民を引き連れられたその光線は私どもの壁を斜めに横切り、私どもの隣人の窓に滑って行きました。九時半の音を私が聞いたとき、病気の子供と暮らしている哀れなヌートハルト夫人の窓前に輪舞は到着し、震えながら蕾の薔薇の茂みを越えて小さな部屋に滑って行きました。小声で歌いながら明かりの精霊達は浮遊して、床を越えて、その床の薔薇の茂みの影を追いかけ、小さなベッドの青白い子供の顔と、その上に屈み込んだ、哀れな心配そうだ母親の同様に青白い面影に接吻しました。『我らは希望をもたらず、我らは治癒をもたらず、我らは生命をもたらず』と精霊達は囁きました。その病気の子供は瘦せた両手を、微笑しながら、自分の枕に掛かる震える光線に置きました。『我らは希望をもたらず、我らは治癒をもたらず、我らは生命をもたらず』と私は一緒に合唱して歌いました。そしてほとんど抗いながら私は退いて行く光線に従いました。更に最後の視線を私は振り向いて部屋に投げかけました。次の瞬間には私はまた路地に浮遊していました。でも叔母さんは今頃多分家に帰って来られたに違いない。だって突然叔母さんのピアノ音が輪舞に混じっていたからです。私は老マルクヴァルトが下の自分の地下室前で息子達に叱っているのを耳にしました。でも私の冒険はまだ終わりではありません。私どもは今や、隣の建物の二階の窓前にいました。明るいランプの光が部屋から漏れ出て輝いています。そして金魚鉢と宮中顧問官ツェルバイン夫人の両手の中の編み物を越えて私どもは中へ浮遊して行きます。陽気にきらきら輝いて、自分らに迫っている恐ろしいことを何も予感していません。『我がお嬢様』と或る声が囁きました。その声でクルックフーン司法官試補と分かりました。『我がお嬢様、この不愉快な鬱陶しい空気がさほど気にならないのであれば、どうか今一度私どもにかの素晴らしい『ハイデー』[Auber,1847作]からの舟歌を聴かせてください』。一 まあ、大変と私は考えました。でも遅すぎました。私の小さな同伴者達に迫る危険を伝えることが出来ず、素早く逃げるよう助言出来なかったのです。すでにオイラーリアが初めていました。

『今日はリード[ヴェネツィア]の祭典、
周りは悦楽と享楽に微笑して、...』

精霊達は驚愕しました。彼らの玉虫色に輝かしい色彩は色褪せました。(グスタフの言う) 喘ぐような音楽箱[ピアノ]の反響板からと歌う女性の唇の間から、お化けの小人の群れが発生して来て、幽霊のように金切り声を上げて、嘆きながら、空中に飛び散り、憤然

と明かりの精霊達に襲いかかったのです。恐ろしいことでした。すでに私は、私の喉を掴んだ腕白妖精のC[ハ音]によって、半ば絞殺されたと感じ、蜘蛛の足に捕まった不幸な蚊のように手足をばたつかせました。すると、一 宮中顧問官夫人が起き上がって、白いカーテンが落ちました。私は電気ショックを受けたように感じました。明かりの全軍もそうです。助かったのです。一 カーテンの外側に光線はその子供達[精霊達]と留まりました、青白く、攻撃されて。しかしそのカーテンの中では歌が続きました。

『美しい殿方、優しい若者が、
穏やかな恋する瞳で、
甘く囁き、私に舞い寄る、...』

今や光線は素早く、より素早く、沈降し、丁度大地に触れました。すると、一 私は目覚めて、グスタフは、すぐ私の目の前にいて、頭を両手に乗せて、私ににやりと笑いました。一 (あら痛い、そうでしょう、あなたは私ににやりと笑ったのじゃなかった?)。厚く黒い雲が目の前に掛かっている、私の夢は終わりました。私のメルヘンの終わりです」。

メルヘンは終わった。しかしまだ昔の我らの月光の夜は終わっていない。

「それで、グスタフ、邪悪な霊が、...ここ、...かしこに、...」。

こう言いながらエリーゼは自分の側の水盤に手を入れて、手掴みの輝く滴を何も予期していない同伴者の顔に投げ付けた。びっくりして、荒く息をして、グスタフは脇に飛び、一方悪女エリーゼは、ひどい仕返しを予感して、すぐに、水盤を回り、遁走にかかった。

「ご覧の通り、あの娘が始めたことです」とグスタフは叫んで、同じように手を水の中に浸けてから、エリーゼを追いかけた。

「叔母さん、叔母さん、一 叔父さん、助けて」とエリーゼは叫んだ。前掛けを外して、追っ手の走りを妨害しながら、もう一方の自由になる手で、絶えず相手に水を掛けていた。

「待て、水の精」とグスタフは叫んで、前掛けを取り押さえた、「これは頂いた、裏切り者」。

一声叫んで、エリーゼはその防護服を手放した。そして、一 一頭ののろじかのように、彼女はニワトコの灌木の背後の藪に逃げ込んだが、しかしびしょ濡れの追っ手を振り切れないままであった。

「腕白にお転婆」とヘレーネ叔母さんは嘆息して、ベンチに座った。一方私はハンカチや作業籠、そして散らばる林檎を探していた。これらはすべて、このお転婆が自分の暗殺行為の成り行きを予感して、早速地面に投げ出したもので、これらを探すことは、善良な叔父にして後見者の役目であった。「まあ、あの娘の金切り声ときたら」。

我々が更に藪の中の荒々しい狩猟に耳を傾けていると、突然、情景が活気付いて、薄明かりの月の夜、別の人影がやって来た。娘達や男達の声で、くすくす笑ったり、ハミングしたり、オペラのメロディーを口笛で吹いていたりしていた。そしてこの人々が影の中から、噴水の水盤の周りのより明るい照明の中に入って来た。「ヴァハホルダー叔父さん」と訝しげに幾人かの声が叫んだ。更に次の瞬間には我々はこれらの夜遊び人、夜の蝶ども

に囲まれていて、彼らはグスタフとエリーゼの馴染みの友達、女友達と分かった。「ラルフ令嬢はどこですか、リースヘンはどこ、リーゼはどこ、グスタフさんはどこですか、奴はどこに潜んでいる」とこもごも発せられ、返事がなされ、ようやくグスタフとエリーゼが二人の乱暴な狩猟から戻って来た。二人はハアハア言いながら、赤くなり、髪は乱れて、エリーゼは服が大きく破れていて、しかし兩人とも腕を組んで、行儀の良い、仲良しの子供達のようにであった。 — この時ようやく正しい歓声が上がった。「結構なことだ、素晴らしい、最高だ。今晚は、ナターリエ、今晚は、イーダ。御令嬢、初めまして、諸君、暇人よ、どこから来たのだ、等々云々」。

何と青春は素晴らしいことか。何とわずかなもので幸せになれることか。ほんの少しの月光と、二、三の響く水滴、歌の一節、これだけで、若者達の心は、まだ紙片の中で知ることがないほどに詩情を感じず。一方私、この老人は、この若々しい、花と咲く人影、つまり今日、この孤独な夕べ、また自分の周りに浮かび上がらせる人影を皆、その楽しい笑い声、その小さな心配事や歓喜、その些細な罪や徳操、その盗み聞きされた溜め息や更にもっと盗み聞きされた優しさ、その声高な悪ふざけと共にこの年代記の中に定着させようと欲するとき、何という詩人、何という画家でなければならないことか。私がこれまでまとめ上げて、記述して来たことは、すべて何と色褪せて、味気なく見えることであろう。体験したときは何と多彩で新鮮であったことか。

しかし月は突然どこに行ったのだ。南の方で十分に長く威嚇していた黒っぽい雲の塊がいつの間にかこちらへ転がって来た。遠くでゴロゴロ鳴り、呻った。重たくて温かい雨粒が個別に、*lenes susurros sub noctem*[ホラティウス、Oden I,9,19]、つまり夜陰の小声の囁きとして叩き付けた。[夜のとばりに包まれて/小声で囁く逢引の/時が戻って来ているのだ。 鈴木一郎訳]。

皆さんは大都会で突然遭遇してしまう雷雨の際の「勝手に逃げろ[命でんでんこ]をご存じであろうか。すべてのグループが解散して、 — 前掛けが頭上で、ハンカチが帽子の上で結ばれて、こちらではカップルが葉の茂るアカシアの木の下に逃げるかと思うと、向こうでは太った老紳士が一軒の家の軒先の下に逃げる。軽快に若い娘が家々の壁に密着して忍んで行くかと思うと、ゆっくりと平然と自然体人間が歩いて来て、ただ雨から守っているのはその燃える葉巻だけであったりする。

辻馬車は多重化したように見え、「安全な港から難破船乗員を見るのは楽しい」[ルクレティウス、De rerum natura 第二の書、冒頭]。 — それで、すべての窓に笑っている顔が現れる。学生や司法官試補、若い神学者達が眼鏡を拭く。画家はパレットと画架から離れ、生活画のスケッチをする。叔母さん達、母親達は野卑な言葉を叱る。 — パチャ、パチャ。すべての雨樋が意地悪な怪物のようにその水流を駆けて行く人類のうなじに注ぐ。これは、昼間は滑稽でおぞましいが、夜間はただおぞましい。

「ほら、リースヘン、これはあなたが最初望んだことです。 — 水とあんなに長く戯れて、そのせいですよ」と苛立ってヘレーネ叔母さんが叫ぶ。グスタフの歓声は頂点に達して、笑いながら彼は自分の母親を引きずって行く。一方今回私はリースヘンと先頭を駆けている。先ほどの我らの友人や女友達は四方八方に散ってしまった。雷雨が次第に近寄って来て、雷鳴が全く素敵にかなり、稲光も申し分ない。グスタフでさえこう言う。「有

り難や、雀路地だ」。何という洪水か。 — お休み、多弁無用。 — グスタフは母親と一緒にその玄関の奥に消えた。我々も無事我らの玄関に着いた。

「まあ、ヴァハホルダーさん、何と心配したことでしょう」とマルタ婆やが階段から我々に呼びかけた。

リースヘンは口をすぼめてふーっと吹き、喘ぎ、笑い、体から腕と両手を遠く離して、出来るだけ素早くベッドへ送られる。グスタフが勿論向こうから更に幾つか質問をするが、しかしこれに我々は返事をしない。そして月光の散歩は終わった。

四月十五日

以前、再生の月と呼ばれた四月は諧謔の真の月である。雨と日光、笑いと涙をこの月は一つ袋に運んでいる。驟雨と陽光、哄笑と流涕をこの度もこの月は持参した。幾人かがその一部を得た。私はヤヌスのこの両面の顔の月を愛している。この月は片方の顔では、陰気に不機嫌に冬の終わりを振り返って見る一方、別の顔では、若々しく楽しげに間近の春を愛想良く微笑して迎えている。ジャン・パウルの詩のように、この月はその宝物に手を伸ばし、霜と緑の苔み、迷い込んだ雪片と小さなヨモギギク、雨粒と董の苔み、ゆらゆらする暖炉の火とユキノハナ、灰の水曜日[懺悔]の嘆きと復活の鐘の音を一緒に飲み込んでいる。私は、人々が変わりやすい月、移ろいやすい月と呼び、「主君の寵愛と女性の恋心」を[薔薇の花や四月の天候のように]当てにならないものと詩文にしている四月を愛している。

私は今朝すでにかなり早く、私の窓に叩き付ける雨音で目覚めたが、しかしまだ長い間横になっていて、眠りと目覚めの間、この単調な音楽に聞き入っていた。これを利用したのが、陰鬱な立腹という他人の不幸を喜ぶ悪霊で、私を物悲しい雨色の物思いの網の中に絡めて、かくて私の前に世間と人生が悲惨な照明を受けて浮かび上がり、私はとても息苦しくなり、最後ようやく勢いよくただベッドから飛び起きて、その想いから脱出した。

— 四月の天候よ。私はズボンを — 昔、友のヨリックがしたように[スターン、『感傷旅行』の主人公、1768]、早速素早く一廉の哲学者の如く着用して、最初の陽光が矢のように速く、向かい側の家並みの窓や、私に挨拶して頷くシュトローベルの鼻先を滑って来て、私の心に蓄積されていたすべての霧を追い払った。気力を新たにして、私は再び私の「空の仕事」に腰を据えて、それどころか私が昨日図書館から持参した豚革製の埃を被った慰謝物の一つの中で、昔の春の名残の一本の古い干涸らびた花を見つけたとき、この亡き春の子供がこれらの頁の間に挟まれた次第成り行きについて、早速また極めて独自の推測を逞しゅうすることになった。この花はひょっとしたら、とうに過ぎた祝典の日に大昔の同僚が、陽気な野道から採取して来たものではないか。あるいはひょっとしたら、学者の父親の二つ折判の中にその子供達の一人が戯れに押し花にしたのではないか。あるいは一人の学生か何かは恋人から貰って、ここに保存して、そして忘れたのではないか。何と様々な推測であろう。可愛く優美であり、それがありそうでなければならないほど、一層可愛く、一層優美になる。

いや、諸君もただ人生の荒涼たる頁に花々を置くことを心得られたい。余りに利口な頭脳の許で、子供っぽいと言われようが、気にすることはない。諸君は、後々頁をめくって、黄色く変色した記念物に出会っても、後悔はしないことだろう。

交替する月、四月よ、ようこそ、汝、老いたる母親、つまり時間の、甘やかされた子供

よ。

「神よ、汝の息子、ウルリヒ・ゲオルク・シュトロローベルに御加護を。 — お早うございます、ヴァハホルダー親方」と私の背後で一人の声がした。それは戯画素描家で、灰色のフェルト帽を被り、肩に旅行バッグを掛け、手に櫛の杖を持って、私の背後に立っていた。

「いや、まあ、私の時節も終わりました」と彼は笑いながら、続けた。「老公、貴方にお別れを告げに参りました」。

「何と仰有る、去るつもりですか。また何を思い付かれました」。

「ドイツが見つからないときは、

いつでも旅に行きゃしゃんせ」。[『少年の魔法の角笛』1808]

と素描家は歌って、移って行く雲の間の陽気な青い箇所を示した。「これは即ち、自由な広大な世界に顔を出し挨拶したければ、言葉になさいです。あるいはもっと良く言って、出掛けなさい。 — あそこに貴方の雨傘があります。私の伴をしてください。何と陽気に雀が窓の中にちゅうちゅう歌っていることでしょう」。

私は他に仕様がな。私は私の二つ折判を閉じた。酔狂の放浪者は私に腕を差し出して、我々は外の路地に出た。

「ご機嫌よう、ママさん、さようなら、娘さん」と素描家は家の同居人達に呼びかけた。人々は皆驚いて、ドアの許に立っていた。「さようなら、友のマルクヴァルト、お達者で、カルステンおっかさん。さらばです、親方に親方夫人、お達者で、お達者で」と彼は右手、左手に向かって呼びかけた。角で彼はなおも最後の一瞥を自分の退去する住まいに投げかけた。その窓は開かれたままで、千切れたカーテンが陽気に春の風の中、舞っていた。彼は呟いた。「さらば、ねぐらよ」。

「それで、貴方はどこへ向かわれる」と私はこの風変わりな同行者に尋ねた。

素描家は笑った。「貴方は何と仰有るのでしょうか」と彼は言った、「私がオリエントの人々の雑踏を今少し観察して、衣装を描き、そして人類の発展という新しく登場する要素を[英国の]ランカスター大砲や軍艦によってせき止めようという努力を笑いたいと申せば」。

「何ですと」と私は口を開けて叫んだ。

「何にその『何ですと』は向けられていますか」とシュトロローベルは笑った。「私の計画の方ですか。それとも私の意見の方ですか」。

「貴方は思うに、...」。

「私は地球は若いと思っています、老公。我々は新鮮な血を必要としていますし、我々にはただ過去の歴史だけが教えられるからといって、未来の歴史はないだろうとは思いたくありません。我々は余りに何にでも愛着があります。我らの上着に、我らの肉体に、我らの家族に、我らの民族に愛着があります。我々は、親戚の小さな同朋がこの世の明かりを目にし、生まれると喜びます。我々は上着が破れ、魚の目が出来ると腹立ちます。我らの父親、母親が亡くなると、我々は悲しみます。しかし我々はこれらのこと一切を自然なことと見なしています。 — 単に比較的簡単に見過ごしてしまうことがあるからです。

例えば、突然、魚の目になること、生まれること、死ぬことに関し、休止が生じたりしますでしょうか、カフスを付けた機械仕掛けの神が、永遠の生成に割り込んで来て、こう言うでしょうか、ストップ、待て、と。諸君は自ら諸君に生まれなさい、一 安楽死で永眠しなさい、と。バカ言うなです」。

この弁舌家は、自分の葉巻から強烈な煙草の煙を吐き出して、話し続け、一方私は頭を慎重に振っていた。

「ギリシア人にとって、自ら最良の詩人、彫刻家、画家であっても、最も機知豊かな哲学的体系を創り上げることが出来ても、それは何の役にも立たなかったのです。ローマの鉄のような男どもがノックして来て、ギリシア人の教養を競売にかけ、絵画を基に賽子賭博をし、金属製彫像からコリント合金[コリントの焼け跡から発見]を製造しました。かくて一 世界史は一步前進したのです。ローマ人にとって、自ら偉大な戦争の芸術家、統治の芸術家であっても、それは何の役にも立たなかったのです。一 針発銃やランカスター大砲は世界の一勢力に対する戦いで玩具に過ぎません。つまり星座や渡り鳥に影響を与え、然るべき時に諸民族を移動させる一勢力に対する戦いです。この野蛮人達は司令官の言葉を気にしません。彼らがローマの市門を襲撃しました。かくて一 世界史は一步前進したのです」。

私は再び頭を振って、呟いた、「いつも破壊だ、破壊するばかりだ」。

「私の母は、私を生みながら、亡くなりました」と素描家は憤然と言い、立ち止まった。我々は雀路地の出口に達した。荷箱や櫃を積んだ小さな手押し車が我らの道を塞いでいた。「貴方に私が実際行こうと思っている所を、私が行くであろう所の代わりに言いましょう」とシュトローベルは言った、「行きましょう」。

不思議に思って、私は暗い地下の住まいに降りて行く彼に従った。

人間の生活はこのようなものである。長年、かくも長年、私はこの路地に住んでいて、ほとんど毎日この家の前を、この陰気な窓の前を通り過ぎていた。そして今日、ここに住む家族が最後に過ごす日、私は初めてこの湿った階段を降りて、この家族の許へ行ったのである。素描家は私を家の主人に紹介した。靴屋のブルガーで、受難の歴史全体が顔から読み取れるような男性であった。今晚、彼と彼の家族は鉄道で海の方へ向かうのである。そこから船に乗って、新しい故郷、若いアメリカに渡る予定である。そして素描家は、この家族と同伴してハンブルクまで行くつもりである。

この貧しい住まいの数少ない持参に値する所有物はすでに荷物にまとめられていた。両親の青白い、悲しげな顔、今日になってもまだ暖炉の奥のいつもの場所で糸を紡ぐ老祖母の無関心な表情、そして訝しげに隅の方にうずくまっている子供達、これらはすべて私に深く、憂鬱な印象を与えた。

民衆を家屋敷から、町や田舎から追い払い、炭焼きをその森から、鋤夫をおの暗い縦坑から引き掠り、牧人をその高山牧場から下へ導き、彼らを拉致して遠方の西へ向かわせるのは、もはや古代のゲルマン人の遍歴欲求や冒険心ではない。今やこの民を鞭打っているのは、困窮、悲惨、そして圧迫であり、かくて民衆は心から血を流して、故郷を追われている。心から血を流す、というのは、一族は散り散りになっていようとも、国民の性格のあらゆる柔軟さにもかかわらず、つまり容易に余所の独自性に結合して、従属するという柔軟さにもかかわらず、ちなみにこのような従属性にのみ今この折、ひょっとしたらど

イツの世界史的意義があるかもしれないが、一 こうした一切にかかわらず、自分の祖国に愛着する民族は、ドイツ民族の他にないからである。

イギリスの文書ではしばしばドイツはもっぱら「祖国」[the Fatherland]と書かれる。確かにある種の「嘲り」が混じっているが、しかし我らの国民にとっては、一つの名誉であり、我々はこれを誇りに思っている。

いや、ドイツの詩人や文筆家の諸君よ、諸君の民の意気を削ぐようなことは何も言わず、書かないで欲しい。しかし残念ながら、詩文や学問で最も誇り高い名前を得ている諸君は、これを良く行いがちだ。叱り、嘲り、鞭打つがいい、しかしかの気弱な諦念、無関心とは一歩手前のこの諦念を勧めたり、あるいはそれどころか諦念を呼び出そうとするようなことは控えて欲しいものである。

ユダヤ人がバビロンの流れの畔に座っていて、豎琴を柳の木々に掛けたとき、ユダヤ人は泣いたが、こう叫んだ。

エルサレムよ、もしもわたしがあなたを離れるなら、
わたしの右手はなえるがよい。[詩編、137,5]

これらの言葉は十分に力強くて、一民族の痙攣する肢体でさえも、数千年保持することが出来た。

諸君、民族の説教家や後見人よ、諸君は移住者達に故郷の村の賛美歌本の中に聖書の詩句を記入する習慣を有している。こう書き給え。

偉大な祖国、ドイツよ、もしもわたしがあなたを離れるなら、
わたしの右手はなえるがよい。

この銘がすべての心に留まれば、一 祖国は永遠である。

最後の家具がまとめられ、そして路地の小さな手押し車に置かれた。悲しげに哀れな人々が、この家族のすべての受難や歓喜を見守ってきたその荒れた住まいの中で見回していた。

「厳しいことだ、厳しいことだ」と嘆息して、親方が言った。シュトローベルは軽く彼の肩を叩いた。

「時間です、大将。心を引き締めて、貴殿の女房殿の良き手本となって、先を行きましょう」。

「墓掘り人が約束してくれました。自分が向こうのフリッツの墓は大事に守ると」と夫人が嗚咽した。

ブルガーは袖で目を拭いて、その物思いから立ち上がって、自分の年老いた母親を上へ導くために向かった。彼の妻は声高に泣き、窓台の縮こまったミルテから枝を一本折って、自分の賛美歌本の中に挟み、末の子供を抱いた。一方他の子供達は彼女の前掛けやスカートを掴んでいた。一家はその狭く、黒い階段を上がって、上の通りへ出た。一 一家の長い旅が始まった。

交替の四月に相応しく、外では雨は上がって、陽が照っていた。親方はその手押し車を先に引いて、我々他の者達に従った。狭く、暗く、貧しい雀路地に最後の一瞥を投げ給え。君達は多分十分によくこの路地を思い出すことだろう。 — それから広大な世界へ旅立ち給え、遍歴の諸君。

私は素描家とその庇護者達を市門まで案内した。最後の握手と最後の挨拶である。シュトロローベルよ、今一度再会することがないか、誰が知ろう。ご機嫌よう、ご機嫌よう。 — そしてまたしても私は孤独に、一人っきりになって戻ることになり、孤独に一人っきりで、雀路地年代記のこの頁を記している。

五月一日、夕方

私は今日の午後、外の公園の温かい陽射しの中に座っていた。この陽光は、明るく陽気に、かなり高い木々のまだ葉の欠けた枝越しに、また華奢な芽生えた新緑の低い藪越しに届いていた。春の花々の束を持った子供達が私の側を通り過ぎて行き、一匹の甲虫がその脚に撚り糸を付けて、寝惚けて、私の側の小枝に掛かっていた。上着ポケットから一冊の本が背後に見える一人の出不精顔の若い男が丁寧に一本の植物を掘り起こしていた。素晴らしい春の午後である。すると突然町で鐘が鳴り、明日は日曜日であると告げ始め、そして再び、「天の音色」[天の声等、『ファウスト』鷗外訳、762f.]に運ばれて、甘美な思い出が浮遊して来た。

かつて五月一日であった。その時春は新緑と、巣作りの燕、そして晴れの — 古く、薄暗い雀路地での結婚式当日と共にやって来た。人々は花を撒き、柱に花と葉飾り花輪を巻き付けた。人々は雀路地で盛装をしていた。皆が愉快的な、愉快的な顔つきであった。天は青く、太陽は木蔭越しに輝いて見えた。この木蔭は何年も前に、マリー・ラルフがウルフエルの森から掘り出して来たものであった。しかし天の青さも、陽光も、神聖な純粹さという点で、かの五月一日、私の肩にすがって、涙ながらに私に微笑して見上げていたかの顔に及ぶものでなかった。母親の肖像画がその枠縁と、この日巻き付けられて花輪の中から、同じように微笑して我々を見下ろしていた。至る所、微笑、微笑である。そしてその若い娘の心が私の胸元で動悸して、反対側ではグスタフが私の肩に腕を置いて、そしてヘレーネが泣きながら若い花嫁の巻き毛に花輪を被せたとき、私にとって、今や長いこと解けないでいた謎が解けたように思われた。そして私は、運命を司り、揺り籠の子供や、死に際の国民に目を注いでいる神秘に満ちた威力に対し、頭を下げた。ここ哀れな路地で、一つの新しい絆として結ばれるために、所縁の糸はどのように転がって来なければならなかったであろう。一つの新しい幸福を芽生えさせるために、いかに多くの心がほとんど裂けそうになったことか。これは世界霊が人生の豎琴で奏で、母親がその子供の微笑の中で、思想家が自然の花弁や歴史の頁の中で、聞き取る偉大な、永遠のメロディーである。

我々はかの日、多くを語らなかつた。幸福は啞であり、愛が — 神の真の啓示が、 — 互いに囁くこと、これをまだどの詩人も、パピルスや羊皮紙、あるいは紙面に定着させたことがない。その若い画家が、 — この画家はきつとこの時、自分の称賛された絵画を、つまりローマの牢獄にいるガリレオを訪ねているミルトン[史実としては不詳]の絵を考えていなかったであろうが、この若い画家がその美しい花嫁を飾られた、蠟燭の輝く祭壇へ導いた時、その小さな教会は全く祝祭的に神聖であった。そして参加者一同の顔ぶれ

には欠ける者は誰もいなかった。アトリエの者達がいた。エリーゼの女友達がいた。とりわけマルタ婆やと家屋の同居人達、そして雀路地の隣人達がいた。 — そして新婦エリーザ・ヨハンナ・ラルフと新郎グスタフ・テオドール・マクシミリアーン・ベルクは全く小声の、小声のハイの言葉と、かなり困惑するような質問に対する別のとてももっと大声のハイの言葉によって、夫と妻になった。 —

路地の年代記は終わりに近付いている。私は更に何を多く語ることがあろう。我らの子供達は美しいイタリアで幸せに過ごしている。マルタ婆やヨハニス墓地のマリーの墓塚から遠からぬ所に眠っている。私は年老いて灰色髪である。ローマから小荷物が届くと、私は向こう側の、親切で、美しく、白髪の夫人の許へ行く。夫人は向こうのそこ十二番地で、編み物をしながら窓辺に座っていて、我ら老人の心は、我らにびっしり記述された紙片から照らし出される最新の人生の幸せに触れて一層高く動悸する。我々は子供達に従って、すべての新旧の名所を廻る、我々は子供達と一緒にラオコーン像の前に立ち、子供達と一緒にカピトルの丘に登る。我らの足音は、子供達の側で、ヴァチカンの広間で、またラファエロの列柱廊で反響する。すべての手紙が魅力的なメルヘンの唐草模様である。どの紙面も青い空と太陽と愉快的な笑いである。

私がこの頁を書いている時は深更である。路地は深い闇に包まれている。照明の漏れる窓は一つもない。私が耳にする唯一の物音は、塔の時計を打つ音か、あるいは夜警人の鋭い笛である。私の前にすべての書き散らした台本がある。 — これは十分多彩に見える。

—
まだ言い添えることが多くあろうか。老いた年代記作者がそのスケッチをその晩年の日々にまで書き続け、その作品が終わったら、彼らは更に若干の白紙の頁を最後に添えて、この所有者が、世界の没落前にまだ生起するであろう「わずかな」出来事をそこに追記できるようにする。私はこの真似をするつもりはない。この地球はまだ長く自転するであろうし、この狭い路地にもまだ幾多の子供が生まれるであろう。幾多の死骸も運び出すだろうし、これらの中にはひょっとしたら遠からぬ日、ヨハネス・ヴァハホルダーと呼ばれる者もいるかもしれない。 — 私にまだ残されている数日に生ずるであろうこと、これを私は静かに待つことにする。多くの新奇なことは見られないであろう。 —

私は窓を開けて、外の暗くて、静かな、温かい夜を覗く。ここかしこで黒い天の覆いに孤独な星が微光を発している。何と荘重に鐘の音は夜間、響くことか。十二時だ。この音はいかほどの夢の中に絡んで行くことだろう。詮索好きな学者は、うろたえて、その本から見上げるかもしれない。若い娘はダンス音楽や舞踏会音楽を夢見ているかもしれない。哀れな病人は翌日の快癒を祈願することだろう。母親は眠りの中で、その小さな子供をよりしっかりと抱き締めることだろう。君主は、額が革命の時代の王冠の圧力で傷付いており、頭を枕に沈めて、嘆息することだろう、新しい朝だ、と。 —

私のランプは揺らめいて、燃え尽きるのが近い。私は疲れた手で、窓を閉め、そして最終行を書き記す。

お元気で、皆様、日中、夜間の心の友の方々。お達者で、汝、偉大な夢想家の祖国よ。お達者で、汝、小さな、狭く、暗い路地よ。お達者で、汝、偉大な、永遠の愛と呼ばれる創造的力よ、 — アーメン[合掌]。これをもって雀路地年代記の終わりとする。

黒いガレー船

(Die schwarze Galeere 1861)

史的物語 (Geschichtliche Erzählung)

I. リーフケンスフク砦の防塁で

一五九九年の十一月はじめの暗い、嵐の夜であった。スヘルデ[エスコ]川のフランドル側岸辺のリーフケンスフク砦のスペイン人歩哨が警報を出し、太鼓が眠っている守備隊を目覚めさせ、各人が一司令官並びに兵士が、一防塁でのその部署に就いた。

スヘルデ川の波は高く隆起し、しばしば波はその泡立つ飛沫を、胸壁の壁を越えて、凍えている南国人の顔に投げ付けた。風は北東、「属州[北部七州]」から鋭く、ピューピュー吹いて来て、スペイン人達はすでに長いこと、この方向からは何も良いことはないとは承知していた。

リロ砦でも、これはこの川のブラバント側にあるが、太鼓が連打され、角笛が鳴った。明確に人々は嵐の轟音の中、水面のざわめきの中、遠方の大砲の雷鳴を聞いた。これはただスヘルデ河口[ヴェスタースヘルデ]での海戦に由来するものに他ならなかった。海上ゴイセン[オランダ水軍、ゴイセンは乞食の謂]は昔からの芝居を演じていた。

嵐と闇のこの両生類一族は何を気に懸けようか。嵐と夜とは彼らの最良の同盟者ではないか。海上ゴイセンがかつて嵐の海と闇とを恐れたことがあったろうか。彼らの不倶戴天の敵を謀りにかけ、海戦に負けた祖国の侵略者達や略奪者達を打ち負かすべきときに。

しかしその戦争はおぞましきものに悪化していた。

今やすでに、この戦っている両陣営の恐るべき一進一退は、三十二年間続いていた。その上その終わりは見えなかった。撒かれた竜の歯は豊饒に育った。[ゼウスの子、カドモスは、アテネ女神の命令で、自分によって殺された竜の歯を撒いたところ、一群の武装した男どもが育った。男どもは殺し合った]。確かに鉄のような男どもが、流血の肥やしの大地から生長して来たことであろう。女達でさえ、何が人間的なこと、穏やかなことであるか、学習できなくなっていた。それ故すでに平和を願わない若い世代が存在していた。平和というものをそもそも知らないのである。

元来固い陸地での戦争は恐ろしいものであるが、海上では更にもっと戦争は恐ろしいものとなった。陸地では捕虜はそれでもまだ交換されたり、あるいは金で解放されたりする。都市や、市場町、村々は金を出して、放火や略奪を免れた。しかし海上ではつとに長いこと、命乞いも身代金も認められなかった。敵の捕虜を速やかに刺し殺したり、あるいは帆桁に吊したりすれば、ゆっくりとごく残忍なやり方で苦しめて殺す場合や、甲板で十字架に掛けたり、没収した船で焼死させる場合と違って、慈悲深いと評価されていた。

リーフケンスフク砦の防塁では、司令官と兵士達が格別な注意を払って砲撃に耳を澄ましていて、互いに推測を述べ合っていた。ある者は戦闘者達についてその見解を述べ、別の者はまた他の見解を述べた。しかし最後に、最初はより小声であったが、しかし段々とより明確に、より大声で、口々に兵士達の間でこう述べられた。

「黒いガレー船だ、またしても黒いガレー船だ」。

各人が怒りと不気味な胸騒ぎの混じった声で、こう発した。

「黒いガレー船だ」。

一時頃、風が収まった。そして砲撃も止んだ。しかし一時二十分過ぎ、突然遠く離れた箇所、血のように赤く、稲光のように、暗い海上で燃え上がった。そしてその明かりが、リーフケンスフクとリロの壁上の何百人もの髭面の野蛮な顔の上に痙攣して煌めいた。半

秒後、この照明に続いて、より大きな爆発の鈍い轟きが響き、この戦いは、悲劇が一つの破局で終わるように、終わったかに見えた。人々はこの戦闘の継続を示すようないかなる兆候も目にし、耳にしなかった。スペイン人の要塞の守備隊は更に長く待機していて、耳を澄ましていたが、もはや砲声は聞こえなかった。 —

「それでは、ヘロニモ殿、貴殿はどう思われる」とリーフケンスフクの司令官は大尉の一人に尋ねた。灰色の髪と髭の、初老の、萎びた男で、頭から足先まで傷跡がある。

「殿、私に聞かないでください。神様と聖母にかけて、この戦争の成り行きに頭を悩ますことは、とうに放棄しています。甲冑は私の肌ほとんど張り付いていて、私は最後の日まで自分の部署を守ります。しかし — それで十分です」。

「ヘロニモ、貴殿はとても無愛想だな」と司令官は言った。司令官はこの老兵よりも、はるかに若い男で、最近ようやくカスティーリャからネーデルラントに赴任して、スヘルデ川のこの砦の司令職に就いたのであった。

「大佐殿」と大尉ヘロニモは言った、「何年も長い間、私はこの大地の先端で、私の職を守り、波が流れて行くのを見えています。貴殿の前任者も若くて、貴族でした。彼はここ私の横に立って、貴殿が今立っている同じ場所に立っていて、若者らしい夢や勝利の希望に満ちていました。ところが今、波の下です。そして彼の前任者は、トゥルンハウト近郊で弾に倒れました。彼もやはり勝利の栄冠を得て、タラタ河畔の自らの宮殿とその妻の許に凱旋することを考えていました。 — 嗚呼、パーです。そこで私は指を折って、私がマドリッドから戻って来た一五八五年の年末まで数えてみます。 — 殿、当時私はまだこの戦争での勝利と栄誉とを信じていました。私はそれを信ずることを止めました。大佐、貴殿もそうなさることでしょう、神様が貴殿の命を守られる限り」。

「大尉、貴殿の夢想は暗いな。しかしかの永遠に記念されるかの年に、貴殿はマドリッドへ帰ったと貴殿は申すのか」。

「そうです」。

「我らの偉大な皇子がアントワープを取り戻したかの栄光の年に」。

「そうです」。

「それでは貴殿は、勝利者たるアレッサンドロ・ファルネーゼ[1545-1592]と一緒にこの町に入城したのだな。幸せ者だな」。

「違います」と老兵は陰気に言った、「私は凱旋入城には加わっていません。私は別の任務を与えられていて、それは当時我が陣営ではとても羨望された任務でした。私はその勇猛な皇太子から、この町のフェリペ殿下[フェリペ二世、1527-1598、今は1599年]、 — そのご冥福を祈りますが、 — この殿下への譲渡の知らせを託されて派遣された使者だったのです」。

「貴殿がか、貴殿、ヘロニモ大尉は、このような知らせを国王に託されたのか。 — いや、三倍も幸せ者だ。そのことを話してくれ。いずれにせよ、我々はまだこの防塁を離れるわけに行かんだろうから」。

守備隊の他の将校達も次第にこの司令官と大尉の側に近寄っていた。今や彼らは注意深い聞き手としてこの両者を囲んでいた。この老ヘロニモの話しを聞くことは、度々あることではない。

「何を話したらいいでしょう」と大尉は始めた、「一五八五年九月四日から五日にかけ

ての夜、私は私の息の上がった駄馬をマドリッドの宮殿の前で止めました。ー 私はこの町の生まれで、皆様、私の心はマンサナーレス川のざわめきを再び耳にしたとき、私の心は高く動悸したと話してよろしいでしょう。私はこのざわめきを野戦病院にいたさして遠くない前、創傷熱での夢の中で十分によく聞いたものです。この願いがかなって、私に託された誇り高い使命を考え、自分の夢想する夢物語のような報酬を期待していると、私の血は血管の中でより激しく巡っていました。ー 闇と墓場の静けさが砦や町に見られました。後で耳にした話しでは、前日に大きなアウトダフェ[異端尋問、火刑]があったそうで、住民は祭典後の酩酊の眠りにありました。ー 皆が眠っていて、国王フェリペ殿下御自身も眠っていました。見張りは、私の疲れた馬が舗石に私を乗せたまま崩れ落ちた時、瞬時に私の胸に鎌槍の先を突き付けました。私の馬同様、これまでの乱暴な騎乗で息が上がっていましたが、しかしまだ十分に喘ぎながら言う力が残っていました。『フランドルからの手紙です。国王宛の手紙です。パルマのアレックスサンドル皇子からの手紙です。勝利です』。ー 武器が下げられ、廷臣が駆けて来て、私を問い質しました。それから私は宮殿の様々な広間を通過して、我らの主君の寝室まで案内されました。私の心臓は、私の疲弊しきった肢体同様震えていました。私は国王の寝室で、国王のベッドの側で跪き、国王に偉大な皇子の手紙を差し出しました。私の目はかすんでいました。両肘を付いて、我らの主君フェリペ殿下はその書状を開封し、その鋭い、また臆した目でざっと読まれました。ー 侍従長が黄金のランプを持っていました。ー 永遠に私は国王のお顔と黄色く、青ざめた面影に過る震えを忘れないことでしょう。国王はその臥所から高く起き上がって、痩せて、弱々しかったけれども、ほとんど叫び声のような声を発せられました。

『アントワープが落ちた、アントワープが落ちた』と

そして廷臣の手の中のランプも震え始めました。ベッドから国王は起きて出て来られました。その際作法に全く反して、国王は私の肩を、単純な、道中の埃と汗にまみれた兵士の肩を支えにしました。貴族の殿方らが国王の肩に上着を掛けられました。ー レパント沖の勝利の知らせ以来[1571年10月7日、スペインはトルコ軍に海戦で勝利]、このような喜びの知らせが国王の耳に届くことはなかったのです。宮殿の廊下を通過して、国王は急ぎ足で自分の寵愛の娘、クララ・イサベル・エウヘニア嬢[1566-1633]のドアをノックしました。この折、カトリックの陛下[スペイン国王のこと]にとって、その作法はお構いなしです。ー この王女のドアをノックして、少しばかり開け、頭を寝室に入れて、寝惚けてびっくりしている娘にこう囁きました。

『アントワープが落ちた、アントワープが落ちた、クララ嬢』。

それからこの大きなニュースが広まると、どんなに宮殿は興奮したことでしょう、...」。

「それで貴殿は、へロニモ殿は」とリーフケンスフク砦の司令官はその大尉に尋ねた、「このような喜ばしい栄光の知らせに対して何の報酬を得たのだ」。

「そうだ、へロニモ、貴殿は報酬としてカラトラバ騎士団員に選ばれたのではないのか」と他の将校達は尋ねた。

「いや、私はカラトラバ騎士団員にはならなかった」と老兵士は答えた、「私の報酬として、そうだな、黄金のネックレスをこのカトリックの陛下は私の首に掛けさせ給いて、それに大佐任命書も頂いた」。

「ほう」と司令官は言って、他の指揮官達ももっと近寄って来た。

「勿論」と老公は言った、「貴殿の視線の仰りたいことは私にも分かります。大佐殿。こうでありましょう。それでは何故貴殿は今私の配下として、半ば傷病兵の傭兵としてここに立っているのだ。そうでしょう」と彼は尋ねて、周りの一同を眺めた。「それでは貴殿らにそのことも話しましょう。乗りかかった船です、若い衆、両耳をしっかりと開けてください。諸君らには一つの教訓であるかもしれない。一五九一年七月十三日、ファルネーゼ皇子は、ニムヴェーゲン[ネイメーヘン]の向かい側、クノッツェンブルフ砦の前に陣営を張って、そこを攻めることにしました。しかしネーデルラントの指揮官、ゲルハルト・デ・ヨンゲは勇敢な男で、我々に流血の難儀を強いました。彼を救援するために、モーリッツ・フォン・オラーニエン[マウリッツ、オラニエ公、1567-1625]もアルネムを越えて、ベータウに迫り、伏兵を置いた後、我らの陣営まで偵察に来ました。そこで我々は敵に対し馬で打って出ました。七名の騎兵旗手や、スペイン人やイタリア人の槍騎兵達です。大胆な騎兵達が騎乗していたと言ってよろしいでしょう。フランチェスコ・ニチェリ、アルフォンソ・ダヴァロス、パディラ、ヘロニモ・カラッファ、デチオ・マンフレディその他です。私はその日、公爵の騎乗旗手を率いていました。 — 悪夢の日です。敵に向かって行きました。敵は素早く引きました。結局、 — 我々は伏兵にしてやられ、最後の男まで倒されました。いや、聖なる神様、三十もの傷を、名誉の傷跡を私はそれまで体に帯びていました。すべての戦いで私は血を流して来た。ところが今回、 — 今回、同伴者は皆、傷を負い、亡くなって、戦場に倒れたとき、私のみが無傷でした。パルマ公爵[アレックスandro・ファルネーゼ]の栄光の騎兵隊旗は、私が率いていた旗は敵の手に落ちていた。それには刺繍されたキリストが描かれていて、銘はこうでした。『主ハ強者ノ戦利品ヲ分カツデアロウ』。 — かくて私の武運は地に落ちました。翌日、フェリペ殿下から頂いた私の黄金のネックレスは剥ぎ取られました。私の職には、より幸運の者が就きました。私は卑しい傭兵として群衆に紛れ込むことが許されました。私は私の名前を投げ棄てて、ドイツの連隊に仕えました。一時間のことで私は灰色髪の背の曲がった男になり、今の名前の許でまた大尉になったのです。それで、 — 諸君、司令官、配下の者を、皆の衆、同僚を、 — 見棄てないで頂きたい」。

リーフェンスフク砦の司令官はこの語り手に手を差し出して、黙って、衷心から握手した。他の者達も寄って来て、彼と握手した。

「十分です」と老公は言った、「いずれにせよ、すべては結局同じことです。いかほどの栄光、名誉、評判が消えて行くのを私は見て来たことか。 — エスコリアル修道院にフェリペ二世殿下は永眠されている。パルマでは偉大なアレックスandro殿下が永眠されている。 — フェルナンド・アルバレス・デ・トレド[第3代アルバ公、1507-1582]はどこか。我らの強大な敵、ウィレム沈黙公[オラニエ公、1533-1584]はどこか」。 — 「敬虔なアエネアースはどこか、神々しいトゥルスとアングス[いずれも古代ローマ王]はどこか。[ホラティウス、Oden、IV,7,15]」とサラマンカの大学校を逃げ出して来たばかりの若い旗手が笑った。[われらは祖先のアエネイスや、豊かなトゥルスやアングスが/下った黄泉に行くならば、/塵、亡霊となるのだから。鈴木一郎訳]。しかし誰も彼に注目しなかった。ヘロニモ大尉は続けた、「十分です、戦友。誰もが自分の義務を果たして、自らを実直な男と見なすべきでありましょう。司令官殿、郎党の銃を始末させることです。さもないと明日赤痢で郎党は役目をこなせなくなりましょう。向こうの海上の事件は終わりです。 — カトリックの陛下、

フェリペ三世とそのジェノヴァ出身の恵み深い提督、フェデリコ・スピノラは立派な船を一つ失いました。明日きっと詳しいことが分かりますよう」。

「貴殿はそう思うのか、不吉な予言者よ。いや、貴殿の悪魔的な不運のせいで、貴殿は新鮮な度胸をはなはだ削がれている。勇気をだしなされ、実直なへロニモ」。

大尉はただ両肩を竦めた。

「それでは、構わん」と司令官は言った、「防塁を撤退する合図を出すがいい。後ほど、諸君、皆をワインの酔いへ招待致そう。今夜は諸君の誰一人もはや眠れないだろう。皆の衆、勇気を出せ、スペインは不滅だ」。

将校達は彼らの司令官の最後の言葉を模して、叫んだ。しかしかなり困惑した声であった。それから太鼓が連打され、部隊はリーフェンスフク砦の防塁から撤退した。

しかし司令官はまだ残っていて、胸壁の壁に嘆息しながら肘を付いて、両手に顎を乗せた。かくて彼は外の水面と夜の闇を凝視して、呟いた。

「彼の言う通りだ。これがこの戦争の嫌な点だ。この防塁に、そしてアントワープの市壁と塔の上にスペインの旗がまた翻ってから十四年になる。しかしだからといって、この英雄的な頑固頭の民族に対して、勝利の点で一步でも前進したか。この小さな沖積土の大地の上でいかほどの男達が戦って、血を流したことか。この地点のためにいかほどの男達が戦ったことか。輝く星々のように、これらの時代を通じて、敵味方の名前が煌めいていることか。アレッサンドロ・ファルネーゼ、マンスフェルト、モンドラゴネ、ヨハネス・ペティン・フォン・ウトレヒト、アルデゴンデ、ジャニベリ、ヨハネス・バプティスタ・プラート、バライ、カピズッキ、オリヴェラ、パス、ラ・モッタ、デルモンテ、その他百人のもの。しかし何千人もの名もない者達が向こうの砂の下、潮流の下に横たわっている。 — これから更にいかほどの者達が沈むことだろう」。

守備隊はとうに撤退していた。リーフェンスフク砦の防塁では巡視の呼び声とその足音、波とまた目覚めつつある嵐のざわめきの他はもはや何も聞こえなかった。

司令官は今一度、壁の中を歩き回り、見張りを倍増させて、見張りに油断しないよう厳命した。それから彼も下って行き、自分の住まいを開けた。そこでは彼の将校達が、彼の招待に応じて、すでに皆集まっていた。ただへロニモ大尉だけは欠けていた。彼は戦友の酒宴ではいつも欠席する習慣であった。人々はそれを大目に見、残念に思ったが、彼の予言について冗談を言い、笑っていた。

しかしこの老公の言う通りであった。多分この嵐の夜、カトリックの国王とジェノヴァのフェデリコ・スピノラは立派な船を一艘失ったのであった。翌朝、無垢受胎号の炭化した残骸が南ベーヴェラントの砂丘に、この異教徒の民の足許に打ち上げられた。そして夕方の潮流はスペインの懸章の付いた切断された死体を複数パーツ砦の壁に運んで来た。へロニモ大尉の不吉な予言は当たった。海上ゴイセンは夜間の戦闘で勝利を収めていた。

II. アンドレーア・ドーリア[ジェノヴァの提督、1468-1560,シラー『フィエスコ』参照]号の船上で

アントワープの町に獵師達は夜間の出来事の知らせをもたらした。それぞれの鼻根の筋に応じて、住民達の秘かな歓声と声高な憤慨は大きなものであった。

町でも迅速に民衆の間に「黒いガレー船」の名前が伝わり、確信の大小はあれ、災難の出来事と結び付けられた。

昨夜のような嵐の夜に、黒いガレー船の他にそのようなことが出来るものがあるだろうか。

広場や路地、工房、教会、市役所、そして城砦で、その言葉が聞かれた。町の市壁や家々のすぐ近くの波止場で、錨を下ろしている軍船や商船の上でその言葉が駆け巡った。至る所で、話したように、顔の上に狼狽や秘かな欣喜雀躍が見られた。

「黒いガレー船だ、黒いガレー船だ」。

スペインの国王フェリペ三世とある契約を結んで、このカトリックの陛下への軍務のために、ネーデルラントの反乱者達に対する軍船を準備し、この船を北海へ運ぶことにしたのは、フェデリコ・スピノラ[1571-1603]、ジェノヴァの名門貴族で、この豊かな共和国の有名な一族の行動的息子であった。異教徒から没収したすべての戦利品、すべての船が、提督フェデリコの所有物となった。かくて彼はかなりの数のガレー船とガレオン船[多層甲板船]に千六百名の大胆な男達を乗せて、ジェノヴァから出発し、ジブラルタル海峡を通り、フィニステレ岬を回り、ビスカヤ湾では相当数の向こう見ずなビスカヤの海賊や私拿捕船を自分の軍船に臣従させ、同様に相当数のダンケルクの海賊も従えて、一五九九年九月十一日、スライスの港に現れた。

初めて北海の波はこのラテン民族の權による船に鞭打たれることになった。これまではただ地中海の住民達のみがこのガレー船を操っていたのである。かくて、勇猛な、何をも恐れぬゼーラント[オランダの州]の船乗りでさえ、このガレー船に対しては未知のものへの恐怖を抱くことになった。これらのガレー船は、巨大な水中甲虫さながら、数百の權の足で波を叩くのである。

かくてフェデリコ・スピノラは最初、立派な成功を収めて、ネーデルラント人の幾多の豊かな荷の商船や、幾多の貧しい漁師の舟を拿捕したが、しかし最初の恐怖は後々、克服されて、ネーデルラント人は新たな敵の体に、より大胆に向かって来るようになった。ネーデルラント[Generalstaaten]は数多くの艦隊を送り出して、熱い戦闘で数多くの敵側の海賊船を打ち破るばかりでなく、恐ろしいガレー船の一艘をも拿捕した。

勝利したネーデルラント人はこの珍しい船をアムステルダムまで運んだ。ここでこれをモデルにして、類似の船が建造された。極めて豪胆な心と手先の者達が乗り込んだ。その色は威嚇的に黒であった。やがてすぐにこの　　ー　　黒いガレー船はスペイン人とフェデリコ・スピノラ提督にとって恐るべきものとなった。このジェノヴァ人の投機[思惑]はこの時からもはや当初の時ほどの立派な成果を上げなくなった。　　ー

このように黒いガレー船は精霊船、幽霊船[さまよえるオランダ人]ではなく、木と鉄の作品であった。そしてその乗員も幽霊の群れではなかった。肉と血を持った生き物が、ロープをよじ登り、帆を上げて、旋回砲に充填し、火縄銃に点火し、敵の船上に野蛮な雄叫びを上げて乗り込んだ。

「坊主[カトリック]よりもトルコ人がましだ」。　　ー　　ー

大きな商都アントワープの広場や路地では、民衆が黒いガレー船について語り合っていた。立派な權の船、無垢受胎号が昨夜ゼーラント人[ネーデルラント人]によって空中に爆破されたという噂についてどの近隣の者も詳細を知りたがっていた。

それからまた次第に夕方となった。濃い霧がスヘルデ川から上がって来て、アントワー

ブの町全体を覆った。波止場の明かりはこの霧の中、赤い微光を発生し、ガレオン船アンドレーア・ドーリア号の索具から湿った滴が滴った。この船は市壁や家々のすぐ下の波止場に投錨していて、その甲板では船長[大尉]のアントニオ・ヴァラーニ、およそ三十歳の若い男が、外套を羽織り、あちこち歩いていた。一方川の波は軽くパシャパシャとその船の腹部を洗っていて、波止場と町からはまだ鈍く、活気ある住民の物音がざわめいて聞こえた。

丁度船長がその行き来を中止して、市壁を越えて微光を発生している町の明かりの方を凝視したとき、彼の側に少尉レオーネ・デラ・ロータ、ジェノヴァはジュリア通り出身の青春の友が現れ、彼の肩に手を置いた。

「アントニオ、物思いか」。

話しかけられた相手はほとんどびっくりして上の方を見つめた。

「いや、君か、レオーネか。外からニュースを持って来たのか」。

「そうだ、しかし残念ながら悪いニュースだ。リーフケンスフク砦から提督宛のものだ。昨夜の話は本当だとさ。無垢受胎号は悪魔に掠られた、船も乗員も、男も鼠も。ただ船室系の少年のみがパーツ砦付近に空の水樽に乗って生きて陸地に着いた。すると異教徒達の間で、大きな歓声が上がって、そしてゼーラントの女どもが、一 身震いのするほど醜い奴等で、アントニオ、一 この若造を綺麗に拭いて乾かして、この若造を、こちらの総督閣下に対して忌々しい世辞を添えて送ったのだ。この若造は上の城砦にいる。多分直に提督殿から知らせがあるう」。

「そうであって欲しい」とアンドレーア・ドーリア号の船長は叫んだ。不機嫌にその甲板を足で踏ん付けていた。「レオーネ、もはや我慢ならない、ここでかくも無為に停泊しているなんて」。

「無為にか」と海軍少尉は笑った。「その点、私はヴィーナスの美しい体にかけて、承服しかねる。我々はここに停泊している間、それほど無駄に時を過ごさなかったと思いたい。畜生、だって、何と誇り高い征服を、向こうの居酒屋、アルカンタラ[スペインの町]の紋章亭で、丸々とした女将に対して私は果たしたことか。だろう、アントニオ」。

「君は人生をまだ軽く考えている、レオーネ」と船長は嘆息して言った。

「そうか」と少尉は笑った、「しかし友よ、自分の胸をしかと確かに保って、私に向かってそのような嘆き節を吐かぬことだ。いや、そんなに惨めに嘆息して私から視線を背けないでくれ。ほれ、私の指先を見てみろ。一 向こうだ、見てみろ。向こうの市壁の上のかの明かりだ。一 かの角の窓の中。ただ私の指先を追ってな、一 見えるか。いや、アントニオ、アントネロよ。船長よ、船長。そこに誰が住んでいるか。誰がかの明かりを点したか。分かるか。あの娘は、この北方にある国が、言うなればこの北方にある沼地が、かつて、当地で雨が降る限り、これは思うに、とてつもなく長い時間であるが、一 生み出した中で、最も可愛い娘だ。おい、アントニオ・ヴァラーニよ、この結構なガレオン船アンドレーア・ドーリア号の船長よ、身も心も、この美しいフラマン娘の両の青い目とブロンドのお下げ髪に参ってしまったのではないか。...またしても溜め息だ。アントニオよ、アントニオ。我らの親愛なるフォン・キューテラ夫人[ヴィーナス]にかけて、君はとても悲しげな独身男だ」。

不機嫌に船長はそっぽを向いた。

「レオーネ、ほっといてくれ。 — 頼むから、君は君の太った女将の許に行けばいい。君には丸一晚、最初の鶏鳴まで暇をやろう。ただ君と君の減らず口をこの船から遠ざけるためだ。行くがいい、頼むから、行って、君の陽気な顔でこれ以上私を苦しめないでくれ。まこと、君には軽快な血と陽気な生活意欲を恵むことにしよう。しかし君が私の友なら、私には一人っきりの時間を与えてくれ。私の心は寂寞としているのだ」。

「アントニオよ」と少尉はより真面目な声で言った、「アントニオ、私の名誉にかけて、私は君を苦しめたくはない。アルカンタラの紋章亭の太った女将は待って、好きなだけドアの方を見つめていたらいい。 — 私は行かない。畜生、兄貴、どうしたのだ。打ち明けてみる。何を悩んでいる。スヘルデ河口からの悪い知らせのことではなかろう。打ち明けて。私が冗談と思って、冗談めかして言ったことが、実は本当のことなのか。君は本当にブロンド娘の魔法の絆の虜になってしまったのか」。

船長アントニオはここで、返事をせずに、まさしく深く溜め息を吐いた。そしてレオーネは続けた。

「しかし彼女は君に対してつれないのか。バルビー通り、我らの愛する祖国、誇り高いジェノヴァの他のすべての通り、路地、袋小路におけるすべてのレディー達の寵児たる君に対して。パフォスの女神にかけて[アフロディーテ、ヴィーナス]、これは処罰に値する、厳罰に値する。いや、これは誑かす野蛮人の娘だ。...アントニオ・ヴァラーニ、上司にして友よ、私は剣と心と頭脳を持って、君への加勢として君の側にいよう。この可愛い娘を君になびかせるために、我々はどうしたものだろう」。

その後船長と少尉の間で話されたことは、中断され、[船から波止場への]道板上の見張りの海軍兵士の呼び声で、失せてしまった波止場から太鼓の連打が響いて来て、松明が輝き、武器が煌めいた。フェデリコ・スピノラ提督が、アントワープの市壁下、自分の艦隊のアンドレーア・ドーリア号や他の軍船の様子を視察に来ていた。提督は極めて不機嫌であった。アントニオとレオーネは、提督を迎えに駆け寄ったとき、十分そのことに気付いた。とても憤然として、フェデリコ殿は、アンドレーア・ドーリア号の船上、彼の周りに集まった船長達の輪の中、地団駄踏みながら歩き回っていた。昨夜の不幸な戦いが彼の心に重くのしかかっていた。このような経過が続けば、この仕事は、スペインのフェリペ三世殿下がこのジェノヴァ貴族の署名の上で、国王たる余として、約束された報酬、羊皮紙上の契約に記されている報酬を得られそうにない。

「お主らは、皆出航せい」と船長達の輪の中、フェデリコ殿は憤然と叫んだ。「海に出よ、そしてこの邪悪な黒いガレー船を拿捕せよ。乗員全員をその帆桁に吊して来い。奴等を地獄に送れ。構わん、明日早朝、ここにまだ停泊している四隻のガレー船は錨を揚げるのだ。お主らは聞いているのか。アンドレーア・ドーリア号のみはここに残れ、そして詳細な命令を待つのだ。聞き給え、ガレー船の諸君、 — 明日早朝だぞ。司令はすでにスライスの当地の指揮官達に、同様にすべての自由になる軍船は海に出よう知らされている。黒いガレー船だ、 — この黒いガレー船を拿捕せよ、さもないと悪魔に、 —」。

提督は、演説の残りを飲み込みながら、足を踏ん付けながら退場して行った。船長達は互いに渋い表情で見つめ合い、提督を見送った。

「糞、 — スペインの厳しい胡椒だ。 — 言うは易く、行方は難い仕事だ。 — さて、諸君、 — 黒いガレー船だぞ、 — フランシスコ、貴殿は料理人を首にしたろ

う。 — いや、それは残念。 — スライスへ、 — スピノラめ、 — 黒いガレー船か」。そのようにアンドレーア・ドーリア号の船上ではこもごも話され、最後に指揮官達は次々に去って、明日の準備に取り掛かった。

アントニオ・ヴァラーニとレオーネ・デラ・ロータはようやく長いこと経ってから、またその甲板に二人っきりになった。

「では他の者達は出帆で、我々はここに残るのか。それも結構」とレオーネは言った、「では我々は自らの狩猟に出掛けるか。アントニオ、しかしまずはとりわけあの居酒屋へ行こう、そこで詳細にかの優しいフランドル娘に対する君の関係を話してくれ」。

「いや、そんなことは、レオーネ、ほっといてくれ」。

「いや、駄目だ、君はそうする義務と必要がある。私は、兄貴、君を治してやろう。このような悩みでは私は立派な医師だ。幾人も助けてやった。トーニノ[アントニオのこと]、君も恩に着ることだろう」。

船長は嫌々、その船から引き出された。不機嫌に彼はアントワープの路地を抜けて、居酒屋アルcantアラの紋章亭まで少尉に付いて行った。そこは太った女将が陽気なレオーネ・デラ・ロータに惚れ込んでいて、この色男は、彼の気が向く時はいつでも、無料の酒と — 無料の宿泊を得ていた。そして彼はとてもそこに気が向くときが多く、都合良く思っていた。

III. ヤンとミーハ

アントワープの波止場の市壁の背後、高い切妻の家々の一つに、翌日夕方、ミーハ・ヴァン・ベルヘンはその小さなランプの側に座っていた。全身喪服に覆われていて、 — 昔は豊かで声望のあった商人、ミヒアエル・ヴァン・ベルヘンの娘で、彼については今日このように言われている。「彼ハ老イテ、貧シク亡クナッタ」と。

あたかも新刻印の金貨で一杯の袋が振りまかれる時のように、二十年から十五年前まで「ヴァン・ベルヘンとノリス」商会は誰の耳にもそう響いて聞こえた。この商会は豊かなアントワープにおいて、最も富裕な家々の一つを代表していた。すべての海上にその商船は浮かび、その倉庫はインドやアメリカの貴重な宝物で一杯であった。その帳場には勤勉な帳簿人で一杯であった。いや、二十年前、諸君が相場や、あるいはオスターリング[ハンザ商人、東方からの商人達]の家、あるいは大きなハンザの倉庫で、ヴァン・ベルヘンとノリス商会のことを尋ねたら良かったであろう。まことに立派な知らせが君達に語られたことであろう。

しかしヨーハン・ヘールデス・ノリスはとうにアムステルダムで息を引き取っていて、つい二週間前にはアントワープで彼の昔の共同経営者が墓場に、乞食として、入っていた。

諸君が今、相場やあるいはハンザの家で、ヴァン・ベルヘンとノリス商会のことを尋ねたら、諸君はその質問をひょっとしたら再度繰り返さなければならず、それから頭を振られることであろう。誰が今もヴァン・ベルヘンとノリス商会のことを知っていよう。ただ最長老の商人や仲買人が二人の名前をまだ覚えていよう。

どうしてそうなったのか。

これに答えるのは簡単なことである。ヴァン・ベルヘンとノリス商会がその栄光に最も

輝いていたとき、アントワープの市壁の中には、二十万人の住民が活発に活動していた。今ではこの住民は八万人に縮んでいる。これで十分であろうか。

過去の日々を一瞥振り返ってみよう。

邪悪な年、一五八五年八月二十日のことであった。この日新教徒改革派は大聖堂で最後の礼拝をした。この町がその強大な侵略者、パルマのアレッサンドロ皇子と結んだ降伏条約に従って、翌日再びカトリックが、長年異教徒に譲らなければならなかった我らが聖母の聖堂を所有することになった。

さてこの八月二十日、最後のプロテスタントの説教の後、プロテスタントのオルガンの音の波が静かに消えて行く瞬間は厳かで稀な時であった。深い静寂に包まれ、民衆は頭を垂れて座っていて、小声で熱心に祈っていた。しかしそれから勃発した、— 一つの音色、半ば溜め息、半ば抑圧された憤怒の叫びが、— 長く響いた、— 苦痛と憤懣であった。一つの酪酊が生じ、集まっていた者達が座席から起き上がり、野蛮に混乱して教会のドアの方、高い正面の方に殺到した。そこはすでにカトリックの住民達に囲まれていた。

勝利と敗北である。

すべての教団の僧侶達が、微笑したり、興奮したりして、屈辱を感じて静かに泣いたり、恨んだりしている異教徒達の行く手に押し迫って、自らのロザリオを嬉しそうに振りかざしていた。

彼らが、「坊主[カトリック]よ去れ、坊主よ去れ」と囃し声を受けて、この同じ異教徒達の前から姿を消さなければならなかった日以来、いかばかり経っていただろうか。

かくも人間の運命は交替するものであり、精霊達の戦闘ではかくも勝利と敗北が交替する。

八月二十日にはヴァン・ベルヘンとノリス商会はまだ力が漲り、その声望は大きなものであった。— 八月二十七日、商会は解散した。アレッサンドロ・ファルネーゼが盛大に勝利した町へ入城した。ヤン・ヘールデス・ノリスはこの町を十歳の息子とスペイン人の権力を耐え難く思う他の者達と一緒に去った。この町にミヒアエル・ヴァン・ベルヘンは六歳の娘と残った。両共同経営者のそれぞれが、自分の性格に従って、行動した。剛健で怒りっぽいノリスに、不安げで優しいヴァン・ベルヘンである。一方は災難に出来るだけ抵抗し、戦いが決定づけられると、この地を去り、また他の所で戦いを引き受けた。もう一方は状況に屈して、黙って、自分では変えられない事柄を忍んだ。

しかしこのことも昔のことになった。我らの両主人公はヘールデス・ノリスとミヒアエル・ヴァン・ベルヘンではない。ヤン・ノリスとミーハ・ヴァン・ベルヘンである。昔とても著名であった商会の子供達である。

何という恐怖に満ちた、荒涼たる、おぞましい世界にこの両貧者は生を享けたことか。母親の子守歌は何としばしば近辺や遠方での大砲の物音で沈黙させられたことか。何としばしば父親達は小さな息子や娘を膝から下ろさなければならなかったことか、夜間の鐘が防塁や市役所へ馳せ参ずるよう鳴ったからである。

哀れな小さな者達。決してこの子らには、他の、より幸運な時代に生まれた子供達のように、無邪気に、日影の森の中や、緑の野原ではしゃぎ廻ることが許されなかった。決して彼らには青い矢車菊や赤い野芥子を畑の縁から摘み取って花輪にすることが許され

なかった。

いや、森にはカトリックの国王の遊撃兵や、森のゴイセンの野蛮な群れ、ヨーロッパのあらゆる民族の非合法の、救い難い、潰走のならず者達がいた。

緑の野原には、スペインの軍隊や、ドイツやイギリス、フランス、イタリアからの傭兵達、属州[北部七州]の、オラニエ公の兵士達とその小屋やテントを設営していた。

穀物畑はまだ黄金の実を付けないうちに、赤や青の花がまだ咲かないうちに、侵攻して来る軍勢の馬や軍靴の犠牲になった。

スペインの国王が自分の所有地と呼ぶこの踏み潰された大地の隅に平和な隠れ場がどこにあるのか。

パチオッティ [1521-91、イタリア人技師、アルバ公の依頼でアントワープの要塞建造]の高い市壁や防塁、諸塔の背後にあるアントワープの町の狭く、暗い路地で、この哀れな子供達は遊び場を見つけていた。しかしここもよくしばしば、危険で、安全でなかった。よくしばしば、市民の家は牢獄に変わり、住民は自らそこに閉じこもり、自らその獄吏となって、猛威を振るう外界の厄災から身を守らなければならなかった。

この二人の子供達の世界観は、他のより幸せな子供達の世界観とは全く別様にならざるを得なかった。そして幾多の美しい花々が、この時代の上に垂れ込めている陰気で冷たい雲によって、蕾のうちに窒息させられ、破棄された。

何としばしばヤンとミーハはパルマの皇子の長年の攻城の間ずっと、自分達のカラフルな人形や動物が置かれて飾られている窓から、その恐怖と共に戦争が路地を通り過ぎて行くのを見守って来たことか。

ヤンとミーハはカップルになる定めであった。まだ大きな、ヴァン・ベルヘンとノリス商会が存続していたとき、双方の父母が内々で取り決めていた。アレッサンドロ皇子とこの町の間で、降伏条約が締結されたとき、ヤン・ヘールデス・ノリスの意向で、彼の息子と共同経営者ミヒアエル・ヴァン・ベルヘンの娘との縁組みについての取り決めが破棄された。当時この両商会の経営者の妻はすでに兩人とも亡くなっていた。

一五八五年八月二十七日、この二人の子供は互いに引き離され、十歳の少年と六歳の少女はこのことで激しくむせび泣いた。しかし戦争中であった。戦争は大方はるかにもっと残酷に愛する者達の心を互いに引き離すものである。この二人の子供達は最初の若い時分の思い出を十分速やかに忘れるであろうと人々は確信していた。

これがそうであったか、見てみることにしよう。――

歳月が過ぎ去った。―― ヨーハン・ヘールデス・ノリスは亡くなった。ミヒアエル・ヴァン・ベルヘンはその富が陽射しの中の雪のように消えてから、亡くなった。

アントワープの波止場の市壁の背後にあるその一室に、ミーハは黒い喪服を着て、座っていた。―― 妙に優しい乙女で、瀕死の父親のベッドの許、長い夜間の看病で、まだ顔も青白いままであった。彼女は糸を紡いでいた。彼女の目は涙で一杯で、その心は声に出さない痛みと心配事で一杯であった。彼女の父親が亡くなってから、この哀れな娘はこの大都会で全く一人っきりであった。しかも弱い者達が、ほとんど無法状態の中、あらゆる抑圧やあらゆる傲慢に晒されているとても野蛮な時代であった。

ミーハ・ヴァン・ベルヘンは全く身寄りがなかったのか？

哀れな娘である。全く身寄りがないわけではないということもミーハの心配事の一つで

あった。

多分まだ誰かがミヒアエル・ヴァン・ベルヘンの娘を案じていた。多分この孤児の娘は誠実な心の持ち主が自分には残されている、と、つまり　－　アムステルダムの子・ノリスは彼女のために最後の血の滴を犠牲にするであろうと承知していた。しかしこの子・ノリスは、スペイン人の手で、アントワープの路地で捕らえられると、絞首台へ送られるであろう、お尋ね者であった。子・ノリスは、海上ゴイセンであって、しばしば色々な変装をしてアントワープの路地に現れるのであった。

子・ノリスは、子・ヘールデス・ノリス、彼の父親が考えていたほど、そうすぐに自分の青春の思い出を忘れなかった。

相変わらず子とミーハは婚約中の男女であった。この世のどんな力も二人を引き離せないと二人は互いに誓い合っていた。しかしこれがどのように展開するであろうか、老ミヒアエルが存命の間は、二人のどちらも言えなかった。

さてミヒアエル・ヴァン・ベルヘンは亡くなっていて、埋葬されてから二週間経った。しかし子ノリスは数ヶ月前から消えたままであった。彼はまだ存命か。波の間に消えたのか。スペイン人が船に乗り込む彼を捕らえて、絞首刑にしたのか。

誰が知ろう。

子が亡くなったら、哀れな身寄りのないミーハはこの砂漠の世界でどうしたらいいのだろう。

次第に夜が迫って来た。しかしミーハは、床に入ることを恐れた。だって悲痛と悲哀のため寝入ることが出来ないのに、ベッドでどうしよう。次第に小さな部屋はまさしく寒くなって来た。しかしこの孤児の娘は寒さを感じていないように見えた。小さな暖炉に新たな炭を入れなかった。彼女は紡錘を脇に置いて、顔を両手で覆い、頭を胸に傾げていた。彼女は更にこのような状態でかなり長いこと座っていて、最後に身震いして起き上がり、臥所を探した。

今一度、彼女は自分のドアの門の所で身を屈め、門がきちんと嵌められているか確かめた。その時、突然、彼女は耳を澄ました、　－　息も吐かず耳を澄ました。

「ミーハ」と外で囁く声がした。

孤児は全身が震えた。

「まあ」。

「ミーハ」と今一度、鍵穴から囁く声がした。

一つの叫び声を上げて、この若い娘は門を外して、錠で鍵を回した。ドアが跳ねるように開いて、ある傭兵連隊の将校服にスペイン人の懸章を肩に付けた一人の若者が、次の瞬間、この美しい娘を両腕に抱いていた。

「ミーハよ、ミーハ」。

「まあ、子、子。親愛なる、親愛なる子」。

次の数分、言葉の代わりに熱い接吻が交わされた。それから子・ノリスは見るからに全く疲れ切って、間近の椅子に沈み込み、そしてミーハはこの時ようやく、自分の恋人の服が乱れているのに気づき、彼が帽子をなくしていること、彼の頬が軽く刀傷を受けて出血していることに気付いた。

「これはまたどうしたの、子。震えてしまうわ。また盲滅法、危険な窮地に陥ったの

ね。 — まあ、ヤン、ヤン、意地悪なヤン」。

「ほんと、すんでの所で、今回は捕まる所だった、ミーハ。しかし心配するな、可愛い娘よ。ほとんどあと一步でお仕舞いだったな。ことが上手く行かなかったら、私は勿論犬のように、糞、ぶら下がっていたな」。

「まあ、ヤン。私を愛したいと思ってなの。私をこの町から救い出したいと思ってなの。慈悲深い神様、あなたは破滅してしまうわ、それに私も。私の父も亡くなって、いや、聖なる慈悲深い神様、私はどうなることでしょう。誰が私を守ってくれることになりましょう。誰が私を助け出すことになりましょう」。

「その通りだな。残念ながらおまえの言う通りだ。哀れな娘よ。いや、おまえの父親も亡くなったのに、私はおまえの悲しい喪に悔やみを言いに来られなかった。その時には、略奪者を撃沈させるために、ダンケルクの沖で巡航する必要があったのだ。 — いや、厳しいことだ、ミーハ。しかし、 — しかし私は他に仕様がな。今晚もそうだった。高貴な祖国を堅持するためには、誰もが命を懸けなければならない。 — いや、ミーハ、ミーハ、まだ少しばかり私を愛してくれ、私はおまえを守り、庇護するには力不足だが。哀れな父親ミヒアエルは、 —」。

「亡き父のことはもういいの。ヤン、父は休息の地に落ち着いて、誰ももう恐れなくていいの。結構なことです。 — あら、この流血の恐ろしい時代には、亡くなった人達が羨ましく思われるほどです」。

「いや、ミーハ、そんな風に言わないでくれ。父親が亡くなったのは、勿論惨めなことだ。しかし、 — これでおまえはすっかり私のものだ。それでおまえは私と一緒にアムステルダムへ行ける。この哀れなアントワープでおまえの足かせになるものはもはや何もない。ミーハ、心を慰めてくれ。楽しい日々もまだあることだろう。愛しい、愛しい許嫁よ。まだ後一時のことだ。おまえを迎えに来るぞ。 — よく見ておけ、 — ひよっとしたら、どんな女王様でも誇りに思うであろうような堂々たる結婚式随行者を引き連れたな。ひよっとしたら鐘が鳴るかもしれないし、太鼓が叩かれるかもしれない。ひよっとしたら、私がおまえをアントワープから連れ出すとき、この至福の時に、祝砲が轟くかもしれない。おまえに極秘で打ち明けることが、本当にならないか、注意しておけよ」。

「まあ、何という絵空事でしょう。野蛮な、親愛なるヤン・ノリス。あなたが私をそれほど厳かに嫁に迎えようとするのは何故なのか、教えて。いえ、もういいわ。だってそれは愚かな虚栄にすぎない。むしろあなたがたった今抜け出したその危険な窮地のことを話して。もはや夜に夢物語を聞いておれないわ、あなたのその姿を見ていたら、無謀なヤン」。

「おまえの言うほど、無謀じゃないよ、姫」と若者は微笑した、「黒いガレー船の船長は、そんな能なしなら、今のようにヤン・ノリスの頭と脚、心と腕とを気楽に使用することを控えることだろう。ある大きな件で、私はこの町に来ている。 — 我々はアントワープの子供らが後々百年後も歌にしたくなるような活動をしたいのだ。それで知らせを受け取りに、私はこの檻褌、ドイツ傭兵の緩い半ズボンを着用しているのだ、ゼーラントの海軍ズボンではなくてな。それでいいか、ミーハ。私は波止場で、自分の仕事を終えて、スピノラの子供の四隻のガレー船が今日早朝、黒いガレー船拿捕のため出航したと知ったのだ。同時に私は残念ながらミヒアエル親父が亡くなったと探り出していたから、こちらで停泊中の最後のジェノヴァの船、アンドレーア・ドーリア号を — その建築様式に関して、

一 正確に観察して、その間に夕方が迫って来たのだ。愛しい娘よ、私は日中すでに十分こっそりとおまえの小さな窓辺を見上げていた。しかしおまえの許に忍び込む折を見いだせなかった。色々な輩が、私の後を付けていた。そこで私は暗くなるのを待った。一

私はこの家の鍵を持っているし、一 それでゆっくりと路地をぶらついて、ある明るい居酒屋のドアの前で、夜はそこに座って待つことを思いつき、更に少しばかり人々や外国人の態度を観察することにした。一 私の仕事のためだ、分かるだろう、一 よし、と私はこの居酒屋に入って、ワインを一本注文し、テーブルの奥に、肘を付いて、腰掛けた。あたかも、全世界が自分のもので、哀れなミーハのことは少しも案じも、心配もしていないかのように、ミーハの父親は亡くなっていて、私は弔問にも行っていないのに。私の周りは、バベルの塔の建造時のように雑然としていた。ドイツ人、ブルゴーニュ人、スペイン人、イタリア人、ネーデルラント人が喋って、呪い、叫んでいて、誰もが自分の言語で話し、皆が同じやり方で飲んでいて、どのテーブルも片隅も埋まっていた、ただ私の隣の二つの席が空いていた。すると二人の無愛想な若造が来た。一 私は二人をよく知っていた。一人はアンドレア・ドーリア号の船長で、もう一人はその少尉であった。テーブルやベンチを横切って上がって来て、私の側に腰掛けた。私も喜んで二人に相席を譲った。二人と知り合うのは大変有益だからな。二人の語るどんな片言隻句も私には黄金の宝だ。しかし私は二人には会ったことがないかのような振りをして、両腕に寝惚けたように頭を置き、世間を失念している風を装い、しかし両耳をしっかりと開けていた。さて、両ラテン人はワインを求め、最も若い方、少尉は酌の娘の腰に手を回していた。しかしもう一方の男は全く情けなく見え、メランコリックに見えた、あたかもつれない拒絶にあったかのようなようであった。一 私は彼のことを笑いそうになった。しかしゴイセンの誓いにかけて、笑い事じゃなかった。さて言葉が交わされ始めると、最初は勿論我らの誇り高い活動、先日の夜の舞い踊り、つまり無垢受胎号の昇天についての話しであった。それに関しては私の心は欣喜雀躍とした。しかし突然、私の動悸は停止した。私の知っているある名前が呼ばれたからで、おまえについて、ミーハ・ヴァン・ベルヘンについての話しであった」。

「私についてなの」と若い娘は叫んだ、「まあ、どうしましょう、イタリア人の船長が私について話すなんて。神様、ヤン、ヤン、私をその人から守って。おお、恐」。

「まあ、そうなのか、犬がその括り罫をおまえに向けているのだな」とヤン・ノリスが鈍い声で叫んだ。ミーハはその顔を彼の胸に隠して、震えて頷いた。

若い海上ゴイセンは歯ざしりし、そして憤然と笑った。

「熟慮断行だ[飲み物は調合の時程熱く飲むものではない]。イタリアのならず者もきっとそのことを思い知るだろう。安心しろ、ミーハ。おまえの側には私がいるし、私の後には多くの立派な仲間が付いている。哀れな娘だ、震えているぞ」。

「まあ、イエス様、ヤン。私は助からないわ。あの屈強な思い上がった異国人達が力を握っているのでしょう。この人達の邪悪な意志の遂行を誰が止められましょう。いや、ヤン、ヤン。私と一緒に連れて行って。一 今夜のうちにも、今すぐに」。

ヤン・ノリスはこの青ざめて、震えている許嫁を腕に抱いて、彼女を何とか宥めようとした。彼女が少しばかり落ち着くと、彼は更に居酒屋、黄金の獅子亭での自分の冒険について語った。

「私の髪は真っ直ぐに逆立った。すべての血が私の脳内に集まった。しかし私は自分を制御して、素姓をばらさないように努めた。これは難しい仕事だ。しかしヤン・ノリスはそれをし遂げて、イタリア語の話しは皆目理解できないような振りをした。ルーメイ伯爵[悪評高いゴイセン、1542-1578]に誓って、夜よりも真っ黒な奸計が話し合われた。しかし私はすべて分かった。それで十分だ。明後日、アンドレーア・ドーリス号は出帆する、
— その命令が提督から届いていた。
— そしてこの機会が都合良いというわけで、明日の夜にその妙案が実行に移されるのだ。明日の夜に、野生の鳩ミーハ・ヴァン・ベルヘンは船長アントニオ・ヴァラーニに拉致される。悪魔と少尉レオーネ・デラ・ロータの助けを借りてな。明日の夜、この家は襲撃される、
— しかしこれは極秘裏に行われる、隣人は誰も目覚めないようにして、アントワープの鶏一羽そのことで鳴かないようにして行われる。ミーハをガレオン船に拉致するのだ。陽気に、
— 諸君、揚錨機に取り掛かろう、
— 心浮き浮き、反乱異教徒の鎮圧に向かおう、
— 陽気に公海へ船出だ。
— この広い海で、小さなミーハの助けての声や泣き声を誰が耳にしよう。天国と地獄にかけて、このヤン・ノリスは、獅子亭に座っていながら、声一つ上げられない、ナイフを手握ったまま、この密談の与太郎どもをなぎ倒せない」。

「いや、ヤン、ヤン。私の母親とあなたの母親のために、私どもの愛のために、私を助けて。私をその人達の手には渡さないで。死んだ方がまだましでしょうに」。

「静かに、静かに、好い子よ。明日の真夜中までにはまだ長い時間がある。アムステルダム の 竈 の 火 に 当 た っ て、更 に 何 度 か こ の 話 し を 思 い 出 し て 語 る こ と に な ろ う。許嫁のおまえ、私を信頼しろ。おまえを辛い目に遭わせはしない。このヤン・ノリスはまだ二本足で立っている限りはな。しかしもっと聞いてくれ。私の話しはまだ終わっていない。どうして奴等が私のことを黒いガレー船の次席舵手と嗅ぎつけることになったか、その次第をまだ話す必要がある。これは、たった今話したことよりも、もっと面白いぞ」。

「まあ、ヤン、ヤン、私の心臓の動悸は高まるばかり。
— 慈悲深い神様、哀れなミーハを誰が守ってくれるのでしょうか。ヤン、逃げましょう。今即刻、私はもはやここでは呼吸できません。
— この部屋の空気で窒息してしまいます」。

「静かに、静かに、親愛なるミーハ。一緒にすぐに逃げ出したいところだ。それに我々を乗せてくれるボートも一隻、用意されていることだろう。しかし下の路地に耳を澄ましてみろ。
— この町中が今この瞬間、黒いガレー船の男どもが変装してこの市壁の中に潜んでいると承知しているのだ。下のあの物音を聞いてみろ。
— あの駆け足、足音は私を探している。今無事に通り抜けるチャンスはない。座っていな、そんなに震えることはない、
— 我々はまだ安全だし、時間が経てば、知恵も湧こう。
— 我らのアムステルダムで冬の火に温まっているその時のことを思い浮かべるのだ。ハッハッハ、奴等は下で探せばいい。このヤン・ノリスは奴等より余りに敏捷、抜け目がなさ過ぎたのだ。
— 実際、この若造ヤンが奴等に吊されていたら、お気の毒なことであつたらう、そうだろう、ミーハ」。

「まあ、ヤン、ヤン」。

「バカだな、一回接吻させてくれ、
— それにもう一回。では私の話しに戻ろう。それで私は座っていて、唇を噛んで、血を出していたが、しかし私の側の会話を一言も聞き逃さなかった。この悪漢らは更にお喋りをし、自分らの悪巧みを喜んでいた。それから二

人はグラスを飲み干して、その席から起き上がり、出て行こうとしたが、ドアの所で大きな騒ぎがあって出られなかった。つまり二人の男の肩に担がれた一人の小僧が入って来たところで、この居酒屋の人々はその小僧を目にすると、大きな万歳の声を上げた。この小僧は無垢受胎号の船室給仕で、彼のみが、乗員全員の中で助かって、命からがら空中、水中、頓狂な乗り物に乗った末、陸地に着いたのであった。誰もがこの小僧と話しをしたがって、皆が小僧の許に寄って、小僧にその杯やジョッキを差し出していた。しかし私はこの混雑を利用して、気付かれないうちに離れるのを最善と考えた。そこで私は出来るだけ壁に密着して忍んで行き、ほとんどドアに達したとき、不運なことに、この船の小僧の目が、この小僧は相変わらず肩車されていて、私に向けられた。この小僧は私を凝視した。あたかも幽霊を見ているかのようで、小僧はチーズのように青ざめて、力の限り叫んだ、『助けてくれ、ここにいるぞ、奴等の一人だ。 — 助けてくれ、 — あれを捕まえろ』。

— 『誰のことだ、どうしたのだ、何だ』と人々が吠えた。そして誰もがその少年を、その近くの者達を見つめた。 — 『そこ、そこ、向こうのテーブルの所。 — あれを捕まえてくれ、海上ゴイセンの悪魔だ。奴が船長のペラッツォーを刺し殺した。 — 黒いガレー船の一味だ』。 — 地獄が弾けたような騒動が勃発した。 — すべての目が私に向けられ、すべての武器が鞘から飛び出した。私も自分のナイフを取り出して、私の命を非常時につき、出来るだけ高く売りつけることにした。すると奴等が私に殺到して来た。しかし私は奴等より機敏だ。間近のベンチを手で掴み、最前列の者の足許に投げ付け、一塊の全員がそれで転げ、床にてんでに転がった。その瞬間を利用して、私は高く飛んで、雑踏の中に入り、自分のナイフを右に左に奴等の顔に向けて切りつけた。 — ドアに達し、 — 私は路地に出て、 — 自分の背後に追跡者達の咆哮を耳にした。 — 私はアントワープを自分の掌のように承知していることを、神に感謝した。あちらこちらこの狩は続き、私は色々な策謀で彼らを欺いた。奴等を間違った方向へ導き、こちらへ渡って来た。波止場はまだ全く静かだった。 — 私は馴染みの鍵でよく知っている家のドアを開けた。 — そして、 — ここに私はいて、 — 無事で、おまえを助けに来た、親密なミーハよ、可愛い許嫁よ。しかし聞いてくれ、奴等はまだ、このゴイセンを吊す望みをまだ棄てていない。 — 畜生め、聞いてみろ、駐屯部隊全員がまこと駆けつけているぞ、 — ハハー、 — 諸君、大いなる名誉だ。謹んで感謝申し上げるぞ、ハッハッハ』。

笑ってヤン・ノリスは耳を澄ました。震えながらミーハ・ヴァン・ベルヘンは路地の騒音に耳を澄ました。

「まあ、親密なるヤン、誰からもこの家に入るところを見られなかったと自信があるの。聞いてよ。騒動の全体がこちらへ向かって来るわ。 — まあ、神様、窓からご覧なさい。

— 松明に槍。 — イエス様、この人らが戸口を叩いています。 — ヤン、あなたを探しているのよ。慈悲深い天よ、私どもをお守りください、 — 駄目だわ、駄目」。

家のドアが開いた。人々は家の中へ侵入して来るように見えた。ヤン・ノリスは歯を上下に噛みしめた、自分の武器の握りを掴んだ。

「静かに、静かに、 — あり得ない、静かに、ミーハ」。

「やって来るわ、やって来る」と娘は金切り声を上げた。「階段を上がって来る。あなたは見つかるわ、ヤン、ヤン。一緒に死にましょう」。

若いゴイセンは死神のように青ざめた。

「私は不用心にもおまえを危険に晒したのであろうか、ミーハ。これは恐ろしいことだ。ゴイセンの誓いにかけて、奴等は階段を上がって来る、ミーハ、ミーハ」。

「一緒に死にましょう」と若い娘は婚約者の胸にすがって喘いだ。

IV. 襲撃

単にアルカンタラの紋章亭ばかりでなく、居酒屋密集の町アントワープのすべての居酒屋をレオーネ・デラ・ロータは我が住み処のようにしていた。彼は自分の友にして船長のアントニオ・ヴァラーニをこの日の夕方、居酒屋、黄金の獅子亭に連れて行き、いつものように、嫌々ながらも、船長は彼に従って付いて行った。

しかしレオーネ・デラ・ロータが何かを敢行しようとしているとき、誰が抵抗できよう。

この若い少尉は、邪悪な心からというよりは、軽薄さから、この世を大きな舞台と考え、戦争を頓狂ないたづらを妨害されずに遂行する結構な機会のように考えていた。彼は哀れな小さな寄る辺ない孤児の娘の略奪を頓狂な愉快ないたづらと見なしていた。一彼のろくでもない無謀な頭の中でその計画は生み出された。この計画を敢行することは、自分の友をそれに同意するよう難儀して説得した後では、一自分にとって名誉にかかわる件になっていた。このジェノヴァのろくでなしにとって、反乱属州の問題や、スペインのカトリックの陛下は何の関心を引こう。異教徒の女性がとても可愛い場合があるし、カトリック教会を信奉する女性達がとても醜い場合がありえる。レオーネは魅力的異教徒の女性を醜いカトリックの女性よりも顕著に鼻屑した。そしてその上、イタリアで自分の父祖の町について言われている昔からの諺をすたらせることのないよう、出来る限り腐心していたのである。つまりジェノヴァには魚のいない海があり、木のない陸があり、忠誠と信仰のない男どもがいる。

居酒屋、黄金の獅子亭で、彼は我々がすでにヤン・ノリスの語りから承知しているように、アントニオ・ヴァラーニと誘拐計画について最後の打ち合わせをした。拉致が成功し、それからアンドレア・ドーリア号がその遠征から無事帰還した場合、黒いガレー船は拿捕されるか、破壊されているであろう。すると勝利者に対して、誰か告発に取り掛かる勇気のある者があろうか。しかしガレオン船が帰還しない場合、その場合、一告発する行為も終わりになろう。第三の場合の出現について、つまり敵の船に出会わないままアンドレア・ドーリア号が帰還する場合の出現については、レオーネはそれを全く自分の品位に悖ると考えた。しかし船長はすでに、彼の望むがまま、言いなりになっていた。

大胆な海上ゴイセンのこの追跡に対して、この二人のジェノヴァ人は何の関心も示さなかった。二人は腕を組んで練り歩きながら、興奮した人混みの中、波止場に向かった。

「我らは、その道化野郎を追いかけるような阿呆であろうか」とレオーネは笑った。「他の者どもがその向こう見ずな乞食を追いかければよろしい。アフロディーテの鳩にかけて、私がいつもは冷静なアントニオ・ヴァラーニに、愛の魔法の園の案内人として仕えて以来、私の魂は高くこの霧の国の上方を浮遊している。いや、アモールよ、心の調教師よ、私は御身の戦旗に馳せ参ずる。いや、キューテラの女神[ヴィーナス]よ、我らを御身の天上的な庇護の下に置き給え」。

「お願いだ、レオーネ、冷静に頼む。戯けてくれるな。奇妙な心地がする。私は自分の生涯で、こんな感情を胸に抱いたことがない。レオーネ、私は、――レオーネよ、――一日中、そして一晩中、とても奇妙な物思いのなかに囚われている。――レオーネよ、準備しておけ、ひょっとしたら君は間もなく私の代わりにアンドレーア・ドーリア号の船長になるかもしれない、...」。

「そして君はフェデリコ・スピノラ閣下殿の副提督だな、――」。

「あるいは海底に沈んだ一つの死体だな」とくぐもった声で船長は呟いた。

「何だと、死の物思いか、君の愛する娘の窓の下で死の物思いか」と少尉は笑った、「いや、この世で生起する一切にかけて、それは素晴らしい。いや、私はフランチェスコ・ペトラルカ[1304-1374]であればと願うよ、早速このような素晴らしい魂の気分に合わせて、ソネットを作れるようにな。いや、見ろよ、夢想家の兄貴。ここは丁度君の恋人の御窓の下だ。――彼女の小さな明かりはまだ点っている。――万歳、名案だ、――アントニオ・ヴァラーニ、我が青春の友よ、君の死の予感を追い払うために、我々は、――我々はこれから、この瞬間にも、上の可愛い娘に訪問仕ろうではないか」。

「レオーネよ?!」

「彼女に対して家宅捜査だ。あらゆる酔狂な思い付きが歓迎だ。国王の御名において、進め。愛の御名において、進め」。

「レオーネよ、レオーネ」。

「ほっといてくれ」と少尉は笑った、「頼むぞ、阿呆どもが躍起になって探しているあのゴイセンが、この娘の住まいに忍び込んだかもしれないか、この町の他のどこかの家同様にな。さあ行こう、予感の鋭いアントニオ、進め。君の心優しい恋人を家宅捜査だ。同時に明日の夜に備えて、家の事情が一層良く分かるわけだ」。

船長が自分の野蛮な友を引き留められずにいるうちに、レオーネはミーハの家のドアの許へすっ飛んでいて、ドアを拳で叩いて、大声で叫んだ。

「開けろ、開けるのだ、スペインのカトリックの国王陛下の御名において、開けろ。この家に裏切り者の敵が逃げ込んだのだ」。

すぐに四方八方からアントワープの兵士や、水夫、市民達が、上のミーハの住まいに通ずる家のドアの前に参集した。刻一刻とその群れは増大した。半ば絶望して船長ヴァラーニは自分の頓狂な友の騒動を制止した。しかしすでに遅すぎた。家のドアが開いて、ミーハの住んでいる建物の住民達、一人の大工、一人の靴屋、一人の町の書記が彼らの家族や職人と一緒に、それに多くの子供を連れた一人の未亡人が、不安げにその片隅に身を寄せていて、ネーデルラントの一人の反乱者がこの家に避難していると知らされて驚いていた。ただ一人の腰の曲がった、古色蒼然たる老婆が、大胆に、震える手にランプを持って、侵入者達に向かって行き、金切り声でこう主張した。誰もこの家に忍び込んでいねえ。ゼーラントの海上ゴイセンなんか、いねえ。海上ゴイセンに庇護を与えるなんて、とんでもねえ。――そう彼女は言って、――自分の夫は、自分の哀れな亡き夫は、この荒くれの乱暴どもから、自分の漁の船から水中に投げ飛ばされ、惨めな最期を遂げたからに、と。

――しかしこう請け合っても何になろう。誰もそれに耳を傾けていなかった。この家はスペイン人の兵士や、イタリア人の水夫、路地のルンペンのならず者で一杯になった。不安と悲哀の叫び声がやがて様々な各部屋から上がった。少しばかりの喧嘩と虐待があった。

少しばかりの略奪があった。

「進め、アントニオ、止まるな」とレオーネは叫んだ、「進め、階段を上、天国へ行こう」。

彼は老婆の襟を掴んで、そのランプで足許を照らすよう、冗談の脅しをかけながら、強いた。

「陽気に、陽気に、お婆ちゃん。他の者どもは下を探す、我々は上の方だ。ー 進め。そんなにお上品に羞じらわなくても、私はおたくのふくらはぎを覗いていないよ。こら、アントニオ、遅れるな、ー」。

「レオーネ、頼むから」。

「何を言う、先へ先へ、聖母マリア様。ハハー、アントニオ、君は何という臆病兎だ。こんなに楽しいアバンチュールを目の前にして。私がいなかったら、君はどんなことになっているやら。ほら、ー これが最後の階段と見えるぞ、ー 勝利だ、勝利。老シュビラ[神託巫女]さん、ありがとよ。ここだ、ここ、アントネロ、国王の御名において、開けろ、開けろ。裏切り者と美しい娘達がここに隠れたのだ。開けろ、開けろ、国王の御名において。スペインのカトリックの陛下の御名において、ねぐらから出てきんしゃい。優しい小鳥よ、開けて、その可愛い、反抗的ハートを渡しんしゃい」。

口を開けて笑いながら、この酔狂な男は、船長の肩を掴んで、自分が大きく開け放ったドアの中へ船長を押し込んだ。ー 凝然と疑わしげにこの二人のジェノヴァ人は立っていた。ー

憂慮と不安を募らせて、ヤンとミーハは路地の騒音を聞いていた。さて全く野蛮な咆哮が家の中に侵入して来ると、許嫁は絶望して、婚約者の若者に身を隠すよう懇願した。

しかし二人の救出になろうか。

次の瞬間、すべてが手遅れになった。余りに素早くレオーネ・デラ・ロータが階段を上がって来た。

ヤン・ノリスは左腕に失神している許嫁を抱えて、右手は煌めく武器をぶるぶる握っていた。彼は自分がどうするか、分かっていなかった。この恐ろしい瞬間、彼の平常心は吹っ飛んでいた。平常心のままであっても、何になろう。人間の分別が予見する限り、ヤン・ノリスとミーハは絶体絶命であった。

「これは参った、何ということだ」とジェノヴァの少尉は叫んだ、「いや、これも悪くはない。これはまさしく奇縁だ。ー これは人呼んで一石二鳥、飛んで火に入る夏の虫だ。万歳、アントニオ・ヴァラーニ、君は君の優しい小鳩が手に入るぞ。このような恋敵がいるとは、君は夢想だにしなかったろう。このゴイセンを倒せ、絞首刑だ」。

ジェノヴァ人の刀が鞘走った。

「ミーハ、神の御加護を」とヤン・ノリスは叫んだ、彼の剣を振った、「引け、イタリアの下郎め」。

野蛮なゴイセンの掛け声、「坊主より、トルコ人がました」と発しながら、黒いガレー船の舵手はレオーネ・デラ・ロータの剣をかいくぐり、ー 一突きし、ー 叫び声を上げてアンドレーア・ドーリア号の船長は回転し、よろめいた。彼の手から剣が音高く落ち、ー アントニオ・ヴァラーニは床に落ちた。このジェノヴァ人の体を越えて、海上ゴイセンは飛び、二回目斬りつけたが、しかしこれはただ軽く少尉の左肩に触れたのみで

あった。ガレオン船アンドレーア・ドーリア号の水夫達が、彼らの船上ナイフを振り回して、階段を上がって来た。荒々しい流血の戦いが狭い空間で生じた。ミーハ・ヴァン・ベルヘンは気を失って床に倒れていた。スペインやアルバニアの兵士達がこの雑踏に多く混じって来て、ランプや松明が消え、床で微光になったが、再びまた点火された。何が生じているか、分かっている者は少なかった。そして突然、「火事だ、火事だ」の叫び声が家中で響くと、混乱したこの糸玉はパニックの恐怖に解け、そして再び階段を駆け下りて行った。家中のすべての空間に窒息させるような煙が充満した。その煙の中、ジェノヴァの船乗り達は、その致命傷を負った船長と捕縛した海上ゴイセンを引きずって行った。煙の中、レオーネ・デラ・ロータは意識のないミーハを、階段を降りて、通りへ運び出した。通りではすでにアンドレーア・ドーリア号の水兵達とスペインの兵士達の間であらたないざこざが勃発しそうであった。スペイン人達はイタリア人水兵達からその捕虜達を奪い取ろうとしていた。しかし太鼓が打たれ、より上席の指揮官の到着が告げられ、この指揮官にレオーネは、かなり意識が朦朧としていたが、自分に出来る限りの報告をした。この指揮官は重々しく自分の意見をこう述べた。つまり、負傷した船長と、ゴイセンとその女性を船に運ぶのが最良であろう、そうすれば明日早朝、尋問の準備がすべて綺麗に整うであろう。 — ちなみに、この男の捕虜はいずれにせよ海賊として帆桁に吊されよう。従って、この男をガレオン船に運ぶことは、この点からもまことに都合が良い、と。

—————

波止場の方に転がるように群衆は下って行った。松明がこの野蛮な行列を照らし出し、その揺らめく明かりを負傷したアントニオ、失神したミーハ、捕縛されたヤン・ノリスに投げかけた。ヤン・ノリスは、鈍感そうにその憤然として敵に引きずられるがままになっていた。相変わらずレオーネ・デラ・ロータはミーハを腕に抱きながら、どのような次第でこのようになったか、考えていなかった。すべてが彼の頭の中では渦巻いていた。 —

夢の中でのように、彼はその軽い荷をガレオン船上に運んだ。

船室では負傷した船長に臥所が用意された。外科医が来て、相変わらず意識のないアントニオの傷を調べて、これに関し頭を振っていた。ミーハ・ヴァン・ベルヘンは船室の片隅にうずくまっていた、今の所、誰も彼女のことを気にかけていなかった。大きなマストにガレー船の舵手[ヤン]は縛られていて、情け容赦ない敵の者達に、嘲笑されて、取り囲まれていた。

港の市壁の背後にある家の出火が消えると、ようやく町中の騒動が収まって行った。それ以前にガレオン船アンドレーア・ドーリア号の船上は静かになっていた。動くことなく、アントニオは自分の臥所に横たわっていた。動くことなく、レオーネは彼の側に横たわっていた。動くことなく、ミーハは、その最も暗い、最も離れた片隅にうずくまっていた。船全体の中で聞こえるものは、奔流のざわめき、風の中の索具の物音、見張りの足音以外ほとんど何もなかった。見張りは、装填された鉄砲とくすぶる火縄を持って、マストに縛られた捕虜の前を歩き来して、捕虜から一瞬も目を離さないようにしていた。

未明の二時に風はすっかり凪いで、それで索具の物音も止んだ。ガレオン船アンドレーア・ドーリア号の船内は墓場の静けさとなった。 — しかしこの静けさは、全く唐突に、ある叫び声と、銃発砲の物音とで、それだけ一層すさまじく破られることになった。

船室から、少尉デラ・ロータが甲板に飛び出て、船員がその小寝室やハンモックから飛

び出た。

大きなマストに縛られていた捕虜[ヤン]の箇所が空になっていた。発砲した銃を持った歩哨が、胡乱な目を周囲に投げかけながら、将校達や乗員達の質問と呪詛を浴びて立っていた。

「向こうだ、向こう、水中だ」とびっくりした男の胸からようやくしわがれた叫び声が上がった。

「どこだ、どこだ、どこだ」。

皆が船の端に殺到した。

「ボートを下ろせ、早く、早く」と少尉の命令調の音が響いた。

スヘルデ川の水面では活気付いて、夜間に明かりが点された。しかし十一月の夜は暗い。多分川を下って来る死体の一人を見つけたろうが、しかしそれはヤン・ノリスの死体ではない。この川の両岸で下流に向けて警報が発せられた。すべてのアントワープの手前に停泊中の船から送り出されたボートの懸命な努力も甲斐がなかった。

ヤン・ノリスは助かったのか。彼は波の間に死神を見つけたのか。

誰がそのことを言えよう。

しかしミーハ・ヴァン・ベルヘンは、このゴイセンが縛めを解いて、船から飛び込んだと聞いたとき、何とその片隅で聞き耳を立てて起き上がったことか。 —————
—————

朝の薄明かりとなった。しかし脱走した海上ゴイセンについて何の知らせもなかった。

アンドレーア・ドーリア号の上甲板では、レオーネ・デラ・ロータが胸の上で腕を組んで、あちこち歩き回っていて、思わず呟いていた。

「彼の予言がなければ良かったのに。彼は私の落ち度で死ぬことになろう。 — いや、アントニオ、哀れなアントニオ。彼はこう予言していた。私はアンドレーア・ドーリア号の船長となろう。自分は、 — 自分は海の底の一死体だ、と」。

「しかし、レオーネよ、 — ひょっとしたらすぐに、 — ひょっとしたら明日か、 — 明後日にもおまえも同じ運命かもしれないぞ。誰が死神を恐れているのか。死神は破滅だ、 — 命、万歳。 — 私の目の前から血ににじんだ霧が落ちた。炎の[強い]シラクサ・赤ワインでこの朝に乾杯しよう、それは私が目にする最後の朝としても」。

水夫見習が立派なワインの満たされた杯を持って来た。

レオーネ・デラ・ロータはその杯を燃える太陽の球に対して持ち上げ、一気に飲み干して、そのグラスを遠く奔流の中に投げた。彼は足をしっかりと船上で踏みしめた。

「アンドレーア・ドーリア号上の船長」と彼は言って、ほとんど聞き取れない声で付け加えた、「アンドレーア・ドーリア号の船長とミーハ、 — フランドルの女達の女王、 — 我が物、 — 我が物」。 ———

V. 熱病の夢

リーフケンスフク砦の守備隊が、黒いガレー船と無垢受胎号の砲撃とこの立派な無垢受胎号の爆発とを耳にしたあの夜から、三回目の夕方が垂れ込めて来て、風が凜いで、異常に温かかった。天気詳しい者達は、明日の夕方は大雪になるだろう、と主張した。彼ら

の言う通りになるかもしれない。太陽が早朝、かなり澄んだ空に昇った後、太陽は正午頃、重たい灰色の雲の背後に隠れた。この雲は次第に集積して来て、夕方になるとますます低く、アントワープの町の上へ、陸地や河川、海の上に下降して来た。

再び我々は、ジェノヴァの船、アンドレーア・ドーリア号の船長室にいる。

吊したランプがその赤みがかった明かりをその小部屋の中、武器や、壁の地図に対し、血の付いた布の散乱している床に対し、布団の足先の方で跪いているミーハ・ヴァン・ベルヘンに対し投げかけ、また臨終の友の臥所の側に立って、野蛮な奇妙な視線をこの負傷者から、拉致された乙女の方に這わせている少尉レオーネ・デラ・ロータに対し投げかけていた。

正午頃、レオーネ・デラ・ロータは、平静に、スピノラ提督とアントワープの総督から、海上ゴイセンの脱出は、不届き至極であり、彼、 — レオーネに、 — その責任があるという意見を聞いていた。若干平静さを失って、彼に、 — もっと良い案がないので、 — ガレオン船アンドレーア・ドーリア号の指揮権を、明日早朝の遠征に関し、任せることにするという意見を聞いていた。

船内にいる女性のことは、総督も提督も尋ねなかった。

船内や陸地で、多くの仕事があって、少尉は日中忙殺された。ただわずかな折、彼は臨終の友に時間を割くことができた。しかし船内でも、陸上でも、 — いつでもこの若いジェノヴァ人の心は美しいフランドル娘の、彼によって船に閉じ込められたこの娘の絵姿にとらわれていた。この娘は、 — 彼の友が亡くなったら、庇護も後ろ盾もなく、彼の恣意下に置かれるのである。最初彼はこのような類いのすべての思念を振り払おうとした。しかし再三新たにこの思念は彼の中で蘇った。彼はどうしてもこの思念を追い払うことが出来ず、やがてこれに抗して戦うことをすっかり諦めた。この優しい娘は絶望するとその様が彼にとってより一層魅力的に映るのである。彼の水夫達や水兵達の許であれ、兵器庫の中であれ、提督の控えの間であれ、町の路地であれ、彼の心の中で、両手を揉んでアンドレーア・ドーリア号の中で跪いている彼女の姿が浮かぶのであった。極めて荒々しい情熱が明るい炎となって燃え上がった。そして極めて狂った英知で、彼は自分の抗う良心を抑え込もうとした。

自分、レオーネがこの娘を陸地に送り返しても、これがアントニオにとって何の役に立とう。

そしてレオーネは、自分がこの可愛い娘の体を自分の両腕に抱えていたその瞬間を思い返していた。気を失ったこの娘を煙の中、路地を通して、運んだ時のことである。風がその時、この乙女のブロンドの髪の毛を彼の顔に吹き寄せたのであった。 — — —

そうだ、そうだ、そうだ、アントニオ・ヴァラーニよ、君のこの美しい獲物に対する権利は君の命と共に失効する。戦時国際法だ、アントニオ・ヴァラーニよ、降参して、沈め、 — 君にと定められていた幸運は今私のものだ。明日、 — もし明日私が敗北したら、別の者が勝利する。それが戦時国際法だ、戦時の幸運[愛]だ、哀れなアントニオよ。

このように考えて、夕方黄昏、少尉は船室に入った。そして今彼は、我々が描写するように、物憂い船のランプの微光の中、臨終の者と震えているミーハの間に立っていた。

人々は負傷した船長を陸地に連れて行きたいと思っていた。しかしアントニオ・ヴァラーニは、消滅して行く生命の全力を奮い立たせて、これに抵抗した。彼は病院ではなく、

自分の船上で死にたいと願った。自分の高熱のうわごとの中でも、彼はレオーネが、自分の愛するフランドルの娘をアンドレーア・ドーリア号の船内に連れて来ていることを忘れていなかった。死が一層近付くにつれ、それだけ一層この恋に執着した。またそれだけ一層激しくこの恋が出現した。存命であれば、自分の野蛮な仲間レオーネ・デラ・ロータに介入させずに、この恋をしっかりと自分の内部に閉じ込めていたことであろう。死に臨んで、熱病のうわごとの中で、彼の精神はすべての閉鎖的束縛を振り解いた。アントニオ・ヴァラーニは以前、感じて隠していたことをもはや何も隠さなくなった。

哀れなミーハ。彼女はその場に、致命傷を負ったジェノヴァ人の臥所の末端の足許に、ばらけた髪のまま、幽霊のように青ざめて、揉み合わす両手も傷付いて、跪いていた。救いはない、何の救いもない。

スヘルデ川の波がこの友を飲み込んだのだ、この友は恋人の破滅に抗して戦って空しく、冷たい水中に飛び込んだ、彼女の恥辱を見たくなかったのだ。

それでは神様の方は？ 悲しや、夜は余りに暗く、この不幸な娘の頭の中も余りに暗く、彼女はどんな危険の最中でも偉大な救助者であるこの神のことを思い出さなかった。どんな天上の力も、どんな地上の力も、この恥辱と屈辱を撥ね付けられない。 — 悲しや、汝、ミーハ・ヴァン・ベルヘンよ。

鈍く、大聖堂の塔から十一時の鐘が響いて来た。 — ゆっくりと個別の打音が続き、この娘の脳内で反響した。

再び町の騒音が次第に減じて、再びイタリア人技師パチオッティの手になる市壁の背後で、家々の明かりが次々に消えた。

静寂はますます深くなった。ほんの時折、野蛮な叫び声が、一つの歓声が上がった。ほんの時折、荒くれた兵士達の群れからの粗放な歌声や、夜警人、巡察隊の叫び声が聞こえた。

そして再び我らの聖母様の聖堂の塔にある時計仕掛けががらがらと作動した、 — 真夜中である。

アントニオ・ヴァラーニはその寢床から起き上がって、熱に浮かされて輝く目から気の狂った視線を周囲に向けた。

「彼女はどこだ、レオーネよ、レオーネ。 — ワインに明かりに恋か。レオーネよ、君はどこだ。君は彼女をどこに置いている、どこに隠しているのだ。彼女は私のものだ。

— 裏切り者め、 — 裏切ったレオーネよ、 — その娘は私のだ、私のだ。ハッハッハ、私は君の思い通りには死んでいないぞ。レオーネよ、 — 私は生きていて、私のものは渡さないぞ、 — 」。

ミーハ・ヴァン・ベルヘンの額が船室の床に触れた。少尉デラ・ロータは穏やかにこの狂気の男をその臥所で押し返し、彼をあらゆる方策で落ち着かせようとした。しかしあたかもこの臨終の者のすべての諸力、情熱が、永遠に消滅する前に、今一度全面的に燃え上がる必要があるかのようにであった。

再三新たにこの狂乱の男はレオーネの腕から逃れようとした。

「全員位置につけ、櫂を握れ、櫂を握れ。国王万歳、 — 奴等は旗を掲げている、 — ゴイセンの旗[白地に赤い十字架]、奴等を撃て、撃て、 — ジェノヴァ、万歳、 — 提督が吹っ飛んだ、 — 撃て、撃て — 地獄だ、地獄、 — レオーネ、船を守れ、

船を守れ、レオーネ。 — 終わりだ、 — 悲しや、ゴイセンの旗だ、 — 大砲にかかれ、 — 負けだ、 — 負けだ。船を守れ、船を守れ、レオーネ」。

病人は崩れ落ちた。少尉は彼の枕を直した。それから彼は跪いている乙女に近寄った。

「娘さん、何を不安に思っておられる。起きなされ、 — 何故床にうずくまっておられる。可愛い小鳩さん、悲しむことはない。そなたは女王になる定め。この立派な船内で、誰にも遠慮のいない女主人だ。これが戦争だ、 — 一方は旗を降ろさなければならぬ、もう一方は高く旗を斜桁からはためかせる。哀れなアントニオ、彼は予言していた、 — 自分には墓が、私には美しい戦利品が与えられる、と。 — 私はそなたを愛している、そなたを愛している、フランドルの星よ、アントワープの白い薔薇よ。私はそなたを愛し、渡さない、 — 抵抗を止めよ。 — そんなに睨むな、 — そなたは私のものだ、誰からもそなたを奪われないぞ」。

「ヤン、ヤン、助けて、お願い」と娘は、何を叫んでいるか分からないまま大声を上げた。

「ゴイセンは諦めろ」とレオーネが囁いた、「彼の復讐があったればこそ、哀れなアントニオは後一時間で死に向かっているのではないか。あのゴイセンの体を案じても無駄だ、波の間に浮かんでいるだけだ。 — 起きろ、起きろ、いいか、そなたはもはやその白い額を床に押し付けて傷付けなくてもいいのだ。何をする気だ。あのゴイセンは死んだ。アントニオ・ヴァラーニも死ぬ。そこでだ、美しく、誇り高い女王として、このレオーネを、生きているレオーネをそなたの浄福の腕で抱けばいいのだ」。

「お慈悲を、お慈悲を」と娘は叫んだ、しかし少尉は笑った。

「聞け、今一時だ。五時に我々は錨を揚げる。それまでそなたはたっぷり嘆き尽くせばいい。しかしその後は嘆きも溜め息もお仕舞いだ。五時までには十分な時間があって、死ぬよう、哀れなアントニオよ、哀れな友よ。起き上がることはない、君の傷口からまた出血するぞ。 — 寝ている、 — 君はこの娘をどうする気なのだ」。

「レオーネよ、レオーネ、船を守れ。黒いガレー船だ。 — 船を守れ」と瀕死の者が高熱のうわごとを鋭く叫んだ。

「バーカ、黒いガレー船だと」とレオーネ・デラ・ロータは呟いた。「五時によくその狩は始まる。 — 落ち着け、落ち着け、アントニオ、 — 皆達者に船上にいる、 — 心配するな、眠ってしまえ、 — 眠ってしまえ」。

船長は再び沈み込んで、両目を閉ざした。最後の荒々しい興奮の後、最後の消耗状態になったように見えた。アントニオ・ヴァラーニ、アンドレーア・ドーリア号の船長はその最期に向かっていた。

少尉はこれを良く察知していて、嘆息して、頭を振った。

「哀れなアントニオよ、哀れな友よ。間もなく君は降参しなければならないのか?! いや、愁嘆が何の役に立とう。しかし — 朝がまず白んで欲しいものだ。この夜が過ぎ去って欲しい。公海上で、 — この亡骸が船から海に投げ入れられたら、ようやくまた私の心が静まろう、まこと、朝になって欲しいものだ」。

彼は狭い船室内をあちこち歩いた。一度ならず彼は不幸なミーハに触れた。その度にこの哀れな女性は竦み上がって、より密着して壁に体を押し付けた。

「死のう、死のう」とミーハ・ヴァン・ベルヘンは囁いた、 — 「死神に私を救って

貰いたい、 — 死神が私の恋人を掠った時のように、私も掠られたい」。

ランプは消えようとしていて、レオーネ・デラ・ロータは新たな明かりとワインを求めて叫んだ。彼の魂は野蛮に寂寞としているように見えた。

VI. 黒いガレー船

リーフェンスフク砦では町レオンの獅子やカスティーリャの諸塔の軍旗が誇り高く翻っていた。同じ軍旗がリロ砦と他の砲口を向けて凝視している要塞上で、スヘルデ川の両岸辺、アントワープの内城の巨大な市壁に至るまで風になびいていた。

このすべての市壁と防塁の上で、鋭い目が監視していて、見張りの呼びかけとその応答とが、日中であれ、夜間であれ、止むことがなかった。

しかし敵も間近にいて、見張っていた。敵はいつでも不意に現れかねない。敵のやって来る時間が誰に分かろう。

ゼーラントの岸辺に北海は打ち寄せていた。そこでは、トレーンやスハウヴェン、北ベーヴェラント、南ベーヴェラント、ヴァルヘレンに、野蛮で鉄のような種族が住んでいた。この種族はまず、坊主よりトルコ人がましであると誓っていて、帽子に銀製の三日月を付け、心にスペイン人に対する消しがたい致命的憎悪を抱いていた。この海波で洗われる砂浜の上で、母親達は何という若者達を生んでいることか。心して防御し給え、諸君、カスティーリャの諸塔よ。フランドルの防塁に対して油断召されるな、汝レオンの獅子よ。「敗戦の国より、墮落した国がましだ」、 — これがゼーラントの水夫達の信条だ。彼らはヴェーレ沖やライデン包囲戦で敗北したスペイン人達の心臓を胸から引き裂いて、囓り、犬どもに投げ与えて言ったのだ。

「噛んでみる、苦いぞ」と。

リーフェンスフク砦、リロ砦、クライス堡塁、ペルレ砦、聖フェリペ砦、マリア砦、フェルディナント砦、イサベラ砦で次々に叫びながら響いた。

「しっかり見張れ、しっかり見張れ」。

ブラバントの岸辺での砲口、それにフランドルの岸辺での砲口が大胆な船の破壊、壊滅の準備を整えていた。これらに逆らって流れを遡ってアントワープに侵入しようとする船を撃退するのである。

「しっかり見張れ、しっかり見張れ」。

しかし夜は暗い。月光も星の微光も見られない。このような夜に立派に見張るのは難しい。

何と静かで温かいことか。剛毅な奔流のざわめきのみが、防塁上の兵士達の警告の声の中、絶えず響いている。

「しっかり見張れ、しっかり見張れ」。

スヘルデ河口を南ベーヴェラントから巡航して来るものは何か。海と河川が出会って、この両者がもはや判然としないこの河口を。暗い夜に、波の上を滑って来るものは何か。数百もの不気味な腕がそれを動かしている、幽霊船に似て、さまよえるオランダ人に似て、矢のように早く飛んで行く。巨大な船体がこの大きな流れの中を縫って行く。これに別の、さほど巨大ではない諸船が続いている。

ゼーラントの男達が闇を気にしようか。彼らは自らの故郷の水上での進路をよく承知している。黒い影が次々に続いて、一直線になって滑って行く。一 船上では物音一つしない。櫂でさえ音もなく水の中に入る。司令官の言葉は口から口に囁かれて伝わった。誰もが自分の任務を弁えていた。誰もが、隣の者が物音を立てたり、不用意な叫び声で使命の遂行を危うくしたら、この隣の者の喉にナイフを突き立てるという重大な誓いと共に責任を負っていた。

誰もが是非に及ばず自分の誓いを果たすであろう、自分が倒さなければならない者が兄であれ、父であれ、息子であれ。

左手に一つの明かりが見える。一

リロ砦だ。

右手に一つの明かりが見える。一

リーフケンスフク砦だ。

スペイン人の見張りの叫び声は、一 黒いガレー船とこの船の護衛船上のどの耳にも、明瞭にはっきりと聞こえる。

どのナイフも、どの長柄斧も準備が出来ていて、一 大砲の側では隠された火縄がくすぶって光っている。向こう見ずな男どもの心臓の動悸が高まる。

「しっかり見張れ、しっかり見張れ」と遠方で木霊する。大胆な水夫達の背後には大きな危険が潜んでいる。ゴイセンの運否天賦、万歳。

右手でちらちら光るものは何か。

村とカラオ砦の明かりだ。

ブラバント側で煌めくものは何か。

オルダム村の明かりだ。

橋、アレッサンドロ・ファルネーゼの柵が以前あったあの恐ろしい箇所は今何と静かなのだ。あの橋はこの世紀の傑作であった。何という天才がここを照らしていたことか。ここで何という血が流されたことか。

この箇所でヨーハン・バプティスタ・プラートとバロッキが[両者ともイタリア人技師、スペインのために]働いた。この箇所でフェデリコ・ジャニベリの火船[スペイン船を焼く]が爆発して、大気中と陸地、水中を瓦礫や不具となった人間の体で一杯にした。今でも、何年も経った後でも、アントワープの幾人もの共和主義的志操の市民が、眠りから目覚めて、こう考える。自分はたった今、この偉大な町を救えたであろうが、しかし結局は救えなかったあの大きな爆発の物音を聞いて目覚めたのだ、と。

音もなく黒いガレー船は、その影のお供を連れて、不吉極まる箇所を滑って行く。一

「よく見張れ、しっかり見張れ」と聖ペドロと聖バルバラの堡壘からの叫び声が響く。

説教者屋敷からの明かりだ。マリア砦の明かり、フェルディナント砦の明かり。一 一つの鐘が、鈍く、厳かに、闇の中、響き渡った。一一 アントワープの我らの聖母様の大聖堂の塔からの鐘の音だ。一

二時。

黒いガレー船の船長は自分の居場所に立っていた。手に光る剣を持っている。しかしこの夜、この船と乗員を率いているのは別人であった。

この指揮官の顔にほんの少しの光線が当たれば、諸君はこの顔に驚くことであろう。

ヤン・ノリス・ミーハの婚約者、ヤン・ノリス、海上ゴイセンが、自分の許嫁を不倶戴天の敵の暴威の中に置き去りにしていたが、ジェノヴァのガレオン船の甲板から飛び込んで命拾いして、この夜、このヤン・ノリスが黒いガレー船を率いていた。

ヤン・ノリスの目は夜の中を睨んでいた。その目は闇をごく明るい日中のように見抜いていた。

救出だ、 — 復讐だ。

用心しろ、レオーネ・デル・ロータよ、夜は災難を孵す。注意しろ、レオーネ・デラ・ロータ、女性への恋とシチリア・ワインに溺れている時ではない。汝の船を見張れ、レオーネ・デラ・ロータよ。用心しろ、 — 黒いガレー船に用心しろ。 — — — — —
アンドレア・ドーリア号の甲板ではすべての命令が発せられ、遂行されていた。まだ三時間ある。その時、このジェノヴァの船は出航して、四隻の先に船出したガレー船と共にビールフリート沖で、黒いガレー船の拿捕に合流する。乗員はまだ残されているこの短い猶予時間を利用して眠っている。甲板の見張りの者達も皆眠った。甲板の側の男の火縄は消えていて、甲板の他の火縄もすべて消えていた。町の市壁の下、城砦の防塁の下、この船は十分に安全なのではないだろうか。

中央マストから船のランタンが上甲板に落ち着かずに揺れる明かりを投げかけていた。船室の窓からは弱い明かりが、勢いよく下流へ奔流となって流れるスヘルデ川の暗い波浪にかかっていた。

船室ではアントニオ・ヴァラーニの臥所から、少尉レオーネ・デラ・ロータが高く身を起こした。

「逝った」と彼は言った、「彼は亡くなった。フランドルの華よ、いいか、彼は亡くなった。それで、 — この船の船長は、レオーネ・デラ・ロータだ。いいか、美しい姫、それで私は遺産を継承して、 — そなたも私のものだ。この友が息を引き取った以上、そなたは私のものになったのだ」。

新たにスピノラ提督の少尉はワインを杯に注いだ。

「美しいミーハよ、どうして体を背けて、震えているのだ。彼は亡くなった、 — 彼の心臓は打ち終わった。しかし私の心臓はまだ荒々しく高く鼓動している。確かに彼は私の友であった。だから、私はそなたを愛して、彼の死神に復讐をしているのだ」。

彼は杯を持ち上げて、それを飲み干した。

「私は君のために献杯しよう、哀れなアントニオ、 — 高い海が高貴な海の男たる君の墓であろう。陸地に君を埋葬するべきではなかろう。陽気な波の中で眠るがいい。ジェノヴァ生まれの子に相応しく。海の乙女達の腕に抱かれて眠るがいい、 — 」。

「憐れみ給え、聖なる神様、死を給え、私を助け給え、助け給え」と絶望して、娘は哀泣した。しかし酩酊したレオーネは野蛮に甲高く笑った。

「女王よ、そんなに睨みつけるな。 — 今日は私が勝つ、明日は別の者だ、 — それが戦争だ、それが人生だ。そなたはこう言うのか。友の死体の側では坊主のように嘆いて、祈りをもごもご言いなさい、と。いいか、仮にだ、我々がリグリア海の[ジェノヴァの]浜辺にいたら、我々は互いに薔薇やミルテの花で髪を飾り、美しい夜を祝うことだろう。復讐の名において、勝利の名において、我が両腕の中にやって来い、野蛮なゴイセン娘よ、こちらに来て、私のものになれ、優しい異教徒の娘よ」。

金切り声を上げて、ミーハ・ヴァン・ベルヘンは、青白い、出血したアントニオ・ヴァラーニの、一 体が長々と横たわっている臥所の支柱にしがみついた。死人の許に彼女は庇護を求めた。しかし野蛮に笑って、レオーネ・デラ・ロータはこの娘を、自分の両腕の中へ高く奪い取った。彼は彼女の口に、それに彼女の剥き出しの肩に接吻を浴びせた。

一 すると彼の頭上で鈍い落下の音がして、天井のランプがそのため震えた。ある叫び声がして、一 ある戦いがあり、一 二番目の落下があり、一 多くのどたばたと駆け、踏み込む足音がし、一 野蛮な悲鳴が上がり、一 短銃による鋭い銃声、一 恐怖に満ち、厄災に満ちた叫び声をした。

「ゴイセンだ、ゴイセン。甲板にゴイセンがいる。裏切りだ、裏切り。南無三、南無三」。

「何だと、畜生」と少尉は叫んだ。娘を放して、剣を握った。一 血塗られた臥所から今一度アントニオ・ヴァラーニは起き上がって、今一度両目を大きく見開いて据えて、少尉を見つめた。

「船を守れ、一 裏切り者、卑劣漢、一」。口から黒い血がほとぼしり出て、アントニオ・ヴァラーニは仰向けに倒れた。死神は今や本当にその獲物を得た。

甲板では最初の見張りの落命の後、騒動がますます広まり、声高になった。混乱し、不意を突かれた乗員が、手当たり次第武器を手にして、飛び出て来た。一

「武器を取れ、裏切りだ。ゴイセンだ」。

呪詛と、一 呻き声と、一 命乞いの声をした。

再びミーハ・ヴァン・ベルヘンは、跪いていた。一方少尉は剣を鞘から抜いて、船室の階段を飛び上がって行った。上甲板で彼の足はすでに死体や、床に横たわっている負傷者につまずいた。荒々しくあちこちが揺れていた。ネーデルラント人の勝ち鬨や、「坊主よりはトルコ人がました」の恐ろしいゴイセンの叫び声が、すでに始まっていて、びっくりして眠りからたたき起こされたジェノヴァ人の応戦の声に勝っていた。

相変わらずアンドレーア・ドーリア号の船体では、猫のように駆け上がる音がした。隣接している商船や小さな軍船も襲撃されているように見えた。その船上でも戦闘の雄叫びがして、銃声がし、松明が掲げられたからである。

絶望して、レオーネ・デラ・ロータは間近な敵どもに立ち塞がり、掛け声と動作で、自分の部下を抵抗へと叱咤した。波止場の歩哨舎では目覚めた太鼓の音がし、スペイン人に起床指令の連打がなされた。

「ゴイセンだ、ゴイセン。アントワープにゴイセンが来ている。裏切りだ、裏切り。町中にゴイセンがいる」。

松明が岸辺で右往左往した。市壁の背後の家々で明かりが点された。

「坊主よりトルコ人がました。勝利だ、勝利。黒いガレー船だ、黒いガレー船。勝利だ、勝利」とジェノヴァのガレオン船の甲板でゴイセン人達が叫んだ。目の前の者どもをすべてなぎ倒していた。命乞いは認められず、剣で突き刺されたり、倒されていない者は、海上に投げ出された。「黒いガレー船」の言葉が、イタリア人の心を荒々しい戦慄で満たし、何にも勝って彼らの勇気を殺いだ。一部の者は陸地に逃げ、大部分が最初の襲撃で倒されていた。中央マストの、船のランタンの光源の中、まだ絶望的な群れが戦っていた。こちらでは少尉レオーネ・デラ・ロータが乗員の中で最も勇敢な者達と一緒に抵抗していた。そして最後に、ここに全戦闘が集中した。すでに床は血で滑りやすく、死体で覆われてい

た。幾人かの勇敢なゴイセンがこのイタリア人少尉の剣で倒されていた。

「向かえ、向かえ、勇敢な戦友よ。ー 私の許へ寄れ。陸地から応援も来る。向かえ、向かえ」とレオーネは叫んで、一人のゴイセンを床に倒した。しかし同じ箇所にも、倒れた者を飛び越えて、新たな兵士が向かって来た。

「進め、進め、諸君、海上ゴイセンよ。イタリアの暴君を倒せ。ー 恥知らずの軍旗を倒せ。マストの軍旗を片付けろ。イタリアの悪太郎、私に見覚えがあるか。ー 臆病者の少女掠いよ」。

「畜生」と少尉は叫んだ。恐怖と訝しさに固まっていた。しかしすぐに気を取り直して、言った、「乞食のゴイセンよ、溺れたのではなかったか。ならば、なお結構。ー この剣を受けてみよ、ー さあ」。

「おおーい、ミーハ、ミーハ、救出に来たぞ、復讐だ。てめえ、犬野郎、地獄に堕ちろ。地獄の連れに、海上ゴイセン、ヤン・ノリスのご挨拶を伝えろ」。

ジェノヴァ出身のレオーネ・デラ・ロータは床の血の中に沈んだ。ヤン・ノリスは倒れた者の胸に足を乗せて、その顔に叫んだ。

「ミーハは無事だ、船は貰った、地獄でそう語れ」。

こう言って、彼は不倶戴天の敵の喉に水兵ナイフを突き刺した。

その間に、逃走して命を守ろうとしなかった他のジェノヴァ人達も倒された。アンドレーア・ドーリア号甲板での戦いは終わった。すでにゴイセン達は船を波止場に係留していた鎖に取り掛かっていた。

船室ではミーハ・ヴァン・ベルヘンが気を失って、ヤンの腕の中にいた。ヤンはこの許嫁を恐ろしい部屋、亡き船長アントニオ・ヴァラーニの相部屋から、階段を上がって、屋外へ運んだ。

更に幾つかの同様にネーデルラント人に襲撃された船上で、戦いが続いていた。しかしすでにその中の幾つかの船は、ゴイセンの手で操縦されて、奔流の中に出ていて、荒々しいハーモニーの、勝利者達の歌声が夜間に響いた。

「我はナッサウのヴィルヘルム、
血筋はドイツ人。
死に至るまで、我は、
祖国に忠誠を尽くす、ー」

アンドレーア・ドーリア号の船尾から今や黒いガレー船のラッパが同じ具合に町の方へ吹き鳴らされた。野蛮なコーラスで勝利の水兵達が和した。

「いとも尊きネーデルラントよ、
スペイン人が汝らを陵辱したこと、
そのことを思い出すたびに、
我が高貴な心は流血した」。

致命傷を負ったゴイセンでさえも、荘重なハーモニーの歌声のとき、床から起き上がっ

た。一 もはや歌えない者達も、この歌の言葉に模して唇を動かした。ミーハ・ヴァン・ベルヘンも、かくてまた生命に目覚めた。そして笑いながら、泣きながら、彼女もヤンの腕の中で、解放の歌を共に歌った。

「ほら、私は約束を守ったろう。大砲の轟く中、鐘が鳴り、ラッパが吹かれる中、私はおまえを嫁として迎えに参上する、と。救出したぞ、救出した」とヤン・ノリスは歓声を上げた。

城砦では警報射撃が次々に発射された。町の市壁や防塁では、太鼓が次々に波止場クレーンの最初の不安げな太鼓の呼びかけに答えた。そして市壁や防塁の背後、大きなフランドルの町はますます声高に活気付いて、何人かの抑圧されていた憤然たる心が、より高く鼓動した。かくも反抗的にスペイン人達の太鼓に立ち向かって、この太鼓が一層戦闘的になるにつれ、更に一層高く湧き上がろうとする誇り高い、禁じられた音色を耳にしたからである。さて町や城砦からは、波止場に対して、がらがらと物音がして、市壁では軍旗が更に増し、川に向かって軍旗が更に押し寄せた。

しかし更に一層誇り高く、このすべての騒動の上に鳴り響いた。

「神よ、我が主よ、汝[なれ]こそは、
我が盾なり、我が頼りなり。
汝を信頼し奉るが故に、
我を決して見棄て給うなかれ。
我は心して敬虔でありたい、
いかなる時でも、汝に仕えて、
我が心を傷付ける
暴君どもを追い払いたい」。

何千もの心が、パチオッティがアントワープの町の周りに築いた市壁の背後で、甘美に震えて、この歌声に聞き入っていた。何千もの目がそのために湿っていた。

しかしもはや想念は必要ない。黒いガレー船はその立派な武勲を打ち立てた。今や肝要なのは、戦勝品を安全に運ぶことである。黒いガレー船からの砲撃に守られて、アンドレーア・ドーリア号の甲板上の指揮官、ヤン・ノリスは、スヘルデ川の中央を、町沿いに、本流の下流へとゆっくりと向かった。七隻の拿捕されたより小さな船が、すでにゴイセンの船と一緒に先を進んでいた。黒いガレー船がこれらに続いた。

アントワープの防塁から、何と稲光りし、爆音が響くことか。何と上手に、ゴイセンの船と、今やゴイセンの旗の下、帆を陽気に朝の風で膨らませて、流れを下って行くアンドレーア・ドーリア号は、応戦していることか。何とフェデリコ殿は、このような前代未聞の活動に髪の毛をかきむしることだろうか。

奔流を下って、すべての堡塁や砦から砲撃がなされた。

エイ、エイ、オー、ゴイセンの勝利、ゴイセンの勝利。スペイン人が上手に撃とうが、下手に撃とうが、海上ゴイセンには関係ない。負傷者は甲板の下へ、死者は水中に。一

ー エイ、エイ、オー。また黒いガレー船から閃光が走る。フェリペ砦の前だ。ドーン、

ー ドーン。これはブラバント側のクライス堡塁に向けてだ。

しかし諸君、ネーデルラントの男衆よ、上手に狙え。最後の門を、どのように頑丈なものであれ、吹き飛ばさなければならない。

下手の朝霧の中、リーフェンスフク砦がある。

下手の朝霧の中、リロ砦がある。

ゴイセンの諸君、まだ手と足のかなう者は、大砲にかかれ。ゴイセンの勝利、ゴイセンの勝利。 —————

リーフェンスフク砦では準備万端完了していた。司令官は自分の指示を講ずる十分な時間があった。すでに二時にヘロニモ大尉が彼を起こしていた。「貴殿か、どうした」と大佐は尋ねた。老公は両肩を竦めて、言った。「カラオでの反乱かもしれません。アントワープでの暴動かもしれません。いずれにせよ、防塁までご足労願わなくてはなりません」。苛立って司令官はその砦の南東の突出部に現れて、長いこと耳を澄ましていた。十五分後に、太鼓でまた守備隊を防塁に呼んで、その一時間後、大尉が言った。「大佐殿、私ならこの夜間いつでも歩哨に射殺させましょう」。 ———

さてスヘルデ川の下流に沿って、すでにいかほど砲撃が続いたであろうか。黒いガレー船を迎え撃つために、リーフェンスフク砦で準備万端整っていたのは不思議ではない。

自分の中隊の前でヘロニモ大尉は陰気にあちこち動いていて、砲撃が間近になるほど、彼は一層陰気になった。これが彼の流儀であった。彼はこの芝居を長年続けていて、すでに彼はそれに飽き飽きしていた。 — いや、飽いているというものではない。 — 遂には、 — 息遣い同様に、無関心になっていた。ヘロニモ大尉は、騎乗の使者が、ペレ砦から陸路、アントワープの近くで生じたことについて最初の詳しい知らせをもたらした時、ただいつものように両肩を竦めた。いかに戦友達が憤然と振る舞おうとも、このアルバ公と、レケセンス[1528-1576]、それにファルネーゼの老兵士はただこの使者に背を向けて、自分の中隊に歩いて戻った。

「この民をいつまでも抑え込むことが出来ると思っているのか」と彼は呟いた、「すでにどれほど長く、スペインの精鋭が、その勢力の核心が、この大地に埋葬されていることか。悲しや、汝、哀れな祖国よ」。

クライス堡壘からの大砲で、彼の自問自答は止まった。朝霧の中に微かに雪が降り始めた。三步先が見えなかった。

「いやはや」と老兵士は口ごもった。「ただ盲、滅法、撃っている。しかし、聞け、 — またしても、あの忌々しいやり方だ、スペインの権力と名誉への葬送の歌だ。 — バン、バン、弾を無駄に使うなよ。奴等はそんなでは仕留められない。 — いやはや、発砲したところで、その歌声は一層はっきり聞こえて来る。畜生、最後には覚えてしまうではないか」。

砲撃とネーデルラント人のラッパの音に和して、ヘロニモ大尉はハミングした。

我が輩は大胆不敵な
オラニエの皇子、
スペインの国王には
敬意を表するに吝かではない。

この歌がまだ終わらないうちに、一発の砲弾がすぐ彼の側、中隊に撃ち込まれて、中隊の六人が亡くなったり、負傷したりして、地面に伸びた。ジェノヴァのガレオン船からこの砲弾は飛んできたのであった。アンドレーア・ドーリア号のヤン・ノリスは、リーフケンスフク砦の手前を通り過ぎるとき、その砲撃を開始した。早速砦から、力強く反撃がなされた。しかしゴイセン達に格別損傷を与えられなかった。

アンドレーア・ドーリア号の甲板では恋人の側にミーハ・ヴァン・ベルヘンが立っていた。

彼女の目は輝いていた。スペイン人の砲弾が気になろうか。新郎新婦の頭上では、ゴイセンの軍旗が勝ち誇って翻っていた。スピノラ提督の引きずり下ろされた旗は二人の足許にあった。

「若い衆よ、更に一斉射撃だ。放て、放て。我が花嫁、ミーハへの祝砲だ」と帽子を振りながら、ヤン・ノリスは叫んだ、「トガンスルのマストが水中に落ちる。構わん、万歳、ミーハ、花嫁よ。 — 自由な水面だ、自由な水面だ。いいか、黒いガレー船は、リロ砦の手前でも容赦しないぞ。万歳、万歳、坊主より、トルコ人がましだ。自由な水面、自由な海だ。可愛い、可愛いミーハ。優しい、愛する花嫁よ、おまえが大好きだ」。

「まあ、ヤン、ヤン。こんなに誇らしく花嫁が征服されたことはありませんよ。私のために、こんなことをしてくれるなんて」。

「いや、大したことじゃない」とヤン・ノリスは笑った、「一人のイタリア人の海軍少尉を倒して、一人のイタリア人船長の腐肉を水中に投げただけだ。黒いガレー船が私とおまえを救った。 — 星々に届くまで、高く、黒いガレー船万歳だ」。

「黒いガレー船、万歳、万歳」とアンドレーア・ドーリア号の船員達が歓声を上げた。更に左手に黒い船は、リロ砦の壁の下に寄りながら、その反撃の挨拶をぶっ放した。

「もういいだろう」とヘロニモ大尉は、彼を防塁から下へ運ぼうとしている戦友達に言った、「私は屋外で死にたい。その方が私には楽に往生できよう。達者でな、戦友、皆、達者でな、 — 油断しないことだ。私の周りにはただ若い、若々しい顔のみが見える。

— 戦友、私は諸君らに、昔の軍隊よりも幸運があらんことを願っている。我々は自らの義務を果たした。イエミンゲの戦場[1568年7月21日、スペイン、アルバ公勝利]、モーカー荒野[1574年4月14日、ネーデルラント勝利]、ジャンブルー[1578年1月31日、ネーデルラント勝利]近郊とアントワープ[1576年と1585年、スペイン勝利]近郊を掘り起こしてみろ。我々がまだ、 — 昔の箇所には立っているのは、我らの咎ではない。 — 達 — 者でな、 — 戦 — 友よ。 — 老兵は墓へ入る。 — 達者で、 — スペインよ、 — 永遠に哀れな、 — スペインよ、...」。

ヘロニモ大尉は亡くなった。黙って彼の周りにリーフケンスフク砦の守備隊の将校や兵士達が立っていた。

砲撃の音は止んだ。無事にすべてのネーデルラントの船がスペインの要塞をその戦利品と共に通過した。しかし遠方から相変わらず、一五六八年の歌[1568年6月5日、アルバ公はネーデルラントの貴族、エグモントとホールネ両伯爵を処刑した]が響いた。

神の御前で我は告白したい、
神のすべてのご威光に対し、

我は、その昔、国王
陛下を軽んじていた、と。
その故は、至高の陛下たる
主なる神に対して
お仕え申さなければならないからで、
それが正義なればなり。

海に向かってその歌声は小声で消えて行き、誇り高いゴイセンの艦隊は、その戦利品と、その流血の傷口と、その栄光と共に、下流のますます濃くなって行く霧の中に滑って行った。

ビュッツォーの鵞鳥
(Die Gänse von Bützow 1866)

第一章

後世への著者の自己紹介。ヴュプケ博士殿が世襲公爵亭の名士達の部屋を去る。

他の作家なら、神々しい英雄アキレウスの怒りを歌うか、賢く忍耐強いオデュッセウスの漂泊の旅を歌うかもしれない。また他の作家なら、勇敢なアエネウスの、あるいは新旧のアマデイス[Amadis、ヴィーラント、『新アマーデイス』1771]の受難と歓喜を、あるいは若きヴェルターの悩みか、罪深い人間の救済を歌うかもしれない。しかし私こと、J. W. アイリングは、長期の惨めな、埃まみれの苛立たしい教師生活という歳月の後、応分に恵まれた隠居にあって、高い、更に高い、いや最高の調子で、自らとビュッツォーの偉大な革命を歌い上げることになる。つまりこの革命が小声のざわめきで始まり、ティンパニーやトロンボーンで更に進展して、幸いな結末に導かれた次第を私は歌うのであって、即ち、鷲鳥と民衆の叫び声を、ホルンボステル令嬢の怒りに抑圧、復讐、それに贖罪を、グレーヴェデュンケルの恐ろしい運命を、野蛮な指導者達の勇気とジャコバン主義的弁舌を、アルブス学士とヴュプケ博士の欣喜雀躍と塗炭の苦しみを、町当局と現町長の古代ローマ風勇敢さを、我が御領主閣下の公爵領的司法官房とご威光を、恵み深い勅令を、高度に学的ハレ大学法学部の的確な判断と高度に賢明で奇特な判決を私は歌い上げ、一好意的な読者にとって有益な娯楽となるよう、誰にも害を及ぼさず、私には栄冠が輝くように、素朴で謙虚な一家臣、一愛国者、一定年退職者として歌い上げるのである。

ヴァルノー川の流れがオボトリート族、ヴェラターベン族、ヴァーグリーア族[メクレンブルク、ポメルン、ホルシュタイン地区の以前のスラヴ人]の好ましく滋養豊かな陸地を貫流している所、この川の水の精の腕[支流]に抱かれてビュッツォーの町はあって、これは大地の片隅にあるが、この地は、「私に対し笑いかけ[鼯肩して]」[ホラティウス、Oden, II 6]、ここで私はパンの職[教職]を得、一人の妻を得て、この地を私は愛して、暮らしており、ここで教職を退いて以来、そして私の愛するフリーデリケの死去以来、神々は私にかの閑暇を与えており、(ただ左足親指の足痛風の痛みで時々難儀するだけであり)、この閑暇はどの人にも羨ましく映ずるに違いないもので、しかも必ずしも誰にでも恵まれるものではない。ビュッツォーで私は無邪気な青春時代を過ごしたが、数年例外があって、その例外の間私はロストックの大学で勉学に励んだのであった。ビュッツォーで私は一人前の男となったし、ビュッツォーで私は埋葬されるであろう。仮に私は死後、私の罪の所業に対する罰として、数年間、あるいは数世紀、夜間、十二時から一時の間、外気浴に送り出されることになったら、私はビュッツォーで幽霊となり、黒い学校教師として、頭蓋に乱れた鬘を被り、腋にハシバミの杖を抱えて、ポケットには私のまとめた『簡易ラテン語』を入れて、次の若い世代に対して、心ゆくまで、未知のものに対するかの癒される恐怖、幽霊に対する恐怖を植え付けるつもりである。これは(つまりこの恐怖は)日々失われて行くように見えるからである。

ヴァルノー河畔のビュットーでは、私にとって全く徐々に、微小のものが最大のものとなり、最大のものが微小のものとなった。そして私が自分の書斎から物事の進展を眺めると、満更楽しくなくもないことのひとつが、冗談が本気を呼び起こし、世界は陽気な楽しい劇場に他ならないという次第を知ることである。この劇場を前にして、表情を変えずに見ていることが許されるのは、極上の賢者と最低の患者のみである。

さて好意的神はその配慮で、私に啓蒙と蒙昧の間の快適な観点を私に恵まれたので、私は私の分の笑いを、私の見いだすところで、笑う。たとえ私は[悲劇役者の]高い靴を理解するとしても、[喜劇役者の]短い靴が好みであることを、分別ある男に相応しくないことであるとは思わない。有り難いことに、私自身のラテン語カバンよりも一杯に詰め込んだ学校カバンがあり、決して私はローマの元老院や民衆にかまけて、ビュッツォーの参事会や町民を忘れたことはない。私は文法書を読んだばかりでなく、[ヴォルテールの]『カンディード』も[スターンの]『トリストラム・シャンディエーの生活と意見』も読み、同様に宮廷参事官ヴィーラントの『ムーザリオン』や『アブデラの人々』も読んで来た。しかしお静かに。更にビュッツォーのいとも尊い聖職者の中には私の友人や知人もいて、「私には牧師の知り合いがいる」のであって、つまり丁度ゲッティンゲンの司法官にして教授のビュルガー殿のバラードのような具合である。それで牧師らが現世の食卓で、あるいは生身の食卓で、ナイフとフォークを上手に使うばかりでないことを承知している。それで以下のことは、ビュッツォーにおける偉大な鷺鳥騒動の顛末であり、この記述を私は早速その勃発と同時に開始しており、こう期待していた。即ち、この騒動は他のこの種の出来事的一切を上回る偉大なもの、記憶に値するものになるであろう、と。(トゥキュディデス、『ペロポネソス戦争』第一の書、第一章参照)。

我々は、世界がこの数世紀の間で目にして来たことの中で最も暴力的な出来事の時代に生きており、我々には郵便配達人や使いの女が日々新たな世界史的動乱を革靴や手提げ籠に入れて、世襲公爵亭とか、家に運んで来るものであり、多分我々は正当にも幾人かの将来の居酒屋政論家の連中に羨ましがられることであろう。

イタリア全土とザクセンの国

つまり堅牢なドイツの帝国[神聖ローマ帝国]が震える。

ゴットハルト峠からサマルカンドまで

ツィーエンの言う大きな池となる。[K.S.Ziehen (1727-80)は1786年2月新たなノアの洪水を予言した]。

我々は気球の歌をすでに1785年に歌っている。

ムハンマドの緑の旗が翻る、

キリスト教徒の血を吸って。

門が開いて、フランス人が威張る、

とても気分が良いかのようだ。

いや、私はこれ以上待たない。

気球で上に飛ぼう。

私と逃げたい者は、急げ、

万事破滅しないうちに。 [二つの詩行は、ラーベの祖父、August Heinrich Raabe作]

しかし全く別な快適な戦慄を感じて、いかにドイツ人男性の髪の毛が鬘の下で逆立つことになることか、当時誰が予見したろう。我々が過去になった一七九三年、フランス人の

西部で体験するであろうことを、誰が予感したろう。ビュッツォーの賢明なる当局と殿下の穏やかで家父長的統治の下に暮らしている者で、いかに速やかに我々自身の玄関先まで、あの恐ろしいジャコバン主義の蛮行が迫って来るものか、誰が予想し得たであろうか。

世襲公爵亭には名士達の我らのクラブがあった。 ー

全く自分の書齋[ミュージズの館]に閉じこもっているのは、賢者のすることではない。「生きた言葉が教える」は良い言葉である。というのは、「我々に我らの書架の小売本のこれらの記事が同じような知識を供給できるのであれば、何故現金を払って、直接、学問と英知とを仕入れるために、大学という学術市場へ出掛けるのか」[『観相学的旅行』]と私と昵懇の友、昔の機知的文通相手の、ムゼーウス[1735-1787]、小姓育成家庭教師が言っているのであるが、彼は、今その散策する楽園の浄土で、私がこう付言しても、反対しないであろうからである。生きた言葉は教えるという格言があります。これはイエナやハレの大学で妥当するばかりでなく、世襲公爵亭でも、ロストックの船亭でも、黄金の熊亭、赤い獅子亭でも妥当します。そしてドイツ国民の神聖ローマ帝国の学生は、その学生が存在する限り、この格言に反論はしないでありましょう、と。私は愛するフリーデリケの浄福な身罷り以来、そして一七八九年の六月十七日、ヴェルサイユで第三身分が国民議会議を宣言し、革命を始めて以来、偉大な英知の鍵、それに家の鍵を所有しており、私は慎重に用心して世襲公爵亭に向かった。

私は毎晩、神様が時間通りにもたらし給うその夕方、世襲公爵亭へ出掛けて、夏は九柱戯を眺め、冬は磁器パイプをくわえて、殿下の肖像画の左手、三番目の椅子に座り、夏も冬も自分の最善を尽くして、世間の出来事に関し、自分の持ち分の関与を示して、少なからず満足して、煙草の煙に包まれたビュッツォーの名士達のサークルの中で、報告癖と社交的優美さに耽るのである。我々はたとえ、神々の寵児たる賢明な、処罰に値しないエチオピア人ではないとしても、それでもやはり我々は必ずしも粗野で無愛想なキンメル人[ゲルマン種族]のカテゴリーに全面的に合致するものではない。またベルリンのフリードリヒ・クロネマン博士殿は、ここ私の眼前にある『一般文芸新聞のための広告誌』一七九二年、百三十号でこう知らせている。自分は「様々な精神文化の地域性についての」地図を出版する意向である、と。望むらくは真っ黒な中国風な墨汁が我々の色彩として使用されて欲しくないし、あるいは博士がやむなしと判断しても、いずれにせよ、博士自身の身の安全のためにも、メクレンブルクの境界を越えることは出来れば避けて欲しいものである。我々の耳に素敵なフランス人の歌が、 ー それも一七九二年のものであるが、 ー 相変わらず、残っていて聞こえる。

有名なプロイセンの歴史を

諸君はご存じか。

勝利の栄冠の棕櫚ではなく、

ブドウの房を集めて絞ったとか。[1792年9月20日、Valmy戦役での退却を嘲った、原文フランス語]。

私はこの先を模して更に歌いたくない。世襲公爵亭での我々自身の同盟の歌にそれは至

るからである。[以下の歌もラーベの祖父の作と推定されている]。

同胞よ、忠誠と信仰が大切とされた
時代ではもはやない。
今や言葉は空疎で滑らかであり、
昔の人の言葉ではない。
いかに幾人かが固く誓おうとも、
決してその行動とは合わない。
心して実直になろう。

ある詩的天才、郵便馬車でヴァイマルから千切れたズボンでロストックへ向かっていたこの人は、世襲公爵亭で呑み続け、金欠になり、我々ビュッツォーの名士達は募金によってこの人を引き取り、更に送り出したのであるが、我々に先の詩と更に若干のものをお礼に残したもので、我々はこの歌を、あらゆる祭典の機会の折、冷たい赤ワインのポンス[僧正]に合わせて大いに好んで歌ったものである。

父祖ノアがワインを発明したこと、
これにはどんな懐疑家も異論を称えない。
ノアがブドウを素手で刈り取って、
ブドウの房を絞った。
その子孫は喜ぶたびに、
たびたびワインで酩酊した。
心してほどほどに飲もう。

我々を夜警人が家まで送ったり、あるいは夜警人が我々のために鍵穴を探したりするときに、この二番目の詩を我々は大抵歌ったものである。それでこれはビュッツォーの路地でとても快適な、お堅い印象を与えたものである。しかし舗石がもう少し上等であって、道のでこぼこでドイツの素朴な男性が歩行のとき、かくもしばしば平衡を失わないものであれば、この効果は更にもっと倫理的なものとなろう。 ー

一七九四年十一月四日のことも書かれている。海からはいつもの霧がオボトリート族の国を超えて漂っていた。この日スヴォーロフ将軍がプラガ[ワルシャワ郊外]を突撃して、一万二千の市民や女達、子供達を虐殺したとは、夢にも思っていなかった。我々は我々自身の戦いに勝たなければならず、それに没頭していた。つまり町民と当局は互いに自治体の薪の分配のことでつかみ合いをしていたのである。

急速に侵攻して来る寒さのために、町管理のこの怠慢な地点で、これは喫緊の問題となった。晴雨計が下がるにつれ、一層人心は熱くなった。午前の参事会がバリの国民公会に似ていたとすれば、夕方の世襲公爵亭の名士の部屋では更に諍いが続いた。しかし私は、自分は現物供与の薪を所有していたことを考慮して、また著名なエドモンド・バーク[1729-1797、イギリスの保守思想家]がその本『自然社会の擁護』[1756]の中で、有史以来、三百六十億の人間が国王や征服者の戦争で亡くなっていると勘定していることを考慮して、私

は日中おとなしく過ごし、マンゲルスドルフ[1748-1802]の『歴史的に見た家庭必需品』（ルフ出版社、ハレとライブツィヒ）[1796f.]、それにエーフライム・モーゼス・クー[1731-1790]の遺作の詩（オーレル、ゲスナー、フュースリ商会出版、チューリヒ）を読んでいて、何も口論をしなかった。

夕方八時ようやく私も居酒屋に出掛けて、そして「どんな悪徳にもかつて弁護人の欠けたことはない」と正当に言われるように、この点に関しては私も自ら弁護資格があり、他の弁護人を要しない。

霧の中を赤みがかって、この町の明かりが見えた。私のランタンはビュッツォーの闇の中に赤みがあった光輝を投げかけ、ヴァルノー川は不気味な唸り声で夜の中、流れていた。私は市場の片隅で、外套を着た別なランタン携帯者に出会った。彼も同じように額に深く三角帽を被っていて、真鍮の球の付いた杖で用心深く道の危険な箇所を探っていた。

我々は兩人ともランタンを上げて、互いを照らして、そして兩人とも語りかけた。

「これはこれは、今晚は、同僚殿」。

臨時教師のアルプス学士も世襲公爵亭への途次であった。

哀れな奴である。彼は自分の教室か、名士達のクラブでしか、温かく座れる場を有していなかった。彼の祖母が彼をグライフスヴァルトの大学へ行かせて、そして財産の残りは彼の妹に回した。彼は窮して、低学年教師、校正者等々の仕事をしながら、ポメルンやメクレンブルク、ザクセン地方を渡り歩き、貧窮の遍歴者として我々の許にたどり着き、この地で引き続き飢えていたのである。彼の黒い上着めいたものは、とうに人生の茨で、ウールが剥げていた。その半ズボンはこの上着に似合ったもので、黒い靴下はかがってあり、靴は修理されていた。それでも彼は私に次いで、ビュッツォーで最も学識のある者であった。しかし彼は現物供与の薪を有しておらず、それで町自治体の薪分配問題も、彼の快適さに影響を及ぼすものではなかった。彼は週に二回、私の許で食事をする習慣で、私には何も隠し事をしなかった。それで私は夙に、彼の状況を助言や実践で改善しようと心に誓っていた。しかしまだ残念ながらその機会がなかった。

我々は勿論腕を組んで道を進み、世襲公爵亭に近寄った。居酒屋の窓はいつものように明るく夜間に輝いていた。しかしこの晩にこの歌は歌われていなかった。

義務の命ずることは、隣人の
繁栄をやっかまないこと、
貧民が窮しているときには、貧民に
食事と飲み物、衣装を恵むこと、
まことの人は苦しむ貧民を見たら、
慰めを述べて、救いの手を差し伸べる。
心して仲良く生きよう。

逆に、広い玄関の間に、女将が、町民の部屋からの平民どもの群れの中に立っていて、興奮している平民を穏やかな言葉や、威嚇的に振り上げた拳で宥めようとして甲斐のない状態であった。

女将は我々を目にすると、肘で自らと我々のために隙間を作って、民衆の中を通り、叫

んだ。「まあ、旦那様方、旦那様方、こんな世の中がありませんか。とんでもない。...まあ、黙らっしゃい。メタボのママシ。まあ、旦那様方、ヴュプケ博士殿が名士様方の許で薪のことを話されました。でも話して何になろうか、と諺にあります。薪は分配済みです。一度貰った人は、しっかり握って離しません。名士様方はヴュプケ博士殿を一人のジャコバン主義者と見なされて、このクラブから博士を投げ出そうとしています。おっさんのヌッデルベック、おとなしくしなさい、鼻がもげますよ、一そしてこの人らはヴュプケ博士の味方をして、私にこの店で、ラ・マルセイエーズや、ラ・カルマニョールを歌うよう言うのです。こちらに仕立屋のシュミット、それにホルツリヒター、コンペール、シェルペルツ、こんな悪魔連中が穴蔵から這い出て来て、私に吠えかかって、名士様方のお耳に披露しろと言います。あたかもパリの悪党どもがここビュットーに、しかも世襲公爵亭に現れて、私をここで国民公会、それにジャコバン主義者[山岳党、公会上席に陣取った]に仕立て上げたいのです」。

「歌ちゃれ、歌ちゃれ、ヴュプケ博士殿万歳」と群衆が叫んで、女将は両腕を腰に当てて、しっかりと床に仁王立ちし、広く開けた鼻孔から反抗と嘲笑、軽蔑を吹き出した。

「ヴュプケ博士殿、万歳」と町民の部屋で吠え声がした。「もう一度、もう一回、せーの、自由、平等、そして、一」。

すべての開けられた口が開けられたままであった。一突然、殿方の部屋のドアが、大きな物音と共に開け放たれた。重々しい煙草の煙と諍う男達の騒動が出現した。一蒸気の中から、黒い彗星に似て、乱れた袋状鬘が玄関の間の人々の許に飛んで来た。そしてこの鬘の後、ヴュプケ博士、弁護士にしてビュッツォーのダントン[1759-94]が、名士達の力強い腕で投げ出されて、高く飛翔して来た。彼は空中からばたばたと女将の両腕の中に落ちた。女将は落ちながら、仕立屋シュミット、靴屋ハーゼ、御者マルテンスを道連れにした。このドタバタ劇に超然と威厳をもって名士達の部屋の入口に立っていたのは、統率者の町長、ハーネ博士で、逞しい声で叫んだ。

「静まれ、沈黙せよ。一吠えたり、理屈を述べたりするな。神に嘉された上意たる当局を尊重されたい。自ら鼻面を洗って出直すことだ。各自銘々、おとなしく自分の家、自分の妻の許に帰り、妻にその頭や瘤を応分に洗って貰え」。

そして統治のこの首領の側に、首席牧師のヨプスト・クラファウティウスが現れて、両手を上げて、その両手に聖職者らしい剣を握っていた。彼はゲオルク・バイヤー[17世紀シュレーゲンの説教者]の『聖職者のナイトキャップ、聖書からの慰め多い格言を縫い合わせたもの』から騒がしい群衆の耳の上に、ビュッツォーの和平を目指して、穏やかに引用しようとした。

しかしこの願わしい静寂がヴュプケ博士の手ひどい転落なしに生じ得たか、それは疑わしい。彼は、つまりこの博士殿は、賢明な、利口な、口の達者な男であった。しかし彼は即座に頭から転倒すると、更に叫び声を上げることもなく、家へ運ばれた。彼の支持者の野蛮な民衆にとっても、一つまりこのロベスピエール[1758-94]の尻尾[最後まで支持者]にとっても、一 名士達の強引な腕力は畏怖の念を与えるものであった。鈍くぶつぶつ言いながら、人々は散り、世襲公爵亭は静かになった。私はアルプス博士と一緒に、更に妨害を受けることなく、名士の部屋のテーブルの自分の椅子に座ることが許された。

第二章

陸軍元帥スヴォーロフはプラガを占領する。財務官ブレッカーは鷺鳥に異を称える。著者はアルプス学士を家まで送る。

一行のパイプの火はすべて消えていた。人々は深く、重々しく呼吸した。より冷静な観察者も、どこにその目を向けても、興奮した視線や狼狽した視線に出会った。ただ殿下だけは、いつものように好意的な育ちの良い快活な表情でその枠縁から我々を見下ろされておられた。殿下は党派間の野蛮な争いの上に不可侵に立っておられた。ヴュプケ博士でさえ、殿下への攻撃は避けた。殿下も微笑しておられた。しかし統治者のハーネ博士、それにいとも尊い聖職者、いとも称えられる医学者、名誉ある商人は微笑しておれなかった。ビュッツォーは普段のようではなかった。もはやあるべき様ではなかった。無礼な、地に飢えた、革命的時代精神が、ヴュプケ博士の去った後の椅子に感じられた。パリの沼地から[Lutetia Parisiorum]のペストの瘴気が我々の頭上に降りかかって来た。そして、

この靄を吸ってしまえば、すぐに
黒も白に思える。徳操も憐憫も、
名前だけになる。誓いは、波の泡に過ぎず、
悪徳が洒落となり、ただ戯言のみ英知となる。[Die Westhunen、西のフン族]

とフリードリヒ・レーオポルト・ツー・シュトルベルク伯爵[1750-1819]は一七九四年六月に、自分の聖なる豎琴に合わせて歌った。ちなみに我々は、薪問題ではサンキュロット達に譲歩しないと固く決意した。我々は慣行を固く遵守し、オスナブリュックの職人達が、その立派な同業組合に入るときのように誓った。即ち、古きものは何も廃さず、新しきものは何も入れない、と。

「三百代言ども、九月虐殺者ども[1792年9月2日、3日の反革命派狩り]は監獄行きだ」と息も吐かず統治の町長は言った。そしてすべての居合わせた当局の人物や委員会町民が息も吐かず、その立派な頭目、我が立派な友、ハーネ博士同様に憤然となっていた。

「恐ろしい時代だ。人間達の無法ぶりには」と高位の聖職者が頭をメランコリックに振りながら、嘆息した、「苦しみと怒りを覚える時代だ。最も神聖なものも、これらのならず者の手の前では安全ではない。一 後どれほど長く続くことやら、それどころか、仕舞いには、一」。

「教会の十分の一税が廃止されましょう」と私、J.W.アイリングは憂鬱そうに言った。聖職者の旦那は、私の顔に、旦那自身が推測する皮肉な微光が見られないか点検した。しかし無駄であった。私は墓場の静寂と真面目さを保って、燃える点火紙繕りをパイプの火皿に持って行き、私の魂の内奥から語った。

司祭ハ我ラニ、シヨツチュウ金ヲ要求スル、
シカシソノ代償ハ、タダノ祈祷ノ響キ。[作者不詳]

首席のヨプスト・クラファウティウスは私を好いていなかった。そして私をそのビュツ

ツォーの町民仲間の間では、一人のヴォルテール主義者として、無慈悲の器、異端派の嘲笑家と見なし嘲っていた。我々はすでに一七七八年にブラウンシュヴァイクで、「ゲーツェの自発的寄稿に対する緊急寄稿[反ゲーツェ、正統派ゲーツェに対するレッシングの立場]が印刷されたとき、袂を分かっていた。

人々はその夜の大きな興奮を酒で紛らわした。人々はいつもより沢山飲んで、勿論いつもより沢山話し、より声高な調子であった。誰もが、神殿と祭壇を蔑ろにする悪魔的な時代に対する告訴と苦情とを嘲笑的顔に対して投げかけた。ただアルブス学士だけは、出来る限り暖炉に近寄って、自分の干涸らびた友、死神ハインの姿を、明かりと我ら安穏生活者達の目の中に入れまいよう用心していた。

どの面から見ても、アルブス学士は、人々がたった今投げ出した法学者ヴェプケ同様に、ビュッツォーの世襲公爵亭の名士達の部屋の一員ではなかった。

ヴィスワ川の向こう、燃え上がるプラガでは、ポーランドの死体の山の上に、ピョートル・アレクサンドル・ヴァシリエヴィチ・スヴォーロフ・ルムニク伯爵が座っていて、栄光の日について報告書を書いていた。「万歳、プラガよ、スヴォーロフよ」。ヴァルノー河畔のビュッツォーの世襲公爵亭では財務官のブレッカーが起き上がって、

「ビュッツォーの鷺鳥」

について演説した。

ローマもこれより大きな厄災に満ちた時を体験したことがなかったであろう。たった一言でドイツの頭脳と心臓とがこれよりもひどく沸騰し、激昂したことはなかったであろう。二度と財務官僚ブレッカーは、自分の演説のためにこれ以上絶好の時を見いだせなかったであろう。

世襲公爵亭の名士達の部屋のドアの前、玄関の間の反抗的民衆の叫び声によって、彼は路地の鷺鳥の叫び声を思い出した。この厭わしい騒音、このガアガア、クワックワッ、シュッシュッに対する古来からの賢明な元老院勅令を彼は語った。それに対して彼に報われたのは、ただ喝采の叫び声と立派な男達の小声の賛同のつぶやき声であった。彼は極めて的確なやり方で、薪問題と鷺鳥問題との関連を表現し、ヴェプケ博士に対しこの点でも、彼の賢しらな、声高な、ギャアギャア吠える立場を指摘し、殿下の国父的に見守る目をこの件に対し引き下ろして、家畜小屋や壁に囲まれた屋敷中庭も、鷺鳥の種族とも、また実直で正直な愛国的ドイツの市民社会とも極めて密接な、自然法的、民法的、教会法的関連を有するとした。

居酒屋の女将によって、大きなボンス鉢がテーブル[クセニア・トラペーザ、歓待の卓]に置かれ、男達の中の君主[武士らの君、アガメムノンの綽名、呉茂一訳]たる、神々に等しい統治者、ハーネ博士によって、立派に一同のグラスにスプーンで掬い入れられた。我々はホガース[1697-1764]の彫刻刀の題材風になって、これ以上民衆や鷺鳥のジャコバン主義的狼藉を許さないと誓った。我々はカラフルに描かれた監督教會的中国風磁器の鉢に純朴な手を伸ばし、財務官は自分の長広舌への思いもよらぬ効果に感動の涙を流した。

「鷺鳥は其上、再び寒さのせいで目下、我らの称えるべき自治体のポンプや噴水仕掛けを保存してきた麦藁を食べるのです」と彼は私の肩に寄りかかって、嗚咽した。そしてこの時、自治体員のグレーヴェデュンケルが入って来て、我らに町民時間[法定閉店時間]となりますのでよろしくと言うと、町長がこう言った。

「グレーヴェデュンケルよ、明日早く十時に私の許に来てくれ。しかし今は私を家まで送って欲しい」。

グレーヴェデュンケルは、ポンスを飲んで、閉店時間となっても、自分の英雄的上司のことは理解していて、しわがれたバスの声で答えた。

「畏まりました、やんごとない町長殿」。

全く確かとは言えない声で、我々は更に我らの同胞の歌のかの節を歌った。

「禁じられた財宝を目指す者は、
いつも良心の呵責に襲われる。
その存命の間、邪悪に
嘔みつく蛇の責め苦に遭う。
偽りの明かりの鬼火に導かれ、
行き着く先は不幸の奥津城。
心して賢明であらう」。

我々は賢明であった。私は、余りポンスに慣れていないが故に、余りポンスを飲めないアルプス学士を家まで送った。彼はグレーヴェデュンケルのような者を使えなかったし、私は身分の品位を保つという同僚意識の要請を感じたからである。臨時教師の彼も感動していて、自分の惨めな、飢えて渴いた状況を訴え、私のことを「学長閣下」と呼び、ライン河畔の軍務に就くことを話し、ホルンボルステル嬢の家の前の市場広場で、声高に泣き、嗚咽し始めた。これは話し終えた財務官よりも声高であった。

彼は疾風怒濤悪疫に罹患したかのように、おだを上げ、高い所で窓が開いて、水鉢がはかされたとき、朗詠した。

「ラウラよ、御身は煌めく星々を憧れて見上げる、
いや、この私は、

オリンポスの山[神々が住む]でありたい、そして沢山の目で御身を見つめたい」。

「学士よ、一 臨時教師よ、一 アルプスよ」と私は言って、彼を私の両の目で見つめた。しかし彼は私を両腕で抱いて、答えた。

「『優美女神の祭壇の上の花々』より、シャッツ作[1787、Georg Schatz、1763-1795]、ダイク書店、ライプツィヒ、いや、ザハリッサよ[Ephraim Moses Kuh作、ザハリッサに寄す]」。

「学士よ、学士、しっかり立ちなさい。気を確かに持って。生徒達がこのような振る舞いを目にしたら、何と言いましうぞ」。

臨時教師は私の口に一回接吻をして、どもって歌った。

「我ら二人は
酩酊してしまった。

私はヤンテの

優しい眼差しに

御身は私の

嬉し涙に。[Michael Hamann、哲学者ハーマンの息子、『薔薇への溜め息』より]

ハーマンよ、ハーマン。学長閣下殿、気前の良い閣下、　ー　いや、ザハリッサ」。

「このザハリッサとは誰です、学士」と私は尋ねた。成り行きには不釣り合いなほど、私は余り怒らなかつた。アルプスは意味深に高みの窓の方に目配せした。しかし私は言った、

「ホルンボルステル嬢か、それではすべての愛の神々にかけて、おめでとう、おめでとう。衷心から貴殿の幸福と首尾良い成功とを願います。しかし今は家に帰りなさい、そして眠ることです」。　ー

「私はこの谷を、どんな王冠を差し出されても、去りはしない。

しかしラナッセが接吻してくれるのであれば、

即刻去ろう」[先のシャッツの詩より]。

と学士はすすり泣いた、そして今一度付け加えた。

「いや、ザハリッサ」。

私は上手く彼をベッドに運んだ。

第三章

窓辺の著者。路地の女達、鷺鳥、そしてビュッツォーの町参事会。

賢者は自分の窓辺に寄ったとき、何を見るかは大事なことである。そして実際『純粹理性批判』はケーニヒスベルクのかの世界的に著名な塔の擬宝珠がなければ、日の目を見ることになったか、疑わしい。ヴァイマルの枢密顧問官ゲーテ殿が、宮中顧問官シラー殿が、総監督にして宗教局長のヘルダー殿が、オスマンシュテットの宮中顧問官ヴィーラント殿がそのミューズの部屋、哲学者の部屋から何を見ていたか、私は知らない。私は、福音史家の聖ヨハネがパトモス島でシャコと戯れていたその時[黙示録、I,9. 他伝承]、私の向かい側の井戸泉を眺めていた。私は一七九四年十一月五日、午前十一時に、それに注目していた。その二十分前には市役所から「名士達」が出て来ていたのである。

この頃、井戸泉の周りには、私自身の家の女中、ヨハンナ、現町長ハーネ博士の家政婦、マグダレーナ、財務官ブレッカー殿の女中、クリスティアーネ、ホルンボルステル嬢の女中、レギーナが、このホルンボルステル嬢をアルプス学士はザハリッサと呼んだのであるが、そして何人かの他の、澄んだ流体要素を必要とする女達の絵姿が女性界、乙女界から見られた。彼女達は流暢な舌で、ビュッツォーの町の出来事、町と世界の歴史を話し合っていて、彼女達の周りにはビュッツォーの鷺鳥達、羽根のある家禽がガアーガアー、クワックワックと無邪気に、何気なく、屈託なく鳴いていた。

ビュッツォーの上の黄色の霧のように、井戸泉の上には平安と休息が横たわっていて、ヴェルターの青白い人影と共に、私は「昔は国王達の娘達でさえ行っていた、最も罪のない仕事、最も肝要な仕事」に目を奪われていた。ヴェルターの心中同様に、私の心中にも家父長的考えが浮かんでいた、「いかに皆が、昔の父祖が、井戸泉の許で馴染みとなって、求婚をし、いかに井戸泉や噴泉の周りでは善良な精が漂っていることか」。

「いや、そのことに共感出来ない人は、疲れる夏日の散策の後、井戸泉の涼しさを楽し

んだことがないのに違いない」と私はゲーテ博士と一緒に[井戸泉に関しては『ヴェルター』第一巻、五月十二日参照]叫び、新しい薪を暖炉に焼べた。私がこの仕事からまた窓辺に戻って来たとき、情景は変わっていた。お触れ鐘の甲高い、拍子の揃ったりんりの音を私の耳は聞いた。路地の真ん中に、自分の立場の重要性を意識して、自治体員のグレーヴェデュンケルが、一枚の記述された大きな紙を広げて、彼の周りには鷺鳥と女達が参集していた。通行人達は立ち止まって、高等な当局がその善良で誠実な町民に対して布告すべきことについて聞き耳を立てていた。

伝令のグレーヴェデュンケルは咳払いをして、伝えた。

「すべての好意的で平静な町民の間で、またこのビュッツォーの都市法域の住民の間で、鷺鳥の叫び声、苛立たしい狼藉、ゆらゆら動き、しゅっしゅっ音、ポンプや井戸泉での麦藁食い、これらが日に日に増大しており、耐え難いものとなっている印象を与えているように思えるので、今日の日付で、称えられるべき当局は以下のように定め、ここに布告するものである。

第一条。男であれ、女であれ、誰も自ら鷺鳥を勝手にその家禽の意志のままに、通りや袋小路、広場や通路で、公共の損害や立腹となるよう歩行させることを禁ずることとする。ただし鷺鳥番や鷺鳥係少年が、その義務で責任を持って鷺鳥を率いて行く場合はこの限りにあらず。

第二条。男であれ、女であれ、誰でも、昔からの慣習であるように、家畜小屋や閉ざされて、良く管理された屋敷中庭で、これらの男女の、慣行、用益、状況、意志に従って、鷺鳥を飼い、卵を生まれ、卵を孵らせ、鷺鳥を屠殺し、糞することは許され、容認されるものとする。誰も、男女はこの点に関し、その男女の権利を損なわれ、妨害され、阻止され、ねじ曲げられない。

第三条。男であれ、女であれ、誰でも、この男女の鷺鳥を日中、一度自由な水辺へ追い立てたり、追い立てを頼んだりすることが許される。この点に関しても、男女は誰であれ、侮辱されたり、阻止されないものとする。

第四条。ここにすべての悪意ある、不服従の、怠慢な違反者に対し、男であれ、女であれ、町の警察は鋭い目で見張る任務を負うものであり、我らの町の捕吏、お触れ役、自治体員のグレーヴェデュンケルに、すべての、監視や引率なしに徘徊する鷺鳥に、その家の貴賤にかかわらず、介入し、力づくであれ、策略によるものであれ、鷺鳥を家畜小屋に追い立てたり、更なる処分と法的判決が下されるまで、捕縛するものとする。

以上のように決議され、布告される、一 ビュッツォーにて、一七九四年十一月五日、木曜日。

ハーネ博士

目下、現町長」

私こと、J.W.アイリング、ヴァルノー河畔のビュッツォーの退職校長は長い人生の中で、多くのこと、仰山のことを経験して来た。しかしグレーヴェデュンケルがその文書を折りたたんで、別の通りの角で民衆に読み上げるために背を向けようとした後に生じたことと比肩できるような事柄は何も経験したことがなかった。

デモクリトスと一緒に高笑いすアブデラの人々を活写したかの筆を私が所有していたら、[ヴィーラント作、『アブデラの人々』一七八一]、ディーオンの幽霊やディオメーデスの人食い馬と戦うヘラクレスを創画したハインリヒ・フュースリ[1741-1825]の絵筆を私が有していたら、私は自分の窓の下の人々の表情や身振りを正確に描こうと試みることであろう。しかし私はビュッツォーの鷺鳥の羽根からの羽根ペンを使用するのみであるので、私は謙虚になって、ただこの当局の布告の効果は恐ろしいものであったと述べるに留める。

参集した町の家父長達の誰一人として、この決定に対し、自分の声を述べる前に、自分の妻や、家政婦、あるいは女中とこの件について話し合いや協議をしたようには見えなかった。聡明な参事官達の誰一人、どのような具合に自分の家の家政やマルテン祭の鷺鳥の焼き肉に対して自らを弁護すべきか考えたことがなかった。 — マラー主義者のヴュプケは両手を[嬉しそうに]こすったかもしれない。 — ヴュプケは人民の友で、ビュッツォーの聡明な高官のそれぞれのベッドカーテンの背後で凱歌を上げていた。

女達や鷺鳥が蜂起した。ただ女達や鷺鳥のみが蜂起し得るような具合であった。これまでヴァイマルの宮廷顧問官や枢密顧問官も、ケーニヒスベルクの教授達も、グリニッジの天文学者も、ヴェスヴィオ火山、エトナ火山、ヘクラ火山の麓の住民達も、その窓から類似のものを見たことは決してなかった。

静寂の次に嵐が生じた。女達や鷺鳥は両腕や羽根であたかも一万のトロヤの女達がパリス皇子とヘレナの結婚式を祝うかのように叩いた。グレーヴェデュンケルの平静さや禁欲主義でさえも、左官や大工との百もの戦いで、紅白試合や馬上槍試合で、群れの中での戦いや個別の決闘で、鍛えられて来たのであるが、こうした叫び声や不安な声に屈して行った。騒動、騒音、呻き声、悲痛な声、手もみ、お喋り、甲高い哄笑、放恣な高笑い、不平呟き、轟音、がちゃがちゃ音、めそめそ泣きがビュッツォーに押し寄せた。そして彼は、

— グレーヴェデュンケルは — 立っていたが、彼の両脚は震えて、彼の鼻のルビー色は色褪せた。ヴュプケ博士を世襲公爵亭から支配し、博士を天へ投げ飛ばした後、神々しい手と権力、力によって、野蛮な民の賢い指導者を打ちのめした統率者[町長]でさえ、ここでは一目散に逃げたことであろう。グレーヴェデュンケルは周囲を見回した。そして — 遁走した。そして後世の哄笑が、その背後にくっついた。

しかし公共の平静さのこの敵がかくも屈辱的に退散したこの戦場に、北方の勇者の死人を選ぶヴァルキューレに似て、ビュッツォーの女中達があちこち散って、突然荒れ狂い、それぞれの女中が自分の主婦の許に赴き、キッチン、貯蔵庫、寝室、客室で前代未聞のことについて反響があった。殿方らは市役所から家に帰って来ると、女中達がかき混ぜていたスープが熱く、湯気を立てて、塩や胡椒をたっぷりかけられて、テーブルに出されていた。

かくてゼウスの意志が遂行された。

第四章

ホルンボルステル嬢について手短かに的確に扱う、令嬢も手短かに的確に行う。

アルブス学士によって、ラナッセ、ザハリッサ、ヤンテと呼ばれ、教会台帳にはユーリア・テレザ・アドルフィーネと記載され、女友達や男友達にはユールヘンとかユーレと呼

ばれ、仇の女性や男性には、陰険で、ケチな老いぼれ猫と呼ばれていたホルンボルステル嬢は一人の処女で、昔の法律顧問ホルンボルステルの唯一の遺産継承人であった。これは裕福な男で、その墓石には金地の銘文で、多くの美点や称えられる徳操、性質が顕彰されて読み取れた。彼女は三十五歳を越えていて、丸みはないが、力強く、筋肉質の肉体を誇り、黒っぽい、まことに煌めく瞳で、すでに嘲笑や死神、破滅を幾多の敵の顔に吹き付けていた。彼女の未婚の、処女のままの推移に関する究極的理由について、町では極めて雑多な噂が蝶々されていた。何人かの者はこう主張した。彼女はプロイセンの国王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世肥満殿下[1744-97]がビュッツォーを經由しての旅の折、この国王陛下に恋をしたのだ。しかし彼女のささやかなランプの明かりをリヒテナウ伯爵夫人[1752-1820]の輝かしい太陽や枢密顧問官のリーツとリーツ夫人[リヒテナウ伯爵夫人のこと]に対抗して、支配力を発揮出来ず、それ故、神聖な痛みを感じて、自らの小花冠をその他の人間達の手の届かない高みに置いたのだ、と。また何人かの者はこう主張した。彼女は生来とても苦味のある不機嫌な質で、誰も、この今言及された小花冠に手を差し伸べる勇気がなかったのだ、と。しかしこのことを言った者達は、誹謗家に数えられる者達であって、部分的には、時に手の届かぬブドウを酸っぱく思う狐達も混じっている。事情通の三番目の部分は、これは全く取るに足りぬわけではない部分と付言しておかねばならないが、ユーレ・ホルンボルステル嬢はヴェスタ「竈」神の火をハーネ博士、つまりビュッツォーの現町長のために掻き起こしているが、この町長、私のとても立派な大事な友が、数年前、この令嬢とのかなり懇ろな関係を余りに性格の類似性が顕著であるが故に、突然すげなく反故にしたのだと見なしていた。

どのような意見があろうとも、クリオ、つまり歴史のミューズは、ホルンボルステル嬢の家を指し示して、ビュッツォーの恐怖時代の歴史学者はこの真面目な女神の厳かな合図に躊躇せず従った。

太古の族長の国王の娘ではなく、馬具屋シュルペルツの娘であるレギーナ[意味は女王]が水汲みの女中であり、彼女が執政官や参事官[元老院]の勅令をユーリア嬢に打ち明けた。ニーダーザクセン風方言で、あらゆる種類の感嘆詞を混ぜて、彼女はその報告を述べ、こう質問して結んだ。

「こんなんあたしども我慢出来ましようか」。

「金輪際」とホルンボルステル嬢は言って、シラー殿の悲劇『ルイーゼ・ミラー嬢』あるいは『たくみと恋』の第二幕、第七場[フェルディナントと父親との会話]のように偉大な風に立っていた。しかし私はこのことと、以下の情景とを、アルプス学士が私に描写した話しを模して写しているが、学士には自らホルンボルステル嬢が語ったのである。

「他の旦那方にはその奥方が言えばいいでしょう、でも　—　あの町長殿には私が自分の意見を伝えることにします。レギーネ、ヴュプケ博士を呼んで来て」とザハリッサは語った。

シュルペルツの娘は自分の女主人を何度か驚いて訝しそうに見守っていた。それから彼女は令嬢の意見を理解したと見え、ビュッツォーの路地を駆け抜けて、弁護士を連れに行った。三十分後に、彼は小走りに、びっこを引きながら、すでにビュッツォーの路地を素早く急いで行く処女にして女丈夫と並んでホルンボルステル嬢の家まで歩いて来た。

彼はびっこを引いて、頭蓋には黒い絆創膏を貼って、相変わらず彼の鬘は名門貴族達の

手掴みの痕跡を残し、彼の黒い上着は、世襲公爵亭の玄関の間の痕跡を残していた。憤懣と憎悪とが彼の胸の中を吹き荒れていた。彼は眠られずに、毒素を自らの栄養源としていた。そして彼はすでに自ら毒を発生させることが出来た。

かくて彼は令嬢の前に歩み寄った。しかし彼女が彼と何を交渉したのか、当時二人以外にそのことを知り得た存命の者はいなかった。アルプスでさえ、何もそれについて言い得なかった。そしてレギーナは、美しいベルトを帯びた乙女であるが、ドアの許で立ち聞きしようとして、その女主人に現行犯で見つかり、平手打ちを受けて、おいおい泣きながら、階段を降りて、キッチンへと追いやられた。この相談の後に続く、野蛮で革命的民衆扇動家ヴュプケの登場に基づいて、歴史家はただその推論を引き出し得たが、しかし一つの間違った推論であった。

地下では轟音がし、硫黄の臭いがした。唇を一文字に結んで、編み物の靴下と共にホルンボルステル嬢は窓辺に座り、ヴュプケ博士は魔神的ににやりと笑って彼女の家を去った。二人の偉大な侮辱された魂が、その憎悪を一緒に投じた。弁護士ヴュプケ博士は頭を高く上げて、温かく微笑して、次の時には新しいスーツを着て、一人つきりでも、海上であれ、陸上であれ、戦争出来るような手段[金]を十分に準備して現れた。ソノ所有ノ由来ヲ誰も問題ニシナイ、所有シテイルコトデ十分デアル。

第五章

厳格ナル正義ハ最大ノ不正、 — 正義のために腐心する者は、名誉毀損を恐れる必要はない。

ミレトゥスのアリストアイデスの[好色]メルヘン[紀元前一世紀]を私は語っているのではない。私は一步一步厳格なミューズの足取りに従っている。このミューズはまた、小柄で痩せた弁護士ヴュプケ博士という苛立たしい人物の中に立派で威厳のある集合体となっている七人の悪魔どもを[ルカ、16,9]追い出した後の、三日目の晩に、居酒屋世襲公爵亭のクラブ部屋に案内した。

不安げな神域の囁き声、 — エリカの風のざわめき、 — 墓石の残骸、 — フクロウの飛行、 — 葦の茂みの鈴蛙の鳴き声や鷺の声、 — 見通しがたい湿原からの有毒な蒸気、 — 微睡んでいる身体、 — マティソン[抒情詩人、1761-1831]風である。まことにホルンボルステル嬢の言った通りである。「他の旦那方にはその奥方が言えはいでしょう」。そしてまだ快活な目をいつもはととも仲の良い一同に向ける余裕のある個々人は、独身の若者か、独身の年配者、男やもめであった。

耳を澄ませ、ワシントン[1732-1799]が砲を向ける。地球が震える。

エリオット[1717-90、英国の将軍]が嗅ぎつけると、メッシーナが沈む[1783年地震]。

カルタウネ砲は私の小声の歌を追い払う。

私の歌は鉄の号砲に怯えて消える。[作者不詳]

まことにビュッツォーの女性陣の砲兵隊の粗野な大砲は、グレーヴェデュンケルの路地演説以来、収まることがなかった。しかし男性陣の射撃は止んだ。アリストファネスのり

ューシストラテーター[『女の平和』軍解散の意味のヒロイン]は、ちょっと思い出して見ると、このヴァルノー川の花咲く岸辺での同朋女性の勇敢さと持続力を喜んだことであろう。

そこにはいとも尊い聖職者が頭を垂れて、鷺鳥に対する破門状に同意したことを深く後悔していた。彼は十分の一税の鷺鳥のことも妻のことも考えていなかったのである。

更に財務官ブレッカーが座っていた。怒りの矛先の男、嘆きの張本人で、完全に素面で、悲惨さの絵柄となっていた。空ろな目で、彼は青白くやつれた頬で、骨壺に寄りかかっていたわけではないが、しかし震える手の上に凭れていた[マティソン、Trost an Elisa]。一同の誰も不安な憂愁を慰めてくれなかった。彼に向けられているのは、ただ陰鬱な非難一杯の視線で、彼がヴュプケ博士のように世襲公爵亭から投げ出されなかったのは、自分自身のお蔭ではなかった。

更に商人や医師、徴税官が座っていて各人の背後に黒い不安が見られた[Horaz,Ode,III,1]。

この晩の気分に我らのコスモポリタン的人道的同盟の歌のどんな一節も合わなかった。いや、ビールジョッキは、忘却や甘美な無意識を飲み込むことの出来るレテの流れではなかった。

耳を澄ませ、　　—　　怒った海の眩き声のように、
空洞の岩の水盤を通ずる如く、小川が流れて、
そこでは鈍く低い声で、重たく空虚な苦悩を
圧縮した嗚呼の呻き声とする。[『タルタルスの群れ』シラー作]

この嗚呼をその広範な胸の深みから取り出して来て、我らに小さな説教とか演説をしたのは、今回は宮廷顧問官のシラーではなく、首席牧師のクラファウティウスであった。

「我が親愛なる諸君、キリスト教徒の同胞よ、私はこう言いたい。我々はまた友好的共同体の中、日中の勤労の後、職務の束縛を脱して、謙虚なドイツ人らしい流儀で、すべての興奮状態から休養し、寛いだ精神に必要な休止を恵むためにここに座しています。私の魂はこのことを喜んでいます。　　—　　やんごとない町長殿。　　—　　誰も我々一同の中で、他人に衷心からの好意を抱いていない者はいないと信じています。敬虔なら教区民の方々、いとも尊敬する町民の諸君、私は申し上げたい、我々一同の中で、隣人や友人、同僚、同輩にほんの些細な邪悪さを意図する者があるのでしょうか、と。誰もいません。私は感謝の念で一杯の心でこう叫ぶことが出来ます。誰もいない、誰もいない、と。我が立派な愛国者の諸君。我々はこの野蛮で、神を蔑ろにする、義務を忘れた時代に、しっかりと連帯しています。　　—　　我々はこのことを証明しました。我々がかの不幸な男、かの誘惑された誘惑者、ヴュプケ博士殿を、心から出血させながら、目から涙を流しながら、我らのこの中から追い出した時のことです。我々は我々の義務を、自分の息子イサクをモリヤの山上で犠牲にするために出掛けたアブラハム[創世記、22]のように果たした時のことです。我々はこの自己克己の時に、合法と不正の間に線引きされている境界を踏み越えなかったでしょうか。我々はその時、我らの立派な財務官殿の言葉に、情熱と興奮の酩酊の最中、ひょっとしたら余りに安易な聴許を与えたのではないのでしょうか。我が同輩諸君、必ずしも根拠のないわけではない異論が我らの意見に対し、我々が鷺鳥と呼ぶかの家禽に関し、発生したのであると、私は憚らず表明致します。私は色々な声を耳にしました。　　—　　これ

は、私がこう申し上げるのを躊躇しない声です、 — つまり、これは辛辣に、かのひょっとしたら幾分余りに拙速に、我らの称えられるべき当局によって決議された決定を咎めている声です。 — ちなみにこの当局の賢明な、熟慮された指示には私は神のご命令によりどのような場合でも従うものです。我々は平静と秩序を乱すすべての敵の手に対し、真にドイツ的なメクレンブルクの素朴な思いへのすべての非愛国的軽蔑者の手に対し、強力で鋭い武器を与えてしまったことを否定し得ません。いや、我が親愛なる諸君、間違いと判明した歩みを謙虚に、そして皆の最善を考えて、撤回することは、一人のキリスト教徒、そしてキリスト教徒的町民にとって相応しくないことでありましょうか。いとも称えられるべき当局の次回の会議で、水辺の家禽のかの種族、鶯鳥と呼ばれるものに、ビュッツォーの路地での自由な滞在を禁ずるかの勅令を、 —」

「撤回すると言うのか」と現町長の雷のような声が尋ねた。「それは出来ない。私が職権の椅子に座っている限りは。撤回するとか、自らの顔を引っぱたくのが、単に人類が情けないことに女どもの尻に敷かれているからという理由であつたり、女どもがまた鶯鳥の味方であるからという理由であつたりしてはな。狼藉者達に門戸を自由に開放は出来ん。私を納得させてから言え」。

テーブルに拳の一打が加えられる音がした。オリンポス山からのゼウスの稲光のようであった。

「牧師殿」と統率者は叫んだ、「私は有り難いことに、結婚しておらず、また貴殿の畏敬すべき伴侶に対し、どのような点でも奉仕するに吝かではない。しかしこの問題は一度門が差し込まれたのであり、私は自分の家政婦に然るべき注意を向けさせている。私は私の鶯鳥を、法律の定めている通りに、一昨日以来家畜小屋に閉じ込めており、どんな立派なビュッツォーの町民も、この点で自らの取るに足りぬ責務を果たすと願っている。同僚のブレッカーよ、貴殿は我が部下だ。貴殿はこの牧師殿の提案に対し、どのような意見かな」。

財務官はこの突然の問いかけにほとんど卓の下に滑り落ちそうになった。彼の細い、オジブウェー族[アメリカインディアン]のような頭はその上着の高い襟カラーのほどの高さの中に沈み込んだ。

「同僚の — 町長殿」と彼はどもって言った、「私は — 私は、 — 鶯鳥どもは、 — 水辺の家禽で、 — 私は、 — 一時的興奮とヴェブケ博士が、 — 極度の興奮とポンス酒で、 — これらの鶯鳥どもは、 — これらを飼育し、 — 太らせるために、 — かなり広い遊び場を、 — 博物学的にも、 — 状況を仔細に観察してみると、 — 必要とする鳥であつて、 — それが許されましょう」。

「私は貴殿の奥方へ、私の世辞をお伝え願っておく、同僚殿」と執政官はぶつぶつ言った。「ブレッカー、貴殿は保証付きの臆病兎だ。しかし撤回はされない。私は貴殿にとりわけ勧告しておく、貴殿の遊泳中の水辺の家禽を、見張りなしに私の目の前や、グレーヴェデュンケルの目の前に晒さないようにな」。

「ブラヴォー、町長殿」と私は叫んだ、「私はいつもそのように、自分の髭を引っ張ってくれたガリア人を床に叩きのめしたかのローマの元老のことを考えて来ました。男らしく、半神の如く、我々女房持ちでない者は法の神聖さを見張りましょう。タトエ結婚生活ノベッドが破滅シヨウトモ[諺、世界が破滅しようとも]、正義ハナサレルベキです。これに

関し、貴殿は、同僚のアルブス、どのような意見ですか」。

学士は、学校教師なら陥るかもしれない最も深い精神の放心から飛び上がった。彼の魂は我々の会話の許にはなかったこの魂を会話のこの低級な地域に余りに執拗に呼び寄せることは、乱暴であったかもしれない。私はこの魂を丁重にザハリッサやラナッセ、ヤンテとのプラトンの合一世界に放置した。 — 哀れな、飢えた学士の体は、こうした痩せた魂の食事を自らに恵んでいた。それでこの感傷性、ヴェルター風黄色いズボンの絵空事の楽しみを勝手に壊すのは、乱暴であるばかりでなく、神聖な精神への一つの罪であったかもしれない。

この晩、居酒屋女将の大きな中国製のポンス鉢は、我々の卓には見られなかった。デマゴグを追放した後のように、我々は勝利を祝う理由がなかった。確かに我々は薪の案件の場合のように我々の意志を貫徹していて、陣地を確保していた。しかしこの点の記念祝賀、万歳は更に少しばかり先送りする理由があった。グレーヴェデュンケルはこの晩、誰も家まで送る必要はなく、法定閉店時間の随分前に人々は散会となった。一人以上の実直なビュッツォーの男の家の守護神どもが、額に皺を寄せて、眉を顰め、鞭を示していた。私の道の通りすがりでは、一つ以上の鷺鳥小屋から、小声の抑制されたお喋りを耳にしたが、これは他人の不幸を喜ぶ忍び笑いと大変良く似たものであった。羽根のあるこの家禽の民自身が夢の中で賢明な当局の布告を喜んでいるように見えた。私はヴェブケ博士と馬具屋のシェルペルツが腕を組んでいる姿と出会った。 — 恐るべき仕立屋も、仲間にはシュミットと呼ばれているが、その後をよろめいて歩いていて、胸は神々しい反抗心に満ちていた。再び白い霧がロストック市門前のゼーリングから上がって来た。しかし青白い月が私の道を照らしてくれた。そして善良で、庇護する守護霊が私の小道を見守ってくれた。私は世襲公爵亭から私の住まいまでの道を承知していて、両側や中央での深みや、滑りやすい山々を避ける術を心得ていた。 — これはたやすい芸当ではない。そもそも、ビュッツォーの町での小競り合いを無事切り抜け、自分の評判やその他幾多の他の点に関し、実害を蒙らずに、満足して、聡明な高齢に達するのはたやすい芸当ではない。

第六章

著者はアルブス学士とマルチン祭の鷺鳥を食らう。ビュッツォーのロラン夫人[ジロンド派、1754-1793]。

一分ごとに、一時間ごとに、一日ごとにゆっくりと這って進み、とうとうかの幸せな、あるいは不幸せな破局に至ること、遂に這ったり、跳ねたり、あるいは踊ったり、よろめいたりすること、つまりすべての快、不快の運動が終息するかの瞬間に至るまで這って行くことが、すべての地球上に生まれた者にとって、負担であり、享樂であるとすれば、クリオの外套をしっかりと握っている者の天職は、同じように更にこの運動を続けて行くことではあるまい。跳躍して天馬は、歴史学者や詩人を拉致して行く。この翼のある天馬は干涸らびた国や、泉のない、木や果実のない国を憎む。趣味豊かな読者や、多感な女性読者は、この点、天馬に感謝している。これらの読者は、すでに、自分達のその折の肉体的、精神的感受性と合いそうにない余りに多くの頁を飛ばして読まざるを得ないのである。ただ摂食した昼食後の消化という甘美な時のために執筆するか作家は幸せである。この作

家にのみ、人気作家という最も快適な薔薇が花咲く。この作家にのみ、ドイツの書籍取引の竜が見守るかのヘスペリデスの園の果実が、自ずと自分の膝の中に恵まれる。この作家を民衆は機知的頭脳と呼ぶ。そして — この作家に自負心があれば、人類の文芸作家達の中でパルナツソスの最も低い座席を自らに指定はしないであろう。 —

私こと、J.W.アイリングは、この十五分の消化のために執筆することはないが、残念ながら自負心を有しているのである。世界史がその永遠の黒板上に銘記することを、私は書き写す。丸一カ月の十一月と十二月の大部分を通じて、小都市ビュッツォーは真のドイツの徹底性を見せて、その懐の中から発生することになる大きな、恐ろしい危機に向かって行った。

見よ、エリーニユス[復讐の女神]達が静かな住まい、魅力的で楽しげな乙女のホルンボルステル嬢の家を取り巻いている。彼女達はノックして侵入し、シェルペルツのレギーナによって、客室へ案内され、寝椅子にピンと強張ったまま座っていて、ロストックの焼き菓子をアラブの国からの快適な褐色コーヒーに浸す。彼女達は緑色や青色、黄色、あるいはカラフルな刺繍のある、あるいは刺繍のない手芸袋とかあるいはその他の編み物袋を腕に下げている。地獄のような持久力と器用さで、彼女らは編み目レースを織る。ビュッツォーとか宇宙での犯罪者を捕縛するおぞましい網目細工である。彼女らはその蛇状お下げ髪を揺すって、彼女らはこの髪を威嚇的に頷く頭巾と共に品の良い婦人の如く見せたり、あるいは乙女のように人絹の花やカラフルなりボンと共に見た目に愛らしく見せようとしていた。彼女達はやって来て、また去って行く。個別的に、あるいは二人連れで、あるいは群れになって彼女達はこの町の路地を練り歩いていた。そして — グレーヴェデューンケルは彼女達を避けた。

慎重にグレーヴェデューンケルは彼女達を避けていた。それは侮辱された女性の胸の内の最も黒々とした感情と、抵当家畜小屋の見張り人、門番たる彼の間の敵対関係であった。統治する執政官の情け容赦ないリクトル[古代ローマの警士]たる彼は、新しい法を現実のものにし始めた。 — 大目に見ることなく、彼は捕まえた、 — 頭部や羽根、首、尻尾を — 頓着しない、 — ギャツと泣こうが、じたばたしようが、泣きわめこうが、脅そうが、罵ろうが、子供が喚こうが。 — 犯罪の女達を、悪行の女達を追い払い、下のタルタルスへ、深淵の深みに連行した。たとえ世界が没落しようとも、正義よ、万歳。文句を言うジャコバン主義者ども、ヴェプケ博士は縛り首だ。ギャツ、ギャツ、ギャツ、グワッ。グレーヴェデューンケルの職務室にある禁固室では、憂わしくガーガー鳴き声がした。財務官のブレッカーは次第に痩せて、一個の影のようになった。そして、 — エリーニユス達はその手芸袋を持ってビュッツォーの路地を練り歩いた。

快適にマルチン祭を祝うために、私は自分用の祭日焼き肉を抵当家畜小屋から響きの良い国内貨幣のかなりの額を提示して請け出した。このため、当然、この歴史書を立派に良心的に書き続けようという私の熱意はとても昂揚し、それでいて有り難いことに、私の食欲も落ちなかった。

このマルチン祭焼き肉に、私は大事な友にして同僚のアルプス学士を招待した。彼は少しも遠慮せずやって来た。 —

聖マルチンは紀元三一六年の頃、低地ハンガリーのスタインに生まれた。彼の父親はとんだ異教徒で、軍副司令官であって、馬用鞭の使用を良く心得ていた。この息子は二つの

理由から、この老父の許を去って、トゥールの司教になったが、その前にアミアンの市門前で外套に有名な切断を入れたのであった[震える乞食と分有した]。マクシミヌス皇帝[対立皇帝Maximus、384-388と思われる]は以前饗宴の際に、彼に最初の酒杯を渡させたことがあって、それ以来、彼はすべての称えられるキリスト教界の呑み助達の守護聖人となった。彼の作品とされる『三位一体についての信仰告白』は不当に彼の書とされている。というのは、彼は陽気な殿方にして聖人であり、ほとんど世俗的著述も聖職者的著述も関知しなかったからである。しかし彼の記念日、つまり十一月十一日には牧師殿達は宗教改革以前もそれ以降も、十分の一税の鶯鳥を得ていて、民衆はその残りの鶯鳥を焼いているのである。

「聖マルチン、万歳ですな、同僚殿」と私は立派な食事に相応しい品位を持って語った。すると、――

「その通りです、同僚殿」とアルブス学士は語った。

我々はこの肉付きの良い、良く調理された家禽の大部分を胃に収めた。窓から十一月が眺められた。

赤い葉が落ちて、
灰色の霧が湧き立つ、
風が一層冷たく吹き付ける。[Johann Gaudenz von Salis-Seewis,1762-1834,秋の歌]

しかし暖炉では現物供与の薪が爆ぜた。我々はライン・ワイン[白]を飲んだ。イギリス人の封鎖で、赤[ワイン]のフランス人達は、――この関連では、残念ながら、――我々の港から閉め出されているのである。我々は天候を見たり、グラス越しに互いを見つめたりした。極めて打ち解けて告知する時間がやって来た。――

「それで同僚殿、ホルンボルステル嬢との関係は目下いかがです」と私は尋ねた。

臨時教師はテーブルにグラスを置いた。唇でそれに触れてもいなかった。そして静かに言った。

「その通りなのでしょう、私はまことに干涸らびた学士なのでしょう、同僚殿」。

「まあ、まあ」と私は宥めて言い、鶯鳥の詰まらぬ残部を眺めた、「私はもっとひどい干涸らびぶりを承知しています」。

「私はこれ以上のものを知りません」と学士はまことに墓場の声で答え、付け加えた。

「私は鬘も単に職務の名誉と重々しさのためにのみ使用しているではありません」。

「それは夏でも冬でもまことに快適で落ち着いた装束です。古代エジプト人がすでに着用しており、それも気候のせいでした」。

「エジプト人は鬘師にもっと気前よく支払えたのでしょうか」と学士は溜め息を吐いた。「しかしこの話題は止めましょう。本題に戻りましょう。つまりホルンボルステル嬢です。いとも尊い同僚殿、我々の同僚たるヴィンケルマン副校長[1717-1768]は、旧マルクのゼーハウゼンにいるとき、大学生生活の私や学校職にいる私以上に、もはや飢餓が耐えがたくなって、それで彼はローマへ行き、カトリックに転向しました。同僚殿、ホルンボルステル嬢は私のローマです。彼女を得るためなら、私も同じように私の信仰を喜んで取り替えることでしょうか。かくも恥ずかしいやり方で浄福の者となった副校長ヴィンケルマンは、そのルビコン川を渡ったとき、三十八歳でした。私はそれより一年越えています。美学や古

典的美に対する関心を私は有しませんし、それでローマへは行きません。私は少しばかり無味乾燥です。これは私の咎ではなく、私の性情です。それ故私はこれを恥ずかしく思う理由を有しません。ホルンボルステル嬢には古典的美がなくとも、しかしいずれにせよ彼女には古典的性格があります。それで彼女は私にとって、私の肉体的幸せのために、アルバーニ枢機卿[1692-1779]が哀れなヴィンケルマンにとってそうであったように、大変有益なものとなりましょう。いや、ホルンボルステル嬢は我がイタリアです。私はヴィンケルマン同様にそこに達したいと考えています」。

私こと、J.W.アイリングは、ラーヴァーター[1741-1801、観相学を説いた]の信奉者とならなくても、人間のことは幾らか分かると思っていて、私は感動し、動揺して、私のより若い同僚の手を握った。

私の口から言葉が出たが、それは、ライン・ワインのせいではなく、一般的隣人愛のせいであった。

「いや、同僚殿、同僚殿、貴殿はトリエストと卑劣な殺人者アルカンジェリ[ヴィンケルマンは1768トリエストで殺された]を思い出す必要があります。ならず者、ろくでなしのカサノヴァ[1725-1798、ローマでヴィンケルマンは出会った]を思い出す必要があります。またその他の旅や、旅の目的地で出会いかねない者のことを思い出す必要があります。いや、アルプスよ、アルプス、結婚生活、夫婦生活、婚姻、縁組みはかの美しい半島[イタリア]同様、時に魅力的な国であるとは言え、はるかにもっと悪巧みの見られる国です。あらゆる種類の害虫や人殺し巣窟の他に、あらゆる種類の火を吐く山々が見られます。何人かは火を噴き出したり、他の者はただ煙だけであつたり、また別な泥を出したりします。しかし同じようにとても厭わしく、うんざりするものです。そして、一 学士殿 一 貴殿はその国の歴史を考えたことがありますか。何という征服者達に、何という奴隷どもでしょう。フン族、ヴァンダル族、ロンゴバルド族、フランク族、アラブ族、フランス人、スペイン人、ドイツ人、個別的でありまた入り混じっています。しばしばとんでもない荒廃がありました。皇帝に教皇、故郷や異国の傭兵隊長達、フルンツベルク[1473-1528]に、それにブルボン[1490-1527]、ルドヴィーコ・モーロ[1452-1508]、チェーザレ・ボルジア[1475-1507]。考えてみてください。とんでもない混沌です。いや、学士殿、貴殿はプロイセンの陛下、リヒテナウ伯爵夫人や、枢密侍従官リーツ、それにいとも尊い統率者の町長殿を考えたことがありますか。我らの立派なビュッツォー人やビュッツォー女性陣は、この町長の評判を野蛮人達がイタリアの大地を踏み潰した時と同様に、ひどく、いやそれ以上に劣等に踏み潰したのです。一 同僚殿、私は警告致します、警告致します」。

「同僚殿」と臨時教師は自覚して語った、「私も先の世の歴史は静かに放置します。一 多くの伝説や神話がそこには見られます。枢密侍従官リーツのことを私は信じていません」。

「それでは町長殿のことは？」

学士は両肩を竦めて、空のグラスを私に差し出した。

「同僚殿」と彼は語った、「私の慎ましい意見によれば、どちらがかの解消事件の際に、最もがっかりした顔をして、最もひどい良心の呵責を覚えて去ったのか、確定していません。私はホルンボルステル嬢を極めて敬愛に値する利発な人物として評価しています。彼女は決して品位を損なうことはなく、また今日でも何事も容喙はさせない人です」。

「貴殿のためには、最後の点が心配な気持ちになります、アルブス同僚殿。彼女は何事も容喙させない。しかし彼女は他の人々に沢山指示する術を心得ています」。

学士はまたしてもその空のグラスを引き離し、出来るだけ私の近くに近付き、肩越しにドアの方を見て、それから私の耳に囁いた。

「同僚殿、彼女と私の間に意見の相違はありません。私ども二人は一七九〇年の憲法[1791年フランス憲法の準備]の支持者です。――私どもは政治的に一致しています」。

「同僚殿」と私は驚いて囁き返した、「それは心からおめでとうと申し上げたい、しかし――」。

「しかし同僚殿はこうお思いでしょう。私は世襲公爵亭の最後の隅に座っていて、すべての大口叩きや頑固頭に圧倒されて、利口に口を閉ざしているから、私は無益な餓鬼どもに鷺鳥鳴き、私は鳴く、君は鳴く、彼は鳴くの変化練習をさせ、家ではディオゲネス・ラエルティウス[三世紀頃、ギリシア哲学者達の伝記をまとめた]の校正で時間を潰していることだろう、と。違います。完全に違います。人はアリストテレスの時代から、政治的動物である権利を有しています。――これは奪われることのない人間的権利です。シュヴェリーンの高等学校教授はどんなことを言っても良いでしょう。しかし新聞も、たとえ仲介者を介しての新聞であれ、私は読むのです。そして私は、健全な人間的分別を、最善の知識と力に従って、保持しています。いや、決して私どもはもはや愚かな者にはなりません。一七八九年八月四日は偉大の日でした。[貴族の特権剥奪]。守護霊はそのことを承知しています。そしてホルンボルステル嬢、ザハリッサもそのことを承知しています」。

今や私にとって一気に多くの不分明なことが明らかになった。まことに臨時教師をマルチン祭の鷺鳥に招待すること、そしてラインの流れという心と舌を解放するディオニュソスの酩酊に誘うということは、少なからず栄光に満ちた考えであった。かくてここにビュッツォーの新しい側面が現れた。各党派は鋭く互いの違いを言い立てた。ジロンド派は沼地[ジロンド派やジャコバン派以外の態度未定の党派]を離れ、ロラン夫人とヴェルニヨ[ジロンド派の頭、1759-93]、つまりホルンボルステル嬢と学士は、統率の現町長ハーネ博士から離れた。しかしジロンド派はモンターニュ[山岳派]と、ホルンボルステル嬢はマラー主義者[山岳派]ヴュプケ博士と何の関係があるのか。

「至高の人間的財宝を戦い取り、確保することが問題となる場合には、正反対に位置している見解や経歴との間でこのような一時的結合は許容されます」と学士は語って、自分の心情吐露の真理の確信に没頭した。「当地の町の間違った町民意識を打ち砕くには、他に手段がありません。我々は鷺鳥の自由を失えば、同時に、未来の偉大な共和国に、高貴で啓蒙化された市民及び女性市民として参加することを我々に可能とするもの一切を失います。私どもは昨日の午後もこの件をコーヒーを飲みながら徹底的に話し合いました。私はザハリッサにこう請け合いました、ロラン夫人も今は亡き市民ロベスピエールと一度ならず立派に了解し合うように試みたものです、と」。

「いや、アルブスよ、アルブス。貴殿は一体何という人物です」と私は極めて感嘆して叫んだ。「おや、おや、おや、貴殿は子羊のように、水も濁らせない風におとなしく相対して座っているながら、それでいて水門の板を引き上げる狼だ。誰が貴殿にこのようなことを求めたのか。お願いだ、いとも称えられるべきシュヴェリーンの高等学校教授陣はこのような事柄に何と言うだろうか。これはまこと純然たるフィヤン・クラブではないか、学

士殿。それにクラブは令嬢の家に本拠があるのか。この本拠を貴殿は共に設立したのか。そして貴殿は毎日、放課後訪れているのか。時の経過でこのような不気味なことが明るみに出たら、上級宗教局や教育執行部は何と言うだろうか」。

「ザハリッサと私は、時の経過も、公爵の教育教授陣もその他の教授陣も恐れています。私どもは二人の古代の古典主義者です。私どもは暴君の牢獄を越えて見ており、自由のエーテル的星座を眺めています。私どもはデルフォイの予言的三脚鼎に座っていて、予言します。私どもは未来の壁に耳を当てて聞いています。偉大な日々が大股でドイツ人の腐った帝国に近付いて来ています。私どもはヴィンフェルト[紀元九年、ローマに対するトイトブルクの森の戦いの地と考えられていた]の鷲が大気中で飛行するのを待っています。そして、—」。

「大気は崇高な翼の羽ばたきで満たされ、鳥どもがやって来て、カピトルの丘に勝ち鬨の声を上げて近付き[紀元前三八七年ガリア人のローマへの侵攻を鷲鳥が鳴いて砦を救った]、ビュッツォーのフォルム[公共広場]に腰を下ろしました。ビュッツォーの鷲鳥どもは、その首が長く、白く、斑点があります。そしてグレーヴェデュンケルは、捕縛された巨人族で、自らその抵当家禽小屋に座っていて、至高の存在への祭典[一七九四年フランス制定、聖霊降臨祭の日曜日]の賛歌を歌います。

親愛なる神よ、親愛なる神、地上に平和を賜え、
自由を賜え。

それは崇高なものとなろう。昂揚させるものとなろう。感動的なものとなろう。ソレハ確カダ。 — ちなみに、同僚殿、これから[VoB 風に]『立派なグリューナウの牧師と一緒に』コーヒーを飲みながら、パイプで癒やしの煙草を味わうことにしよう。ご馳走様でした。ローマの砦を救出した鷲鳥どもに感謝です」。

「いや、ザハリッサ」と我が政治的アモロソ[愛らしく]の食卓仲間は嘆息した。

第七章

青い天の天幕での羊雲[うろこ雲]

オボトリート族の平原の表面下では革命の炎がその微光を放っていた。ビュッツォーの人民の気分はますます有毒な、脅威的なものとなって行った。グレーヴェデュンケルの強制的手によって抵当家禽小屋に導かれる鷲鳥はどれも、すべての自由思想家の魂にとって殉教者に見えた。人々は路地のその鷲鳥を、ネッケル殿[Jacques Necker, 1732-1804]が最初のパリ追放故に去って、目の前にハンカチを置いて、馬車の窓から身を乗り出して、再会を約束している時のように、見送っていた。十一月と十二月の時が経過する中、いとも称えられ、いとも賢明な当局に対し、その勅令の撤回を求める試みがなされた。そして、自ずと分かることであるが、参集した家父長の大部分は撤回の意志を示したけれども、しかしその試みはすべて失敗した。というのは統率者[町長]がそれに反対と声明し、手と足とで逆らったからである。鉄の堅牢さを持って我がいとも尊敬する友、ハーネ博士はそのローマ大官の椅子に座っていて、オリンポスのジュピターのように、軽蔑して見下し、新たに

こう宣言したのであった。自分が共同体の舵を両手に握っている限り、お役所権力のこのような弱さを、興奮した時代精神に対して露呈してはならない、と。

驚愕の戦慄が町中に走った。河の神はびっくりして自分の季節柄青く凍傷になった鼻で氷の張ろうとしているヴァルノー川の流れの中から起き上がり、かくて人々はある朝、町長の玄関に次のような韻律の一枚の紙が貼られているのを見つけたのであった。

貴族と僧侶どもが

平民の憤慨に喚いている。

すべての民主主義者達の憤懣[狂犬病]は、

どこで起きようと、すぐに察せられる。 —

貴族どもが嘯みつくからに。

統率者[町長]は自分の目が信じられなかった。尊師ヨプスト・クラファウティウス、首席牧師は、かろうじて卒中発作から助かった。電氣的火花が近隣田舎の貴族の中庭から次々に伝わり、シュヴェリーンでさえそれは感じられたが、最悪なことは、ヴェプケ博士をどうしてもこの首謀者として罪を着せられないということであった。

ヴェプケ博士は簡単に捕まるような男ではなかった。彼は明快に説明した。メクレンブルク人はこのような詩を作ったことがなく、また作れません。また『年鑑詩集』からの引き写しとか町長殿のドアへの貼り付けに関しましては、自分は登録済みの公証人として、これに関連する、生意気で、破廉恥な、欺瞞に満ちた邪推に対し答弁することを自分の品位を穢すことと見なしております。しかしこの件はいずれにせよ、誰かが告訴され、最終審まで続いて、この誰かが、その咎の責任を負うことになりましょう。自分、ヴェプケ博士とこの戯作者に何の関係がありましょうや、と威厳ある博士は深く侮辱を感じて、尋ねた。 — 自分、ヴェプケ博士は、平穏な町民であり、 — 悠然と自分の道を歩いています。自分、ヴェプケが薪問題に介入したのは、これはまこと私利のためそうしたわけではありません。単に苦しんでいて、無防備の、貧しく凍えた無実の貧窮を見かねてのことです。自分、ヴェプケ博士は、立派な町民達に温かい生活を恵むものです。というのは自分、ヴェプケも冬には喜んで自らに温かい暖炉を恵んでいるからであります。しかし鷺鳥に関しましては、自分、ヴェプケ博士にとって、鷺鳥どもはととても、いやととても、どうでも良いものです。自分は鷺鳥を飼っていません。それにこのような焼き肉の食事へと招待されることもありません。このような悪辣な告訴によって、自分の立派な評判に関し、補償できない損失、取り返しのつかない損害を蒙ること、このことを自分は辛抱して甘受せざるを得ません。と申しますのは、このようなことは、いつの時代でも、同じような具合に、自分、ヴェプケ博士よりも立派な人々の身に降りかかって来たからです。ちなみに自分、ヴェプケの見解によれば、[ローマ法では]名誉毀損の法、偽造に関する法は、不敬罪に関する法、神殿破壊に関する法と密接な関係にありまして、自分、ヴェプケはかくも不名誉な具合に、文書であれ、口頭であれ、自分、ヴェプケ博士を攻撃し、自分に損害を与えている者を、ならず者、無法者と見なしておりますが、これは丁度、当局や教会に対し、いや、至高の人物、公爵陛下殿下に対し、自ら無礼を働く者と同断であります」。

このようにヴェプケ博士は路地や広場で語って、自分の頭を次第に高く持ち上げて行っ

た。しかしもみくちやになった鬘、頭蓋の瘤、世襲公爵亭の玄関の間の石造り舗石の上での脳の重大な震蕩を忘れていなかった。彼は自分の友や、保護者、現町長殿のために料理したスープにただ全くこっそりと自らの薬味を投じていた。彼は暗闇の中でジャコバン主義の攪拌器で魔女の大釜をかき回した。野蛮で粗野な仲間達、ビュッツォーの恐るべきサンキュロットと共に、癒やしがたいテルシーテース[『イリアス』の醜男]たる彼は霧の中に座って破壊の仕事に取り掛かっていた。しかし — 永遠の星々のすべての眼差しと共に、 — あたかもアルプスの洞穴の陰気さを — 覚束ない輝きながら月で照らし出すように、 — 一条の希望の光線が穏やかに私の心に射し込んで伝えた、 — この立派なオボリート族とヴェラターベン族の無邪気な共同体をその血に飢えた欲望のままにカティリナ[紀元前108-62頃]的欲情と快楽の犠牲に供することは必ずしも成功しないであろう、と。私のマティソンの希望が必ずしも間違っていないことは、好意的読者や愛らしい女性読者なら、有り難や、私はこの残忍な陰謀の話を書き留めることが許されたことから察して頂けよう。

私の心が、遠方での嵐の鈍いどよめきに喜んだことを私は否認しない。私はビュッツォーで人間寿命の二倍を暮らしているながら、それでも自分の体験で通常の尺度を越えたことはない。しかし今や私の書斎のドアを尋常ならざるものがノックして来ており、私は起き上がって、喜んで迎えに出た。

我々は皆、一七九四年の冬がどんなに厳しい冬であったか、承知している。いかに温度計は下がって、氷点下十七度となったことか、いかに軍人達はネーデルラントやフランドルでは耐えなければならなかったことか、いかにマース川やヴァール川が凍って、ピシュグリユ[1761-1804]が我らの公爵やフォン・ヨルク公爵[1763-1827]の大きな衝撃となったことに、新しいフランス人を引き連れて渡って来て、グラヴェやブレダ、ボンメル島や聖アンドレアス砦を襲撃して占領したことか、承知している。我々は世襲代官[オランダのウィレム五世、オラニエ公、1748-1806]がイギリス馬に乗って素早くイギリスへ逃れ、ガリアの鷄[フランス]が勝利してアムステルダムに鋭く鳴いたことを知っている。今や世間は、いかに我々がこの偉大なる冷気の時代、偉大な旅芸人茶番劇の時代に、同様に凍ったヴァルノー河畔の我らの片隅で過ごしたか、知ることになるかもしれない。

博士は暗闇の中、シェルペルツやハーゼ、マルテンス、シュミット、コンペール、ナルベ、ホイヤーといった親父どもや、その他の陰気な名前のその他の陰気な連中と徘徊した。ホルンボルステル嬢は大きな茶会を開き、その際学士にして臨時教師のアルプスがまずヨーハン・ゲオルク・ズルツァー[Sulzer,1720-99]の文芸理論に従って美学を講義して、それから『一七九三年度の有益で楽しいレディーの暦』から若干の感動的な箇所、情感一杯の箇所を読み上げ、最後に靈感と情熱を傾けて、自らの政治的松明を自分が崇拜するユーリアの美しい目の前で掲げた。十二月二十七日、土曜日、ホルンボルステル嬢の鷺鳥が抵当家禽小屋に連れ去られた。

第八章

アルプス学士も世襲公爵亭で無益なことをし、この居酒屋を去る。

十二月二十七日、土曜日、午前八時から九時の間に、ユーリア・ホルンボルステル嬢の

鷺鳥がグレーヴェデュンケルによって抵当家禽小屋に連れ去られ、水量の堰が外された。

私はここでもまた保証人としての学士に従っている。彼の令嬢並びに乙女シェルペルツ娘の家に対する親密な関係が最適な観測の場を私に設けてくれた。すべての策謀と経過の諸糸が彼の眼前で巻かれ解かれたのである。

「ただそのことだけを私は待っていました」と一人のローマ女性の品位を持って、自分のナイトキャップを正しく直しながら、ホルンボルステル嬢は語った。再び息せき切って、事実を知らせにレギーナが飛び込んで来たのである。「シェルペルツの娘さん、学士アルブスをここに呼びなさい」。

「クリスマス休暇には、仕事疲れの教師でもどんな騎士の奉仕にも応ずる時間があります」と臨時教師は語った。「敬意と優しい情愛の翼を広げて、私は七色翼のアイリス[虹の女神]の早朝の知らせに従い、彼女からこう注意を受けざるを得なかったのです。自分の優しい女主人は、私がナイトガウンとスリッパのままの姿で女主人の前に現れることを望んでいません、と。この神々しい娘は、更に私に対し、鬘を使用することを許し、かくて私は、この女主人のために天上と地上のどんな権力とも戦うべく、万端準備して、彼女の前に歩み出しました。私は彼女の部屋に入り、眩惑された目の前に手を置いて、叫びました。『いや、ザハリッサ』。彼女はいつもよく座っている寝椅子に座っていました。彼女の視線は炎となっていて、それも通常にないものでした。そして彼女は私を見つめ、――大きな目で私を見つめ、――黙って見つめていました。『令嬢』と私は叫びました。しかし彼女は私に合図をして、次のように語りました。

『アルブス学士、私は貴殿を礼儀正しい、気転の利く、無愛想ではない方として存じ上げています。――貴殿は盛りを過ぎた年でもないし、健康で、なかなか好ましい情緒の方です。私はこれまでの人生で、貴殿のような男性の方で、気質並びに快適な情感や意図という点で貴殿に匹敵するであろうような方との付き合いが余りありません。貴殿はまことに私の意に適っていると率直に申したからと言って、私は追従しているわけではありません。学士殿、貴殿は確かにただ飢えた学校教師です。しかし神様は上着よりも心の方を見ています。貴殿の黒い絹の晴れ着の靴下に穴があろうが、それが私に何の関係があらましようか。学士殿、私ども両人は、一組の分別のある理性的人間です。貴殿が私に返事をくださろうと、くださるまいとご自由です。しかし私は貴殿に質問をしたいのです。いかほど貴殿は私のために、貴殿の上々の役所に対して挑戦する気でいらっしゃるのか、いかほど貴殿は私のためにこの不当な件に対して危険を犯す気でいらっしゃるのか、要するに、貴殿は残酷で前代未聞の暴政から私を、そして私と共に貴殿の祖国を救い出すために何をする気でいらっしゃるのか、私には私の鷺鳥とハーネ博士への復讐を果たし、そして自らには不滅の愛国者という名声を得るために何をする気でいらっしゃるのかということです』。――

「同僚殿」とアルブス学士は私に、J.W.アイリングに言った、「男がそのような具合にこのような女性から話しかけられ、瞬きされましたら、この男は同時に七つの太陽と七つの月が眼前で踊るのが見えます。そしてこの男がかなり多くの栄誉を手に入れ、そして失うものとはとてもわずかで、ほとんど何もない場合、この男は同時に狂暴になり有頂天になります。胸を誇示して開け、自分の炎となって燃える心を取り出したくなり、その心をこの天上的女性の両手に押し付けて、叫びたくなります。『これを取って、砕き、食べ給え』

と。同僚殿、頭の天辺から足先まで大きなうすのろ男となり、ペリオン山をオッサ山の上に、あるいは山をその逆に[『オデュッセイア』XI]、この優しい女性の気持ちのままに、積み上げる能力があるように感じ、一万ものアウギアスの牛舎を掃除し、五万匹ものレルナ沼の蛇どもを絡み合わせて、背後の上着ポケットに押し込み、その上に座して潰す使命を感じます。同僚殿、私はそのように感じまして、どもった舌でこのアドニーデ[美少年アドニス的女性形]に語りました。『黄昏の夜の星の方。薄明かりの時を待っていてください。カーバッドはドウホマルの剣で倒れました[ジェイムズ・マクファーソン,1736-96『フィンガル』オシアンより]。私は、ホルンボルステル嬢、貴女に約束します。コルマクの愛しい娘を、私は汝を私に魂のように愛しています。そしてトゥーラの洞穴、勿論世襲公爵亭の名士達の部屋のことですが、ここは倒れた者達の呻き声で木霊することでしょう。ホルンボルステル嬢、ザハリッサよ、ラーラゲ[ホラティウス由来、ララゲー]、ヤンテよ、いや、ラナッセよ、私は上級高等教授陣を気にしていません。冬の風よ、上がれ、上がれ、灰色の荒野に吹き渡れ。吠えよ、山脈の汝ら急流よ、呻れ、汝ら嵐よ。シュヴェリーンの殿方らに私の最良のご挨拶を伝えよ。彼らに言うのだ。ユーリアは私のものだ。殿方らは別の阿呆を送るがいい、十分に阿呆で、このような具合にゆっくりと餓死して行く阿呆を、と。 — 御令嬢、貴女は今晚私のことを耳にしましょう。私にお任せを』、 — そのように私は叫んで、そこから駆けて、公の広場でヴュプケ博士と握手して、自分の部屋に閉じこもり、夕方の矢石の準備にかかったのです」。

このように学士は語って、私こと歴史学者は、この話しの筋の糸をまた自分の手中にしたのである。

人間達からも、優美女神からも、ミューズ達からも訪問を受けずに、私は厳しい寒さのせいで、この日しっかりと我が書斎[ミューズの館]に閉じ込められていた。しかしアルプス学士のように矢石を鍛造したわけではなく、ハンプソンの『ジョン・ウェスレーの生涯』を翻訳で通読したのであった。この敬虔な男、メソジスト教団の創始者[1703-1791]の伝記は私の気分をまことに敬虔に、平穩、柔和なものにした。私の心はすべての男女の同胞に対する懇ろな敬愛、愛情の念で一杯になった。浄福なものにする恩寵の教義、これによれば人間は瞬時に一人の罪人から立派なキリスト教徒になれるというものであるが、私にはまことにもっともで、快適に思われて、恍惚とか、癲癩的な発作、大地への転落、呼び声といった、こうしたすべての恩寵の勃発に随伴するものがなければ、私は全霊、全心情を傾注して、この精神的齒根生長に憧れたことであろう。しかしこのような次第で、私はこの理由ばかりではないが、また少しばかり首席牧師クラファウティウスを鼻根にしていて、非恩寵の主義に留まっており、点火されなかった燭台、罪人の申し子として、夕方が近付き、私の家政婦が入って来て、今晚もクラブへ出掛けますかと質問したとき、こう答えたのである。

「どうして行かない法があるう」。

私を引き留める人も事物も何もなかった。高い力のご配慮で、私はこの晩も無事、世襲公爵亭に達して、天候や道路の不測の事態に往生することもなかった。後世は相変わらず私を必要としていた。この晩の出来事を私の他に誰が描くことが出来たであろう。 —

彼らはトロイの老人達のように座っていたが、しかしまさに意地悪で、コケットで、とても美しいヘレナが髭を撫でて、蜜の鉢を差し出しているかのように、にんまり笑って、

喜んでいなかったのでなかった[『イリアス』第三書]。彼らは頭を垂れて、鼻をそのガラスの縁に休らえていた。彼らの磁器のパイプは、彼らの上にヘラクラヌムとポンペイの没落と大プリニウスの死を予言し、それを結果とした火山性蒸気[ヴェスヴィオ噴火、紀元79年]のように掛かっていた。ただ町長のみがいつものようにその霧の中、澆刺と大胆に見え、陽気な肩幅の広い姿で、威儀を正して、その声を自然と人間界を活気付かせる雷の如く卓上と四方の壁に向かって、私への挨拶を轟かせた。学士アルブスはまだ現れていなかった。――

彼はようやく遅れてやって来た。

いつものようにあらゆるものがテーブル掛け上で話題になった。天候のこと、ネーデルラントにおけるガリア人[フランス人]の進撃のこと、ヴァイセンブルクでの前線のこと[1794年激しい戦いがあった]、皇帝軍、フォン・ヨーク公爵のこと、新しい消防施設建築、ロストックの最近の火事のこと。しかしすべては床に死産のまま放置された。統率者[町長]の洒落た意見が、やむを得ず、丁重さ故に笑われる場合のように、とても空ろな具合に笑われて、あたかもタルタロス[冥府]で劫罰の連中が、ダナイデス[穴あきの桶での水汲み]やシジフォスの無駄骨折りとかタンタロスのしかめっ面[飢餓の呵責]を笑う按配であった。

丁度九時に、我々皆がかなり微睡み状態になったとき、―― 学士がやって来て、いつものように音もなく入って、いつものように肩を縮ませて壁に沿って忍んで行き、いつものように彼に正当に割り振られた最も劣等な、最も隙間風の入る、最も暗い席の食卓に着いたが、しかし名士達の部屋を爆発させることになる火花を携帯していた。

食卓仲間の最も貧しい、最も若い、最も内気な者であるこの学士は、勿論この仲間の機知ある頭脳の諧謔の罅[受け皿]でもあった。長年人々は彼を教育して来た。長年彼はこれに謙虚に微笑して、反抗や苛立ちの何の素振りも見せずに、これに耐えて来た。首席牧師にとってさえ、このみすぼらしい臨時教師に対峙すれば、時折、プレートが、つまり彼のアロンの金冠[出エジプト記、39,8-21]が外れることがあって、この教師に関する洒落を発明し、彼を犠牲にするお粗末な試みをするのであった。町長は学士に対してはまことに偉大であって、彼の壁を揺るがす哄笑でもって、この貧しい男を一枚の影のようにぺしゃんこにすることが出来た。かくてカリオストロ[1743-1795、名士詐欺師]の工房からの幽霊仕掛けのように一同は思うことになったが、つまりこの取るに足りぬ男は全く唐突に明るく甲高い声で、「僧正[ビショップ]」を一杯、即ち「同志司教の神酒」[Voß『僧正の許での合唱』より]を飲んだ後、このグラスを古典的な悪態、「薄すぎる」を発して突き返し、跳ね上がり、テーブルを叩いて、それで町長でさえ縮み上がらせ、そして叫んだのである。

「ビュッツォーの町民、諸君」。

「何だと」と町長はどもった。

「ビュッツォーの町民、諸君、クイリーテ[ローマ市民]よ」。

学士は新たに叫び、この中断者を軽視と嘲笑の不躰な眼差しで落ち着くように促した。「ビュッツォーの町民、諸君。愛国的男子、ドイツ人アルミニウス[ヘルマン]の子孫、ヴァインフェルト[トイトブルク]の勝利者の裔よ、誰もが承知しているように、キュスティーン將軍[1740-1793]の指揮下、フランス人が一七九二年の永遠に銘記される年の秋、マインツを占領したとき、当地の自由を信奉する仲間達の中で、残念ながら本年の当初パリで余りにも早く逝ったフォルスター教授[1754-1794]殿は次のように語ったのです。『ナッサウの伯爵がマインツ人の自由を奪って以来、今丁度三百年経過した。伯爵は昔一個の石の形の一

塊の鉄を鎖を付けて裁判所に置いて、こう語った。<陽光がこの石を溶かしたら、諸君らは諸君らの特権をまた得るだろう>と。マインツ人よ、市民の諸君、今や我々はこの蛮行の記念碑を厳かに撤去しよう。そして記念貨幣をこれから鑄造して、こう銘文を刻むことにしよう。真理の陽光がこれを溶かした』と。[引用は Wedekind,1761-1839、Custine 宛 1792 年 11 月 2 日らしい]...ビュッツォーの町民、諸君。我らにとっても暴君のこのような記念碑が我らの町区域の中心に置かれていて、我らの特権は奪われて来ました。しかし三百年経って、人類は進歩しており、明かりに向かって歩いて来たのです。ビュッツォーの町民、諸君。ここに私は諸君の許で蜂起しました。そして苛立ちの基となる石を指し示して、同様に言います。真理の陽光がそれを溶かすであらう、と」。

ここで町長も飛び上がった。彼は次第に最初の硬直から気を取り戻していた。しかし学士は町長を子供のようにその席へ押し戻して、叫んだ。

「貴殿は静かに座っておられたい。貴殿についての話しはまだ終わっていないのです...ビュッツォーの町民、諸君。ドイツ人の啓蒙された愛国者よ、自由の仲間よ。十一月五日にならず者の野蛮な暴力行為によって、これは生意気にも、響きの良い名詞、合法性と秩序とを騙っているものですが、敢えて、我らの権利、生来の神聖な権利を侵害しました。我らの細君、花嫁は、その部屋に座っていて、我ら弱虫どもを軽蔑しています。一 我らの鶯鳥は、防護する家の敷居や屋敷中庭から踏み越えると、その暗く狭い鳥籠に閉じ込められ、牢獄に投獄されます。水辺の優しい環境から切り離され、苦しみ、永遠のエーテルの喜ばしい新鮮な大気界を遮断され、あらゆる種類の胃痛、下半身痛を患い、特に消化不良を起こしています。一 腹の蠕動運動はますます不規則なものとなってしまっ、間もなく全く止んでしましましょう。そして 一 神々よ、魂の空の死体の享受を恵み深く我らに禁じて欲しいものです。...ビュッツォーの町民の諸君、何人かのここに居合わせる顔にも私は痛々しい後悔の念を読み取っています。一人の悪霊が、一人ならず実直な男を誘惑し、不適切な折に発言させてしまいました。ドイツ人の男子にして自由な町民の諸君、私はこの口を適切な折に開けています。...財務官のブレッカー殿、私は貴殿の最愛の奥方とこの件についてとくと話し合いました。奥方は私の味方です、ブレッカー殿。...牧師殿、私は貴殿の御伴侶がこの件をどのようにお考えか、承知しています。皆様、我らの平穏と愛しい家庭的平和をひっくり返した強引極まる拳は、一人の嘲笑的、嘆かわしい、蔑んだ、年配独身男の拳に他なりません。この男はこのような家庭的幸せを知りませんし、尊重せず、意志と意図を持って、いつでも自分がぶつかると、この幸せを悪魔的に破壊しようとしているのです」。

「これはあんまりではないか」と町長は叫んで、再度起き上がろうと試みた。

しかし力を倍加して学士は再度町長を下の方へ押さえつけて、自分の尖って飢えた鼻先をすぐそのはなはだ卒中気味に赤くなった顔に押し付け、にやりと笑った。

「貴殿は三名の悪魔の名において、平静に座っておられたい。貴殿はこれまで十分に長く、ここで偉大な言葉を吐かれた。一度くらいは他の者にも話させたらいい。静かに座っておられよ。私は貴殿についてまだ終わっていない。...ビュッツォーの町民、諸君。我らはこの拳をこれ以上長く、我らの家で、我らの夫婦のベッドのカーテンの奥で、放置していいものだろうか。この拳はいつでも我らの鼻先に差し出されている、朝食のときに、昼食のときに、夕食のときに。この拳は威嚇的に我らの散歩に付いて来て、我らの厳しい日

中の仕事の後も、世襲公爵亭まで付いてくる。 — ここにあるこの拳だ」。

市民にして人民代表のダントンに相応しかつたであろう身振りで学士はハーネ博士の太った手を示した。この手は勿論固く丸められて食卓に置かれていたが、しかし素早く引き抜かれて、ポケットに収まった。

「町民にして、仲間の、愛国者の諸君」と学士は叫んだ。彼は自ら発声する多弁のためにますます調子づき凶に乗って行き、甲高い声で、この声のため女将を名士達の部屋のドアの中へ、そして平民達を向かい側の部屋から、密な傾聴する方陣として玄関の間へ呼び寄せたのであるが、こう語った。

「町民にして、仲間の、愛国者の諸君、私は鷺鳥の自由に対する侵害を人間の諸権利に対する天をも恐れぬ介入であると宣言します。私は鷺鳥勅令を不正であるばかりでなく、シルダ市民風な、ラーレブルクのラーレン人風[Die Schildbürger, 1598 表題]な愚行であり、瘋癲行為、我々を天の目に対し貶め、害する行為であると断じます」。

「アルプス万歳、アルプス学士万歳」と廊下の群衆が叫んだ。

「これは我々を神聖ローマ国内で嘲りの対象としてしまう行為、我らの家の神ラレスや竈の神ペナテスを我らの竈のその足場から突き落とす行為、私がかくて自由に公然と、健全なる人間的分別の保護委員会に対し、また公の噴飯劇査問革命特別法廷に対し告発せざるを得ない行為であります」。

「鷺鳥の自由、万歳、アルプス学士万歳」と群衆の甲高い喚き声が生じた。私はその中にヴェプケ博士の良く響く器官が聞き取れるように思った。

しかしアルプス学士は相変わらずまだ終わっていなかった。

「ビュッツォーの町民、諸君」と彼は新たに鳴いた、「諸君は私をご存じだ。私は諸君の牧草地の牛乳で育った。私は諸君の下で大きくなった。私の服は清潔で、私の行状に汚点はない。謙虚さが私の青春の取り柄で、内気さが私の唯一の欠点であった。町民よ、ローマ人よ、ギリシア人よ。鉄の時代はどんな軟弱な胸にも叩きかけて、この胸を七倍もの鉄で囲んでしまう。これまで私は困窮と飢餓の中、ディオゲネス・ラエルティウスの注釈をして来た。しかし今からは何か別なこと、もっと有益なものを注釈しよう。私はヴェプケ博士のように弁護士ではない。カミーユ・デムーラン[1760-1794、ダントン派]のように代議士でもない。しかしこのカミーユの如く、私は世界史の王宮の椅子に飛び乗って、『ランタンの検事総長』[街灯リンチ、カミーユの綽名]という称号はないものの、こう叫ぶことにする。我らの鷺鳥を返せ。自由だ、自由。鷺鳥を解放せよ。そして私は祈る、現町長ハーネはその勅令同様に、真理の陽光の中で溶けてしまえ、と。人道主義の明かりの中で溶解してしまえ、皆が町長の哀れな蒙昧さを認識してしまえ、と。ホルンボルステル嬢、万歳。鷺鳥を解放せよ、自由だ、自由。我らに人間的権利を返せ、鷺鳥にその権利を返せ」。

風の支配者たるアエオルスが、吹き鳴らし、シュツと言わせ、呻らせ、吠えさせ、口笛吹かせられるものすべてを、突然家畜小屋から放ったように、学士が、最後に至高に熱中して飛び乗っていた椅子から飛び下りると、勃発した。

「追い出せ、追い出せ、奴を窓から投げ飛ばせ。奴をドアかれ蹴飛ばせ。グレーヴェデュンケル、軽騎兵よ、軽騎兵。反乱だ、追い出せ、追い出せ」と一方の者達が叫んだ。

「万歳、万歳。自由だ、自由。鷺鳥を解放せよ。鷺鳥を解放せよ。万歳、万歳」と別の者達が吠えた。

名士達の部屋のドアの中では、押し合う群衆の波が一七九四年七月二十七日のフランス国民公会会議の時のように見られた[翌日ロベスピエール処刑]。そして私が真夜中前にアルプス学士に関して目にした最後のものは、彼の両方の長く痩せた腕で、この両腕を彼は世襲公爵亭の玄関の間で高く空中に上げて、それから両腕でヴュプケ博士を捕まえて、自らに引き寄せ、博士をその感情の逆のまま胸に抱き締めたのであった。

老いた一人の男にこれは相応しい話しではなかった。私は用心して、ランタンを持って家に帰った。

第九章

アルプス学士が一七九四年の十二月二十七日から二十八日にかけての夜、更に体験したこと。

路地における混乱した駆け足や走行、時々間近になったり遠方になったりする長く続く唸り声、時々夜警人のメランコリックに鈍い警告音、こうしたものが興奮した耳に聞こえ、少しも静まろうとしなかった。眠ることは考えられなかった。興奮した自然の情が体の中で次々にトレモロを励起して、数時間前には思いもしなかったであろうことが起きていた。あのアルプス学士が、— 私の穏やかな、私の小声の、私の親愛なる臨時教師アルプスが、私をこのような痙攣的な、このように震えてあちこち跳ねる気分にするであろうとは、思いもしなかったのである。

どのようにして家に帰ったか、私は覚えていない。しかし覚えているのは、私の家政婦は、彼女が私をそのキッチンランプで照らして、私の外套を脱がしたとき、仰天して高い叫び声を発したことである。私は口をかなり広く開けたままであったそうである。

「ヨハンネ、まあ落ち着いて、その縁起でもないキーキー声を止めなさい」と私は、ハーハー息をしながら語った、「何でもない、— ただ、— あの— 学士が、— いや、ゼウスとすべての不滅の神々にかけて、何という長広舌だ、何と口達者なことか。天球の音楽のすべてのトランペットやトロンボーンにかけて、最後の審判にかけて、昔のツヴァイブリュッケン公爵の猫飼育園にかけて、彼奴に誰があんな才能を期待したろう。いや、ヨハンナ、一杯のニワトコ茶[風邪薬]を頼む、— あれはオランダの堤防決壊よりもすごい。...いや、私のスリッパはいい、結構。このまま長靴でいたい。— ハンヘン、もっと大きな声で話してくれ。私は世界史のリード音栓[オルガン]を聞いて来た。それで私の耳はまだ余韻が残っていて、憂わしい。マスケット銃の銃声を耳にしたら、即刻そのことを伝えてくれ。— 自由だ、自由。鷲鳥を解放しろ。万歳、学— 士、— アル— ブス。ハンネ、もう去ってよろしい。玄関のドアを閉めて、門をするのだ。このようなオラトリオ[雄弁]的奇蹟の後、更に何が起きるか分かったものではない。

こう男は語った。すると忠実な乳母のエウリュクレイアは傾聴していた[『オデュッセイア』22,429]。しかしその前に彼女は今一度私の前に立って、私を見つめて、頭を振って、三回叫んだ。

「まあ旦那様、旦那様、旦那様」。

それから彼女は向き直って、ニワトコ茶を淹れるために消えた。しかし私は肘掛け椅子に座って、両腕を垂らしたまま、三回、三重に異なるアクセントで、雄弁な同僚の名前を

呼んだ。一度は悲劇的に、一度は悲歌的に、一度は喜劇的に。

「いや、アルブス、アルブス、アルブス」。

鈍い物思いに弛緩して数分後、私は起き上がり、窓辺に近寄った。感傷的魂の流儀で今日は月光の瞑想に耽るわけに行かなかった。この世の出来事はそれどころではない。貞淑な女神もすぐにふくれっ面をして雲の厚いカーテンの背後に隠れた。

今や彼は町民の部屋のテーブルに立っていて、そこでも自分の雄弁を披露しているのだろうか。私は思わず知らず想像した。今やヴェプケ博士が彼と交代して、平民どもが放恣に騒いでいるのだろうか。町長殿は卒中に見舞われなければいいのだが。いや、学士よ、学士。黒い、空飛ぶ竜のように、不安の翼の、肉付きの良い聖職者風彗星のように、尊師ヨプスト・クラファウティウスが広場を横切って牧師館へ急いでいる。急いで駆けながら、シュヴェリーンのいとも尊い聖職者評議会に密告状を起草している。今や人々はグレーヴェデュンケルの襟飾りか弁髪を掴んで、彼の籐の杖をその背中で叩いて壊している。すると財務官が駆けて行く、鷺鳥を解放せよ、鷺鳥を解放せよ、鷺鳥を解放せよ。すると向こうでは町長がよたよた歩いている、夜警人、シュナレは英雄的に槍を迫ってくるヴェプケに対し、憤怒に駆られたサンキュロットの群衆に対し、構えている。

ますます恐ろしげに、ますますおぞましい具合に私の過激な空想は、遠方での出来事を思い描いた。 — 私は耳を傾け、 — 私は耳を澄ました。しかし聞き取ったものは、ほんのわずかなことで、不確かな物音であった。この章の冒頭で私が語った物音である。しかし私はもっと耳に出来ればと願っていた。その方が私の神経には良かったかもしれない。ようやく真夜中により真剣な戦闘や、殴り合いの時のような、より大きな物音を耳にした。その後ビュッツォーは全く静かになり、聞こえるのは夜風と夜警人だけであった。

一時に私はベッドに這い込む決心をして、すでにベッドの縁に寝惚けて座っていて、夜間の身繕いを始めていた。しかし窓の下の物音でまたびっくりした。それは一つの溜め息のようであり、タウベンハインの牧師の娘[Bürger のバラード]の最後の哀泣のような呻き声であった。同時に私は玄関のドアを微かにノックし、引っ搔く音を耳にした。 — 不安げなノックで、家の主人以外の誰かに気付かれることを恐れているノック、近隣や、目覚めていて熱心に吠かねないフィラックス、庭の番犬を恐れているノックであった。私はナイトキャップをより深々と被り、窓を用心深く開けて外を見た。しかし闇の他、何も見えず、そして確かな、しかし臆していないドイツ人町民の声で叫んだ。

「誰かい、この下でノックしているのは、誰かい。名乗って、このような夜の時間、何の用か、言ってくれ」。

耳を澄ますと、再度呻き声、溜め息、哀泣で、ヴェルターの墓場からのようで、それから、

通りからまるでぞっとする

鼻声が響いた。

「同僚殿、同僚殿。後生です、開けてください。私です、アルブス学士です。宿命と絶望が私の後を踵を接して来ます。哀レナ不幸ナ私です。私です、同僚殿、アルブス学士です。いや、不滅の御身ら、神々よ。私はもはや終わりです。同僚殿、貴殿にとって神聖な

ものにかけて、どうぞ騒がずに、ドアを開けてください」。

私の人生で、未だかつて、かくも素早く階段を降りて行ったことはなかった。私の人生で、未だかつて、鍵穴を探すのにかくも手間取ったことはなかった。私の両手は震えて、外では学士がますます心砕かれた声で嘆いていた。ようやく錆びた錠が開いて、風が私の明かりを吹き消し、臨時教師が私の体に重たくのしかかって来て、叫んだ。

「私は終わりです、私はお仕舞いです」。

私は彼を振り解き、急いでドアをまた閉めて、門をして、叫んだ。

「歩く先は分かるだろう、一 前進して、一 まず落ち着きなさい、学士、一 集中して。階段は用心して、一 貴殿をしっかりと私は守ります、一 家には十分食料がありましょう、一 封鎖されても持ち堪えられよう、今晚貴殿の話は大変面白かった、アルプス同僚、一 さあ、着いた、鷺鳥の解放、万歳」。

私が自分の書斎でランプをまた点火しようとしている間、学士は安楽椅子に身を投じて、相変わらず喘ぎながら、手で額を打っていた。私が燃えるランプで彼の姿を照らすと、私は実際まことに、私の女中が先ほど私自身の姿に縮み上がった時に劣らず、びっくりした。

ヘルマンがかくも美しく見えたことはなかった。

これほどその目が燃えていたことはなかった。[Klopstock:Hermann und Thusnelda]

学士は由々しい状態に見え、実際彼が凱歌を上げて、世襲公爵亭の名士達の部屋で椅子から飛び下りて、玄関の間でヴェプケ博士の両腕の中に沈んで以来、沢山のことを体験し、体得して来たように見えた。彼のシャツは破れていて、血が付いていた。彼の鼻は力任せに殴られた一撃でひどく膨らんでいた。彼の右目も同じであった。彼の黒い教師服の上着の裾は彼の敵の手中に残されていて、彼の膝リボンも弾けて、彼の靴下は、ウィリアム・シェークスピアの素晴らしいが、残忍な悲劇、デンマークのハムレット皇子のもののように垂れ下がっていた[『ハムレット』II,1]。彼は一つの強力な戦闘から出て来て、勇敢にその件では戦ったであろうことが見て取れたし、彼を嗅ぐとそれが分かった。私はただ同情と感嘆の間で揺れながら、彼を観察することが出来るだけであった。彼と同じように、祭壇と竈のために、ホルンボルステル嬢とビュツォーの鷺鳥のために戦わなければならない、とこのように強制される可能性を考えるだけで、私は戦慄を覚えた。先にアルプス学士は英雄として演説したのであれば、今や彼は騎士に叙任されていた。時々彼は痛々しく息をしながら、脇腹や腰、肩を掴んだりした。彼はひどい突きを受けたように見え、それで彼が自分の受けた数の突きを、応分に仕返ししていたら、この夜ヴァルノー河畔の平和な町ビュツォーの一人以上の住民の体に一つ以上の青い痣ができたわけであろう。

私が暖炉の火を新たな熾きへと焚きつけて、この打ち砕かれた英雄に一杯のポンス酒を作っている間、これはニワトコ茶を一杯彼に供しようとして断られたからだ、彼は肘掛け椅子に座って、顔を両手で覆っていた。私は彼に湯気の出るグラスを傷付いた鼻の下に差し出して、こう言った。

「さてこれを飲んで、語って頂きたい。貴殿の鼻はひどい状態だ。貴殿の目もかなり修復が必要だ。しかしこれは英雄とか凱旋者が甘受しなければならないことであろう。これは致し方ないことで。ローマやギリシアでも慣例のことだ。ホルンボルステル嬢がきっと

貴殿のその傷に然るべき香油を塗ってきましょう」。

この同情の言葉を聞いて、同僚殿の健康な目、並びに傷んだ目から涙がほとぼしり出て、涙の幾つかは、私が彼に差し出した気分回復の飲み物に落ちた。彼は飲み、一 深く息をして、一 身震いし、一 再び飲んで、深く溜め息を吐いた。

「いや、同僚どの、同僚殿、鼻のことでもありません、目のことでもありません、十字架でも、左の肩のことでもありません、こうしたものすべてが、然るべき状態にはありませんが、これらのことではありません。同僚殿、心です、心のことです。いや、途方もない、不気味な女、偽りの女、悪巧みの女、裏切り者の女です。いや、ザハリッサよ」。

私は、賢人は常に冷静に時を過ごすと考えて、自分用の一杯のポンス酒を作ろうとしていた。しかしこれを聞いて私はスプーンと砂糖袋を落とした。

「ザハリッサとは」と私は叫んだ、「ホルンボルステル嬢のことですか。アルプス、一体全体、貴殿のカボチャ鼻と彼女は何の関係があるのです。貴殿は彼女のために誠実に話しをして、戦われたのです。貴殿に報酬がないわけではありませんまい」。

「何を仰有る。いかに私の報酬が消えたか、貴殿に話したいものです」と学士は野蛮に飛び上がって叫んだ。「貴殿にすべてを文章通りに語りましょう。その文章の一文字も、一言も、一文も、一コンマも、一点も欠かさずにそうしましょう。しかし今しばらく私に休みをください。脾臓がまだ呪わしく痛みます。同僚殿、私が丁度走って来たように、貴殿にも一度そのように走って貰いたいものです。いや、ゼウスには、貴殿を最も美しい優美女神と娶せて、このポンス酒の謝礼に、天の星座に並ばせ給わんことを願ってやみません」。

「貴殿にもう一杯準備しましょう。この酒は男がどんな肉体的精神的疲労や疾患にあらうとも効きます。まあ、落ち着かれて、その杯を差し出してください。話す時間を設けてください。いや、時間はたっぷりあります。特に貴殿のアバンチュールの話しを聞きたいのです」。

「いや、まさに時間はたっぷりあります。それに奇妙なアバンチュールも体験しました。いや、恐ろしいものです。私は自分のディオゲネス・ラエリティウスの許、静かに引き出しの中に寝ていたい。この方が私には幸せでしょう。いや、偽りのセイレーン、偽善者の夜鷹、性欲の入口、救い難い自堕落女、マムシの舌の赤毛女です、あの女、一 あの女、一」。

彼の息は絶えて、一 彼は飲み、感情の嵐を静めた。しかし私は差し当たり夜の臥所を諦めて、新鮮な煙草をパイプに詰めることを最良と考えて、それでもっと余裕を持って、同僚の知性と分別の回復を待つことにした。

朝の三時頃に彼は自分の魂の興奮した波に十分油を注入していて、ようやく自分の受難の物語を語る事が出来るようになった。そして以下に読めるような具合に話した。私自身の魂は、とても冷たい陰気な冬の夜であったが、アルカディアのとても快活な杜の中にあった。

私はドリュアス[木の精]達と雄山羊足の

ファウヌス[牧羊神]達が聞き耳を立てているのを見た。[ホラティウス、Oden, II, 19]

[習っていたのはニンフらで/それに山羊脚の牧神(サチュロス)が/その聞き耳を敬っていた。鈴木一

郎訳]

「同僚のアイリング殿」とアルプス学士は、憤懣と憤怒の陰気な歌を歌った。「同僚殿、神々は死すべき定めの上の住民にそのオリンポスを見せるとき、この住民に神酒に酔った至福を一瞥させるとき、奸計や策謀を秘かに企み、この住民を出来るだけ深く泥土の中に押し込むつもりであることは、太古からの真理です。巨人族や半神達はこのようなことを経験して来ましたし、哀れな、内気な学校教師でもこの轍は免れません。ご覧ください。私はここに惨めなその証明書として座っています。私は、昨日の朝、ラムラーに従って、[不幸な者よ、希望に酔って、大洋の支配者たる者、Ramler1725-98:Glaucus'Wahrsagung]、まだ希望に酔った大洋の支配者でした。ユーリアは私を彼女の復讐者として選んでいました。ザハリッサは約束したのです。私は最も美しい希望の王座に就きました。ヤンテは自らを私の人生行路での伴侶に申し出ました。私がゆっくりとウゴリーノ[1220-89:餓死した、ダンテによる他、Gerstenbergのドラマ]の死を死んでいた教師職などなんぼのものでしょうか。私は自分の年金で暮らせるようになり、騎士領を請け負ったり、買ったりできるようになり、男爵と称せられるようになるのです。ラナッセは、高慢な町の支配者、デブの金満主人への恭順の代わりに、私に求婚をしたのです。そして彼女の足許で、私は恐ろしい誓いを立てたのです、彼女とそのカピトルの丘の鳥のために復讐をすること、町長を踏みじめること、第二のフィエスコとしてこのジェノヴァからアンドレア・ドーリアを肅正することを、そして今日は緋色の勝利の服を着て、太陽の昇るのを目にする、と。この意味で私は日中を夢中になって過ごしました。この意味で私は夕方、アブデラ[愚昧]の人々の中に進み出て、そして同僚殿、貴殿が私の証人となって頂けますように、ローマの執政官の誰一人、アテネの第一人者の誰一人、カルタゴの高官の誰一人、私のデモステネス風雄弁で、ハーネ博士が卒中の際に追い込まれたほどに、かつて敵対者の演説でかくも追い込まれたことはなかったのです。同僚殿、町長は私にそんな能力があると思っていなかったでしょう。私自身が自分に驚いています。トテモ上手ニ、私は語り、勝利しました。しかし私はまだ私の偉大な無分別の端緒に立っただけです。一万の銃剣があっても私の進路な妨げにはならなかったことでしょう。燃え上がった民は喝采し、歓呼の声を上げました。私の手によって火薬樽に火花が投げられたのです。 — 『自由だ、自由。鷺鳥を解放せよ、町長を倒せ。ブレッカーの鼻をもぎ取れ』と私の周りで叫ばれ、ユーリアの像がこの騒ぎの上に薔薇色の明かりとなって漂いました。『起て、ビュッツォーの町民、諸君。起て、暴政の巨城に対して。起て、抵当家禽小屋まで、起て、鷺鳥抵当小屋まで』と私は叫び、群れが私に模して吠えました。かくて私は、数百人の波に囲まれて、町の広場まで来ました。ヴェプケ博士はずっと私の側において、有象無象の地上のすべての被造物の中で、私にとって以前からこの人物ほど厭わしく反感を覚える者はいなかったのです。今でもまだ彼の抱擁の悪臭の臭いが私にこびり付いています。アラビアのどんな香りの良い香料でも差し当たり私の鼻からこの臭いをすすげないことでしょう。『それいけ[サ・イラ]、それいけ[サ・イラ]、圧勝だ、圧勝だ』とこのじたばた野郎は叫びました、『学士殿、貴殿は偉い男だ、 — 万歳、進め、 — 進め、祖国の子らよ、前進だ、ビュッツォーの町民、諸君。起て、バスチーユへ、起て、バスチーユへ。学士殿、貴殿に感謝します。まことに感謝します。貴殿には後ほどお礼をします。それいけ、それいけ、行くぞ、行くぞ』。 — しば

らく駆けて、人々の吠え声や咆哮と一緒に我々は路地を抜けて、グレーヴェデュンケルの住まいの方へ向かいました。『今度こそ彼女は私のものだ。今度こそ彼女には約束を果たして貰おう』とヴェプケは歓声を上げました、『言い逃れなしだ、弁解もない、例外もない、遅滞もないぞ。万歳、ユーリア、勝利だ。ヒメナイオスの呪文だ、いや、この結婚の神の呪文だ』。 — アイリング同僚殿、私の髪の毛が逆立ちました。私の血管の中の血が凝固しました、『博士殿、何と叫ばれました、ヴェプケ博士殿、誰の名を口にされました。ユーリアとは誰のことです』。『 — ユーリア・ホルンボルステル嬢、我が許嫁のことだ』と紡錘脚状の怪物は歓呼の声を上げました、『我々が今晚、町長に勝利したら、二週間経ったら、結婚式だ。貴殿は民衆の実直な指導者として、学士殿、花嫁介添人となって貰おう。貴殿にそのことを神聖にお誓い申す。 — いや、ユールヘン[ちゃん]、ユールヘン[ちゃん]』。 — アイリング殿、私は全く駆けていましたが、丁度ホルンボルステル嬢の窓の下で立ち止まり、この神聖冒涇者の襟を掴みました。いや、殺人鬼の女、毒殺者の女、魑魅魍魎女[Lamia]、欺瞞の女です。我々はこの女の玄関前で引っ張り合い、筆り合いました。頭が上になったり、頭が下になったり、彼が上に、私が下に、私が上に、彼が下になったりです。そして我らの檻褻の追隨者達も勿論我らの例に倣います。 — トロイ陥落後のような具合にてんやわんやです、もっとひどかったでしょう。彼奴の最後の歯を幾つか叩き潰しました。これが私の唯一の慰めです。しかし彼の話しも真実は例外的だったのです。夜間のランプとナイトキャップで窓辺に現れ、助けてと叫んだ偽りの野獣の嬢は、我々二人を二人の道化鈴坊やの扱いで、今やその上自分の洗濯鉢を我らの頭上にぶちまけたのです。私は十分に浴びて、もはや目も見えず、耳も聞こえなくなったとき、私の信奉者達は、三百代言の人食い鬼の従者達の前から遁走にかかって、私もびっこ引き引き、鼻血を出しながら姿を消し、かくてここにいます。そして捕吏ども、獄吏ども、警察ども、復讐の女神どもが家の前で吠えています。 — 彼らは侵入して来て、 — 明日には捕縛して私はシュヴェリーン送りとなって、裁判にかけられ、その手配をビュッツォーの当局や聖職者がすることでしょう。いや、ただ十五分、ホルンボルステル嬢と二人っきりになれて、そして立派なハシバミの鞭があったら、私はこの情けない運命にまだ従容と耐えることでしょう』。

ここで学士は自らの中で崩れて、新たに呻きながら顔を両手で叩いた。しかし私は彼の前に立っていて、アリストファネスのコーラスと共に語った。

「いや、不幸な男よ、汝は哀れでならぬ、
かくも心は碎かれ、恐ろしく虐げられて、
いやはや、不憫でならぬ」。[アリストファネス、『女の平和』、第四場]

しかし素早く一つの決心がなされなければならなかった。というのは我々は邪悪な、邪推深い時代に生きていたからである。シュヴェリーンの殿方達とは冗談で済まされない。

部屋の中を物思いに耽って、数歩歩いた後、私はこの不幸な男、迫害された男に尋ねた。

「学士殿、貴殿はここまで誰にも後を付けられず、私の家へ入る際にも、誰にも見られなかったという確かな希望を抱ける根拠が幾つありますか」。

「私は足の向くまま、風に任せて、こちらへ来ました」[ホラティウス、Oden, III 11, ラムラ

一訳、歩くか船で行って頂戴、鈴木一郎訳]と彼はその嘆きにもかかわらず、相変わらずラムラ一と共に語った。「私は戦闘の雑踏と残忍な追跡者達をはるか遠く後にしていました。私の姿は誰にも見られていないと思います。同僚殿、私は古典の語義解釈通りに、貴殿の竈にすがり、貴殿の膝を抱き締めています。私を見棄てたり、突き出したりしないでください」。

「アルブス、すっかりお任せ頂きたい。貴殿は私の許で、昔テミストクレス将軍がモロツソイ族の国王、アドメトスの許に宿を請うたときより安心されたい。しかし貴殿の判断能力自体が、今最良なのは、少なくともしばらくの間、人間社会から姿を消すことであると、判断しておろう。貴殿を今夜のうちにも、奥の小部屋に押し込むことを悪く解釈しないで欲しい。最低限の慰みにも欠けることがないように配慮致そう。一台のベッドがいつもそこには用意されています。貴殿にはキケロの『トゥスクルムでの会話』、並びに不幸な際の『哲学の慰め』についてのポエティウス[Boethius,480頃-524]の本を差し出そう。大気がまた澄んで収まる頃まで、貴殿の慰めとなろう。しかし貴殿は顔を私の特別な許可なしには突き出されないよう用心されたい。顔を出して良い時期が来たら、貴殿に話すことにしましょう。私はこれから貴殿に水を持って来ます。貴殿は戦闘でのその埃や血、汗を洗い落として、十分眠ったらよろしい。私の女中達でさえも、我が家に貴殿が滞在されていることを察知してはならないでしょう。これは自覚してください。それでは十分に休みたい。アテネの女神パラスが貴殿をお守りしよう、アフロディーテ女神と貴殿自身の健全な分別が先には機能しなかったとしても」。

第十章

何ですと、とどんな質朴な男でも言う、そんなことを辛抱出来る者は誰です、と。

私は根本的に考えて、まことに平静な瞑想的人間であって、また規則的な、時間に従って何事も進む学校勤務で、私は秩序と清潔さを尊ぶ個人に仕上がっている。今や私は国家機密、無秩序、混乱、それに大いなる責任を家の中に背負い込んでいて、私の家政婦にさえ助言を請うことが許されない。かくて私は心が乱れたまま、自分のかじかむ四肢を臥所で伸ばして、少なくとも更に一時間休むことにし、あちこち輾転反側し、道化者の学士をこれからどうしたものか自問し、解答を得られず、寂寞たる微睡みに陥り、その間、幾つかの不快な反撥的事象について、専ら亡き妻について夢を見ていた。妻は奥の小部屋に同僚を発見して、勿論極めて強引に、大変憤慨して追い出しにかかっていた。客友に対する古代的忠誠心で私は吠えている臨時教師を弁護した。すると錫製のコーヒー鍋が亡き妻の手から私の額に飛んで来て当たった。私はベッドに真っ直ぐに座っていて、私は自分が夢を見ていたと分かり、そして朝が白み始めていると気付いた。それから全く段々と確信が生じて来た、つまり私はアルブス学士との話しを夢見ていたのではなく、この交渉は正当なものであり、同僚は全く確実に、安全に奥の小部屋に隠れており、私の同僚意識、英知、周到さに対し自分の息災をかけているのである、と。

「彼奴のために私のモンスズメバチの巣は邪魔されることになった」と私は嘆息した。「いや、天上の支配の神々よ、一体どうなることだろう」。

すでに一階では活気付いていた。大きな声でヨハンネはその日の仕事や朝の詩編を始め

ていた。愛しい神にお任せしている者は等々。すでに外の路地でも活気付いていた。私の暖炉にはすでに火が点火されていた。私はその火が音を立てて爆ぜるのを耳にした。私は箒の音、拭き掃除の音を聞いた。雄鶏が鳴き、鶏どもがくわっくわっと言い、牛が鈍い声で寝惚けた牛飼いや世話人を呼んでいた。

一つの決断がなされなければならず、私は禁欲的平静さで、崇高な山岳の高みから世の出来事の経過を追うべき歴史記述者にのみ相応しい決心をした。一 私は出来事を回避せず、私と学士に対し近寄せ、その都度、その場の成り行き助言に従うことにした。かくて私は起き上がり、客人の権利を最大限に守るという自分の義務心を固めて、聖職者と世俗の剣に敢えて反抗し、監禁された語義注釈のこの鳥に食べ物と飲み物を大胆に世話することにした。私は余分の温かいナイトガウンを、破損した黒く薄い上着の代わりに提供した。

この英雄はこの上ない惨めな気分の最中であつた。彼の昨日の勇壮さは、風の前の霧のように雲散霧消していて、彼の達者な口は、極端に意味不明な無に還元されていた。彼は眠らずにいて、その臥所に座って、尖った顎を肉のない膝頭に載せていた。彼を刑事裁判所が十五分後には絞首台へ連行する意図であつたとしても、彼はこれほど惨めな風には見えなかつたであろう。私は彼を少しばかり温かいアラビアの飲み物[コーヒー]で勇気付けて、煙草の詰められたパイプとポエティウスの本を渡して、一切物音を立てないように注意し、彼をその快適な空想と物思いに残した。私は奥の小部屋にいる彼にとって無用であつたろうし、いずれにせよ今日はビュッツォーの観相学研究[様子見]が必要であつたからである。

ビンバム、ブンブム、ブンブム、ビンバムと塔の鐘が調和的に響いて、敬虔な祈り手に、その身繕いと家事とを急いで済ませ、次席牧師の尊師ペーター・ブレッシングを待たせないよう促していた。尊師ペーター・ブレッシングの説教は良く味付けされ、胡椒を利かせ、薬味が振りかけられていて、必要な砂糖もまぶされ、オーブンで温められていて、いつでも提供できる状態であつたのである。しかし敬虔なキリスト教徒の教区民は、今回いつもより劣等な安息日の食欲で目覚めたように見えた。ただわずかな老いたお婆ちゃんや男の老人達のみが鐘の敬虔な呼びかけに応じていて、その大きな賛美歌本と共に教会へ小走りに向かつていた。しかし大方の男女は、個別に、あるいはグループで玄関前に立っていて、説教の教会へ詣る気はないように見えた。目の据わった視線はぼんやり漠然と魂の抜けた様で、灰色の天球に対し永遠の正義を求めていて、それを見いだしていないように見えた。うんざりして垂れた口の角は内心の不和と諍いを暗示していた。しかしまた平然とした怒りっぽい性格の者達もいた。彼らは鼻を上を反らし、憤然と息巻いていた。井戸泉では女中達が頭を寄せ合っていた。しかし彼女達は、より一層身振りが激しくなっても、より一層小声の調子で互いに話していた。一 ビュッツォーの住民達は火事で焼けた泥炭地に似ていた。明るい炎は上がらないのであるが、恐ろしく煙が出て、とてもひどい臭いがするのである。

ビンバム、ブンブム、ブンブム、ビンバム。これは弔鐘の音のようであつた。すべての故人となった町長達、法務官達、按察官達、グレーヴェデュンケル達がこのメランコリックな音色で再び起き上がるように見えた。彼らの精霊が冬の大气の中移って来た。彼らは悲嘆の声を上げて、彼らの官服の幽霊のような裾が密に屋根の上を擦って行った。

「まだ沢山雪が降るだろう」と天候に詳しい者達が言った。そしてコクマルガラスは天で甲高く鳴き、切妻屋根を旋回し、屋根に並んで、劇場の観客のように首を伸ばした。この鳥達は、下界では必ずしも整然としていない、今日もまだ何か起きるであろうと知っていた。

私は窓を開けて、同じように頭を突き出した。そして全き快活さが私の情緒に戻って来た。私は朗らかに諧謔心を持って、我がエウリュクレイアの報告を聞いていた。彼女も同様にいつもの具合に井戸泉から急ぎ戻って、バタバタしながら彼女の流儀で昨夜の出来事を私に知らせようとしていた。すでにファーマ[噂の女神]がアルプス学士の失踪を教区の一団に広めていた。そしてこの件について、空想が野蛮に放恣になされていた。ヴュプケ博士も痕跡なく消えていて、ただ彼の姿の圧印のみが、ホルンボルステル嬢の玄関前で、今は凍ってしまった泥土の中に残っていた。学士の帽子も発見されて、市役所の緑のテーブル上に悪しく傷められて置かれていた。必要とあらば、調査が開始されたとき、この不幸な所有者に対する証拠品とされるのであった。千切れた上着の裾も、ひどく汚れて発見されたが、これは学士のものとも、ヴュプケ博士のものとも確定されていなかった。首席牧師クラファウティウスは臨時教師のジャコバン主義的登場と演説について、然るべき役所宛の報告を、礼拝の始まる直前に直接郵便局に届けていて、その後より軽快な心となって、哀れな罪人達のために祈りを上げることが出来た。

私はこの日、ビュッツォーの大方のように教会へ行かなかった。しかし私はすべての家の者達を外に送り出して、その後、追跡されている同僚を少なくとも若干の時、その陰鬱な薄明かり状態から一息つけるようにした。明るい日中の光の許で、彼はランプの明かりの時よりも更に惨めな光景を晒していた。一 彼はひどく、とてもひどく損傷を受けていた。運命は辛辣に彼を罰して復讐の存在を教えた。動くたびに、彼はとてもひどい痛みを感じた。ただ呻き声を上げて、彼は腰を下ろすのであった。ただめそめそ泣きながら彼は起き上がった。そして彼の顔はニュートン教義のすべての[プリズムの]七色を呈していて、ノアの洪水後の地球に似ていた。元は谷であった箇所に山脈が隆起していた。一 ビュッツォーの偉大な革命は、学士アルプスの顔面で開始したのであった。一

「さて、同僚殿、ポエティウスの感想は？」と私は尋ねて、打ちのめされた男の精神を少しばかり奮い立たせた。しかしこの男は別の小道をよろめいていた。

「私がここにディオゲネス・ラエリティウスの私の原稿を有していたら」と彼は嘆いた、「今晚にも私は抜け出して、国境を越えて行きましょう。貴殿に私は貴殿のベルリンでの文通相手のニコライ[Nicolai,1733-1811]宛に紹介状を書いて頂き、また十ターラーを貸して頂き、更にひよっとしたら、私の所有物のうち、まだ救い出せるものを後の便で送って頂けるものならと願っています。貴殿は善行の報酬を神様から頂けましょうし、私はきっとディオゲネスと『一般ドイツ文庫』で何とか凌いで行きましょう」。

「『一般ドイツ文庫』はキールへ亡命しましたぞ[検閲のため]」と私は反論した。しかし学士はこの中断を気にかけず、続けた。

「それに校正をすでにライプツィヒでヴァイマルの作家達やイエナの作家達のために経験しております。私はきっと上手く行くと思います。ひよっとしたらここビュッツォーよりもましかもしれません」。

玄関で声高にノックされて、我々のこの会話は突然中断された。学士は最も暗い隅に駆

け戻り、いつでも自分の避難場所に隠れる用意をした。私は慎重に窓から確認して、同様に慌てて離れた。

「グレーヴェデュンケルだ」。

彼が憤然とがに股で立っていた。野蛮な視線で、霜の降りた口髭、完全な職務服であった。三角帽子とサーベル、それに重々しい、輝く球の握りの杖を持った法の番人、悪しき良心にとっての恐怖の像であった。その彼がそこに立っていて、新たに、より激しくノックして、開けるよう求めている。

「同僚殿、勇気を出して、大胆に、度胸です」と私は囁いた、「穴蔵へ隠れなさい。我々はまだ、我が友、町長のハーネが言うであろう、口頭でのみ伝える遺言[ローマ法概念]には至っていません。すぐ茂みに隠れなさい。どんなことがあろうと、動かないことです。まだ救いのない土壇場ではありません。書籍商にして律法学者のニコライ宛の推薦状もいづれ書きましょう」。

学士は肢体が硬直していたが、不思議な敏捷さで蒸発した。私は咳払いしながら下へ降りて、危険に見えるこの使者兼廷吏の中に入れた。彼は私の許で学士を探しているのではなかった。彼の使命は単に、私を丁重な作法で、教会のミサの終わった後、現町長の許まで呼び出すことであった。彼はその委任を玄関で渡し、真面目に挨拶した後、足を踏みならし、角を曲がって消え、民衆の不吉を告げる視線を浴びていた。彼は残念ながら民衆をはなはだ軽視していて、民衆も、彼の勤労ほどには、彼に格別好意を抱いていなかった。

私は束縛されている学士に、この通知を知らせ、新たな不安と心配とに彼を陥らせたが、大官の椅子からの重要な呼び出しに従うべく準備した。

丁度十一時に私はビュッツォーの路地を通り抜けて、窓辺のホルンボルステル嬢の幽霊のような仮面を見て、教会オルガンの最後の音色の中、強力な執政官、憤怒の四角四面の闘鶏[ハーネ]の前に立っていた。

「いとも尊い町長殿下、校長殿です」とグレーヴェデュンケルは語った。私を何か全く新しいもののように示していた。町長殿は椅子から起き上がって、しかしまたすぐに座って、学士同様、溜め息を吐いた。

「いや、失礼。校長殿、我が友。しかし私は疲れてしもうた」。

彼はそうに見えた。私は彼の言葉を信ずることが出来た。彼も、この町の立派な父親も、余り眠っていなかった。新たなアトラス[巨人]として、彼はこれまで自分の世界を支えて来た。しかしこの世界は昨晚から余りに重いものとなっていた。グレーヴェデュンケルは私にも安楽椅子を差し出した。私はビュッツォー共同体の心の折れた頭目に向かい合って座り、この頭目の切り出すことを、上品に静かに待っていた。

「いや、我がいとも尊敬する代父殿、校長殿」と統率者[町長]は始めた、「貴殿にここまでご足労をおかけするつもりはなかったのです。私の義務や名誉、そしてこの時節の状況のため、自分の持ち場を離れないよう拘束されることがなければ、貴殿御自身の住まいまできっと私は訪問した筈なのです。しかし緊急時のため、かくも我々の上に降りかかっており、私は休めません。校長殿、何と皆がやって来て、質問攻めにして、助言や助けを求めているか、貴殿には想像も出来ないでしょう。息を継ぐ時間ありません。不満分子どもが更に町のすべての四隅に放火をしたら、もうお手上げです。いや、何という時代でしょう。何人もの悪鬼どもが、私の豚どもに乗り移ったことでしょう。更にもっとそれに憑

かれることでしょう。人間の悪意は途方もないものです」。

「世界史は町長殿、貴殿に注視しています」と私は励まして語った、「威儀を正して、しっかり座っててください。町の獣が貴殿と一緒にいくときには、その角をしっかり握っておくことです。 — いずれ獣は市壁の前でおとなしくなるにちがいありません」。

「それは慰められる言葉です」と町長は溜め息を吐いた、「私のもう一つの慰めは、丁度今頃私の急使がシュヴェリーンに騎行して着いていまして、そこの人々もきっと私をこのひどい、噴飯物の困窮、窮地にこのまま邪険に放置することはあるまいという点です。しかしこれについては貴殿に相談するつもりはありません、校長殿、そうではなくて」。

「そうではなくて」

「そうではなくて、貴殿の親しい女友達、ユーリエ・ホルンボルステル嬢のことです」。

「おや、おや、おや」と私ははなはだ奇異に思って語った、「この令嬢は私の親しい女友達とは言えなくても、 — ソレヨリ、更ニ真実ハ好マシイ、 — それでも、貴殿は彼女について私と何を話したいのか、尋ねることにしましょう。それを聞きたいし、興味津々です」。

「それでは腹藏なく話しましょう。貴殿が私に助言を下さるなら、 — — 何にしましょうかな、貴殿がつとに欲しそうに眺めていらした、トルコ製パイプの火皿、あれを呈しましょう」。

「トルコ人に値する話しです。話して下さい、友よ」。

町長はその煩悶から起き上がって、深く息をして、語った。

「校長殿、このホルンボルステル嬢はビュッツォーのカティリナ[紀元前108-62頃]です。嘆きの私は執政官キケロで、もっとも、敬意を持って話すと、私はキケロの口の達者さもなく、その他の有徳な称えられる性情も有しません。校長殿、この女性は私の破滅を目指しています。私が今存命でありますのは、彼女のお蔭ではありません。神の広大な大地で、かつて私ほどこのような地獄のような敵を有し、このような迫害を受けた人間の子はいません、あの日以来」。

「で、何の日以来です」と私はこの上なく緊張して尋ねた。

「申しましょう、貴殿に対してはもはや何も包み隠さないと決めたのです。貴殿は口が堅いと承知していますし、貴殿は良き助言を下さるであろうと期待していますので。一七八四年以来です。私の心が震え上がって以来、戦慄恐怖して、彼女の愛想の良さや楽しい好意から独身生活へ遁走して以来です」。

「本当ですか」と私は語った。

「本当です」と彼は墓場の声で言った。我々は座っていて、兩人とも黙ってお互いを見つめ合っていたが、しかし顔には異なる痙攣が見られた。

恭順に、憂鬱そうに、そして温和に憤怒の四角四面氏はそれから続けた。

「彼女は私の破滅を心に誓ったのだ。彼女は熱心にその仕事に取り掛かった。私の災難で、彼女が裏で戯れに画策していなかったものはない。私は至る所で私の背後に彼女の猫の忍び足を感じた。彼女は私の夜間休息中に毒を盛り、私の評判を台無しにして、この町の女達の許で、まこと鼻が曲がりそうな悪臭の人物に私を仕立てた。彼女は一七九一年のパン騒動のときも潜んでいて、彼女のお蔭で統治に関し一ダース以上の叱責を蒙ることになった。彼女は一七九二年立派な靴屋組合にスリッパ業界に関する件で私を詰問させた。

彼女は　一　またしてもこの悪評の鷺鳥の件で裏で糸を引いている。ヴュプケと狂ってしまった学士は単に彼女の右手代わり、左手代わりにすぎない。私は貴殿に内密に打ち明けて言えば、代父殿、これには彼女が私に仕掛けた平手打ちしか感じません。さて、しかしこの件は危うい均衡にあります。次の瞬間に私の体に生ずるであろうものを私は言えません。それで私は、今の所貴殿をビュッツォーでまだ健全な五感と人間的分別を維持している唯一の人間と見なしていますので、そこで両手を組み合わせて、貴殿に切にお願いする次第です。私に遠慮なさらず、ホルンボルステル嬢の件に関して助言を賜りたい、と」。

私は私の椅子の背に寄りかかって、黙想して天井の方を見て、それから町長の目を見つめ、言った。

「ハーネ博士殿、貴殿は私の同僚、アルブス学士を捕らえたら、どうなさいますか」。

「私は可能なら、彼を裁判にかけ、絞首刑にするか、少なくとも刑務所での十年の禁固刑にしましょう」と現町長は大変元気づいて叫んだ。

「貴殿が私に、これらのことは何もせず、彼の若さと未熟さを考えて、目をつむり、やむなくば、彼を静かに国境[公爵領]を越えて逃す気がおありならば、貴殿からはトルコ製パイプを頂かずとも、それでも私は貴殿に令嬢の件で理性的で立派な助言を致しましょう」。

「彼は金が必要なのか。彼は新しい黒いズボンが必要なのか。乗り物が必要なのか」と町長は更に元気づいて叫んだ、「すでに坊主ども、太った無駄口屋のクラファウティウスに対する功績で、彼には何でもやろう。ずらかっても良かろう。貴殿の助言を話されたい、校長殿。ここで、私は手を差し出して、誓いましょう、私は貴殿の臆病兎の逃げ道の邪魔は致さぬ、と」。

「男子に二言なしです」と私は厳かに言った、「ハーネ町長殿、貴殿はホルンボルステル嬢の家に、貴殿がシュヴェリーンに要請なさった武装隊を宿営させることです、そうなされば、　一」。

私は私の文を終えることが出来なかった。町長は飛び上がっていた。彼は私の腕を取って、嗚咽しながら私を彼の胸に抱き締めた。同じ瞬間、グレーヴェデュンケルがまた部屋に駆け込んで来て、目を剥いて、不安げの上司を見つめて、喘ぎながら叫んだ。

「奴等が来ます、奴等が来ます」。

鈍い呻り声やぶつぶつ声、鋏を打たれたヴェラターベン族の長靴やオボリート族の靴の踏みならず音がこの家の下の方の部屋と階段で聞こえた。

誰が来たのか、不吉な第十一章で読めるであろう。

第十一章

ビュッツォーの町民

何と優しいリュストリール[悦楽嬢]が破廉恥にも高くまくり上げたことか。血が滴り、その上、称賛されるのか、殺人の遊び仲間は、淫らなことも、強奪もお手軽。

と新しいフランク族[フランス人]国民について、楽器ギテイト[詩篇、8]に合わせてフォン

・シュトロベルク伯爵は怒った舌で夢中に歌っている[反革命の詩『西のフン族』]。しかし私は町長ハーネがその「ビュッツォーの国民」と呼んだ者達について別な調子で別な風に歌う。

「誰が来るのか。六百ショック[一ショック六十個]の血まみれの虐げられた悪鬼にかけて、誰が来るのか。その悪臭の口を閉じて、はっきりと語ってくれ。私の家にこのように忌まわしく足を踏みならしてやって来るのは、どんな恥知らずな連中だ」。

「代表团です、町長殿、シェルペルツです、町長殿、ハーゼにマルテンス、ホルツリヒター、コンペール、そして他の数百人の田夫野人です、町長殿。奴等は私を押し退け、私をほとんど投げ飛ばすところでした。奴等は奴等の鷺鳥を望んでいます。やって来ます、皆酔っ払っています」。

彼らが本当にやって来た。彼らのせいで階段が崩落しなかったのは、奇蹟であった。彼らがドアを蹴破らなかったのは、まだしもドイツ人の心根の良さを示すもので、上々の権威筋への敬意と見なされたであろう。彼らは冷たい冬の外気から暖房の部屋へ入っており、彼らから一つの霧が発生していた。彼らはその固有の臭いも持参して来て、これはただルイ十六世のみが、彼の廷臣の代わりに民衆が伺候した折、これに類する臭いを雄牛の目[屋根窓、一七八九年十月五日、これを通じてヴェルサイユ宮殿に民衆が入って来た]の中で体験したであろう。たちまち我々は片隅に追いやられ、町長の巨大な威厳は火鉢の上の一枚の紙のように縮んでしまった。私個人としては、胃に対する固い肘突きを受けたと証言することが出来た。いずれにせよ、我々の注意力は最良に目覚め、そして霧の中から、両足ともよるめきながら、シェルペルツ、馬具屋が出て来て、他人を代表して言葉を発した。

彼はすさまじく酩酊していた。しかしすでにスカリゲル[1540-1609]が言っている。「酩酊したドイツ人でも、理解力は素面のドイツ人と変わらない」。それでこの状態でも雄弁さは余り破綻せず、親指と人差し指で町長のチョッキのボタンを握って、こう始めた。

「町長殿、一 和平と休止のため、一 鷺鳥の解放と我らの権利、自由そして平和のため、我々は皆ここに参上仕っておる。それで一 お願い仕る一 鍵を、一 抵当小屋の鍵を。我々は一 ヒック、ヒック、一 我々は平穏な一 町民一同にござる、一 貴殿には十分に長くその道を自由に任せて来た。町長殿、このことはシュヴェリーンで我らのために証言して頂きたい、そして、一 ヒック、ヒック、一 フランス人に関しては、奴等は貴殿と夙に長いこと功績を求めて、張り合っていて、貴殿を足から吊そうとして出来ないでいた。町長殿、一 ヒック、ヒック、一 お気の毒なことだ。しかし我らの権利、鷺鳥はもっと気の毒だ。それに自由、平等、博愛、これらも結構なことだ。一 ヒック、ヒック、一 それにフランス人に関しては、それで我が娘は、ホルンボルステル嬢に仕えており、ホルンボルステル嬢に関しては、どちらにしても同じことで、つまり我々は皆、我らの権利を主張する。鷺鳥を出して貰いたい。私の言うことは、正しいか、兄弟諸君」。

「シェルペルツ、正しいぞ、行け、やってしまえ。踏み潰せ。捕まえて、のしてしまえ」、そして「鷺鳥を出せ、鍵を出せ」と連中が叫んだ。シェルペルツは仲間達の同意で勇気付けられ、昂然として、続けた。

「そして、フランス人に関しては、奴等は殺人鬼だ。奴等に出来ること、これは我らにも出来るぞ、一 ヒック、ヒック、一 そしてこちらの当局なるもの、委員会諸君、

それにその他、奥の方で我ら貧しい民の上に座っている輩、この輩は神様に感謝することだ、ここの我らはまだギロチンが間に合わず、用意がないのだ、一 従って 一 ヒック、一 今回は背中をぶん殴られるだけで逃げて済むのだ。町長殿、私と、我がレギーナ、ホルンボルステル嬢にお仕えしている娘のせいで、貴殿は私の意見をご承知でありましょう、それでおおきに、グレーヴェデュンケルと鷺鳥小屋への鍵とを出して頂きたい、一 その気がありますかな」。

「まあ、待て、一 シェルペルツ、一 まあ、今晚まで待て」と町長は力なく憤然として、喘いで言った、「後悔することになるぞ、まあ、晩まで待て」。

「兄弟諸君、奴はその気がない。それではやろうか」とシェルペルツはにやりと笑って、同志の腕の中によろめいて戻った。

「彼はその気がない、彼はその気がない。鷺鳥の解放、万歳」と一団が叫んだ。そして馬具屋の代わりにシュミット、仕立屋が飛んで来た。彼はその演説のせいで、後にほぼ半年間、デーミッツの監獄で政府費用により手厚く養われる予定であったが、ハレの法学部教授陣がそれに異議を称えたのであった。彼は八十八カ国のドイツ諸国で針と鋏をまことに達者に使用して来た遍歴の男で、その演説は耳に心地良いものであった。彼はその最大の鋏も持参して来ていて、話しに力が入る主要箇所、町長の鼻に危うく食らいつき、この鼻はただ奇蹟的にこのとんでもない切断と短縮の技から逃れたのであった。しかし彼の喋ったことを再現すると、今日でも私は忝くも公爵殿下の費用によりデーミッツ送りとなりかねないもので、賢明に私は沈黙しておく。ハレの教授陣が今日も同じく温和さを主張するであろうとは誰も言えないのである。

「シュミット、まあ待て、一 まあ、今晚まで待て」と町長は喘いで言い、ただ一つの方法で息をしていた。「後悔することになるぞ、ただ夕方まで待ってくれ。いや、我らは貴殿らのようなジャコバン主義者、ビュッツォーの道化師にしてろくでなし、貴殿らのような酔っ払いのならず者にして流浪のやくざ者、貴殿らのような落ちぶれた貧民にして穀潰しをしばくことが出来たらと思うぞ。それは請け合っておこう、貴殿らを一人残らず忘れないぞ。然るべく報復致そう、まあ、今晚まで待て」。

「代表団」は嘲って笑い、蛮声を上げた。そしてこのすべての鷺鳥騒擾者達、町の治安紊乱者達がにやりと笑って互いの腋に肘を突いた。

「兄弟諸君、彼は鍵を出さん、彼はそう出来ん」。

「渡さん」と雷の声で町長が叫んだ、「渡さん、三名の悪魔の名にかけて、渡さん、重ねて渡さん。町長は鍵を渡さない。中に入れられたものは、中に留まるのだ。一 一本の尾っぽも一本の羽毛も、出されない。たとえすべてのパリのサンキュロットどもや賤民どもが行軍して来て、ビュッツォーに押し寄せてもな。グレーヴェデュンケルよ、抵当小屋の前で番をしろ。この小屋を身命を賭して英雄のように死守するのだ。それでは貴殿らには退出願おう。ここの空気はもう十分に汚染されてしまった。出て行け、外に、階段を下って」。

絶望のエネルギーで彼は奮い立って、両の拳で広い円を自分の周りに描いた。ビュッツォーの人民はよろけながら、どたばたと後に退いた。一度キックを受けると、もはや戻る動きはなくなって、甲高い物音や野蛮な騒動となって、耳の弾けそうな叫び声の中、階段を下りて、路地に出た。

「自由だ、鶯鳥の解放だ、鶯鳥の解放、鶯鳥の解放、 ー」。

「これは堪らん、ビュッツォーが存続して以来、ビュッツォーがまだ体験したことのないものだ」と町長は両手を揉んで嘆いた。「シュヴェリーンの軽騎兵達がまだ来ないうちに、奴等は手当たり次第何でも壊してしまおう。代父殿、お聞きなされよ、奴等は今度、財務官の方を目指して叫んでいます。いや、神かけて、彼奴を奴等がちょっとばかり可愛がっても、私の責任ではなかろう。彼奴一人のせいで我々は厄介なことになったのだから」。

「兎ガコノ件ノ張本人デス[雉も鳴かずに撃たれまい][犬が兎を殺すのを見ていた一人の証人がその犯行をこの言葉で弁護した。Lami、1787-1847の詩による]と私はとても立派なラテン語で言った。この言葉がこの機会に当てはまっていた。町長殿は私に更に話すことはなかったので、私は彼をこの困惑の中に置き去りにして、別れ、穴蔵にいる私の学士に、この快適な朝の騒動娯楽の興味深い一部始終を伝えることにした。

しかしビュッツォーの路地は由々しげに見えた。カール・フォン・ヴェルテンベルク公爵閣下の下、敬虔な宮廷説教家、オイロギウス・シュナイダー[ジャコバン主義者、1756-1794]統治下の立派な町シュトラースブルクはこのように見えたのかもしれない。

ビュッツォーで最も安全に保護されていた人間は、奥の小部屋にいるアルプス学士であった。

第十二章

ホルンボルステル嬢の膝屈めの礼と挨拶。八名の軽騎兵、一人のラッパ兵、一人の下士官、
ー シュヴェリーンのフォン・シュラブップ少尉

私は彼、 ー つまり学士が ー 穏やかに眠っているのを見つけた。頭をポエティウスの本の上に置いて横たわっていて、いびきをかいていた。彼はテオーデリヒ国王の的確な枢密顧問官[ポエティウス]の立派な作品から極上の慰謝を汲み出して、それを早速有益に具体的事例に適用したように見えた。彼ははなはだいびきをかいていて、すべての音階でオルガンを弾いていた。

しかしその代わり、私が彼の肩に手を置くと、やはり一層臆病げに飛び上がった。

「どこに、 ー 何が、...いや、同僚殿ですか、やれやれ、私は丁度全く別の夢を見ていました」。

「貴殿のその言葉、その狼狽した表情故にそう信じましょう。しかしもう起きてください。存命の者達の世界から、まあまあ情報をお知らせしましょう。第一に、貴殿の意志通りになりました。ビュッツォーは完全な暴動蜂起にあります。 ー」。

「いや、南無三[カストルにポルクス]」と学士は嘆いた。

「第二に、今晚にもシュヴェリーンの軽騎兵達が侵攻して来ます。残酷な鶯鳥蜂起者達のすべての首謀者、張本人の襟首を掴みます、そして ー」。

「いや、何タルチア、サンタルチア、同僚殿」。

「そして第三に、貴殿、アルプス学士は、罪のない、誘惑された、ボルステル嬢寝取られ個人、天才的な学校教師先公として、貴殿は国境を越え、ベルリンの友、ニコライの許へ行ってよろしい、我らは乗り物や必要な旅行支度をしてやろう、しかしザハリッサ用には多分有蓋四輪馬車の席はなかろう」。

学士は慄然として、私と握手して、黙って脇を向いた。私はそれから詳細に、町長の許で耳にし、話し、目にしたことを語った。その際先の臨時教師の座興に供した観相学的芝居は、ラーヴァーター本人でさえ、困惑させたに違いない。彼は椅子の上で、小躍りし、回転し、向きを変えて、それを見守るのは一つの快樂であった。最後に彼は私の首に今一度かじりつき、最大の謝意を示した。そして私は今や — 敢然と、「老いて重々しい世話婆」のヨハンナを奥の小部屋に案内し、彼女に謎めいた客人のことを知らせて、彼女にコンラート・ゲスナー[1516-65]の『世界文献便覧』[Bibliotheca universalis]の上で誓わせた、この恐ろしい秘密を厳守致します、と。大きな叫び声を上げて、まことに奇妙な身振りで、彼女は誓った。しかし誓ったからと言って、彼女のことを際限もなく信用せず、ただ私の女性的経験の範囲内で信用して、鋭く彼女から目を離さずにいた。彼女は多くの感嘆詞の混じった自己会話をキッチンでも階段でも行っていて、頭を振ったり、肩をすくめたりして不機嫌であった。彼女は我々のスープに多くの塩を入れ、焼き肉を焦げ付かせていた。機会あるごとに彼女は窓の方を窺っていて、玄関の方へ駆けた。 — 幸い私はズボンのポケットに玄関の鍵を持っていて、それを取り出さなかった。三時頃私は直接、ディオゲネス・ラエリティウスの注釈並びに若干の必要な衣類や三枚の学士の最後の清潔なシャツを取りに行き、そして乗り物を、私の家の庭の裏木戸に予約した。この乗り物で反乱の学士は、公爵の司法官房の復讐の腕から逃れる算段であった。四時頃私は、私の外套の中に隠した同僚を待機している輸送車に案内した。そして学士が私の腕にすぎた時ほどに、駆け落ちしようとして憧れている愛人がこれほど震えて彼女の恋人の腕にすぎたことはなかったであろう。

「この来客を頼んだぞ、クリシャン」と私は御者に語った、「私が貴殿に約束したことを忘れないでくれ」。

クリシャンは了解していた。彼は両目で抜け目なく瞬きをした。 — 学士はこれを最後に私の左の肩甲骨で嗚咽した。

「出発、勇気を出して、同僚殿」と私は叫んだ、「ポエティウスは携帯していますよね、ジンの瓶は?!」

「すべてあります」と先の臨時教師は哀れっぽく言った。

「では乗って下さい、ニコライ殿に私から呉々もよろしくお伝え願います。その代わりホルンボルステル嬢の件で貴殿に何かお伝えすることがありましたら、忠実に尽くしましょう」。

まっしぐらに、アルプス学士はぐらぐらする馬車に素早く発作的に飛び込んだ。

クリシャンは駄馬に鞭を当て、ガタガタと馬車が動き出し、庭の石壁の角を曲がってゴロゴロ進んで行った。 —

いや、その悲しげな表情の青年よ、

我が松明を泣きながら、吹き消せ。

悲劇の舞台上、最も美しい場面するとき、

カーテンがするすると落ちて来るように、

影どもは移ろう、 — そして更に黙してこの家は耳を澄ます。 —

[シラー、詩、ラウラに寄すメランコリー、1781]

[おお、悲しみの表情を浮かべた守護天使よ、

私の命の松明を涙しつつ消せ！

悲劇の幕が最も素晴らしい場面で降りるように、

幻想は消え去り、

－それからなお黙って

劇場中の観客は聞き耳を立てている－ (NA.1,115)、藤田美代子訳、ネット検索]

転がって行く馬車の最後の鈍い物音が遠方で聞こえなくなるまで、私は耳を澄ましていた。それからこのメランコリーから別な音色、別な物音で私は目覚めた。

ビュッツォーの人民はグレーヴェデュンケルの住まいと抵当家畜小屋を襲っていた。私は、勿論協道を通って、町長の許まで忍び戻った。

私は今や、不幸に見舞われた学士から別れて気楽になっていたもので、快活に心地良く事柄の推移を見守ることが出来た。しかしミケランジェロの絵筆を手にしてのみ、私はこの出来事を描写し得たであろう。老いた父祖ホメロスの石筆を手にしてのみ、神々と人間達とのこの戦いを立派に描き得たことであろう。

グレーヴェデュンケルの窓ガラスに最初の石を投じたのは誰であったか。格子付き牢獄から最初にじたばたし、喚く鷺鳥を運んで来たのは誰であったか。

後に被告人達の弁護を引き受けたフォン・ラーヴェン法律顧問官殿とシュヴェリーンのいとも称えられる公爵司法官房は、私ことJ.W.アイリング、ビュッツォーの歴史記述者同様、ほとんどこのことを知り得なかった。

グレーヴェデュンケルが称えられる町長職の命令で、英雄のように戦っても、何の甲斐があろう。彼はすさまじい殴打を受けて、自らと家族とをようやく苦心の末、命からがら救い出せた。

すでにケーノボスコス[鷺鳥番]自体が次の諸世紀、金属で鑄造されて保存されるに値する姿であった。シェルペルツ親方については、本当にこう言われるかもしれない。誰がヘラクレスを非難しよう、と。マルテンスやハーゼ、シュミット、ホルツリヒター、コンペール、ヤーコプス、ハルニッシュ、ナルベ、大工の親方、エーベル、ツェーベル、ホイヤー、それにローデといった兄弟諸兄は強力であった。しかし彼らの女房達も度胸と勇敢さの点で引けを取るものでなかった。

町の財務課の最も深い地下室にまで人民の叫び声は響いて、そこにうずくまっていた財務官ブレッカーの震える身体に、絶えず新たな死神の戦慄が走っていた。首席牧師クラファウティウスは自らの小部屋に座っていた。不安に慄きながら、彼はその魂の奥底で歌っていた。「私の今際の時が間近であれば、－」、そしてかなり慰められたことに、首席夫人からかなり辛辣な、嫌味たっぷりの慣用句を聞き取ることが出来た。町当局の賢明な全員が死の不安を感じていて、ただ一人私の実直な友にして恩人のハーネ博士町長殿のみが、憤然となっていた。財務官が一番底の地下室にうずくまっていたとすれば、私が出会った町長は高く上の屋根裏部屋にいた。彼は憤怒の形相でシュヴェリーンからの街道を降り始めた雪の中、見つめていて、私に割く時間はなかった。

発火信号のように彼の卒中者的に赤い顔が天窓から輝いていた。そしてフォン・シュラ

プップ少尉殿は、彼がその下士官、ラッパ兵、そして八名の軽騎兵と一緒に道に迷ったとしても、それをまことに良く信号そのものと受け取ることが出来たであろう。

しかし武装した一行と少尉殿は、まだビュッツォーまで三十分の所、一軒の居酒屋の前で止まり、自らの使命である偉大で危険な行動のために、英気を養い、より豪胆になろうとした。度々、町長は天窓の蓋に駆けよって、鼻を鋭い風と吹雪の中に突きだしたが、切望して待ち望んでいる救援は何も見えず、聞こえなかった。

「いや、何ということだ、お上連中は私を屋根窓に見殺しにしている」と町長は、古い木箱に座って、呻いた。「卑怯であろう、惨めであろう。何と奴等は吠えていることか。

ー ブレッカーを奴等はきっと吊すことだろう。...いや、呪わしい、忌まわしい鷺鳥だ。これでは未来永劫、鷺鳥を味わい楽しもうという気は起こらないだろう。校長殿、お上連中は私を見殺しにしている、見棄てている。私を苦境に放置している。お上連中は一箱に一ダースと揃っている。しかし余りにピカピカで、高価で、この雪の中騎行に耐えられないのだ。お上連中は奴等を追い出さない、ー 何もそのことを考えていない。主よ、私はもう首つりになって、静かにぶら下がっていたい。いや、ビュッツォーよ、ビュッツォー、こんなビュッツォーを誰が考えたろうか」。

再び町長は天窓から覗いた。しかし今や全く暗く、彼は激しく蓋を投げ付け閉めて、呪いを発した。それで鼠どもは隠れ穴に駆け戻り、埃が舞い上がり、天井から石灰モルタルが落下した。

同じ瞬間、情けない叫び声が上がった、「町長殿、町長殿、皆が貴殿を求めています」。この家のより低い位置の部屋からで、執政官[町長]は、私に支えられて下りて行った。

家の玄関では、不安げに参集している家の従者達の中に、直立不動、真っ直ぐに、生意気にシェルベルツの娘が立っていて、この町の長に嘲笑的な膝屈めの礼をして、言った。

「町長殿、私は、私の主人、ホルンボルステル嬢に、ご挨拶と共に丁重にこう尋ねるよう送り出されました。この見世物はまだどれほど続くのでしょうか。貴殿はこれにただ手をこまねいていて、何もなさらぬおつもりですか、と。貴殿がせめて寄る辺ない乙女達や産褥の女達の不安や身悶えに思いやりがあるのであれば、そのことをせめて表明して頂きたい。私の令嬢、それにテュートゲ嬢、それにコッテルマン嬢は、鷺鳥並びに不安と困窮の件でお上政府に対し請願書を出す所存です。それで恵み深いご賢察を賜り、貴殿並びに貴殿のいとも立派な町当局を優柔不断の臆病兎として公爵閣下の鼻先へ提出致す所存です。良い晩を」。

「パープストよ、私を支えてくれ」と町長は瀕死の声で彼の次席リクトル[従者]に言った、「校長殿、私は気を失いそうだ」。

この瞬間トランペットがまず吹かれた、そしてシュラプップ少尉殿とその八名の軽騎兵が続いて、ビュッツォーに入って来た。そして五分後にはこの町は墓場の静けさに覆われた。天上の軍勢のすべてのラッパ手達もこれ以上の偉大な効果を上げることは出来なかったであろう。

第十三章

この章は著者のある手紙のコピーを含み、ビュッツォーの鷺鳥の珍しい歴史物語が終わる。

ビュッツォーにて、一七九五年五月三十日

いとも高貴なる碩学の学士殿、特別に尊敬すべき同僚殿にして親愛なる友よ。

先月の十五日付けの貴殿の書状は正しく私の手許に届いて、私は格別に喜びを感じました。貴殿は相変わらずベルリンで、栄光のフリードリヒ・ヴィルヘルム二世の治世と庇護の下、ご清栄であられ、貴殿の校正と文芸作品により、全力を尽くして、幾分苦境を乗り越えていらっしゃる事が察せられました。貴殿が私から前借りしていた二十ターラーをかくも早く返金なされた点、貴殿の安定した状況の更なる証拠として喜ばしく存じます。今後はそのことよりももっと詳しくその地での学的世界について教えて頂きとう存じます。日に日に、我らのキンメル人の夜にはその点についての噂は流入して来ません。学士殿、貴殿にのみ打ち明けますが、貴殿がいなくなって、大変寂しい。貴殿の逃走以来、こちらビュッツォーははなはだ様変わりしました。しかし余り改善されていません。偉大な鷺鳥革命は如何に収束したか、すでに貴殿は個々にご存じでしょう。しかし貴殿にここで全体的にこの件を反復してみます。貴殿が貴殿の子供達やその末裔に後々教示されるためのためです。貴殿の友人、ヴュプケ博士は、そのベッドで聴取されました。彼の受難の瘤の傷は今回彼の役に立ちました。この瘤が十二月二十八日のアリバイ証明として役に立ったのです。これに先立つ陰謀や教唆、扇動に関しては、博士殿は全く巧妙に嘘を貫き通しました。今日のヴュプケ博士ほどに、以前の教理問答受講者の中で、かくも潔白な衣装を着て、誇らしく歩き回っている者はいません。他の者達に関しては、彼らの鷺鳥は力尽くで家に持ち帰られまして、グレーヴェデュンケルの家で全体無事であったものは、テーブルや鍋、長椅子、椅子の何一つなく、それで彼らは勿論、フォン・ラーヴェン法律顧問と一緒にシュヴェリーンの公爵閣下の司法官房の前に立つことになり、ソフォクレスの『アンティゴネー』を引用することになりました。

我らは我らの手に熱い鉄を握って、
燃える炎の中をくぐり、
神々にかく誓いをなす覚悟がある、
即ち、それを冒したのは我々自身ではなく、
我らは犯人も扇動者も匿っていない、と。

しかしシュヴェリーンの公爵閣下の司法官房は、法律顧問官にもソフォクレスにも何の遠慮もなく、仕立屋シュミットに半年間の監獄禁固という寛大な処置を下し、馬具屋のシェルペルツ、靴屋のハーゼ、御者のマルテンスに、四週間の水とパンの刑務所暮らし、ただし「隔日に温かい食事を許す」と残酷に宣告し、最後に七名の他の町民に二週間の刑務所暮らしを決定しようとしてしました。果たしてこの十一名の有罪者がかなりの期間、刑務所暮らしとなったのです。しかし次第にますます明確に、いとも尊い当局への風当たりが強くなりました。すると弁護人は、ビュッツォーの当局を、何とそれどころか中傷罪の法律に基づいて訴えまして、当局をいかかわしい裁判官として、一方に偏向していると主張しました。そこで公爵閣下の至高の特別命令で、公文書はいとも学識豊かな、いとも崇高なハレ大学法学部へ移送されました。するとこの法学部は、証拠品不十分、故に監獄や刑務所に収監無用、ただし被告人達は裁判と要した弁護の費用を払うべしという処分を下しま

した。このことは、ここだけの話し、私にとって、いとも称えられるこの学部のみことに喜ばしく思える点でした。

従ってビュッツォーの元老院[当局]は応分であったのであり、同様にここだけの話し、今回は全くその功績に相応しく、貧乏くじを引いたのです。哀れな罪人の各人が、自分の温かい家庭に戻りました。鷺鳥は勝利して、町の路地を再び占拠することになったのです。グレーヴェデュンケルはもはや、藪から突然出て来るツィーテン[名将、1699-1786]のように、角から飛び出て、悲痛な声を上げる無垢の鷺鳥の首を押さえて、容赦なく牢に引きずって行く権利を失ってしまいました。

我らの哀れな町長ハーネは、全くこの大いなる苛立ちと、追加された新たな興奮のために、本当に卒中に見舞われました。我々は一週間前に厳かに墓まで彼の最後の見送りを行いました。

ホルンボルステル嬢は彼のことが良心にかかっています。貴殿アルブス学士は、私が人類の名誉のために想定していますように、参集している元老院の前で、女達を「必要な厄災」と呼んだ監査官メテルス・ヌミディクスの見解[紀元前102]に必ずしも全面的に賛同しないでしょうから、貴殿にもっと詳しいことをお知らせします。

シュラププ少尉殿は我らの亡き友人、町長殿の仲介で、正当にその軍の大部分と共に、ホルンボルステル嬢の家に宿営して、自分の大きな犬と一緒に最良の漆喰部屋を得ました。学士殿貴殿はザハリッサをご存じです。これ以上更に付言する必要はないでしょう。

しかし貴殿は少尉殿をご存じではない。それで貴殿に出来るだけ、彼のことを描写してみましよう。貴殿が鏡を有していたら、その前に立って、貴殿の身長に1.5シュー[1シューは約30センチ]加えてみて、貴殿の、ここだけの話し、若干貧相な容貌に、綺麗なサフラン色[鮮黄色]を塗ってみられ、恐るべき長さの錆びた灰色の口髭を鼻の下に生やしてみ、この鼻は1.5ツォル[1ツォル、約3センチ]分、下に垂れていて、若干赤っぽく、
— アウローラの化粧瓶からの赤みで — 色づけされたい。硫黄色のズボン姿で、軽騎兵の上着、それに永遠に続く腹痛を想像されたい、これは軽い足痛風のびっこを伴っているものです。するとこの兵士が生き生きと実物通りに貴殿の眼前に立つこととなります。更に可能ならば、軽いアルコール性の匂いを添加し、このマルス神の勇壮な息子の側に、邪険に憤然としている[内側に]棘の付いた首輪のデンマーク産ブルドッグを想像されたら、貴殿はホドヴィエツィキー殿[1726-1801]といった人物に肖像画を依頼する必要はなくなります。

同僚殿、この件はとても悲しい結果が付随していたのでなければ、貴殿にこう述べて、立派に祝意とすることが出来たであらうでしょう。ビュッツォーの現町長、ハーネ博士、大いに哀悼された我が友が、突然他界した日の前日、ユーリア・ホルンボルステル嬢は博士と町に対して、
— フォン・シュラププ少尉殿との婚約を通知させたのです。

再度しっかりと握ったビュッツォーの鷺鳥ペンで、私が貴殿に更にただお伝えできますことは、少尉殿はその俸給で暮らしていますが、今や昂然たる秘密に従えば、ギュストロー近郊の荘園ボルスツヴィシュハウゼンを購入する意志があるとのこと。同僚殿、更に貴殿にはこう請け合えるとも存じます、貴殿もヴュプケ博士も結婚式には招待されない、と。それで私はこの際、マクシミリアヌス皇帝の素敵な歴史物語を思い浮かべました。こ

の皇帝は、一人のスペイン人騎士と、クライン国からのラウバー騎士とが、自分の庶出の娘に求婚したとき、二人に二つの大きな袋を渡して、相手の男をこの袋に入れて来た者に自分の美しい令嬢を与えると約束したのです。昔、当地では、クライン人がじたばたするスペイン人を袋に入れて来て、このレディーと一緒に去って行きました。しかしここビュッツォーでは、貴殿、アルプス同僚とヴェプケ博士は互いに相手を袋に入れて、フォン・シュラププ騎士が花嫁を掠って行きました。三面三体女神のヘカテーがこの騎士を祝福せんことを祈念します。ヘカテーは、ヘシオドスによれば、学士殿、貴殿もご承知のように、兵士達の女神であり、町長達の女神であり、弁護士達の女神であります、つまり競争者達の女神なのです。

しかし貴殿にホルンボルステル嬢とビュッツォーの町について更に何を書くことがあります。貴殿は実際今やプロイセンのフリードリヒ大王式時計仕掛けの世界、啓蒙されたベルリンにいらして、全く別の鳥の鳴き声を耳にしている、全く別の歯車装置の軋み音を聞いています。更に首席牧師フォン・クラファウティウス殿は貴殿にとって何の用があります。貴殿は毎日フォン・ヴェルナー氏[反啓蒙主義者]の神秘的ボルン亭へ貴殿の甕を持参して行き、汲み上げることが出来るのですから。貴殿は現在のめざましい職にあって、日々を楽しみたい。しかし我々のことをすっかり忘れないでください。私の内密の願いはご存じでしょう。それで少しばかりもっとフリードリヒ大王の王国について、そしてその今日の状態についてお知らせ頂きたい。「成熟シナイウチニ腐敗」[1785/86]とはミラボー侯爵[伯爵1749-91]の意地悪な言葉です。— これについて貴殿のご意見を伺いたいものです。同僚殿、これには大変感謝致します。そしてまたビュッツォーのことで、何か必要なことがございましたら、いつでも、変わらず、ご用命に応じます。

それではご機嫌麗しゅうお過ごし下さい。そしてポエティウスの本はもはや必要ないのであれば、折を見て、ご返却下さい。ポエティウスはやはり、薔薇十字団員クリゾフィロン、通称、ヨーハン・クリストス・フォン・ヴェルナー男爵[1732-1800]とは別な男、枢密顧問官であります。

素朴なドイツ人の『ゼバルドゥス・ノートハンカー』[1773-76]の著者[Friedrich Nicolai]に呉々もよろしく。彼に対し、一冊のこの世に出たばかりの『太った男の話』[1794]を私のために注文して頂きたく存じます。

以上です、同僚殿。

いつでも、いかなるときでも
貴殿の忠実なる僕にして友、
J.W.アイリング
先のビュッツォーの校長

飢餓牧師

(Der Hungerpastor 1864)

三卷の長編小説

私は憎み合うよりは、
愛し合うために、生まれています。

ソフォクレス[アンティゴネーの言葉]

第一卷

第一章

この素敵な本の中で、私は飢餓について取り上げるつもりである。飢餓が意味するもの、飢餓の欲すること、そして飢餓が出来ることについてである。どのような具合に、飢餓が一身にして、世界のシヴァ神にしてヴィシュヌ神、つまり破壊者にして保存者であるのか、勿論私は説明することができない。というのはこれは歴史が示している事柄であるからである。しかし私は、個々人の中で、飢餓がいかに破壊的に、また保存的に働くか、そして世の末まで働くことになるか、描写することができる。

飢餓に対し、つまり純然たる真実の飢餓の、神聖な諸力に対し、私はこれらの頁を捧げる。これらの頁は正当にも飢餓に属しており、この正当さは結末で完全に明らかになるであろうと期待している。今はこう確言して、私はこれ以上序言を綴ることを止める。この序言は読者の情緒や、感興、刺激にほとんど寄与するものではあるまい。そして私は、私の物語を同時代、後世に対しても、また自分自身や、物語の経過の中で通り過ぎて行く偉大な生起、存在、消滅の、つまり無限なる生成の影絵世界のすべてに対しても、果てしない好意を抱いて開始する。この生成は世界の発展と呼ばれるもので、これは勿論、この本よりも少しばかり面白く豊かなものであるが、しかしこの生成は、この本のように三巻に分かれていて、それぞれ納得の行く結論に至るものではない。

「やあ、少年が出て来たぞ。やっど、 — やっど得られた」と私の主人公の父親は叫んで、長い、安堵の呼吸をした。長い間、徒労の願いを抱いていて、多くの苦労、心労に耐えてきて、ようやく無事に、一つの幸いなる目標に達した男の仕草であった。賢い、輝く目をして、彼はさえない、みすぼらしい一片の人間様を見下ろした。これは産婆が彼の腕の中に置いたもので、丁度仕事仕舞いの鐘が鳴った。この男の痩せた頬に一粒の涙が浮かんだ。鋭く、尖った、賢い、父親らしい鼻がますます深く、新生児の取るに足りぬ、ほとんど見分けがたい小さな鼻に落ちて行った。そして父親の鼻はまた突然一気に持ち上がって、かくも自分を感動させた善良なやり手の女性に対し問い質した。

「頼りの産婆さん、ティーブス夫人よ、本当に、本当に男の子かい。間違いないと、 — 本当に、本当にそうだと、もう一度言ってくれ」。

これまで自負して、微笑しながら頭を頷かせていた産婆が、父親と息子の最初の懇ろな挨拶を見守っていたが、今や同様に自分の鼻を咄嗟に持ち上げて、両腕を独特の仕草で動かして、これまで自分の周りに漂っていたすべての好意と満足の精霊達を追い払い、そして嘲笑と軽視、侮辱された自負心の調子で語った。

「ウンヴィルシュ親方、阿呆じゃないの。 — 壁に自分の姿を描きなさい。... 男の子かって。こんなに年配で、分別ある家長の人間がそんなことを言うかしらね。... 男の子かって。ウンヴィルシュ親方、貴方は直に短靴と長靴の区別も出来なくなるのじゃないの。神聖な贈り物も遅すぎたら、何と厄介なものか分かるわね。貴方が抱いているのは、男の子じゃないかね。本当に男の子、真っ当な正しい男の子じゃないかね。老いぼれ殿が哀れな子を腕に抱いているのでなければ、こんなつまらない、阿呆な質問にはビンタを食らわすところです。男の子じゃないか。勿論男の子です、真っ黒靴糸殿、 — 確かにに

番重い子じゃないけど、しかし正真正銘男の子。どうして男の子じゃないと言わっしやる。また海を越えて途上にあるのは、ボナパルトでしょうもん。ナポーリオンでしょうもん。そして今日と明日の間には、戦争と取っ組み合いがありましようもん。男の子は入用で、今の祝福され、ぶん殴られた時代には、女の子よりも男の子がもっと世間では重宝され、女の子一人に男の子三人の割り合いで生まれてきます。それなのに、貴方は、旦那さん、かくも重みがあって気転の利く私にそんな無用な質問をしようとなさっている。ウンヴィルシュの旦那さん、壁に自分の姿を描いて、その下に私は阿呆とサインなさい。その男の子を寄越しなさい。貴方にその少年を任せておけません。とっとと奥さんの許へ行きなさい。一 結局また奥さんに、一 男の子かっってもう一度聞くのでしょう」。

無造作にその襦袢の子供は、軽視され打ちのめされた父親の両腕から奪われ、アントン・ウンヴィルシュ親方は、もう一度呼吸をした後、彼の妻の部屋へビッコを引きながら行った。仕事仕舞いの鐘は相変わらず鳴っていた。しかし我々は両夫妻に対しても、鐘に対しても、邪魔をしないことにしよう。一 二人は思いの丈を話し、鳴らせばいい。誰もそれに口を挿んで呼ぶ必要はない。

貧乏人と金持ちはこの世の中で違った風に暮らしている。しかし幸運の太陽がその小屋、家屋、宮殿に照り注ぐとき、太陽は全く同じ光線で、木製のベンチも、ビロード張りの安楽椅子も、ペンキの壁も、金鍍金張りの壁も照らし出す。一人の賢しらの哲学的頭よりも多くの者が、苦楽に関しては、両者の側で、しばしば、とてもしばしば、異常にしばしば考えられているほどには、金持ちと貧乏人の間の違いはさほど大きなものではないと見聞してきたと主張するであろう。それは確定しないままにしておこう。我々は、この丸い、両極で扁平にされた火の球では、笑いは独占的なものではなく、涙も苦役[役権]ではないということで満足することにしよう。この球に我々は我々の意志なくして生まれ、我々の意志とは関係なく去るのである。生誕と逝去の間のこの期間にはなほ辛い思いをした後に。

貧しい人々の家に、今や太陽が現れた。幸運がその頭を低いドアの下に曲げて、微笑しながら入って来て、両手を率直に挨拶のために差し出した。両親、つまり靴屋のウンヴィルシュとその妻の許では、息子の誕生で、はなはだ喜びが見られた。両親はそのことを長く待ちわびていて、ほとんどその希望をすべて放棄しかねないところであった。

その息子が今ややって来たのである。仕事仕舞いの一時間前にやって来た。クレッペル通りの者はすべてこの出来事を承知していた。産婦の兄であるニコラウス・グリュエネバウム親方に対してさえも、この町の反対側のかなり端に住んでいたが、この喜ばしい知らせが届けられた。笑顔の靴屋の少年が、もっと早く走れるように、その上履きを腋に持って、この知らせをもたらし、息も吐かずに親方のまだ丈夫な耳に叫び込み、それでこの善良な男は五分間実際よりもはるかに頓馬な風に見えることになった。しかしその彼も今やすでにクレッペル通りに向かう途上にあつて、彼は市民として、また家持ちの定住の親方として、スリッパを腋に抱えるわけに行かず、その結果、スリッパは片一方、不忠にも通りの端に置き去りにされ、この片一方はその人生を自らの手でというか、むしろ自らの素足で自活して始めることになった。

伯父グリュエネバウムがその義弟の家に着くと、そこには多くの善意の近隣女性が、助言や意見を言い集まっていて、伯父は老いた独身男という情けない身の上で、紛

れもなく女嫌いであり、全く余計者に見えざるを得なかった。実際そのような風に見えていて、ほとんど引き返すところであったが、この「喧噪」の中、惨めに置き去りにされた義弟、職人仲間が思い出され、自分の感情を抑えたのであった。ぶつぶつ文句を言いながら、彼は女将連中の中に分け入り、ようやく正しく義弟を見つけ出した。その彼は大きく羨ましくもない、輝かしくもない居場所にいた。

人々はこの哀れな男を完全に放置していた。産婦の部屋から彼をティーンズ夫人が締めだしていた。近隣女性達の部屋では、彼は完全に浮き上がっていた。グリューネバウム旦那がようやく居心地悪く片隅にいる彼を見いだしたが、そこでは彼は縮こまって一つの床几に座り、ただ自分の脚に体を擦り寄せて来る家の猫を見守っていた。しかし彼の目にはまだ相変わらず、別世界由来に見えるかの輝きがあった。ウンヴィルシュ親方は女達の囁き声やお喋りには耳を傾けず、女達の騒ぎを何一つ見ていなかった。彼は義兄をも見ていなかった。するとこの義兄が彼の肩を掴んで、彼をかなり乱暴なやり方で正気に戻した。

「アントン、意識は確かであるという証拠を見せてくれ」とグリューネバウム親方はぶつくさ言った。「ちゃんとした男となって、女どもを掃き出せ。皆だ、一人を除いて、一向こうのシュロッターベックお婆さんは除く。悪魔には、奇数も偶数も一切関係ないが、あのお婆さんはその中でただ一つの例外で、少なくとも一時間に一回は人間らしい言い方をする。そうする気がないのか。そう出来ないのか。そうしちやいかんのか。じゃ、構わん、私の背の上着を掴んでおれ。この混乱の中からおまえさんを連れ出そう。階段を上がって行くぞ。後は放っておけ。男の子が生まれたんだろう。良かったな。またしても無駄骨だったかと思っていたぞ」。

子どもの中を脇の方へと両職人は進んで行き、苦勞して廊下に達し、狭く、軋む階段を上がって、家の上階に向かった。そこはシュロッターベックお婆さんが、一居間と一寝室、一キッチンを借りていた。そんなわけで、ウンヴィルシュ一家に残っているのは、ただ一部屋だけで、ここに雑多な物が色々一杯詰め込まれていて、二人の名誉あるギルドの同志が心情を吐露するに必要な場はほとんど残っていなかった。木箱やケース、薬草の束、トウモロコシの穂軸、革の束、タマネギの束、ハム、ソーセージ、無数のガラクタがここではまことに天才的器用さで、交互に、上下、前後に押し詰められ、掛けられ、配置され、投げ込まれていた。義兄のグリューネバウムがここで二番目のスリッパを無くしたのも不思議ではない。

しかし最後の陽光が低い両窓から部屋に射し込んで来た。近隣女性とティーンズ夫人の脅威はなくなった。二つの木箱に両親方は向かい合って腰掛け、両手を差し出して、たっぷりと五分間、揺すっていた。

「アントン、ご同慶の至り、お祝い申し上げます」。

「忝い、ニコラウス」とアントン・ウンヴィルシュが言った。

「めでたい、男の子だ。めでたい、万歳、一もう一度」と喉一杯にグリューネバウム親方が叫んだが、しかし止めた。義弟が口に手を当てていた。

「後生だからそんな大声はやめてくれ、ニコラス。妻は丁度ここ我らの下にいる。きっと厄介な女どもと一緒にだ」。

拳をグリューネバウムはその膝に落とした。

「その通り厄介だ、御同輩。悪魔には、奇数も偶数も関係ねえもん。しかし、御年配、打ち解けた話しをしよう。どんな気分だい。全く上の空か。ほほー。そのヒキガエルどんな風体だ。五体満足か。鼻、口、腕、脚はどうだ。何も傷はないか。すべて異常なしか。紐と軸、上辺革、足の甲、踵、それに足裏はどうだ。うまくピッチが塗られ、爪があり、小綺麗に磨かれているか」。

「すべて、然るべくだ、御同輩」と幸せな父親は叫んだ。両手を互いに揉み合わせていた。「立派な男の子だ。神様のお恵みがあれかし。ニクラスよ、幾千ものことをおまえさんには言いたい。しかし喉が詰まって言えない。すべて目が回る思いだ、一」。

「万事成り行きに任せばいい。猫は屋根から投げ飛ばされても、それからおもむろに正気になるものだ」とグリュエネバウム義兄は言った、「妻は順調なんだろう」。

「有り難いことだ。ヒロインのように振る舞って来た。皇帝夫人もこれには及ばないだろう」。

「あれはグリュエネバウムの女だからな」とニコラウスは自負心と共に言った、「グリュエネバウムの者どもは、いざとなれば歯を食いしばるのだ。少年には一体どんな名前を付けるつもりだ、アントン」。

瘦せた手を新生児の父親は高く、皺の多い額に滑らせて、数瞬、窓から遠くを凝視した。それから彼は言った。

「三人の職人仲間になんで洗礼名を付けることにしよう。ニュルンベルクの詩人[ハンス・ザックス、1494-1576]同様、ヨハネスの名と、ゲルリッツのいとも尊い哲学者[ヤーコプ・ベーム、1575-1624]同様、ヤーコプの名が付けられ、この二つの名前が両翼となって、彼はそれで大地から青空へ飛翔し、一片の明かりを得ることになるろう。そして三番目にはニコラウスと名付けるつもりだ。自分がこの地上では誠実な友にして保護者である者を有しているのだと安心できるように。私がもはや存命でなくなっても、頼れる人がいるのだとな」。

「それは意味も分別もある頭と、太い無意味な尻尾を持った言い草と呼ぶしかない。それらの名を与えるがいい。三人の連中は皆、名誉な事と思うであろう。しかし古くさい、馬鹿げた死の妄念はうっちゃってしまえ。おまえさんは肥えてもいないし、一頭の雄牛をただの拳で仕留めてしまう剛腕でもない。しかしまだ優に何年も黒いピッチの縫い糸を引けると思うぞ。老いぼれの、瞑想屋の本の虫殿よ」。

ウンヴィルシュ親方は頭を振って、話しを別な方向へ持って行き、両義兄弟は更に色々なことを話し合ったが、とうとうガラクタ小屋は完全な薄暗がりとなった。

誰かがドアをノックして、グリュエネバウム親方は叫んだ。

「誰だい。女どもは入れないぞ」。

「私よ」とある声がした。

「誰だ」。

「あたし」。

「シュロッターベックおばさんだな」とウンヴィルシュは言った。「門を押し戻せばいい。ここには十分長く座っていたから、そろそろまた女に会っていいかな」。

ぶつぶつ言いながら義兄は従った。おばさんがそのランプで小部屋を照らした。

「思った通り、二人座っている。二人の旦那さん、お出でなさい。近隣女将は去り

ました。這い出て来なさい。ウンヴィルシュ親方、奥さんのことでしょう。親切な助言を受け入れて、眠っています。奥さんの邪魔をしちゃいけません。しかしまだニュースを知らないでしょう。神様に感謝です。露地の向こう、ユダヤ人のフロイデンシュタイン家でも今日この家と同じくお産でした。でも全く同じではなかった。子供は生まれて、一同同じく男の子だけど、でも花御寮のフロイデンシュタインは亡くなった。向こうは大変悲嘆に暮れています。ウンヴィルシュ親方、主なる神を称えることです。でも、貴方は、グリュネバウム親方、さっさと帰宅なさい。まあ、ウンヴィルシュさん、そんなに狼狽することはありません。死神は、神様の言い付けで、侵入するか、あるいは通り過ぎるものです。私は車裂きの刑に遭った思い。ベッドへ忍び込むつもりです。お休み、御同輩」。

シュロッターベックおばさんは自分のドアの背後に消えた。両親方はつま先立ちで階段をこっそり下りて、グリュネバウム伯父はこの夕べ、馴染みの居酒屋赤雄山羊亭で、政治や町内の事案や他の案件について、大言壮語することが普段に比べはるかに少なかった。ウンヴィルシュ親方は一晩中、片目も閉ざさず、横たわっていた。新生児は力強く泣いた。それでこの常ならぬ音声で、父親は目覚めたまま、渦巻く一軍の希望と憂慮の想念に付きまとわれ、その心と脳の中が、荒々しい追い猟に見舞われたのも不思議ではない。

—

立派な説教をするのは簡単ではない。しかしまた立派な編上げ靴を仕上げるのも容易ではない。この両者には器用さが、沢山の器用さが必要である。やっつけ屋とか無能者は、周りの人間のために、これらの仕事には近寄らないのがむしろ至善である。私個人としては、靴職人に対し並々ならぬ偏愛を抱いている。祝典パレードのときの靴屋総体に対しても、個々人としての特性に対してもそうである。これは、民衆の言うように、「物思いに耽る国民」であって、このギルド構成員ほどにかくも立派で奇妙な独自性を発揮する職人は他にない。低い仕事机に、低い床几、小さなオイル・ランプの明かりを捉え、またより明るく反射する水の詰まったガラス玉、革とピッチの鋭い臭い、これらは必然的に人間の性質に持続的影響を及ぼすに違いない。そしてその影響はやはり甚大である。一体何という独自の変人をこの立派な手職は生み出したことか。 — 「珍しい靴屋」について一つの図書館全体に匹敵する量を書き上げることができ、しかもその素材が尽きることもないであろう。漂うガラス玉を通じて、仕事机に落ちて来る明かりは、空想的精霊達の世界である。これは瞑想的仕事の間、想像力を不可思議な形姿や諸象で満たし、想念に他のランプでは、特許があろうとなかろうと、貸与出来ない色合いを添える。多種多様な韻、珍しいメルヘン、お伽噺、愉快で悲しい世間話が思い付かれ、これらが不器用な手で紙にまとめられると、近隣の人々は珍しがり、黄昏時、小声でこれらを夫がハミングすると、女房は笑ったり、不安がったりする。あるいはまた、更にもっと深く、沈思し始め、「やむなく」我々は「人生の端緒を思い出さざるを得なく」[ベーメ、『人間の三層の生活』、第1章、1620]なるであろう。ますます深く、我々は照らし出す玉を見守る。そしてこのガラスの中に、すべての形象、生物を抱えた宇宙を見ることになる。すべての空の門を通過して、我々は自由に抜け出て、すべての星々や四大を備えた天を知る。至高の予感が我々に思い浮かび、我々がそれを書き留めると以下の通りになるが、しかしリヒター首席牧師[ベーメの敵]が説教壇から我々に対し平民をけしかけて、我々を牢獄に連行する筈のゲルリッツの捕吏が、ドアの前に立っていたものである。ドアの中での[ベーメの教えに曰く]。

「というのは、永遠はただ一つの意志を有するというのが、永遠の正義であり、永遠に存続することであるからである。永遠が意志を二つ有すれば、一方が片方を壊して、争いとなろう。永遠は大いに力強く、奇蹟に満ちている。しかしその生命は単にただ愛であり、この愛から明かりと威厳が生ずる。天の被造物は皆一つの意志を有する。この意志は神の心へ向けられていて、神の精神へ向かう。つまり多分に多様性の中心に、成長と盛花の中に、向かう。しかし神の精神は、万物の生命であり、自然の中心は、本性、威厳、力を付与する。つまり神聖な精神は指導者である」[『人間の三層の生活』、第18章]。

我々は輝かしい玉に、多くのものを見る。劣等なランプはこの玉を通じて、哀れな光を放ち、それで我々は自分が目にしているものを紙片にほとんど書き付けられない。それでも我々は原稿を完成して、こう書き付けることだろう。

「神慮の啓示により、ヤーコプ・ベーム記述。他にはテウトニクスとも呼ばれる者である」。

靴屋達に含むところがあって、彼らの個々人としての、また全体としての卓越さに対して、然るべく評価を呈上しない者は、私とは無縁の者である。それどころか靴屋達のしばしば奇妙な表明に関し、また彼らの曲がった脚や、彼らの固く、黒い手足、彼らの巫山戯た鼻、彼らの手入れされていない束髪の鬘について鼻であしらい、小馬鹿にする者、これは私が見たくもない人物である。これが消えても、再救出のために私は一文も出さない。私は靴屋達を評価し、敬愛している。とりわけ私は実直な親方、アントン・ウンヴィルシュ、このハンス・ヤーコプ・ニコラウス・ウンヴィルシュの父親を高く評価する。彼は残念ながら、かの仕事仕舞いの夕べの後、つまり長く待望された息子が生まれた後、即刻自ら永久に仕事仕舞いをしたけれども、しかし彼の生活ぶりは、息子の生活ぶりと多くの糸が関連していて、我々は彼の在るが儘の描写を省くわけに行かない。この男は、すでに我々が承知しているように、肉体的にとても堅牢な足場に立っているのではなかった。しかし精神的には十分堅牢に立っていて、高く自分の上に聳えていると思われる幾多のものを受け入れていた。彼の秘匿された生存のすべての聖遺物から、彼は自分の等閑にされた教養の欠如を最善の力で取り戻そうと努めたことが偲ばれる。このことから、彼は知の欲求、多くの知の欲求を有していたことが分かる。彼は完全な正書法で記述する術を学んだことが一度もなかったけれども、しかし彼は詩人氣質であって、これはニュルンベルクの「鼠畏」[ハンス・ザックスの生家]出身の彼の有名な職人仲間と同様であった。そしてただ能う限り、読んだ。彼は自分が読むものを、大抵は理解していた。たとえ時に著者が忍び込ませたその意味を理解しなくても、彼は全く自分一人の発案になる全く別な意味を探り出したり、あるいは添加したりした。この意味理解には著者も時に大いに満足したかもしれない。彼は自分の手職を愛していて、少しも等閑にはしなかったけれども、しかしこれは彼にとって黄金の土台となるものではなく、彼は貧しい男のままであった。しかし彼にとって、彼の仕事は、黄金の夢想を伴うもので、このような夢想を提供できるような仕事はすべて、結構なものであり、幸せにするものである。アントン・ウンヴィルシュは世間を自分の靴屋の椅子から、丁度かつてのハンス・ザックスの眼差しとほとんど変わらず、そのように見ていた。しかし彼はそれほど有名にはならなかった。彼は、窮屈に、上品に記された原稿を残した。これをまず彼の未亡人は、その長持ちの底、自分の賛美歌の本や花嫁の額飾り、後に更に話題となるであろう黒い小箱の側に、さながら聖遺物のように保

管していた。聖遺物のように母親はそれを息子に渡した。息子はこれを自分の文庫の聖書とシェークスピアの間の名誉席に置いた。もっともこれは内容と詩学の点で、少しばかりこの両著作に遜色があった。

シュロッターベックお婆さんとグリュエネバウム義兄はこの原稿の实在について漠と予感していた。しかしこれについて本当に分かっていたのは、ただこの詩人の妻のみであった。夫人にとって、これはほとんど想像できない奇蹟的なものであった。「賛美歌の本」のように韻があるもので、それも自分の夫が作ったのである。これは近隣の者がこの世にもたらすすべてのものに勝るものであった。

息子にとって、この綴じ合わされた紙片は後に大事な遺産となり、永遠に薄暗い深みから高みへ、明かりと美しさへ上昇志向する民族精神の感動的印となった。

この靴屋職人ウンヴィルシュの無邪気で無形式な心情吐露は、自然な具合に、在るが儘の自然を称えていた。家や手職、世界史の個別的偉大な事実、主に轟きながら過ぎて行く解放戦争の行動や英雄を称えていた。すべてのこうした方面への、情緒的であったり、崇高であったりする想念を証していた。これにはわずかばかりの諧謔も混じっていたが、しかし大抵は熱情的なものを発現しており、また大抵周知の微笑を誘わざるを得ないものであった。実直なアントン親方は、多くの雷、稲妻、霰、大火、洪水を体験し、多くのフランス人、ライン同盟人、プロイセン人、オーストリア人が自分の家の前を通過して行く様を目撃していたので、時々彼も少しばかり雷を落としたり、稲光したり、殺害しようとしたのも不思議ではない。だからと言って、彼は隣人達と敵対することはなかった。というのは、彼は本性のまま、「良い奴」であり続けたからである。彼が亡くなったとき、妻のみが、義兄のグリュエネバウムとシュロッターベックお婆さんのみが悲しんだのではない。クレッペル通り全体が、良い男が去って行った、惜しい男であったと承知していて、そう言った。

彼は長いこと憧れて、一人息子の誕生を待っていた。しばしばこの息子を何にしたらいいか、何に出来るか思い描いた。認識の自分の熱心な努力のすべてをこの息子に傾注した。この息子は父親が達成出来なかったことを達成すべきで、そうしなければならない。アントン親方が人生行路で味わった千もの乗り越えられない障害で、将来のウンヴィルシュの行路は妨害されてはならない。息子は自由な行路を進んで欲しい。英知の門、教養の門が、人生の困窮、欠如により息子に閉ざされてはならない。

そのようにアントンは夢想して、結婚生活の一年が次々に経過した。一人娘が生まれ、その娘は生まれて間もなく亡くなった。それから再び長いこと何もなかった。それから、— それからやっとヨハネス・ヤーコプ・ニコラウス・ウンヴィルシュが生まれた。この息子の生誕は、すでに我々にとって先の頁への幾つかの素材となっており、この息子の後年の苦難、歓喜、冒険、旅程、要するにこの息子の運命は、この本の大部分を専有することになるであろう。

我々は義兄のグリュエネバウム伯父がそのスリッパを紛失するのを見たし、女どもの騒ぎを目撃し、耳にして、ティーブス夫人とシュロッターベックお婆さんと知り合いになった。— 最後に我々は両義兄弟、ウンヴィルシュとグリュエネバウムがガラクタ小屋に座っているのを見、多事多端の黄昏に薄暗がり忍び込むのを目にした。アントン親方は息子の生誕の後、更に一年生きた。それから肺炎で亡くなった。運命の成り行きは、

彼に対しても、幾多の他の者達と同様変わらなかった。運命は希望に関し、彼に一片の喜びを与え、その実現を拒んだ。希望はその翼で実現のはるか先を飛んでいた。

ヨハネスは彼の父親の臨終のとき、したたかに叫んだ。しかし父親を悼んでいなかった。しかしクリスティーネ夫人ははなはだ夫を悼み、長いことシュロッターベックおばさんの慰めの言葉を聞いても、賢明なニコラウス親方の哲学的格言を聞いても、心が落ち着かなかった。臨終の男に、義兄は遺族に対し最善を尽くそう、遺族が困窮の時にはいつでも全力で支援しようと約束した。今一度アントン・ウンヴィルシュは空気を求めた。しかし空気は彼にとって余りにも灼熱に満ちていた。彼は嘆息し、亡くなった。医師がその死亡証明を書いた。湯灌婆のキービケ夫人がやって来て、彼を拭き、彼の棺が然るべき時に準備され、近隣の者達や友人達が立派な同伴者として墓地まで随行した。クリスティーネ夫人は暖炉の側の片隅で、自分の子供を膝に抱き、目を泣きはらして、低く黒い仕事床几と低く黒い仕事机をじっと見つめていて、自分のアントンがもはやそこに、その上に座ることはないのだということを相変わらず信じようとしなかった。シュロッターベックおばさんはケーキ皿や瓶やグラスを片付けた。これらは遺族や、棺を運ぶ者達、近隣の弔問の女性達に対し、喪中の振る舞いとして出されていたものであった。ハンス・ヤーコプ・ニコラウス・ウンヴィルシュは子供らしく陽気に金切り声を上げて、小さな両手を父親の机上に掛かっている輝くガラス玉の方へ、求めて差し出していた。そのガラス玉には今や太陽が照り付けていたが、このガラス玉はかつてアントン・ウンヴィルシュの思索世界にかくも珍しい明かりを注いでいたのであった。母親はガラス玉の光にとても馴染んでいて、彼女は夫の死後もそれを欠かすことができなかった。このガラス玉は遠く、息子の青春時代にまで照り輝くことになって、その際、この息子は父親の偉さや威厳について幾つかの物語を聞くことになった。そして次第に息子の精神の中で、父親の像がこの玉の明かりと消しがたく結び付いた。

第二章

神々が一人の男を著名な町に生誕させたら、それは大いなる幸運として尊重すべきであると古代人は述べている。ベツレヘム[キリスト]とか、アイスレーベン[ルター]、ストラットフォード[シェークスピア]、カーメンツ[レッシング]、マルバッハ[シラー]等々は以前人間の記憶の中で必ずしも輝かしい地点ではなくて、それでこの幸運ははなはだ著名な男達にも恵まれなかったわけで、かくてハンス・ウンヴィルシュにとって、彼が新町[ノイシュタット]という土地でこの世の生を享けたとしてもさほど大事なことはなからう。これと名前を同じくする町や小都市は少なくない。しかしそれらの町は我らの主人公をその市民に数えるという栄誉を得るために喧嘩していない。ヨハネス・ヤーコプ・ニコラウス・ウンヴィルシュは自分の生誕の町をこの世で更に有名にしたわけではなかった。

この古巣は一八一九年には一万人の住民を有していた。今日は百五十人以上多い。これは広大な谷の中にあつたし、今もある。丘や山々に囲まれ、これらから下って、森が町の境界まで延びている。その名前にもかかわらず、ここはもはや新しくない。苦勞してこの町は、野蛮な数世紀を生き延びて来て、今や落ち着いた眠たげな老齡を享受している。今一度若干然るべきものに達したいという希望を徐々にこの町は放棄して来ていて、それ

故不満感が更に募ることはない。この町が所属している小さな国にとって、この町は常に一要素であって、政府はこの町に配慮を欠かさない。そこの教会の鐘の響きは、森から間近の高台に出て来る旅人に対して快適な印象を与える。そしてまさに太陽が両教会と家々の窓に反映すると、この旅人が、輝くものすべてが必ずしも黄金ではないとか、鐘の響き、肥沃な田畑、緑の野原や、谷の中の小さな町といってもまだまだ牧歌を形成するに十分ではないと考えることは稀である。アミンタスとか、パレモン、ダフニス、ドリス、クロエ[ゲスナーの『牧歌』の人物]は、下の谷での生活を互いにしばしばまこと不快なものにしたかもしれない。子羊放牧や子羊剪毛は少しばかり流行遅れになっていて、それで人々は互いに敵対し合うことになって、あらゆる種類の喧嘩が見られた。しかし人々は求婚し、求婚されて、全体総合的に見ると、かなり悠々自適の生活を送って来た。 — 生活必需品が手に届かないほど高くなかったことも、このことに部分的に寄与したであろう。アルカディアで果物や苔が不作で、牛乳や蜜が手に入らなかったら、[牧歌作家の]ゲスナー全体悪魔に掠われろとなろう。

しかしこうしたことすべてについて、時に若干の言葉を費やす機会が更にあるであろうし、その機会がなくても、別に困らない。当面は若いアルカディア人、ハンス・ウンヴィルシュの許に戻って、どのようにして彼が人生に適応して行くか、見守る必要がある。

靴屋の未亡人はまことに無教養な女性であった。彼女は読み書きをほとんど必要とせず、その哲学的素養は全くぞんざいであった。彼女はすぐに好んで泣いた。暗闇に生まれ、暗闇の中に留まっていて、自分の子供に乳を与え、その子供を足で立たせ、それに歩みを教え、その子供が生涯両足で立てるようにし、生涯の歩み方を教えた。これは大いなる名誉であって、どんなに教養ある母親でも、その子供にこれ以上のことはできない。

ほとんど新鮮な空気も、ましてや日光は余り射し込まない低く暗い部屋の中で、ハンスは目覚めて正気付いた。これはある観点では結構なことであった。彼は後年それほど大洞窟を恐れなくなった。この大洞窟の中で、文明化の恩恵に参画する人類の大多数の過半の者が、生活しなければならぬのである。彼は生涯を通じて、明かりと大気を、その実態通りのものと、つまり運命が与えたり、拒んだりする贅沢品と見なした。これは運命が与えるよりも、むしろ拒むように見えるものである。

路地に面した部屋は、これは同時にアントン親方の工房であったが、先の状態が変わらず保たれていた。未亡人は、自分の亡き夫の工具が少しも移動しないよう、不安げに気にして見守っていた。グリューネバウム伯父は、余計なものとなった職人道具をまとめて、かなりの値で買い上げようとした。しかしクリスティーネ夫人は、その中の幾つかでも渡す決心ができなかった。仕事仕舞いのときには、いつでも彼女は低い靴屋机の側の慣れた席に座っていた。そして夕方には、我々が承知しているように、彼女はただガラス玉の明かりの許で編み物をし、縫い上げ、あるいは大きな賛美歌の本の活字を読み上げた。

哀れな夫人は、今や、自らと子供を立派に渡世させるために、大変難儀せざるを得なかった。 — 窓が中庭に面している小さな寝室で、彼女は幾夜も目覚めたまま大きな不安に苛まれていたが、一方ハンス・ウンヴィルシュはその父の大きなベッドに寝ていて、もっと幸せな近隣の子供達の大きなバター・パンやゼンメルを夢を見ていた。賢明なグリューネバウム親方は、自分の親戚に出来る限りのことをしてやった。しかしその手職は、

すべての「子供の友」[Kinderfreund、雑誌名]に対し通常期待したくなる恵みをもたらさなかった。彼は赤雄山羊亭で冗長すぎる話しを好みすぎたし、彼の顧客達は、彼の許で新しい一足を注文するよりも、むしろ一足の傷んだ編み上げ靴を修理に出した。彼自身は波の上に頭を浮かべるのがやっとならぬであった。 — しかし彼は遠慮せず助言をし、その助言を気安く大量に放った。しかし残念ながら、量は大抵少しも質とは比例しないという通例の事実を報告しなければならない。シュロッターベックおばさんの方は、とてもグリュエネバウム親方ほど賢くはなかったけれども、より実際的であった。そして彼女の助言に従って、クリスティーネ夫人は洗濯女となった。これは朝方二時と三時の間に起きて、夕方は八時に草臥れ消耗して帰宅し、それからまず自分の子供の身体的飢餓を静めて、その子の夢を現実へと置換するのであった。

ハンス・ウンヴィルシュは自分の人生のこの時代について、薄暗い、定かならぬ、奇妙な思い出を有していて、これについて親しい友人達に報告している。最初期の幼い時から、彼の眠りは浅いもので、彼はよく硫黄マッチの明かりで目覚めた。彼の母親は、暗く、冷たい冬の夜、ランプをこのマッチで点火して、自分の早朝の出発準備をした。彼は温かく自分の枕に寝ていて、母親が彼の上に被さって、この寝ている子を自分のスリッパの物音で起こさなかったか点検するまで、じっと動かずにいた。それから彼は自分の腕で彼女の首にすがって、笑い、接吻して貰い、すぐにまた寝入るよう注意された。まだまだ朝とはならないから、と。この注意に彼は早速従うか、あるいは後に引き延ばすかにした。引き延ばす場合、彼は半分閉じた瞼から、燃えるランプや母親や壁の影を観察した。

珍しいことに、この早期の記憶はほとんどすべて冬の季節からのものであった。ランプの炎の周りに靄があった。呼吸は雲となって明かりに向かった。凍結した窓ガラスがきらきら輝いた。猛烈に冷たく、この小さな観察者にとって、安全で温かいベッドの快適さには、猛烈な寒さに対する恐れが混じっていた。この恐怖故に彼は自分の小さな鼻を毛布の下に隠さざるを得なかった。

まだ暗く、冷たいのに、そして壁には奇妙な黒い影が移ろい、頷き、起き上がったたり、屈んだりするのに、何故母親はかくも早朝起床するのか、彼は理解できなかった。母親が出掛ける先については、更に何もはっきりとは理解できなかった。自分の気分次第で、彼はこの行き先を多かれ少なかれ快適な所と想像し、同時に大人の人々の会話から、お伽噺の色々細かい個別的断片を混ぜ合わせていた。彼は大人の会話に耳を傾けていて、今や睡眠と覚醒の間に、この会話は多彩なものとなり、次第に多彩に変化して、混じり合った。

ようやく母親は着付けが終了して、今一度子供の臥所に身を屈めた。もう一度彼は接吻を受け、色々立派な注意やご褒美の約束を得た。子供が静かに寝て、吠えず、すぐにまた眠り込むようにとの配慮であった。まもなく朝になって、シュロッターベックおばさんがやって来るでしょうという保証が付け加えられた。ランプが吹き消され、小部屋は真っ暗な中に沈み、ドアが軋み、母親の足音が遠ざかった。 — すぐにまた眠ることになって、そしてハンスが二度目目覚めると、おばさんが通常すでに彼のベッドの前に座っていて、隣の居間では暖炉の中で火が爆ぜた。

シュロッターベックおばさんはクリスティーネ・ウンヴィルシュ夫人よりも年上ではなかったけれども、常にシュロッターベックおばさんであった。クレッペル通りでは、誰も他の呼び方をしなかった。彼女はクレッペル通りでは、老フリッツ[フリードリヒ大王]、

「ナポレオン」皇帝、それに老ブリュヒャー[1742-1819]同様に馴染みであった。もっとも彼女は他にこの三人の有名な英雄とは、プロイセンの国王のように嗅ぎたばこを吸い、「コルシカのヴュータリヒ[暴れん坊]」同様に鷺鼻であるという類似の他は何も共通点はなかったのである。前進元帥との類似はほとんど見いだされなかったであろう。

おばさんは以前同様に洗濯婦であった。しかし彼女は今やとうにお払い箱になっていて、糸紡ぎや、靴下編み、類似の仕事でかろうじて糊口を凌いでいた。市当局はつましい貧民基金を彼女に恵んでいて、彼女の遠縁に当たるアントン親方が、小さな部屋を安い金で空けて、彼女は彼の家に同居することになった。本来彼女はこの本の中で、独自の章を占めるに値する女性である。というのは、彼女は誰もが吹聴できるわけではない才能があったからである。故人は彼女にとってこの世から消えていなかった。彼女は故人が路地を歩いて行くのを目にした。彼女は故人に市場で出会って、生きている人々に会うのと同様に、思いがけず角で故人にぶつかるのであった。彼女はこのことに少しも不気味な気配を感じなかった。彼女はこのことを全く自然なこと、通常のことのように語った。彼女にとって、一七六九年に亡くなって、鬘をし、赤いビロードの上着を着て、獅子薬局で出会う市長のエッカーラインと、この男の孫、一八二〇年にこの獅子薬局を所有して、自分の祖父殿には気付くことがないまま、まさに窓から外を見ている孫との間に全く区別はなかった。

シュロッターベックおばさんの知人や知人女性にとってさえ、夫人のこの「才能」は結局もはや戦慄を呼び起こすものではなくなっていた。信じない者達も、そのことに微笑を浮かべることを止め、信ずる者達も、これはかなりの数であったが、一もはや十字を切ったり、頭上で両手を打ち合わせることをしなくなった。この立派な女性の性格そのものに、この気高い特典は何ら劣等な作用を及ぼしていなかった。おばさんは自分の珍しい見識才能にうぬぼれなかった。彼女はこれを神からの過分の恩寵のように見なしていて、クレッペル通りのこのオールド・ミスほどにもさっぱり見る能力のない他の多くの人々よりも謙虚なままであった。

外見に関しては、シュロッターベックおばさんは中等の背丈であったが、はなはだ背を曲げて、頭をはるか前方に傾げて歩いた。衣装はきちんと収まった感じに見えなかった。そして彼女の鼻は、すでに述べたように、とても鋭く、はなはだ鷺鼻であった。これは、この鼻は、目がなかったら、不快な印象を与えたであろう。これらの目はまた、鼻が損なうすべてを補っていた。これは珍しい目で、実際珍しいものを見ているのであった。高齢に至るまで、澄んで輝く目であった。一 老いて、萎びた顔の中の、青い、若々しい目であった。ハンス・ウンヴィルシュは、後年もっと美しい目を見たけれども、この目を忘れたことがない。

シュロッターベックおばさんは学問に素朴に帰依していた。彼女は学識をとてつもなく尊敬していた。専ら神学を尊敬していた。小さなハンスは彼女の手引きで、すべての学問の端緒に導かれた。この学問を彼は時と共に多かれ少なかれ修得して行った。夫人はグリム兄弟にメルヘンを語る事が出来たであろう。そして邪悪な女王が憎い継娘のこめかみに黄金の針を突き刺すたびに、ハンス・ウンヴィルシュは横隔膜の中までその先端を感じた。

ハンスとおばさんはこの少年の最初の年月の間、分かちがたい同志であった。早朝

から夕方までこの見霊者の女性は、子供の許で母親の代理をした。この少年と関連することでも、夫人の助言や協力がなければ、何も生まれなかったであろう。幾多の飢餓を彼女は静めた。しかしまたヨハネス・ウンヴィルシュは幾多の飢餓も彼女を通じて知ることになった。グリュネバウム伯父はやって来て、しばしば十分にぶつぶつ言った。このような女との付き合いでは何も結構なことにはならないだろう。悪魔には偶数も奇数も一切関係ない。気まぐれや空想、幽霊透視をしていては、人間のためにはならんだろうし、ただ孔子やうつけ講師になるだけだ、と。

おばさんはこのような攻撃への返事としてはただ両肩をすくめるだけであった。そしてハンスは彼女に一層密着して這い寄った。伯父は来たときと同様、ぶつぶつ言いながら去った。――伯父は自分をはなはだ実際的で、明瞭な頭脳と見なして、そして最良のパイプでさえも詰まることがあり得ると考えもせず、鼻から軽蔑を吹き放った。

ハンス・ウンヴィルシュは早熟な子供で、歩くよりもほとんど先に話し方を学んだ。読み方を彼は遊びながら習得した。シュロッターベックおばさんはこの読み方の難しい芸をととても上手に理解していて、全く長くて全く外国語風の言葉につまずくだけであった。彼女は好んで声高に読み、鼻声が得意で、これはこの子供に最大の印象を与えた。彼女の図書は主に聖書や賛美歌の本、それに長い一連の民衆カレンダーから成り立っていて、このカレンダーは一七九〇年来、順次途切れずに連続しているもので、その各々が感動的な嘶や滑稽な嘶、スリラー嘶の他に、立派な家庭薬や秘薬の宝庫、更には陽気な逸話の上品な選集を含むものであった。敏感な子供の空想にとって、この古い冊子には無限に豊かな世界が隠されていた。そしてその中からあらゆる種類の精霊が現れ、微笑し、笑い、にやりとし、脅し、そしてこの若い魂を交互に戦慄と歓喜の中に導いた。雨が窓ガラスを叩くとき、太陽が部屋に射し込むとき、そして雷雨がその黒い雲の腕で屋根の上に襲い、その赤い稲妻を町の上に投げ付けるとき、雷がごろごろ轟き、霰が通りの舗石にばらばら音立てて跳ねるとき、こうしたすべてが何らかの仕方で、かのカレンダーの形姿や場面と結び付いて、お嘶の中の主人公達やヒロイン達が良き天候の中、悪しき天候の中、完全に明瞭に、はっきりと、定かに小さな夢想的ハンスの側を通り過ぎて行くのであった。このハンスはその頭を老見霊女性の膝の中に置いていた。『健気なカスパールと美しいアンナールの物語』[クレメンス・ブレンターノ作、1817]は、生涯を通じて反響する響きをもたらした。しかしこの少年にもっと大きな印象を与えたのは、「本の中の本」、聖書であった。創世記の最初の諸章の単純な壮麗さは、子供にも大人にも、精神の貧者にも精神の富豪にも圧倒的に思われるに違いない。物事の端緒についてのこの話しは、無限に信じられるもので、世界は七日では創造されなかったと日毎により鮮明に証明されるけれども、この話しは信じられ続けている。快適に戦慄しながらも、ハンスはおばさんの足許で混沌の暗い深淵に沈潜した。大地は荒廃して空虚であった。――然るに明かりが暗闇から分離し、大空の下の水は、大空の上の水から分離した。太陽と月、星々がその踊りを始め、印や時、日中、年月を与えると彼はまた深呼吸をした。そして大地が草や、茎、果樹を育て、海や大気、大地が、生きて動く動物と一緒に活気付くと、彼は小さな両手で拍手して、堅牢な大地の上にいるのを感じた。彼にとって、神がアダムに息吹を吹き込むと、そのやり方は全く明瞭で、潰えることのない真実に思われた。一方これに対し、女が男の肋骨から作られると、この子供の頭に最初の批判的疑念が生じた。

しかし樂園とカイン、アベルの単純な話しや、ノアの洪水に続いて、長く難しい名前の氏族の索引が見られた。これらの名前は朗読の女性とその聴講生にとって真の茨の茂みであった。これは二人が狼狽して転げ落ちる落とし穴であった。二人が躓き、うつ伏せに倒れる石であった。いつも二人はもがいて離れ、跳ね起き、そして更に恭しく荘重に片付けた。「ゴメルの子孫はこうである。アシケナズ、リパテ、トガルマ。ヤワンの子孫はこうである。エリシャ、タルシシ、キッテム、ドダニム」。

しかし日々はただ全く読書やお話しで過ぎて行ったわけではない。ハンス・ウンヴィルシュが両手をもはや半ば無意識の動作で前後に揺すったり、口の中に突っ込まなくなると、早速彼は母親とおばさんから仕事の偉大な原理を仕込まれた。シュロッターベックおばさんは、器用な女性で、それでささやかな副業を見つけて、大きな玩具工場のために人形衣装の着付けをしていた。子供の関心の十分間近にある仕事で、ハンスはやがて好んで手伝いをするようになった。紳士や淑女、百姓男に百姓女、羊飼いに羊飼いの妻達、その他幾多の陽気な青年や娘達がすべての階層、年代からおばさんの手により出現した。おばさんは糊と針、多彩な生地断片、飾りの金銀を大胆に取り扱い、値段に応じて、各々にその一部を使用した。これは一種哲学的仕事で、その際幾多の思いが去来した。ハンス・ウンヴィルシュは、彼にとってこの玩具への子供らしい喜びは当然やがて消え去ったけれども、これに上手に適応した。操り人形で一杯の店で育つ者は、たとえその人形がなおも多彩で、その上はなはだ手足をばたつかせても、個々の操り人形をそれほど気にしなくなる。

マルチン祭[十一月十一日]の後、この有名な日は残念ながら鷺鳥を焼いてお祝いをされないけれども、この手工芸は自前で行うようになった。おばさんは今や造型術の自分の才能から最大の利益を引き出せるようになった。彼女はクリスマス用に干しぶどう入りの男人形を作り、もっとつましい者達用に干しすもも[プルーン]入り人形を作った。ハンスが加勢も貰わず作ったこのプルーン用の最初の若造は、野心的美術学生が入賞作を作ったのに匹敵する大きな喜びをもたらした。美術学生ならイタリア旅行への奨学金に値するであろう作であった。

クリスマス市の開始は、この小さな造形家にとって、大きな出来事であった。叙事詩人は自分の描写の手に余ると説明しながら、幾多の感情を描写するものである。こうした機会のハンスの感情もこの種のもので、歓喜して彼はランタンを前に持って進み、一方おばさんは小さな手押し車に、自分のベンチ、籠、火鉢、小さなテーブルを積んで市場に運んだ。

痛烈な風からも守られた家々の角でのこのビジネスの開店は、それ自体不思議な出来事であった。大きな古い雨傘の下に縮こまって、石炭火鉢の中の熾火を吹き起こし、商品を展示し、市場の雑踏にようやく落ち着いて、しかし期待一杯に見つめること、こうしたことすべてが心揺さぶる魅力であった。最初にプルーン入り人形が取り扱われ、売買されると、シュロッターベック商会の胸中に、真の歓喜の嵐が呼び起こされた。素直な子供がクレッペル通りから、陶器の取っ手付き鍋で昼食を持って来ると、野外の市場では、家の暗い部屋で味わうのとは全く違う味がした。しかしこのすべての最良のものは、その霧の夕方であった。明かりやランプが輝き、騒ぎ、押し、突き、営みが倍増して見られた。

この子供は必ずしも静かに老夫人の横、ベンチに座っていることが出来なかった。

魅了され、一寒さにもかかわらず、雨や雪にもかかわらず、陶然となって、この子供は市場全体を歩き回り、会社シュロッターベック商会の関係者として、その顎をすべての他の会社の販売テーブルに自負しながら批判的に突き出していた。

丁度八時に母親がやって来て、シュロッターベック家のより若い共同経営者を家へ迎えに来た。しかしこれは吠えたり、じたばたする抵抗なしには、収まらず、「明日もまた一日ある」からと保証の言葉を聞いて、この小さな卸売り商は納得し、店を十一時までおばさん一人に任せるのであった。

我らの主人公のこの人生期間から一つの事実を報告すべきであろう。彼は自分で作った干しぶどう入り人形の売上金で、一市場の反対の端に構えている商店から別の人形を買った。この少年の将来の発展にとって、重大な意味を有する一手であった。他人のために黒ん坊人形を作製していてハンス・ウンヴィルシュは、このような人形そのものを購入するのはいかなる楽しみがあるのか、知ろうとした。彼はこの楽しみを根底を探った。しかし当然、この余りに早期の分析からは何の喜びも引き出せなかった。数ペニヒが売り手によって受領され、買い手がその人形を手にとると、買い手は全面的後悔に襲われた。嗚咽しながら彼は路地の真ん中に立っていて、最後に彼は購入品を遠くへ投げ棄てて、この上なく苦い涙を飲み込みながら、全速力で走り去った。おばさんも母親もグロッシェン貨幣がどうなったか、知らなかった。これで市場全体が購入できたかもしれないのであるが。

冬は幾多の喜びを有していた。しかしまた最大の苦難も伴っていた。我々が関与しているのは、とても貧しい人々で、この貧しい人々は通常、春やコフキコガネ[五月甲虫]と共にようやくまた元気になるものである。十万人、いや百万人の人々が寒い日々を、快適に、意識のないままに冬眠して過ごすかの幸福な動物どもを羨ましく思うことだろう。

神聖なクリスマスの後、これは可能な限り祝われて、その後新年がやって来る。そして三王来朝の祝日[一月六日]となる。この時期多くの故人の影が路地でシュロッターベックおばさんと出会ったり、一緒に教会へ入ったり、その祭壇の周りを囲んだりする。聖母マリアの御潔め祝日[二月二日]の後、何人かの人々が日が長くなっていると主張する。しかしまだそれはほとんど感じられない。しかし聖母マリアお告げの祝日[三月二十五日]頃には、この事実はもはや否認できない。ユキノハナが顔を覗かせていて、雪はもはやこの世に保たず、蕾みが膨らみ、弾け、シュロッターベックおばさんの鼻はその赤みの多くを失う。今や母親は早朝起きて、ランプがもはや凍てついた霧の中に浮かぶことはない。ハンス・ウンヴィルシュはもはや洗面鉢で悲痛な声を上げず、彼の両足は強引に靴の中へ押し込まれる必要がない。もはや粗野な木樵が町へ暖房具を運び込んで、「法外な金」で売りつけることもない。太陽が無料で温かさを与え、それに対して有り難うすら要求しない日々がやって来る。あつと言う間に、枝の主日[復活祭前、最後の日曜日]である。そして復活祭は花輪を編んで、この花輪を、歓喜の祭典、緑に萌え、花と咲き、歓呼し、記念とする復活祭は、この若い一年の額に被せる。シュロッターベックおばさんはその靴下を玄関前のベンチで編んで、ハンス・ウンヴィルシュは通りの向かい側の古物商、フロイデンシュタインを真面目に恐る恐る観察する。この古物商は、その小さなモーゼス、病気がちの、痩せて、頼りない、一片の人間を、クッションと毛布で上手く包んで、車椅子で日光の中へ押しに行くのであった。

第三章

ヨハネス・ヤーコプ・ニコラウス・ウンヴィルシュは五歳になっていて、ズボン履いた小さな不格好な若造であった。ズボンは大きくなることを見込んで裁断されていた。彼は青灰色の目から楽しげに世間とクレッペル通りを見ていて、彼の鼻はこれまでまだ何の特徴も見せず、彼の口はととも大きくなることを約束していて、その約束を守った。この少年の黄色の髪の毛は自然にカールしていて、この少年に関し、最も愛らしいものであった。彼はどの方面でも傑出した胃を有していた。その人生において多くの飢餓を甘受することになる人々皆と変わらなかった。彼はABCの初歩も、最大の黒パンや具沢山のスープ皿同様に簡単に素早く片付けた。二人の女性、母親とおばさんによって、彼は当然甘やかされた皇太子、英雄、世の奇蹟として取り扱われ、尊崇されており、それで国家が仲裁に入り、彼を就学義務があると見なしたのは、幸運であった。ハンス・ウンヴィルシュは、認識の実り豊かな木に掛かっている梯子の最下段に足を乗せた。貧民学校が彼に対し開かれていた。貧民学校教師のジルバーレップフェル[銀の匙]は、この学校のドアの許でおばさんに約束した、「大事なお子さん」は彼自身によっても、彼から躰を受けている百六十人の腕白によっても撲殺されることはありません、と。

目の前に前掛けの先端を持って行って、おばさんは別れた。そして彼女に立派な井戸の所で、首席牧師のホルツアップフェルが、彼は一八一五年に亡くなったのであるが、襷襟付きの黒い説教者の上着を着て、聖書を持っているのに出会って、ようやく納得した。おばさんはこの牧師とその両親をととも良く知っていた。父親は木樵であった。母親は聖霊救貧院で亡くなっていた。しかしこの首席牧師は、その名声と栄誉はこの町ではまだ消えずにいたが、ジルバーレップフェルが小さなハンスを案内した貧民学校の同じ席で学んだのであった。

ある暗い袋小路の、平屋の建物に、これはかつて消防ポンプ小屋として使われていたのであるが、この地方自治体は、貧民のための学校を設立した。長いこと、そもそもこのような余計な目的のために施設を作ることは拒んで来た末のことであった。そこは湿った穴蔵であった。ほとんど季節ごとに水が壁から滴った。茸や菌の類いが隅や教師の教卓の下に育った。机やベンチはねばねばと濡れていて、休暇の間には常に軽い黴状の表面に覆われるのであった。窓についてはむしろ話したくない。その近くでも、極めて興味深い茸状の形が形成されたのは、不思議でない。それに教師の四肢に極めて見事な痛風結節が、その肺に極めて豪華な結核結節が形成されたのも不思議でない。時に学校の半数の者が熱病に罹ったのも不思議でない。この自治体が、自分達のせいで墓地に埋葬された子供の墓に、その都度一個の大理石の記念碑を置かなければならないのであったら、すぐに別の学校立地を探していたことであろう。

教師は、国が四季の齋日ごとに支払う驚くべき総額の領収書にカール・ジルバーレップフェル[銀の匙]と署名した。いや、この貧民は自分の名前をただ皮肉に名乗っていた。彼は口に匙を銜えて生まれたのではなかった。文化省というこの立派な称賛すべき役所がもっと重要な案件に没頭していなかったら、彼の件は、この文化省を反省へと導く多くの素材を提供していたに違いない。社会の最低層に対し知識をいかに切り詰めることが、社会

の最高層に対し損害も不快も引き起こさないまま、可能となるか、という問いが相変わらず解決していないとき、どうしてこの高級な役所が教師ジルバーレップフェルのことを気にかけることがあり得よう。更に長いこと、この問いの解決を委託されている殿方達は、庶民の教師を自分達の敵と見なすであろうし、悪意の、革命的理想主義者達が、「高級な役所はその敵に好意を示して、この敵に少なくとも品の良い衣服を支給して、必須の餌を恵んで欲しい」と要求しても、これを極めて没趣味な滑稽な要求と見なすであろう。人類がまだ一方の下士官の手からもう一方の下士官の手へと移っていたとき、それは何と古き良き時代であったことか。軍だけが分隊長の指揮下にあるのではなかった、何と古き良き時代であったことか。

この飢餓牧師は、後年になって、自分の最初の学校時代、貧民教師のジルバーレップフェルのことを思い出すとき、今一度、グルンツェノーの学校教師を、日曜日の焼き肉、マルチン祭の鷺鳥、クリスマスのポンスに招待した。この教師がバルト海沿岸で、立派な滋養あるものを家の自分の七人の少年のために包むとき、彼に異存はなかった。彼は自ら彼にそのための古新聞を持って行き、その包みを上着の窮屈なポケットに仕舞い込む手伝いをした。

新町の消防ポンプ小屋では、右手に娘達が座り、左手に少年達が座っていた。この両区分の間、ドアから教師の教卓まで、一本の通路があって、この通路を咳しながら、ジルバーレップフェルは行き来し、それでこの学童の群れの中で、誰かが騒ぐこともなかった。この貧民は背が高く、とても背が高かった。彼は痩せて、とても痩せていた。とても彼はメランコリックに見えた。これも当然である。彼の立場の別人であれば、この湿った冷たい部屋で、元気に温くなるほど鞭打ったことだろう。しかしこのことすらもはや彼は出来なかった。こうした向きへの彼の弱々しい試みは、単に善良な冗談と見なされた。彼の権威は零以下であった。すべての身なりの良い者達への彼の悲痛な非難は、この功績ある男のスーツであった。帽子はその所有者と共に真の悲劇を上演した。この両者の間では、どちらが他方よりも長持ちするであろうかが問題で、帽子の方は、自分が勝つに違いないと承知しているように見えた。そのたるみやかき傷からは、悪魔的嘲笑が浮かんでいた。この怪物は、自分はこの哀れな結核性の男の後継者よりも長生きするであろうと承知していた。これはこの消防ポンプ小屋の黴や茸を皆目気にかけていなかった。

ハンス・ウンヴィルシュは少しも感傷的気持ちを抱かずに、貧民学校の仲間、雑踏の中に入って行った。自分がある程度探りを入れて、最初の当惑や羞恥が克服されると、他のどの腕白にも劣らぬ者となって、この報奨に値する国家設備のあらゆる苦楽に力の及ぶ限り関与した。彼はすぐに要領が分かった。少年達の間での味方や敵はすぐに見分けがついた。同種の心根の者は彼の味方となった。対立する情緒の者達は、彼の髪を捕まえて、彼の世界観を引き抜こうとした。個別の決闘でも、皆での殴り合いでも、彼は幾多の苦しみを味わった。しかし彼は気品ある少年として、これに耐えて、教師の背後に這って隠れることをしなかった。気品ある少年として、彼はこの少年の時期、通路の右側のベンチの女性達に対し、一般的に治療可能な特異体質であった。彼は少女達の席に好んでピッチを塗りつけ、こっそりとお下げを対に結び合わせた。彼は女性達を大いに、下位の被造物として軽蔑した。これは単に叫んで防衛するのみで、この女性達を通じて教師は、学校の左側の半分について、つまり少年達の都合の悪いことを知るのであった。最初騎士的な情動

や感情は、彼の胸の中には何の痕跡も見られなかった。しかしこの観点で、それが兆し始める時期は遠くなかった。そしてやがて少なくとも、学校のその反対の側から、一人の小さな被造物[少女]がハンス・ウンヴィルシュに対し、影響を及ぼすことになった。一人の女子生徒が泣くのを見ることはできなくなる時が来た。つまり不分明な飢餓を感ずる時期のことで、これは近隣の通りの若者達の大きなバターパンやケーキに向けられた飢餓とは違うものであった。しかし差し当たり今、彼は生意気に両手をニッカーポッカーのポケットに突っ込んで、両脚を左右に開けて、しっかりと両足で立って、可能な限り、女達の絶対的支配から脱しようとした。もはや彼は以前のように、シュロッターベックお婆さんの足許に静かに行儀良く座って、敬虔に、彼女の教義や注意に、彼女のメルヘンや、カレンダーお囀に、彼女の聖書の朗読に耳を傾けなくなった。この善良な老婆がとても不快に思ったことに、彼は日々批判を加えるようになった。カレンダーのお囀を彼はすべて暗記していた。メルヘンをお婆さんが始めても、ハンスは彼女の言葉を捉えて、訂正を述べたり、あるいは無益で皮肉な質問をしたりした。夫人の善意の注意に対しても彼は常に真意不明の反論を述べて、それでお婆さんはしばしば全く途方に暮れてしまった。この誠実な魂がその流儀で長つたらしい聖書の氏族索引に巻き込まれると、ハンスはまことに悪魔的喜びに駆られて、その哀れなお婆さんをますます深く、救いようもなく、茨の茂みへと追い込み、それで夫人はしばしば全く憤然と怒って、聖書をパタンと閉じて、かつての「小さな子羊」を「無駄飯食いの賢しらな餓鬼」と呼んだ。彼は彼女の背後で、あらゆる茶番を仕出かし、いや、彼は臆面もなく、自分と同年齢のクレッペル通り選抜観客の前で、お婆さんの仕草を極めて滑稽に猿まねし、ある芝居を演じた。要するに、ハンス・ヤーコプ・ニコラウス・ウンヴィルシュは、今や、愛する親戚の者達が、その極めて将来有望なる子孫達や若い知人達に対して、暗くメランコリックな眼差しで、警告の手の仕草をしながら、陰気な未来、乞食棒、牢獄、監獄、そして最後に、画竜点睛として、絞首台での恥辱的死を予言するというかの人生段階に達していた。しかし通常、予言は実現しないというのは、一つの幸いである。

ハンスはこの時期、路地での色々ある動揺の人生を、四つの壁の中での静かな、支障のない平安という家庭的幸せよりもはるかに鼻鼻にしていた。いや、汝、汚い両手や鼻血、引き千切られた上着、かきむしられた髪の毛という美しい時代よ。汝を知らない男には災いあれ。この男は、愛する親戚の者達や友人達が、暗くメランコリックな眼差しをして、とても称えるべき、好ましく、立派なものだと称え、推奨した他の幾多のことを知らなかった方がもっとましであったろうと思われるのである。

自然なことに、今やハンスは、母親やお婆さんよりも、グリュエネバウム伯父にもつとなつた。この風変わりの繕い靴屋は、若造の心を捉える幾多のことを有していた。この立派な男と一緒にいると、甥が退屈することは稀であった。

この伯父の家政や環境は、すべてのきちんとした女にとって、とても汚れて、ぞんざいに見えた。彼の工房では、小妖精達が、好意的に集まっているのではなく、はなはだ立腹して住んでいるように見えた。これよりひどい混乱[てんやわんや]は考えがたい。誰かが探し方を習得したかったら、ここでその最良の機会が得られたであろう。果たしてしかし、グリュエネバウム伯父は、日中とその仕事時間の大部分を捜し物をして、無駄に過ごしたのである。彼は丁度必要としている器具を、ほとんどいつも見いだせない。これを求

めての掘り返しや騒動は、混乱に拍車をかけた。その上壁からは大小の籠の中から、多様な鳥が鳴き叫び、口笛を吹き、歌った。一匹のアマガエルが窓辺のガラスの下で、天候を予告した。しかし政治的天候は、グリュネバウム親方が自ら告げた。つまり彼は自分とその鳥達に、『町と地方のための郵便急報』を大声で読み上げたのである。これも同様に彼の仕事時間のかなりの部分を奪うものであった。正直者のグリュネバウム伯父は、自分とその小鳥をかつかつ養い、『町と地方のための郵便急報』を購読するに必要な分、丁度その時間だけ、熱心に靴作りをした。赤雄山羊亭での彼のショッペン[大きなコップ一杯]を、彼は堅気の市民や職人親方に似付かわしくないほどに、しばしばつけにした。

亡き義弟の息子に対し、この立派な男は、自然な情愛を決して欠かさなかった。好意的に彼はこの息子を自分のだらしない穴蔵に受け入れ、世間や人生について、小鳥の飼育や政治について、彼の流儀で立派に教えた。『町と地方のための郵便急報』の英知について、ハンス・ウンヴィルシュはほとんど理解しなかった。しかし個々の名前、ナヴァリノ[ナヴァリノの海戦、ギリシア独立戦争 1821-29 におけるオスマン帝国との戦いで、1827 年ギリシア連合軍の勝利]、メソロンギ[ミソロンギ、1822-26 年、オスマン帝国に包囲され苦難を強いられた]、ボツァリス[1788-1823、トルコ人に抵抗]、イブラーヒム・パシャ[1789-1848、オスマン帝国のエジプト総督]を、彼は口をぽかんと開けて受け入れた。そしてギリシアとトルコの偉大な戦闘がクレッペル通りでも行われた。それで流血の頭部が生じた。貧民教師のジルバーレップフェルはこれに関し、多くの人身攻撃を怒った両親から聞かされることになった。

グリュネバウム伯父は、強烈なギリシア贗員であった。しかし貧しいカール・ジルバーレップフェルはそれ以上であった。彼はまこと熱に浮かされたような関心を抱いて、遠い東方での流血の戦闘を追いかけた。シュロッターベックおばさんも偉大なギリシア贗員であった。そしてクレッペル通りでトルコの肩を持つのは、本来ただ一人の男性がいただけであった。彼はギリシア人を自らの目で見て、経験から知っていたからである。この男は、古物商のユダヤ人、ザームエル・フロイデンシュタインであった。彼は以前世界中をはるか遠くまで遍歴していて、オリエントの断章歴史家のヤーコプ・フィリップ・ファルミライヤー[歴史家 1790-1861、『新ギリシアの誕生についての論考』や『オリエントからの断章』等で、ギリシア国民は混淆により、古代ギリシア人とはほとんど関係ないとした]よりも「ギリシア[義理捨人]」に関し、ほとんど余り信頼していなかったのである。しかしこの古物商は自分の見解をおくびにも出さず、それで立派な断章歴史家が甘受せざるを得なかった様々な不快事を免れていた。

ちなみにハンスは、グリュネバウム伯父から初めて、教師ジルバーレップフェルに対し、自分は若干の敬意の義務があると有効な注意を受けることになった。私の男性の読者で、学校では学童によって一体どんな乱暴狼藉がなされていて、忍耐されているか、知らない者はいないであろう。またそのような若い精神の一味に見られる「世論」とはいかなるものか知らない者もないであろう。ハンス・ウンヴィルシュがある出来事で、自分の小さな人物のすべての矜持を傾注して、その世論に抵抗し、英雄的にその結果に耐えたのは、伯父グリュネバウムのお蔭であった。教師と生徒達の間には、大衆間の付き合いと同じ関係が見られる。理性法を教えるために、教師が何をしようとも、その生徒達は常にまた自然法を楯に取る。永続的で、鋭く守られる戦闘状態がその結果である。そして必ずしも教師は向こう見ずなこの敵との戦いで、優勢なわけではない。この敵にとってはほど

の武器も合法で、この敵は情け容赦もないのである。すでに幾多の高い才能の生まれの者が、このような戦いで破滅している。

「ハンネスよ」と伯父は言った、「私がおまえの立場であれば、私は他の者どもとあんな無茶な活劇は学校でしない。通りがかりの人は耳を塞がなくちゃならないほどだ。マジスターが気の毒でならない。あれじゃ長生きできないな。あの不幸で、惨めな奴さんは死ぬほど咳き込んでいる。おまえら、罰当たりの、途方もない極道どもが、奴さんに死ぬほど吠えかかっている。ハンス、ここで良く思案しろ、逃げるな。あの学校の様は何だ。大声、足踏み、大騒動、これにおまえも加わっているのか。少年よ、少年。私がおまえの身になって、もしもこう考えたら、つまり一人の人間を殺したら、殺人者というわけで、そして一人の死んだ人間が自分の心に取り憑いたら、これは後に良心の呵責と呼ばれるもので、そんな風になったらどうするのだ。ハンネスよ、よく考えてみろ、いいか、編み上げ靴なら、長いこと、繕えて、底革を付けたり、爪革を付けたりできよう。しかしお医者さんでも、餓鬼どもから残忍な仕打ちを受けた肺病病みの教師の呼吸を元には戻せないぞ。悪魔は奇数も偶数も関係なく拉致する。だから、ハンス、注意するんだ、悪魔に乗せられて、他の餓鬼どもと一緒に丸め込まれないようにな」。

この話しはハンスの心に、伯父が気付いたよりも大きな印象を残した。伯父は丁度良い折に話しをした。彼の言葉はちゃんと土壌に落ちて、すべての昔の注意以上に立派な影響を及ぼした。初めてこの子供の胸に、子供の利己主義以上の感情が芽生えた。ハンス・ウンヴィルシュは翌朝、消防ポンプ小屋の自分の席に着いたとき、貧民教師を全く別な目を見た。ジルバーレップフェルはこの冷たい、無愛想な雨の朝、普段よりも更に惨めに、飢えているように見え、更にもっと咳き込んだので、かくてこの思いは消えず、一層強まることになった。 — ハンス・ウンヴィルシュは初めて静かに座っていた。

ハンスはその次の陰謀には加担せず、皆の軽蔑を受け、すさまじい殴打を受けたが、しかし自分の善良な計画をただより強固に守った。勿論悪戯は彼がいなくても敢行され、完全に成功した。これは目玉の狼藉で、若い無法者、極道どもは大いに満足した。哀れな教師は、この日その胸の痛みが通常よりも増して、力なく餌食になった。教師が荒れる学校に視線を漂わせ、ハンス・ウンヴィルシュにも触れたとき、その救いのない絶望の眼差しは彼が決して忘れることのできないものであった。その印象は最晩年にまで残った。

翌朝カール・ジルバーレップフェルは消防ポンプ小屋に現れなかった。彼は二度とそこに登場しない運命であった。夜、彼は大咯血に襲われて、瀕死の状態で自分の劣等な冷たい部屋のベッドに寝ていた。貧民学校の受難教卓には別人が代わりを務めた。カール・ジルバーレップフェルは機械の一歯車のように消耗していた。別の歯車がはめ込まれた。ゆっくりとこれは更に回転を続け、「我らの発展して行く教養と人文主義的展開」は幾人かの善意の男の大好きな主題であり、そうであり続けた。

このすり切れた、瀕死の貧民学校教師を気にかける人々は少なかった。しかし彼の晩年の日々の負担を軽減するために尽力してくれた少数の者がいて、その中にグリュエネバウム伯父やシュロッターベックおばさんがいた。おばさんの手に引かれて、ハンス・ウンヴィルシュは自分の教師の臨終を見るためにやって来て、初めて死神の接近が人間の魂に及ぼす厳かな戦慄に触れた。

瀕死の男は長いことこの子供の手を握って、長く、深くその目を覗いた。しかし彼

が見守るとき、その視線の中には、もはや今やその短く暗い生涯で、絶えず圧迫して、彼のより自由な注目や呼吸を無情に妨げて来たかの悲惨さは何も見いだされなかった。その目は今や疲れていた。しかしまた静かで、満ち足りてもいた。戦いは終了して、更に一歩進めば、永遠に自由な国に到達するのであった。その臨終の床で、この貧民学校教師は、初めて、自分を自由な男と感じていた。誰に対してももはやお辞儀する必要もなく、片隅に縮こまる必要もないのである。ドアの背後の釘に掛かっている古い赤茶けた悪魔的帽子は、勿論[どちらが保つかの]賭けに勝っていた。しかしこの帽子も、いとも尊い文化省も、この死から大きな利点を引き出せなかった。帽子の方は、穀物畑の案山子となった、そして文化省は — 相変わらずそのままであった。

この病人は大きな声で話せなかった。しかしハンスはこの病人が自分に向かって言うことを聞き取って、それを忘れなかった。

「愛しい子よ、泣くことはない。恐れることもない。そなたはいつも良い子であった。いつか立派な男となることだろう。そなたはあらゆる種類の大きな飢餓を感じることだろう。しかしそなたは満喫することだろう。だって、いつか、いつかは皆が満たされるのだから」。

瀕死の貧民教師ジルバーレップフェルが当時、更に言い終えたことを、ハンスは勿論理解しなかった。そしてシュロッターベックおばさんも、この病人がすでに最後の死期の空想にあるのを良く分かっていなかった。

彼は自分の目を、部屋の低く黒い天井に向けて言った。

「私はとても飢餓状態にあった。私は愛を飢餓していて、知識に渴していた。それ以外のものはすべてどうでも良かった。黄金の林檎が誘って、小枝に掛かっている、その光輝を緑の中、放っていた。この美しい、輝く果実はまこと目を眩惑した。私は両手を突き出して、その茨で自ら千切れすり切れた。 — 緑の中のこの黄金の輝きのためには、多くの涙を私は流さなければならなかった。私は生涯、影の中に座っていた。しかし私は光のために生まれたのであった。影の中に座っていなければならず、飢餓のまま死ぬのは、苛酷なこと、辛いことである。世の中では、美しい目が輝いていて、優しい声が — 一間近で誘っているのに、いやこれはかくも遠く、遠く離れた所からだ。私は遠方への飢餓も有していた。しかし影の中に留まらなければならなかった。影の中の小さな空間に私は追放されていた。しばしば私の周りで黄金の雨が戯れた。私の周りで、輝く果実が慄然と落ちて来て、緑や青の中、輝いた。しかし私の両手は縛られていて、私は自分の悩ましい憧れの他、何も有しなかった。私はこの豊かな人生から何も、何一つ得なかった。ただ私には憧れだけが付与されていて、これも今やお仕舞いになった。目の前は暗くなり、耳許や心臓では静かになった。私は、 — 死んで満ち足りるのであろう」。

貧民学校教師カール・ジルバーレップフェルは、クリスマス数日前に埋葬された。後継者の下、貧民学校一同は棺に従って進んだ。棺には銀の金具はなく、ピロードの覆いも掛けられていなかった。綺麗な雪の上ではなく、汚れた天候の中、死骸は運ばれ、何の壮麗さもなく、簡素手短に埋葬された。学校の一同は墓地で解散となり、すぐに雀の群れの如く四散して飛び去った。ハンスも群れの中において、他の者達同様、格別悲しんでいなかった。死は本来子供にとって意味を有しない。我々が人生によって震撼され、揺さぶられて、初めて、死に対する理解が生ずる。

すべてがまだ新しい子供時代、毎日の新しい一日は、過去の日を完全な忘却に追いやる。善良な教師を埋葬した翌朝、ハンス・ウンヴィルシュは、すぐにまた陽気に路地で遊んで、今やもはや死んだ男のことを考えていなかった。昨日は見られなかった雪が、一夜にして沢山降っていた。少年には雪より他に考えることはない。

クレッペル通りでは、大きな叫び声が生じ、雪だるまが力強く若い芸術家組の気散じのために作られ、人間嫌いの年金暮らし、町の捕吏のムルクスの怒りを買うことになった。捕吏は足痛風のオーガー[人食い鬼]の如く、その窓辺の肘掛け椅子に固く呪縛されて座っていて、青少年の騒動や歓喜を自分個人への侮辱と見なしていた。しかし籐の杖はその主人同様退役していて、壁のこれまた退役した三角帽子の上に憤然と不満げに掛かっていた。

公共の平穏な安全を気にかけるこの隠棲下の保護者の目は、絶えず籐の杖と通りの間を行き来して、この立派な男の胸中では、爆発間近の火山のようにごろごろと不満が鳴動していた。コーカサスで鎖に繋がれたプロメテウス、セント・ヘレナ島のナポレオンならば、この刑吏と類似の苛立たしさを感じたであろう。しかし二人の例が彼の慰めとはならなかった。陽気に路地で活劇は続けられ、雪だるまが完成すると、若々しい不良の一味はモーゼス・フロイデンシュタイン、古物商の息子に襲いかかり、彼を可愛がり始めた。

かの昔の日々、 — 主に小さな町や地方で、 — ユダヤ人に対する蔑視がまだ見られた。これは幸い今日では、もはやこれほど鮮明に刻印されて表現されはしない。神の選良の老人達や青年達は、そのキリスト教の隣人から多大な嫌がらせを受けていた。大変言いようのない不幸をもたらしていた古来の慄然とする「ヘプヘプ[Hep-Hep 騒動、ユダヤ人迫害、1819]」はとてもゆっくりとこの世から消えた。主に子供仲間の許で、子供達がこれで悲惨な目に遭って、小さな、黄色の、病弱なモーゼスはクレッペル通りで、少しも快適な生活を送れないでいた。彼が姿を見せると、若いヤクザな民が、彼に対し、猛鳥が囀り向かうように襲いかかった。機会あるごとに、突き飛ばされ、髪の毛を引っ張られ、罵られ、殴られた。それで彼は出来る限り外出を控えて、自分の父親の半ば地下の住まいで、暗い惨めな生活を送っていた。

この日、ついてない彼は自分のいじめっ子達と出会うことになった。いつものように彼は小さな円陣の中に取り囲まれた。一体どうしてこのユダヤの少年も新しい雪を見たいと思ったのであろう。いじめっ子達の中央にモーゼス・フロイデンシュタインは立っていて、涙を抑え、嘆きの微笑を浮かべて、手を一同に順に差し出していた。この手の中に、それぞれ若いゲルマンのキリスト教徒が甲高い嘲笑を浴びせながら、唾を吐くのである。クレッペル通りでは、このような破廉恥な虐めに好んで参加しないような者は少なかった。家の戸口にいる傍観者は誰一人として、これに割り込んで来て、この無様な遊びを終わりにするよう説得しなかった。人々は笑い、両肩をすくめて、それどころか更にけしかけもした。汚いユダヤの少年が少しばかり人間の尊厳を傷付けられても、大したことではない。助けと救いは、モーゼス・フロイデンシュタインにとって、自分が期待していなかった或る方面からやって来た。

ハンス・ウンヴィルシュはこの時間まで、狼どもと一緒に吠えていた。他の者達がすることを、彼も軽薄に、同様に何も考えず、情け容赦なく行っていた。今や彼の番となって、泣きわめくユダヤの少年の開いた手に唾することになった。すると稲妻のように閃

いた、何という破廉恥な臆病なことをしているのだ、と。あたかも昨日埋葬された教師ジルバーレップフェルの青白い顔が真面目に悲しげに一同の少年達の頭や肩越しに覗いているように思われた。ハンスはモーゼスの手に唾しなかった。彼はその手を払い除け、拳を仲間達に突き出した。モーゼスは自由にさせておけ、自分は――ハンス・ウンヴィルシュは、――モーゼスにこれからも悪さすることを我慢できんと荒々しく叫んだ。拳は生意気にもっと接近して来た子の鼻にそのまま当たった。血が流れ、もつれ合い紛糾した。突き、つねり、足蹴、痛みの呻き声、怒りの咆哮、雪合戦、千切れた帽子にジャケット、退役町捕吏のヒステリックな興奮、壁の籐の杖の電氣的震え、四分五裂の右往左往、上や下に入り乱れての紛糾。――ここからモーゼスとハンスは転がって、古物商ザームエル・フロイデンシュタインの店へ下って行った。目眩がして、引き千切られ、口からは出血し、目は腫れ上がっていた。モーゼス・フロイデンシュタインも生まれて初めて自分の迫害者に一発御見舞を敢行していた。栄光の時であった。ハンス・ウンヴィルシュの生涯へのこの時の影響は、善悪の面で計算し難いものがあった。この路地の戦闘の荒々しい混雑の中から、古物商の店の階段を転げ落ちて行くとき、自分にとって無限に重大なものとなる定め境遇に陥っていた。一つ以上の観点において、彼の運命はこの日に決定づけられた。彼の眼前に全くの別世界が開かれた。この地下室には奇妙な人々が住んでいた。やはり自らの飢餓を有していて、その飢餓を力に応じて満たそうとしている人々で、クレッペル通りの人々は、はなはだ不当にも自分達の方が勝っていると自惚れている、その相手の人々である。

次の章で、古物商のザームエル・フロイデンシュタインはどのような人物か示すことになろう。それで我々は折に触れて、どのような具合に彼は自分のモーゼスを教育し、息子に世間とこの世の人生についていかなる見解を教え込もうとしたか、知ることになろう。

第四章

クレッペル通りは絵のような中世の町並みに名乗りを上げていなかった。その通りのすべての家屋は、七年戦争の間に発生した大火災の後、出来るだけ早急に、出来るだけ安上がりに再建されていた。今やそれらの建物の一部はまたすでに倒壊寸前であり、それで新たな火災が必要に見えた。つまり一夜にして、地震も、類似の震動もないまま、完全に風ぎの状態のとき、全く思いがけない瓦解というより大きな不幸に出会わないためである。ザームエル・フロイデンシュタインは、自分の息子と太古からの家政婦と一緒に一連の最も揺れの激しい家に住んでいた。他のすべての所有者があらゆる、多少貧弱な努力をして、自分の所有物を全面的倒壊から守ろうとしているのに、このイスラエル人の商人は、自分の家の維持のために全く何もしなかったし、その家の美化のために尽力することは更に少なかった。フベルトゥスの和平[一七六三年二月十五日、この和平で七年戦争が終わった]以来、窓は磨かれたことがないように見えた。屋根には苔やあらゆる種類の雑草が生えていた。外れてしまった煉瓦は一つ以上あり、どれも補充されていなかった。建築監督署は新町では劣等であった。しかしザームエル・フロイデンシュタインは、もっと上等の監督署を要求しなかった。

本来的地下の住居や店舗は、新町には見られなかった。この町はそれほど人口過剰ではなかった。より貧しい部分の住民が余りに高い所とか余りに低い所に追いやられることはなかった。比較的大きな町に見られるかの[旧石器時代的]穴居人の設備に類似していて、フロイデンシュタインの趣味にかなった唯一の集合建築をフロイデンシュタインは新町定住の際にすぐ見つけて、そこで自分の趣味に合わせて設備を整えた。

クレッペル通りを通行する者にとって、古物商のこの店はドアの前に掛けられたヴェストファーレンのヒエロニムス国王[Jerome Bonaparte, 1784-1860、ナポレオンの末弟]の従僕用お仕着せによって目立って注目を浴びていた。この色鮮やかな上着は、他の何にも勝って、古物商店の掛け看板となっていた。このヴェストファーレン古物王国のこの家具よりも立派な象徴を見いだすのは難しかったであろう。このお仕着せを知らない者は、この町にはいなかった。子供の時分にこれを見て育った者は、晩年老齢になっても、これを思い出すことだろう。

この従僕に向かい合って、別のドアの側柱には、壊れたパンケーキ・フライパンが掛かっていた。この両者の間を、顧客は出入りして、多種多様な品を搬入したり、多種多様な品を引きずり出したりした。ショーウィンドウでは、この店の内部に何があるか、おぼろに分かるだけであった。レディーの帽子、紳士の帽子、教科書、錆びた鍵の束、埃の積んだロココ調グラスや鉢、扇、大型箱時計、うら寂しい陶器の人形、子供人形、「こちらではどんな種類の襦袢に対しても最高額を呈示」と銘のある紙片、一 別の紙片にはこう銘がある、「骨や壊れたガラス、鉄にも最大奉仕値段」。一 三番目の紙片にはこう誘い誘い文句がある、「金、銀、宝石、古着の購入」。一一 ショーウィンドウにも沢山展示されているが、店そのものと比べるとはなはだ少ない。

敷居を越えて、ここで想定していなかった三つの階段を下によろけながら行くと、最初対象の区別がつきにくい薄暗がりの中、それに同様に幾つかの区別しがたい臭いの混じった雰囲気の中に達する。ただ目と鼻は次第にゆっくりとこの場に慣れて来る。ただ次第にゆっくりと、人間はここで自分が使用しないもの、もはや使用しなくなっているものをすべて手放すことができること、そして更にここで自分が使用するものをすべて見いだせることを悟る。一つの品は多くの手を経由したものかもしれない。過去、未来多くの運命を得たであろうし、得るであろうものかもしれない。それでもザームエル・フロイデンシュタインは、これを然るべき時に手に入れて、然るべき男に対し持って来たのである。彼は太古のガラクタに新品の偽りの外見を与え、「変転の中の持続」についての彼の見解はすべての哲学者にとって、極めて教訓的で魅力的であったろう。彼はやはりその薄暗い王国の中で、錬金術師の如く、魔術師の如く君臨し、その風采は、商人にとってとても有益な信頼を呼ぶものではなかった。

ザームエル・フロイデンシュタインは、六十代の男で、自分の外見の優美さには注意を払わず、貧民教師ジルバーレップフェルの帽子を極上品な頭の覆いと評価する唯一の者であったろう。彼は背が高かったが、とても屈んで歩き、永遠の悪寒に悩んでいるように見えた。彼が寒さでがたがた震える肢体をその襦袢のナイトガウンに包む仕草は、犬の日々[真夏]でも鳥肌が立ったであろう。この男は永続的に歯をカチカチ合わせて、良く洗った顔や綺麗に切った爪を大事にする者なら誰にとっても、一つの怖気であったろう。彼はいつでも十分綺麗に髭を剃っているとは、誰もまた主張できなかつたし、彼が以前一人の

妻を娶り、それもととても可愛く、とても清潔な妻であったとは、この事実を知らされた者皆が必ずしも信じたわけではない。しかし実際その通りであって、その妻はそれどころか、彼を愛していて、彼をこの世に一人残すのはとても心残りであったのである。

ザームエルはいつも新町の暗い自分の店の中に座っていたわけではない。彼はすべての新町人を合わせたよりも、多く世間を見て来ている。

彼は猫と犬とが仲良くお休みと言ひ、ロシア人、ポーランド人、トルコ人が互いにはるか昔から枕を並べて寝ているかの快適な一帯[ヨーロッパ南東部]で生まれた。ザームエルは北はワルシャワやペテルスブルクまで、南はコンスタンティノーブルまで、商いをしてきた。一七九九年彼はスヴォーロフ[Alexander Suworow, 1729-1800、ロシアの元帥、一七九九年一時北イタリアを制圧し、イタリンスキー侯爵とも呼ばれた、同年彼の軍はマセナ將軍の軍に敗れた]と一緒にイタリアへ行って、立派な商売を行った。しかしほとんどこのイタリンスキーによって、絞首刑にされたり、マセナ[1758-1817、ナポレオンの元帥]によって銃殺刑にされたりしそうになった。それ故、彼は用心深い男として、間近の隅に残って留まり、戦闘的一味だけを更に進軍させていた。彼はウィーンへ赴き、そこで運に恵まれそうになると分かる、プラハへ行った。このユダヤ人の町で彼は大変居心地良く感じて、ここで競争が激しくなかったら、いずれ永久にそこに永住していたことであろう。彼はこの時期、煙草類を扱っていて、すべての色合いの狐や貂、類似の毛皮獣の商いでかなり実入り良かった。彼は初めてライプツィヒの市に来たとき、まさにアブラハムの安楽な膝の中に落ち着けると思った。しかし彼はその横に腰掛けてしまい、余りに大胆な投機で、ほとんどすべての自分の財産を失ってしまった。

時代は誰にとっても苛酷なもので、ますます苛酷になって行った。しかしザームエル・フロイデンシュタインは、どんな風が吹こうが、それに合わせて回転し、向きを変えるそんな人々の一人であった。しかしこれは事情によっては、それにどんな異論が出されようと、大いなる幸運となり得るものであった。彼はぼかしの術を心得ていた。そしていかなる危険、いかなる戦争の成り行き、衝突、怒鳴り声に遭遇しても、彼は小荷物一つ持って、自らを救出し、一八〇六年の夏には、薔薇門を通して新町に入って来て、ユダヤ人として当時のご立派な慣例に従って、徴収される屠畜のように関税を払った。この恥ずべき慣習に従って、どこかの町のどこかの税務署では、次のように記載された紙片が届けられたことであろう。

「今日、一七八某年、一月某日、クロイツ門で徴収された関税、

- I. 牛三頭、
- II. 豚十四頭、
- III. 子牛十頭、
- IV. ユダヤ人一人、ベルリン出身のモーゼス・メンデルスゾーン[1729-1788]と名乗る者」。

幾多の破廉恥、幾多の不合理を転覆させたイエナ近郊の戦い[一八〇六年十月十四日、プロイセンが負けた後、フランス当局によってユダヤ人の権利制限が撤廃された。一八一五年、プロイセンが神聖同盟に参加すると、この制限がまた部分的に導入された]、この戦いの後、このスキャンダ

ルにも終止符が打たれた。しかし一八一五年幾人かの愛する領主は、古き良き風習をまた恵み深く導入した。

新町で、ザームエル・フロイデンシュタインは、一人の信仰仲間の許で荷物を下ろし、この仲間に、自分の当時の全財産を示す一枚の手形を呈示した。彼は遍歴の人生に飽いていて、今からはつましい生活を始めようと思っていて、それにこの小都市が気に入っていた。このホストの友がその他の諸事情について知らせてくれたことを聞いて、彼の決心、当地で旅の杖を休め、家を持って定住する決心が固まった。ザームエルがその最後の仕事で経験した災難にもかかわらず、彼がその汚らしい札差から取り出した手形は、新町の諸事情ではさほど取るに足りないものではなく、多分に新しい「一仕事」が確立できるであろうものであった。家屋は当時安かった。永遠の兵士宿営のためであった。ザームエルはクレッペル通りの前述の建物をほとんど贈り物のように入手して、空の蝸牛の家にハサミムシの如く、調度を整えて入った。一八一五年、彼は、彼の手形残高を速やかに調べた賢く裕福な男の娘と結婚した。彼の古物の商いは敵や味方の進軍の影響を受けなかった。逆に商いはそのことで繁盛した。というのは、敵も味方も幾多のものを手放す必要があったからである。彼らはそれらを容易に手に入れたけれども、しかし背囊や手荷物車では搬出し難いものであった。二度目のパリ和平[一八一五年十一月二十日、ナポレオン一世の最終的敗北の後、ルイ十八世と同盟軍の間で結ばれた]の後、クレッペル通りでは、ユダヤ人は地下室で上手く騙したのだろう[自分の子羊の剪毛をしたであろう]と予感したが、しかしホストの友は承知していて、自分の娘、美しいザーロメを喜んで嫁がせた。モーゼス・フロイデンシュタインとハンス・ウンヴィルシュは一八一九年のほとんど同じ時刻に生まれたこと、そして哀れなザーロメは「花御寮」と呼ばれていたが、お産のとき亡くなったことを我々は知っている。乳母さんがこの乳飲み子を育て、ザームエルは彼を自分の流儀で教育した。これは幾多の点で、消防ポンプ小屋のカリキュラムとは顕著に異なるものであった。当時まだ高尚な文化省は、ユダヤ人の教育を気にかけていなかった。文化省はこの点では、ユダヤ人が全く彼ら独自の道を探すことに任せていて、ユダヤ人はその道を見つけて、それを進んだ。モーゼス・フロイデンシュタインは、彼をクレッペル通りで虐待する無益餓鬼どもが皆目存知していない多くの事柄に通曉していた。

クレッペル通りでは、ユダヤ人を好意的目で見えず、ユダヤ人に対して、「汝の隣人を自らの如く愛せよ」という観点に立脚していない点を不思議がる必要はない。しかし母親達が、古物商の店では、小さな不法な罪のないキリスト教徒の子供達の肉からソーセージが作られ、そのため腸の代わりに、ウールの靴下が利用されていると言い張って、自分の将来性豊かな子孫に対し、古物商の店のことを警告したとすれば、これはやり過ぎであった。

ハンス・ウンヴィルシュにとっても、以前ソーセージの肉に刻まれて、ウールの靴下に詰められるという考えは、魅力的なものではなかった。しかしモーゼスと一緒に薄暗い店の中にどたどたと落ちたとき、とうにこの寓話から卒業していて、そしてただ興味津々と、これまで単にこっそりと通りから敢えて覗いていた神秘的空間を見回していた。

奥の暗闇の中から、父親のザームエルと老婆のエスターが転がり出て来て、今や大声の嗚咽に変わったモーゼスを両腕に抱き締めて、問い質し、落ち着かせた。エスターはあらゆる種類の呪詛を路地の群れに放って、それどころか箒を武器にして、その群れに襲

いかかると、群れは仰天して蜘蛛の子を散らすように四散した。悲しげに頭を振って、古物商はその出来事を説明して貰っていたが、しかし彼は怒りを顕著に爆発させなかった。彼は自分の生涯で数多くの屈辱を飲み込んでしまわなければならなかったのも、多少の屈辱はどうということもなかった。しかし自分の息子の防御者に対しては、大人の男に対するような作法で自分の感謝を述べた。そこでハンスは極めて追従された気分になって、彼に対し満腔の敬意を捧げた。彼は暗い奥の部屋で、一杯のコーヒーと一個のケーキを振る舞われ、ここでも自分の関心を惹き付ける幾多のことを発見し、自らとフロイデンシュタイン一家に対し、締結された交誼を更に継承して行くと約束した。

シュロッターベックおばさんはこの出来事を耳にしたとき、さほど喜ばなかった。彼女もユダヤ人に対してはささやかな偏見を抱いていて、このような交際が自分の育ての子にいかなる利益をもたらすか、理解しなかった。しかしクリスティーネ夫人の方は、自分の亡き夫が生前、隣人のフロイデンシュタインは悪い男ではない、彼とは全く支障なく付き合えると述べていたことを思い出していた。クリスティーネ夫人は、中央通りの一軒以上の裕福なイスラエル人家族のシャツを洗ったことがあって、それ故こう述べていた。向こうのユダヤ人も人間であって、まことに理性的な人間であり得る、と。彼女は、ヴェストファーレンの侍従服の店との交誼に異存はなかったし、またグリュネバウム伯父も「文明化された男」として、そして愛知者[哲学者]として自分の同意を与えていた。ハンスはモーゼスを訪問してよろしい、モーゼスの訪問を受けてもよろしい。近隣の男女は憂わしげに頭を振っていた。しかし運命が手打ちしたことを妨害はしなかった。

彼の目が古物商店の暗闇に慣れたとき、ハンスはそこに多くに不思議なものを見つけて、彼の人生は今ようやく本当の内容物で満たされるように思われた。同時に彼は知識の梯子の第二の段を上がることになって、「市民学校」の最下級のクラスに進学するために、消防ポンプ小屋とジルバーレップフェルの後任に別れを告げた。

これは前進への重要な一歩であって、そのようなものとして然るべく認識され、祝われた。伯父グリュネバウムはその際、最も立派で、最も長い演説の一つを行ったが、しかしこれは彼がプレゼントした一足の新しい編み上げ靴ほどに甥に対し余り効果はなかった。それは、ハンス・ウンヴィルシュが履いた最初の編み上げ靴であった。熱に浮かされたように興奮して、彼はその製作を最初の発端から見守った。それは鋏を打たれていて、その靴底は他に何も見えないほどであった。それを履いて、踏みしめて歩くと、三路地離れていてもその足音は聞こえた。伯父グリュネバウムは傑作をこしらえて、それがそうと承認されると、はなはだご満悦であった。ハンスの胸の中で大きな憧れが、この編み上げ靴によって満たされて、彼はこれを履いて、顕著に昂揚した自負心を抱いて、人生を歩んだ。かくも多くのかくも太い頭部の鋏を足許に有する少年は、すでに自分の立脚点を新しい教師達や新しいクラス仲間に対し、主張できた。そしてハンスはそれを主張して、今やまず異性に対しても、懇ろな関係に踏み込んだ。彼はそれまで異性を、母親やシュロッターベックおばさん以外の異性の場合、とても軽蔑していたのであった。

古物商店の隣りに一人の夫人が住んでいた。この夫人は市民学校の門前でゼンメルパンや果物を商っていた。夫人の名前は関係ない。しかし夫人はおよそ八歳になる娘を一人有していて、この小さな少女は一匹の猫と一緒にあった。この子供がまず亡くなって、それから猫が亡くなった。この果物商の女将も今日ではどうに亡くなっている。一

これらの者達はこの世に埋めがたい隙間を残したのではなかった。しかしこの小さなゾフィーはハンス・ウンヴィルシュの初恋であった。

母親がいないとき、この娘が市民学校側の果物屋台に座っていた。そして娘の横に猫が座っていた。両者とも言いようもなく真面目な分別顔で、赤い頬の林檎や梨の山越しに、胡椒入り菓子やゼンメルパンの籠越しに、美味しそうな砂糖菓子のガラス箱越しに眺めていた。両者は決してこれらの陳列された宝物に誘惑されなかった。義務を守って両者は座っていて、顧客を待ち、商いを、この商会の所有者同様に立派に行っていた。

最初ハンスは勿論、果物や胡椒入り菓子、ゼンメルパンでこの屋台に惹き付けられていた。それから猫が彼に対し重要な引力を及ぼした。この小さなゾフィーに彼が関心を向けたのは最後であった。関係が逆転するまでには、かなりの時間を要した。こうした関係になったのは、騎士的ハンスがここでも庇護者として登場してからで、この機会が欠けることにはならなかった。

ハンスだけが、ゼンメルパン屋台の猫に注目していたのではなかった。他の若い連中も猫を可愛がっていた。しかしそれ以上に猫をいじめていた。この立派な行儀の良い猫に対するあからさまな、あるいは秘匿された攻撃は終わることがなかった。そして小さな姫君は、すべての闇の勢力との戦いの中で、しばしば途方に暮れて、どうして良いか分からなかった。毎晩彼女は自分の四本足の友の雌猫を両腕に抱えて家路についた。するとまた丁度追い剥ぎ達の時となるのであった。どの通りの角でも娘と猫は苦難を耐え忍ぶことになって、常に新たな迫害者が付いて来るのであった。

このような折、ハンスはまた高貴な心根の者として登場し、この無垢な忍従の娘に力の限り加勢した。彼は確かにまた若干の瘤と青い痣とをそれで蒙った。しかし彼が小さなゾフィーを安全にクレッペル通りまで護衛するときの誇り高い気持ちはやはり無視できないものであった。交誼が結ばれ、互いの衷心からの愛着がそこから生じた。毎晩ハンスは果物屋台に入って、自分の庇護依頼人を迎えに来た。モーゼス・メンデルスゾーンが同盟の三番目の者となった。

一春、一夏、そして一冬を通じて、この子供達は互いに付き合った。彼らは一諸にすべての子供の遊びを行った。春はこの上なく美しい花々を頭上に降り注ぎ、夏は若者達の好むすべての喜びを恵んだ。この一年は至福に優しかった。花々や果実で欠けるものはなかった。老人達の胸中には最古の楽しい思い出が蘇った。路地でシュロッターベックおばさんが出会う死者達の影も、おばさんの証言によれば、生きている者達と一緒に喜んでいるように見えた。青年達や乙女達は、素晴らしい現在と、より素晴らしい希望に満ちた未来の中で、二重の人生を生きていた。憂いに満ちた父達や母達も、少なくとも一時的に日々の困窮を忘れた。しかし最も幸福な者は、子供達であった。子供達は、老齢について、死神について、希望について、憂慮についてまだ何も知らなかった。この一年の快樂はすべてまとめて、子供達のものであった。彼らの帝国に全く分別顔の冷たい手で、介入することは、この上ない不正であった。

ハンスは小さなゾフィーを森や野原に案内した。しかし小さな町の鐘の響きを耳にすると、彼らは勿論それ以上長く勝手に緑の野原で過ごさなかった。それでも何という無限のものを彼らはその中で恵まれたことか。万物の権化、世間、絶対的全体性であろうとも、子供に対し果てしない野原や、その上の一片の青空が呈示するよりも、より広大で、

より神秘的な空間を探求者に開示することはない。

無限に対する飢餓を抱いて、人間は生まれて来る。人間はその飢餓を早期に感ずる。しかし人間は分別の年月に達すると、その飢餓を大抵容易に素早く窒息させる。この世にはかくも多くの快適な、滋養に富む事柄がある。人々が好んで口やポケットに押し込む多くのものがある。ハンス・ウンヴィルシュは、今や偉大な世界のハーブの最初の音色が、こっそりと微かに、傾聴している耳に触れるそうした年頃であった。草の中に転がったり、静かに横たわって、葉を揺する風の音に耳を傾け、雲が大気の中を浮遊して行くのを目にし、遠くの山々を遠望して嘆賞の声を上げる年頃、走って行き、虹が大地と接している箇所を見つけようとする年頃、草や樹木、愛する神様、すべての小鳥やすべての多様な蚊、すべての輝かしい甲虫と一緒に君と僕の関係に入ってしまう年頃、言葉の最も純粋な意味で汎神論者[Pantheist]となる年頃であった。

この小さな少女は、学校前の木製屋台の中同様に、真面目に、森の外れや野原の花畑に座っていた。彼女の両手が休んでいる時はなく、彼女の目はいつも万物に対し広く開けられていた。しかし彼女は他の子供達ほど頻繁に話さなかった。しかし彼女の話すことは、他の子供達よりもはるかに分別があった。クレッペル通りの隣人達は彼女に対し、しばしば頭を振って、ませた子と呼んだ。しかし彼女はそうではなかった。緑の木の許での葉擦れの音、陽光、白い雲や薔薇色の雲、静かな青い空、これらについての彼女の想いは、すべての理知にもかかわらず、真に子供らしい想いであった。彼女はその大きな目で、しっかりと深く、この美しい世界を見つめ、あたかもこうしたすべての愛らしく煌びやかなものから、いかばかり、暗闇の中、冬の中、 — 墓場の中に持参できるものか、試したいかのように、かなりの間、目を閉じていた。

彼女、哀れな小さなゾフィーは、冬、子供の病で亡くなった。我々がこの優美な像を思い出しても、かつて存在しなかったように、消えてしまう。

果物小売りの夫人の住まいに至る急な階段の最上段に窮屈にくっついて、ハンス・ウンヴィルシュとモーゼス・フロイデンシュタインは座っていた。ゾフィーの猫は一段低く、階段の上に座っていた。ドアの背後に小さな少女は横になっていた。少女について、この日のうちにも亡くなるに違いないと言われていた。

唯一の朽ちて汚れた窓を通じて、狭い玄関の間が照らし出された。雨は窓ガラスに打ちかかり、風がそれを揺すっていた。一度ならず人々は、両少年をその場から追い払おうとした。しかしハンスは腕力にも説得にも屈しなかった。モーゼスは去って行きたいところであったが、彼のために残らなければならなかった。雌猫は時に小声でニャンと嘆いて鳴いた。少年達が互いに語り合う時も、小声で不安げになされた。彼らは猫を見つめた。猫は彼らを見つめた。しかし死神は、かつてジルバーレップフェル教師が病に伏せていたときと同様、待ち構えていた。 — 大きな声で話してはならなかった。死神はそれを嫌がるのである。

ユダヤの少年もキリスト教徒の少年も同じように時の重大さを感じていた。しかし各人がその流儀でその点の見解を述べた。

「ドクトルがミス・シュロッターベックさんに言ったことを聞いていたかい」とモーゼスは尋ねた。「『彼女はもう長くはないだろう』とドクトルは言った、そしてドクトルは頭を振った、 — こんな風に」。

モーゼス・フロイデンシュタインはドクトルが頭を振って見せたように、頭を振った。そしてハンスは猫を見つめて、猫を撫で、そしてむせび泣いた。

「彼女はもう長くはないのだ」。

しかし猫は再び哀れっぽく鳴いて、あたかも猫もこう言いたげであった。

いや、もはや彼女は長くないのだ。誰よりも私が分かっている、と。

「彼女は亡くなったら、どこへ行くのだろうか」とユダヤの少年は尋ねた。自分の友人を見つめてもいなかった。モーゼスはただ自分一人、そのことに没頭しているように見えた。そしてこの詮索で感情は奥に押し込まれているように見えた。

「青空の中、天使達の中、愛する神様の許へ彼女は行くのだ」とハンスは囁いた。指を口に当てていた。

しかしモーゼスは利口な頭を脇に向けて、雨が奔流となって流れ落ちている軋む窓の方を眺めた。

「おや、彼女はひどい道に行くことになるだろう。途中凍えるかもしれない」。

ハンス・ウンヴィルシュも同様に悪天候の窓の方を見て、青みがかった赤い両手を出来るだけ自分のジャケットの袖の中へ入れた。彼の体は、おばさんや母親が全く気付かないうちにまたしても大きく生長していた。彼は暗いドアの背後で起きていることに関し、小さな鋭いセム族の雄弁家が自分の横でしているように、そのように質問をすることはできなかった。彼はそうするには、余りに沈んでいて、肉体的にも精神的にもはなはだかじかんでいた。彼はモーゼス・フロイデンシュタインよりももっと薄暗い、混乱した、しかしまたもっと痛みの多い感情と戦っていた。遊び仲間の娘の死は、教師の死よりもはるかにもっと鋭い印象を彼にもたらした。初めてハンス・ウンヴィルシュは、自分は自分の人生の一部を失うと感じた。

しかし怖気のする客人、ドアの背後の死神は、物思いにも感情にも頓着していなかった。一気に猫が階段の自分の場からドアに向かって飛んだ。猫は激しくそれを囓り始め、その毛が逆立って、以前よりももっと悲しげに鳴いた。その猫を追い払おうと誰かがドアを開けた。しかし猫は瞬時にその隙間に飛び込んだ。そしてそれから、 — それからハンスも中に入るのを許された、 — 小さなゾフィーが彼を求めている。

その少女は、自分は死ぬ定めと明瞭に分かっていた。大きな真面目な目は、もはやこの世のものではない一つの輝きを帯びていた。ゾフィーは死神に対し、防御しなかった。彼女は全く平静に寝ていて、もはや多くを語らなかった。彼女は自分の目で遊び仲間と別れを告げた。ハンスが大声で、激しく泣くと、彼女はただ全くこっそりと頭を振って、囁いた。

「私はあれを見たの、 — 昨日 — 夜、 — 綺麗な大きな野原よ。お日様がその上で輝いていた、 — それが輝いて、 — 沢山の、沢山の花があった。もうどこも悪くないのよ。明日はすっかり元気になって。とても綺麗な黄金の林檎が、緑の、緑の木々の中にあるの。風が吹いたら、林檎は金の雨粒のように落ちるの。明日私は、綺麗な、綺麗な、大きな、大きな野原にいます。さようなら、ハンス、親愛なるハンス」。

彼女は両目を閉じて、眠り込んだ。そして眠りの中で、永遠の世界へ逝ってしまった。そこは緑の枝に黄金の林檎が掛かっている所である。 — ここ現世で貧民教師が大いなる飢餓を有していて、ここ現世でそれを得ようとして空しかったかの愛しい光輝の一

切がある所である。

猫はこの病気の娘の掛け布団に飛び乗っていて、娘の足許で糸玉のように丸くなって、居心地良く喉を鳴らしていた。人々は猫をそのままにしていた。しかしシュロッターベックおばさんは泣いているハンスを連れ出した。彼がこの遊び仲間の娘と再会したとき、娘はすでに棺の中にいた。

この娘が亡くなったとき、人々は猫を掛け布団から退けようとした。しかし猫は猛然と振る舞って、噛みつき、引っ掻き、吐き出し、それから小さな亡骸が寝台枠から持ち上げられると、ようやく自ら飛び下りた。棺が閉ざされ、二脚の椅子の上、部屋の中央に置かれると、この猫は棺の下に寝て、そこから動こうとしなかった。棺が家から運ばれると、猫は玄関まで供をして、棺を見送った。それから猫はまた階段を駆け上がって、あらゆる隅から隅を探し始め、人々がこれを止めさせようとどのようなことをしても、この探査を諦めなかった。日中、夜な夜な、猫は哀れな声で探し回り、家の中や近隣のどのように粗野な心情の者でも、この猫の振る舞いには、怖気と憂愁とを感じた。この哀れな生き物に最良の食物を一口差し出しても、無駄であった。 — 猫は受け付けなかった。誰もこの猫を乱暴粗雑に扱う勇気がなかった。しかしまた人々はこの猫に恐れをなしていて、猫が一週間後、次第に静かになると、誰もがほっとした。猫は死んだ娘の古い小さな着物を見つけて、片隅でそれに身を包んで休み、そして悲しみと空腹の余り、亡くなった。ハンス・ウンヴィルシュとモーゼス・フロイデンシュタインはこの猫を埋葬した。父親ザームエルがその古物の備蓄から、色鮮やかな箱を棺用として取り出した。

小さなゾフィーと猫の死は、述べたように、ハンスに教師ジルバーレップフェルの死よりもハンスにはるかに大きな印象を与えた。彼は差し当たり、他の少女達と友情を結ばなかった。しかしこの時から、古物商店は彼に対しますます大きな影響を及ぼして行った。シュロッターベックおばさんとクリスティーネ母親は、まことにザームエル・フロイデンシュタインに嫉妬を感ずる謂れがあったことであろう。

第五章

靴屋の息子と古物商の息子との間の、つまりキリスト教徒とユダヤ人との間の友情は、次第にこのキリスト教徒の息子の他の同年輩の者達との交際を狭めることになった。同年輩の者達はこの関係を必ずしも最も好ましい面からは見ていなかった。この関係の幾多のことに関し難癖を付けて来た。それ故ハンスは学校の内外で、多くの苦しみを味わうことになった。洒落た頭の子供達は、この珍しい友情について、滑稽な寸評をものにした。スケッチ素描の才のある者達は、庭園の壁や家の壁、ドアをこの友情に対する多かれ少なかれツボを心得たイラストで飾った。モーゼスとハンスの歪んだ鼻の模写が、その下には別の機知的注解が記されて、度々目撃され、それも思いがけない所に出現したりした。しかし少年達はもはや兩人に対し身体的に手を出さなかった。この関連では少年達は痛い目に遭っていた。ちなみに、兩人に対する興味が完全に消え去って、更に二人のことを気にかげず、そのまま二人を静かに放っておくであろう時が来るかもしれないと予見されていた。

ハンス・ウンヴィルシュはメルヘンの洞窟に座るように、古物商の店に座っていた。

するとザームエル・フロイデンシュタインは、果たして、その流儀で一人の魔法使いとなつて、その商売や人柄、言葉遣いを通じて、子供の情緒に強力な印象を与えずにはいなかった。絵筆も、膠壺も、同様に上手く捌く術を心得ていた。彼は小鳥やすべての四本足類も、忠実に剥製に出来て、それらをガラス箱に入れて、愛好家に売った。彼は珍しいものを永久に狩猟中であり、自分の住まいの中に網の中の蜘蛛のように座っていて、一自分の顧客、購入者や販売者を待ち構えていた。貨幣や半貨幣が、今一度交易に乗り出す試みを示したら、それを見逃すことはめったになかった。それらは小売商や百姓達によって、憤然と軽蔑されて、全く思いがけず、店の倉庫や、革袋の中で発見されたり、差し押さえされたりしたものである。珍しいガラス製の高脚杯やカップも、ザームエルは見分けることが出来て、それらを村々のとても薄暗い片隅や、キッチン戸棚で嗅ぎつけて、所有者の言い値で喜んで支払い、得ていた。彼は先祖の肖像画も好んで購入したが、しかし大抵はその枠のためであった。如何にして、このような「先祖」を有する権利を全く有しない多くの人々が、このようなものを引きずって持参して来るか、一つの不思議であった。如何にしてこれらの小作人、小農、小百姓が、こうした卑小な職人が、鬘をし、胸当てをし、胸甲を付けた堂々たる領主達の絵に至ったのか。この高くかもしを付け、化粧をしたレディーに、この惨めな取引の場でも優美に微笑し、薔薇と百合の香りのするレディーに至ったのか。幾多の家系の誇りと崇拝が、クレッペル通りでは、顔を壁に向けて、極めてみすぼらしく寄りかかっている。そして幾人もの恵み深い旦那様や、幾人もの恵み深い夫人、幾人もの恵み深い令嬢を、この古物商は、単に古い安楽椅子の、がたがたするテーブル、あるいは虫に食われたロココ調箱の添え物として、両肩をすくめて受け入れていた。

ザームエル・フロイデンシュタインは、諸本も扱っていた。豚革の古い二つ折本が価値高い商品であった。結局、著者が以前思いもしなかったような何らかの仕方で有益とならないような古本はないのである。しかし偶然この古物商の店に投げ込まれた幾多の本が、後年ハンス・ウンヴィルシュに対し、著者も満更ではあるまい一つの影響を与えていた。

この店が有している多様な対象物は、単純な貧しさの中で育った少年にとって無限の空間への視線を解き放ってくれた。学校で素っ気なく習うこと、それがここでは色鮮やかな極めて活気ある姿となっていた。そして学校では何も言及されない多くのことがここで始めて彼の前に出現した。

以前、このクレッペル通りに、裕福な両親の子供のものであったある絵本が入手されたことがある。その所有者はとてもそれを自慢していて、それを両手から離さなかった。貧しいハンスはただ遠くからほんのちらりと中を覗くことが許されただけである。その後すぐにまた鼻先で閉じられた。以前仲間の大きなバターパンを夢見たように、ハンスはかなりの時間、この絵本について夢見た。彼は一日中断食したら、一時間でも両手にそれを持つことが出来るのであれば、そうしたことであろう。彼はこの所有者をこの世に存在する中で最も幸せな少年と見なしていた。彼はこの絵本に大きな飢餓を有していて、当時や後年の幾多の他の飢餓同様に、その飢餓を「忘れ」なければならなかった。

さて今や、どの関連でも大いにより内容豊かな絵本が彼の前で開かれて、彼は好きなようにその絵本をめくることが許された。そこで彼の中に、世間の富について一つの予感が兆した。シュロッターベックおばさんとその文庫によって子供の心の中に目覚めさせ

られていて、揺れ動くメルヘンの像や、ぼやけた形姿、響きの中、次第に一層明確な形が浮かび上がって来た。ハンス・ウンヴィルシュが学校で学んだことすべてに、モーゼス・フロイデンシュタインはいつも別な色合いを与えた。父親ザームエルの言葉はやがて、市民学校の教師の言葉同様に、大きな重みを得るようになった。この古物商店でハンスはこの学校を素早く越え出て生長した。

父親フロイデンシュタインは学問に対し強大な敬意を抱いていた。哀れな亡きアントン・ウンヴィルシュが抱いていた大きな敬意とほとんど変わらなかった。しかしハンスの父親が学問を学問そのものために尊敬していたとすれば、モーゼスの父親は、金と一緒に、自分の相変わらず幾重にも圧迫され虐げられた民族にとって、一つの楯となり一つの武器となるお守りをこの学問に見いだしたと信ずるが故に学問を評価していた。この男に対しひどい仕打ちをしてくれた人生は、いつも新たにこの教義を自分の眼前に掲示してくれて、アントン親方同様に、彼は、この強力な防衛の武器、攻撃の武器でもって、自分の息子を十分に武装させるのだと決めていた。アントン・ウンヴィルシュ同様に、彼は世間の中を進む息子に対し、その道を、自分がその道を見つけて進んだときよりも、もっと自由に進ませたかった。アントン・ウンヴィルシュ同様に、彼も子供が生まれたときから、ただ子供の将来のために生きていた。

「モーゼス、汗かいて、知恵を出すことを学べ」と彼はこの少年が彼の言葉を幾ばくでも理解できるようになると言った。「おまえに一個のケーキと本とが差し出されたら、ケーキは放っておいて、本を取るのだ。おまえが上達すると、自己防衛ができ、打たれる必要もなくなり、偉い男になれて、誰も恐れる必要がなくなる。そしてきっとケーキも手に入るようになるだろう。奴等は望もうと、望むまいと、おまえにケーキを与えなければならなくなるのだ」。

モーゼス・フロイデンシュタインはこのような注意を受けると、きらきらする目を大きく開けて、それから固く目を閉じて、多分こう尋ねたことだろう。

「それで私は学んだら、罵られることも、路地で殴られることもその必要がなくなるのですか。私への仕打ちへの仕返しができるようになり、彼らの前で這いつくばる必要もなくなるのですか」。

「おまえに技があって、金を持っていたら、奴等を皆料理できるのだ。おまえは今この片隅に座っていても、こう考えればいい。自分は猫であって、鼠どもが自分の前で踊っていて、自分をからかう口笛を吹いている、と。口笛を吹かせておけ、そして教えてやるのだ、若い猫でも爪が生えたら、猫は鼠と遊んでよくて、鼠はそれでひどい目に遭いますよとな」。

「それでは私は暗闇の中に座って、すべて何でも学びましょう。私が万事を弁えて、金を持つようになったら、彼らから路地で受けた仕打ちの報復をしましょう」。

「私はおまえが金を得られるよう、その加勢をしよう」と父親は言って、隅の老家政婦は忍び笑いをし、手を揉んで、祝福をつぶやき、同時に呪詛もつぶやいた。祝福は、自分の雇い主とその子供、その家に対してで、呪詛は、都市の新町、それにクレッペル通り、それにこれに関係する者どもすべてに対するものであった。 ー

ハンス・ウンヴィルシュがモーゼス・フロイデンシュタインとより親密な関係になったとき、モーゼスは大抵の基本的知識に関し、はるかに彼より秀でていて、その他哀れ

なハンスが仰天し、賛嘆する思いになる事柄に通じていた。彼は椰子の実がいかなるものか知っていた。父親のザームエルがそれを一つ戸棚に隠し持っていたからである。彼は椰子の実の国や猿の国に全く正確に通曉していて、それで次の意見と結び合わせていた、つまりクレッペル通りの少年達も猿の種族であるが、しかし自分、――モーゼス・フロイデンシュタインは、――むしろクレッペル通り出身の一人の少年というよりも、むしろ一匹の猿になりたいものだ、と。

旧約聖書の話しにモーゼスは当然ながら、とても詳しくて、それについてはいつも一人称複数形で話した。我々がエジプトに行ったとき、――我々がサウル国王から離反したとき、――我々がバビロンで幽閉されていたとき、――我々がアッシリア人を追っ払ったとき、と。

ドイツ人がはなはだ残念ながら知らないこの種の話し方を、彼は、自分の民族の歴史を根本的に知っている父親から得ていた。父親はこの歴史を誇りに思い、これについて語るのを好み、大いに話していた。モーゼス・フロイデンシュタインはようやく後年になって実際この独自の話し方を止めた。しかし元来完全にすっかり止めたのではなかった。彼がクレッペル通りの店の思い出や影響を古い衣装のように自ら脱ぎ捨てたかの時代でもそうではなかった。

店には十七世紀末の古いオランダの旅行記が、極めて珍しい銅版画と共にあった。この二つ折判の前でモーゼスは尊大であった。しかしハンス・ウンヴィルシュはこれに夢中になって、他のすべてを忘れた。『健気なカスパールと美しいアンナールの物語』[クレメンス・ブレンターノ作、1817]でさえも、スリナム[オランダ領ギアナ]や、大モンゴルの宮廷や、象や虎、オランダの領主達の誇り高い軍艦、これには大砲が搭載されていて、風変わりな空想的インドの諸都市に礼砲を発するもので、これらの不思議の前では色褪せた。

しかしこれらはまだまだモーゼスを囲繞するすべての富に及ぶものではない。この古物州の店はまだ全く別の不可思議を蔵していた。船乗りシンドバッドのお鼻の鳥ロツホ[巨鳥]の卵は、恐らく空想を虜にする対象であろう。しかし現実の本物の駝鳥の卵は、これが鼻先にあって、指で用心して触れることを許されると、ほとんどもっと大きな魅力を有する。ドアの前のヴェストファーレンの従僕服は、その約束するすべてを保持していた。従僕服は多くの宝物の番をしていて、若い少年の心はこの富でほとんど惑乱させられていた。

ハンスがこの時期、小さなモーゼスのような冷静な若者を側に有していたのは結構なことであった。モーゼスは夙にこの珍しい収集に馴染んでいて、容易に、もはや何物にもびっくりさせられなかった。彼は生来偉大な才能を受け継いでいて、頭の中ですぐに万事を適切に処理できた。与えられた数瞬のうちに、万事を素早く把握した。――一人の子供、真の、誠の、純なる子供、彼はこの子供であったことは本来一度もなかった。

これに対し、真の、誠の、純なる子供、ハンス・ウンヴィルシュはとても長い間、ほとんど通常の期間を越えて、この子供であった。イスラエル人の友との交際があっても、この点では何も変わらなかった。空想が分別よりもなお勝る重みを有していた。ハンスが他のすべての人間の子供同様に囲まれているサークルは、ただ拡大するばかりで、ますます多彩になり、より輝かしく、より誘惑的になる形姿やイメージ、夢で満ちていた。若い魂の丸められた無色の翼は、次第に世間の太陽の生氣ある光線の下で発展して行った。

紺碧、深紅、黄金の軽い微光がその翼を覆い始めた。 — そして世界の庭では、紺碧、深紅、黄金色に、すべての草木の花々が、すべての学問と芸術が揺れていた。すべての九人のミューズや、高貴な女神や、庭師の娘達が座っていて、すべての羽ばたくものども、憧れる魂、開いて煌びやかな夢のことを静かに喜んで微笑していた。

ある晩、ハンス・ウンヴィルシュはとても物思いに耽って暗い古物商店から出て来て、一瞬夕陽の輝きに全く目を眩まされて立っていた。夕陽はまだクレッペル通りの舗石に射し込んでいた。それから素早く通りを渡って、母の家へ飛び込んだ。あたかも大きな想念を出来るだけ急いで運ばなければならないかのようなようであった。しかし彼は静かにシュロッターベックお婆さんの横に腰掛けて、口を開けたまま夏の空をじっと見上げた。夫人はいつもの習慣で、この時間の頃は、戸口の前で靴下編みをしてうずくまっていた。

最初お婆さんは彼に更に注意を払わずにいたが、しかし偶々彼を見つめて、そして編み物道具を膝に落として、叫んだ。

「ハネス、どうしたの。あんた、何て顔をしているの。ねえ、口を閉じて、向こうの人達があんたに何をしたか、答えなさい」。

ハンスは向こうのヴェストファーレン王室従僕服店にかなり狼狽した視線を向けたが、しかし答えず、お婆さんはまずしたたかに彼の肩を揺すって、彼を正気付かせなければならなかった。

「まあ、あの人達のすることと言ったら。子供の頭をすっかり混乱させて。あの連中。ハンスよ、ハンス。愛しい子。正気になって、何を経験し、何の仕打ちを受けたか、言いなさい」。

「彼はラテン語を学ぶのだ」とハンスは叫んで、そして今やお婆さんが口をぽかんと開けた。

「彼は聖ミカエルの祝日[九月二十九日]にギムナジウムに入るのだ」と少年は嘆いた。そしてお婆さんは両手を打ち合わせた。

「私は靴屋になるしかない、それ以上になれない」とハンスはおいおい泣いて、涙が滂沱と流れた。

「靴屋か、何と言った、 — 靴屋になるしかない、それ以上になれないだ」と皮肉に咎める声がした。お婆さんと少年に一つの影が掛かった。二人の前にグリュエネバウム伯父が立っていて、偉大な画家[創造主、父]の筆[息子]に対するもっともな非難であった。偉大な親方がいないので、すべての面貌そのものに、仰天した憤激が現れていた。そのため両目はほとんど頭部から飛び出していた。彼の頭の剛毛、固い剛毛は侮辱された靴屋を意味しているように見え、盛り上がり、かき回された隆起の全体は、尊敬すべき職業組合の傷付けられた威厳を全体示しているように見えた。この男の心の中で、それは最も危なっかしくごろごろ言い、呻り、暴れていた。しかしこの正当な憤激は単に途切れた言葉や文句でのみ発せられることになった。

「こんなチビが — 実直な靴屋業界全体に舐めた口を利きやがって、 — 糞、 — まさにこの自分の耳が聞いたのでなければ、信じられんことだが、 — それほどに増長しておって、 — 自らの目が目撃することになろうとは、 — いやはや、 — 矢でも鉄砲でも来い、 — アダムの時から、靴屋達の一本の尾が、代々つながって、浮かんでいるというのに、 — この情けない賢しらのヒキガエルが、一連の立派な名高い系

統の最後に、この糞餓鬼が出て来て、「一 此奴が 一」。

お婆さんは怒った親方に対し、防衛するように両腕を突き出して、ハンスは不安一杯に彼女の椅子とスカートの背後に忍んだ。

「お婆ん、奴を引き出せ。私が奴の尻を叩かないのであれば、私が奴を伯父、名親、後見人として、殴らないのであれば、奴に銃をぶっ放すことが、称えるべき靴屋組合の親方としての私の職務遂行に当たる。シュロッターベックお婆さん、脇にどいて頂きたい。私はこのやくたいもない、淫らな減らず口叩きの背中に判決主文を立派に貼り付けておこう。この判決により、三日間座る所なしだ」。

「でも親方、この哀れな子は、貴方をそれほど憤慨させるようなことを何か言いましたか」とお婆さんは叫んだ。お婆さんは自分の生涯を愛しい子の弁護のために捧げるつもりであった。

「奴は何を言ったかとお尋ねになるのか。自分は靴屋になる気はない、立派な靴屋稼業を馬鹿にしているから、とそう彼は言ったのだ。奴は自分の伯父、名親のグリューネバウムを頓馬なロバ、俗物と見なしていると、彼は言ったのだ。悪魔は偶数でも奇数でも構わんだろう。しかし私は、このニコラウス・グリューネバウムは正確に我が甥の上着を掴みたい。綸言、汗の如し。私の陽光の邪魔を、丁度都合の良い折を、邪魔しないで頂きたい、シュロッターベックお婆さん」。

お婆さんは神々しい靴屋ニコラウス・グリューネバウムの怒りに屈しなかった。彼女はこの正直者の親方同様に、次第に熱くなって来た。最初は穏やかに説得する言い回しで、それから脅すような口調になって、最後に指と爪を広げて、哀れなハンスを彼女は弁護した。すると近隣の人々が騒ぎで群れになって寄って来て、グリューネバウム伯父は礼儀を重んじていて、かつ、六人、八人、いや十二人のお婆さん達が拳を腋に当てていたら、大抵、大声が発せられて、これには男は誰一人、必要不可欠な分以上に長く持ち堪えられないと承知していたので、彼は譲歩して、少なくともこの交渉の継続を家の内部へ移すことにした。彼は近隣女性達のことを考慮して、ドアに閉まされた。しかしティーブス夫人の憤慨や、キービケ夫人の軽蔑は、かなりの間、それでも中へ迫って来た。

伯父グリューネバウムは今や自分の甥、代子の襟を掴んで、親方アントンの仕事椅子に腰掛け、すすり泣く少年を膝の間に引き入れ、彼を万力の中に挟む如く扱った。シュロッターベックお婆さんは不安げに、しかし力なくその側に立っていた。

「もう一度おさらいするか」と伯父は叫んだ、「この不孝者の犠牲の子羊は、靴屋にならなければならないが、それが嫌なんだな。何故この不孝者は、自分の立派な家庭ばかりでなく、いとも立派な靴屋組合全体をも罵倒するのか、その根本理由が私には分からないとそう思っているのか」。

伯父はその万力を引き締めた。大声でハンス・ウンヴィルシュは喚いた。

「それはモーゼスがラテン語を学んで、それで通りすべてに、そしてこの町全体とそこの少年達すべてに君臨するからです。私の母親は貧しい未亡人で、伯父殿もラテン語を私に学ばせないであろうからです。それにまた何故かという、一」。

「しかしかというわけで、一 シュロッターベックお婆さん、これは全体貴女のお蔭です。そもそも人間が、少年の頭に余計な入れ知恵を仕込み始めたとすれば、貴女がその人物ですな。敬意を持って申し上げますが。何だとラテン語だと、ラテン語でチビは

何と言うんじゃ、侏儒か。向こうのユダヤ人との付き合いも終わりだ。おまえがくんくん嗅ぎ回って近付く姿を私が見たら、おまえの鼻面を潰して、生涯二度と鼻拭きを使わんでもいいようにしてやる。ラテン語だと。おまえの父親はラテン語ができたか。私はラテン語ができるか。それでも我らは親方で、雄弁な人間なのだ。私が赤雄山羊亭で口を開けたら、どんな大法螺吹きも口を締める。私がラテン語で詰めてやらなくてもな。しかし少年、おまえの中で、おまえの親父がまた出現したのだな。親父は実際空想家だった。親父はラテン語はできなかったが、それでもやはり別な気まぐれを育てていたな。しかし私は親父さんの臨終のときに、おまえを一人前の大人にすると約束したのだ。そうやって貰おう。今は丁度フランスではシャルル[十世、七月革命で一八三〇年に倒された、丁度十歳のハンスがラテン語学校へ行きたい年]国王だ。この国王は丁度、私がおまえ相手にそうしたいように、自分の愛しい臣下やフランスの領民を相手にそうなりたがっている。ハンス・ウンヴィルシュよ、おまえはそうしたくなくても、そうすべきなのだ。そこでだ、おまえはおまえの先祖同様に靴屋になりたいか、それともなりたくないか」。

この最後の質問は、万力の新たな激しい締め上げと結び付いて、ハンスに向けられたので、ハンスは伯父の見解との完全な一致を告げざるを得なかった。しかしこの約束を述べるときの、涙の洪水で、その約束の価値は大方が台無しになった。それに正統のシャルル十世も、立派なグリューネバウム親父が自分の振る舞いのお手本として選び抜いたわけではなかった。運命は幾多の道標を、人類に対し必ずしも無害とは言えない謝肉祭の悪ふざけや四月馬鹿をご馳走すべく、ただそのために狡猾に置いているように見えるものである。

黙っておばさんは親父の言葉の洪水を自らに受け流していた。しかし彼がようやく自分の意見を終えると、彼女は反論を始めた。そして夫人は、グリューネバウム伯父同様反論させなかった。

「結構、おいちゃん、話しは終わりですよ。自分の言いたいことを言いましたか。私とこの子と、この四つの壁にとって、幸いなことです。このようなトランペットを聞かされたらぞっとして、逃げ出したくなりましょう。おいちゃんは、立派な男衆です。確かに赤雄山羊亭では一人で大口をたたけばよろしいでしょう。でもここでは他の人々が話しに割り込んで来ます。この子は分別ある男の方を激昂させることは、何も話していません。この子が外国語を学びたいのであれば、あーたが何も知らない外国語のことですが、おいちゃん、あーたがそのことでくぐぐと残忍に暴れて見せる必要はないでしょう。貴方は、貴方の鳥にすら、そのくちばしの育ったようには、一度も歌わせない。貴方は毎日貴方の鷲に、あのデッサウ行進曲を仕込んでいるのでしょうか。グリューネバウムおいちゃん、貴方は本当に靴屋ですか。貴方の手職を自慢する腕を持っていますか。いやはや、編み上げ靴を古い法螺新聞で繕って、そして靴屋稼業を最も上手に営めるのは、ビール・ベンチの上だというのであれば、まさに貴方に打ってつけでしょう。私の方を見なさい。グリューネバウム、あーたは堅い手職に文句ばかり言って来たでしょう。お黙りなさい、あーたのやり方は町中が知っています。家にはまともな椅子一つない。体にはまともな上着一つない。一 鏡を見なさい、それから真実を言いなさい、自分が人類にとって一人の靴屋の手本であるか、見本であるか。グリューネバウム、グリューネバウム、この子が側にいなければ、貴方にすっかりぶちまけるところです。ご立派な、後見人ですとも。で

もただクリスティーネが家に帰ってからにしましょう」。

シュロッターベックおばさんも立派なグリュエネバウム親方を万力にかけていた。そして夫人が締め上げるたびに、哀れなこの男は先ほどのハンス・ウンヴィルシュに劣らず縮み上がった。彼は料理女から生きたまま皮を剥がされるウナギのように身を反らした。両手を彼は頭へ持って行ったが、しかし頭部がキッチン台に釘付けになっていないと分かって、余り安心しなかった。彼の自尊心ははなはだ破壊された。そしておばさんがやむなく息を継がざるをえなくなると、新町全体で、ニコラウス・グリュエネバウム親方よりも一層惨めに見える靴屋はいなくなった。後ろ向きに歩きながら、ドアの方に退いて、内面も外面もすっかり威厳を喪失した一枚の絵であった。

「くわばら、くわばら」と彼は呟いて、門を引き抜きながらドアを開けた。しかしこの呟き声は、呪詛でも、悪態でもなかった。極めて圧迫され啞然とした思わずの感嘆符であった。今日グリュエネバウム伯父は、もはやローマ人の言語に対する戦いを継続することは出来なかった。その上『町と地方のための郵便急報』は、この同じ晩に、とても重要な、前代未聞の、珍しい知らせを載せていた。パリの革命であった。ポリニャック [Polignac 侯爵、1780-1847] は両脚を吊された。五万人のパリ人が砲弾を受けた。近衛兵、常備軍、スイス傭兵が全面的に破壊された。フランスとナヴァラの王座は空中分解した。ギロチン、ラ・マルセイエーズ、バリケードが見られた。...

政治家にして靴屋、後見人、伯父のニコラウスは、頭をぶん殴られた思いであった。赤雄山羊亭で一杯以上の特別ショッペンを空けてから、自分はこの偉大な政治的出来事をとうに予見していたし、予言していたのだと確信して舞い上がることができた。ようやくにして彼はその思いに至り、自分の肉体的状態がふらつくほどに、自分の倫理的、政治的優秀性への信仰がまた募った。彼は自分の重たい頭を、完全に自らに満足した状態にしてベッドに運び、正義の人の眠りを眠った。これはハンス・ウンヴィルシュとその母親がしなかったことであった。

第六章

美しく、愛しい夜がその日中に続いた。全ヨーロッパとその民衆の上に月が輝いた。すべての雲は吹き払われ、今は大西洋に位置し、漂っていた。眠れる者は眠っていた。しかし必ずしも皆が眠れたわけではなかった。

新婚の夜にして、同時に通夜であった。森を抜けて、小川が水をはねて、銀色に輝いていた。大きな奔流は静かに煌びやかに流れていた。森や野原、田畑、湖や河川、小川、これらは完全に月と調和していた。しかしその町々や村々での人類の中の、奇妙なピグミーの種族、これは自分自身との和解がかなわず、この点でいくつかの願望を残していた。月は「穏やかな」月でなければ良かったのに。月は人類に対し、すべての詩人や恋人達の言うように、何もかも照らし出すであろうという評判を守らなければ良かったのに。月は穏やかで、輝いていた。 — その上、月はひよっとしたら町の管理課の信頼にも感動していたかもしれない。この課は月を信頼して、それで通りのランタンに点火していなかった。

月はヨーロッパの上に、同じ明澄さと穏和さで輝いていた。 — 多くの死者がま

だ埋葬されずにいて、多くの血まみれの負傷者が死神と戦っている野蛮で、哀れな町、パリの上でも、平和で広大な谷の中の小都市、新町の上でも変わらなかった。月は穏やかに過密の救貧院や、死体安置所を覗いていた。一月は穏やかにシャルル十世の馬車を、それに劣らず穏やかに、クリスティーネ・ウンヴィルシュがその少年と寝ている低い寝室を覗いていた。

その子供は眠っていた。しかし母親は目覚めたまま横になっていて、自分が耳にしたことを思い出して、眠れずにいた。自分の難儀な仕事から、疲れて、疲れ果てて、家に帰ってから聞いたのであった。

ハンスとシュロッターベックおばさんの伝えた混乱した話しを理解するには、かなり長い時間を要した。彼女は単純な女性であって、自分の日々の仕事と自分の貧しい家政の範囲を越える何らかの件を理解するには、時間がかかった。彼女はある事柄をひとたび理解したら、勿論それをきちんと納得できるよう分析して、そしてすべて個々の賛否を然るべく吟味して、比較考量することができた。しかし暗闇から光を求めての[ハンスの]この努力は、その輪郭が広すぎて、ほとんど理解できなかった。

彼女に分かったのはただ、自分の子供にも、夫アントンが悩んだ同じ飢餓が出現しているということであった。彼女は理解できなかったけれども、しかし尊敬の念を覚えていたこの飢餓、愛しい亡き夫を苦しめたこの飢餓、それは、本や、本の中に秘匿されている不思議な事柄への飢餓であった。過ぎ去った年月、夫を墓場へ運んでからの年月も、思い出を消すことはなかった。静かな夫人の心根の中に、この善良な夫は、すべての風変わりを備えたまま、生きていた。そのごく些細な、取るに足らぬ特異性も、死によって神々しくなり、一つの長所になっていた。彼が仕事を中断して、数分間没頭して、ランプの前のガラス玉を凝視する様、祭日、散歩のとき、突然立ち止まって、大地を眺め、それから天の穹窿を眺める様、夫が夜、目覚めて、数時間眠らずに、ベッドに座って、関連のない言葉を口ごもる様、こうしたことすべてが思い出され、忘れることが出来なかった。この善良な夫が手職をしながら、溜め息と喜ばしい興奮の間で、陽気な気分と悄然とした気分の間で、消耗する様、一月夫がその稀な仕事仕舞いの夕べに、とても研究する様、それにとりわけ、夫が一人息子に期待して、この息子の将来に奇妙な夢想を描いている様、こうしたことがクリスティーネ夫人の心の中に明瞭に浮かんだ。

母親は自分の枕から起き上がると、子供の臥所の方を見やった。月光は掛け布団と枕の上で戯れ、眠っている子供の顔を神々しく照らした。少年は悲しい報告の後、眠って泣き尽くし、その頬にはまだ涙の痕跡が見られた。もっとも今は微睡んで、また微笑して、日中の苦悶はもはや覚えていなかった。都市、新町の周囲の溝や、河川の縁では、蛙が鳴いていた。夜警人の粗野な声が、あるときは近くで、あるときは遠くで、響いた。両教会の時計が正しい時刻を競い合って、とても見解が違っていた。すべての新町のコウモリやフクロウは活気付いていて、これらは自分達の時を十分正確に弁えていて、一分も間違えなかった。鼠どもが寝室の奥の壁で鳴き、一匹の鼠がクリスティーネ夫人のベッドの下で音立てた。やはり眠れずにいた一匹の大黒蠅が、ここ、かしこでぶんぶん言い、頭を窓にぶついたり、壁にぶついたりして、出口を求めていたが、出来ずにいた。ウィングチェアのある居間の暖炉の背後で物音がし、床で足音がし、幽霊のような不気味な忍び足で、「猫」だと安心して思うのが難しかった。予感な長けた魂の持ち主として、普段はすべて

の夜間の物音や音声に鋭く、不安げに耳をそばだてる夫人、そして自分の寝室へ霊の世界が侵入して来ることに少しも疑念を抱いていないクリスティーネ・ウンヴィルシュ夫人も、この夜は、これに傾聴して、鳥肌立つ思いをする時間を有しなかった。夫人の心は、他の事柄で余りに詰まっていた、地上と天上の間でさまよい、人間の神経と戯れる幽霊達も彼女に影響を及ぼせなかった。母親は子供の運命に対する責任が重く自分の心にのしかかるのを感じた。彼女は、無教養の貧しい夫人であったが、だからといって彼女の心配は減じなかった。いや、夫人の心配は、ひょっとしたら、子供の要求についての自分の理解が欠如していて不十分であるが故に、より増したのかもしれない。

長いこと彼女は眠るハンスを眺めていて、とうとう月は天球を更に進み、光線はベッドから消えて、ゆっくりと窓の方へ下がって行った。とうとう完全な闇に寝室が包まれると、彼女は深く溜め息を吐いて、囁いた。

「この子の父親の意志だ。誰だって、この子の父親の意志に逆らうべきではなからう。愛しい神様、哀れな愚かな女の私を助けてくださいまし。正しいことがなされるように、と。この子の父親がそう望んだのです。この子は父親の意志にかなった望みを持つべきです」。

彼女はこっそりと臥所から起きて、眠っている少年を起こさないよう、素足で寝室から忍び出た。居間で彼女はランプに明かりを点した。夫の仕事椅子になお数瞬腰掛けて、彼女は目の涙を拭った。それから彼女は明かりを隅の長持ちへ、すでに我々が先に述べた長持ちに持って行き、その前で跪き、古めかしい錠を開けた。この錠は、鍵に対し、とても長いこと抵抗していた。

重たい蓋が外されると、新鮮な洗濯物と乾いた薬草の匂い、 — 迷迭香[ローズマリー]とラヴェンダーの — 香りに部屋は満たされた。この長持ちにはクリスティーネ夫人が高価なもの、貴重なものとして有するすべてを保管していた。彼女は丁寧に注意して、一粒の涙も落ちないようにした。丁寧に彼女は色鮮やかな布や白い布をめくって、皺を見つけたたびにまた滑らかにした。用心して、古くてつましい玩具、壊れた安物の装身具、個別の琥珀の玉、多彩なガラス玉の腕輪、貧民や子供用のこうした類いの宝物の小篋を脇に置いて、ほとんどこのトランクの底の、この夜の静寂の中、自分が探している当のものまで来た。臆した手で、彼女はまずガラスの蓋の小箱を取りだした。彼女がそれを開けると、頭が一層深く垂れた。それはアントン親方の賛美歌の本を含んでいて、その上にはミルテの花輪があった。遠くの鐘の音、オルガンの音のようなものが、この夜、跪いている夫人の魂の中で震えた。クリスティーネ夫人がこの瞬間目撃したよりも、シュロッターベックおばさんもそれ以上明確にはっきりと死者を目撃したことはなかったであろう。開けられた小箱の上で夫人は両手を組み合わせ、微かに彼女の唇が動いた。確かに主の祈り以外のものは彼女に思い浮かばなかったが、しかしそれで十分であった。

二番目の小箱が最初の小箱の側にあって、樫の木の古いもので、鉄の金具付き、固い錠があった。十七世紀の工芸品で、すでに何世代にもわたって、ウンヴィルシュ家の所有であった。この箱をクリスティーネ夫人はテーブルまで運んだ。それを開ける前に、彼女はまず長持ちの中をすべてまた丁寧に元通りにした。彼女はどんなことでも、秩序を好み、何事にも慌てなかった。

小さなランプと浮かんだガラス玉は、明るく照らしていたが、しかしテーブルの上

の古くて黒い小箱は、その明かりに勝っていた。その内容物はより声高に両親の愛の貴重さを語っていた。あたかもその値段は、千ものトランペットの鳴り響く中、世のすべての市場で告知されたかのようであった。錠がはね上がり、蓋が外された。この小箱は金を保管していた、―― 沢山の沢山の金で、―― あらゆる種類の銀の貨幣、それどころか金貨も一枚、絹に包まれてあった。金持ちならば、正当にこの宝物に微笑することができよう。しかしこの金持ちがすべてのターラー貨幣、グルデン貨幣をその本当の価値通りに支払う手はずになったら、ひよっとしたらその富すべてを合計しても、この黒い小箱の内容物を買取るに十分ではなかったかもしれない。どの貨幣も汗と空腹の代償であった。それに千もの高貴な想いや夢がそれに込められていた。千もの希望がこの暗い小箱に詰められていた。アントン親方は自分の最も高貴な自己をこの中に隠していた。そしてクリスティーネ・ウンヴィルシュはそのすべての愛と誠を添加していた。

誰がこのことを、すり切れた貨幣の小山に感じ取ったであろうか。

小さな冊子が、灰色の下書き用紙をとじ合わせたもので、数全紙分であるが、金の側にあった。父親の筆跡で、最初の数ページにアルファベットと数字が記されていた。しかしそれから死神によって、正直者アントン親方の勘定は終止符を打たれ、そして今や何年も母親が帳簿を誠実に、アルファベットも数字も付けずに、守って来て、そしてその勘定は今でもなお合っていた。

何としばしばクリスティーネ・ウンヴィルシュ夫人は、手を黒い小箱に差し伸べたいという誘惑に屈することなく、飢えたまなベッドに横になったことか、何としばしば一切の可能な欠乏に耐えて来たことか。あらゆる姿をして、困窮が惨めな未亡人の彼女に迫って来た。しかしヒロインのように彼女は抵抗して来た。それに彼女はいかなる時でも、文字や数字がなくても、計算することが出来た。―― 黒いこの小箱から、死んだ夫が息子のためにと夢見ていた幸せな、榮譽ある未来が出現しないとしても、彼女に落ち度はなかった。

一時間以上、クリスティーネ夫人は、この夜、このテーブルを前に座っていて、指で数え、計算していた。同様に一方古物商店の奥の小部屋でも、一人の男が計算しながら、数えながら、座っていた。ザームエル・フロイデンシュタインも、自分の眠っている少年のために目覚めていた。幾多の金貨の巻き筒、幾多の銀貨の巻き筒が彼の前にあった。彼は哀れな未亡人よりも自分の子供の幸運の秤に沢山投げ入っていた。

「私は息子を、武器になるものすべてで武装させよう」と彼は呟いた、「皆には、息子がすべての面で武装していると承知して貰おう。息子は皆を嘲るがいい。息子は偉い男になって貰おう。息子は望むものすべてを手に入れたらいい。私は一人の下僕であった。息子は他の民族の領主となって欲しい。私は彼の生涯の中を生きることになろう。息子は立派な頭、鋭い目を有する。息子はきっと我が道を進むであろう。息子が高みに達したら、父親のことを思い出して欲しいものだ。私は彼の生涯の中を生きることになろう」。

未亡人は自分の惨めな日当を二つに分けた。その最も大きな部分が、櫥の小箱に、長い辛苦の年月の別の貯蓄として落ちた。しかしこれらの劣等な貨幣は、ザームエル・フロイデンシュタインが自分の息子の財産として置いた百ものピカピカのターラー貨幣よりも澄んだ響きを出した。誰もクレッペル通りでは、この古物商が次第にまた何と金持ちの男になったことか予感していなかった。

この母親が凍えてまた部屋に戻ったとき、未亡人の寝室からは月光がすっかりまた消えていた。相変わらずハンス・ウンヴィルシュはぐっすり眠っていて、母親が額に接吻しても目覚めなかった。ランプも消えていた。そしてクリスティーネ夫人はやがてその子供同様に穏やかに眠った。ソロモン王のベッドの周りでは、手に剣を持って、戦いに長けた六十人ほどの男が「夜襲に備えて」立っていた。[雅歌、3,7f.] しかしながら未亡人とその子供の頭部では、一人の精霊が立っていて、この精霊がイスラエルのすべての武装兵よりも良く見張っていた。 —

ほとんど一夏の間、伯父グリューネバウムに対する戦いは続いた。世間はかくも頑固な靴屋を見たことが長いことなかった。泣いても、頼んでも、非難しても、彼は軟化も、感動も、納得もしなかった。どの方面でも七人の親方衆とやり合う一人の男は、二人の阿呆な女どもや、愚かな一人の少年によって、その見解を容易に変えない。彼はそのもじゃもじゃ毛の男の胸の中で、ハンス・ウンヴィルシュは、他のすべてのウンヴィルシュ家の者達やグリューネバウム家の者達同様に、靴屋にならなければならないと決めていた、自分の分別や、理性、心情に対するすべての攻撃を、嘲笑の口笛と共に退けていた。シュロッターベックおぼさんが取り乱すよう、彼がフルートの口笛で焚きつけない日はほとんどなかった。夫人達の怒りが増すにつれ、夫人達が熱くなって議論し、その言葉がより鋭くなるにつれ、一層グリューネバウム伯父はメロディー的になってきた。勇敢な戦闘的メロディーで、彼は大抵すべての新たな交渉を開始し、その交渉を極めて融和的、憧憬的メロディーで甲斐なく終結させた。

「おいちゃん、おいちゃん」とおぼさんは叫んだ、「あの子が不幸になったら、あーたのせいです。 — ただあーた一人のせいです。あーたのような人間は、私のすべての愛しい長い生涯見たことはありません」。

[敵に対して勇壮な]オイゲン皇子の歌が、こうした言葉に対する返事として作られたかどうかは、若干の疑念があろう。にもかかわらず、グリューネバウム親方は全く冷淡に[攻められるトルコ人のように]口笛を吹いた。

「まあ、ニクラス」と妹は叫んだ、「あなたは何という男です。あの子は善良な子で、その教師達はあの子に満足しています。それに父親は、あの子はすべて、学ぶべきことをすべて学んで欲しいと望んでいたのです。アントンのことを思い出して、ニクラス、そして譲歩して、お願いだから」。

グリューネバウム伯父はいつかな譲歩しなかった。彼は、靴屋も同様に立派な、思慮を要する、学識ある仕事であって、手職は黄金の床を有するという考えを、「亜麻布織工の同業組合は清潔」というメロディーで分かるように表現し、そしてそれ以上何も言わなかった。

「涼しい顔で口笛吹いていなさい」とおぼさんは叫んだ。立腹して両腕を腋に当てていた。「阿呆なあーた。口笛吹けばいい。言っておきますが、あーたが逆立ちして見せても、あの子は立派な学校や大学に行って貰います。目の眩んだ鷲のように止まってなさい。口笛吹いてなさい。ウンヴィルシュ女将、泣かないで。あの人々が喜ぶだけよ。ただ虐めて喜んでるのよ。とんでもない暴君。とんでもない野蛮人。女将、あなたの子でしょう。あの人の子ではありません。賢い神様はきっとお見通しです。女将、口からエプロンを離しなさい。おいちゃん、口笛吹いておけばいい。でも後できっちりその責任を取って

貰います。後々天でアントン親方に何と申し開きするか考えときなさい」。

あたかもグリーンネバウム伯父は、後々義弟には素敵な歌、「リスが茨の生垣に座っていた」で申し開きしたいかに見えた。少なくとも彼は瞑想的情緒的に口笛を吹いていて、その上両親指を一緒に捻っていた。

「まあ、ニクラス、何てあなたは頑固なんでしょう」と妹は嗚咽した。「全くお婆さんの言う通りです。あなたの義弟の子に何てことをしているのか、いつか後悔しましょう」。 —

「こんなルンペンの修繕靴屋より、はるかに襤褸[ルンペン]収集人の方がましです。この人は毎日赤雄山羊亭で、ビール・ベンチに座って過ごす、大事な神様の穀潰しなんだから。そしてこんな極道が、哀れな子が行こうとすると、邪魔立てして、その背中を蹴飛ばすのよ。この人せめて両手を綺麗に洗って、髪の毛を梳いたらいいのに。この人を手本、見本にして、それを名誉なことと思うそんな頓狂な人がいるか見てみたい。こんな人もうじきいなくなります。こんな人に限って、他の人が綺麗に体を洗うとか、自分の両親に名誉をもたらそうとかすると、邪魔するのです。でも私は神様を信じています。グリーンネバウム親方、この神様がきっと貴方の正体を暴いてみせましょう。一人の人間が、自分の始末も出来ないのに、後見人を気取るなんて、ほんと、笑い事ではありません」。

「お月さん、あなたの歩みはとても静か」のメロディーは実際人間の感情に宥和的效果があるに違いない。グリーンネバウム伯父は、シュロッターベックお婆さんが話す間、そのメロディーを和らげるように吹いていて、たとえ彼の胸に大きな怒りが沸騰していようとも、世間の人はそれについて何も気付かなかった。ハンス・ウンヴィルシュは、学校から本のナップサックと共に帰って来て、両女性がとても興奮した状態にあって、顔を紅潮させていて、そして伯父の方はとても冷静、沈着、涼しげであるのを見た。 — 彼は多分、また何の話題であったのか、察したことであろう。しかしこの交渉について詳しいことを知るのは稀であった。

通常伯父は、一曲のコラールか、あるいはその他の憂鬱そうなメロディーを口笛にして、その際、哀れなハンスの耳をにやりと笑ってつねるのだが、メフィストフェレスもこの彼の微笑には嫉妬を覚えたであろうが、そのようにして彼は別れて行った。そして女性達は彼が去った後、通常、疲れ果てて無様に間近の椅子に倒れ込み、その後数時間、人間や神の正義について信ずることができない状態にあった。

穀物畑で大鎌が輝き、その刈る音がした。グリーンネバウム伯父は相変わらず譲歩していなかった。風も吹かないのに、多様な果実が枝から千切れて落下した。グリーンネバウム伯父は、以前よりも固く自分の意見に執着した。銀色の蜘蛛の糸が世に張られ、空中を漂った。グリーンネバウム伯父は、一緒に浮遊せず、自分の低い三脚椅子から嘲笑した。森は多彩に、ますます多彩に色づいた。しかしグリーンネバウム伯父の世間と人生についての見解の色は変わらなかった。モーゼス・フロイデンシュタインはますます誇らしげに自分の勝利の中、威張った。ハンス・ウンヴィルシュはますます惨めに、悲しげにそれを見ていた。渡り鳥はその最後のメロディーを口ずさんで、南方への旅の準備をした。グリーンネバウム伯父も口笛を吹いたが、しかし彼は国内にいて、実直に身を養っていた。というのは、自分は新町で、赤雄山羊亭で、それに自分の家庭で不可欠の人物である、とはなはだ確信していたからである。哀れなハンスを救い出そうと、機械仕掛けの神が登場

することはなかった。かくて、結局、彼は自ら道を切り拓く他なかった。彼は自分の小さな胸に長いこと温めて来た一つの計画を実行に移した。かくてお婆さんと母親は目眩がするほどびっくりすることになって、頭の固いグリュネバウム伯父は、完全に我を忘れた。

九月初めのある日曜日の朝、ギムナジウムの教授で、哲学博士のファクターは自分の家でただ一人その帝国を占拠して、自分の書齋にいながら稀なほどに快適に、居心地良く感じていた。その博士教授夫人は、二人の娘と一緒に教会にいて、多分に愛しい神様に対して、自分が時折「この善良な男」に対し、つまり自分の夫にして主人であるこの男に対し仕向けている不穏当な時間のことで許しを請うていた。女中は一身上の都合で出掛けていた。 — この家は静かであった。勿論灰色の一日で、その曇り日が煙草の煙で充満した部屋を覗いていた。しかし教授の喜ばしげな魂は、青い雲の上を、クヴィントゥス[あるいはガイウス]・ガレリウス・カトゥルス[紀元前一世紀]の歌の本を持って、散策していた。自由の歓喜の時を享受していた。 —

愛しいレスビアよ、一緒に愛して生きて行こう。
寿命の尽きた英知の陰口には、
一切耳を傾けないことにしよう。

ベナクス湖畔[ガルダ湖畔]の浄福の半島シルミオーネ、そのザクロの木や松の木の影の中を彼は散策していた。ローマの詩人のきらきらする詩文の波が、現在と、かのレスビア、つまり丁度教会で鋭く甲高い声と一緒に歌っている夫人への思いをすべて、空無の中へ洗い流していた。彼は玄関の鐘の音を聞き逃し、階段を上がって来る不安げなこっそりした足音を聞いていなかった。何かがこっそり彼のドアを引っ掻いて、ノックしたとき、初めて彼は飛び起きた。素早くラテン語のいたずらっ子カトゥルスは、より真面目で学識深い一山の書籍道具の下に姿を隠して、威儀を正して哲学の博士教授は叫んだ。

「お入り」。

誰もこの招待に従わなかった。より大声で招待が繰り返されたが、今度も甲斐がなかった。訝しく思ってこの学者は安楽椅子から起き上がって、長いナイトガウンをしっかりとめて、今やかなり訝しげに、およそ十一歳の小さな学童を自分の書齋に入れることになった。全身が震えていて、涙が両頬を伝っている学童であった。この訪問者がファクター教授殿と会談した際には誰も居合わせなかった。会話の個別の点は不詳である。ただ我々が言えるのは、教会から「何千もの接吻の」優しい印である両の娘達と帰って来たレスビアは、自分の夫がとても上機嫌であるのを知ったということである。彼は夫人が彼に対して期待していた愛想を言わなかった。大股でその部屋を歩き来しながら、こう呟き続けていた。

「私が保証する、 — 正直者の小さな奴だ、 — 目的意識のある頑固な少年、 — その意志を尊重してやろう、 — すべてのオリンポスの神々にかけて、初心忘るべからずだ、成功を祈ってやりたい」。

「何の成功です、ブラージュス。誰の成功を祈っているのです」と賛美歌の本を片付けながら、レスビアは尋ねた。

「人間は踵を持ち上げられて、ステュクス川[冥府の川]に投げ込まれるべきだろう、

いいかい、困窮した世界に対し不死身となって、そして勝利者として男どもの戦いの中から出て来られるようにするために」。

「あなたは今日また、阿呆な訳の分からぬことを言い出す日になっています、ブラージュウス」と教授夫人は苛立って叫び、そして夫をしたたかに揺さぶりたい気分であるかのように見えた。しかし幸いこの瞬間、オイゲーニアとコルネーリアが入って来て、パパに対し子供らしい問いかけや頼み事を浴びせた。パパは母親を指して、空ろな声で引用した。

「ジュピターが稲光シ、雷鳴ヲ轟カスト、民衆集会ハ開カレナイ」。

彼は上着を着て、帽子を被り、杖を取って、外出し、グリュエネバウム伯父を訪問した。このグリュエネバウム伯父は、午後クレッペル通りで、長く立派な演説を行った。これに対しシュロッターベックお婆さんは、素晴らしいコーヒーを淹れたのであるが、その演説はおよそ以下の通りであった。

「靴屋というのは、高貴な尊敬に値する仕事であるが、それでも人間の子がすべて靴屋になれるわけではない。また別の人々も必要であって、つまり仕立屋、パン屋、大工、石工等々である。どのような感情、心情の持ち主に対しても配慮されるべきであり、これは大事に庇護してやらなければ意味がないであろう。しかしながら世の中には更に別の必要不可欠なものがあって、人間は何も必要としなくなる段階に至る前には、沢山必要としている。それ故やはり同様に弁護士や博士も余る以上にいるのであって、その上、教授や牧師も十分以上にいる。しかし主なる神様は、なるがまま、放任されている。悪魔も奇数偶数関係なくて、それで次のような次第となっている。つまり自分の仕事を見いだしたい少年は、自分の鼻は何に向いているか、十分の予見し、思案すべきであるということだ。というのは、自分はリュートを弾けると思う阿呆が、すでに一人以上出現したからだ。しかしまた誰もが編み上げ靴を作れるわけではない。これは、そう思われているほど簡単ではない。さてここに居合わせているのは、クリスティーネ・ウンヴィルシュ、故アントン・ウンヴィルシュの未亡人であり、更に第二に未婚のシュロッターベックお婆さんである。これもやはり健全な人間的分別と生来豊かな才能を有する立派な見本である。更に私本人、ニコラウス・グリュエネバウムがいる。逆立ちしていないと威張る気はないが、こうして全く両足で立っている。この三人の前に、問題になっている生き物、ハンス・ヤーコプ・ニクラス・ウンヴィルシュが立っている。この者は少なくとも勇敢な少年として示威して見せ、愛しい親戚の者達を陰でこけさせようとしたのだ。このチビが」。

ここで両夫人は両手を上げて、若い霊、ハンス・ウンヴィルシュに天の御加護が下って来るよう祈った。しかし伯父は続けた。

「教授殿が私の前に立ったとき、私は椅子から落ちる思いがした。この若造ときたら。しかし教授殿は、称賛すべき、分別のある、人当たりの良い殿方であった。それでこの長い話しの要点を言えば、私はこの件に関与したくない、手を洗うということだ」。

「おいちゃん、それは結構なことでしょう」とシュロッターベックお婆さんは言った。

「それで、このまま行こうと構わん。悪魔には奇数も偶数もないだろう」と伯父は結んだ。

「ニクラス」としかし苛立ってクリスティーネ夫人は叫んだ、「息子は悪魔とは奇

数であれ、偶数であれ、関係して欲しくありません。なるがまま、これも良くないでしょう」。

「お天道様を信頼して、疑心暗鬼にならないことだ」と伯父は呟いた。「若造、過ぎたる学者も、過ぎたる靴屋も、結局は一人の人間だ。おまえの意志を尊重してやる、一畜生、そう拙者は申したのだ。靴屋稼業の良い点を忘れちゃならねえぞ」。

母親の感情は涙の奔流となって弾けた。シュロッターベックおばさんはほとんど歓喜の感動で絶えそうであった。ハンス・ウンヴィルシュは、後年自分にも他人にも、この時の感情について説明できなかった。しかし完全に素っ気なく冷静に立っていたのは、グリュネバウム伯父であった。自分の靴屋の親指を心地良く、短いパイプの煙草に押し付けて、慎重にその蓋を閉めた。立派な仕事を果たした一人の男のようであって、自分に正当なこととして報われるであろう報酬をせいぜい天国の帳簿の方に記して貰っている風であった。

彼は自分の欲するようには見えなかったかもしれないが、しかし自分の甥に対する力を失っていた。そしてこの喪失したものを二度と取り戻せなかった。ハンス・ウンヴィルシュは、自らの小さな手で、人生の舵にかくも効果的な突きを入れて以来、彼はこの正直者の親方に全権的意志で向き合うことになって、それで親方は一層果てしもなく、凝固し、狼狽することになった。外見的にはますます無関心を装うことになったが。

運命は成就せざるを得ず、ハンス・ウンヴィルシュは、アントン・ウンヴィルシュには許されなかった道を踏み出した。翌日の正午、亡き親方は、シュロッターベックおばさんと出会った。彼は、彼らしく、背を曲げて、頭を垂らしていたが、しかし満足げに微笑していた。

第七章

今や我らのハンスの前で開けられた小門は、そこを歩いて行く者皆が承知しているように、古典世界の瓦礫の中から張り出された白い大理石像が厳かに壁面を飾っている広大な高い素晴らしい広間に、すぐに案内するものではなかった。ハンスもモーゼスも速やかにそのことを悟ったが、しかしハンスはモーゼスよりも苦くこの事実と戦うことになった。兩人ともこの神聖な敷居の所で混乱し、慌て、よろめき、語彙という急傾斜の通路にさしかかって、名詞変化や動詞変化の恐ろしい迷宮に転げ落ちた。この迷宮には臨時教師のクロプフライシュが情け容赦ないミノタウロスとしてその犠牲者を待っていた。しかしモーゼス・フロイデンシュタインはすぐにまた立ち直った。しかしハンス・ウンヴィルシュはなおしばらく惨めに後部に座ったままで、途方に暮れ、裏切られ身売りされた思いで周囲を見つめていた。ユダヤの少年は素早い理解力、的確な記憶力を駆使して、すぐに学者の履歴のこの最初の困難を乗り越えたが、しかしハンスはただ難儀して、喘ぎながら、彼の後を追うだけであった。

しかし意志は道を拓く、と諺に言う。そしてハンス・ウンヴィルシュは、自分の友を見失わないという最良の意志を有していた。それに全力を傾注した。そして臨時教師のクロプフライシュは自分の生徒のこの意志を評価した。

幸せな年月よ。いや、この年月はかくも素早く音立てて過ぎ去って欲しくない、ポ

ストゥムスよ、最愛のポストゥムスよ。 [Horaz: Oden II、14]

クヴィンタ[第五学年、卒業まで、小六]の窓から暑い七月の太陽が丁度我らの頭上を照らしていた。そして我々は他のすべての汗に加えて、難儀な文法に厚い不安の玉の汗をかいていた。一方外では木立の中の小鳥達が我々を笑い飛ばしていて、青いノートの上を自由に散策する蠅、生意気にマギスターの先生の鼻の周りでうるさいこの蠅が、我々には羨ましい生き物に見えるものであった。さてもう冬になっていて、雪が地面や屋根に積もり、クヴァルタ[第四学年、中一]の窓に風が勝手に陽気に吹き付けている。風と舞っている雪片は、夏の鳥[蝶]や蠅よりも我々に嘲ることが少ないわけではない。ただせめてもの慰めは、我々は気の済むまでコルネリウス・ネポスに興ずることが許されるからである。というのは、彼はその序言を文法的間違いで始めており、non dubito[私は疑わない]とくれば、[quin 次のことを]なのに、そのように構成していないからである。我々はこの高貴なローマ人に対し、外のマルクト広場で、学校生徒に何世代にもわたってもたらした苦悩と悲嘆に関し、雪玉をしたたかに投げ付けて仕返しをするとき、全く別の満足感を味わうことになる。いや、ポストゥムス[遺児]よ、何と速やかに年月は音立てて過ぎて行くことか。丁度我々はまだ第三学年生[中二、三]として、若猿のように、学問の樹に生意気に、歯を剥き出しにして、おしゃべりしながら座っていて、上述の樹の称賛されてきた果実をさほど美味しいとは思っていなかった。しかしこれが突然全く別様になった。我々は第二学年[高一、二]で「貴方」と話しかけられる。我々自身が夜、我らの夢の中で、臨時教師クロプフライシュの竹の鞭を怖がっていたかの時代は、遙か彼方の灰色霧状の遠方にある。

一 我々は初めて葉巻を吸った結果、戦慄を覚えながらも、英雄的に耐えたのであった。我らの何人かは、自らの社会的地位や威厳について、窓ガラス製の眼鏡を掛けて、それでその見識を拡張する。我々は女学校の第一クラスの前でパレードを披露し始める。そして我らの会話の主要な対象は、ダンスの時間の出来事である。我々は互いににやりと笑いながら、テーブルの下で、拳を腋に当てる。副校長のグヌルマンが古典の詩文の個々の箇所や場面について素早く片付けるときとか、全く飛ばしてしまうときである。一 我々は勿論とうに、徹底的に研究しており、そこをこの本の中の最良のものに見なしているのである。我らの『オデュッセウス』の教科書が常に、デーモドコスがパイエーケスの人々に豎琴の音に合わせて、「アレースの愛と魅力的アプロディーテについて」素晴らしい歌を歌う箇所[第八歌、267行以下]でばらけないとしたら、不思議であろう。我々が異性を、この我らの現存で、愚鈍で熊のような時期に、とても畏怖して、それで我々を最初とても神秘的に、不可解に奇妙に惹き付けるものが、我々を同じとき、とても敬遠して遠ざけているのは、一つの幸せであろう。いや、至福の時よ、我々は少年と青年の中間物で、根本的に見て、我らの生存方法に関し、全く手探り状態で、分別と無分別の間にあり、我々にとっては快適に、しかし我らの愛しい大人の縁者にとっては、不気味に、中間状態のまま、漂っているのである。

プリマ[第一学年、高三]のベンチについて、世間と人生は全く別様に見ている。すでに自負心は前の段階で、我らの胸中では極めて豊かに発展している。今や満開である。我々は名誉に関し、とても敏感になっている。性格が今やますます急速に発展し、何人かの場合すでに強固になっている。勿論我々の状態にとっても満足していることは、もはやなくなる。学生生活がとても間近なものとして誘いかける。そして我らの魂の中で、我らの性

格以上に堅固なものとして、イエナとかゲッティンゲンで帯びる髭の形が決まる。我らの声はもはや上ずらない。しかし多分時々、我々が教師殿達に捧げる尊敬の念に関してその見解が変わる。この点に関し、我らの考え方は、はなはだファクラー教授の考え方とずれる場合があって、それ故我々は恥ずかしいことに卒業試験に落ちることがある。

いや、ポストゥムス[遺児]よ、ポストゥムス、それ故、我々が十歳と二十歳の間の年月をまだ後にしていない場合、どういうことになるのか。この年月はその苦悩と不安を有していた。しかし我々が白髪とか禿頭になり、夕方黄金の獅子亭や銀色の子羊亭、カジノやクラブで我々の椅子を寄せ合わせて、職業の埃を振り落とししたり、洗い落とししたりしているとき、この年月について話すのが一番好きなのだ。我々はこのことを話しながら、妻が家で待っているその時間のことを忘れる。我々はそのことを話しながら、我々の書き物机の上で積み重なっている文書の山を忘れ、今日偉い上司から頂いた小言を忘れる。我々はそのことで、我らのリューマチを忘れ、未婚の娘達のことを忘れ、我らの家主のことを忘れる。家主はまた家賃の三分の一を上げたのである。我々は家に帰った後、ただかろうじて、今日十二時間監禁を受けてきたいたずら者の長男エードアルトに対し、然るべく真剣に対処するのである。我らも同じ監禁にあったのである。それ以来壁が白くならないでいたら、我らの将来性豊かな子孫は、自分の生みの親の当時の生活家訓の一つ以上のものをそこに見いだしていたら。しかし壁は幸い白くなっている。そして当時我らの辛抱仲間のフリッツェ・シャーフナーゲル[鋭い爪]が大胆かつ洒脱に描いた高校教諭のゼーガーは、今日、高校教諭のシャーフナーゲルに対する同様に大胆で洒脱な諷刺画で置き換えられているのである。

哀れ、去るものよ、ポストゥムスよ、ポストゥムス
速やかに年月は流れて行く。 [Horaz: Oden II, 14]

モーゼス・フロイデンシュタインとハンス・ウンヴィルシュは、様々なクラスを経て、その道を進んだ。しかしこの二人に関して、我々は学校生活での二つの例外を読者に指摘しなければならない。モーゼスはすでにその国籍と宗教によって、一つの例外状態にあって、それでギムナジウムの共同体で、一緒に「行動」し、一緒に「議論」する同等の権利を阻害されていた。一方未亡人の息子は、その貧乏故に、陽気な蟬集から離れていざるを得なかった。以前同様、今もこの両友人は、クレッペル通りから孤独に脇道を歩いて行き、終了時刻を待っていた。この鐘が鳴ると、二人は世間の雑踏の中に呼ばれるのである。

以前アントン親方が、その息子の誕生の際、女達の喧噪の中から逃れて行った屋根裏の小部屋、騒霊の部屋を、ハンスは自分の書斎とした。ここに彼は自分のわずかな本とインク壺を置いた。彼はここの物思いと夢想の帝国で幸せな支配者となって、自分が呼び出せるすべての精霊と会話を行った。彼はここですべての学問の入口で控えている番人達と戦いを始めて、汗をかきかき言いようもない苦労を重ねて、セム族の文法家モーゼスならば楽に戯れながら乗り越えて行けるであろう物事を制圧して行った。モーゼスは空想しても物事の進行の邪魔をしないという長所を有していた。彼は明瞭な頭と鋭い目を持って真っ直ぐに進んだ。脇の緑の野に至るが、しかしまた混乱した藪にも導く誘惑の道は、彼

には存在しなかった。モーゼス・フロイデンシュタインは、ファクラー博士がトゥキュディデス[紀元前460頃-395]の難解な構文を構成しているときに、イオニア海の青く微光を発する海面を思い浮かべず、コルキラ島の白い帆船が海上に出現するのにも目にせず、コリント人の百五十隻の船がケイメリオンから迫って来るのにも目にしなかった。教授がタラニーテン[上層漕手]、ツィーギーテン[中層漕手]、タラミーテン[下層漕手]、つまり漕ぎ手の種類について語るとき、船団がぶつかるときの彼らの歓声を聞いていなかった。彼は艦隊司令官の命令の声を聞いていなかった。船の舳先のぶつかる音、勝利者の勝ち鬨、沈んで行く者の悲鳴を聞いていなかった。彼は青い潮が赤く染まるのを見ていず、波が瓦礫や死体で覆われるのを見ていなかった。しかし教授が突然彼に質問を向けても、彼は哀れなハンス・ウンヴィルシュのように途方に暮れ恥じ入って縮こまることはなかった。ハンスはすべてまさに描写されたことに耳を傾け、それを目にしていたが、しかし問題は、ロイキメの麓の戦闘や、ペロポネソス戦争の発端というよりは、deを用いての構成についての教授の見解の方であることを、完全に失念していた。

しかし教授はこのような折、ただ全くこっそりと頭を振るのみであった。いつもは好んで自ら発言する的確なお喋りの一つを省略した。かのとうに過ぎ去った日曜日の朝以来、余りに長いズボンと窮屈すぎる上着姿で彼の前に現れた泣き顔、吃音の少年は、常に彼の心の中で掌中の玉であった。彼は、高等学校のクラスを通じて、自らの道を歩むこの少年を目に留めていた。この内気な青年を更に締め上げるのは、得策ではないだろうと承知していた。それに彼はひょっとしたら、自分の生徒達のいずれか他の者よりも彼の方に強い関心を抱いていたかもしれない。この善良な男は、モーゼス・フロイデンシュタインのことを少しばかり恐れているように見えた。しかし彼に対しても同様に正當に扱った。

我々はすでに古物商店の奥の小室をちらと覗いたことがある。ここでこの小室をもっと詳しく見ることにしよう。ここはとても暗くて、とても汚れて暗い中庭に面した部屋なら仕方あるまいと思われる暗さであった。湿った壁が、その低い窓からの新鮮な風をいずれも遮断していた。実際、建築棟梁は、陽光を技術的に締め出していた。この棟梁は、快適な中世であれば、きっと現実の枢密士牢建築顧問官となっていたことであろう。この小部屋の最も暗い隅には、老家政婦が入っていた。夜と薄明かりの境目に、父ザームエルの机と安楽椅子があった。窓の薄明かりの所にモーゼスのテーブルと椅子があった。

黒い髪の毛をかきむしりながら、ここにモーゼスは座っていた。人生のとりどりの多様性を解決し、それらを容赦なく論理の引き出しに整理すべく、日毎熱心に彼は腐心していた。彼は知識が増大するにつれ、一層心が冷淡になった。蔑み嘲って、彼は自分の中に残っていて温かい空想の残滓を圧殺した。彼は自分と世間にとって有益な享受の道具を作製していたのではない。彼は世間に対する武器、ただ武器を鑄造していた。この仕事の際、彼は一時の休憩も、息継ぎも自分に恵まなかった。

老父は、自分の息子を見かけると、歓呼して骨張った両手を揉んだ。

「息子は自分の道を行くだろう」と彼は呟いた、「息子は光のように出現するであろう。その時宜を得たら、その背を曲げることはないだろう。非ユダヤ人達[Gojim]が彼の前で拝礼するのを目にすることだろう。アブラハムの神よ、私は暗闇の中に座しているだろうが、しかし私の心は笑い、喜ぶことだろう」。

父親のザームエルは、自分の空想をモーゼスのように殺さなかった。空想は彼を高

く持ち上げて、自分の秘匿され抑圧された暗い実存を越えてはるか遠くに運んだ。空想は愛撫しながら、彼を夢の中へと揺すって、自分の子供の頭上に、この世のすべての光輝、すべての威厳と名誉を飾ってくれた。しかしモーゼス・フロイデンシュタインは、自分の意見を声高に表明することはなかったが、その「半分子供のような」父親をすっかり内心軽蔑していた。

ハンス・ウンヴィルシュと古物商の息子との関係は、外見的には変わらなかった。しかしただハンスはまだピュラデス[オレステスの友]として、オレステスを信じていた。モーゼスはこの青春の友を見過ごしていた。しかしこの友を何らかの点で恐れったり、羨ましく思ったりする理由がなかったため、彼はこの友の友情を了としていたが、しかし格別大事に思っていなかった。哀れなハンスの目よりも鋭い目であれば、このことを容易に察していたであろう。しかしハンスは、モーゼスのように幻想を簡単に放棄しなかった。それでこの友情という信頼も固く守っていた。彼はこの暗い奥の小部屋で、幾多の良き人生の時間を過ごした。しかし彼がたとえ自分の圏内から温かい多くの光を運び入れても、この暗い部屋が一層明るくなることはなかった。友の冷たい心が一層温かくなることはなかった。更にこうした一切の他、なお全く別種の魅力が加わった。このため彼はいつも暇な折は、この古物商の家に誘い込まれた。

自分の息子が実際、「お学者」になる道を進んで以来、ザームエル・フロイデンシュタインは、その書籍取引を拡大した。父親が豚革や、フランス風革装、板紙表紙本の古い駄本の山を奥の小部屋に搬入して、それを自分の息子の仕事机の周りに積み重ねない日はなかった。モーゼスの方は、これらの本の大部分を無益なガラクタとして、軽蔑して脇に退けたのであるが、ハンスは、食欲に喜び、それをかき回して、すべて手当たり次第に雑多に呑み込んだ。ギリシア語やラテン語の古典作家に、旅行記、黴の染みついた混乱した神学、忘れられた哲学上の論文、近代の国内外の詩人達で、彼はこれらを同等に評価はしなかったが、同等に歓迎した。彼の精神に現在のことを失念させて、事物の上の青いエーテルの中、夢想して微笑しながら浮遊するのに、これほど慰めとなるものはなかった。結局は友の皮肉な質問や見解による金属的な声で、またクレッペル通りの暗い部屋に引き戻されるのではあったが。この部屋は暗くて、見えるのは黒い中庭という結構な眺めで、中庭では多くの素早い丸々とした鼠どもが走り回っていた。ラ・マンチャの意義深いドン・キホーテ、これ一人が我らのハンスを丸一冬の長い間、上機嫌に耐えさせてくれた。それに鈍く、暗い部屋に紛れ込んだシラーとゲーテの詩文、これらが人生のすべての雨の日を、黄金の陽射しのオリンポスの陽光に変えてくれたのである。

ハンス・ウンヴィルシュは、この時期、地上で幸運な者達の一人であった。グリュエネバウム伯父は、完全に和解していた。彼は最初、周知の渋い顔をしていた後、今や自分の立場を変えて、自分の住まいでも、クリスティーネ夫人の屋根の下でも、赤雄山羊亭でも、自分、ニコラウス・グリュエネバウムこそが、甥に対し、「お学者」という履歴に踏み込むよう、最初の一突き、一押しをしてやったのだと主張した。自分、ニコラウス・グリュエネバウムこそが、甥の抗う鼻を、ラテン語とギリシア語の「繁文縟札御殿」に押し込んだのである、と。彼は恐ろしくハンスのことを自慢し始めて、フォクラー教授には常にある種の日配せをして挨拶した。およそこう意味する日配せであった。「私の申した通りでござんしょう。私の言った通りでござんしょう。この若者が貴方の英知で一杯

の鉢を朝食に頂かないのであれば、私を[黒い、不吉な]縫い糸として靴に縫い付けたらよろしい。あの若者が靴屋に向いていましょうや。いやいや、将来が楽しみでございませう」と。

この世の幸福な者二人が、やはり親方アントン・ウンヴィルシュの未亡人であり、それにシュロッターベックおばさんであった。二人はまさにハンスを偶像崇拜していて、ハンスの将来について放恣な夢に耽り、その様はザームエル・フロイデンシュタインが自分の息子の運命について夢見ている様に負けていなかった。

ハンス・ウンヴィルシュに、自負や高慢さの素地がなかったのは、幸いであった。さもなければ、これは、二人の愚かな女性の過度な従順さや謙虚さによって、極めて盛大に花開いたかもしれない。しかしここでも、他の克己への機会同様、母親の長持ちの中の黒い小箱が想起されて、青年はいつも速やかにまた正気に連れ戻されていた。

この小箱の存在は、ギムナジウム受け入れの後、すぐ彼に知らされていた。

「ステイーネ[クリスティーネのこと]、あれを取り出せ」と伯父グリュエネバウムは言ったのであった、「ステインヘン、あれをテーブルに置け。自分の両親は、何と世にも珍しく上品で、尊敬に値する政治的人間であったことか、彼に分かって貰え、そして彼が分相応に暮らすようにし、自分の父親と母親は何と自分のために飢餓に耐えてきたことか、自分の子孫に後々語るようにするのだ」。

ハンス・ウンヴィルシュは、当時すでに少なくともこの小箱は何を意味するか、予感していた。彼は年を取るにつれ、一層この中に隠されている諦念や、英雄的心意気を察した。両夫人が、それぞれの流儀で、彼の父親について混乱したことを話しながら、その報告におお日々新たな特徴を添えていた。ハンス自身、自ら父親の像を描き、その貧しい環境をまことに魔術的仕方で神々しくする故人のイメージを創り上げた。無学との父の戦い、より高いものへの父の努力、理想への父の飢餓は、息子に継承されて、故人の本性的中の高貴なものがすべて、息子に強く作用して、その力は、ザームエル・フロイデンシュタインがそのモーゼスに及ぼし、述べたことよりも更に強かった。

早期にハンスは、自分は、自分の父親の配慮や母親の犠牲に報いるために、全力を傾注しなければならないと感じていた。自分は、自らの努力で自らの行路を切り拓くため、その機会を等閑にしてはならない、と。困窮による装置は、すべての高貴な心情の者達の許で見られるように、彼にとって貴重な義務へと転化した。いかに素敵な[未来の]日々が、暗いカーテンの背後で、一 つまり、白い服をまとって、頭上に花輪を被り、両手に百合の茎を持って、微笑する若者達が、その時期を窺っていようと、現在の日々も、通り過ぎながら、同様にその花々を撒いてくれた。そしてハンス・ウンヴィルシュは、いかに後年大きな幸運に恵まれても、そのことを決して忘れなかった。

後年、かの夕べの時の思い出は何と甘美なものであったことか。赤い夕陽が冬の雪の中へ沈んで、雪が青白く路地から窓の中を覗き込み、この生徒が、勤勉に勉強して過ごした日中の後、母親の椅子の側に座っていた、かの夕べの時である。母親の糸車の呻る音の許、善良なおばさんの編み物針の音の許、自らの想念と、二人の貧しい女性の単純な言葉から空中楼阁を創り上げるのは、何と甘美であったことか。二人のかくも敬虔な女性の耳許で、すべての空想に耽り、古典語を話すにしろ、現代語を話すにしろ、すべての言葉を発するとき、何と甘美であったことか。この話者が、女性達の視界を越えて、遠くのことを話すにつれ、またクレッペル通りや新町の屋根を越えて、高みに上がるにつれ、この

二人の女性傾聴者は、一層敬虔になったのである。

単に先の世の戴冠者達や、賢人達、高貴な女性達のみが、貧しく低い部屋の薄明かりの中を歩むだけではない時期がやって来た。ハンス・ウンヴィルシュは、大きな[上流]世界の男にもなっていて、一つの裂け目やドアの隙間よりも広く、賢人達や英雄達、高貴な女性達とその家政を覗いていた。この者達は、なお現実の生き身の体となつて、新町で出来るだけ快適な生活を送っているのであつて、貧乏人の少年なら普通は、彼らが辻馬車に乗って、舞踏会へそのカジノへ出掛けるとき、単に人混みに混じつてその玄関先で彼らをぼかんと見送ることがせいぜい許されるだけなのである。

ドミニウス・ブラージウス・ファクラーは教授、哲学博士として、ギリシアとローマのオリンポスに至る鍵を有していたが、国内での自らの地位と、優しく微笑する妻のお蔭で、新町のオリンポスにも若干の影響力を有していて、この力を上手に自分の最良の生徒のために利用した。この学者の脳内には、気まぐれや学的酔狂の無数の軍勢がうごめいていて、この学者に対して、間違つた側面や、不適当な時期に接近を試みる不心得者は、顔面を昆虫の群れのようなものに襲われるのであつた。その群れは、メフィストフェレスがファウスト博士のナイトガウンから放つような按配なのである[Faust, 6592ff.]。しかしこの学者は、同時に善良な男であつて、自分の同様に、貧乏と飢餓の一人息子であつたが故に、それだけ一層、自分を生徒の立場に置いて、その心を考えてみる事ができた。彼の父親は亜麻布織工であつたが、自分の棺衣を織ることさえ出来なかつた。父親は公の費用で身を包まれ、貧民墓に運ばれた。ファクラー教授は、辛苦苦学の末によりやく教授職に就いた。彼は青春時代の苛酷な日々を忘れず、実際神に対し大いに称えられることだが、決してそのことを忘れなかつた。

ある朝、「タキトゥス」の授業が終わると、彼はハンス・ウンヴィルシュを、晴れ着を着て、自らの許へ来させて、一杯のブルゴーニュ酒を気付けに飲ませて、古代人のパトロンと被保護者関係についての論文、この機会には必ずしも適切とは言えない論文を教授して、それから彼を、必ずしも十分に称賛されているとは言えないこの新町の、最も名家である家の一つに案内した。ハンスは震えながら動悸して、彼の後を付いて路地を行き、禿頭の主人に対し、この人はまこと立派にザームエル・フロイデンシュタインの古物商店のヴェストファーレン王室従僕職を果たせるであろう装いであつたが、教授から、目下教育部門で最も傑出した才能を有すると太鼓判を押せる人物として紹介されることになつた。小さな町の高級法学官というのは勿論危険な代物である。しかし次第に人々は彼の風貌に親しんで、また安心できる人物と感じていた。ハンス・ウンヴィルシュもまた、厳かな人物、崇高な人物、神秘的人物という最初の印象が克服されると、自分の頭を上げた。熱心に彼は、六歳と八歳の二人の甘やかされた腕白に関し、自分が認めて貰いたいと思う教育者としての能力を証明しようとした。一体どんな結果になつたか、ここで説明する必要はない。しかし彼が官房長官トリュフラーの家で受けた他の印象については、黙っているわけに行かないであろう。

官房長官夫人は、上流の交際を愛好していた。家には二人の将来性豊かなこの息子達の他に何人かの成人した娘達もいた。この女性達も劣らず将来を囑望されていた。彼女達はハンス・ウンヴィルシュの中に新しい無邪気な予感を芽生えさせた張本人であつた。つまりこの新しい予感と情緒によれば、全能の神である愛は何も育まれぬというもので

あった。流行の服をまとったこれらの人物は、ちなみにその流行の型はただベルリンから半年ずれて、パリからは一年ずれているだけであったが、別世界の生き物と言う他なく、貧窮に育ったハンスの目にとっては、深く遜って見上げる他ないのであった。

しかし彼女達は、彼がそのレッスンをしにやって来ると、彼の側をざわめいて、漂い、通り過ぎて行った。彼は半分開けられたドア越しに、彼女達のピアノ演奏を聞き、銀色の哄笑を耳にした。彼女達は彼にとって、言いようもなく美しく、上品で、高貴であった。彼女達は、多くの謙虚な、愚かな飢えた哀れな奴等にとって、憧れて空しく、「高貴な」人達と呼ばれるかの世界を初めて目にするという機会を提供したのであった。

官房長官の娘達と彼女らの交際圏を目にして、ハンスは有り難や単に短期間であったが、単に伯父グリューネバウムを根本的に軽視するばかりでなく、善良なシュロッターベックおばさんも、確かに良い人ではあるが、しかしとても阿呆な、退屈なオールドミスであると遺憾ながら思うそんな折が生ずることになった。

奇妙なことに、ハンスに対し、その感情の有りようを明確なものにし、それを勿論極めて鋭く分析し、かくて彼を正気に連れ戻したのは、モーゼス・フロイデンシュタイン、首席の生徒[プリムス]であった。

「ハンスよ、君に言っておきたいのだが」と彼は言って、目を瞬いて、両膝を互いに擦り合わせた。 — 彼が他のすべての独自の癖の中で、ただ一つ完全には止められない癖であった。 — 「今、君がどうして粗放になっているのか、君に言いたい。ハンス・ウンヴィルシュ君は、羨望しているのだ。この者に鼻先で一枚のドアが開けられた。しかし誰も呼んでくれない、ウンヴィルシュ様、どうぞお入りくださいませ、と。彼は、他の人達がこの世で楽しんでいるのを、立ち止まって見ていなければならない。彼は、我ら同様、立っていなければならない。口を開くことも許されない。彼が挨拶しても、お礼は言われず、それでも満足しなければならない。お嬢様、次のワルツをお願いできますか、と発することさえ許されない。 — 彼は踊ることさえできない。 — 彼は実際踊りを学ばないだろう。しかし私は学んでやる」。

話者は最後の言葉を奇妙に強調して言った。そして更に付け加えた、「ハンス・ウンヴィルシュ、しかし私はこんな賢しらな雌猿とは踊らない、 — まあ、私をそんな熊のような目で見つめないでくれ、お願いだ、私を食うなよ」。

両友人は、ある散歩から帰ったところで、丁度クレッペル通りに近付いた折、モーゼスは新町の民について多くの他の勝手なことを述べながら、この結論を述べたのであった。暗い路地には、父親の家の低い窓からランプの明かりが漏れていた。ハンス・ウンヴィルシュは友の腕を放して、より急いで窓辺に寄った。窓から覗くと、輝く玉が父親の仕事机の上に浮かんでいた。肘掛け椅子に母親が座っていて、両手を膝の中の編み物細工の上で組み合わせていた。彼女は微睡んでいた。とても疲れているように見えた。働きづめで疲れている。シュロッターベックおばさんは大きな聖書を自分の前に置いて、指でその行を追って、いつもの癖で頭を頷かせていた。モーゼスが重く彼の肩にのしかかってきて、その鋭い鼻を同じように曇った窓ガラスに押し付けたとき、ハンス・ウンヴィルシュはとても動転した。彼は激しい身振りでものを振り落として、普段よりも手短に、お休みと言った。

何という魔法の力が浮かぶガラス玉に感じられたことか。この玉は世界を最も美し

い色彩で神々しくして、それでいてまたすべての事物を「正しい明かり」へ置いていた。我々は大胆にハンス・ウンヴィルシュに、この明かりの許で、彼の空中楼阁建てさせることが許されよう。

第八章

盛装したグリューネバウム伯父は、一つの見もので、威厳があり、堅実で、自負していて、毅然としていた。最初彼をただ一瞥しただけの人は、通常、この視線の後、思わず喜んで、数分間観察を続けることだろう。この観察に対しては、伯父は、それぞれ見つめている人の人柄次第で、愛想良く落ち着いて、それを許すか、それとも真似の難しい「何だと」でお仕舞いにさせるかであった。

その晴れ着を着て、伯父ニコラウス・グリューネバウムはギムナジウムに面した片隅に立っていて、美しく、長い、青色の上着を着ている点で、一人の天使に似ていた。この上着は勿論、その裁ち方に関し、聖人画の衣装と共通するものは少なかった。この上着の胴回りは、製作者によって、とても襟元に近寄せられていて、二個の最上級のボタンがその胴回りの端緒を示していた。明確に裾の下方部にポケットが描かれていて、一方のポケットから短いパイプが、優美に揺れる総と一緒に興味ありげに覗き出していた。伯父は黄色と褐色の縞模様のチョッキを着ていて、ズボンは緑がかった青色であった。ズボンは若干短すぎたが、しかし快適な造作であった。上方は窮屈すぎて、下方は広すぎた。この立派な男の胃の上辺りでぶらぶら揺れている印章は、本来なら数頁の描写に値するものであった。帽子についても何も触れたくない。これも与えられたスペース分をどうしようもなく越えるであろうと案じられるからである。

何故グリューネバウム伯父は、全く通常の平日に、盛装して、ギムナジウムに面する角に立っていたのか。ミューズよ、我らにその理由を述べ給え。美辞のカリオペ[叙事詩のミューズ]よ、鼻から指を抜き給え、御身はニクラス親方を十分に観察された。その神々しい目を学校に転じて、自らの心の中で何が生じているのか、他人をやきもきさせるつもりのない善良な少女として告げ給え。

まことに、これまでこの本のページで言及されて来た人物の中の一人以上の者にとって、興奮する理由があった。ハンス・ウンヴィルシュとモーゼス・フロイデンシュタインがこの緑の木曜日[復活祭前の洗足木曜日]前のこの水曜日、ギムナジウム卒業資格試験を受けるのであって、これが無事終了すると、学校生活を終えるのであった。

それ故グリューネバウム伯父にとって、尋常ならぬ青い月曜日[職人の仕事休み]となつて、盛装して、角に立っていたのであり、それ故誰もが認める頑固さで、平日の市の人混みの中で、自らの席を主張したのである。それ故に、何も知らずに、何故かくも普段と違っておめかししているのかその理由を尋ねた知人は、その上着のボタンを奪われんばかりに握られた。親方はこの日、握り締めたボタンを一向にまた放そうとしなかった。彼の魂は余りに深くこの重大な出来事に捕らわれていた。同じ一つの出来事が、とても多様な観点から観察された。もし向こうの学校での結果が、皆が期待し、願っている通りに終わりましたら、これに対し世間は誰に感謝すべきでありましょうか。他ならぬ名誉ある親方ニコラウス・グリューネバウムでありましょう。 一 耳が聳になった近隣の人々や知人

が、ようやくこの親方の握る手から解放されたとき、これらの人々は、最初の数分、誰が一体ファクラー教授の試験を受けるのか、さっぱり分からなかったことであろう。グリューネバウム伯父なのか、それともハンス・ウンヴィルシュ、この伯父の甥なのか。――

十二時に試験は終わる予定であった。刻々とこの伯父の神経組織はより活発に揺れ始めた。彼は帽子を取って、ハンカチで額を拭いた。彼はまた帽子を被せ、後方に、また前方に押し込んだりし、また左に、右に押し込んだりした。彼は長い上着の裾を両腕で抱え、それをまた下ろした。彼は鼻をかみ、三本の通りの先まで聞こえるほどにかんだ。彼は声高に自分自身と語り始め、そしてその際、身振りが派手で、店の中や、周辺の窓の奥にいた見物の男性、女性を大いに楽しませた。彼に午前中ずっと通行を邪魔された市場の女達は、しばしばその卵籠、野菜籠、牛乳缶を下ろして、少なくとも道義的に、彼の立脚点を移そうとしたが、しかし彼は彼女らの罵言に耳を貸さなかった。彼は犬どもが軽蔑して向かって来ても平気であったろう。

十一時四十五分に、彼は間近の日用品商店で六杯目のブランデーを飲んだ。それに相応しい時であった。というのはとても足がふらついた感じがして、ほとんど倒れそうであったからである。この時から彼は時計を手にした。家宝の時計で、骨董品収集人ならば金に糸目をつけなかったであろう品である。この時計を震える手で痙攣しながら握っていて、町の教会の鐘が十二時を告げると、彼はほぼ「出来上がっていて」、家に帰り、ベッドに寝ても良かったであろう。

彼は更に一杯のブランデーを味わった。それは七杯目で、他の杯とも共同して作用し、その効果は、先行の杯の効果よりも顕著であった。

伯父は今やしっかりと家の壁に寄りかかった。彼は涙を流しながら、微笑した。時折彼は撥ね付ける手の仕草をして、お呼びでない感情を平定したがっているように見えた。この時刻には、新町の住民の若年層が昼食を摂るといのは、彼にとって幸運であった。そのため彼に対する多くの軽蔑や皮肉な意見が軽減された。彼は警察の注目を受け始めた。警察は、母親然と心配して、これ以上待機せず、家に帰るよう助言して、その結果、彼はただ一層強固に壁に寄りかかり、不興げに鼻を鳴らして、喘ぎながら、しゃっくりしながら、最後の審判の日まで、この角で、あの「餓鬼」を待つつもりだと述べた。彼はこれまで公共の秩序をまだ乱していなかったのに、警察は少しばかり控えたが、しかし彼を鋭く注視して、いつでも飛び込んで、取り押さえる覚悟であった。

幸いなことに、ニクラス親方を監視していたのは、称えるべき保安当局の他に、彼の守護天使もいた、というかむしろこの天使は丁度個人的用向きから戻って来て、その監視の仕事をもた再開したのであった。この天使は、事態の進捗にびっくりして、それで向こうの学校では、ファクラー博士教授が、その学識ある頭の中で、昼食を待っているレスビア夫人のことを思い出して、激しく驚くことになったのだが、これは恐らく多分この天使の介入のせいであったろう。素早く教授は時計の方を見て、自分の席から飛び上がった。序列に従って、他の教師達も彼に従って、ざわめき起き上がった。次第に目の前ですべてが浮遊して来ていた受験生達も同様に、目眩がし、汗かきながら、疲れて起き上がった。―― 後わずか十五分ほど、グリューネバウム伯父は、自力で平衡を保たなければならなかった。―― 十二時四十五分に彼は、沈み、青白く、興奮している甥の両腕の中によろけて落ちた。―― 合格。ハンス・ウンヴィルシュは勝利していた。グリューネバウム

伯父も勝利していた。一方は七人の試験官の教師達の質問に勝利し、もう一方は七杯のブランデーに勝利していた。 — 合格。

ファクター教授は、伯父に近寄って、お祝いを述べようと思ったが、しかしこの立派な伯父の陶然とした状態を知って、全く驚いて止めた。モーゼス・フロイデンシュタインは、同級生首席で、ハンス・ウンヴィルシュが四方八方に向けている情けない惨めな視線を見て少なからず笑った。しかし果報の時であり、彼の心はいつもより優しくなっていて、彼は友人に救助活動を申し出た。そしてこの両若者の間を、古参の快活な少年、ニクラス・グリュエネバウムは、微笑しながら、ろれつの怪しい舌で、むせび泣きながら、よろめきつつ、クレッペル通りまで帰った。

この伯父が、低く暗い部屋で早速間近の椅子に倒れ込み、両腕をテーブルの上に、そして頭を両腕の上に置いたのは、何の意味があろう。どうして母親クリスティエネとシュロッターベックおばさんが、この時刻、グリュエネバウム伯父のことを気にかけよう。二人の女性は彼を、自らと七杯のブランデーに任せていた。両女性ともほとんど親方同様頭の中が真っ白になって、混乱していた。親方がしゃくりあげ、微笑していたように、両女性とも互いにしゃくりあげ、微笑していた。そしてハンスも、彼らに感動と歓喜の点で負けていなかった。

その一日は、クレッペル通りの二人の少年が勝ち取ったものであった。受験生の中で首席は、勿論モーゼス・フロイデンシュタインであった。しかし次席は、ハンス・ウンヴィルシュが得ていた。

この部屋では、すべてが普段とは全く異なる外見となっていた。魔術的明かりがすべての上に注がれていた。ガラス玉が照らしていたのは、不思議ではない。この玉は、太陽と余りに歩調が合っていた、このような日、あたかも自ら小さな太陽であるかのように、輝いていた。正確に覗き込む人がいたら、予想以上に映し出されているものを目にしたであろう。笑って、泣いている顔、壁の一部、青い空を一部含むクレッペル通りの一風景、ヴェストファーレン王室従僕服と古物商、ザームエル・フロイデンシュタイン、この男は上述の従僕服を奇妙に素早く鉤から外すと、自分の家の店とドアを閉めたのである。

シュロッターベックおばさんは、浮かぶ玉に模写される経過を窓越しに見ていて、丁度その点を不思議に思って伝えようとしたとき、グリュエネバウム伯父がその立派な頭をまたテーブルから持ち上げて、自分の周辺を驚き以上の視線で観察し始めた。彼は目をこすって、髪の毛に手を入れ、こう請け合いながら、つまり過度の歓喜や歓声は、いずれも危険なものであって、自分の「生身の見本」が示すように、卒中に類似した発作をもたらしかねないと述べて、家族圏における自らの地位を取り戻していた。正気になるにつれ、優美な演説の才能が豊かにまた蘇って、彼はそれを贅沢に使った。

「かくてここにいる若い人間、我らの甥にして後裔の者は、その愛しい縁戚の者達に対し立派な名誉をもたらした。靴屋稼業は問題とならないだろう。小さな頭部を彼は幸い、穴から抜けて、持ち上げた。それで彼は時と共に知恵も付いて、糊口を凌げるようになろう。彼が頭に続いて、足の方も引き出せるようになった暁、壁のこちら側の我々のことも忘れないでいてくれるであろうと楽観しても良かろう。確かに非凡な者は、このような人生格闘で頭がねじれてしまい、それで壁の背後にいた者達のこと、誰がいつも一緒にいて、その昔、力の限り応援してくれたか、忘れてしまうという例が多い。しかしここに

いる現ハンスは、その伯父のこと、同様に、またその母と、わけでもシュロッターベックおばさんのことを忘れないで、彼らが彼に何をしてくれたか、いかに彼は彼らに対し感謝しても十分に感謝しきれないことか、覚えていることだろう。今や彼はそこに、クリスティーネ・ウンヴィルシュ、旧姓グリュエネバウムよ、今や彼はそこに、生娘のおばさん、立派な心根で一杯の頭をして、立っている。そして彼の両頬に涙を流している。これは喜ばしい眺めであり、嬉しいことである。彼は自分では背負いきれないほど学んだことを、彼のためによしとしよう。だからおばさんが彼にギリシア語で尋ねても、彼はラテン語で答えるであろう。それで我々はこの恵まれた才能に感謝することにして、悪魔は偶数も奇数も平気の平座としても、そのことは案じないことにしよう。少年よ、こちらへ来なさい。たとえおまえが称えるべき手職を無礼に軽蔑したことがあったとしても、そして今や靴屋より牧師により近付いているとしても、こちらへ来て、おまえの伯父を抱擁しなさい。この伯父は、おまえに心の奥底から、今日の日のことを、おめでとうと言う者だ」。

伯父がかくも情熱的に発したこの無茶な言葉には意味があった。しかしたとえ彼が愚鈍なことしか発しなくても、ハンス・ウンヴィルシュは構わず、素早くこの実直な男の大きく広げられた両腕の中に飛び込んでいたことであろう。数分間伯父と揺すって抱き合った後、彼はもう一度母親と接吻し、更に同じことをおばさんと繰り返し、その間に自分の溢れ出る感情を出来るだけ言葉にしていった。

「皆様のご恩には感謝しきれません」と彼は叫んだ、「母上、母上、父上が生きていたらと思います」。

母親はこの息子の言葉に、勿論、声高な流涕に泣き崩れた。しかしおばさんはただ膝の中で両手を合わせていて、頭で頷き、我知らず微笑して、それでも自分の思いを口にしなかった。しかし突然彼女は急いで椅子から起き上がり、クリスティーネ夫人のスカートを掴んで、窓の方を秘密めかして示した。

誰もが彼女の合図した方向を目で追った。しかし彼女以外誰も何事か気付かなかった。クレッペル通りは、真昼の陽光を一杯に受けていたが、その住民は誰も外に出ていなかった。古物商の家は、五十年前からすでにその住人が去っているかのように見えた。ただ一匹の猫だけが、この静かな時を利用して、用心深く路地を横切っていた。

「明るい日中、怖気のする思いにさせてくれるなあ」と伯父は呟いて、おばさんを臆した横目で見た。母親は息子の手をより固く握り締め、より一層自分の方に引き寄せた。シュロッターベックおばさんの神秘的才能について、ハンスの意見がどのようなものであろうとも、この瞬間、彼は、彼女の振る舞いが引き起こす感情に対し、自らを守ることができなかった。

この重大で幸福な日の後、朝の目覚めはいかなるものであろうか。征服した戦場にテントを勝利して張った勝者、あるいは、婚約して舞踏会を迎える若い娘なら、試験を終えた後のハンス・ウンヴィルシュと同じように目覚めるかもしれない。神経はまだ静まっていないが、しかし浄福の感情に浸されていて、それで静まる時間を有しているのである。まだ大きな興奮の個々の戦慄が魂の中では震えているが、しかしそれでも、いやまさにそれ故に安心して、それは一つの歓喜であると感じられる。もし人が、戦いの前や願望達成前の希望、それに達成後のこの最初の混乱した不分明な瞬間とを、人間の幸運から取り除いたら、この幸運の中で何が残るであろうか。

最優秀合格、と陽光が微笑した。陽光は、ハンス・ウンヴィルシュが瞼を半分閉じて横たわっているベッドで戯れた。最優秀合格と窓前の早く目覚めた雀や燕が囀った。最優秀合格と洗足木曜日を告げる鐘が叫んだ。最優秀合格とハンス・ウンヴィルシュは寝室の中央に立って、自分自身に屈んだとき、言った。

彼の着替がまだ完了していないとき、母親はすでに忍び込んで、上がって来た。彼女は自分の靴を階段の下の所に置いて来て、ハンスの小部屋のすぐ近くに寝室を有するおばさんを起こさないようにした。彼女は息子のベッドに腰掛けて、素朴に誇らしく彼を眺めた。彼女の視線は彼の内奥にまで心地良かった。

下では祭日のコーヒーが待っていた。おばさんがテーブルに着いた。おばさんはその靴を上自分のドアの所に置いて、学生[ハンス]とクリスティーネ夫人とを起こさないようにした。双方のこの用心のことで小さな笑い声が生じた。一個のお祝いのケーキもあった。洗足木曜日は、半日の祝日にすぎないけれども、難儀な仕事で苦しんでいる者、皆が承知しているように、この日は終日の祝日として祝われるべきと定まっていた。

最初まず人々は勿論教会へ行った。その前にハンスは今一度古物商店のドアをノックしたが無駄であった。老ザームエルが国王ヒエロニムスの従僕服を鉤から外して、かくてその服の地位、あるいはむしろ社会生活でのその揺れを永久にお仕舞いとして以来、そのドアが開けられることはなかった。その背後で何が起きたのか、クレッペル通りの人々にとっては、一つの謎であった。しかしハンスにとっては、もっと大きな謎となっていて、ハンスは試験から帰宅した日以来、友と再会することがなくて、向こうの家に入ろうとどのように試みても無駄に終わっていた。年金暮らしの町の捕吏、ムルクスは、相変わらず詮無い憤激に駆られ、以前よりももっと半身不随で、自分の肘掛け椅子からクレッペル通りを注視していたが、すでに職務上の現警邏、後継者に「呪わしくいかがわしい件」のことで、注意を向けさせていた。実際すでに市長がそのことで頭を振っていた。 — その静かな家は、町の平安を、酔いどれの乱暴者以上に脅かし始めていた。

しかし鐘が教会へ呼んでいた。そして伯父グリュエネバウムは向かっていて、青い上着に、海のように緑のズボン、縞のチョッキで、すべて硬軟の誘惑に備えて、すべての賛美歌の中で最も強力な賛美歌を手を武装して、彼は自分がのし歩くすべての通りでひときわ目立っていた。彼はキリスト教徒達、政治家達、それに彼が居合わせて名誉を付与している文明化された人間達のすべての集会の中で一つの装身具であった。

ハンスは母親と手に手を取って進んだ。おばさんの側には伯父が歩いていて、伯父は、昨日 — 昨日自分の感情に圧倒された角を曲がる時、少しばかり自分の自負していた礼儀作法を失念した。とても赤いハンカチを彼は取りだして、激しく鼻をかみ、そのようにして無事、邪悪な箇所を通り越して、そして自分の威厳を破損なく家族の教会席に収めた。 — 我々が伯父の歌声に一章を捧げることが許されないのは残念である。一人の靴屋が、鼻を通じて、これほどまでに敬虔に強力に賛美歌を歌うことはない。

ハンスはこの日、説教を余り理解しなかった。説教はかなり長かったが、彼にはとても短く思われた。最優秀合格とウンヴィルシュ家の教会席側の古い墓標の石像骸骨さえもにやりと笑った。この怪物は、ハンスが長年、子供時代からこの方、教会概念と切り離せないでいたものであった。オルガンも、すべてのパイプを通じて、最優秀合格と歌った。そして家族がこの神の家のドアの前に達するまで、伴奏した。最優秀合格ととりわけファ

クラー博士教授が微笑した。教授もコルネーリアとオイゲーニアと一緒に同じように教会へ来ていた、自分の鼻根の生徒の親戚と一緒に一定距離歩くことを、自分の品位に関わることは思っていなかった。教授はグリュエネバウム伯父に、今や遅ればせながらお祝いを述べた。

最優秀合格とすべて出会う人達の顔に書かれているように見えた。まことに珍しい話である。

握手し、挨拶して、教授は別れ、オイゲーニアとコルネーリアは、内気で赤面した学生の不器用なお辞儀に対し、可愛い膝屈めで応えた。――するとまたクレッペル通りに達して、住人達はすでに晴れ着を脱いで、平日の服を着ていた。

しかし彼らはまだ働いていなかった。クレッペル通りは大きな興奮に包まれていた。老いも若きも立っていて、叫び、走り、交互に身振りを交わしていた。

「おや、一体何事だ」と伯父は叫んだ、「何があった、どうしたのだ、シュヴェンクケッテル親方」。

「彼が、彼がそうだ」と返事があった。

「畜生、誰のことだ、誰に何が」。

「ユダヤ人の、フロイデンシュタインだ。仰向けになっていて、喘いでいる、――」。

女性達は両手を打ち合わせた。ハンス・ウンヴィルシュは固まって、青ざめて立っていた。しかしグリュエネバウム伯父は、鈍重に語った。

「悪魔は何でも奪う、奇数も偶数もない。ハンス、慌てるな、――いやはや、もう去って行った」。

猛然と走ってハンスは古物商の店の方に行った。そのドアは今や開けられたままで、人々が密に押し寄せていた。肩越しに人々は覗いていた。誰も暗い室内に異常なものを目にしていなかったが、誰もその場から離れなかった。クレッペル通りの人々はこのような無料の椿事を殊の外好んでいた。

苦勞して、呆然と、ハンスは踏み分けて進んで行った。ようやく彼は店の暗がりの中に立ったが、あたかも自由で新鮮な春の気から永遠に締め出されたかのような感じがした。人々の顔が、霧の中からのように、入口の階段から凝固して彼を見つめていた。奥の部屋へ通ずるドアの取っ手に、彼が丁度震える手を置こうとしたとき、このドアが開いた。

医者が出てきて、その眼鏡を元に戻した。

「いや、貴方か、ウンヴィルシュ」と彼は言った、「痙攣性卒中[アポプレクシア・スパスマディカ]。胃の、痙攣性卒中だ。差し当たり手当はすべて講じた。一時間後また見てみよう。さようなら[良い食事を]」。

ハンス・ウンヴィルシュはドクトルの最後の願いに返事をしなかった。ドクトルのみが昼食へ向かったからである。しかしハンスは、すべての精力を集中して、奥の部屋へ入った。ここは今や臨終の部屋に変わっていた。執拗なアンモニア・エキスの匂いが彼を襲った。隅の臥所に病人がぜいぜい言っていた。当地のラビがすでに来ていて、ベッドの頭部の方に座っていて、ヘブライ語の祈りを呟いていた。その祈りに老エスター夫人の声が別の側から時々混じった。

臥所の足許の方には、動かずモーゼスが立っていた。彼はベッドの柱を支えに立っていて、病人をじっと見つめていた。彼の顔の筋肉はピクともしなかった。彼の両目に涙の痕跡はなく、彼の唇は固く閉じられていた。

彼はハンスが近寄ると、向き直って、その冷たい右手を友人の手に置いた。それからすぐに顔をまた戻して、再び病人の父親の方を見た。彼は試験の日以来、頭一つ分高くなったように見えた。彼の目の表情は言いようもなかった。――恐ろしい比喻を使えば、あたかも死の天使が最後の砂時計の砂が落ちるのを窺っている按配であった。――モーゼス・フロイデンシュタインは、いつの間にかハンサムな青年になっていた。

「いやはや、モーゼス、話してくれ、どうしてこうなったのだ。どうしてこんな急なことになったのか」とハンスは囁いた。

「誰も分からないよ」とモーゼスは同様に小声で言った、「二時間前まではまだ一緒に静かに座っていたのだ。すると、――まあ――父は私に色々書類を見せて、そして一緒に整理して、――昨日から整理することが色々あったのだ、――すると突然父が呻いて、椅子から落ちた。そこで、――こうして父は横になっている。ドクトルは言っている、父は二度と起き上がれないだろう、と」。

「とても怖い話した。私は昨日何度もこちらのドアをノックしたのだ。何故誰も中に入れなかったのだ」。

「そこの父が望まなかった。父はいつも頑固なところがあった。父は、その日、私が幸い試験に合格したら、自分の店を永久にたたむと決めていたのだ。父は秘密の箱や引き出しを私に見せるとき、周りに目撃者や妨害者を見たくなかったのだ。いつも頑固な所がある男だった。今は店と一緒に自分の生涯もたたもうとしている。――誰もこんなこと思っていなかった。誰が思い付こう」。

この言葉が話されるとき、声は抑揚もなく嘆いていた。しかし目には、悲しみや嘆きではない何かの白く光っていた。秘かな満足感、抑えられた勝利、一つの幸運の確信が見られた。それは突然明るみに出て来たが、これほど一杯には希望されていなかったもので、差し当たりまだ暗い外套の下に隠されていなければならないものであった。

我々はこの父と息子が昨日からの時をどのように過ごしたか、語ることにしよう。するとモーゼス・フロイデンシュタインが臨終の父を見ているときのこの視線の意味を説明できよう。

ハンス・ウンヴィルシュの親戚同様、大変興奮して、ザームエル親方も自分の息子の帰宅を待っていた。休みなく彼は自分の家の中を歩き回り、掘り返し、箱の開け閉めや、まるで用のない片隅の詮索を始めた。あたかも自分の所有物、自分の数千項目の取引商品の最終点検を欲しているかのようであった。彼は一滴の酒精分も唇にしていなかったが、この頃彼は、つまりグリュエネバウム伯父が学校の向かい側でしっかりと壁に寄りかかっていた頃、この伯父に劣らず酩酊しているように見えた。彼が長いこと自らの裡に温めていて、今や実行に移す段階になっている偉大な決心のために、彼は酔っていた。十一時頃、彼は家政婦エステルを奥の部屋から追い出して、ドアをしっかりと閉めた。神秘的鍵を彼は取りだして、書き物机の中の神秘的引き出しを開けた。がたがたと或る神秘的戸棚の神秘的ドアが開いた。金貨や銀貨の音がした。国債証書や類似の高価な書類がざわざわ言い、その物音、ざわざわの間、父ザームエルは呟いていた。

「あの子は暗い片隅で生まれた。あの子は明かりを求めることだろう。あの子は暗い家に座っていた。あの子は宮殿に住むことだろう。あの子は奴等に蔑まれ、殴られた。あの子は奴等に法に従って、仕返しをすることだろう。目には目を、歯には歯だ。あの子は良い息子だ。あの子は人間が高みに達するために、必要とするものを学んだ。あの子は性急な子にならずに、ここ、この机の所で、本を前にして、静かに座っていた。あの子は自分の仕事をした。そして私は自分の仕事をした。あの子は、ここ、このテーブルの所で、私を見いだすことだろう。あの子が、若い時分、ずっと静かに座っていた所だ。しかし今やあの子は出て行くことだろう。私はここに留まるつもりだ。それでも私の目は、我が道を行く彼の後を追いかけるつもりだ。そして大いに喜ぶことになる。私は自分の目であの子をいつも追っていた。あの子は良い息子だ。今やあの子は大人となった。あの子の父も、もはやあの子に対し、何も秘密を持たないことにしよう。六百枚、七百枚、一二千枚 — 良い息子だ。 — 我らの父祖の神よ、あの子とあの子の子孫に祝福を与え給え」。

外でエスターの叫び声や、祝福、呪文が聞こえた。ドアがノックされて、彼は自分の計算や思考から覚めて、立ち上がった。

「アブラハムの神よ、あの子が帰って来た」。

震える手で彼は門を引き戻して、入って来る息子を両腕で抱いた。

「帰って来たな。帰って来たな。我が息子、我が妻の息子よ。さて、モーゼス、どんな出来だった」。

モーゼスの顔には何の変化も生じなかった。彼はいつものように冷淡に見えた。彼は落ち着いて父親に卒業証書を渡した。

「ここに記載されている通りに、教師らは書かなければならなかったと私には分かっていました。教師らは顔をしかめたことでしょうか、しかし私に首席をやらなければならなかった。止めてください、父上、浮かれてはおかしいです。エスター、止めなさい。教師らは向こうのセンチメンタルなハンスを上押し上げたかったことでしょうか。しかしそうできなかった。私には分かっていた。父上、すべての阿呆な神々にかけて、今朝は何を仕出かしたのです。金貨ですか、金貨の山。これは何です、何の意味です。いやはや、どこから、 —」。

彼は止めて、テーブルを覗き込んだ。これを目にすると、彼のいつもの自制心は、少なくともしばらくの間、完全に消えていた。

「おまえのものだ、おまえの。すべておまえのものだ」と父親は叫んだ、「私は言ったろう。おまえがおまえの責務を果たせば、私は自分の責務を果たすつもりだ、と。これがまだすべてではない。ほら — あそこに」。

老父はまた壁戸棚へ飛んで行って、更に若干の軋む音の袋を黒い床に投げ、更に若干の証書の束をテーブルに投げた。彼の目は熱病のときのように、輝いていた。

「おまえは十分に武器が備わっている。頭を上げるがいい。腹が減っているなら、食べるがいい。おまえの感覚が欲するものすべてを奪うがいい。おまえが利口であれば、これらはそれをおまえにもたらすことだろう。異郷の地で、おまえは偉大な男に出世しろ。道々、油断するな。立ち止まらないことだ、立ち止まらずに、進め」。

向かい側の家の浮かんでいる玉に、ザームエル・フロイデンシュタインが急いで出

て来て、ヴェストファーレンの従僕服を鉤から外して、それを古物商店の奥へ仕舞い込む様子が映し出されていた。彼はかくて自分の商店を永久に閉ざした。 — この従僕服は、掛け看板として、古物商とは元来何の関係もない幾多のことにも奉仕していた。この服がクレッペル通りから消えたことは、不幸ではなかった。

アントン・ウンヴィルシュ親方のガラス玉が、モーゼス・フロイデンシュタインの像を、つまり彼が父親のその短い不在の折、かくも豊かに積まれたテーブルの前、腕を組んでいる様子を映し出すことが出来たなら、良かったのにとと思われる。彼は青ざめていて、彼の唇は震えていて、彼は指先で、数えられた金貨の列の幾つかに触れていた。そしてその際、微かな震えが彼の体を走った。千もの閃光のような想念が彼の脳内を過った。しかしこれらの想念のどの一つも彼の心の中から生じたものではなかった。彼は、この重なった富に付随している仕事や、憂慮、 — 愛のことを考えなかった。彼はただ、自分自身がいかにかこの突然眼前に披露された富に対し、振る舞わなければならないか、いかにか自分自身にとって、この瞬間から境遇の変化が始まることか、それのみ考えた。彼の冷たい心はとても動悸して、ほとんど身体的痛みを覚えていた。ザームエル・フロイデンシュタインが、自分の息子に、自分は金持ちの男であって、息子もいつかそうなるぞと告げたのは、厄災の時であった。この瞬間から千もの暗い糸が未来へ放たれた。モーゼスの魂の中で、暗く眠っていたものが、この瞬間から更に暗くなり、明るくなるものは何もなかった。利己主義が脅すように起き上がり、百もの飢えたポリープの腕を広げて、世間を掴もうとした。

父親の存在は、この激流と化した野蛮に増大する思考の嵐の中でもはや消えていた。父親は実在しなかったかのように、消滅していた。ただ自分自身のことだけ、ただ自らだけをモーゼス・フロイデンシュタインは考えていた。そして父親の足音がまた背後で響くと、彼は縮み上がって、歯を食いしばった。

ザームエル・フロイデンシュタインはドアに門をした。彼は店を閉ざした。広大な愛しい春の世界、青い空、美しい太陽を彼は締めだした。 — 彼に災いあれ。

人生の陽気な音色、輝かしい色彩とは彼は何も関与しなかった。これらは彼にとって邪魔であった。彼は勝利を祝おうと思ったが、そのためにはこれらは必要なかった。 — 彼に災いあれ。奥の部屋の汚い窓ガラスを通じて入って来る薄明かり、これがあると十分で、息子に店の秘密帳簿を見せ、息子に、その眼前に披露している富をどのようにして獲得したか説明することが出来た。

太陽は沈んで、その別離の前に世界をこの上ない美しさで彩った。太陽はその達するすべての窓に別離の微笑を浮かべた。しかし哀れなザームエル・フロイデンシュタインに太陽は別れを言えなかった。 — 彼に災いあれ。

夜になった。エスターが火の点されたランプを奥の部屋へ運んだ。子供達は就寝していた。夜警人が現れ、そして中年の人々も、玄関前のベンチから消えた。誰もが心配事を抱えて就寝した。しかしザームエルとモーゼス・フロイデンシュタインは更に計算し続け、数え続けた。朝が白み始めて、ようやくモーゼスは、落ち着かない、熱病にうなされたような微睡みに陥ったが、ほとんど目を閉じたかと思うとすぐその後また飛び起きた。彼はハンス・ウンヴィルシュのように目覚めなかった。彼は不安の叫び声を上げて目覚め、両手を突き出して、指を握り締め、あたかもとても貴重なものを奪われないよう、致

命的不安の中、それを放さないでもがいている按配であった。彼はベッドに真っ直ぐに起きて座り、周囲を凝視し、両手で額を掴み、それから飛び出した。彼は素早く衣服を着て、奥の部屋へ下って行った。そこに彼の父はまだ寝ていて、落ち着かず、途切れ途切れの文を口ごもっていた。父親のベッドの前に息子は立っていて、彼の視線は、父親の顔から、空のテーブルへ移った。先ほどまでそのテーブルには豊かに積まれていたのであった。

いや、モーゼス・フロイデンシュタインが苦しめられ、むさぼられていた飢餓、この恐ろしい飢餓ときたら。食事と飢餓者との間には、過剰な何ものかが、つまり一人の老いた男の生涯があった。この老男性の息子は歯ぎしりしていた。汝も、モーゼス・フロイデンシュタインよ、災いあれ。

キリスト教徒の教会の説教壇の砂時計がどのようにしてこの古物商店に来たのか。その砂時計はそこに、この老人のベッドの側の壁棚にあった。かなり以前には、モーゼスとハンスはよくそれを玩具として利用していた。二人は砂が落ちる様を見て喜んだ。今やもう誰の手もそれに触れることはなくなって、その周りには蜘蛛の巣があった。もう無益な代物であった。この古物商の息子は、突然いかなる気まぐれに陥って、この古いガラスの時計を新たに転覆させる気になったのであろうか。びっくりして蜘蛛は壁に逃げ上がった。砂がまたさらさら落ちた。そしてザームエル・フロイデンシュタインが恐怖して目覚めた。彼は掛け布団を引き寄せて、枕の下の鍵束に手を差し伸ばした。それから彼は尋ねた。

「モーゼス、何をやる気か。おまえなのか。何をやる気か。まだ夜だろう」。

「明るい日中です。昨日にはまだ仕事が終わっていなかったことを父上は失念しています。明るい日中です。父上はまだ私に話すことが多くありましょう」。

父親は息子を凝視した、再度見つめた。それから彼の視線は砂時計に落ちた。

「何故そのガラスを転覆させたのだ。何故、朝にならないのに、私を起こしたのだ」。

「何を言っているのです。父上は、時間が貴重であり、砂のように消えるとご存じです。起きて頂けますか」。

老父はベッドの中で、落ち着かず、向きをあちこち変えた。再三新たに、息子を見つめた。あるときは、探るように、あるときは、不安一杯に、あるときは怒って。

モーゼスは向き直って、窓辺の自分の書き物机の許へ行った。老父は真っ直ぐに起きて座っていて、膝を引いて高くした。時折時計の砂が、さらさらと一層落ちた。老人の目は次第に一層凝固した。自分はその短い眠りの中で夢を見ていて、そして今、この夢は本当ではないかと考えているのだと、誰が知ろう。自分[彼]は、子供に、自分の長い間の、立派に隠してきた財宝を与えて、ただ暗闇と墮落だけを贈ってしまったと不意に突然悟ったのであろうか。昨日の時を祝うために、自分は何という生涯を送ったのか。自分[彼]に災いあれ。

息子は肩越しに、父親に臆した視線を投げかけた。

「父上はどうしたのです。気分が悪いのですか」。

「全く、問題ない、モーゼス、全く、問題ない。静かにしてくれ。起きることにしよう。怒るな。静かに、静かにして、一 この世で長生きするようにな」。

彼は起き上がって、服を着た。エスターが朝食を持って来た。しかし彼女はその老主人の顔を見たとき、そのカップを載せた盆を落としそうになった。

「まあ、神様、フロイデンシュタイン様、どうなさったのです」。

「何でもない。静かにしてくれ、エステル。すぐに収まることだろう」。

彼は朝の間ずっと椅子に座っていて、動かなかった。ただ口だけを動かしたが、しかし明瞭な言葉が唇に浮かんだのは、ただ一度だけであった。彼はそのとき、ドアと店とを開けるよう望んだ。

「エステルに店を開けろと言っているのですか」とモーゼスは尋ねた。「昨日からまず商売を閉じることにしたのでしょう。それに人々に覗かれないし」。

「静かにしてくれ。息子よ、おまえの言う通りだ。エステル、よろしい。モーゼス、私の枕の下から鍵を取ってくれ」。

砂時計がまた流れ尽きた。モーゼス・フロイデンシュタインは自らまた壁戸棚を開けて、書類をかき回した。老父は動かずに、しかし息子のすべての動作を目で追っていたが、時折、寒くて縮み上がった。エステルが彼の肩に古い掛け布団を掛けた。彼は万事構って貰う子供のようにであった。

再びモーゼスは金袋を取り出した。彼の両手からそれは滑って、音立てて床に落ち、その際貨幣の一部が床に散らばった。その軋む物音に混じって、一つの叫び声上がり、血が凝固した。 —

「痙攣性卒中」と十五分後にドクトルが言った、「ほ、ほう、 — このような体質では珍しい例だな」。

第九章

最初の発作の後、三日して、卒中が繰り返された。しかしドクトルは、自分がそれを予告していたことを少しも自慢しなかった。この病人が両発作のその期間中、意識をまた時折取り戻していたか、不分明であった。ハンス・ウンヴィルシュはこのことを信じたが、しかしモーゼスはこれを認めようとしなかった。ドクトルはただ両肩をすくめた。

老古物商店主の臨終のとき、ハンスは居合わせなかった。しかし彼は彼の墓まで葬儀に従い、多くの人々の目に、息子よりも動揺しているように見えた。ザームエル・フロイデンシュタインは彼の青春史において取るに足りない人物ではなかった。彼は率直にこの人物の逝去を悼んだ。

辺鄙なみすぼらしいユダヤ人墓地からの帰路、彼は友のすぐ側を歩いて、この苛酷な喪失で応えているに違いない友に、衷心からの情のこもった言葉をかけて、その痛みを慰めようとした。友がこの慰めを少しも必要としていないとは、彼は予感していなかった。モーゼスは彼の側を、陰気な青白い顔で歩いていて、慰め手の言葉に時折、溜め息や手の仕草で答えながら、遺産の正確な目録を前もって作成していた。

それから後の日々、彼はこの作成を、ユダヤ人社会の当局が彼の後見人として選んだ二人の立派なセム人の協力を得て、完成させた。彼はその際、鋭い目で配慮して、この立派な両商売人が、自らと彼とを大いに祝福して、類似の息子や孫、曾孫を得たいものと願うようにした。かなりの額が、現金や証書で存在していたと、すでに我々は承知している。しかし更になお、幾多の他の価値ある物が、奇妙な片隅に埋もれていた。ハンス・ウンヴィルシュにとってさえも、これらの秘匿物を捜査発見する際のこの友の手際の良さ

は目立つものであった。

古物商店のカatalogが作成される間、ハンスはこの友を慰めるために間近にいることを、少なからず、自分の義務と考えていた。何という埃の中、探し出されたことか。幾多の引き出しから黴の臭気が上がった。その引き出しはその鍵が見つからず、錠前屋が開けざるを得ないものであった。何と一切が隅々から出現したことか、驚きであった。両セム人でさえ、時々鼻を覆った。モーゼスがこうしたガラクタの一切を見下すときの軽蔑は言いようもなかった。

今や店と家の中に出来る限り明かりが入れられたが、しかし店も家もまだ十分に暗かった。しばしばハンスは縮み上がった。彼は影の中に影を見る思いがした。あたかも亡き男はまだ完全には立ち去っていないかのように見えた。実際シュロッターベックおばさんも彼を目にしていた。そして人々がもっと詳しく彼女にそのことを尋ねると、この善良な女性は憂わしげに頭を振った。

ただ一回だけハンスはモーゼスにこのおばさんのことで自分の感情を述べた。しかしモーゼスはこのことに全く立腹した。

「ハンス、死人達は戻っては来ない。これ同様、すべてははっきりしていると思うぞ」と彼は叫んだ。彼は、父親のベッドの側に立っていて、丁度砂時計を手に取っていた。手が震えて、その古いものがすべて落ちた。床にそれは碎けて散った。この瓦礫は足蹴にされて、片隅に飛んだ。

古物商店がこのように片付けられている間、クリスティーネ夫人とおばさんは熱心に、彼女らのハンスが大学へ大旅行をするその準備に取り掛かっていた。彼女達はこの移動の旅に沢山のものを持たせてやれなかった。しかしシャツに縫い込まれたり、靴下に編み込まれたりした良き願い事のすべてがかなえられたら、神々が羨望しても不思議ではなかったであろう。

その準備品は、グリュエネバウム伯父が一弁舌添えて渡したアザラシ革のトランクとそれに革のランドセルに詰められた。このランドセルはアントン・ウンヴィルシュ親父が遍歴時代に大いに重宝して背に負ったものであった。復活祭の後一週間すると、両夫人の手が関与するすべてのものが順調に仕上がっていた。

町中や町周辺の人気のない路上で、ハンスはごく早期の子供時代から馴染んで来たすべての親しい物事から別れた。何人かの人々に対して彼は訪問もした。その名前は本書の頁で言及されたり、されなかったりした人物である。そして誰もが、この旅で彼が持参する袋に、良き願いを込めて、幾ばくかの品を進呈した。

ファクター博士教授は、神聖なアウグスティヌス[354-430]の『告白録』の珍しい版を贈った。伯父グリュエネバウムは短いパイプで、その頭部には希望が模写されていた。いずれにせよみずからとても希望に満ちた[身重の]状態にある恐ろしい女性像で、この像について伯父は一つ演説した。

古物商店は、先に述べた二人のイスラエル人の助言者の同意の下、三番目のセム人の手に渡った。しかしこのセム人が、ヴェストファーレンの従僕服を再び元の機能に戻すことはなかった。

モーゼス・フロイデンシュタインも、世間への最初の飛行の準備をしていた。彼は都市、新町からその旅立ちに対し祝福を得ることは[ハンスほどには]余りなかったけれども、

彼はこれを一向に意に介さなかった。お互いの好意の決算に関しては、しかしながら新町側にわずかばかりとはいえ、余剰が見られる決着となった。 —

復活祭の祭日が過ぎた。いつの間にか別離の時となった。

すべての快適なこと良きことのために、つまり結婚式や、子供の洗礼、ピクニック、とりわけ異郷への旅立ちに願わしい朝であった。たとえ前日は珍しく劣等な天気であったとしても、今日太陽は美しく昇った。あたかもハンス・ウンヴィルシュに、太陽は、その好意と最良の全き印を特別に示したいかのようであった。ヴァーレンティーン教会の塔の雄鶏は、若々しい、丁度炎の中から蘇ったフェニックスのように輝いて、教会と塔はその影をはなはだ快適に、緑の教会広場と間近の家々の屋根に投げかけていた。まだ大方の人々は眠っていた。目覚めてから、パン屋の店先から焼きたてのゼンメルを盗んでご満悦の犬が、見習いから大声で路地を追跡されているのでなければ、ここは魔法の町と錯覚されたかもしれない。犬と息せき切った見習い、噴水のパシャパシャ、これがこれまでのところ、新町の参事会と民衆は、魔法にかかっているというよりは寝惚けているという唯一の安心できる印であった。

町中でただ一人魔法にかかった者がいた。この者は勿論同じくとても目覚めていて、 — そして三時の時から屋根窓からクレッペル通りを覗いていた。 — ハンス・ウンヴィルシュである。

興奮して彼はベッドから出ている。そして梯子を登って、上のその展望台まで来ていた。カレンダーによると、太陽は四時五十九分に昇る予定であった。すでにかくも重要な日に太陽を待つ甲斐はあった。三時と五時の間、町や谷、山々にベールを被せていた霧の中を覗くと、ベッドの中での半ば目覚めた夢に匹敵した。魂は故郷全体を覆うこの霧の中に予感一杯に紛れ込んだ。我々は或る先の本の箇所で『森の人々』21章、1862、一人の老人にこのように揺れる雲の中の像や形姿を眺めさせたものである。しかし霧は、元来、青春、 — ただ青春のものである。

ただ青春のみが、灰色の地に正しい像を映し出す魔法の杖を有するのである。ただ青春のみが、ただ一つ青春のみが、霧の中、神秘的霧の中に隠れているものすべてを把握し、発見することが出来る。この朝、霧が沈み、太陽が輝きながら昇って来ると、青年の心は一杯になって、彼はただ必死の思いで、梯子と、狭くて首を折りそうな階段を下りて来ることが出来た。

ハンスよ、接合され、鋏止めされたコーヒーポットから別れるがいい、 — 取っ手のない、青いカップから別れるがいい。すべての物から、ガラス玉から別れるがいい。しかしどんなに遠方に憧れても[飢餓しても]、汝はとても、とてもその慣れ親しんだ輝きに憧れることだろう。泣き顔の母親と、厳かな別れの時に晴れの美しい頭巾を被っているおばさんから別れるがいい。我が少年よ、しっかりしろ。グリュエネバウム伯父を立派な手本にするのだ。この伯父は経験豊かな男として、長い遍歴には気付けの酒が必要と承知している。伯父は咀嚼と嚥下の間に、まこと陽気に遍歴職人の歌を口ずさみ、汝に一度ならず請け合ってくれた、ねぐらと鳥籠から出ると、嬉しく思えるぞ、と。

ドアがノックされた。 — モーゼス・フロイデンシュタインであった。彼は確かに特別駅通馬車で行けたのであるが、しかし昔からの友情を大事にして、汝、ハンス・ウンヴィルシュと一緒に新しい人生を徒歩で始めると決めていた。ハンスよ、一人前の男と

なって、目の上に袖を持って行き、早く進め、同級生に涙もろいと笑われるぞ。

モーゼス・フロイデンシュタインは友の目の中の涙を見ていなかった。彼の精神はすでに街道にあった。苛立って彼は遍歴の杖を振った。

「ハンス、出発だ、出発。旅立つ潮時だ。街道を暑い完全な日中に行くのは愉快じゃない」。

「では、クリスティーネ」とグリューネバウム伯父は叫んだ、「嘆きの尻尾を切り上げなさい。青少年を手放すのだ。シュロッターベックおばさん、いつもはしっかり者の女性でしょうに。女達ときたら、手に負えない見本となる。またこの青少年は玉ねぎを嗅いでしまったぞ。すべて噴水の上にはこの擬宝珠が付いているのでなければ、私は自分の鼻に靴底付けて、繕い、粹革を嵌めるところだ。いや、有り難い、救世主、フロイデンシュタイン殿、古代ギリシア人はこのような歌声を何と呼んでいます」。

「ひょっとしたら流涕譚と呼んでいきましょう」とモーゼスは答えた。

「その通り、全く正しい。私は言い出そうとして言えなかった。流涕譚か。もうお仕舞いにしなさい、と私は言っているのだ。御身らの噴水仕掛けは悪魔に掠われろ。ハンス、荷をまとめて、出発だ。女達は公共の良俗のために残って貰おう。私が涙を見せぬ後見人として一緒に市門まで同行しよう。それから陽気な楽しい再会を期して、さよならだ」。

ハンス・ウンヴィルシュは父親のランドセルを背負った。三分後、彼はモーゼスと伯父の間において、クレッペル通りの角を曲がり、そして邪魔されずに二人の哀れな女性達は自分達の嘆きに没頭した。

古物商店の閉ざされたドアの前には、三人の老いたユダヤ女性と家政婦のエスターがいた。この三人の女性には故ザームエルが時折慈悲深いサマリア人として振る舞っていて、彼女らはこの善行者の息子に対し、祝福とその道中の無事を願う言葉をかけることにしていた。我々がすでに述べているように、余りこのような言葉は哀れなモーゼスに対してかけられていなかった。しかし彼はこのわずかな言葉も根本的に重んじていないことを、今度もまた示した。極めて不快げに彼は老婆達のかすれた叫び声に耳を閉ざして、うんざりした反吐感を露骨に示して、彼は上着の裾を彼女らの手から引き離した。 — 彼に災いあれ。

老婆達は、彼が投げ与えたターラー貨幣を地面に放置していた。古物商店の敷居の所で、老婆達は、大きな厄災のことを沈思している四人の運命の女神達[三人]のようにうずくまっていた。モーゼス・フロイデンシュタインは彼女達にとってもひどい言葉を発したに違いない。それで彼女達はとても驚いて、凝固して手を打ち合わせ、彼に対し、半ば呪詛に近い祈りを後から浴びせていた。彼女達は彼に対し、厄災を叫び、アコルの谷で、ゼラの息子アカンに対して叫んでいる[ヨシュア記 7]按配であった。 — 彼女達は彼を、ダヴィデの息子、アブサロムや何人かの他の旧約聖書の悪人達と比べていた。

「あの人は余りに学びすぎて、余りに利口になってしまった。行く行くは自分の民族の裏切り者になりかねない」と彼女達はよろめきながら去りつつ、溜め息を吐いた。

太古からの木蔭の這った太古の市門の所に来た。暗いアーチを通じて、朝の陽光が射し込んできた。上階では逮捕された浮浪者夫婦が、緑の蔓植物の背後で、全く牧歌的に朝の歌を歌っていた。「また一緒に巡り会えることでしょう」、 — そしてその運命にはなほだ満足しているように見えた。これらの歓喜しているルンペンどもに伯

父ははなはだ不興で、道徳的憤慨を彼らに対して抱き、別れの憂愁の念は最後の一滴まで跡形なく消えてしまった。

「聞かなかったことにして、忘れてしまえ」と彼は文句を言った、「道徳的人間や正直な職人なら誰でも、今は額に汗して、苦勞して仕事に励むことを選ぶ。これら社会の賤民や糞どもは、藁床に転がって、公の費用で楽しむことにしている。さて、二人の我が若い御同輩、大股で立ち去るがいい。ハンス、我が青少年よ、そなたに私が言うことはもはや何もない。今やそなたもちゃんとした成人に達している。たとえ学者どもの間では、まだ見習いであっても、専門のことはすでに我らより良く承知している。頭を高く上げて、鋭く左右を見ることだ。物事には両面あるからな。靴屋稼業にしても、学者世界にしてもこれは変わらない。私がそなたに話したことに對し、感謝することはない。話すに及ばないことだ。しかしそなたのために私が眠れぬ夜、案じた心配事の償いはできないぞ。償いなどは何もいらん。『子供の友』[雑誌]はとても素敵な夢枕であって、私の良心は安んじている。それでは — ここで無事の再会を祈念して一口飲みなさい、そして時間があつたら、母達に手紙を書くことだ、彼女達はさもないと折を見て、大騒ぎするだろうからな。フロイデンシュタイン殿、お達者で。 — ハンス、この瓶を持って行け。そなたはただ一人で瓶を愛でる年になっている。さらば、首尾良くやってくれ」。

急ぎ足で伯父は遠ざかった。両青年は、彼が消えるまで、見送った。それから彼らも去った。若い朝の陽光の方で、やがて彼らは町を後にした。

太陽は、約束していたことを守り、晴れの日を手配してくれた。市民達の庭園に続いて、新緑の田畑が見られた。まずは蛇行しながら平野をうねっていた街道が次第に高みに上がって、森に通じていた。

草の先端にはまだ露がかかっている、雲雀が歌い、バター作り女達が、バター作り女の速歩で両青年に向かって来た。重い荷を担いだ女達の複数の者がシュロッターベックお婆さんの知り合いで、当然ハンス・ウンヴィルシュとも知り合いであった。大きな賛嘆の声、明るい叫び声が幾つかの出会いの結果見られた。いかにも多くの人々が外に出て行くハンスに對しその関心を示したというのは、実際一つの奇蹟であった。

いや、汝、陽気な街道よ。一体何とすべてのことが、汝の上で生じていることか。職人の若造は、溝の縁に腰を下ろし、編み上げ靴を脱いで、靴底の穴越しに美しい自然を覗いていた。一方向かい側の石の山では、下の市門塔の上の浮浪者夫婦の娘が、子供に乳を無造作に飲ませていた。鈴の音高く、鞭打ちながら、ハローと声をかけ、鼻息荒く、足音荒い馬の白い荷馬車が揺れながら去って行き、白いスピッツは気分任せで、苛立ったり、戯けたりしている。これは、いずれにせよ、自分の気分を發散できなければ、参ってしまうことだろう。兎がいるが街道で何のご用か。向こうだ。耳を伏せて、ギャロップで道を横切っていく。これは不幸、苛立ち、苦悶を意味するという。 — 三回この兎に万歳、このおかしな前兆を、人々がまだ愚かであった大昔に人々に伝授したいたずら者に六回、万歳だ。

いや、万歳、ギャロップの兎に続いて、ギャロップの早飛脚だ。いずれにせよ、政府から最新の政治ニュースとして、グリューネバウム伯父に送られている。馬と騎乗者を包んでいる埃の雲から判断するに、殿下がニコラウス皇帝からお目玉を食らったか、妃殿下が新たな年金有資格の子孫を得て、「先祖伝来の侯爵家」の消滅危機をいとも尊く救出

されたかであろう。いずれにしても、一 殿下と妃殿下にとって、子供っぽく陽気な万歳となる。恩義のある人々皆がこの喜ばしいニュースを知って欲しいものだ。

しかし道の高みに達していた。すると蕾の膨らんだ森が見えた。すべての生長しきった木々は皆、微かな朝の風の中、族長的に気立てよく、頭部を、小生意気な灌木や茂みのならず者達の上で揺すっていた。これらの茂みは、時間を待たず、一夜にして緑色になっていた。

勿論、ハンスとモーゼスは、森の端に静かに立っていて、道を、つまり故郷の谷と都市、新町の方を振り返って見ていた。もはや霧の痕跡はなかった。いずれの側にもなかった。すべては澄んで、明るく、新鮮で、陽光を浴びていた。下の谷の屋根の煉瓦の数も数えることができた。一 丁度六時の時が響いた。この時刻に鐘から別れなければならぬのは、奇妙であった。

この両者の思考はいかに異なっていたことか。二人とも同じ木の幹に寄りかかっていたのであるが。光と影といっても、ハンス・ウンヴィルシュとモーゼス・フロイデンシュタインの魂の間で見られたことに比べれば、格別違わない。若者の一方の方は頭を垂れて、片手で目を覆っていた。もう一方は鋭く見ていて、微笑していた。両者とも立っていて、その魂に大きな飢餓を感じていた。異なる仕方でその端緒を始めたことは、すべて異なる仕方でも継続して行かなければならぬ。

ハンスの前では、子供時代が長い列の交互の画像となって通り過ぎた。これまでの自分の人生行路で出会ったすべての人影が滑って来た。誰も欠けていなかった。貧民学校の教師ジルバーレップフェルもいたし、哀れな小さなゾフィーもいた。両人ともすでに遠く前亡くなっていたのに。

モーゼスも下の谷での自分の死者達を有していた。しかし彼はその人々の誰も思い浮かべないようにした。そして存命の者達に対しても、彼はかの上品な邪悪な微笑しか有しなかった。彼は都市、新町を憎んでいて、善良なファクター教授を阿呆な街学者と見なしていた。しかしファクター教授の方は、自分の以前の利口な生徒が、夢想的ハンスを嘲笑的見解と共に、その夢から引き出すそのやり方を極めて不適切と語ったことであろう。

しかしそのことがなされて、一 一つの視線に一つの言葉があった。それで子供時代の画像、最初の青春が揮発して、人影は消滅した。ハンス・ウンヴィルシュは再び大気中の雲雀の声、森の中のアトリの声、とりわけ自分の側の草むらのコオロギの鋭い音を聞いた。更に下の谷の方を一瞥し、それから前方一 森の中、広大な世界、新たな人生に視線が向けられた。

やがて以前の遠足や遠出の折の広大な境界が越えられて、二人は未知の谷を通って行き、未知の高台を越え、未知の教会の塔が右側や左側に出現した。すると多分に別離の重たい感情は次第に消えて、自由な遍歴という陽気な感情が更に募ってきた。段々とハンス・ウンヴィルシュは、自分は、不思議なことを体験し、その際、グリュネバウム伯父が発するであろう表現に倣うならば、その不思議なことを、「正確かつ正当に評価する」定めにあるのだと気付いた。このうぶな若造は、最初の旅の日に、何と多くのことを体験したことか。何と彼は平凡極まりない事柄に口をぽかんと開けたことか。何と彼は滑稽に、馬鹿げて、間抜けな風に、モーゼスの鋭く冷静な目に映じたことか。

道中、長い腕で合図している旅館すべての前で、二人の旅行の生徒は立ち止まった

わけではなかった。しかし二人は幾つかの誘惑には抵抗できなかった。しかしまた最も暑い昼時には、ある森の中において、街道から逸れていた。二人は柔らかな芝地に休んだ。モーゼスが自分のメモ帳で色々計算している傍ら、ハンスはヴェルギリウスのポケット判を読みながら、微睡んでいた。彼はそれで、遠方の郵便ホルンの音をローマ時代のチューバ、同盟者の騎兵達に攻撃を合図しているものと解していた。揺さぶられてから、彼はとても当惑して周りを凝視して、幾分かの間、自分がどこにいるか分からないでいた。 — 彼は最後全く深く眠ってしまって、有名な羊飼いの学生グリソストモと美しいマルセラ [『ドン・キホーテ』の作中人物] とを夢見ていたのであった。しかしモーゼス・フロイデンシュタインは、彼と夢の交感神経の関係について、ある講義を行い、彼を喜ばせた。 — モーゼスは自分の経済的事情にまた納得できて、それ故、あらゆる邪悪さや哲学的演繹法にその用意があった。午後になると彼はとても活発になって、それで彼は同行者の陶醉や歓喜にごく内密に関与して、かくてそれらを極めて分別くさい、素っ気ない言辞で、見るも無惨な具合に台無しにするか、台無しにしようとした。

彼、モーゼス・フロイデンシュタインは、美しいマルセラとか牧人の学生の夢は見なかった。そして雲を色々な動物とか、それどころか美しい女神に見立てることを全く自分の品位に悖ることと見なした。眠れるいばら姫とか、魔術師のメルリーン [インマーマンのドラマ、1832] について、彼は一言も耳にしたことはないと言った。長くて白い髭の老公、森の道をやって来るこの老公は、彼にとって忌々しい老人の陶器修繕人であって、それ以上の者ではなかった。ハンスやロマン派の「森の孤独」 [ティークの短篇『金髪のエックベルト』の詩、1797] を彼は全くやくざなナンセンスと説明した。彼は自分は、愛好されている言葉を耳にすると、ただむかつくと主張するほど十分に生意気であった。

それでハンス・ウンヴィルシュは、友人にして旅の同行者、同級生に全く馴染めず、それどころかこの友人に立腹し、自分の縁の側からは、出来るだけ離れていて欲しいと願う折々があった。しかしこうした折々はいつも素早く通り過ぎた。それで夕方、旅館で何人かの賢しげな職人どもが、利口なモーゼスの驚の鼻面を翻弄しようとして、ただ善良なハンスの精力的振る舞いでそれが抑制されたとき、二人の新人学生の間での友情関係にはほとんど不協和な支障は見られなくなった。彼らの旅の三日目の朝、彼らは再びある小森の縁の高台に立っていて、ある谷を見下ろしていた。その谷には、小さな、しかし多くの高い塔のある町が横たわっていた。そこで、モーゼスは、古い言語を「取り扱っていた」ばかりではなかったから、皮肉な情熱を込めて、朗詠した。

「しかし干涸らびた野原に陽が照り付けると、
というのはすでに陽は高く昇っていたからで、
すると、見よ、エルサレムだ、何という歓喜、
エルサレムだ、皆がそれを指し示す。
エルサレムとそう声高に響く、
そのように千人もが挨拶し、皆が歓声をあげる」。

[タッソ『解放されたエルサレム』 1581]

彼は興奮したハンスにこう伝えた。自分は確かに今、ユダヤ人としてよりも、むしろ

ろ十字軍戦士として感じているが、しかしとりわけ喜んでいるのは、退屈な旅がようやく終わったことだ、と。そしてハンスが今や踏み込んだ聖なる土地で、靴を脱ぎたいと思っていたとき、モーゼスは自分の意見をはなはだ決定的にこう結んだ。あの下の朽ちたねぐらには、幾多の腐った卵、あるいは中身の吹き出された卵があるかもしれない、と。そしてとても学識のある、教授風外見の老紳士が、この人はバート・ドリーブルク[ブラウンシュヴァイク]の鉱泉水瓶を腕に持っていたが、彼らに向かって来たとき、自分 — モーゼスは — そう簡単な畏れ入ることはしないとまで呟いた。

第十章

いとも称賛される大学町の最も辺鄙な、最も安上がりの一角で、ハンスは一部屋借りた。家主が靴屋であったのは、全く偶然とは言えなかった。狭い部屋の窓は、二つの窓のない、高い防火壁と、ある納屋の黒い屋根への眺望を有していた。この屋根の上に、森となっている山の尾根の一部が目に入らなければ、この部屋の灰色の壁が、この壁には、陽気な気分するときや、メランコリックな気分ときに、前の住人が、洗面や、猥歌や、諷刺的、哲学的長歌を書きなぐっていて、機知的考察に対しはるかにより豊かな場を提供していたかもしれない。

ただ全体を総括してみれば[どの点から見ても、『ハムレット』1,2]、そこは一つの穴蔵であった。しかしハンス・ウンヴィルシュはここでも幸せな時間を過ごした。オリンポスとタルタルスはすべての大地にとって、同等の遠さ、同等の近さにあるというギリシア人の言葉はここでも妥当する。古代ギリシア人というのは、まことに賢い人々であった。

モーゼス・フロイデンシュタインは、「幸運な資産状況にある少数派」の男であって、より快適な、より詩的な滞在地を選ぶことが出来たが、しかし彼がこの町のより高級な、より自由な立地の所に住んで、茂みと噴水で飾られた優美な広場越しに、古い華麗なゴシック中央教会を眺められたからと言って、不滅な神々により一層近付いたわけではなかった。然るにやがて明らかになったのは、クレッペル通りの片隅にくるまって掛かっていた見栄えのしないこの蛹には、まことに可愛い、多彩な、勇気ある、エピキューリアンの蝶が隠されていたということである。このメタモルフォーゼ[変態]は速やかに行われ、這っていた蝶は、屈託なく、確実に、器用に輝かしい羽根を広げて、ハンス・ウンヴィルシュでさえ彼を埃まみれの繭と連想することは難しく思えるほどであった。モーゼス・フロイデンシュタインは、外見的生活の大方において、良い趣味を育てて、実存の繊細な享受を少しも嫌がらずに、大聖堂広場の角の部屋で、大変エレガントに調度を整えて、善良なハンスを、一夜にして習得した処世訓によって大いに驚かせた。 —

すでに到着した日に、両青年は大学入学手続きをして、誓願の代わりの手打ちによって、アルマ・マータ[母校、大学]への誓いを遵守し、母校の大学に迷惑であろう一切を避ける旨の約束をした。

新学部の記念帳に、勿論、愚直な名前、青年、ハンス・ウンヴィルシュが記入された。 — 青年、モーゼス・フロイデンシュタインは、これに対し、哲学部に行ったが、単なる哲学以上のものを専攻するつもりであった。彼がこのことを実行し、多様なことを学び、世間で成功していったこと、この次第は後の方で覗くことにしよう。

黒い小箱の中身の残りとして、一つの奨学金、ファクラー教授の幾つかの推薦状によって、ハンス・ウンヴィルシュはまずは肉体的飢餓からは守られた。そこで彼はまた精神的飢餓をすべての能力の発動で満足させようとした。

勿論我々は、我らのこの両学友が一步一步進む学問の大きな森の中での道中を追って行くことはできない。我々がただ言えるのは、両人はその学業の過程において、幾多の教師達の足許に落ちていて、間接的に、直接的に、豊かなその経験を、各人が各様に、収集して行ったということである。

ハンスが、この多かれ少なかれ、著名で、有名、あるいは悪評高い英知の明かり、鏡に対して抱いていた内気な畏敬の念は、感動的であった。モーゼスがすべての折、絶好の時であろうと、なかろうと、権威に対する信仰を足蹴にするときの流儀、作法はまさに悪魔的であった。

偉大な解釈学者のガマーリエール・ウンケマン博士教授、聖書解釈学者、彼の歴史学的、地理学的、骨董学的、語学的知識は無比のものであった。モーゼス・フロイデンシュタインはこう主張した、彼は教義概念をヘルクレスがアウギアスの厩舎を掃除したときのように、綺麗にしている、と。この比喩はそれ自体、不適切でも、貶めるものでもなかったが、この比喩が連続的に、類似の比喩や、下位概念と共に使われると、この男の品位が少しも高められないのであった。

周知の教義学者、ヴァイエルに関しては、「偏見のない」モーゼスはもっとひどく扱った。同時に第一級の教父学者であって、すでに教皇をも従わせることの出来たこの紳士は、色々な薄暗い、不気味な噂で指弾された。これはこの紳士の倫理性に翳りを生じさせるもので、モーゼス・フロイデンシュタインの皮肉な鼻には都合のよい臭みとなるのであった。ヴァイエル教授はその穏和な形姿、その優しい胸声[胸腔低音]、その新教風巻き毛、とりわけその講義によって、ハンスに深い印象を与えていた。モーゼス・フロイデンシュタインは、勿論、この理想を倒壊させることを、自分の義務と考えていて、この友を苦い思いにさせて、多くの楽しみを引き出していた。

哀れなハンスは、自分の気持ちを結局本能的にモーゼスの前では隠していた。冷たい水のバケツは、その気持ちに対し、いつでも空にする用意がある[ぶっかけられる]と承知していたからである。この両新町人との交誼が、このことで断絶に至らなかったのは、ほとんど奇蹟と言っていいだろう。しかしモーゼスは、多くを破壊することが出来たが、また多くを与えもした。彼に抵抗することは容易でなかった。そして彼がいれば強引に圧殺した幾多の豊かな力、「自分はこの力を行使できなかった」からというその力は、幾多のより貧弱な性質の者にとっては、素敵な遺産であったろう。

大聖堂広場に面する彼の快適な調度の部屋で、古物商の息子にして遺産継承人の彼は、やがて知のすべての部門からの諸本の山に囲まれていた。しかし素人愛好家的多読癖に埋没することなく、彼は完璧にかなり独自の客観的論理体系を築き上げた。彼はフルードリヒ・ヴィルヘルム・ヘーゲルの哲学から、「幾つかのものを使用する」ことが出来て、ハンスとハンスが有するものすべてを、何らかの悪評高いカテゴリーの中に従属させてみせ、友のハンスを、しばしばとても混乱させ、不快な思いにさせた。彼はその傍ら、熱心に色々な法学的講義を聴講し、主に専門的に憲法を勉強した。マキャベリと『ライネケ・フクス[狐]』が、この時期、彼の勉強机から片付けられない、二冊の本であった。退屈凌

ぎに彼は神学生の青春の友に、ヘブライ語の授業をした。ヘブライ語については、彼はこれについて、「講義」する正教授より詳しかった。

ヘブライ語に続いて、通常すでに言及された、神と世界について、物理学と形而上学について、並びにまた「祖国ドイツ」について、ドイツの内外の関係について論じられた。

勿論、モーゼス・フロイデンシュタインは祖国ドイツに対しても、他の話題となるすべての国に対するのと同様に客観的に対峙していた。彼は自分の立場について、大体次のように述べた。

「私は自分に都合の良いときにのみ、ドイツ人であるという権利を有するし、それにこの名誉をすべての自分に都合の良い瞬間に放棄するという権利を有する。我々ユダヤ人は真の世界主義者[コスモポリタン]、神の寵愛する世界市民、何なら、神の不興を買っている世界市民だ。世界創造以来、君達の暦[西暦]の七十年の七一八月[ユダヤ暦十一月]十日[ローマ人によるエルサレムと神殿の破壊]まで、我々は例外的立場であったし、神殿の破壊の後も、若干流儀、作法に変化が見られたが、我々の立場は変わらなかった。長い世紀を通じ、この例外的立場は君達が我々を大いに不快に思う由縁であった。しかし今や状況に快適な面が、出現し始めている。君達同士が喧嘩し、苦しめ合い、不安に思い始めている一方、我々は静観しておれる状態である。君達が獲得する成果は、我々も共にわかち合うものである。君達の敗北は、我々が案ずるに及ばない。我々が戦いに参入するとしたら、それは単にいつも、いわば太平楽の者の手にすぎず、その手が差し出されることになる。我々は、最良の国家という理想に向かって君達の船の上の乗客だ。しかしこの小舟が座礁しても、溺れるのは君達だけだ。 — 我々には浮き輪があって、これで瓦礫の中、陽気に快適に揺れることになる。人々が我々をもはや井戸の毒下手人とかキリスト教徒殺害者として虐殺し、火刑にかけなくなってから、我々は君達皆よりも、君達が何と称しようと、ドイツ人、フランス人、イギリス人と称しようと、はるかにもっと経済的に良い。我らの中には個別の阿呆がいて、この恵まれた立場を放棄して、義理祖国のことで、レープ・バールフ[Löb Baruch]風に、つまりゲルマン人ルートヴィヒ・ベルネとして、死ぬほど悲嘆するかもしれない。我が友、パリのハリ[ハインリヒ]・ハイネは、その白い教理問答風の衣装にもかかわらず、真のユダヤ人であって、どんな洗礼を受けようと、どんなフランスのシャンパンや、ドイツのラインワインを飲もうと、そのセム人としての血がその血管から洗い流されることはない。ドイツの恥辱や屈辱を嘲るとき、なぜ一片の憂愁の念も混じることがないのか。人々がライン川のこちら側で犯すどのような愚行も破廉恥も、彼にとっては神の祝福なのだ」。

いかにハンス・ウンヴィルシュは、このような議論の間、椅子の上でもじもじして、いかにこの弁士を中断させようとして空しかったことか、ほとんど筆舌に尽くしがたい。ようやくモーゼスが中断して、息を継ごうとしても、ハンスはそのチャンスを掴めない。彼も弁士同様に息が上がっていて、かろうじて若干の情けない間投詞や、「利己主義」という言葉しか吐けない。

利己主義だと、とモーゼス・フロイデンシュタインは、勿論その言葉をすぐに取り上げて、威勢良く、容赦なく言う。

「利己主義だって。君はそう呼ぶ。しかしこの件をもっと仔細に見てみろ。歴史哲

学が個人哲学に劣らず正解を教えている。我らの現在の立場の利点は、我らが君達の主要な関心事、国事の際に、他人の不幸は鴨の味として、あるいは例の親指芝居[命乞いのローマの剣闘士の生死を親指の上げ下げで決めた]として、肩をすくめながら見物している点にあると言っているのではさらさらしない。我々も何らかの立派な高貴な事柄のために、例えばドイツ国民の運命や名誉、幸福のために闘技場を下りて行き、そのために悲惨さや死を引き受けることも出来よう。我らの利点も、我らがより自由な、より精神的なアニムス[男装女子魂]を抱いて、このような悲惨さや死に向かって行く点にある。君らは自らのために戦い、苦しむ。我々は純粋な思弁のために犠牲になる。 — 君はこれに対しどう思うか。我が息子、ヨハネスよ」。

こうなると、この弁舌に対し、すべてを簡潔的確に答えることは、より素早い精神にとっても面倒なことであつたらう。ハンス・ウンヴィルシュにこれは無理であつた。それでモーゼス・フロイデンシュタインは心ゆくまで、目を瞬かせて、両手と膝とを互いにこすり合わせるのであつた。しかしハンスがこの言葉の洪水を然るべく消化して、これにはしばしば数日要し、いずれにせよ一時間は必要であつたが、怠りなく彼はこのような詭弁に対する自分の反論と抗議を然るべく述べた。すると彼は勿論新たなタルムード的微細な反撃によって穏やかに麻痺させられるのであつた。 —

我らのドイツの大学のしばしば馬鹿げた瑣末な営みは極めて頻繁にただ熱く語られてきている。ハンスとモーゼスはこれにはほとんど関与しなかつた。多数の者が、一人の「学生」の許でイメージするものを、両者のどちらも有しなかつた。ハンスは全く咎められず我が道を行つた。モーゼスも、彼の二つの性格特徴のために、何度か不快な出来事に巻き込まれなかつたら、同様に上手く行けたであろう。つまり彼はとても賢しらであつたばかりでなく、極めて好奇心が強かつたと残念ながら我々はここで告白しなければならない。それで彼は自分の好奇心のせいで、しばしば自分に馴染みの利口さや称賛された論理学を犠牲にすることになった。その結果、彼はよく達者な腕力の方が、達者の精神よりも、自分をより容易に、より上品に救済するであろう状況に陥つた。しかし多くの偉大な男達は、世論が実害を及ぼさない限り、世論を軽蔑するもので、それでモーゼス・フロイデンシュタインも、自分が時折、小心な追従者とか「さもしい奴」と見なされても、かなり平然と耐えた。 —

すでに第一学期の後、ハンス・ウンヴィルシュは、自分が理論的神学よりも、実用的神学に適性があると察していた。熱心に彼はフォーゲルザング[小鳥の歌]教授の指導の下、説教学の高度な秘密を極めようとした。以前子供時分、母親の部屋でシュロッターベックおばさんに対し教化的説教を行つたのもであるが、今や彼は夜間自らを相手に教化を行い、かくて少なからず自分の隣室の住人、一人の医学生を怒らせることになった。医学生は大抵とても遅く、とても酔っ払って帰宅した。極めて感動した聴衆のむせび泣きの代わりに、薄い壁越しに苛立った靴脱ぎ器のノックの伴奏が付いて、その間に鈍い声で「坊主」に対するあらゆる邪悪な呪詛を聞かされるのは、弁士にとって必ずしも快適ではなかつた。これは日中の場合、更に一層ひどかつた。この場合医学生は大抵二日酔いで、説教に耐えるのは更に難しかつた。この人間の忘我ははなはだしく、彼自身、絶え絶えの状況にあるのに、なお哀れなハンスに対する自分の不快をはっきり言明することが出来たのである。

それ故ハンスは自分の説教を野外ですることを、最も好んだ。夙に彼は、自分の窓から眺めていて、山への道を発見していた。そこの影の多い木々の下、主にある狭い森の中の平原の、高い檜の木の下で、彼は自分の説教壇を築き、小鳥達に説教した。医学生ではなく郭公が応誦を行うのは、格別なものである。

この大きな檜の木の下では、説教者は、更に別の随喜妨害者からも守られた。つまり著名なフォーゲルザング教授である。

この立派な紳士は、ハンスが課題のテーマを扱うときのやり方に必ずしも満足していなかった。いやそれどころか、満足するのは稀であった。彼、一教授は、一生徒の演説に、余りに多くの「詩学」を見いだした、つまり自然への陶醉が過剰と思っていた。それどころか所々に汎神論の匂いを嗅ぎつけていた。これは正統派の鼻にとっては、極めて厭わしいのであった。しかし一教授は勝手に言って良かった、教授は一連の代々の瞑想的で詮索的靴屋の齋ではなかった。そして教授の揺り籠にその明かりを注いだのは、あの奇妙な揺れる玉、ヤーコプ・ベーメの上にもあった玉ではなかったのである。

森のアトリとキツツキは教授よりも忍耐力があった。リスはその枝から、説教壇からの教授のように憤然と見下ろさなかった。そして森の説教者が、その林の縁まで来て、眼前に谷や町、山や平原への眺望が、最も青い遠方まで広がっているとき、こうしたすべてを照らす陽光には、自ら何か汎神的なものが含まれていて、それで教授は一度もこのような山に登ったことはなくて、教授が自分の四つの壁の外部にある広大な世界やその不可思議なことについて、ただ呻き声で嘆息して語るとしても、気の毒な教授と言うしかなかったのである。

ギングラー教授が、実用的牧師の知恵について行う講義で、ハンスは花々や穀物畑、敬虔な百姓達の間での、将来の村の牧師について、多くの快適なこと、牧歌的なことを夢見た。昼時の上品な鼻声の講義は、病人に慰謝や、子供の洗礼、結婚式に関し、様々な空想に浸るのに全く相応しかった。ハンスは後に、グルンツェノーで理想と現実を比べることになったとき、自分が知った錯覚をその時、受け入れざるを得なかった。

ムントレヒト博士教授は、屁理屈の茨の荒野に彼を案内してくれた。この講義では、いつも一人の熱心な聴講生、つまり哲学者のモーゼス・フロイデンシュタインに出会った。モーゼスはすでに彼のより良き自我の多くの檻褻切れをこの茂みに残していたので、この明るく照らす教会博士の講義が、彼に損害を及ぼすことはもはや少なかった。一

季節は昔から馴染んでいる具合に変化した。二人の若者は、各人各様に、前進に努めた。知に対する飢餓が消えることはなかった。休暇に入るたびに、ハンスは大いに喜んで、ランドセルを担いで、故郷を目指した。その道中、時に少し迂回もしたが、しかしいつも同じように喜んで向かって行った。いつもそのたび、彼はより明敏になった頭と、より寛大になった心で、自分が残して来た、誠実で制限された卑小で狭小な圈に戻って来たが、しかし彼はモーゼスのようにこの人々を軽蔑していなかった。モーゼスは彼の学業の期間、新町に帰省することはなかった。このねぐらはすべてのその思い出と共に、彼にとって余りに厭わしかった。休暇の間、彼は自分の部屋にしっかり閉じこもっていた。そして講義が再開されると、その都度、母校が子弟に提供すべきこと、提供するつもりのことに関し、一層懐疑的な、一層諷刺的な顔をして出て来た。

かくてようやく、ハンスとモーゼスにとって、その大学生生活の最後の半年となった。

聖ミカエルの祝日の頃[九月二十九日]、ハンスは故郷で神学の聖職候補性として試験を受けることになった。彼は自分のなすべき事を果たしていたので、彼はこの関門に、フォーゲルザング教授や他の気難しい教師達にも関わらず、かなり平然と立ち向かった。

最後の学期の当初、モーゼスは素晴らしい博士論文「神々しいものの契機としての物質」を執筆し、これについて自分の意見を古典ラテン語で、数多くの聴衆を前に、弁護した。この文書とその弁論は大きな騒ぎを引き起こした。そしてこの騒動ではまた多くの埃が舞い上がった。しかしこの抜け目ないイスラエル人の頭は、少なからず、この悪漢が我が立派な師と呼んでいる、靈気殺害者達(精神撲殺者達)の頭目達の間から立ち上る霧の中でにやりと笑いを浮かべていた。しかしやはりモーゼス・フロイデンシュタインも哲学博士として、アウラの霧の中から立ち上がることになった。彼の評判は、その学業生活の最後の日々、絶大であった。仮に有名でないとしても、悪評高かった。ー ハンス・ウンヴィルシュについては誰も語らなかつた。彼が学業を終えても、誰も重苦しい気持ちにならず、誰もほっとした気持ちにならなかつた。

これまでモーゼスは、将来何で生活するつもりかというすべての質問に対し、ただ曖昧な言い回しで返事を避けていた。しかし彼も多分極めて誠実真剣に途方もない計画を善良なハンスに鑑定のために打ち明けた。博士になった後、彼はある晩、全くさりげなく説明した。

「いや、忘れないうちに言っておこう、ハンス。明後日私はパリへ行く。今日の午後、私は某地のフランス使節からパスポートを貰った。我が少年、椅子から落ちないでくれ。何か私の鼻にとても変わったものが付いているかね。何故そうまじまじ見るのだ」。

ハンス・ウンヴィルシュは実際、仰天した顔をしていた。フォーゲルザング教授が説教壇で、突然、「我が生涯は愛と悦楽」の歌を歌い出したら、ハンスは教授を大体そのような具合に見つめたことであろう。モーゼスがパスポートを彼の鼻の下に置いたとき、彼は自分が聞いたことを信じた。

「いや、モーゼスよ、モーゼス。向こうで何をする気だ」と彼はようやく叫んだ。そしてモーゼスが答えた。

「向こうで私は水泳を習うつもりだ。我々ドイツ人は珍しい魚だ。ー 途方もない精神的鰭付きのぶよぶよ種だな。これらの尾鰭が途方もないピシャピシャ音を発する。我々がこの情けない実生活を送っている水溜まりさえなければいいのだが。とても浅くて、とても狭い。ドイツ人とは、満潮の波が引いた後の浜辺に他ならない。こちらにも沼地、あちらにも沼地で、一杯惨めな生き物だ、ぎょろ目で、ぶよぶよ、愚かで、自分達の情けない水溜まり生活に満足している。いついかなる時でも乾いたもの目がけて飛びかかっているけれども。もう結構だ。私は大きな海の予感をまだ失っていないし、それに憧れほど、罰当たりで、非愛国的だ。私はいつか自分の尾鰭のために、広大な海を探すつもりだ、ハンスヘン。君はソドムとゴモラへの遠出を一緒にするとしたら、何と言うかね、敬虔なるハンス」。

「ソドムとゴモラの上には死海がある」とハンスは言った。彼はまた次第に冷静になって、とても内省的に座っていた。

「モーゼス、君の最初の比喩が正しかったのであれば、君は最後の君の言葉でこれを覆してしまっている」。

「ブラボー」とモーゼスは笑った、「まあ、落ち着け、穏やかな神学情緒生よ、私は君を君の快適な沼地から引き掠う気はない。しかし今は私と一緒に行こう。我々はこの驚愕を愛でて、一瓶ワインを飲もう、 — 私は用意しているのだ」。

モーゼス・フロイデンシュタインは実際一本のワインを「用意」していた。この事実は、ひょっとしたら彼の知遇を得ていた複数の者にとって、彼は尋常でない計画を胸中に行っているのだという最も確実な印であったかもしれない。

呈示した日に、彼は実際郵便駅通馬車に乗って、西へ向かった。ハンスは大変感動して、郵便宿駅のドアの段に立ち止まっていた。かくも長いこと一緒に並行していた両者の道が、今やひょっとしたらこれからずっと離れ離れだということに、まだ迂闊に気付かないでいた。それは彼にとって、自然なもの、全く通常のものさえ、得体の知れない、奇妙な、混乱した色彩を帯びる夢の中の出来事のように思われた。

ハンス・ウンヴィルシュの生涯の中で、一つの大きな隙間が生じた。彼のすべての無愛想な性質も含めて、この「友」の喪失はとても堪えがたいものがあった。この友の方は多分、この青春の友の存在を最初の馬交換が済まないうちに忘れていたであろうが。ハンスはいつも以上に人生から引きこもって、自分の日々を勤勉な勉強で過ごした。彼は陰気な、不健康な状態に陥ったが、この学期が終わる頃、ようやく一通の手紙によってこの状態から拉致された。これは自分の人生ではもっと大きな隙間が生じ得ることを示すものであった。

この手紙はグリュネバウム伯父からのもので、ハンスはこの手紙を長い散歩から帰って来た灰色空の夕方、自分のテーブルに見いだした。

伯父ニコラウス・グリュネバウムは執筆の流儀も、自分が語るときの流儀とほとんど変わらなかった。

手紙は次のようなものであった。

「親昵なる甥殿、

貴重なる学業修道士。

そなたの亡き父親のこともあって、言うまでもないことだが、人間はこの地上に永遠に生きるわけではなく、人間の人生には期限というものがあって、早まって出発したわけでもなく、墓地に運ばれるとしても、これは受け入れなければならないとそなたは経験済みであるが故に、また今やそなたは、敬して言って、牧師の卵であり、神の御言葉の教育を受けているが故に、更にそなたは気立てが良くて、感じやすい気質であるから、我々は、つまり、この私に、そなたの母、シュロッターベックおばさんは、そなたにこう期待している、この手紙を読んでも、そなたは余りに悲嘆に暮れることはないであろう、と。即ち、そなたの母親の具合が良くないのだ。我々は長いこと黙っていた。それは軽微に始まっていて、そなたにこの不幸を知らせないうちに、快方に向かうであろうと我々は思っていたのだ。しかし今や、お仕舞い、最後だ。これ以上悪くなることはない。そこで我々はそなたに知らせることにした、荷を背に担いで、聖職者として帰って来て、自分は単に他人のために慰めの言葉とハンカチとをポケットに有しているだけではないと示す必要がある、と。しかしこの手紙を読んだからと言って、余りに案じて、取り乱してはいけない。そなたの母親、この善良な魂は、穏やかな死を迎えて、息を引き取るまでに、余りに

苛酷に長く患うことを免じられることだろう。しかし医者は言っている、そうならないかもしれない、愛する神の許へ行くまでに、更に難儀な目に遭うかもしれない、と。従ってそなたはこのことも覚悟する必要があるだろう。我が少年よ、なるがまま、任せることだ。これ以上私は言わない。しかしこの女性は切にそなたに会いたがっている。それでそなたが学者先生、教授先生から帰省のお許しを得られたら、その後、そなたの移動本を出来るだけ速やかにこちらへ届けさせるようにしたら、我々にはとても有り難く思えよう。そなたの母親はそなたに尽くして来たから、その最後の日々、苦しい思いの時に、そなたに会って慰めを得るに値しよう。彼女は痛風がぶり返して、洗濯の冷たい水でえらいめに遭い、恐ろし思いをしている。だからそなたは旅立ちの準備をして、こちらへ至急戻りたい、我々はひどく困惑してそなたを待っているところだ。

その他、万事普段と変わらない。しかしもはやこの世に、喜びはない、新聞にもない。私とそなたの母親がまだ、今のそなたのように若造であった頃、それにそなたの父親が、これも若いヒヨコで、そなたの母親に求婚した頃、これが私には昨日のここのように思えるが、その頃と全く変わってしまった。それで、アントンもとうに亡くなっていると思い、そしてこのクリスティーネ、つまりそなたの母親が臥せっている姿を見ると、これが本当とは思えない気がする。

だから至急帰って来て欲しいのだ。 そなたの親愛なる伯父にして名親
ニクラス・グリュネバウム
靴製造親方」

ハンス・ウンヴィルシュの足許に落下した稲妻は、彼を麻痺させたが、しかしただ短時間であった。彼は両足で立っていて、厳かに転がって行く雷鳴に耳を傾けた。容易にすべての粗野な接触から避けて行くハンスであったが、彼は今や不幸の手が本当に憤然と彼に手を伸ばして来たとき、避けなかった。彼は荷とわずかな所有品を思案してまとめて、大学から古い新町の母の臨終の床に向かった。

第十一章

秋の天候のメランコリックな道であった。その小道の長い途上ずっと、風が哀れな歩行者の伴をした。冷たい、陰気な、泣きめその、呻くような十月の風であった。風は森からその飾りの残りを嘲るように奪っていた。風は春や夏にはしばしば阿るようにその飾りと戯れていたものである。街道では風は濃い埃の雲を吹き上げていて、田畑の切り株の上に、呻るようにしゅっと吹き下ろし、それは鳥の他にはどの生物にとっても快適ではなかった。近隣や遠方の村々の殻竿の物音だけが、まだ地上ではすべてが失われたわけではなく、風が空の畑で凱歌を上げている勝ち鬨は単に見せかけに過ぎないという慰めの印として聞き取ることができた。

しかし街道の埃の雲の中の孤独な遍歴者にとって、こうした慰めは聞こえなかった。彼はそれに注意を向けられず、深甚と重く圧迫されて、彼は一歩ずつ進んだ。彼は今やこの道をすでに何度も往来していて、右手であれ左手であれ、何らかの目立つ対象で、見知らぬものはなかった。木々や岩塊、家々に小屋、道標、教会の塔、古い境界石、この

境界石はどんなに広大な所有でも無常であるとしか意味しないもので、――すべてが以前、異なる気分の中で、異なる印象を彼に与えていたものである。彼は自分があちらで沈んで座っていた次第、またあちらのかの茂みの下で、或る午後一眠りした次第を思い出していた。彼は主に、自分がこの道を初めて、知識への大きな飢餓を抱いて、姿を消した青春の同輩と一緒に歩いて来たときのかの日々を想起していた。今や彼はこの道に戻るのが最後になるのであった。――多くのことを彼は学び、幾多のことに耐え、幾多の喜びを味わっていた。今や彼の心はいかなる状態か。

彼は打ちひしがれていた、彼は悲しかった。伯父グリュエネバウムのこの邪悪な手紙がなくてもそうであったことであろう。彼は全力を上げて、自分が身を捧げた高度な芸に関し、習得出来ることを習得すべく努力した。しかし彼は、これは根本において、ほとんど取るに足りないと言わざるを得なかった。彼に対し先生達が説教壇から教授したことは、不十分なものであると、深く感じていた。しかし彼はまた少し違うことも感じていた。そしてこれこそは、フォーゲルザング教授も、それにいとも評判の高い名誉ある神学部の大方の他の構成員達も認めようとは思っていないことであった。彼らはそれを教授できなかったからである。

彼は自分の最愛の人物の死に目に会いに行く途上であった。暗闇に彼は向かって歩み、そして暗闇を彼は背後にしていた。以前彼は森と小鳥達に説教をした。世間は彼の感情について何も知らうとしなかったからである。そして彼はこのことに苦情を述べなかった。さて今や知識への飢餓は死んだように見えた。しかしこの感情はまだ生き生きと残っていて、上昇して来て、自分の心を圧迫した。この感情は、人間が堪えられないほどの極めて鋭い痛みとなった。この瞬間には、この切迫した混雑の中では何も区別されなかった。母親への痛みと、幻滅、憂慮、臆病が混じり合っていた。そして奇妙なことにその間に、鋭く切断するように、夙に忘れられていた言葉が蘇って来た。モーゼス・フロイデンシュタインがかつて発したものである。ハンス・ウンヴィルシュは別のハンス[ルソー]が何年も前、アヌシーからヴヴェーへ行って、この旅についてこう書いたあのハンスと類似の気分にあった。

「幾度、心ゆくまで泣くために、大きな石の上に腰かけて、水の中に落ちるわが涙を見てたわむれたことであろうか」[ルソー『告白』上桑原武夫訳(第4巻)219頁岩波文庫]

相変わらず風が吹いていた。風は一日中、灰色の空の上で黒い雲を追い立てていた。しかし一滴も雨は降らなかった。風は、荒廃して雑然とした庭園の生垣に吹き寄せた。そこでは干涸らびた向日葵や立葵が惨めに冠を垂れていた。風は、ハンスが昼食を摂っていた村の料理屋の窓を揺さぶり、家の周りを吹き荒れ、しばらく風を避けていた旅人を憤然と待ち構えていた。風は、国境遮断機の下、止まっている旅行馬車の周りで狼藉を働き、御者の広い外套の襟を耳許で翻らせ、御者はほとんど通行料を取り出せないでいた。ハンスは窓からこの馬車を無関心に眺めていたが、しかし次の瞬間、もっと鋭く目を注ぐことになった。馬車の側面の革の覆いがめくられて、若い娘の覗き顔が見えた。彼女はわびしい街道を見下ろしていた。風は黒い喪の帽子から黒いヴェールを剥ぎ取っていて、その下の青白く悲しげな娘の顔に対し、路上で風に出会う他のものに対するのと同様に何の遠慮もなかった。しかしハンス・ウンヴィルシュはこの顔に、それだけ一層大きな印象を受けた。苦悶は別の苦悶を歓迎する。徒歩で街道を歩いている傷心者は、馬車で塵埃の渦の中を転

がって行く傷心者に対して一礼した。この青白いやつれた顔は、ハンスが陥っている気分
に全く合致していた。彼はこの未知の運命について、もっと知りたい思いであった。

しかし娘の顔は引っ込んだ。その代わり灰色の口髭と古い軍帽が現れた。シュナッ
プスのグラスがなみなみと一杯、馬車の中へ渡され、素早く空になってまた出て来た。御
者も、外套の襟との激しい戦いの最中であつたが、同様に一杯の飲み物で、つまり直接源
泉からのものではない飲み物で景気づけることが可能になっていた。よしや、出発。馬は
引っ張り、古い馬車は、砂塵を上げて、がらがら去って行った。風がその後から追跡犬の
ように追って来た。その風は、ハンスが今や黄金の鹿亭から出て来たとき、同様に彼を勝
ち誇って、荒々しく接待し、彼を馬車の方へ吹き飛ばしたが、これは珍しいというか妙で
あつた。

黄金の鹿亭の人々は、老軍服の紳士と喪服の若いレディーのことを誰であるか言う
ことができなかつた。人々はただ御者と痩せた両駄馬、古く壊れそうな馬車だけを知って
いて、この四点セットはよく旅馬車として使われる、しばしばこれが先へ進む唯一の手段
であるからと言明した。

ハンスは、自分の他のあらゆる想念に加えて、今やその青白い顔のイメージを薄暗
い午後の旅の間抱いていた。そのイメージは再三新たに彼の心に浮かんだ。彼には抗う術
がなかつた。かくて彼は歩み続け、薄明かりがまた濃くなって、夜自分が宿泊しなければ
ならない小都市に達するまで立ち止まらなかつた。

勿論その日は一日中薄明かりであつた。夕方になつても世間の明るさの点では変わ
らなかつた。しかし今や夜となつて、風と共に事がなされた。悪魔が第三者となつて、風
と夜の同盟に加わろうと、事をこれ以上ひどくすることは出来なかつたであろう。

ハンスが今や達した田舎の小都市の、古い傾いた家々が翌朝まだ垂直に立っていた
としても、それは風の落ち度ではないほどの吹きようであつた。明かりが部屋の中、窓の
背後でちらちらしているように見えて、まだ路地にいる少数の人々が、嵐に対し、前に体
を傾けたり、後ろに反らしたりして、苦勞して道を進んでいた。家々のドアが轟く音を立
てて閉まった。鎧戸がパタンと発して開いた。この地の唯一のガラス屋は、遠方の甲高い
音のたびに満足げに聞き入っていた。

しかし一般的に風はこの小都市を放置しなければならなかつたとしても、それ以上
に風は郵便宿駅亭の主人に対してはいかんともし難いものがあつたろう。この男を足許か
ら吹き上げて、大地にまた下ろすのは、実際曲芸に匹敵して、アイオロス[風の神]は自分の
配下にそれを懸賞問題として課すことができたであろう。短い、丸々とした両脚で彼は軋
む看板の下、自分の門道前に根を下ろして不動に立っていて、丁度今二人の下僕が小屋の
下に引いて来る馬車のことで、指示を出していた。この巨大な肉塊、つまり郵便宿駅亭主
の許に痩せた神学生、ハンス・ウンヴィルシュは、言葉の文字通りの意味で打ち上げられ
た。半ば窒息して、半ば盲目になって、彼は門道に吹き寄せられ、強引に宿駅長の腹に投
げ飛ばされたが、しかしこの衝突もこの岩塊の平衡を崩すことはできなかつた。

しかしこの郵便宿駅長は、幸い、この状況によるやむを得ない暴力を評価する術を
心得た男であつた。彼はこの衝突を、想定されるほどに粗野に受け取らなかつた。彼は投
げ飛ばされた客人に、失せやがれと要求しなかつた。それどころか彼は半ば向きを変えて、
彼に自分の宿への入場を許し、彼の後をただ小声で、鼻を鳴らしながら、二、三こう述べて

付いて来た。

「舵取りがめっちゃくちゃだ、一橋の上はいつでもゆっくりでないと一角を曲がるとき、急ではいかん、一いやはや、まさに満腹の胃に当たった」。

しかし亭主は、陰気に照らされた客室で、この邪悪な風によって家の中へ吹き寄せられた余所者の顔を知ると、彼の丸い顔から、不機嫌の最後の影が消えて、全く満足して彼は自分の広い手を挨拶のために差し出した。

「いや、あなたでしたか、学生殿。また休暇で飛んで来たのですか。これは嬉しい。よく言うように、風にも功德あり、ですから」。

ハンスは、大いに努めて、家の玄関での乱暴な挨拶の詫びを述べた。しかし亭主は、今はただ微笑し、同情して見つめ、自分の手の上に息を吹き付け、あたかも羽毛ですよ、羽毛、羽毛に過ぎないと言いたげであった。しかし彼はこう述べた。「ウンヴィルシュさん、構いませんよ。男の面目です。ランドセルを下ろしなさい。一いつものように一日中背中に負っていたのですか。魂消ます」。

すると女将がいた。家の亭主同様恰幅が良かった。すると女将の娘御がいた。しかし今回はまだ黒い棺の中ではなく[ウーラントのバラードより]、とても生き生きとしていて、同様にふくよかに肉付きが良かった。彼らは哀れで、悲しげなハンスに挨拶をした。ハンスの善良な心とわずかばかりの財布の中身を幾多の以前の休暇から承知していて、然るべく敬意を表して対処した。彼らは彼がほっとする間もなく、質問をして、今故郷に呼ばれている悲しい理由を聞き出した。彼はそれからランドセルとツィーゲンハイン杖を片付けた。彼らは良き食事と立派な飲み物をすべての厄災に対する最良の万能薬と見なしていたので、それで亭主は地下室へ行き、女将は娘と一緒に台所に向かった。そして今やハンス・ウンヴィルシュは残りの客人に初めて視線を投げかけることができた。

ただ二人いるだけであった。暖炉のある片隅に一つのテーブルに食事の用意がしてあって、そこに座っていた。一人の老いた、口髭の紳士が、長い軍服の、顎までボタンを締めた上着を着ていた。それに若い、青白い、病気に見える娘が、喪服姿でいた。娘は両目を下に向けていた。しかし老紳士は、神学生をしっかりと遠慮なく見つめていて、それで神学生は全く不快な気分になったが、太った亭主がまた客室に現れて、その不透明な体を鋭い目と口髭の男とテーブルの間、つまりハンスがいるテーブルの間に割り込ませたので、ハンスはほっとした。

亭主殿の声は良く響いた。亭主は、ハンスが願っているような小声では質問をせず、それに難聴気味で、出来るだけ大きな声での返事を要求していた。そして女将が鉢や皿を持って、女将の娘御がナイフとフォークを持って、来たとき、彼女達もそれぞれ聞きたいことがあった。この黒い上着の神学生について必要な情報を得るのに、口髭男は盗聴者を演ずる必要もなかった。

人間は多くの痛みには耐えなければならないとき、その上長いこと周囲に親切で関心を寄せる声を耳にしてこなかったとき、ようやくこのような声の質問や同情に耳や心が迫られると、普段はどんなに心を閉ざす者であっても、より饒舌になるものである。それにハンス・ウンヴィルシュは、我々が承知しているように、心を閉ざしていなかった。彼は苦しみや喜びを隠さなかった。それで彼は何も隠すことがなかったので、気の良い宿の人々に、世間は自分を如何に遇して来たか、自分は世間を如何に遇しているか、隠さずに語

った。

この軍人の老公はやがて、このような飢餓的外見の、若い黒い上着の神学生に関して、面白そうな点をすべて把握した。彼は彼の名前を知り、彼が有名な町、新町出身であるということを知った。更にグリューネバウム伯父とかいう人物は相変わらず達者であって、同様にシュロッターベックおばさんも相変わらず路地で死者の散策に遭遇するという事も聞き知った。この神学生は老いた母親が新町にいて、この母親が苦しいひどい病に臥せっていて、ことによると死に至るかもしれない、こうしたことすべてを灰色の口髭男は聞き取って、更に若い娘も聞き取った。それに娘は関心を抱いて聞いているように見えた。というのは娘は顔を上げて、神学生の座っている方を見たからである。その顔は親切なものであったが、美しくはなかった。目は美しかったが、しかし彼女は神学生が見えなかった。多分見えたのは郵便宿駅亭の亭主の背中であつたろう。亭主殿は、その眺望を、彼女に対しても、また自分が大いに熱心に問い質している若い男に対しても、邪魔していた。

何と外では風が唸り声を上げて、その憤慨を明々白々に伝えていたことか。風は狂ったように家の周りを走り、窓のすべてを揺さぶった。その窓の中を、共犯者たる夜が、不快げな秋の夜が、人間嫌い風に、明かり嫌い風に覗いていた。いや、何と風と夜は、今や安全に避難している旅行者達を嫌って怒っていたことか。何と風と夜は、郵便宿駅亭の太った亭主、女将、女将の薔薇色の娘に対し怒っていたことか。自分の犠牲者を神聖な、不可侵の自由地に逃してしまった捕吏であっても、これほどは怒れなかったであろう。

しかしこの瞬間、強調してこの言葉をがらがら声で発した者は誰か。「恥知らずのユダヤの若造が」...

風であったか。夜であったか。

いや、それは口髭の初老の軍服の紳士であった。彼がこの好意的名称で、丁度ハンス・ウンヴィルシュがその名前を口にしたばかりの我らの友、モーゼス・フロイデンシュタインのことを意味していたのか、疑念が残るとしても、彼はその疑念をすぐに吹き飛ばした。彼はこう付言したのであった。

「私が最近パリで、その立場を強調して明らかにしなければならなかったあのならず者のことならば、あれは賢しらな、出しゃばりのユダヤの若輩者だ。 — そうだろう、フレンツヘン。モーゼス・フロイデンシュタイン、いや、その名前だった。聖職候補性殿、もっとこちらへお出でなされ。こちらのテーブルへどうぞ。この夕べは皆が寄り合うように全くできている。貴方ともっと知り合いになれて、先のモーゼスについて、若干詳しいことを拝聴できたら、嬉しく存ずる」。

突然の割り込みにとっても驚いて、宿の人々は話者の方へ振り向いた。そして友に対する思いがけない攻撃に興奮して、ハンスは立ち上がった。

何ら臆することなく、彼はモーゼス・フロイデンシュタインの弁護を即刻、その場で始めた。しかし老紳士は宥めて、合図した。

「いや、いや、いつもただ常歩[なみあし]で行くことです。右、左、と。 右、 — 今また風が呻り始めた。外の風のものすごいこと、お聞きなさい。これでは牧師達でさえ、議論する気が失せる天候です。こちらへお出でなさい、聖職候補性殿。一杯のポンス酒に。私がまたしても不愉快なことを発しましても、悪しからず。 — 不快なことを申したか

もしれません。こちらの我が姪の令嬢が私の上着の裾をつまんでいますから」。

亭主殿が相変わらず彼女と神学生の間立っていたら、ひよっとしたら若いレディーにとって、このときとても都合が良かったかもしれない。しかし眺望は今や完全に自由になっていた。ハンスは何にも遮られずに、一瞥して、赤面しているその娘に感謝した。娘は灰色の口髭男の上着の裾をつまんでいたものであった。

「聖職候補生殿、こちらへ、こちらへどうぞ。担え銃、一 行軍 一 停止。出動、フランツィスカ、一 そなたは黒い上着[神学生]が怖くなくろう。亭主殿、この快適な健康に良い飲み物を二回目、注文をすればしたら、いかが思召すか」。

亭主は、この飲み物は、この天候とこの時間に全く適したものでございますと述べて、合図して用意した。ハンス・ウンヴィルシュは良く分からないうちに、老兵士の横、青白い令嬢の向かい側、蒸気を発するグラスの前に座っていた。

「これで結構、聖職候補生殿」と口髭男は言った、「貴方は退職した傭兵に、一つ二つの汚い言葉のせいで、叱りつけるお方ではないと分かっています。聖職候補生殿、貴方のご健勝を祈念しまして。私は段々に、貴方のお名前、境遇、等々を耳に挟みしましたので、私どもにつきましても、貴方が不案内ではよくないでしょう。私は退役の少尉、ルドルフ・ゲッツ。この娘は私の姪、フランツィスカ・ゲッツです。この娘の父親が最近パリで亡くなりまして、私がパリに迎えに行き、この娘を私の三番目の兄弟の許に、法律専門の奴ですが、連れて行く途中です。哀れな子です」。

最後の言葉を少尉はただ全く小声でつぶやいて、すぐに大きな声で付言した。

「これで私どもは互いに素姓が分かったわけですから、今晚はこの宿で何の立ち回りもなく済むことでしょう。乾杯、聖職候補生殿。貴方は今日立派な行軍をされた。これには立派に飲むことがふさわしい」。

ハンスは少尉に乾杯を返して、やがて、この声と口髭とは、陽気な目、機嫌の良い鼻、陽気な口とは何の関係もないと知ることになった。神学がここで大言壮語のほら吹き、腕力に陥落するかもと恐れる理由は何もないと分かった。更にフランツィスカのいる前で、粗野を剥き出しにするのは、心が大変墮落していなければ出来ないことだとも分かった。

老いた兵士を二人の悲しみの若者の間に見るのは、好ましい絵柄であった。兵士は大いに楽しみたい気分であった。しかしそういうわけに行きそうになかったため、彼は全力を上げて、慰め役を演じた。

「世の中こんなものです」と彼はグラスの縁越しに言った、「人々は街道に馬車や馬で出掛けて、互いに通り過ぎ、互いのことを考えていません。しかし突然快適に席に座って、一つテーブルの下で脚を伸ばすわけです。そんなものです。丁度、四つの隅の間に立っていて、左右に自分の隣りの男、自分の最良の友を有し、これを頼りにしています。向こうで二つの十二ポンド砲が配置に付いて、芝居を始めるのを人々は全く冷静に眺めています。どーん、どーん、一 砲弾は大隊の中、邪悪に飛んで来ます。しかしそれらは君達には何もしない。君達の隣の男にも何もしない。向こうでは今がチャンスと奴等は考えます。一 騎兵が来て、一 速歩、一 ギャロップ、一 君達は奴等が雷鳴の如く、地団駄踏み、咆哮して迫って来るのを見ます。一 撃て。君達の耳で轟音がします。この悪魔がくしゃみをする時、君達は乾杯も言えないほど、意識が混乱します。しか

し君達はしっかり立っている、目の前が真っ黒になろうと、頑張る。 — これはまことの困窮であり、君達はじたばたしているものや、静かに寝ているものすべてにこけてしまう。君達の脚の間で、ぎゃと言ったり、呻いたり、喘いだりする声上がる。しかしどうしようもない。君達は出来るだけ、しっかりと立っている。たとえ身動きできなくても、踏ん張る。犬どもはもどらなければならない、果たしてその通りする。火薬の煙の中では、馬の尻尾しか見えない。そして誰もが、自分がやって来た元の所へ、戻って行く。そして風が煙を吹き払う。 — いや、畜生、君達の隣の男はどこだ。君達の側にいるのは、見知らぬ顔だ。そして見知らぬ手が君達に瓶を渡す。戦友、仕事が上手く行くよう祈って、飲もう。大隊が三步前進すると、死者や負傷者が生じて、列から外れます。周りの奴等は、汗を流して、湯気が出ています。あちこちで人の鼻や他の箇所から血が滴っています。 — 地面はぬかるんで、十分に掘り返されていて、地獄のような臭いがします。しかし良き友は去ってしまいました。しかし君達は彼らを求めて周りを見ることすら許されぬ。というのは、向こうの森のならず者達が撃ち止めないからです。奴等はしばしば日没まで接近してやって来て、夕方のパン代を稼ごうとします。すると今や私の姪のフランツィスカと来たら、これもその隣の男を見失っていて、こちらでは牧師殿も、酢壺に落ちた黒い雄猫さながらの顔をしています。それにここには私もいて、 — 私も一人の哀れな孤児。若い衆、申しておきますが、野戦炊事車でよく雨に出会った者は、蓋の被せ方を習得するものです。すでに一度ならず、側の良き戦友を失った者は、さよならの言い方を学ぶものです。どんな心優しい者でも、悲惨さの中で、ただ三回素っ気なく飲み込む術を学ぶもので、それでいて、最良の最も忠実な人間なのです。フレンツェル、頭を上げなさい。老いた伯父を労っておくれ。ハンス・ウンヴィルシュ、頭を上げなさい。こんなうら若い者が、失意悄然としていては、我々年寄りはどうしていいか分からない」。

フランツィスカは、自分にその兵士が差し出している硬くて毛深い手を優しく自分の胸に押し当てた。彼女は彼を見つめた。彼女の目は湿って微光を発していたけれども、それでも微笑して言った。

「いや、親愛なる伯父様。私はあなたの望まれることすべてを行いましょう。このように嘆き悲しんで、あなたの愛に報いようとするのは、良くないことです。でも大目に見てください。 — あなたの愛に甘えてばかりで、すみません」。

老公は、自分の広い手で握っていたその小さな、華奢な手を上に持ち上げて、彼女を注意深くじっと見つめた。

「哀れな子よ、哀れな子」と彼は口ごもった、「巣から落ちた小鳥のように、見棄てられ、寄る辺ない。 — それにテーオドールとその妻、 — そしてクレオーフェアか。 — いや、悲しいことだ。哀れな小鳥よ、哀れな小鳥。 — 老いた放浪者の私はこの子を受け入れるちっぽけな片隅も持っていない」。

彼は長いこと頭を振って、低く呻きながら嘆息した。それからテーブルを叩いた。

「面白い、聖職候補生殿。では貴方はかのモーゼス・フロイデンシュタイン、八十万の他のろくでなしどもと一緒にパリの治安を乱している奴をご存じなんですな。これはまことに素敵なご縁で、一つの榴弾砲と黄色の豌豆の組み合わせのように似合っている」。

「少尉殿、モーゼスが本当にかくも貴方のご不興を買っているのであれば、まことに残念です」とハンスは答えた、「私どもは一緒に育ちました。クラスの同級生で、大学

での友人です。その上、パリに行って、ほとんど半年にもならないのです。何かの間違いであれば良いのですが。衷心からそう思います」。

少尉は今や全く正確に、哀れで善良なモーゼスの人物描写をするよう頼んで聞いていたが、問うように自分の姪を見つめつつ、残念そうに個々の点のとき、頭で頷いていた。

「彼はその通り。その通りだ、間違いない。フレンツェル、あのやくざ者だな。この話しにけりを付けるために、貴方に手短に出来事をまとめて話しましょう。私の兄の死が速やかに生じて、私の姪は、悪魔の巣窟でしばらく見棄てられた状態でした。巣窟とはどういう意味かと言いますと、私は一八一四年から一五年にかけて、他の者達と一緒にあちらへ行きましたので、そう承知しているのです。哀れな子です、哀れな。そこの混乱に見棄てられるとは、どういうことか。 — 聖職候補生殿、また姪は私をつねっています。フレンツェル、頼む、止めてくれ。私に語らせろ」。

「伯父様、もう止めてください」と若い娘は囁いた。「あの件を実際よりもひどくお考えです。あの方は、 —」。

「八つ裂きにしなければならない悪漢だったのだ。 — いや、フレンツェル、つねるな」。

フランツィスカはハンス・ウンヴィルシュに嘆願するような視線を投じた。ハンスは椅子の上でかくも居心地悪く感じたことはほとんどなかった。それに彼はまだ、自分の友モーゼスがこの若いレディーと老兵士といかなる関係にあったのか分かっていなかった。この不分明さにとても心が落ち着かず、友に対する疑念が、鋭い針のように彼の心を刺したけれども、しかし青白い少女の苦悶を、激しく、執拗な質問をして、更に募らせることは、金輪際出来なかった。ただ一点彼にとって明らかであった。つまり偶然の戯れで、フランツィスカ・ゲッツが父親の死後、寄る辺なく、孤独に、庇護もなく暮らしていた家に快活なモーゼスは導かれたに違いない。そしてその振る舞いは、極めて騎士らしいものではなかったのであろう。それからブルヴァール[大通り]の一つで、少尉ゲッツとフロイデンシュタイン氏との間で、或る激しい場面が生じたのであろう。そして哀れなモーゼスに対する骨身に染みた嫌悪感を抱いて、少尉はドイツの祖国に戻って来たのであろう。

—

郵便宿駅[郵便ホルン]亭の窓前で、別のホルンが不協和音として嵐の中、響いた。夜警人が十時を叫んだ。そして小さな一行は別れを告げた。少尉は心を込めて神学生に別れを言い、今一度、流れの上に頭を上げて進み、必要とあらば、活路を開くために、命がけでやれと要請した。フランツィスカも彼の命令で、若い男に別れの挨拶として手を差し出さなければならなかった。そしてそれを自然に、臆せず行った。翌朝早くに少尉と令嬢は出発して、今やすでに北方の大きな首都に通じている鉄道路線に乗らなければならなかった。ハンス・ウンヴィルシュはもっと長く眠ることが出来た。新町へはまだ鉄道路線は通じていなかった。それにこの町は元来、そのような方法で、他の世界ともっと往来出来るようになりたいという欲求が少しもなかった。ハンスが今一度馬車の側で、両旅行者に対し、旅の無事を祈念したいと思ったとすれば、それは彼の善良な意志であった。そして彼がその時間、眠って過ごしたとすれば、それはその善良な意志を実行に移させなかった運命の落ち度であった。

彼はその夜の大半を、眠れずに、臥所で輾転反側して過ごした後、正しくその時間

を寝過ごしてしまった。長い徒歩旅行と風、つまり屋根を越えて角で口笛を吹く風、伯父グリュネバウムの手紙、少尉ルドルフ・ゲッツの強いポンス酒、パリのモーゼス・フロイデンシュタイン氏、青白い、悲しげなフランツィスカが彼を眠らせなかった。彼は起き上がって、明かりを点し、それからまた吹き消した。彼は自分の思考を少しも整理出来なかった。普段彼の空想は、落ち込んだ気分するとき、加勢に来てくれて、色々な快活な好ましいイメージを過去から呼び出して彼を慰めたり、あるいは未来の魔術的鏡を、微笑し、からかいの合図をして、差し出してくれたとすれば、今やただ空想は、幽霊のような影を頭の周りに寄せて来て、彼の遠方のものや近隣のものを危険な具合に覆った。

この夜ほど、ハンス・ウンヴィルシュがその全生涯で意気消沈したことはなかった。一 彼はつい先ほどまでは余りに幸福であった。今や初めて全方向から、暗い容赦ない手が彼の人生に掴みかかって来た。彼の青春に善意の運命を導いて来た狭小で確実な圏が砕かれた。彼は世間の大きな戦いへ投げ出された。この戦いについては、彼と一緒にこの晩、郵便ホルン亭の屋根の下に泊まった若い娘の方が彼よりも詳しく知っていたのである。

敗者よ、哀れなり。[Vae victis、紀元前 390]

第十二章

彼ら二人は出発していた。しかし二人は一体誰であり、自分にとって二人が何を意味するものになるか、彼は分かっていなかった。向こうの暖炉の所に、二人が座っていた席があった。女将はその上にコーヒーを置き、ハンス・ウンヴィルシュのために椅子を正しく揃えた。亭主は中庭と庭園を通っての朝の散歩から戻って来て、更に二人の旅行者からの挨拶を伝えた。二人は出掛けた、つまり馬車で出発したのであった。

ハンスはコーヒーを飲む前に、今一度窓から通りを見た。もはや二人の痕跡はなかった。

「実直な老紳士でしたな」と郵便宿駅亭主は言った。そしてその夫人が言った、「哀れな若レディーでした。一体どうしたのか、聞きたいところでした。彼女の寝室の隣で眠ったマリーは、一晩中彼女の泣き声を聞いたそうです。すでに若い身空で、多くの苦しみを体験したのに違いありません」。

ハンスは窓から戻って、昨晚腰かけた椅子に座って、二人の空いた椅子を見ていた。彼は昨晚耳にしたすべての言葉をまた反芻し始めた。

「それに彼は私に手紙をくれない、一 私は彼の住所を知らない、一 私は彼がこの若いレディーにどんな苦しみを与えたのか、彼に尋ねることができない。夢のようだ。いや、モーゼスよ、モーゼス」。一

二人は去ってしまった。風も収まった。天は昨日よりももっとどんより灰色に近い、しかし風はもはやそよもしない。

「奇妙な出会いだった。あの少尉殿にまた会いたいものだ。...私の肩の荷はとても重く感じられる。いや、私がモーゼスの住所を知っていても、何の甲斐があろう」。

郵便宿駅の亭主は、客人を快活にさせる責務を感じていて、この地の珍しい出来事、陽気な、あるいは悲しい出来事を語った。しかしハンスはただ上の空で聞いていた。一一一 二人は去ってしまったのだ。それで結局彼はこの鬱陶しい宿の部屋に耐えられな

なくなった。自分も同様に去らなければならない。自分は新鮮な空気を吸う必要がある。彼は自分の勘定を払い、郵便宿駅の亭主の心のこもった別れの挨拶を受けながら、出て行った。彼は右手も、左手も見ずに、この寝惚けた一帯を縫って行った。また街道に出たとき初めて、彼は上を見、周りを見て、そしてほとんど昨日の風がなつかしく思えた。昨日は、不気味ではあったが、少なくとも活気があった。しかし今日はどの不毛な敵も叫んでいる、偉大なパン[牧羊神]は亡くなった、と。 — そして雲が死んだ大地に喪のように垂れ込めている。道が次の村の背後で広大な樅の森へ通じていたのは、旅人にとって幸運であった。森の中は野外の畑の間よりも更に暗かったとしても、樹脂の新鮮な香りが感覚や魂に覚醒するように作用したのである。この樅の森で、ハンス・ウンヴィルシュは青春の友に対する不穏な考えを撤回させた。というのは、彼がこの森の薄明かりの中からまた出て来たとき、地平線にかの高台、つまり背後に故郷の町が横たわっている高台が出現したからである。そして病んだ母親のイメージの前でもはや他の一切は退いて行かざるを得なかった。昨夜彼に向かい合って座っていた青白い若いレディーのイメージさえも、消えざるを得なかったのである。

休まずハンス・ウンヴィルシュは歩き続けた。彼はもはや休憩を取らなかった。抗しがたい力に駆られて、彼は前に進んだ。午後の二時には彼はかの森の縁に立っていた。新町が足許に横たわっているのが見える所である。

「母上、母上」とハンスは、町に両手を差し出して、嘆息した、「戻りました。私は大きな希望を抱いて出て行き、大きな痛みと多くの懷疑を抱いて戻りました。いや、愛する母上、あなたの子供を置き去りにするのですか。それはできないことでしょう。そちらの下[故郷]に残らなかった私への罰です。この山や森の向こう側に欺かれ、誘い出されて、間違ってしまった憧れへの罰です。私は故郷に何を持参できますでしょうか。放棄し、なくしてしまった幸せ、静かな、平和な幸せ、私の父上が日々過ごしていた幸せの代わりに、自分と母上に何をを用意できますでしょうか」。

今や、自分がここ上で逡巡していたら、母親が死んでしまうという恐ろしい考えに彼は襲われた。彼は息が上がるほど、高台から駆け下りて、そしてほどよく歩きながら、少し息を継げるようにした。

さて彼は古い市門を抜けて、今や町の路地をも抜けて行った。幾多の窓から、彼の姿は見送られ、幾人かの知人と彼は出会い、挨拶された。しかし彼は誰も注視していなかった。彼はクレッペル通りにやって来て、父親の家の前に立った。彼は母親のベッドの許で跪き、自分が森の縁に立ってから、あの時から一分が過ぎたのか、一世紀が過ぎたのか分からなかった。この故郷帰還の最初の折に話されたことについても、彼は何も説明できなかった。ひょっとしたら何も話されなかったのかもしれない。

今や彼は、母親の顔、その乱れた面影に、すさまじい苦患を読み取って、激しく泣いた。彼は、自分が戻ったこと、また出て行く気はないこと、母親も自分の許を去ってはならない旨、母親に囁きかけた。すると病人の母親は、やつれた声で、彼を宥めようと努め、彼は、自分の肩に片手が置かれたのを感じて、ようやく起き上がった。

シュロッターベックおばさんが彼の背後に立っていた。彼女は何も変わっていなかった。小声で彼女は、気を確かに持って、病人を余りに興奮させないように諭した。

ニコラウス・グリューネバウム伯父もいた。とても優しく、内気であった。グリュー

一ネバウム伯父は、万事その時があつて、万事然るべき具合に考えられ、扱われなければならないと承知している一人の男であつた。

そこでハンスはおばさんと伯父さんに手を差し出した。両人は彼に慰めの言葉、落ち着かせる言葉を語りかけた。彼は今一度、愛しい、低い、暗い部屋を見回し、自分が呼ばれているすべての悲しみ、すべての痛みにかかわらず、自らの中に一つの安心、一つの保証を感じた。これは苦悩の旅の間、永遠に喪失したと思えていたものであつた。

今や伯父が、自分の気持ちを、熟慮した言葉で伝えようとした。しかしおばさんがまず慎重に咳払いをして仲裁し、伯父を半ば説得し、半ば強引に連れ出した。それでも伯父は肩越しに少なくとも声をかけた。

「ハンス、母親を刺激するな。思いやるのだ。息子らしく気丈に振る舞うのだ。医師の厳命だ」。

母親と息子だけになると、母親が言った。

「ハンス、あなたを学業の途中に呼び出して、御免ね。でもとてもあなたに会いたかつた。仕様がなかつたの。あなたをずっと心の支えにしてきたから、今でも支えて欲しいの。あなたにとっても会いたかつたのよ」。

「母上、愛する母上」とハンス・ウンヴィルシュは叫んだ、「自分の幸福よりも、私の幸福や安寧の方が大事であるかのように、話さないでください。あなたの痛みのごく微量でも、それで追い払えるものなら、私は異郷で自分の学業で得たものすべてを差し出したい気持ちなのです。しかしきっと快方に向かうでしょう。きっとまた良くなりましょう。母上、私にはあなたが不可欠です。母親の一言、一視線に勝る英知は、この地上では伝授できないのです」。

「まあ、この子ときたら」とクリスティーネ夫人は叫んだ、「老いた洗濯婆さんを笑うつもりかい。学識ある殿方なのに。まあいい。　　ー　　ハンスよ、ハンス。おまえはますますおまえの亡き父親に似て来ているよ。お天道様がほんの一時でも雲の背後に隠れると、父親もそんな風だった、大学で勉強はしていなかつたけれども。夫のことをよく不思議な人と思つてきました。ある日は、雲雀のように空高く飛んでいて、別の日は蝸牛のように大地を這っていた。ハンスよ、おまえもまた青空に昇つて、私のことを忘れてしまつても、私は愛する神様に苦情を言わないよ。神様は私には良くしてくれて、幸せな人生を贈つてくれた。今私に神様が課していること、これは神様の責任ではない。これは最後皆が蒙るもので、これは誰も避けられない」。

ハンスはこの貧しい、単純な女性の臥所で、とても謙虚な気持ちになつた。この女性は大きな苦悩に耐えなければならないのに、かくも英雄的に語り、慰めの言葉を話すのである。喪失が迫っているその痛みは激しくなつたものの、先の日々の気弱な落胆は消えていた。彼は再びしっかり立っていると感じ、真正な現実の苦しきは、彼に精神的支柱をまたもたらした。彼は職業上、真実のこと、内実を、副次的なことと区別した。そして初めてそれを人生に適用した。この苦難の日々は、自分が講義室や本を通して、半ば不毛な学問で費やしたすべてのかの日々よりも意義深いものとなつた。追従的消耗性の空想や、鈍重、鈍感な詮索の魔力圏から、今や彼はまず現実生活に戻つて来た。彼は、この世ならぬもの、理想に対する飢餓を失つたのではなかつた。しかしそれに加えて、今や現実的なものへの飢餓が加わつた。そしてかくも厳かな時に生じたこの両者の融合は、立派な鋳物

を作るに違いなかった。

臨終の母親の臥所の隣りに、彼は自分の仕事机を用意した。そこに彼は座って、執筆した。同時に彼は病気の母親の微睡みを監視した。教会長老会は、試験課題を課していた。彼はこの課題に熱心に取り組んだ。彼はそれまでこの熱意を自分の中では消滅したと思っていた。奇妙な、悲しくも幸せな時であった。

何という明かりを、夕方と夜、テーブルの上のアントン親方のガラス玉は室内に投げかけたことか。この玉は後にも先にも、このような明かりを投じたことはなかった。

この光輝に、クリスティーネ夫人は、魔法の鏡を覗くように、自分の全生涯を見た。彼女は自分を子供として、若い少女として見つめ、そのように感じた。両親と両親の両親が現れ、去って行った。彼女はただシュロッターベックおばさんにしか見ることができないほど、これらの亡き人々を明瞭に生き生きと目にした。クリスティーネ夫人は自分の子供時代の遊びを、すべての女友達を思い出した。玉の明かりは、月光のようであり、日の出や日没や、明るい日中のようであった。病気の夫人は多くのことを忘れていた。それが今やまた突然現れ、その中の何も失われていなかった。

— これについては恐らく奇異に思われよう。この病気の夫人は、しばしば両目を閉じなければならなかった。様々な形象や多彩な像が遠い昔から余りに充実して押し寄せて来たからである。—
— 今や彼女ははっきりと理解した、いかに多くのことを、いかに無限に数多くのことを生涯で体験したことか、と。自分は静かに、薄明かりの中、座業しなければならない、自分は、どれほど多くの人間が、山や谷を越え、広大な海を渡り、いかほどの異国があるか、世間にはいかほどの群衆、喧噪があるか、考えることさえ許されないとよく嘆いていたあのアントンがいた。—
— クリスティーネ夫人は、この嘆きを、自分の痛みの病床で思い出し、頭で頷き、頭を振り、微笑した。あの戯けたアントンは、その生涯で、十分に活劇を演じ、興奮したのではなかったか。十分に走り回らなかったか。例えば、結婚式の日、クリスティーネは娘として最後のダンスをして、アントンはその新郎の上着を着て、とても豪勢に見えた。これは明るい人生ではないか。これは海を渡って、猿達の国へ行くよりも、偉大なことではないか。それにあのフランス人の時代、兄のニクラスがほとんど結婚を約束していた、あのアンナは、軽騎兵と駆け落ちしたが、あれは何という騒動だったことでしょう。あれは、一八〇六年で、当時アントンは、この厳しい時代のせいで、何と苦しんだことか、思い出しても奇妙だ。今では誰もはやフランス人のことを思い出さない。兄ニクラスも今はアンナのことをほとんど考えない。シュロッターベックおばさんもいて、彼女はこうしたことすべてを共に体験し、それに死人達をも目にすることができる。でもクリスティーネ夫人ほどには、彼女でもかくも多くのことを思い出さない。だって彼女は子供を産んでいないし、あの人の息子が遅くまでテーブルの許に座っているわけではない。とても立派な学者になって。そして本越しに覗き見をして、目で合図してくれるわけではない。まあ、何て沢山のことを、この奇妙な玉の明かりの許で考えてしまうのでしょうか。本当に、こんな難儀な痛みの許でも、静かに寝ていて、辛抱して最期の時を迎えるのは、何の手間でもない。

我々は先に、ハンスが小さな子供の時、冬の夜、ベッドに寝ていて、早朝、仕事へ行くために用意する母親の様子を窺っている様子を描写した。我々は彼が、母親の出掛け先の地について、多様な、神秘的イメージを抱く様子を描き、そして壁に影が躍る様を見、そ

してランプが吹き消されると、どのようになるか正確に注視している様子について語って来た。彼は今や、大人の人間として、全く類似の、しかし全く別種の感情に浸らなければならなかった。幾多のことを彼はこれまで経験し、多くのことを学んで来た。この時に、より成熟した気分を持参したのであれば、不思議なことではなかったであろう。しかし母親が自分の若い頃の思い出の再来に驚いたように、彼はこうした感情の再来に驚く理由があった。

ガラス玉の明かりの許で、自分の本の頁をめくりながら、彼は時々、病人の臥所に視線を送った。そのとき彼は、母親が今また自分をただ暗闇の中に、一人っきりにして去って行く用意をしていると考えた。昔よく、涙ながらに、残ってくれと頼んだように、今でも彼はそう頼みたい思いであった。彼は、自分が、ランプが吹き消され、母親の足音が反響し、眠りがすぐに瞼を閉ざしてくれないとき、その遠い昔に感じていた大きな不安に、しばしば彼は襲われた。彼は当時と同じように窓辺に雪の音を耳にした。当時と同じように夜警人が時を告げ、当時と同じように月が凍った窓ガラス越しに煌めいた。当時と同じように古い道具類がカタカタ鳴り、当時と同じように夜間の世界が靈的に動いた。

母親がこのような時、眠っていたら、彼は自分の課題の最も難しい箇所に来る限り集中して、勉強を続けて、ただこの不安な胸苦しきから逃れようとしたが、しかしこれは必ずしも上手く行かなかった。しかし母親が目覚めているとき、彼はただペンを休めて、病人の誠実な手を握りさえすれば良かった。そうすると彼は、自分にとって考えられる最良の慰めを得られた。後に何かが、彼の行動や、計画、見解、そして彼の全生涯に影響を与えたとすれば、この最期の時に囁かれた小声の言葉であった。

「いいかい、愛しい子」と老夫人は言った、「私は浅知恵でも、いつもこう考えていました。この世に飢餓がなくなったら、この世は発展しないだろう、と。でもこれは単純に、食事や、飲み物、良い生活を求めての飢餓じゃありません。いや、全く別のことです。おまえの父親のことです。父親は、私の言っている意味での飢餓を持っていました。おまえも父親からこの飢餓を受け継いでいます。おまえの父親は実際必ずしも自分や世間に満足していなかった。でもこれは、他の人々がもっと立派な家に住んでいるとか、馬車で行くとか、その他類似のことを羨望してのことではありません。違います。父親は、自分が理解できないこと、倣いたくてもできない沢山の事柄があるからと言って、悲しく思っていたのです。これは男達の飢餓です。そして男達がこの飢餓を抱いていて、しかも自分達の好きなこれらの事柄をすっかり忘れることが出来ない場合、この男達は真つ当な男達なのです。それが上達しようが、しまいが、一これほどどちらでも構わない。女達の飢餓は別方向にあります。愛がまず第一です。男達の心は明かりを求めて、断腸の思いにならなければなりません。一方女達の心は愛を求めて、断腸の思いにならなければなりません。女達もこれには喜びを見いださなければなりません。息子よ、私にとって、おまえの父親よりもはるかに都合良く行きました。私は沢山愛を与えることが出来たし、沢山の愛が私にとって自分の一部になったのだから。父親は、存命の間、私にはとても親切だった。それから私はおまえを授かり、そして今、私がアントンの後を追うとき、おまえは私の側に座っていてくれます。それに父親が得たかったこと、それがおまえには恵まれました。それに私はそのお手伝いをしました。これは幸せな事ではないかい。おまえは、おまえの愚かな母親のことで、そんなに悲しむことはありません。そんなことをしたら、私の

心はつらくなるだけです。そうするつもりはないだろう、実際おまえはつらい思いにさせなかった」。

息子は病人の枕に顔を隠した。彼は話すことが出来なかった。ただ母上という言葉だけを、嗚咽しながら繰り返した。しかしその言葉に、彼を感動させたことすべてが要約されていた。

ハンス・ウンヴィルシュは、新町への今の滞在の間、ほとんど家から出なかった。隣人皆に対して、彼はシュロッターベックおぼさんの部屋で挨拶した。ほんのわずかな訪問しか彼はしなかった。しかし彼はどこに現れても、親切に歓迎された。ファクラー教授は、彼をしっかりと押さえて放さず、彼はようやく振り切って強引に出て来た。

今や教授は珍しいことに、モーゼス・フロイデンシュタイン博士に多大な関心を寄せていて、落ち着かないハンスに、極めて正確に問い質して来た。

「それではタルムードの切れ者は、パリへ向かったのか、ウンヴィルシュ。貴方に打ち明けると、あの若造には学校時代、顔には出さないようにしたが、とても困惑させられた。今ならそのことを話題に出来よう。彼の反論や結論、彼の質問返答演技、これにはよく私は不安の汗を明白に額に生じさせられたものだ。『ユダヤのアペラなら信ずるかもしれない』と言い回しにあるようなもので、つまり実際、『私は信じません』だった。 — この将来性豊かな青年は、軽々に信じなかった。彼はこの世のすべての結構な物へのその食欲で、自らの活路を拓くことだろう。貴方に言うておくと、正しい飢餓に勝るものはない。僧侶のラテン語では、 — ラティウムの神々が我らを守っていて、 — こう言えるだろう。飢餓は奇貨なりと、ヘッヘッヘ。いや、ヨハネスよ、貴方に神の御加護がありますように、そして家での不幸に耐える力をお授けくださいますように。我々は衷心から同情し見守っている。貴方に対し我々が少しでもお役に立つのであれば、私か、私の妻に相談なさったらいい。人間の人生は色々結構な事もあるが、嘆きの谷だ、嗚呼[eheu]」。

最後の嘆息が元来何に関係していたか、我々には不分明であるが、ハンス・ウンヴィルシュにとってはそうではなかったかもしれない。彼は、これは自分の母親の病気に向けられていると固く信じていた。そしてこのたびは、深く感動して、善良な教授から別れた。

グリューネバウム伯父は、この時期、勿論よく機会を見つけて、その偉大さの全体を見せてくれた。彼は絶えず去って行き、また来た。そしてクレッペル通りの家は彼に対し、一瞬も油断できなかつた。突然ドアの中に入って来て、病人がそのベッドで驚いて縮み上がったかと思うと、その立派な頭が突然ハンスの仕事机の側の窓を暗くして、ハンスはびっくり、飛び上がって、その姿を凝視するのであった。シュロッターベックおぼさんがいなければ、この伯父はとても厄介に思えたことであろう。しかしこのおぼさんの気配りで、結局監視体制が組織されて、クレッペル通りの複数の子供に、グリューネバウム親方が角を曲がったら、警戒の合図をするよう依頼がなされた。警報が鳴ると、そのたびにおぼさんはドアの許に立って、伯父を捕まえて、彼を巧みに家に帰らせたり、あるいは場合によっては自分の部屋に案内したりした。それからこの部屋にハンスも指示されて、伯父の慰めや助言を拝受するのであった。

「それじゃ、相変わらず良くないのか。とても遺憾だね、とても悲しい。しかし世の中、そんなものだ。あるときは劣等な煙草に当たり、あるときはパイプが駄目だったり

だ。我ら皆、これに対処しなければならん。 — しかし、何だね。あそこにおばさんがいる。脆い、情けない人物で、革の袋にただ骨ばかりだ。ミス・シュロッターベック、私の言うことを悪く受け取って欲しくないが、私は言わざるを得ん。私はここ二十年間、来る日も来る日もこう思っていた。この人、三ペニヒ蠟燭のように消えるだろう、と。しかし、今臥せているのは、妹だ。珍しく頑丈な女だったが、風前の灯火だ。然るにこの人、おばさんは全く自明のことであるかのように、ちらちらと燃え続けている。仕舞いには結局、この人、私の姿も、私の死後、この路地を歩き回っているのをご覧になることだろう。白いシャツを着て、三足の古い編み上げ靴を両脇に抱えた幽霊としてな。この人は今では出来ないことは何もないと私は信じている。 — いや、ハンス、人間とは何だ。人間はこの人生で一切合財何という目に遭うのだ。大変な飢餓を、 —」。

「それにとっても喉も渇くのでしょうか」とおばさんは反論した。

「それもだ、ミス・シュロッターベック」と伯父は威厳をもって、しかし少し気分を害して続けた、「大変な飢餓と — 喉の渇きで、これを体験していない天使には信じられないものだ。人間は生まれたら、何をするか。吸うのだ。分別ある年頃になったら、何をするか。 — 飢餓を感じて、自分よりも高すぎる場所に掛かっているものすべてを欲しがらる。分相応でない者は、何も手に入らないことになる。しかし分相応であっても、全く何も手に入らないことは確かだ。我が少年よ、そなたの父親がそうだった。奴はとても奇妙な飢餓を感じていて、その上、分相応でなかった。奴は同時に靴屋であり、学者でありたかったのだ。どうなったか。何にもならなかった。さて、ここに、そなたの愛する伯父ニクラスがいる。この人は余りに偉大な分相応の才能があつて、日々のパンしか欲しがらなかった、 —」。

「それに赤雄山羊亭と政治新聞でしょう」とおばさんがまた口を挿んだ、「この人は仕事床几に座るよりも、赤雄山羊亭に座るのが好きで、仕事よりも、小鳥に口笛を吹きかけるのが好き、賛美歌本より、郵便急報を読むのが好きだから、それでここにやって来て、その結果どうなったか、尋ねるのよ。そして何にもならないと言われて、不思議に思うのよ」。

「ミス・シュロッターベック」と伯父は答えた、「この人にはどんなロバも畏怖の念を抱くだろうが、ただ私は別です。今回だけはもう沢山です。良い晩をお祈りします。クレッペル通り全体との交誼を断つときでしょう。ハンス、そなたの母親の許へ行き、母親に私の詫びを伝えてくれ。私は興奮していて、自制心がないから母親には会えない、とな。シュロッターベックおばさん、快適なお話しに感謝します。そして可能ならば、穏やかな良心と良き夜の休養を願っております」。

おばさんはこの悲しい時期、我らのハンスを可能な限り、普段よりも更に多くの愛情と気配り、心配りで見守っていた。彼女の慰めの中に混じっていた奇妙なものは、支障とならなかった。何か現実のもののように彼女が話す故人達のこの現象は、何ら恐ろしいこと、混乱させることを含んでいず、 — おばさんが病気の母親に自分の空想を話しながら、母親がその個々の幾多の折、頷いて、とうに過ぎ去ったこと、忘れていたことを思い出すその様を、ハンス・ウンヴィルシュは何時間も座ったまま、傾聴していた。

おばさんは今やとても頻繁に、善良なアントン親方を目にしていた。おばさんがこのことを報告すると、病人のどんなひどい痛みも和らいだ。 —

とても厳しい冬であった。すでに幾多の冬を体験していたおばさんも母親も、この冬のような冬を思い出せなかった。ハンスは半ば強制的に歩み出て、一度健康な大気を吸ってみようとする、周囲のすべてが、永遠に死滅して、凝固し、不毛で、青ざめたままであるかのように、そして数週間後に木々がまた緑になることは不可能であるかのように思われた。一度ならず彼は機械的に一枝折って、固く閉ざされている褐色の葉の蕾を注意深く開けて見て、そして春は本当にただ眠っているだけで、死滅してはいないと確認することがあった。

しかし雪は時期が来て、解けた。凍結していた水は凱歌を上げて、その縛めを解いた。ハンス・ウンヴィルシュはその仕事を完成させて、ある晩、そのペンを置き、こっそり母親のベッドに歩み寄って、体を折り曲げて彼女に接吻し、囁いた。

「愛する母上、上手く仕上がったと思います」。

すると母親は病んだ両手で、息子の頭を自らに引き寄せて、同じように接吻した。それから彼を穏やかに放して、両手を組んだ。彼女は唇を動かしたが、しかしハンスは彼女の話すことすべてを理解できたわけではなかった。ただ最後の言葉を彼は聞き取った。

「アントン、私どもは仕上げました。これであなたの許へ行けます」。

新しい春の当初、日曜日となった。ハンスが試験説教を行う予定の日であった。再び太陽が輝いた一日であった。

病人のベッドの側には、一輪のユキノハナのグラスがあって、今日ほど厳かに教会の鐘が響いたことはなかった。黒いガウンを着て、息子は母親の上に屈んだ。母親は彼の若々しい頭に手を置き、微笑して見て、目を輝かせた。ヨハネス・ウンヴィルシュはこの目を深く、深く覗き込んだ。数十万の言葉を尽くすよりももっと多くをこの目は語っていた。それから彼は出て行った。おばさんと伯父が彼の後に従った。母親はそれを望んでいた。彼女は一人つきりを欲していた。

彼女は静かに横たわっていた。もはや痛みはなかった。考えの中で、彼女は自分の子供が路地を通り、市場を越え、古い教会墓地を越えて、祭具室の低いドアまで達する様を追っていた。彼女はオルガンの音を聞き、両目を閉ざした。今一度彼女は両目を訝しげに開けて、テーブルの上のガラス玉の方を見た。あたかもこの玉が突然、明るい音を發したかのように、そしてこの音で目覚めさせられたかのように思われた。彼女は微笑して、両目をまた閉ざした。それから、――。

それから、誰もその後どうなったのか、言えない。しかしハンス・ウンヴィルシュが教会から家に帰ると、彼の母親は亡くなっていた。彼女を目にした者は皆こう言った。彼女は浄福な死を迎えたのに違いない、と。

(第一巻の終わり)

第二卷

第一章

まだ存命のティーブス夫人は、夙に目が弱っていて、助産婦から湯灌婆になっていたが、クレッペル通りの死体を狙い、攻撃して来たが、無駄であった。伯父グリュネバウムの助けを得て、シュロッターベックお婆さんはこの攻撃を撃退した。お婆さんは自分の昔からの女友達の亡骸を自ら洗い、経帷子を着せる役を奪われないようにした。

指物師達がクリスティーネ夫人を棺に安置し、棺は閉ざされた。自分の夫の側に夫人は休息地を得た。これは夫人がしばしば、よく思い描いていた通りのことで、夫人は日曜日の午後、教会の後、教会墓地のライラックの下に座って、アントン親方の埋葬されている塚を見、そして側の小さな場所を見て、その度に思い描いていたのであった。

これらはすべて異常なしであった。その他の幾多のことも、可能な限り異常なく進んだ。新町の比較的貧しい一角では、クレッペル通りの古い建物を咄嗟に購入するほど、誰も金持ちではなかった。それでこの家は一人の壁工に貸し出された。いずれにせよシュロッターベックお婆さんをこの壁工は家政管理人として承認することが条件であった。わずかな家財は売却されるか、実直な伯父グリュネバウムの用益に譲渡されるか、あるいはお婆さんの保管に任された。貧しい遺物はすべてお婆さんの保管となった。これはハンス・ウンヴィルシュがどんなことがあっても手放したくなかったもので、今や彼はこれらの品からも、ほとんど同様に甘美な痛みを感じながら、お婆さんと伯父から別れたのであった。ハンス・ウンヴィルシュは別れた。彼は広大な世界に向かった。そして、いつまた戻って来るのか、今回は昔の時、つまり初めて山々を越えて、モーゼス・フロイデンシュタインと一緒に大学へ向かった時のように、確かなことは言えなかった。祖国の穀物畑と果樹園から顔を覗かせている教会の塔の側ではどこでも、とうに一人の牧師がまるで健康に牧師夫人と一緒に、そして少なくとも半ダースの子供達を連れて座っているものだとどうに見抜いていた。そしてハンスはほんの考えの中でも、この快適な聖職者の旦那を自らの教会墓地に埋葬させ、その夫人を未亡人にし、その子供達を孤児にするような男ではなかった。羨望せずに彼はこの上なく太って、この上なく優雅な牧師達の側を通り過ぎて、家庭教師世界へ向かった。

彼はこの至福な状態の二つの化身を体験してから、三回目の、最後の、そして最も重要な化身に至った。この最初の二回の化身について、この章では手短な報告をすることにしよう。勿論最後の化身については、もっと長く、もっと詳しく扱う必要がある。

ハンスは最初の職をファクラー教授の仲介で得た。教授の推薦状に導かれて、彼はある田舎貴族、フォン・ホロッホ氏の荘園に至った。そこで彼は歓迎されて、学生時代の痩せた時代の後、二年のとても栄養豊かな年月を得ることになった。この間に彼の外見は目に見えて充実して来て、この家の主婦を大いに満足させた。この主婦は自ら丸々とした外見を喜びとしていて、痩せてこの農園の門に至った者皆が、また太って出て行くことを誇りに思っていた。このレディーはまだ旧来種の荘園領主夫人で、自分の下僕や小間使い達に時折、自ら調理して、分配することを、自分の品位に悖ることと見なしていなかった。すべての行事のたびに、彼女は自分の召使い達や家臣に立派な手本を見せて、早朝起きて、

晩遅くベッドに入り、どんな管理人や牧師、ダミーともホイスト[トランプ]をし、犬どもが夫人の部屋でうろついて、夫人のソファのクッションで昼寝をしても咎めなかった。家の領主はホイストをしなかった。しかし彼は領主以前に、強力な獵師であった。そして彼の森と彼の狩獵が彼の最大の誇りであった。彼は、老いて狂った従兄弟所有の一書齋を有していた。この従兄弟はこの莊園に死ぬまで扶養されていた。領主は雨の日、この書齋で魚網を仕上げた。これを仕上げるのに彼は大変器用であった。この書齋を、別な折、恵み深い領主夫人が色々な家政のために使用し、様々なものを保管していた。これらは学問や研究とは余り関係ないものであった。聖職候補生ウンヴィルシュは到着して、彼にこの部屋が譲られた。彼もすぐに、この従兄弟は、實際極めて風変わりな人で、全く狂った人物であったに違いないと気付いた。この新教徒の莊園で、ここ冷静で分別顔の北ドイツの中間に残されている従兄弟の文庫は、一 聖母の無垢受胎に関する文書ばかりであったからである。この従兄弟が極めて頓狂な、奇妙な、珍奇な傍注を記していない二つ折判、四つ折判等々の著作者はいなかった。この珍しい分野での途方もない博学をこの従兄弟は示していた。彼はとても諷刺的で、辛辣であったかもしれない。しかしまたこれらの巻の中のナンセンスは、彼がその二倍の奇想投与によって勝っているナンセンスに比べたら物の数ではない。本の列に最初一瞥を投じて独自の輝きを帯びた聖職候補生の目は、タイトルをざっと見て、それらの巻の若干を覗いた後、即刻この輝きを失っていた。憂鬱になって、幻滅して、ハンスは脇を向いた。林檎は赤い表面であった。しかしまた腐ってもいた。

しかしハンス・ウンヴィルシュがこちらへ来たのは、世界にすでに多くの頭部破壊をもたらしていた難問を解くためではなかった。彼の使命は、フォン・ホロツホ家の跡取りに十九世紀の高度の文化的必要事項を伝えて、この善良で、健康な少年に、習得可能な事柄を教えることであった。熱心に彼はこの使命に取り組んだ。その間また、幼くて、同様に健康な令嬢に、正書法とか地理学等の幾つかの罪のない知識を伝授した。この二人の子供は感謝して学ぶ誠実な生徒であった。後にこの幼い娘は、間違った情報の結婚生活に入り、悲惨な最期を迎え、息子は首都の少尉として、自分の家系の跡取りを正式に残さないうまま骨髓癆で亡くなった。これはまことに悲しいことであった。

従兄弟の何巻もの文庫は、単なる見本料理に過ぎないと明らかになったが、これに対し今や家庭教師殿にとって、農業の高度な技をたっぷりと吸収する機会に恵まれた。つまりこの莊園領主は、自分がマスターしているその高度な深い秘密を、彼に過たず伝授してくれたのである。村の牧師も聖職候補生に、幾多の有益な講義をして、田畑、庭園、草原の造成について、家畜や子供の躰について、妻及び自立した勝手な人間、その他一切の女性、キリスト教的ゲルマン的家政と統治に属するものとしての女性の扱い方について教えてくれた。この善良な男は女房の尻に完全に敷かれていたのである。莊園領主もそれに劣らなかった。それでこの両親方は、夕方パイプを吹かせながら、一 勿論彼らのより良き半分[伴侶]が不在の折、一 彼らの胸中を互いに吐露して、素朴に信頼している若い聖職候補生の無邪気な心に彼らの秘密の喜びや苦しみを教え、彼らの経験という豊かな財宝を見せてくれたのである。

しかしそれに劣らず二人の両レディーも、あらゆる些細な案件、困りごと、策謀の際に、信頼してこの家庭教師に心を開いてくれた。そしてしばしばこの家庭教師は、羽根

突きに似て、両党派の間をあちこち、少しもそうと予感しないまま、飛ぶことになった。

心地良い静かな生活[静物画]であった。途方もない雨靴で他の人類よりも傑出していた管理人は、実直な男で、その些細な粗暴さは悪質なものではなかった。一 荘園で、ハンス・ウンヴィルシュが抱いていた信頼を卑劣に悪用したのは、唯一人の人物であった。この劣等な人物は女中頭で、その種の最も太った、最も醜い者の一人で、無責任なやり方で哀れなハンスを周章狼狽させた。つまり彼女は激しく彼に恋をしたのである。彼女は家庭教師を大変苦しめた。しかし彼女はグリーンピース時期のある暑い正午、荘園の住人達が婉曲に池と呼んでいる停滞した水辺で、ここでは一羽の雌鶏も溺死出来ないところであるが、オフェリア役を演じたのである。彼女は二人の下僕によってこの沼から引き上げられ、体を洗った後、この農園を去らざるを得なかった。彼女の後継の女中頭は、それを良い手本にするか、あるいはすでにこのような誘惑を卒業するかであった。この女性は平和を乱さなかった。しかし領主と、残念ながら牧師殿もがこの話しをいかに利用したか、我々はこれについて、女性の読者の感情を労って、記したくない。一

二年間の家庭教師世界は、幾つものことを学び、経験し、忘れることの出来る一つの時代である。ハンス・ウンヴィルシュはこの期間、自分の人生を、母親の死まで一つの美しい、静かな夢と見なす術を学んだ。日中の仕事の間、彼は楽しくも憂鬱な気分での個々の事柄を思い出していた。彼はこの世にはとても沢山の、とても様々な人間がいることを知った。そして彼は、自分がかつてルドルフ・ゲッツ少尉と出会い、少尉は自分の姪をパリへ迎えに行き、姪を大きな首都の高貴な親戚に預かるつもりであったことを完全に忘れていた。

フォン・ホロツホ氏の荘園にハンス・ウンヴィルシュが滞在していた二年目に、その地に豊かな遺産叔母[遺産を残してくれそうな叔母]が、この家族が大いに尊重しなければならない叔母が現れた。このレディーは、あの途方もない女中頭が肥満であったように、見事に痩せていた。そして哀れなハンスは、彼が女中頭に気に入られていたように、同じ程度に見事に不興を買っていた。このレディーは、その瘦身と同様に教養があつて、家庭教師殿に対し、この者は磨かれていない阿呆であつて、自ら教育を受けていないが故に他の者達を教育する資格を完全に欠いていると宣言した。叔母は貴公子エーリヒを試験したばかりでなく、聖職候補生ウンヴィルシュも試験した。勿論この試験の結果はとても惨めであった。実直な荘園領主がどんなに肩をすくめ、ぶつぶつ言い、嘆息しても、健気な領主夫人がどんなに反論しても、この二人はこの家庭教師とその教育方法にととても満足していたけれども、叔母は精力的に自分の観点を主張した。叔母の恩寵か不興かは貴公子エーリヒにとって重大な意味を有していて、それでハンス・ウンヴィルシュのボックスドルフ[雄山羊村]滞在は、突然悲しい結末を迎えた。遺産叔母は、自分がかかなり大きな影響力を有する小さな都で、貴公子エーリヒを「将来の貴族」として育て上がることを自ら引き受けた。聖職候補生ウンヴィルシュは叔母から、新しい職を探す許可を得ることになった。彼はこの職を新聞広告で得たが、ある裕福な工場主の許であり、この工場主はマグデブルク地方で何らかな悪臭のする素材を製造していた。この素材はまた別の工場で、別の工場製品を作るために必要不可欠なのであった。

別れの時が来た。フォン・ホロツホ氏はその狐革の帽子をあちこち押しながら、嘆息した。

「あの古箱を去らせた方が、聖職候補生殿、貴方を去らせるより良かったことであろう。貴方に神の御加護がありますように。貴方は健気な方です。とても貴方のいないことを我々は寂しく思うことであろう。私の妻がいなければ、あの老夫人も自分の好き勝手には出来なかったろうに。しかし — 女どもと来たら、女どもは。ウンヴィルシュさん、これについては貴方はまだ我々と語れますまい。しかし貴方がその点ご理解を得たときには、私のことを思い出してください」。

とても強引にこの善良な領主は、去って行くハンスに愛用の猟銃を記念に押し付けようとし、神学の聖職候補生が武器を持った男として世間を渡って行こうとしたら奇妙な姿を演ずることになるのに、そのことにさっぱり気付かずにいた。小さな令嬢が別れにその教師のために仕上げた綺麗なスリッパ、 — その双方に一匹の兎が刺繍されていて、 — それを彼は感謝して受け取り、そしてとても感動していた。恵み深い奥方もとても感動していて、夫人は去って行く者のために食品や珍味の詰まった大きな袋を渡し、ほとんど母親めいた気遣いで、道中の一切の良き助言や健康法を授けた。牧師の家はこの別れを辛く感じ、ボックスドルフの村全体が別れに関与しているように見えた。荘園の犬でさえ、とても興奮して食品袋を、悲しげに、表情豊かにくくん鳴いて、尾を振り、嗅ぎ回っていた。すでに心が半ば士官学校に飛んでいる貴公子も、若干涙を流した。

荘園領主自ら、黄金沃野の中までのかなりの距離、去って行く家の仲間[ハンス]を馬車で送った。その上そこの陽気な料理屋で立派な食事を注文した。神学の聖職候補生、ハンス・ウンヴィルシュが少しばかり酩酊を示したのは、間違いなかった。そして郵便馬車ががたがたやって来て、御者がラッパを吹いた。諸君、元気に乗車。今や現実の真正な酩酊を有するフォン・ホロツホ氏が今一度、陽気に感動して別れを述べ、更に窓から御者に声をかけた。この若い人間と未熟な神の言葉遣いによく注意をしてやってくれ、と。ハンス・ウンヴィルシュは去って行きながら、どのように抵抗しようと思っても、不穏な眠りの中に落ちて行った。その眠りの中で、彼は恵み深い叔母によって、従兄弟の文庫に永遠に閉じ込められ、自分に欠けている教養を修得させられる夢を見た。

郵便馬車で或る道のり、 — 鉄道で或る道のり、 — 野道を或る道のり。すると一日が暮れた、夕方が迫って来た。

野道をハンスは徒歩で、自分の荷物を運ぶ荷車の横を歩いた。彼はこの荷車を引く惨めな駄馬と歩調を合わせなければならず、それで然るべく集中して、この新しい滞在地で自分を待ち受けているすべての吉や凶に備える閑暇を得られた。

神々は幾多の前兆を送っていた。彼の右側を一羽の鳥が飛んだ。一匹の兎が道を横切った。彼と出会ったのは一人の老婆ではなく、二十人の老婆であった。彼の手の上を幸運の蜘蛛が走った。痩せ馬と一緒にいる青いジャケット男がようやく鞭の柄で、煙雲を指して、「石炭沃野」と呼んだとき、この旅人はくしゃみをしなければならなかった。これは異教徒にもキリスト教徒にも幸運の印と見なされるのであるが、しかしこの場合は煙のせいであるから、やはりかなり憂わしく思われるかもしれない。どの点から見ても、蒸気雲の中の黒くて高い煙突は彼に快適な印象を与えなかった。道の両側の灰の山は、これは同様に次第に黒ずんでいて、この地方の魅力向上に貢献していないように見えた。

道は長い壁に沿って、今や広大な門に通じていた。 — ハンス・ウンヴィルシュは新しい滞在地に到着した。ここではすべてが右側の屋敷中庭一帯にあった。工場主の住

まいは、工場の左手にあって、直角を形成していて、然るべく窓とドアを有していた。しかしこれ以上のことは言えなかった。

午後の間、ずっとますます集積して来た雲が、今や小声で湿って大地に落下して来た。この工場の屋敷中庭の上に黒い形姿が走った。工場の壁から覗いている円管から白い蒸気が音立てた。住宅からはピアノで何か音楽がなされていた。しかし「快適」であると自惚れている明るい声を上回るほど十分に強くなかった。玄関の階段上に三人の愚鈍に見える少年達が押し合っていて、皆、人差し指を口にくわえていた。ハンスは真の低学年担当教師の目で、彼らを自分の教え子と認識した。すると人差し指の代わりに葉巻を口にくわえた一人の紳士が出て来た。青い縞のある赤いトルコ帽で、周囲の灰色や黒色に塗られた地から輝かしく立派に浮き出ている。この紳士が、もっと近寄るよう、聖職候補生に合図をして、雨の中、立ち止まることはない、と少し手短かに命じた。この男が、現金百五十ターラーと、快適で、自由な逗留と引き換えに、家庭教師を求めている人物であることに、疑いはなかった。

ハンス・ウンヴィルシュは、実際この推定が間違っていないと分かった。彼は若干堅苦しく、しかし無愛想ではなく受け入れられ、家のレディー達に紹介された。主婦ではなく、主婦の義理の妹に当たる人が、優しくはにかんで、音楽上の罪を犯していた女性と分かった。主婦はとても頑丈なレディーで、音楽は、「自分には苦手」と説明して、すでに長年「踊りを卒業している」女性が、「このようなことに手を出す」理由が分からないと述べて、義理の妹を傷付けた。

かくてこの主婦はまことに現実的女性と分かり、それだけ一層この義理の妹よりも有益に引き立っていた。この妹は令嬢と呼称され、その上名前はエレオノーレであった。エレオノーレ嬢は残余の全家族の代わりに陶酔的で、感情や夢、涙、それに溜め息をはるかに必要以上にでっち上げていた。

この工場の主人は、その大きな人間社会の、文句なく有益な構成員として、その黒く蒸気を発し、しゅっと音立てて、喘ぎ、呻り、せわしい世界の中央に冷淡に明瞭に立っていた。彼も自分の機械の騒音を最良の音楽と見なしていた。そして彼は人生に意欲的な商店員、若い罪人として買い求めた『乾杯の辞と機会詩の本』によって詩学と結託していた。しかし今は機知溢れる即興や洒落た乾杯の格言で輝くことを楽しみとしていた時代は、とうに過ぎ去っていた。黙って彼は今や自分のグラスを飲み干した。そしてまた黙ってそれを満たした。それ故、彼のビジネスの友人達はただ一層高く彼を評価した。

手短かに的確に彼は聖職候補生ウンヴィルシュに自分の息子達をどのような人間に仕上げたいのか説明した。

「良きビジネスマンに子供達を育てて欲しい」と彼は言った。「しかし見習いとして年季に受け入れられる年齢になるまでです。貴殿らが古典人文学と呼んでいるものを少し彼らに教えても害はないでしょう。時代は強力に進んで行きます。我々商人や工場主は本来時代について苦情を言っても始まりません。時代は、我々が望みさえすれば、喜んで我々を連れて行きます。人間は、今や我らの父祖の時代よりも多くの事柄を理解しなければなりません。一 それで、教師殿、ただ速習させてください。速習です。もう十分と私が思ったら、止めと叫ぶつもりです。そしてこれらの優れたオレンジは水に浸されます。計算が肝腎です。一」。

「しかし計算は、残念ながら私は不得手です。不得手です」とハンスは、モーゼス・フロイデンシュタインならきっと彼に信を置かなかつたであろう高貴さを込めて言った。

工場主は笑って彼の肩を叩いた。「そのために貴方を雇ったのではありません。ただ速習漏斗を使ってください、親愛なる方、漏斗に入れるのです。教養は良い眺めです。若干のラテン語は少しも害ではありません。世界には沢山の外来語があります。ラテン語もとても良い眺めです。少しも馬鹿にできない。しかし常に程度問題です。いつも程々に。それで速習漏斗ですな、私は目を開けておきます」。

ハンス・ウンヴィルシュは両肩をすくめて、「速習」を教え始めた。そして百五十ターラーと自由で快適な滞在を、自分が教えることの出来る悪戯で稼ぐことは不快になってきた。ちなみに彼の教え子達に不満はなかった。利発な活発な少年達で、素早く理解し、把握した。この家の物質的責務にも別に不満はなかった。工場主は隣人達に立派なディナーと夕食を用意して、家庭教師も除外されなかった。主婦は粗野な点が見られたが、しかし本来何ら侮辱的なものでなかった。エレオノーレは華奢であったが、しかし必ずしもすべての男性が、リアーネ[熱帯蔓植物]に絡まれたとき、静かに耐える得る幹とは限らないと承知していた。各人が正確にその義務を果たした。人々は早朝に起き、早くに就寝した。そしてその権利を有するならば、仕事が済んだ後、ただ夕方にものみあくびした。

工場主が同様に、「良い眺め」と呼んでいたこの一帯に関しては、ハンス・ウンヴィルシュはこれまでかくも平板な一帯を見たことがなかった。このような光景の目新しさは彼にとって大きな魅力であったとは言えなかったであろう。光景は至る所同一であって、二、三の村々が見え、十から二十の高い煙突、十から二十の風車、あちこちに若干の千切れたドイツ唐檜の在庫品があった。穀物畑は少なかった。しかしとても立派な砂糖大根がごく遠方の地平線まで育っていたが、しかし風景の美化には役立っていなかった。この有益な植物の間の狭い小道を、散歩する者が歩いていた。近くにも遠くにも、大地のこの極めて風変わりな楽園的一帯で、霊として化けるのを邪魔するものは何もなかった。この不幸な者が、空想を有していたら、空想は、それを展開させる広大この上ない空間を有していた。

人生がハンス・ウンヴィルシュに重く沈んで来た。彼は朝目覚めて、すべてがまだその場にあるのを見て、少しも驚かなかつた。いつも孤独と静寂の中で暮らして来た彼が、ここで生きながら埋葬されているかのように苦しみ始めた。今までそれが実在するとは思っていなかった鎖を彼は今や自分の両手と両足に感じた。そしてその軋む音が、彼の魂の奥底で不安に感じさせ始めた。彼は自分の落ち着かない心を工場の黒い壁から野道へ運び出すと、彼は、以前、ぶらぶら歩きを至芸にまで高めていたのに、素早く歩行した。あたかも牢獄から脱走したかのようで、追跡者を背後に感じているかのようであった。以前よりも一層彼は今やまた行方不明のモーゼスのことを考え、モーゼスに割り振られたかもしれない運命について、様々多彩な空想が浮かんで来た。奇妙な理念と願望が、今や奇妙なことに二重の強度を帯びて戻って来た。これらを抑えようとして、彼は空しかった。自分はこれらとは本来すでに、何年も、何年も前に、自分の父祖の町の官房長官トリュフラーの家で縁を切ったと日々称えたが空しかった。一 そそれは再三また生じ、ハンスがまだモーゼス・フロイデンシュタインと学校に通っていた昔ほど、簡単には消えなかった。ハンスに関する点では奇妙であったが、しかしより自由で、より広大で、より美しい世界

へのこうした願望が生ずるのは、そもそも不思議ではない。知識人達の努力する集団の中で暮らすのは、素晴らしく、有益なことに違いなかった。人間社会のすべての段階や陰影が競技場で代表される所でのみ、つまり大都会でのみ、人は人間と、人間の上にあるものを初めて正しく認識することが出来よう。荒地と隔離の中で、ハンス・ウンヴィルシュは自分の友モーゼスを理解する術を学んだ。しかし彼を捕らえている網の目は密で、千切り難く、彼の肢体の周りに置かれていた。彼がもがけばもがくほど、その網の目は一層息苦しくなるほどに彼を苦しめた。この網の中で、ほとんど彼は飢餓で殺された。彼は自分の地位を去ることができなかった。工場主は、立派な確実な契約で、彼を三年間縛っていた。ただこの 一 工場主のみが、 一 この契約の破棄が出来た。神々が仲裁に入ってきて、彼を自業自得の下僕状態から解放しない限り、ハンス・ウンヴィルシュは「速習」させなければならなかった。解放がなされたとき、被解放者は、これを高度な幸運と見なさなければならなかった。もっともこれはとても悲しい出来事の結果であった。

この一帯では、秋の半ば頃に、悪性の病気が流行った。これは飢餓チフスと大変似ていた。多くの人々がこのせいで亡くなった。多くの人々が、生涯の長患いを得た。そして多くの生き残りの人々は、家々から死体が運び出されると、極度の困窮、貧窮に陥った。最後には、極貧の人間でも、もはや空腹と心配事にもはや耐えられなくなった。残念ながらそのような状態でも、当局に文書の請願書を書かず、まだ何か食べ物を有する人々のドアを拳で叩いた。今回もこれがやはりこの地でなされた。労働者の不平は反乱となった。人々は少しばかり破壊して、非常に多くの窓が割られた。様々な人々を生きたまま焼くのが有益であろうと、語られた。間近の駐屯都市から、勿論、歩兵中隊が侵攻して来て、治安を回復させようとした。一つの衝突が起きた。不運な工場主達の三人が射殺され、幾人かは銃や剣での傷を受けた。哀れなエレオノーレは何日もひどい痙攣に襲われた。しかし工場主夫人は、アルブレヒト一世皇帝の殺害の後、[復讐して]無実な者達の血が自分のふくらはぎまで上がって来た後、[懺悔の]ケーニヒスフェルデンの修道院を建てたあの穏やかなアグネス[1281-1364]に似て、いきり立っていた。工場主もとても怒っていた。そしてハンスは今や工場主と一種の不和に陥り、その結果、復活祭には契約を解除し、その契約を無効とすることになった。しかしまた、工場主が、このような出来事を考えて、嫌味で破廉恥な見解を述べた人間とは、もはや同じ屋根の下に暮らしたくないと思ったとしても、この工場主を不当と見なせないであろう。しかしまた、家庭教師というこのような飢餓受難者が、飢餓受難者の側に付く以外、他に何を期待できよう、 一 これもやむを得ないことであろう。「此奴」は、 一 自分の意見を尋ねられてさえ、 一 自分の意志を持てようか。

ハンス・ウンヴィルシュは惨めな冬を過ごした。彼は再び新聞に、自分の求職を掲載して、空しかった。自分の有するわずかな知人に手紙を書いて、空しかった。世間はまづは完全に教師が足りているかのように見えた。 一 求めに誰も返事しなかった。知人達も助言をくれなかった。その上この聖職候補生の懐具合は、大きな引き潮であった。周囲全体にかくも悲惨さが拡大しているとき、ハンス・ウンヴィルシュは財布を締めていることが出来なかった。彼は自分の有するものを与えた。そして自分自身に残されているものは、ほとんど言うに足りなかった。一人のプロレタリアートになって、彼はプロレタリアートの間をさまよった。田畑は不作で、雪が溝に残っていて、灰色の霧が地平線上の四

方八方に掛かっていた。ハンスは自分の父祖の家の天窓からかつて覗き見ていた霧の中へ、今やまた十分な道のり、更に歩み出て、常に彼は眼前に明るい光輝を見つめていた。これは行軍のとき人々の前に劣らず、個々人の前にも現れるものであった。イスラエル人の隊伍の前に出現した火の柱[出エジプト記、13, 21]、つまり信仰の希望が、今日まで哀れな聖職候補生をも導いて来た。しかし今やそれが消えるように見える瞬間があった。彼が幸運を目指して、あらゆる方向に手を伸ばした瞬間のことである。

今の彼の雇主の家での彼の地位は日に日に、耐え難くなった。より好ましい展望が開けないまま、二月となった。故郷からグリュネバウム伯父は、全く悲しい嘆きの手紙を書いて来た。シュロッターベックお婆さんが眼疾で、手紙を書けないのであった。この二人の老人も、厳しい困窮状態にあった。新町から、ハンスは何も助けを期待出来ず、彼らも彼に慰めを与えられなかった。

あちこちでこの平原の単調さを中断させている唐檜の林について、我々は話した。これら林の一つが、この家庭教師の散歩の通常的目標であった。太陽が現れて、雪がないとき、彼はそこへ冬の最中、奇妙に丁寧に保存された一片の春の如く、歩いて行った。葉の落ちた広葉樹がこの幻想を破壊することはなかった。しかしまた小鳥が歌って、この幻想を完成させることもなかった。一本の街道がこの林の中を通っていて、運命はこの街道を、初老の、口髭の、若干赤鼻の騎乗者の風体で駆け寄って来た。一方、ハンス・ウンヴィルシュは、不安げな憂愁の物思いの中、道端の石に座っていて、如何に自分の運命の転機が間近であるか、予感していなかった。

第二章

ハンス・ウンヴィルシュは深い物思いに耽っていて、近付いて来る蹄の音に気付いていなかった。騎乗者がその駄馬をすぐ彼の前で止めて、夢想者に声高にハローと挨拶したとき、それだけ一層彼はびっくりして飛び上がった。

「やあ、我が息子、本当にそうかな。まこと道端の石の上に非番の非力な仕立屋の如く座っているのは、実物か。目を覚ませ、捧げ銃、おやおや、今晚は、聖職候補生殿、私だ」。

目を大きく見開いて、ハンスは立っていて、誰が彼をここ唐檜の下で見いだして、驚いているのか、良く分からずにいた。この騎乗者は、哀れなハンスを混乱から救い出すために、絶えず微笑するというか、むしろにやりと笑ってその顔を見つめることしかしなかった。その際、彼は馬のたてがみを心地良げに元通りにし、それが終わると自分の口髭で同様のことを始めて、それで初めて家庭教師に一つの明かりが点った。

ヴィントハイム[風の里]の郵便宿駅亭からの老紳士であった。疑いもなく、これはポンス酒好きの、かの喪服の若い、青白いレディーを親戚の許へ連れて行こうとしていたかの老紳士であった。これはモーゼス・フロイデンシュタインとパリで会い、とても彼のことを悪く言っていたかの老紳士であった。間違いのない。長い口髭の一本も欠けていない。首までボタンが締められていて、長い、若干みすばらしい上着であるが、そのボタン一つ欠けていない。

この老紳士も、神学者の記憶が明瞭になったと了解したに違いない。彼は降りる準

備をして、言った。

「まあ、貴方の石の席を一つ空けてくれ。私だ、一 ほら、ここにいる」。

彼は降りて、聖職候補生と握手した。

「今晚は、黒服の神学生。互いに愛し合う者は、出会うと良く言われる。しかし時には、互いに必要とし合う者も出会うな。石の席を一つ空けてくれ。老いた痩せ馬よ、落ち着け、私はこの青年と少し話があるのだ。陽が照るときは、こちらは快適な露営だな。向こうの畝溝の中の灰白色の塊はほとんど雪とは分からないほどだ。一 それじゃ、貴方は一つの職を求めているのだろう。神学の聖職候補生、ヨハネス・ウンヴィルシュ殿」。

再びハンスは奇異の念と驚きの印を全開させて、その上どもって、呟き、言った、自分には分からない、理解できない、どうしてなのか、つまり、こうして出会って、こうした質問を受けて、ただただびっくりしている、と。

「いやはや、そなたのフクロウは何という目をしているのだ」と少尉ゲッツは叫んだ。彼は今やくしゃくしゃの新聞紙を胸ポケットから引き出した。「このバターやチーズ、行方不明の犬や実直な拾得物の欄に載っていないか。一 壮年の若い男がその途上で人生の伴侶、一 いや、これは忌々しい、結婚相手を求めているものだ、一 いや、ここに活字になっているものは？」。

少尉は正しく聖職候補生の鼻先に候補生の広告を呈示した。そしてハンスは、家庭教師としての職を求めているヨハネス・ウンヴィルシュであると認めた。

「そして貴方は多分すでに一口に対し六口見つけたのだろう。一、ニダースの若い、金持ちの未亡人が、何人かの未成年児を抱えて、貴方に殺到し、貴方は一番若いその未亡人相手に、復活祭には参上すると書いたのか、一 おい、牧師見習い」。

ハンス・ウンヴィルシュは半ば怒って、半ば惨めになって、一人の未亡人も他の誰も自分の奉公を求めているし、この件は元来、自分にとって少しも笑い事ではないのだ、と説明した。

「それで貴方はここ街道に座っていて、神様の善意を当てにしているのか。これはまことに貴方らしい、気に入った。一 日の出と日没の間、ここで何が通り過ぎるのか、誰にも分からないことだしな」。

「少尉殿、貴方には昔お目にかかりました」とハンスは答えた、「貴方がいつぞやとても私に親切でしたことを、私は忘れたことはありません。しばしば私はあの晩のこと、貴方と貴方の姪の御令嬢のことを思い返したものです」。

「そうかね」と少尉は言った、「それは結構。一 それで私も貴方のことを忘れなかったと貴方に証明出来ると思うぞ。しかしまずは貴方に一つ質問をしたい。我々が最初両足を一つテーブルの下に置いたかの晩以来、貴方はいかなる目に遭って、いかに暮らしたか、私に教えるとしても、貴方は何も異存はあるまい。有り体に言って、貴方の様は、今も当時に劣らず、時化ているように見える。語り給え。誓って、私は根本的に、貴方同様に、冗談を言いたい気分ではないと申し上げておく」。

ハンス・ウンヴィルシュはその老紳士の顔を見て、この紳士の最後の言葉は多分真実であろうと思った。そもそも彼は今、何も私生活で隠すべきことは何もないので、彼は長いこと考えずに、以前ヴィントハイムでの郵便宿駅亭での時と同様、その報告をした。彼は読者がすでに承知していることを、すべて語った。少尉は注意深く耳を傾けていて、

ほんの一度も彼の言葉を遮らなかった。しかし少尉は自分の若い知人を一つの驚異から別の驚異に陥らせる計画をしていたかのように見えた。というのは、ハンスがようやく語り終えると、少尉はしたたかにハンスの膝を叩いて、叫んだからである。

「ご立派、素晴らしい。そうでなくちゃいけない。それじゃ、貴方は惨めなのか。それはこの上なく嬉しい。貴方と握手だ。 — では、貴方は立ち往生しているのだな。これは本当にほっとする。聖職候補生、私は貴方用に一つの職を有している」。

「いや、少尉殿、...」。

「体を楽にされよ。貴方は不思議がっておられる。それも分からないではない。私にとっても今まだ不思議に思える。我々二人がここのこの石の上に座って、互いを空気の如く必要とし合っていることがな。我々が昔、ヴィントハイムの郵便宿駅亭で一緒に座ったことは何ら奇妙な話しではない。私が後に、昔、一杯のグログ酒越しに自分の話しを語ってくれた若い牧師見習いについて何の気なしに思い出したのも奇妙な話しではない。しかし私が一週間前、嘆いて、不安のまま、ロシアの某宮廷に座っていて、哀れな姪のことを思い出したのは、奇妙な話しだ。 — つまりつまらぬことで、それに長身のテーオドールのこと、即ち我が弟殿で、枢密顧問官のことを思い出したのだ、彼は自分の息子のために一人の教師を探している、自堕落ではない、謙虚で、それに主人を畏れて、その主人の妻に従順な教師だ。この妻はフォン・サヴェルン伯爵夫人[シラーのパラード、Der Gang nach dem Eisenhammer]役で、即ち私の義理の妹も余り難点のない教師を求めているのだ。私はそこで座っていて、私のパイプの煙越しに、世間を考えられる限りとても情けない、惨めなものを見なして、そしてビリヤードの玉の方が、人間ども、これも不器用に、だらしなく、あちこちぶつかり合って跳ねなければならないものだが、この人間どもより要領よく当たると考えたものだ。私は思案を重ねた。しかし何の知恵も浮かばない。いやはや、ルドルフよ、古参の少年よ、汝は世の中で多くの人間と知り合いになったではないか。この地上に一人も、汝が — 向こうへ、 — 送れるような人物を知らんのか。 — いや、待て、ここに紙切れがある。私はまず覗き込んで、真剣に怒ろうとした。すると誰かが私に注意して悟らせているかのような気がした。こう言ってな、古参のスウェーデン人よ、これを聞け、これをどう思うか。このエタッペン通り[軍用道路]についてどう考えるか。 — ヨハネス・ウンヴィルシュだ。 — 此奴は家庭教師の職を求めている、 — 私は自分の記憶の貯金箱をひっくり返してみた。 — これだ、これ。私はその夜のうちに、鉄道で某駅まで来て、某地まで行軍した。そこで私は四本脚の肺結核[馬]を借りて、ねぐらの黄金のくちばし亭まで騎乗した。そこの教会の塔は、向こうの、森の奥に見えるものだ。そこで私は泊まって、リュッツォウ[1782-1834]義勇兵の一人の如く偵察した。コーレナウ[石炭沃野]とはどこか。その通り、ここら一带、そう呼ばれています。コーレマイヤーとは。その通り、煙突側の男はそう呼ばれています。ヨハネス・ウンヴィルシュ、聖職候補生とは。思うに、酒場の老婦はその名を聞くと、うっとりしていたな。他の連中も皆、耳をそばだてて寄って来た。皆が話した。 — 私は結構なお話しを耳にした。 — — もう一度、握手だ、我が少年。そなたがここら一带に残したかぐわしい香りに私は称賛を惜しまない。私はここら中で良い評判の若造について正確に話して貰った。そしてその肖像は、郵便宿駅亭での黒服と素晴らしく合致していた。そこで私はまた鞍の上になったのだが、ただ不安に思ったのは、その巢がすでに空になっていて、我が鳥が他人の鳥

籠に移っているかもしれないということだった。そこの角を曲がって、見上げると、道端に黒いものが座っている。親愛なる神は、汝に好意的で、ここですでに一件落着となるのだろうか、とそんな思いが私に去来した。その通り、―― その通りなのだ。彼はまたしてもエレミヤの哀歌のように見えるけれども、これは私には好都合なのだ。それでだ、聖職候補生、老いた一匹の犬、故郷喪失の乞食男の意志を尊重して、枢密顧問官ゲッツ、―― いとも高貴なる、―― それに手紙には親展と書くことも忘れないで、―― その語には下線を引く、これは、―― そうだな―― 義理の妹と、それにクレオーフェアのことを慮ってだ。この男にこう書くのだ、私が貴方を推薦したのだ、と。ここに完全なアドレスがある。家に帰ったら、すぐに手紙を書くのだ。いずれにせよ、すぐに返事を貰うだろう。私も自ら連絡するつもりだ。これで差し当たり語るべきことは、すべて話したな。今一度顔を見せてくれ。今一度握手だ。それでは―― 達者でな、ご機嫌よう。貴方を愛する貴方のルドルフ・ゲッツより、退役少尉云々だな」。

「でもさっぱり存じ上げないことで、――」。

「顧問官宛に、自分はハンス・ウンヴィルシュと申しまして、家庭教師の職を探しています、と書くのだ」。

「でも少尉殿、――」。

「まだ完全に春になっていないと、人々は承知している。そこで、いいか、愛する少年、まさに太陽は向こうの最も高い唐檜から別れようとしている。―― 今日のところはこれでお仕舞い。我が馬ロシナンテ[『ドン・キホーテ』より]も苛立っている。いざ、出発、戦友、いざ、馬に乗って出発と。神よ、御身が一片の不安を背囊から取り除き給えば、何と人間はほっとすることか。また会おう、聖職候補生」。

少尉は鞍にまたがっていて、手綱は鞍の留め具に収まっていた。両耳に兩人差し指を突っ込んだまま、彼は来た道をまた戻って行った。ハンス・ウンヴィルシュは、彼に呼びかけることを諦めた。彼はただ少尉を見送りながら、この時、自分は目覚めているのか夢を見ているのか問うことすら出来なかった。深く根を下ろした如く、彼は立っていて、枢密顧問官ゲッツの住所の書かれた紙片を手に握っていた。少尉ゲッツは道の角から今一度振り返って合図した。それから彼は消えた。すると実際、彼が本当に道端の岩の前で立ち止まって、この岩の上に座っていたのか、はなはだ疑わしくなった。太陽が本当に今日かくも温かく照り付けたのか、それも同様に疑わしくなった。太陽も唐檜の下も、薄暗く、寒々として来た。幹や梢にあった明かりと共に、すべての春の気配も消えた。森の上の空は灰色であった。ハンスは自分の上着のボタンを締め、同様に去った。彼は住所をポケットに仕舞ったり、また取り出したりした。―― この一片の紙は、しかし現実であって、一片の夢なんかではなかった。

森の前の畑は悲しげに荒れていて、雪は相変わらず畝溝にあった。太陽はこの一日の午後、この雪を解かすことが出来ずにいたが、しかし西の地平線の赤い線は、太陽がその仕事を忘れないようにと作った一つの印であった。コーレナウ[石炭沃野]の高い煙突からいつものように黒い煙が湧き出ている、灰色の空を越えて、西の輝きの方へ流れていた。狭い野道をハンスは急いで歩き続けた。鼻は空中に高く、帽子は遠くうなじにあった。彼は一人で悩んでいたが、今でもヴィントハイムでの郵便宿駅亭でのかの晩と、唐檜の林での今日の会話の間に何の関連も彼は見いだせなかった。かの晩の個々の点をすべて彼は思

い出してみた。当時話された言葉はすべて、彼にとって重要になった。そうやって今日の謎が解けると思ったからである。しかし彼はそれが解けなかった。ただ年老いた兵士と若い娘の姿のみが、これらは次第に彼の記憶の中でかなり消えていたのであるが、再び明瞭になって、主にフランツィスカの肖像が、生命力のある色彩を帯びて、彼の心に浮かんだ。

彼は家に帰った。いつものように半ば無関心に、半ば拒絶するように迎えられた。思わず知らず、彼は少尉が自分にくれた手紙を手で探った。一紙片を途中で紛失していたら、辛い思いがしたであろう。夕食の後、上がって見ると、自分の快適な部屋では、火が消えていた。彼は寒さを感じず、テーブルの許で腰を下ろし、目の前にアドレスの紙片を置いて、新たに思索を始めた。工場の鐘が二時を打ったとき、彼は周密顧問官ゲッツへの書状を書き終えていて、半ば熱にうなされ、ベッドに這って行った。しかし彼が翌朝深い眠りから覚めると、彼は長いこと覚えがないほどに、気分が楽になっているのを感じた。着衣の間に、勿論、手紙に添えていたら良かったであろう、二、三の立派な文が更に浮かんだ。しかし封印が一度なされていて、それで彼はその文を自分の胸に収めた。工場主の使者が十時にその内容の詰まった書状を間近の郵便駅に持参した。ハンス・ウンヴィルシュは、その男の使者と革バッグを屋敷の門まで見届けた。それから彼は、重い荷を下ろした男のように、深く溜め息を吐いた。その後、彼は、この使者、バッグ、手紙、少尉ルドルフ・ゲッツのことをもはや考えず、心を全面的に教え子達に向けることに決めた。哀れな少年達は、自分達の教師のことを奇異に思う十分な理由があった。彼は彼らの頭がががんとするほど、速習を死に物狂いで授けたのである。我々が承知しているように、鋭く注視している工場主はその妻に言った。

「哀れな奴だ。私には気の毒に思え始めた。懸命に努力している。そのことは認めてやらなければならない。しかし私は彼を採用しておけない。学識があんな浅はかな原理を明るみに出すのであれば、学識など私のためにはならん。人々は私の前より、彼の前で一層深く帽子を取っている。この人間は早く去るほど、我々二人のためには良い」。

二週間過ぎた。変化の多い二月の天候で一杯の二週間であった。ハンス・ウンヴィルシュは、自分の決意にもかかわらず、とても頻繁に自分の手紙と少尉ゲッツのことを考えた。工場と郵便駅の間を手紙袋は行き来した。しかし教師宛には一通の手紙も来なかった。毎晩ハンスは心が一層重くなって、就寝した。毎朝彼は一層希望を失って目覚めた。天候が若干回復すると、彼は唐檜の許へ散歩した。あたかもそこで、高い煙突の側、不安に神経質に期待していて空しいものに出会えるかのような感情を抱いていた。しかし彼が茂みから出て来ても、岩の上には誰も座っていなかった。極めて美しく、極めて善意の妖精に変身するような老婆もいなかったし、家庭教師を一人求めている枢密顧問官ゲッツ殿もいなかった。そしてハンス自身がそこに腰を下ろして、待っていても、確かに時々誰か人間が通り過ぎるのではあったが、しかしゲッツ少尉は森の角から駆けて来なかった。一ますます打ちひしがれ、希望を失って、ハンス・ウンヴィルシュは唐檜の林から家に戻った。工場主宛には、革の手紙バッグの中に、一通の新しい教師の手紙が届いていた。この教師が間近の到着を告げていた。一

二月二十八日は、日曜日であった。この日曜日、ほとんど途切れることなく雨が降った。間近の教会はコーレナウから一時間の距離で、そこへの道はこのような天候では大変難儀と分かっていた。それで牧師はこのような日、その説教を自らと寺男二人のために

専ら行うようなものであった。ハンス・ウンヴィルシュもこのような天候のとき、立派な説教の拝聴をよく諦めていた。しかし現在の気分するとき、彼は家で落ち着かず座っているよりも、この最悪の道を進む方を選んだ。雨傘の下、彼は軟弱になった畑を縫って、惨めに徒渉して行った。滴る垣根の中、びしょ濡れの四十雀や雀が翼の下から頭を覗かせて、嘲るように、しかし小声で鳴いて、彼を目で追っていた。天が灰色であったように、説教も灰色であった。敬虔な集合を形成している六人の敬虔なキリスト教徒の歌声も惨めに響いた。しかし礼拝が終わったとき、このコーレナウの家庭教師は渋々教会を後にした。帰路は往路のときよりも、更になおひどいものであった。

不器用な旅人をすっかり飲み込んでしまうことを専ら楽しみにしている箇所がこの小道に存在していた。ハンスが丘を下って、この箇所に駆け寄ると、彼は底の方から大きな呪い声、叫び声を聞いて、まさに地底の不浄の霊どもと喧嘩している人の子を見つけた。赤い襟に青い上着の郵便配達人であった。ハンスが沈んで行く彼を救ったのは幸運であった。というのは書き留めの手紙、聖職候補生ウンヴィルシュ宛のものを彼はバッグに入れていたからである。この手紙は枢密顧問官ゲッツからのものであった。彼の星々、それにこのような道の残りを省略させてくれた偶然に対し、青い制服の男は称賛の声を上げ、ハンスが携帯していたすべての貨幣と共に、霧と雨の中に消えた。 — しかしハンス・ウンヴィルシュは深淵の縁に立っていて、震える手で手紙を握っていた。雨が彼の雨傘をドラムのように叩いた。自分は封を開けて良いのだと気付くまでに相当の時間を要した。

手紙に記されていたのは、わずかで、聖職候補生殿は三月八日、正午十二時に、十五分にならない時、 — 定刻に直接枢密顧問官の前に現れるようにとのことであった。しかしこのわずかな文でも、不確かな重荷をハンスの胸から取り除くに十分であった。この解放された男は、深く深呼吸をした。それから彼は自分の道を進んだ。彼は今や泥土の上を漂い、帰宅してからは、午後自分の所有物をまとめて過ごした。喜んで彼は自分の後継者に煙突の美しい光景付きの部屋を譲って、衷心から後継者がここで、自分、 — ハンス・ウンヴィルシュがこの中で感じたよりも、一層快適に感じて欲しいと願った。工場主は、聖職候補生殿に恵まれる新しい、快適な職への良き展望に関し、衷心より喜んでいと述べた。工場主夫人も夫人のとても愛想の良い面を見せた。誰に対しても愛想の良い義理の妹は、去って行く教師のために、絹と真珠で財布を作り始めたが、しかしそれは、後継の若い教育者へのクリスマス・プレゼントとなった。少年達は現在の教師からの別れに当たって、感動していないわけではなかった。ハンス・ウンヴィルシュは、自分が予期していたよりも早く街道に現れた。

彼は自分のトランクを残していた。去る前に、トランクを後に依頼通りにどこの地であれ発送すると、帳簿係が約束してくれたのであった。軽い旅行バッグを持って、ハンスは自分の更なる運命に向かって歩み出た。

軽い霜で大地は引き締まっていた。彼はもはやその地に張り付かず、自由に柔軟にそこを越えて行った。雀や四十雀ももはや生垣に惨めに情けなく止まっていず、陽気に飛び回っていた。太陽は沈んで行く霧の中を照らしていて、一連の晴の日々を約束していた。

朝らしい、香る空気の唐檜の森が見えた。聖職候補生はこの神聖な影に入るとき、帽子を取ったが、しかし涼しくなって、また帽子を被った。

すると道端に石があった。そしてその石の上に、 — その石の上に一人の人影が

あって、起き上がり、軍人らしい挨拶をし、陽気なバスの声で、こう発した。

「お早う、聖職候補生殿」。

この朝一つの奇蹟が起きるに違いなかった。ハンス・ウンヴィルシュは歩くたびに、それを期待し、予感していた。今やそれが現れ、それどころかそれは奇蹟ですらなくて、全く自然な出来事に見えた。少なくとも少尉ルドルフ・ゲッツは、この場所での再度の出会いを少しも驚くべきこととは考えていなかった。勿論この実直な兵士は、自分の弟の手紙のことを承知していて、他に重要な仕事はなかったので、教師をコーレナウまで迎えに来て、彼を指定の地に案内する算段であった。

彼は自らこの件についてこの言い回しをした。そしてハンスはその言葉を信じた。この善良なハンスは、老兵士がまさにこの教師を自分の弟の家に案内するという極めて明確な目標で行動していることを予感していなかった。しかし我々も部分的にはこの本をこの目的のために書いているわけで、それで読者は、この箇所です聖職候補生以上にもっと事情を知っている必要はなからう。

ハンスがすでに承知している一本の被覆された瓶を少尉は若い神学者に、この出会いが現実に肉体的に生じている印に、それを祝して渡した。それから彼はこの青年の状態をととても興味深げに尋ねて、それから更に歩み続けることを提案した。

そこでハンスも姪御の状態を敢えて問い合わせて、これに対し老公がぶつぶつ声で答えた。彼女はどうか暮らしている、しかしはるかにもっと良くなるかもしれない、根本的には貧乏生活を送っている、と。聖職候補生はグリュエネバウム伯父を思い出した。伯父もよくこの最後の言葉を同じように同じ言葉で、しかし元来十分な根拠もなしに告げていたものである。そして彼は、自分と自分の旅の連れが会おう哀れな賤民に目を向けた。まことに、幾人かの襤褸を着た者達がこの教師を引き留め、彼に別れの言葉を述べた。涙を浮かべていたり、右足を引くお辞儀をしたりした。 — ハンス・ウンヴィルシュはこの美しい、平板な一帯で広く知られていた。

しかし森は終わり、森の背後にプラッケンハウゼン村があった。村にはくちばし亭料理屋があった。そのドアの前に来ると、少尉は弱って、意義深い、アルコールを含む刺激と朝食とを必要とした。朝食も終わって、ハンスがやはり料理屋の人々とも感動的別れをすると、少尉は、朝食の後、自分はいつも行軍が難しくなる、と主張した。ドアの前に二輪の乗り物があって、これは一頭の馬が引くもので、これに二人の殿方は快適に並んで座ることが出来た。この乗り物で兵士と神学者は某町まで旅を続け、そこに正午に到着した。それから鉄道で更に大きな首都の手前の最終駅まで向かった。この首都がこれからハンス・ウンヴィルシュの滞在地となる予定であった。この最後の駅で、二人の旅行者は、少尉の願望で、列車から離れた。少尉はこう主張した、新しい生活へは徒歩で向かう方が良いだろう。歩くことによって、精神を落ち着かせることが出来るし、それに自分、 — ルドルフ・ゲッツは、 — 更に話すべきことがあって、これは歩きながら話すのが最も良いだろうと思うから、と。教師にとって、この提案は願ってもないもので、満足して彼は蒸気機関車が鼻息荒くガタガタ音立てて進むのを見たり聞いたりし、間近の夕方の鋭い大気を心地良く吸い込んだりした。旅と少尉との同伴で、彼は活気と力強さを取り戻していた。青い縞の赤いトルコ帽の気難しい紳士のいるコーレナウ、厳しい工場主夫人と優しい義理の妹のいるコーレナウ、灰の堆積と石炭の堆積、その歯車仕掛けと回転、そのシュ

ッシュツというざわめき、その煙突と蒸気と霧のコーレナウ、このコーレナウは存在しなかったかのように、彼の背後で消えた。

ハンス・ウンヴィルシュは、旅の杖と旅のバッグを持って駅に純粋な武者修行者のように立っていた。彼は珍しい同伴者の後を、どんな危険であれ、あり得ない奇蹟であれ、付いて行けると感じていた。青白さを増して行く月が、穏やかな日の光の中、微笑して大胆な若い人間を見下ろしていた。

第三章

両旅行者は今までのその道中、色々な事柄について話していた。再び少尉はその同伴者を海綿のように、しかしはなはだ悪気のないやり方で絞り出していた。この抜け目のない老漢は、聖職候補生を本のようにめくっていて、その際彼が作成したメモは満足出来る結果になったように見えた。というのは今や彼は、 — その比喻を続けるならば、 — その本を閉じて、心地良く嘆息して、同伴者と一緒に静かで冷たい夕方の景色の中を歩んでいたからである。

午後の四時と五時の間であった。太陽は、カレンダーに従えば、ようやく五時五十分に沈むのであった。遠方に青みがかかった霧がかかっている、優しい息吹が若い新芽の苗床の緑の先端にそよいでいた。街道は静かであった。田畑も静かで、遠方の村々も静かに香りの中、安らいでいた。ただ急いで行く列車の鈍い回転の音が、なお遠くから聞こえて来た。しかしそれでも次第に消え、白い雲は地平線の霧の中へ消えた。 — 今やすべてが静かになった。

「では、友よ」と少尉はハンスに向かって言った、「貴方のことは上手く行くだろう。今や、貴方も私のことや、この件に関することについて有益な知識を得て、若干、今私が貴方を案内しているこの家に関する必要があるであろう。後に貴方が設営者のことで千回も畜生めと思うであろうと考えられないわけではない。いや、私の方を見てくれ、頭を振るがいい。南京虫とか蚤とか等々の害虫に対して保証しているのではないのだ。いや、本題に入ろう。我らは三人のゲッツ兄弟だ。私が長男で、枢密顧問官テーオドールは次男、 — 哀れなフェーリクスが三男で、残念ながら最初にお陀仏となった。フレンツヘン[フランツィスカ]はその娘だ。しかしこの姪は今問題ではない。我らの父は、七年戦争が勃発したとき[1756-63]、十八世紀半ば頃に生まれた。私は一七八二年産まれで、それで今は元気な六十代だ。テーオドールは五十代の働き盛り、そしてフェーリクスは一七九四年に生を享けた。此奴は悪魔を体に抱えていて、悪魔に拉致された。我らの父は、現在幸せに陪臣化[帝国非直属]されているハルツの伯爵の司法官であった。父は気まぐれな、病的少年で、その妻、我らの母親を生前死ぬほど苦しめ、我らを色々苦勞させたものだ。父はとても学識があつて、その文庫は広く一帯では有名であった。父はしかし同様にただこんな仕様もない博識家に我々を育てたがっていた。父はこんな博識家の情けない見本の一人であったのに。ただテーオドールの場合にのみこれは成功した。次男はその上腺病を患っていた。私は一七九八年森林学校へ入った。テーオドールはその頃、大学に入って、法学を専攻した。フェーリクスは当時まさに歩行を学んでいた。世間は強力な活劇が一杯並んでいたが、我々はかなり平穩に十九世紀へ移行した。私は尊い伯爵家の下級森林

官職を得て、テーオドールは司法官試補として、首都へのフランス人達の入場を眺め、フェーリクスはギムナジウムにいたが、やがてギムナジウムから追い出された。思うにテーオドールは当時、ドイツの国に生じたことについて、ほとんど案じていなかったであろう。私は一八〇六年十月十八日[十四日、イエナ、アウエルシュテットの戦い、プロイセン敗北]の後、東プロイセンに移った。そしてアイラウ[一八〇七年二月七日、八日、ナポレオンとの互角の戦い]とそれに付随するすべての戦いに居合わせた。やがて私は少尉となって、ヨルク [Johann David Ludwig Yorck, 1759-1830:1812年12月30日、Tauroggenでロシアと停戦し、プロイセンの勢力を温存した] と一緒にロシアへ行って、タウログゲンの中心陣営では見張りをした。これについては私は臨終の床でも満足して思い出すことだろう。 — しかしその他この世では楽しいことはほとんどなかった。その後起きたことについて、罪の糸玉がいかにか解かれて行ったか、私はこれについては更に語りたくない。誰でもこれについて語ることが出来よう。我々がヴィスワ川からエルベ川に達するときまで、私は幾多の楽しいダンスに接した思いだ。この混乱の中では、自分の親しい親戚のことをほとんど案じられなかった。私は長い期間、老父からも兄弟からも知らせを貰わなかった。私が一八一三年六月二十二日、エルベ河畔で前哨勤務に立っていたとき、アーケン上部で、ひょっとしたら一時間ほどの距離かもしれない、善いことも悪いことも考えていなかった。十分に静かな夕べであった。我らの火は燃え落ちていて、見張りの者以外、皆寝ていた。私は川の流れる音を何時間も聞いていて、何も起きなかったが、突然皆がびっくりして、機敏に高く飛び上がった。 — 向こうの反対側の岸部だ。...どの蛙も向こうのホルンの音に聞き入っているかのようであった。そしてその間、馴染みのメロディーに合わせて、カタカタ音がした。『義勇兵達が仕事にかかっている』と我が郎党が言った。そして我らのホルン奏者が、彼らのためにせめてもの応援の吹奏は何がいいか尋ねた。『デッサウ行進曲を頼むぞ、おい』と私は言った。そやつはほとんど自分のホルンと頬とが弾けそうなほど吹き鳴らした。『畜生、悪漢どもが彼らの背後で暴れている』と我が郎党は言った。彼らの言う通りであろう。向こうでは我らの味方は少なく、大方はナポレオン皇帝派とヴェストファーレン人達であると我々は承知していたのである。すると奔流の中で物音がして、そこで我々は銃を構えて、万事に備えをした。彼らはこの国内に精通しているに違いない。彼らは浅い箇所を上手く見つけたのであろう。そして半ば徒渉して、半ば泳いで、彼らは到着し、そして向こうからひゅうと青い鉄砲豆が耳許に飛んで来た。ホルンがまた名乗りを上げて、義勇兵の獵の合図を吹いた。すると彼らが現れ、我々は、黒く燻されて、髭の、襤褸を着た嫌な悪たれどもに迫って行った。月は皆を見下ろしていて、乙に構えて楽しんでた。そこで我々は我らの相手を知ることになった。コロンプ [Peter von Colomb, 1775-1854: 騎兵大尉停戦にも関わらず、1813年6月22日、ヴェストファーレン人の Hammerstein 将軍に襲撃された]、このコロンプの潰走の騎兵達である。我々はこの困窮の全貌を知った。ケーテン近くのヴェルプツイヒ付近で、ヴェストファーレン人のフォン・ハマージュタイン将軍が騎兵隊長を裏切り、策謀して襲撃していた。しかしコロンプは抜かりなく、キッツェン近郊のリュッツォウ義勇軍 [1813年6月17日、フランス軍、ヴェルテンベルク軍がこの義勇軍を粉碎した] よりも巧みに逃走した。彼の陽気な若造達は今回楽しい最後を演出して、敵の顔に最後今一度したたかに斬りかかった。それから中心部隊は遁走して、十四名を失い、幸いアーケン近くでエルベ川を渡ったのである。その代わりあちこちで小塊が欠けてしまった。そしてそのような一

小塊がここで我々の両腕の中に歓声を上げ、万歳をして、飛び込み、我らの飯盒や瓶を目がけて来た。それでまた静かになって、猫一匹川を渡らない。我々は全く仲間内になって、それで互いにもっと良く顔を見る時間に恵まれた。すると騎乗している誘拐者どもの中に、ジプシーのように髪が乱れたうら若い若造がいた。此奴が軍帽に手を置いて、こう言ったとき、私は雲の上から落ちる気がした。『少尉殿、私は家の末弟として名乗り出ます。コロンブ騎兵隊長殿の志願兵、コロンブ家のコロンバ[鳩]です』。 — 私はこの若造を掴んで、窓辺に、それから月光の中に引っ張って行き、 — 私は固まった。あのフェーリクスに間違いない。この若輩がラテン語で語ったから、私も奮闘し、叫んだ。『おまえもか、ブルータス。おや、写楽齋。どこの生まれだ。老父は何と言ったのだ』。 — 『いや、老父なんて、今時誰が老父のことを尋ねます。 — あのテーオドールに聞きなされ』と目から鼻に抜ける男は叫んだ、『私は家の裏から別れも言わず飛び出たのです』。 — そんな具合であった。それから次の半時間、更に色々な頓狂な悪戯について聞かされた。それから乱暴な若造達はまた馬上の者となって夜の中、去って行った。私がフェーリクスにまた会ったのは、次の年のパリであった」。

ここで語り手は休止して、メランコリックに頭を振った。神学者は注意力を集中させて、過去の荒々しい日々を傾聴していた。

「何という時代でしょう」と彼は今や思わず叫んだ。しかし老兵士は言った。

「努力し働けばそれに到達できると人々が承知している、その何らかのものに対して人々が大きい飢餓を抱いているすべての時代同様、全く素晴らしい時代だ。貴方ら若い人々は、網の中でじたばたして、その網から真逆さまにその本源に落下する魚はどんな気分か何も分からないことだろう。しかし本題はそのことではない。三人のゲッツ兄弟だ。三人はそれぞれ別の道を行った。どの道も角を曲がるので、それで我々はやがて互いを見失った。私が少なくとも、テーオドールとは、 — そうだな — また一緒に出会ったというのは、ほぼ奇蹟だ。この良き少年は、戦争の間、静かに写字台の後ろに座っていた。彼がそうしたのは正しいことだった。彼は多分、戦場では使いものにならなかったであろうからな。彼は腕力より頭脳に秀でていと明らかであった。彼は永遠に惨めな有様であった。しかし今や、 — そうだな、聖職候補生、 — 私は何も言わない。しかし普通年の市の屋台でグロッシェン貨幣と引き換えに見るもの、これを貴方は無料で見ることが出来よう。 — それでテーオドールは書き物机の背後に座っていて、ペンで試補になった。 — 私は昔の自分のまま、 — 歩兵隊の少尉だ。 — いや、我が自我よ、私にはこれよりましなものは考えられない。すべての陽気な騒動の後、他に何も快適に思われなかった。私はその上こう考えた。自分は飲酒が過ぎさえしなければ、辛抱してひょっとしてまだ出世するかもしれない、と。しかし何の成果もなかった。何人かのましな奴でも片隅に追いやられた。これに対し愛するテーオドールは素晴らしい具合に進んだ。皆が彼を重宝したのである。それに彼は余りに強情というわけでもなかった。それで彼はすでに日々のパンを見つけ、その上若干のもの、つまりその妻も見つけていた。この女性はしかも敬虔で神に帰依した家柄で、とても高貴な出身、名前をアウレーリエ・フォン・リヒテンハーンという。今日でもはなはだ敬虔で、とても高貴で、そして私の弟の妻だ。二人はまず私の大事な姪、クレオーフェアをこしらえた。私はいつも二人がこれを仕上げたことを最大の奇蹟の一つと考えている。この聖なる名前の別嬪に惚れてはいかん

ぞ、若い牧師見習。光って轟くものすべてにかけて、この女は聖アントニウスの誘惑のすべての描写に適合している。我がフレンツヘンよ、 — いや、聖職候補生よ、そのうち分かつ。クレオーフェアの誕生の後、長年何もなかった。誰も何か悪いことを考えもしなかった。我がテーオドールがひよっとしたら一番考えていなかったかもしれない。 — すると、 — その後七年経っているが、 — 我が義理の妹は全く思いがけず新聞に載ったのだ。この夜、 — 五体満足の男の子が、 — 等々と記載されたのだ。これは多分全く自然な具合に生じたのに違いない。世間はだからと言って立ち止まることはなかったのだから。世間の一部は不思議に思ったかもしれないが。エメと少年はいう。そこで貴方が、ハンス・ウンヴィルシュが、彼に A b c を教えるよう選ばれたのだ。私はそれにおめでとうと祝福するものだ。他のことは母親が面倒を見る。貴方にこのことについても同様におめでとうと申し上げる。私の姪のフランツィスカが今、この枢密顧問官テーオドールの家に住んでいることを、貴方はすでに承知であろう。この姪は、私の弟、フェーリクスの娘だ。貴方はこの女性とこれから昵懇になるであろうから、彼女については更に触れない。ただ彼女の父親について必要なことを報告しよう。太陽の残りの小片も丁度お陀仏だから、今の時が丁度良くて、これに相応しい。我ら三人の兄弟の中で、フェーリクスはいずれにせよ一番父親に似ていなかった。父親に最も似ているのは、どの観点からもテーオドールであろう。私はたとえこの世で何にもなれなかったとしても、少なくとも時に私は分別ある人間になることが出来る。しかしフェーリクスがこうなるとしたら、せいぜい偶然に過ぎなかったろう。彼は頓狂な頭の、肝の据わった男であった。彼に悪戯をされた人々でさえ、彼のことは嫌いになれなかった。私は彼に下級森林官として、私の森で射撃を教え、幾多のその他、高貴な狩猟の術を教えた。私はこの少年を目の中に入れても痛くないほどに可愛がり、少年もその軽い思いでも、それを尽くして、私になついていた。老父がこの少年を森に放置していたら、かえって万事上手く行ったかもしれない。しかし老父が或る日、自らこの少年を取り戻しに来た。そして彼を固く閉じ込めた馬車で、イルフェルトの学校へ入れて、恐るべき規律に服させた。ただ世間が自ら箍が外れてしまわなければ良かったのだが。それで若い鷹にとって、格子の背後に静かに座って、下の緑の谷を見下ろし、そして青い空を見上げ、狩猟角笛を聞いていることは無意味なことになった。狩猟角笛が全世界に鳴り響いて、すべての若鷹に、外へ出よと呼びかけたのだ。フェーリクス・ゲッツは格子を打ち破ることが出来なければ、頭を格子にぶつけて割ってしまったかもしれない。つまり彼は学校から追放されて、イルフェルトから夜と霧に紛れて、逐電した。そして彼が最初に遭遇した志願兵達の部隊に、彼は喜んで、進んで加えられ、空いていた馬も与えられた。彼は自分の望んでいたものを得た。彼がコロンプの部隊と一緒に騎乗して、エルベ川を渡るよう追い散らされ、月から落下した石のように我らの露営に飛んで来た次第はすでに語った。我々はパリが落ちるまでは、再会しなかったことも語った。これに付言しなければならないのは、私が再会したとき、少しも喜ばしくなかったということだ。フランスでの戦役は頓狂なフェーリクスには好ましくなかった。自墮落で零落したように彼は見えた。困窮や不如意だけのせいでこのように見えたのではなかった。勿論私は彼をきつく叱責した。しかし私は自分が叱責するに相応しい人間ではないと悟った。それに親密に思いを互いに打ち明ける時間も我々にはなかった。我々を引き合わせた同じ大きな騒擾が我々を引き裂いたのである。ワーテルローの一大決戦で戦争は終わった。私

は小さな駐屯都市へ行軍した。その名前はここで関係ない。テーオドールは相変わらず文書を書いていた。そしてフェーリクスは、ー フェーリクスは完全にこの世で余計者になってしまったように見えた。比較的大物の役者達も舞台から去っていて、今やその時代とどう付き合えばいいか分からない状態であった。ー フェーリクスはこの時代を罰当たりなことで殴り殺した。老父が死ぬまで、彼は父の金で暮らしていた。テーオドールと私は、この若者を再び有益な人物にしようとしたが、その試みはすべて失敗した。最後に我らの父親の埋葬のとき、彼を説得した。しかし彼は自分の遺産分を持って、これは我らと同様大したものではないが、パリへ向かった。そしてパリで瞬くうちに、干上がると、正真正銘の運否天賦の兵士としてアメリカへ渡り、そこで彼の痕跡は数年途絶えた。私は自分の駐屯地において、失われた里の池の端や道端のポプラの数を数えていた。私は税関係で採用の話があった。しかし私はその気がなかった。ー 私はむしろ森へ戻りたかった。しかしどの穴も塞がっていて、その猟区に入れそうになかった。私はそこで暗闇の茸のように静かに露命をつなぎ、あくびをしながら見張りをし、いつか一人の姪の世話をすべき人間としては相応しくないほどに飲み、反吐を覚えながら新兵を鍛え、ポプラの木を数え、チェスをした。要するに、我らの身分で、上述の環境下、学問的に仕事と呼ばれるものの一切をした。古参の戦友達は次第に連隊から消え、うら若い賢しらの賤民どもが入って来て、人生は一層しょっぱいものとなった。飾り窓の女達は灰色髪の少尉をからかって、飼い犬にも軽蔑されて、そして結局、静かに飲みながらも、かくも上品な時代に礼節を傷付けるようになって、陸軍省でも不思議がられる始末だ。雪が降り、雨が降り、晴れの日もあるが、その間、優しい小都市の周辺の沼地は悪臭を発し始めた。何事も私にはどうでも良かった。そして一八三〇年になると、世界がまた活気付き始めて、私は自分自身がまだ元気なのを不思議に思った。しかし今更世間が騒ごうと思っても、片隅にいる我らのことは完全に忘れられているように見えた。我々は鏡の裏の蜘蛛のようなものだった。鏡の中でどのような映像が映し出されようと、我々には一切関係ない。それで今では以前よりもなお遺憾なる具合だ。フランス人達は勿論、慣れたやり方で踊りを始め、ベルギーでは陽気に勃発して、若干の小さな祖国ドイツでもこの立派な例に倣っている。比較的若い戦友の何人かは毎日軍用道路に出掛け、行軍命令をもたらす急使の到着を待ちあぐねている。彼らが思いきり首を伸ばしても、夏が秋になるだけで、我らから我らの学問上の仕事を奪おうと思いつくものは誰もいない。そこで私は十月の終わり頃の或る晩、左手に一つグラスを持って、鼻先にトルコの地図を置いて、鉛筆で、バルカン越え将軍[Sabalkanskoi、von Diebitsch, 1785-1831]の後を追っていた。外では風が呻っていて、それも譜面通りではなかった。私はこの将軍、ディービッチュとは何も関係ない幾多のことを考えていた。今や夙にその痔の癒えた老父のことや、兄弟のこと、ライプツィヒ近郊の戦い[1813年10月18日]のことを考えた。その戦いの記念日に、我々は祝賀の篝火を消すよう、より上層からの命令で、分遣隊を派遣して、その祝賀としたのであった。それで突然我が部下が私の前に現れ、外套の男をその後ろに連れていて、この男が寒々とした空気をもたらしたとき、私のような老犬は一体どんな思いがしたか、考えて欲しい。『少尉殿』と我が部下は報告しようとした。しかしこの見知らぬ男は全く軍隊風に『退席』と怒鳴って、訝しく思いながら私は部下に出て行くよう、合図した。彼は出て行き、別の者が残った。私はまさにいつもの言葉を発しようとした。『どちら様でしょう』云々と。しかしこの見知らぬ男は、

このような場合そう言われるように、自ら気さくに振る舞って、私の肩を叩いて叫んだ。『御老体、立派な白髪になったな』と。彼は外套を脱ぎ捨て、そして、一 フェーリクス・ゲッツが一八一三年のエルベ河畔のときのように、私の上に飛び込んで来た。私はテーブルからランプを取って、この人物を照らした。私はこれは現実だと納得して、このずぶ濡れの男が自分の弟であると信ずることが出来るまでには、かなりの時間を要した。しかし弟であった。疑う余地はなかった。十五分後、我々は完全な瓶や空の瓶を前にして、昔のエルベ河畔のときと同様に、我々の運命について語り合った。カファルナムの大尉にかけて[マタイ、8,5]。フェーリクスは私より更に多く語るべきことがあった。彼も大尉の肩書きであった。ペルーの大尉とか、コロンビアの大尉であった。我々はポプラや池の側にいたり、家畜放牧の間に、ボリバル[1783-1830, 南アメリカ独立運動の指導者]について、カラボボの戦い[1821、ベネズエラ、スペイン軍を破る]、ピチンチャの戦い[1822、エクアドル]について読んだことがあった。しかしフェーリクスはこの偉大な男と一緒に同じ鉢から食べていた。これらの戦いで、一緒に戦っていた。それに彼は結婚もしていた。どこかの恐ろしい鱈の出る河畔の、どこかの熱病の地の出身のドイツ人入植者の娘であった。その妻は今も小さな少女とパリに落ち着いていた。首領は、彼が話すことは許されない案件でポーランドへ向かっているのであった。一 朝が白み始めても、我々二人の兄弟はまだ一緒に座っていた。この煙草の煙の中では、工兵中隊なら、シャベルやつるはしを持って掘り進むことが出来たであろう。一晩中雨が降っていて、五時を打ったときも、まだ降っていて、彼は私に自分の妻のアドレスを書き始め、そして自分はもはや一刻も猶予はない、五時十五分に郵便馬車が出発するからと請け合った。これは彼がコロンブ隊の騎兵として我々の露営から騎乗して去った昔と変わらなかった。私は彼を郵便宿駅まで連れて行き、彼の出発を見送り、自分が夜耳にしたすべてのことのせいで、麻痺して、半ば霧に濡れて、宿営に戻って来た。私は未知の義理の妹宛に手紙を書き、しばらくしてまた返事を貰った。ただ善良な、心配症の女が書いたと思われる手紙であった。この手紙の中で、私の姪フランツィスカのことを将来よろしくと書いてあった。しかしポーランドから十二月初頭、極めて特異な知らせが届いた。ワルシャワの革命[1830]、独裁者クロピッキ[1771-1854] 一 グロチョフの戦い[1831年2月19日、ロシアに勝つ、5月26日、ディーピッチュのロシアに敗北] 一 プラガの戦い[1831年9月8日、ロシアに負ける] 一 スクリネツキー[1786-1860、ポーランドの将] 一 パスケヴィッチ[1782-1856、ディーピッチュ死後のロシアの将] 一 まだポーランドは負けていない[ポーランド国歌]。 一 一 一 私はこのときようやく、何故フェーリクス・ゲッツがかくも急いで郵便馬車で向かわなければならなかったか理解した。この野蛮な若造の方が、我々過去の人間よりも世界劇場のことを詳しく知っているわけだ。思うに彼は我々の以前の同盟者達の幾人かに良心の咎を感じていたのであろう。しかし彼はまた何も気にしていなかったろうとも私は固く確信していた。オストロレンカの戦い[1831年5月26日、ロシアに負ける]の災難の後、ようやく彼は戻って来た。一八三二年一月七日から八日の夜中、私のドアを病気になって、襤褸を着て、出血しながらノックした。このせいで、私は解任されないよう、私は辞任する結果となった。しかしこれについては余り話したくない。彼はパリの自分の哀れな妻と子供の許に戻った。私はそれ以来、半ば乞食、放浪者そのものとなって、この上なく惨めな様で世間を渡ることになった。一八三六年に私はパリに来て、丁度私の義理の妹の埋葬に立ち会った。フェーリクスは私以上に貧窮して

いた。彼はフェンシングのレッスンをした。私は二、三年彼の手伝いをし、彼と自分とに一定量のブランデーを分け与え、彼の娘にドイツ語を教えた。私は、彼が今やまた独り立ち出来るようになったらと思って最後に去ったことを、今日でも遺憾なことをしている。私の去った後、勿論昔の癖がぶり返した。自堕落の悪魔が余りに深く彼に根付いて、その戦いに勝利した。五年前、哀れな弟フェーリクスは亡くなった。私はその残された娘を異郷に迎えに行き、そして、このような遺児を住ませる自分の家を有しないとき、これがどういうことか、このとき初めて身に染みて感じた。テーオドールの許に私は哀れなフレンツヘンを預けなければならなかった。この娘を余りに好いていなければ、これで私は満足して良いのであろうが。向こうを見給え、聖職候補生」。

そしてハンスは見上げ、そして夜に、暗い夜にまっけていることを察し、とても寒くなっていることを感じた。同伴者の話しに聞き入って、彼は周辺のことを一切忘れていて、旅の間近な目標に関して、自分自身のためにいかほど希望したり、恐れしたりするべきか忘れていた。

街道は丘の許で上方にカーブしていて、街道の高台の所で、少尉はその家族の話しを終えて、立ち止まり、腕を伸ばして遠方を示した。

夜になっていて、静かで、道の両側の葉の落ちた木々の小枝は揺れていなかった。天は黒く、星も見えなかった。上弦になりつつある三日月の痕跡ももはや見えなかった。丘の前に平野があって、丘の背後に広がっていた。しかしハンスは自分の前の炎の輝きを驚いてびっくりして見つめ、無限の深みからすぐ自分の足許にやって来るように見える鈍い回転の物音に聞き入った。

「これが都市だ」とゲッツ少尉は言った、「半時間すると我々は柵の所に来て、一時間すると緑の木亭の九人の殺害者[モズ]の許だ」。

ハンスはこの時、最後の神秘的請け合いには注意を向けていなかった。見慣れない驚くべき光景を見て、彼の感覚、感情はすべて呪縛され、とても混乱してしまい、それで彼は、無風の通りを歩いていながら、その角でいきなり嵐を頬一面に吹き付けられた者のように、空気を求めてパクついた。

「これが都市だ」と彼は繰り返した、「これが都市だ。私はこれを夢見ていた。しかしこれは夢とは別のものだ」。

彼は素早く脇の方を見た。自分の同行者が自分を見棄てて、地下に沈んでしまい、自分 — ハンス・ウンヴィルシュが、 — 一人っきりで下の脅威的怪物に対峙しているという想いに襲われた。これは捕らわれた奴隷が、自分の背後で薄暗い門が閉ざされ、闘技場の逃れない円形がその踏み潰された砂や血溜まりや咆哮、嘲笑、唸り声と共に自分達の前に広がっているのを目にするとき、襲われる感情であった。彼が千人もの声、「死ノ剣ヲ受ケヨ」の代わりに、自分の同行者の誠実な声を耳にしたのは、大いなる安心であった。

「これらを十分に堪能したのであれば、更に歩いて行くことにしよう。ここ上の方は、緑の木亭と比べたら、少しも快適でない」と少尉は、若い男の腕を取りながら、言った。

「ここは海のようなものです」とハンスは述べた、「私はその縁に、水泳を習おうとする少年のように立っています。抗しがたい力で下の方へ追い立てられます。それで怖

いのです。私は自分の願いが聞き入れられることが怖いのです。 — 自分を深い欲求で満たしていたものに対し、同じように深い戦慄を覚えます」。

「我が友よ、両手両足で正直に消してしまえばいい」と老兵士は叫んだ、「一気に下へ行こう。たとえ一度に水を一杯口に入れたとしても、すぐには弾けない。いや、— 先へ行こう。水が何の関係があろう。緑の木亭と九人の殺害者[モズ]万歳だ」。

猟旅人は下へ駆けた。そして五分後には再び平らな地面の上にあった。両側に田畑や庭園、庭園の壁があった。 — 二人は小さな林を抜けて、それから、取り壊されているように見えるが、しかし建てられたばかりの家屋の砂漠地帯に来た。完成した家々が、支柱の足場や未完成の壁の間に、あるいは不毛な地に、寒々と素っ気なく立っていた。これれの家々からの夜間を照らす明かりでさえ、何ら心地良く、快適には思えなかった。漆喰と新たに切り出された梁の臭いとが奇妙に混淆していて、これが果てしなく続いているように見えたが、 — 突然急に終わった。かくてハンス・ウンヴィルシュは新たな光景に出会い、更に最も困惑することになった。路上の人々やランタンの数は、刻一刻と増して行った。今や二人の旅人は、町の一角の市門の一つの前に立っていて、この一角は少尉の表現によれば、「完成」していた。歩哨の兵士達、同様に歩哨中であるように見えるガス燈。過剰な人間達、 — 途方もなく大勢の人間達。

歩哨が出て来て、 — 太鼓の連打、 — — — 「丁度九時だ、 — 帰営合図だ」と少尉は言った。自分の古風な時計をポケットから苦勞して急ぎ取り出していた。

ハンス・ウンヴィルシュにとって、このとき猶予はなかった。彼は立っていて、自分の前に広がっている広場をぼかんと眺めていた。彼は明かりに照らされた四本の通り、この広場に通じている通りを凝視した。これらの通りの発端は無限の遠方にあるように見えた。途方もなく多い人間だ。新町もかなり人口の多い地であった。しかしここは更に新町を上回る。ここはマルサス氏[1766-1834]がかつて書いていたことすべてに上回っている。

「行こう、牧師見習」と少尉は言った、「今晚と明日、貴方は私と一緒にだ。明後日、貴方を私は貴方の指示された所へ案内する。それから貴方は独力で開拓して行かなければならない。クレオーフェアと付録は、きっと貴方の歯に幾多の硬い胡桃を押し込むことだろう。さあ、行こう、 — やがて貴方が啞然とすることが待っていよう」。

広場を横切って、幅広く長い通りの一つに入って行った。ハンス・ウンヴィルシュは、馬車を所有するようなくも多くの人間が存在することを考えたこともなかった。通りの交差点のたびに、彼は車輪によるおぞましい死をкаろうじて免れることが出来た。口髭のこの師傳がいなければ、彼は枢密顧問官ゲッツの面前には、ただの片輪となって、あるいは死人となって現れたことであろう。

「前方を見て。右 — 左、 — いやはやどこに立っているのだ、 — 注意して、 — 頭[かしら]左、 — バスが来るぞ」。

テレマコス[オデュッセウスの息子、その師は Mentor、師傳]がようやくより静かな通りに来て、救われた思いでいたとき、少尉は深い息を吐きながら、吹きつけながら、額の汗を拭い、ハンカチで額を扇いで、嘆息した。

「お許しを願って言えば、聖職候補生、一頭の豚を市場へ連れて行く百姓よりも、 — 面倒で、汗が出て、責任重大に思えるぞ」。

ハンスはこの比較を悪く受け取る気分ではなかった。彼は目眩がして、自分の案内

者の上着の裾を痙攣しながら握っていて、目から離さなかった。

「まあ、落ち着け。これからはもっと分かりやすい道になる。六回真っ直ぐに行き、六回角を曲がる。さすれば助かる。緑の木亭では料理が出る。それから自由な夜を楽しめるぞ。前進、行軍だ。これは露骨な合図、はしたない言葉だ。行軍、行軍」。

ハンスが思っていたよりも早く、二人は緑の木亭の前に立っていた。客を泊める建物のドアは開いていて、一人の若い、とても将来性のあるガニュメート[トロヤの美少年]を平手打ちしていた。この若者は客室のドアの前で、ゼウスの神酒の鉢に、つまりフォン・ブラウ大佐殿が注文していたポンス酒のグラスの中に、調子に乗って舌先を入れたのであった。

しかし緑の木亭の亭主の握り締められた拳は開かれた。彼の顔の威嚇的な皺は広がって、少年ルイは彼の手掴みから免れ、この少年の叫び声は家の奥へ響いて消えた。緑の木の看板下のルドルフ・ゲッツ少尉ほどに、居酒屋の印の下、喜んで挨拶される疲れた旅人はいなかった。緑の木と少尉ゲッツは互いに長い昔からの知り合いであった。ハンス・ウンヴィルシュも同様にこの友情関係から利点を引き出すことになった。

「連中は一緒か、レンメルト」と少尉は尋ねた。

「どの鳥も自分の枝にいます」と亭主は伝令式姿勢で答えた。両手をズボンの縫い目に合わせていた。

「ブラウは」。

「木の枝です」。

「結構、酒は？」。

「適正」と亭主は、人差し指をゆっくりと意味深に唇の上に持って行きながら答えた。

「とても結構。私はいつもの穴蔵へ行く。この聖職候補生殿は隣りの部屋だ」。

「畏まりました、少尉殿」と亭主は横目で我らのハンスを見て、鐘を引きながら答えた。

「ヨーハン、少尉殿をお部屋に。もう一方の殿方は、十三号室だ。明かりを持って、
一 急いで、
一 行軍」。

階段を上り下僕ヨーハンは明かりを持って行軍した。少尉は同様にこの下僕もかなり以前から知っているように見えた。両旅人はこの下僕に従った。亭主は彼らを見送っていたが、ゆっくりとポンス酒を、フォン・ブラウ大佐用であったそのポンス酒を自分の喉に入れて、ハンス・ウンヴィルシュとその緑の木亭への出現についての自分の驚きと考えのすべてを一つの意味深い言葉、「奇天烈」に束ねた。

第四章

ハンス・ウンヴィルシュは更にかかなりの時間、麻痺したまま自分に割り当てられた部屋の中央に立っていて、ヨハネスがテーブルに置いたほの暗い蠟燭を見ていた。しかし隣の、大きな湯を使う物音で麻痺から驚いて覚めた。少尉ゲッツは鯨に似て、その洗い鉢で息を弾ませ、鼻を鳴らして、今や 一 神学者も体を洗った。丁度彼が身繕いを終えたとき、早速同伴者もドアから頭を差し入れて、言った。

「快適な所だ。 一 若干狭くて、天井が低く、暗いが、しかし 一 とても快適

だ、聖職候補生。ここにフリートラントの戦い[1807年6月14日、ロシアに対するナポレオンの勝利]の後、四週間、鼠や二十日鼠、古箒や古靴と一緒に隠れていた。とても匂いがして快適であった。一八〇七年以降、少し風通しが良くなった。老レンメルトは、若レンメルトの父親だが、我らの連隊の下士官だった。愛国主義の男で、外ではフランス人的に鋭敏な鼻であった。救出、一 有徳連盟[1808年春、ケーニヒスベルクで設立されたプロイセン愛国連盟] 一 我が民衆に対する呼びかけ、一 ライプツィヒ、一 ワーテルロー、一 勝利の女神[ヴィクトリア]だな。この上なく快適。貴方が身なりを整えたら、出て来給え。我々は下で待たれている。我らは伝えられている」。

期待一杯にハンスは案内者に従って、階段を降りて行った。階段の下ではすでに亭主、レンメルト氏が立っていて、もう一度挨拶して、沈着に一つのドアを開けた。その奥はとても声高であった。

この部屋に集まっている殿方達は、煙草を吸っていることが分かったが、しかしこの列席の殿方達自身は最初見えなかった。テーブルの上方のガスの炎や、テーブル上の両明かりもほとんど見分けられなかった。月の周囲のように、「彼らの周りには暈」があつて、この[不吉な]月については、善良なパトリック・スペンス卿もダンファームリンの宮殿で情けなく耳の後ろを引っ搔いたものである[王の命令で不吉な月でも出航して死す、僧正 Percy のバラード、1765]。しかし一人の九人殺害者[モズ、犠牲を枝に刺す]が次々と霧の中から浮かび上がって来た。全く中年の紳士達ばかりで、その各人が何らかの快適な飲み物のグラスを自分の前に置いていて、皆が入室して来る二人に興奮した唸り声を上げて挨拶した。一行の会長は雪のように白い髭の老紳士であるように見えた。ハンス・ウンヴィルシュはまずこの男に紹介されて、この色付きの鼻の威厳のある老公は、フォン・ブラウ大佐、九人殺害者[モズ]会長であつて、ゲッツ少尉はかつてこの大佐の連隊に所属していたということを知った。しかし我々はここで九人殺害者とは本来誰であつて、何を彼らは欲しているか、その名前は何に由来しているか、この名前を正当に遣っているか、報告することにする。

この結社の構成員は皆、以前間接にかあるいは直接に国防軍と関係していた。どの構成員も多かれ少なかれ、仲間作りの衝動を感じていて、この衝動を満たそうとした。もっともどの構成員も、妻がいなくて、それで人生を寄る辺なく、見守られることなく過ごしているわけではなかった。結社の構成員は、煙草を吸い、酒精分の飲み物を、すべての他の湿気よりも優先する権利を有していて、家で伴侶の目に光る滴を見ても、この目が、家の鍵が 一 それまで掛けられていた釘の方に向けられて、そのような滴を見せることになつても、優先するのであった。

どの構成員も、嘘を付く権利、そしてある程度まで、つまりかなり誇張された点まで、すべての話しを文書として証明され、封印され、誓約された真実と見なす能力のある客人を連れて来る権利を有していた。

どの構成員も、その結社の夕べの語りのたびに、一定量の血を流す権利を有していた。しかし規約の第八条項により、話し手は九人の死者よりも多くを語ってはならないのであった。これがこのクラブのとても素敵な名前の由来である。

ヒステリックな個人が聖なる数の九を夢中になって越えると、この個人は極めて厳格な掟ではなかったとしても、すべての立派な食卓仲間の道徳的憤慨を買うことになつて、

このようなとき、この羽目を外した者、あるいはむしろ羽目にはまった者は、これらの仲間から真実についての最高裁判決を受けるのであった。

九人殺害者[モズ]はその名前を正当に名乗っていた。これに対しては何の反論も生じなかった。ちなみに誰もこれに異を称えようと思わなかった。

必ずしも、この結社の構成員が皆、この町に定住している住人ではなかった。例えばフォン・ブラウ大佐は一年の大部分を自分の領地グルンツェノーで過ごした。他の殿方や連中は周辺の小さな都市や地方を故郷としていた。しかし仕事や、旅行気分、享樂、横隔膜の抑圧のせいで、首都に気が向くと、何はともあれ、緑の木亭の古巢が求められ、確実に丸いテーブルに誠実な青春の友や戦友の一同の集合が見いだされたのである。

フォン・ブラウ大佐が聖職候補生を、短いけれども念入りに調査した後、大佐は彼を今回、「勤務可能」の評価で解放し、ハンスはゲッツ少尉によって今や他の殿方達に紹介された。

最初彼は、自分の不器用な従者ハンスを赤ら顔の、頬のふっくらして、卒中気味の、九人殺害者[モズ]の前に連れて行った。この男の主要な性質は、親切な好意、快活さ、そして奇妙な咳であった。快活さ、好意、そして咳は、その内面で絶えず戦っているように見え、その矚目すべき腹を交互に揺すっていた。この殿方は昔、砲兵隊に所属していて、この夕べはバル・シュル・オーブ近郊[1814年]での敵の大砲についてとても面白い話しをした。この球は、自分 — 話し手 — 自身の大砲の砲口に分別臭く飛んで来て、規則通りに火薬装填に収まって、それで — 「私が正しく手玉に取りと命名することが生じました。どんと我々は敵にまた送ったのです。敵はすでに尻を向けていたので、それで最悪のことになりました。この冗談で敵は十一本の脚を失いました。これは後に我々がその場に來たとき、一山となって発見されました」。

「十一、 — 十一本の脚か」とフォン・ブラウ大佐は叫んだ。眉を憂わしげに高くつり上げていた。「すべて右の脚か、それともすべて左の脚か、戦友殿」。

「六本の右脚と五本の左脚です、戦友殿」と砲兵は遅滞なく答えて、窮地を脱した。

「合計六人」と大佐は計算した。そしてすべての九人殺害者[モズ]がこの話しに「合格点」を与えた。

太った砲兵隊長の横に、左目が実際不気味な表情をしている一人の男が座っていた。左側は悪魔的父親殺害者のようで、それは真っ直ぐに凱歌を上げて顕著であったが、一方右側の部分は弛緩して、折れて垂れ下がっていた。この殿方は、聖職候補生が彼に紹介されたとき、ただ左側の部分で聖職候補生に注目した。この男は、この夕べ、全く話さなかった。しかし彼自身が珍しい話しであった。彼は税関係の職務であった。ゲッツ少尉は彼の被保護者の耳許で囁いた。この戦友シュヴァプラーは今日は「左手」であって、明日は「右手」になる、と。この — シュヴァプラーの、人間という有機体操作の見解は、人間は、人間に関するすべての面で、右手から左手への交替とその逆転を行うことによって、最も上手く形成され維持されるというものである、と。 — 今日はこの戦友は左手であって、自分の上着を左側へのボタン締めにしていて、彼の全本性がこれと同じで、明日彼は右手になるのだと囁いた。

ハンス・ウンヴィルシュはこの現象を大いに驚いて眺めた。この税参事官は黙って彼を左目で見つめ、黙ってそのグログ酒を左側の口の端で啜り、黙って左側の口の端から

濃い煙草の煙を吹き出した。

一人のとても不機嫌な九人殺害者に、かつとても一人の陽気な男にハンスは紹介された。しかしただ一本の翼というか、一本の腕しか有していなかった。少尉ゲッツが自分用とその聖職者の同行者のために注文していた夕食はこの時丁度届いて、少なからぬ食欲を抱いてハンスは自分の指導者の招待に従って、「かぶりついた」。しかし丁度述べた陽気な殿方は、聖職候補生にとっても味気ない話しをして喜ばせることを自分の義務と見なしていた。

「ブイオンにビフテキ」と陽気な殿方は言った。ハンスと鉢と、ハンスの皿とに彼は視線を向けていた。「私はとても嫌だ、一とても。自分自身の愛しい体の愛しい部分がブイオンやビフテキになって前に置かれると、嫌な気持ちになる。どう思われるかな、牧師殿。この袖の中にあるもので、誰が腹一杯になったであろうかと」。

そのようなものを味わったのは虫どもでありましょう、とハンス・ウンヴィルシュは自分の意見を内気に敢えて発言した。そしてこの陽気な殿方がまだ所有している拳を重々しくテーブルに落として、こう叫んだとき、はなはだ気分が楽になったように思われた。

「その通り、全くその通り、凶星です。黒い服の神学者殿」。

しかしこの陽気な殿方が今度は問うようにこう言い添えたので、ナイフとフォークを彼は置くことになった。

「しかし一体どんな虫どもです」、そしてこの質問に自ら答えた、「荒れるナイセ河畔のニーダークラインの我が百姓の四人の子供[虫ども]です。そこではすべてが私の腕までも、食い尽くされます。軍医が切り取った私の腕です。苛酷なものです。しかし仕方ありません。一私はブイオンを得て、他の者どもは焼き肉です。人間は人間に許されない色々なことをします」。

神学の候補生ヨハネスも許されないことをした。彼はスプーンとナイフ、フォークを置いて、陽気な殿方をしばらく固まって、青白く見つめ、額の冷たい汗を拭って、そして自分の内面の混乱、動揺に対し、素早く三杯のワインを注ぎ込んだ。それは彼の興奮した状態のために即刻、頭に上がって来た。残念ながら我々は認めざるを得ないが、この陽気な殿方は、自分の話しの効果に皆目良心の呵責を覚えていなかった。ゲッツ少尉はその効果に慣れっこになっていて、また他の殿方達はとうに夕食を済ませていて、何も問題なかった。

更に幾多の奇妙な話しや主張や見解をハンスはこの夕べ耳にすることになった。しかし必ずしもすべての余興が特別彼の気に入ったわけでも、快適に思われたわけでもない。九人殺害者達は互いに何も悪く受け取らなかった。しかしいずれにせよ自分達の妻によってこの結社の一員としての自らの義務が妨害された人々は、その点が最も残念であった。哀れな仲間。一しかしそれもやむを得ない。自分達の状態を満喫しているのであれば、その状態の難儀も自ら引き受けなければならない。

ハンスはこの夕べ、沢山のことを学んだ。そして必ずしもすべてに満足したわけではない。ブイオンの話し以来、更に何度か髪が逆立つことがあった。しかし彼はまた、この九人殺害者は根本的にとても誠実で、上品な、名誉正しい仲間であると知った。

少尉ルドルフ・ゲッツはとてもこの結社の声望ある構成員であって、それに値するとますます明らかになって来た。彼は素晴らしく上手に嘘を吐いた。ちなみに彼は今日合

法的死者の数を越えてしまい、それで皆のぶうぶう言う声、オーとかアー、万歳を招いた唯一の男であった。

十時を過ぎると古参の少年達の中で、大方足痛風を患っている者達が立ち上がって、十一時過ぎになるとブラウとゲッツ、聖職候補生だけが、パカッと中央部分の割れているテーブルに残っていた。大佐はハンスににやりと笑って、このテーブルでさえも、毎晩聞かされる話で口を開ける必要をいずれにせよ感じていて、それでこうなったのだと述べた。

フォン・ブラウ大佐とゲッツ少尉、聖職候補生ウンヴィルシュはこれまでまだ痛風を病んでいなかった。ハンスの目は周囲の輪郭をもはや明確に捉えられなかったけれども、この三人が、更にしばらく満足げに一緒に残っていることを妨げるものは何もなかった。そこにはブルヒャー元帥の等身大の肖像画が壁に掛かっていた。この陛下はますます威嚇的な視線を神学者に投げかけていた。すると隅の暖炉には、賢者であるが、鼻ペシャの男、ソクラテスの胸像があった。これは、— この地にいることに絶えず訝しく思っていて、この瞬間には、蒸気の中、その高みからまことに恐ろしい表情で見下ろしていた。主にこの哲学者のせいで、聖職候補生ウンヴィルシュは、「最後の」一杯のポンス酒を心から辞退した。「最後の一杯」は必ずや自分にとって毒となるであろうと強く感じていた。葉巻も遠ざけて、それで賢明に振る舞った。

しかしこのときようやくフォン・ブラウ大佐は、九人殺害者達の客人は一体何ものであり、この客人がゲッツ少尉と一緒に現れた次第を正確に聞き知った。

「おや、忌々しい」とフォン・ブラウ大佐は、この聖職候補生は、戦友ゲッツが長いこと自分の弟の家のために探していたかの教師であると知ったとき、言った。しかしそれ以上大佐殿は何も言わなかった。— ハンス・ウンヴィルシュはベッドに入ってよく、去った。ハンスが眠くなって、家の下僕の監視と照明の下、よろめきながら階段を上がって行った後、この二人の昔からの戦友が更に語り合い、振る舞ったこと、これについては我々は報告できない。いずれにせよ二人はまだベッドに入らなかった。

それでも何か未知の、とても意地悪で、他人の不幸は鴨の味の精神が、まず聖職候補生の臥所の足先の方を部屋の天井まで持ち上げ、その後、頭部の方を持ち上げることに大きな喜びを見いだしていたが、結局ハンスは、深く、重たい眠りに陥って、彼の前には喜ばしいイメージも、脅かすイメージも浮かび出て来なかった。九人殺害者達のクラブで聞いたお伽噺の一つも悪夢となって彼を圧迫することはなかった。そして彼が目覚めると、明るい朝となっていて、ゲッツ少尉が彼の前に立っていた。元気で、鋭く、誠実で、あたかも彼の周りでも、夜、幽霊の踊りは見られなかったようであった。

「さて、お若い方、貴方は今日も私の指揮下に入って貰う」と少尉は言った。「それでは武器を取って。床から出て、行軍。明日のこの時間には、貴方は口の端を好きなように下に向けてよろしい。— しかし今日は鼻も上向きだ。若者は鼻をどんなに上に上げてても十分ではない、どんな反対意見が出されようとも、だ。服の許へ、行軍。我らの神の連隊文庫からの黒装束の豪華見本だ」。

我々は、少尉がこの日我らの友を案内したすべての道に同行しようとは思わないし、また同行できない。もっともこれはとても尊敬できる、上品な、どの観点から見ても上品な道であった。この兵士は神学者ハンスを居酒屋や客室に案内したばかりではない。

彼はハンスを兵器庫や様々な武器庫にも連れて行った。しかし軽視して、一 文庫は脇に置いていた。これに対しとても好んで、画商の窓の中や、美術館の多彩な柄を眺めているように見えた。そしてその際、極めて独自の美術の見解を展開した。古代の石像柱を彼は、「豪華な被造物」と説明しながら、しかし彼の同伴者を彫刻品の陳列室に連れて来た本当の目的は、単にとっても嫌らしい薄肉浮き彫りを彼に見せるためであって、少尉自身がとても軽薄にフォン・ブラウ大佐によってこれに注目させられたのであった。

二人の遊び人はこの日ずっと様々な享楽を楽しみ、様々な危機を乗り越えた。尋常でなく怒りっぽい辻馬車の御者と少尉は争いに陥った。しかし警察に助けを求めず、それどころか結局、警察に対して、辻馬車の御者と一緒になって刃向かうことまでした。少尉ゲッツはとても深い、とても暗い、とても湿った食料品地下貯蔵庫でこの御者と一杯の苦味酒を飲むことを自分の品位に悖ることと見なさなかった。その間、路上では警察が憤然として穴蔵を見下ろしていて、哀れなハンスを極めて怪しい人物として鋭く監視していたのである。

夕方ハンス・ウンヴィルシュは、日中のすべての体験で目眩を覚えながら、突然緑の木亭で滋養豊かな夕食を眼前にしていた。しかし幸いかの陽気な殿方は居合わせず、それで彼は自分の夕食を穏やかに享受できた。

夕食の後、少尉は、今や自分の被保護者を一 オペラに案内する用意があると宣言した。そして居合わせたすべての九人殺害者達がこの「考え」をととても信頼できない、とても滑稽なものとして宣言した。しかし少尉は、愚直な阿呆鳥の馴染みの巣からの質問、議論を更に受け付けず、この聖職候補生を案内して行った。この阿呆鳥達は、この「迷彩服と黒服」とを、途方もない意見や極上の当てつけを別れの礼砲として音高く放ちながら解放した。

『ドン・ジョヴァンニ』、一 人間が苦勞と困窮の中、暗く狭い部屋で、ガタガタするテーブルの背後、冷たさと飢えと共に、大いなる飢餓を抱いて成長していて、遂に、一 遂に神学の候補生までにやり遂げたとき、そしてその上この人間がユハネス・ウンヴィルシュと言って、とても多くのことを自分の内部で体験しながら、とてもわずかなことした自分の外部では体験していなかったならば、この人間が初めて大きな劇場に足を踏み入れて、人間的永遠のこの断編に直面することになったら、これは珍しい出来事となる。

豪華な広間、人間達、そして照明、これらは昨夕のワインよりも更に効果的に神学者を酩酊させた。このような一つの豊かな極彩色の人生がざわめきながら、千もの、十万もの、百万もの人々がそれについて何も予感しないというのは、どうして可能になったのであろう。

聞くチャンスがなかったという手痛い感情を誰が知らなかったであろう。ハンス・ウンヴィルシュはこの時、再びまた強くこのことを感じていた。ほんの一分間に過ぎなかったのであるが。

「馬鹿げた群衆に眩惑されることはない」と少尉は言った。両腕を四階の棧敷席の胸壁に置いて、あたかも下の方へ唾したいかのように見えた。「聖職候補生殿、これを評価するに当たって、このことを承知しておく必要がある。ただ初回だけ畏怖の念を抱くものだ。ただ音楽を待ちなさい。音楽に比べれば、このむずむずした痒い猿芝居は、消え

て行く泡のようなものだ。この金ぴかの安物には何の意味もない。序曲が始まった。我々皆が死んでも同然、無だ。然るに生きているのはヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトだ」。

カーテンが上がった。レポレッロ[従者]が愚痴をこぼし、にやりと笑った。ドン・ジョヴァンニは悪さをして、ドンナ・アンナは絶望し、憤然として、ナイトガウンを着て登場した。騎士修道会管区長は刺し殺されて、後に簡潔な言葉で、放蕩児に納得させていた、必ずしも歩調の合わない復讐心旺盛な持ち主達を夕食に招待するのはとても危険である、と。この管区長が最後の幕で、砂岩や大理石にしては異常な活発さを見せると、ハンス・ウンヴィルシュは本当に石化したように座ることになって、この生命欲のある快活な若いスペイン人が真逆さまに炎の池に飛び込み、カーテンが巻き落ちるまでは、自分自身、正気に目覚めなかった。

互いに立ち上がり、押し合う人々のざわめき、混乱の中、聖職候補生も立ち上がった。しかし少尉は彼の上着の裾を引っ張ってまた長椅子に落ち着かせた。

「ウンヴィルシュ、座っていないさい」と彼は言った、「私は渦の中、ミュージズの屋台から押し出されるのは好きではない。私は劇場では最後の者になるのが好きだ。もっともその際、最後の者となって戦場から去る気分にも襲われるけれどもな。しかしこれはすべての見世物で有益な感情だ」。

彼らは座っていた。周りが空になった。彼らはランプが、そして最後に強力な輝くシャンデリアが消えるのを見た。彼らは、棧敷を閉める者と監視の兵士が視線で互いに合図し合うまで、去らなかった。

「これは然るべく必要なものであろう」と二人が路上に出たとき、少尉は尋ねた。ハンスは黙って、寒けを感じながら頭で頷いた。

「これに何か温かいものを添えよう」と少尉はその後更に言った。「右を曲がって、真っ直ぐだ。右に、左に。貴方はむしろ帰りたいか。頭痛がするの、阿呆な。すでに言ったろう、明日から貴方は好きなように出来るのだ。しかし今日は私がランタンを持つ。ここだ。階段でこけないよう注意してくれ」。

劇場から遠からぬワイン酒場に少尉は神学者を案内し、そしてその途次、たった今聞いたばかりのオペラの様々な余韻にキャビアとリュージュスハイム・ワインの好ましき、有益さを様々に仄めかした。

このワイン酒場[Lutter und Wegner]で、管区長が顔に小麦粉の痕跡もなく、その魅力的な娘の誘惑者と一緒に座っているのを見て、神学の聖職候補生は少なからず驚いた。少尉がいなければ、この二人の快活な殿方達は、立派な食欲の持ち主であって、先ほどは彼の心に対して半ば体から歌っていたのであると、決してこのことに気付かなかったかもしれない。少尉は幾人かの地味な個人を大きな部屋で自分の若い友に指摘し、その人々の名前を彼の耳に囁いた。それでハンスは何度か上述の個人を大きな関心を抱いて眺めた。幾人かのとても喉の渴いた有名な芸術家が彼に指摘された。それにまた国のとても偉大な精神の一人、愛される有名な一人の抒情詩人も、彼は尊敬の念に満ちた戦慄を覚えながら、深く感動して眺めた。そして全く新たな観点から見ることにもなった。つまりこの詩人は恐ろしいカタルを病んでいて、卵ポンス酒を飲み、丁度十時には甲高い声の襤褸を着た小間使いによって家に帰ることになったのである。「博士の奥方様が、退席をお望みです。

これ以上一人で留守番をするのは御免で、博士殿をお待ちです」。

「マゼットには同情するよ[『ドン・ジョヴァンニ』の作中人物]と管区長は情けなく滑稽なバスの声で歌い、抒情詩人はとてもカラフルなショールを首に巻いて、断定的な灰被り姫によって連れ去られた。ハンス・ウンヴィルシュは彼が窓の下でくしゃみして通り過ぎるのを耳にして、この時からこの神聖な歌手の歌を全く別の気持ちを抱いて読むことになった。

この酒場では少尉も語り手から一人の聞き手に変貌していた。眉を高くつり上げて、彼はその瓶と葉巻の背後に座っていて、周囲に注意を払っていた。

絶えざる出たり、入ったりで、ボーイ達は仕事を素早く整えるために、互いにぶつかりそうになっていた。男性のほとんどすべてのオペラ役者達が次第に集まっていたが、しかしまた多くの他の殿方達もやって来た。

「夕方が深まるにつれ、人々は一層立派になる。テオフィルがやって来たぞ」と突然、ドン・ジョヴァンニが、ドアがまた開いたとき、叫んだ。「シュタインだ、こちらへ、こちらへ、博士。詩人は王侯と歩くべし[「歌人は王者と交わりを結ぶべきだ」シラー、『オルレアンの乙女』1/2 石川實訳]、一」。

「それはこちらでは、批評家は歌い手と飲むべし、と言うようなことだろう」と微笑して、シュタイン博士と呼ばれた紳士は、慎重にその上品な手袋を脱ぎながら言った。

ゲッツ少尉は丁度そのとき席から離れていて、隣室で或る知人を探していた。この喧噪の中、その声を耳にしたのであった。丁度次第に目を全く閉ざす気分になっていたハンス・ウンヴィルシュは、今一度周囲に目を向けて、隣のテーブルのこの見知らぬ紳士を最初ただちらりと見た。しかしそれから喜びと驚きの間で凝固した。

本当だろうか。錯覚か、それとも真実か。彼なのか、彼ではないのか。...疑い得ない、髭やその他一切に関わらず、彼である。

興奮して震えながら、聖職候補生は起き上がって、この紳士に歩み寄った。紳士は彼に背中を向けていた。こっそりと彼はこの紳士の腕に触れた。紳士は振り返って、神学者の顔全体を見た。

「モーゼス、モーゼス・フロイデンシュタイン」とハンス・ウンヴィルシュは呟いた。両腕を抱擁のために広げていた。しかしモーゼスは、一步退いて、一瞬自分の記憶を探しているように見えた。眉を引き締め、唇を固く閉ざしていた。しかし素早く彼は、喜ばしげでなく驚いているようであったが、一つの決心をしたように見えた。彼は聖職候補生の両手を固く握って、彼を引き寄せ、自分に密着させた。

「いや、君か、ハンスか。奇遇だな。そんなに大声で話さないでくれ。嬉しいぞ。私の昔の名前は、もう呼ばないでくれ。そのわけは、後で話そう。今私はテオフィル・シュタイン博士だ。友よ、芝居騒ぎにするな。阿呆どもが皆、注目している。後でな 一 明日、後でな」。

モーゼス・フロイデンシュタインは狼狽している青春の友を引き離して、再び他の殿方達の方に向かった。彼らはこの場面と奇妙な黒服の男のことを問い質しているように見えた。彼は彼らに何事か囁き、そして各人が一種の微笑を浮かべて、哀れなハンスを見た。

今一度モーゼスは友の許に歩み寄り、小声で有無を言わせず、言った。

「君のテーブルに戻るのだ。騒ぎを起こすな。私にとって致命的なことになる。ハンス、利口に振る舞え、昔からそうであったようにな」。

四方八方から、今やテオフィル・シュタイン博士は呼ばれた。彼はとても愛されている馴染みの人物に見えた。シェークスピアの『ヘンリー四世』の給仕のように、彼は四方八方の人々に、「すぐ参ります、すぐ参ります」[「ただ今、ただ今」第一部 2/4、中野好夫訳]と叫ばなければならなかった。やがて彼は列席者達の一群れ全体に囲まれていた。誰もが口を開けて笑いながら彼の発言を聞いていた。この発言は洒落ていて、高度に見事であった。誰もが何の分野でも彼に太刀打ち出来ないように見えた。 — この男の本性には、もはやクレッペル通りの薄暗い店、ヴェストファーレン王室の従僕服を思い出させるものは何も、何一つなかった。ハンス・ウンヴィルシュは、自分の席に沈み込んでいて、絶えず新たに額の髪を撫でていた。自分が目にし、耳にしている事が、彼にとってほとんど信じられなかった。

この時、ゲッツ少尉が戻って来て、ハンスの側に再び腰を下ろしながら言った。

「おや、シュタイン博士もいる。聖職候補生殿、風変わりな人の子だ。つい最近、この町へやって来た。 — 文士 — ジャーナリスト — 世界精神とかその類いの本を書いている。ものすごく口の達者な奴だ。この顔はどこかで見たような気がするのだが。私にはこの人間が格別気に入るとは思えない。しかし他の連中は文句なくこの人物に夢中になっている」。

ハンス・ウンヴィルシュはやきもきしていた。彼は、少尉がどこで、今テオフィル・シュタインと名乗っているモーゼス・フロイデンシュタインと出会ったか知っていた。彼はそのことを告げる必要があった。しかしそれを告げることは許されなかった。というのは、突然、青春の友の黒い目が群れの中から、彼に向けられたからである。モーゼスは口に指を当てて、頭を振った。哀れなハンスは二つの義務の衝突という極めて厄介な状況に陥っていた。しかし神学者の胸の中での戦いでは、クレッペル通りが勝利者となって、ヴィントハイムの郵便宿駅亭は負けた。この晩、少尉はまだ、この興味深い余所者は誰か、知るに至らなかった。しかしハンス・ウンヴィルシュは、自らの心の内部のこの葛藤には出来るだけ早く終止符を打つと決めた。然るべき時に、この高貴な二人の人物を互いに引き合わせ、過去の些細な不仲を調停することは、容易に違いないと考えて、ようやく心を落ち着かせた。しかしはっきりしていることがあった。つまりこれまで神学者ヨハネス・ウンヴィルシュ、この聖職候補生の魂は、魔法の森のいばら姫のように眠っていたのであって、このまことに深い眠りの間に、世間は完全に変化していたのであって、この過程で、この聖職候補生は全くお呼びでなかったのである。魔法をかけられた王女は若くて、 — 若いまま目覚めたのであり、宮殿で花と咲く生活がようやく始まったけれども、一方森の外の世間では人々はとても年取って、とても年取ってしまったことをハンスはその暗い気持ちの中で失念していたのである。

テオフィル博士はハンスが自分のことを少尉にばらさないであろうと確信して以来、自らの陽気な一同に全く心に向けて、青春の友にはそれ以上注意を払わなかった。しかし少尉が退去の準備をして、最初にドアから出て行くと、聖職候補生は突然一つの接触を感じた。モーゼスが彼の側に立っていて、彼の手一枚の名刺を押し付けた。それから跳んで退き、可愛くハンスに対し指先をキスした。ハンスはその後一瞬すると路上で、実

直な少尉の側にいた。少尉は今日も過労気味に見え、緑の木亭の寝室のドアの所で、素早く同伴者から別れた。

長いこと聖職候補生は寝室で、青春の友の住所の記された名刺を眺めていた。その名刺は華奢で、十分に可愛いものであったが、彼の魂にとって重く思われた。

第五章

ほとんど一晩中、ハンス・ウンヴィルシュは塔の時計の音をすべて聞かざるを得なかった。鐘の響きが、彼の枕元まで迫って来たからである。彼が目覚めて横たわっていると、すべての種類の声が聞こえて来た。大都市では十五分過ぎるごとに、十二種の響きが耳に届く。これらの響きは近くからであったり、遠くからであったりした。――まず鈍い、全く間近な鐘の音がし、それから遠方で鳴り、駅のベルの音によく似た遠方の鐘が鳴った。この繊細な、遠方の声に続いて、聖ニコラウスの塔のよく通る轟きがあり、そのような具合に、一つの時計や鐘が別のそれに密接に踵を接していた。

他人の家や、余所の町、余所の世界に寝ていて、夜の時間を数えながら、過去の生活を精神の中で繰り返し、そして現在の混乱した、奇妙な体験と、この過去の生活とをいささかでも結合するのは、独自の趣がある。

このテオフィル・シュタイン博士はクレッペル通りのモーゼスや、ギムナジウムや大学でのモーゼスとどのように関連するのか。ハンス・ウンヴィルシュは、これについて頭を悩ますのを諦めた。この突然地面から浮上して来た人影は、とても不可解であったかもしれないが、しかしその輪郭は余りに明確で、鋭く、その実存を疑うことは不可能であったろう。

人は、夜、時間を数えながら、多くの人々を想起するものである。生きている人々や死者を想起する。主に死者の方を想起する。夜は霊の時間であるからである。

ハンス・ウンヴィルシュは、自分の死者達を想起した。――母親のこと、母親の古くて黒い貯えの箱、彼女の善良な、忠実な目、彼が、自分の説教から戻って来たとき、この目が閉ざされているのを見いだした時の朝のことを想起した。ハンスは父親のこと、その輝かしいガラス玉のこと、父の歌の本のことを想起した。すると次第に暗闇の中から窮屈に閉鎖されていた子供時代の全体が浮かび上がって来た。そして一度、この落ち着いた夢家は、素早く臥所から起き上がった。シュロッターベックお婆さんとグリューネバウム伯父の声が外の階段で聞こえたように思われたからである。この夜、聖職候補生を囲んでいたのは、勿論、狭い制限された世界であった。しかし朝が白み始めると、この狭い世界は、今や彼の前に広がっている広大な世界に対し確固と直面して行く力を授けていた。この朝、少尉ゲッツは、「自分の教師」を布団から追い出す必要はなかった。彼は彼が完全に準備しているのを見だし、――この少尉の発言によれば、――「自分にどのような荷が課されようと、すべてを堅忍不拔に受け入れる」覚悟があると知った。

三回、少尉ゲッツは、神学の聖職候補生の周りを回って、満足して彼を眺めた。

「舞台に出るようだ」と彼は三回目の巡回を終えたとき、言った。「燕尾服のない神学なんて何だ。燕尾服を着ていない教師なんて何だ。いやはや、あつぱれ。若干流行遅れだが、しかしとても上品だ。貴公、これらの素敵な黒い服の尾が弟テオドールの気に

入らないとしたら、 — それはこの青いハンカチのせいかもしれない。これは余りに賢しらに、これらの — つまり、燕尾服の裾の間から — 顔を覗かせている」。

素早くハンスはそのハンカチを出来るだけ深くポケットの底に押し込んだ。しかし少尉は叫んだ。

「それは垂らしていい。垂らしておきなさい。テーオドールやクレオーフェアが貴方と何の関係があろう。ただな、 —」。

老公は打ち切った。この「ただな」は何の言葉で結ばれるのか、今やハンス・ウンヴィルシュは知ることがなかった。十一時十五分に彼は少尉と一緒に枢密顧問官ゲッツの家へ向かった。

行軍の前にコニャックを一杯飲んで、気合いを入れるという老兵士の助言をハンスはきっぱりと断った。少尉は言った。

「総合的に考えて、貴方の方が正しいかもしれない。我が弟殿はとても鋭敏な鼻だから、この鼻で不当な邪推を吸い込まないとも限らない。前進」。

ハンスは聖職候補生の燕尾服の動悸する心臓の上で、間違っただボタン掛けをしていた。緑の木亭の窓から、フォン・ブラウ大佐は、冗談めいて皮肉に白いハンカチで合図した。太陽は、微笑して、しかし皮肉の色はなく、天からこの教師を見下ろしていた。天候については、今日気がかりなのは、少尉の気分の他は何もなかった。彼は道すがらずっとむしろ自分自身と語り、呟いていた。帽子を彼は額に深く被せ、両手を自分の上着ポケットの中で丸めているように見えた。彼はすぐにつっけんどんになったように、全く上機嫌でなかった。そしてこの不機嫌な案内者が突然、「忌々しい、もうここだ とガラガラ声で言ったとき、教師はまことに縮み上がった。

彼らはまず、生活に溢れた喧噪的な商売の町を後にして、それからより静かな一角、より上品な一角を歩み過ぎて、今や公園の一部を通過して、更により上品な一角の最後の家並みに来ていた。この家並みは公園に沿っていて、公園とは車道、乗馬道とで隔てられていた。小さな、しかし一年の早い季節にあっても綺麗に維持された庭園を通過して、二人はこの「公園通り」の家々に達した。そして一つの優雅な鉄製の庭木戸の前に今や少尉は立っていて、憤然と、丸い芝地と空ろな噴泉水盤の向こう側の優雅な建物を示した。

憤然と少尉は庭木戸の鐘を引いた。開け胡麻式に開いて、芝と噴泉水盤の周りを両殿方は歩いて行った。三つの階段、 — 豊かに彫刻されたドア、これも同様に自動で開くように見えて、 — 薄明かりの上品な廊下、 — カラフルな窓ガラス、 — ピアノの音色、 — どこかの一部屋からの甲高い鸚鵡、 — 緑と黄金色の一人の従者、ハンス・ウンヴィルシュは混乱して、この従者の足を踏んだが、この従者は、どもって言う詫びには注意も向けず、軽視していた、 — 開いたドア、 — 堇[紫]色服の一人の令嬢、 — この令嬢のとても満足げな、驚きの叫び声と明るい哄笑、 — 十一時四十五分である。

「伯父さん、恐怖の伯父さん、熊伯父さん。まあ、何という幸せ。グリムバールト[穴熊]伯父ちゃん。何はさておき、一回接吻を、我がじいちゃん」。

堇色服の令嬢は突然とげとげしい老公の首にかじりついて、彼はその接吻を甘受しなければならず、その接吻にさほど不機嫌でもなく応じたように見えた。しかしそれから素早くその美しい両腕から離れ、堇色服の令嬢を押し戻し、ハンスの方を向いた。

「こちらは私の姪、クレオーフェア、敬虔な名前と邪悪な心の私の姪だ。この姫には用心し給え、聖職候補生殿」。

聖職候補生殿は、若くて美しいレディーの足を踏まず、十分に敬意を表して離れて、お辞儀をした。彼女は彼の挨拶に少しも無愛想には応じなかった。「彼女の目の交互の心優しい明かり」がその忠実なエッカルト[忠誠者]の警告にもかかわらず、ハンスに大きな印象を残した。

「この殿方を私に紹介してくださいな、ルドルフ伯父さん」とクレオーフェアは微笑して尋ねた。「私の名前と私の性格は、然るべく貴方に告知されました。私の邪悪な心の中で、その最も明るくて、最も快適な片隅に貴方は住まわれるとご承知ください。そこで貴方もよろしければ、――」。

「新町出身のヨハネス・ウンヴィルシュ殿だ、神学の聖職候補生、―― 一 若者で、不屈きな腕白どもを正道に戻す練達だ、―― 私の全面的保証を得ている青年だ」。

「聖職候補生殿、それはとても遺憾なことですわ」と令嬢は言った、「私の伯父殿が保証なさること、これはこの家では、―― あら、ジャン、後生だから、私どもをそんなに面白そうに眺めないだ。出て行ってください。どこか貴方にもっと有益な仕事があるかもしれないよ、―― その保証は、この家ではとても頻りに、いやほとんどいつも、その価値が全面的に認められないのです。でもね、貴方は私の気に入りました。私としては貴方を私の軽率極まりない保護下に置きましょう、ウムクヴィル[周章攪拌]殿」。

「ウンヴィルシュだ。神学聖職候補生ウンヴィルシュ」と少尉はガタガタ言った。

「お許し遊ばせ」とクレオーフェアは言った、「それで貴方は、聖職候補生殿、私どもが愛しい天使的なエメのためにとても長く求めている、得られないでいた殿方、辛抱強い殿方なんですね。まあ、面白い」。

「よく喋ってくれた」と少尉は叫んだ、「そなたの父は在宅か、娘っ子」。

クレオーフェアは頷いた。「行軍」と老公は指令した。クレオーフェアとハンスと少尉が階段を上がると、ジャンの兎のように見開かれた目と、堂々たる頬髭が新たに廊下に現れた。その目と髭の不機嫌な所有者は、苛立って恵み深い奥方の馬車を待っていた。家庭教師が少尉ゲッツの同伴で到着したという知らせは、この奥方にとってとても関心のあることに違いなかった。

聖職候補生の脇の方をクレオーフェアは歩いて階段を上った。伯父はぶつぶつ言いながら二人の後に従った。

十二の階段である。十三番目の段で階段は右手に向かっていた。ハンスが上の廊下で少尉の方を見ると、少尉は消えていた。聖職候補生はクレオーフェアと二人っきりで立っていた。令嬢はとても家庭教師殿のことを面白がっていた。

「そうね、あの人はどこかしら。どこだと思う」と彼女は笑った、「あの人のこの面のことをまだご存じないの。あの人は貴方をここで引き渡して、老いた、大きな口髭の魔法使いのように消えました。魔法の馬車は空の胡桃の殻になってしまいました。馬どもは鼠に縮んでしまいました。ウンヴィルシュさん、探し回るのを止めましょう。あの御老体は大方多分恐らく私の従姉妹フランツィスカを訪ねたのでしょうか。貴方は今や、ご自分と私だけが頼りです。―― こちらが私のパパの部屋。私は貴方を紹介して、堪能するつもりです。お世辞抜きで、貴方はとても私の気に入った。私どもの生活はさほど苦いもの

にはならないだろうと希望しています」。

彼女はこの最後の言葉を言いながら、彼を見つめたので、ハンスは、少尉のとても執拗な勧めのように、彼女に対し用心することが出来なかった。この褐色の目は、第一級の魔力を有していた。キルケーが何か似たような具合に覗いたら、グリュロスがオデュッセウスに仕える料理長であるよりも、むしろ彼女に仕える豚でありたいと願うとしても不思議ではなかった[プルタルコス、Moralia]。

しかしドアが開いた。上品なサロンを通過して、クレオーフェアは聖職候補生を本や文書の戸棚で一杯の別の部屋へ案内した。ハンス・ウンヴィルシュは、やはり本や文書の積まれた、大きな、緑色のクロスで覆われたテーブルに向かって三回、お辞儀した。テーブルの背後に一人の紳士が座っていて、挨拶の後、安楽椅子から起き上がった。背が高く、叩く、ますます高く伸び、一 細く、黒く、影のようで、一 そして結局、文書の背後に、高く、細く、黒く立って、白いネクタイの所までボタンを締めていて、こう警告する板の付いた杭に似ていた。ここでは笑ってはならない、と。

しかしそれでもクレオーフェアは笑った。

「聖職候補生のウンヴィルシュ殿です、パパ」と彼女は言った。再びハンスはお辞儀をした。枢密顧問官ゲッツ殿は、咳払いをし、立ち上がったことをとても遺憾に思っているように見えたが、しかし一度立ってしまったからには、立ち続けて、右腕を素早く背中の方へ回した。これは聖職候補生以外の人は誰でも、こう推測したかもしれない、バネを押しているか、ネジを回しているか、糸を引き出している、と。

しかし彼が自分の燕尾服の背後の両ボタンで何をしようとして、その結果は六通りの神学のお辞儀の劣等な真似であった。

「聖職候補生のウンヴィルシュ殿よ」とクレオーフェアは自分の紹介を繰り返した。一方パパの方は、現実の枢密の協議[枢密顧問官]によって、自分はどのようにこの教師に対応すべきか思案しているように見えた。今や彼は決意して、言った。

「貴殿にお目にかかっているが、すでに十分前から予期していて、今ようやく貴殿に歓迎の挨拶を申している。私の妻、つまりそなたの母親は在宅か、愛するクレオーフェア」。

「いいえ、パパ」。

「残念だ。聖職候補生殿、もっと長く、もっと密接に一緒に生活したら、互いにもっと親密になることだろう。クレオーフェア、私の妻、つまりそなたの母親はいつ家に戻るのだ」。

「パパ、私には分からないわ。これについては、はっきりしたことは言えないとご承知でしょう」。

枢密顧問官は今やぶつぶつ言った。憂わしげに咳払いした。ハンス・ウンヴィルシュは、自分を出来るだけ有益に見せ、自分の重大な、しかし恵み豊かな仕事に全力で取り組むという確固たる意志を述べるに適した時機が来たと思った。彼は、顧問官が未知の男に対して抱いてくれた信頼に衷心からの感謝を述べ、この信頼を決して裏切らないようにしたいと自発的に約束した。

枢密顧問官は再び背後で自分の機械仕掛けに取り組んで、ゆっくりと安楽椅子に座り、自分の文書の山の背後に隠れた。彼が新しい家庭教師の言葉について深く沈思したの

か、それともこの言葉を全く聞いていなかったのか、疑念が残ったであろう。しかし彼はまたまことに魔術的に高く伸びて来た、突然、緑と黄金色の従僕が部屋に入って来て、こう言ったときのことである。つまり恵み深い奥方は丁度家に帰られて、即刻新任の教師に会って話しをしたいとのことである、と。

「ジャン、行って、私の妻に伝えてくれ、私が妻に早速、聖職候補生殿を紹介したい、と。クレオーフェアよ、そなたも母親の許に先に行ってくれないか」。

ジャンはお辞儀をして、去った。クレオーフェアは両肩をすくめて、皮肉な微笑を浮かべて、同様に去った。両人が去ると、一つの奇蹟が生じた。一 枢密顧問官は、聖職候補生の服のボタンを握って、彼を自分の間近に引き寄せて、彼にこう囁いた。

「貴方がこの家に留まることを、私は願っている。貴方は私の気に入った。貴方の身上書を現在まで眺めて見る限り、とても結構だ。私は貴方が私の妻の気にも入ることを願っている。そのために貴方の力を尽くしてくれ。では、来給え」。

すでに言及したサロンを通過して、今や枢密顧問官は聖職候補生を向かい側の部屋に連れて行った。そのドアの所で、この夫には顕著な変化が現れた。彼の内部でのバネが突然、その弾力を失ったように見え、歯車と針金仕掛けは、その仕事を止めて、その姿全体がより小さくなったように見えた。一 枢密顧問官殿は自分の妻のドアをノックした。しかしその前に鍵穴から覗くか、やはりその鍵穴の許で聞き耳を立てたい気があるかのように見えた。一瞬の後、ハンス・ウンヴィルシュはこの家の一 女主人の前に立っていた。

鷲鼻と二重顎の黒服の堂々たるレディーが、星のない夜のように真面目に、黒っぽい寝椅子の上、黒っぽく覆われたテーブルの背後にいた。部屋全体が荘重な印象である。どの椅子も、安楽椅子も、品位の一つの祭壇である。真面目で、貞淑で、荘重で、威厳のある壁や、天井、絨毯、絵画、カーテンである。万事が堂々たる秩序と法則を有して、これは七歳の、コーヒー色の顔の、膨れた小さないたずら小僧だけが例外で、この小僧は教師を目にすると、恐ろしい、嫌な、憤激した咆哮を上げて、子供用鞭で聖職候補生ウンヴィルシュの両脚に攻撃して来た。

「まあ、エメ、何て振る舞いでしょう」と黒服のレディーは言った。「愛しい子、私の許にお出で。そんなに仰々しく騒がないの。クレオーフェア、この子から鞭を取り上げてくれない」。

クレオーフェアは再び両肩をすくめた。

「ママ、結構です。エメと私は、一」。

恵み深い夫人は、手で合図しながら、叫んだ。

「黙ってなさい、これからどうなるか分かっています。私の人形さん、ほら、これをあなたの鞭の代わりに上げましょう」。

この愛らしい子供はボンボンの袋に抵抗できず、拷問道具を母親の両手に渡した。母親はかくて、自分の堂々たる姿を完成させるための最後の画竜点睛の品を手に入れることになった。

手に鞭を持って、今や枢密顧問官夫人は、新しい家庭教師に全面的に対峙して来た。彼女は彼を厳しい試験にかけ、彼の生活の「方針」について、厳密極まる情報を求めて来た。とても貴重な宝石を預けることになる若いこの男の倫理と教条とが、彼女にとってと

でも大事であった。幾つかの個別の点では、必ずしもすべて額に皺が寄ることがなかったわけではない。しかし全体的に見て、この試験は受験生に有利な結果となった。それどころか結論はとても満足すべきものであった。

「貴方の働きはこの家で恵まれたものとなるであろうと、期待して良くて、そのことを嬉しく存じます」と恵み深い奥方は言った、「聖職候補生殿、主は貴方をキリスト教徒の屋根の下へ案内されたらと貴方は悟ることでしょう。幸せの種は、この小さな、敏感な天使の心にすでに蒔かれていると悟ることでしょう。私の特別な母親としての配慮の下、貴方は、この若い心の中で、すべてが美しい開花を迎えるよう力を尽くしてください。主は貴方の仕事を祝福して嘉されることでしょう。謙虚で単純な心で、私どもの許で働いてください。世俗的な微笑や嘲笑によって」（ここで一つの視線と想像上の一鞭が美しいクレオーフェアに放たれた）、「惑わされてはなりません。私の可愛い花の坊や、ここで聖職候補生殿に手を差し出しなさい」。

いずれにせよ、この可愛い花の坊やは、この要請を間違えて理解したに違いない。聖職候補生殿に手を差し出す代わりに、新たに、先に言及された、髓や脚に浸透する叫び声を上げた。そして家庭教師が敢えて近寄ろうとすると、この子供は足で家庭教師の脛骨を蹴って、それで教師は痛みを覚えて動揺して退き、ただ離れて、エメと自分とは直により一層親密になることだろうと希望を述べた。

「私もそう願います」と恵み深い奥方は言った、「貴方が私の少年の愛と思慕を得るようにとすべてを傾注なさることを希望します。子供らしい単純で謙虚な人柄を通じて、容易に子供の愛は得られます。いや、ウンヴィルシュさん。私は貴方の両手に大切な宝を預けます。私の愛しい、敏感な子、私のエメを」。

枢密顧問官はこのすべての交渉の間、一言も発しなかった。彼はそこに立っていて、少なくとも外見的には、なされたことすべてを結構なものを見なしていた。彼が自分の胸の内部で感じたことは、少しも明らかにならなかった。 — この善良な男は、自分の妻のいる所では黙っているのがいいと学習していた。

クレオーフェアは全く消えていた。彼女がカーテンの背後に何故隠れたのか、これもパパの感情同様に謎のままであった。家庭教師殿の感情は必ずしも至極快適ではなかった。不快な気持ちで彼は未来を覗いた。そしてコーレナウもそれなりに魅力があったと嘆息しながら認めていた。彼は汗をかかせつつ、自分を遠ざける一つの空気に囲まれていることを感じた。さほど熱い感謝の念を抱かずに、彼はルドルフ・ゲッツ少尉を思い出した。少尉はこの家の家庭教師となる名誉と満足感を彼に用意してくれたのであった。この男が最も大事な時に、階段で消えた謎も、少尉に対する有利な解釈にはならなかった。ハンス・ウンヴィルシュは、ルドルフ・ゲッツ少尉を策謀好きな性格と見なし始めた。 — 忠実なエッカルトは、沼の真ん中に消える鬼火に変身した。ハンス・ウンヴィルシュは、枢密顧問官夫人、アウレーリア・ゲッツ、旧姓フォン・リヒテンハーンの視線の下、ゆっくりと、しかし確実に深みの中に沈んだ。そして窓のカーテンの背後にも、枢密顧問官の背中の背後にも、救助の手は出現しなかった。

別の面からこの救助をもたらす手は差し出された。

「フランツィスカはどこなの」と恵み深い奥方は尋ねた。カーテンの背後のクレオーフェアは知らなかった。枢密顧問官も同様に知らなかった。

「ウンヴィルシュさん、お願い。その鐘[鈴]を引いてくださらない」と恵み深い奥方は言った。ハンス・ウンヴィルシュは目でその引き具を探した。しかし彼がそれを見つけた瞬間、すでにドアが開いた。それはサロンから恵み深い奥方の部屋へ通ずるドアである。そして灰色の、さえない服の、小さな、さえない人影が、目を伏せて、この部屋に滑り込んで来た。ー ハンス・ウンヴィルシュは呼び鈴を鳴らさなかった。彼はこの今までの三十分間、フランツィスカ・ゲッツのことを考えていなかった。

「あら、フランツィスカね」と枢密顧問官夫人は叫んだ。「私の姪です、こちらゲッツ嬢、ー ウンヴィルシュさん」と彼女は短く言い添えて、その際、できるだけ、更に前より堂々と、更に冷ややかに見えるようにした。「聖職候補生殿をその部屋まで案内しなさい。この方には、私どもの家に一緒に住んで頂きます」。

フランツィスカ・ゲッツは黙ってお辞儀をした。そして彼女は音もなくハンスの側を滑って通り過ぎながら、目を彼に対して持ち上げ、また一瞬のうちに伏せた。

「聖職候補生殿、このお嬢の後を付いて行きなさい」と恵み深い奥方は、鞭を脇に置きながら、言った。ハンスは夫人にもう一度お辞儀をした。これは今回無視された。彼は枢密顧問官に対しお辞儀をした。顧問官は少なくとも少しばかり、自分の機械仕掛けを作動させた。窓のカーテンがこの時、微かに動いたので、ハンスはこれにもお辞儀をした。それから彼はルドルフ少尉のフレンツヘン[フランツィスカ]に従って、廊下で、深く、しかし用心深く、深呼吸を敢えてした。

するとまた威厳のある従者が立っていて、その頬髭は、それを見つめるほどに、ますます拡張するように見えた。従者は彼の肩章越しに、「新米の家庭教師」を正当に軽蔑して眺め、育ちが良いとは言えない素寒貧に、行き場所を教える気はなさそうであることを示威していた。

しかしフランツィスカ・ゲッツ嬢も緑と黄金色の男を疑わしげに見ていた。

「私の後を付いて来てくださいますならば、私が貴方に貴方の部屋まで案内しましょう」。

彼女の声は穏やかで、懇ろで、温和、老いたリア王の言う、「女性の得がたい点」を有していた[「如何にも女らしい佳い聲であったが」『リア王』5,3. 福田恒存訳]。そして彼女の声を聞くと、ジャンは踵で回転して、膝を曲げずに、足を外側に向けて、自分の体面を保つ作法を心得ていると確信して歩いて行った。

「御令嬢、また何という運命のいたずらで、私どもは一緒になったことでしょう。この運命に私はとても感謝しています」、とハンスは叫んだ。しかし令嬢は口に指を当てて、囁いた。

「私は私の伯父ルドルフに会いました、ー 伯父と話しました。ーーー 伯父は貴方のことを話しました。哀れな、誠実な、親愛なるルドルフ伯父です」。

彼女は黙った。しかしハンス・ウンヴィルシュは、その睫毛に一粒の涙を見た。彼は彼女に話しかける勇気がなく、黙って家の三階へ付いて行った。彼は自分の魂の内奥で言った。「有り難い」。多分彼はそう言う理由があったに違いない。

「ここが貴方の部屋です」とフランツィスカは、一つのドアを開けながら言った。「ここで楽しく幸せなお時間を過ごされますように。私の心からの願いで、また私の伯父ルドルフの願いであります。伯父はとても貴方を好いているように見えます」。

「貴女にも、少尉殿にも、厚く感謝申し上げます。少尉殿の私に対する計らいは、すべて忝いものです。伯父殿が私の運命に介入されて、私をこの家に案内されたのは、夢のようです」。

「伯父は、私どもがかの宿で出会ったあの晩以来、よく貴方のことを話されました。当時私はとても惨めで、とても不幸でした。善良なルドルフ伯父です。私の哀れな人生も伯父が見守っています。聖職候補生殿、伯父のことはすべて知って欲しいものです」。

「伯父殿の素晴らしさをすべて知って、評価出来たらと願っています」とハンスは叫んだ、「この家に比較的長く、滞在しているうちに、一」。

フランツィスカは驚愕したように、再び指を口に当てた。

「この家では貴方はこの伯父ルドルフについて余りに多く語ってはなりません」と彼女は言った、「伯母は、伯父のことが好きではないのです。本当に悲しいことです」。

「そうですか」とハンス・ウンヴィルシュは発した。すると次の瞬間には、少尉のフレンツヘンは、彼を自分の新しい滞在地に一人きりにさせていた。彼はこの居場所をより正確に眺めることが出来、四つの壁と、用具を検分した後、窓の外を見た。青い壁紙の壁、四つの椅子、テーブル、衣装掛け、小さなソファ、小さな円筒形ストーブ、これらはそれ自体何ら尋常ならざるものはなかった。これに対し窓からの眺めはそう簡単に済まなかった。

このとき草の広場の真ん中の噴泉が跳ね、陽光の中、輝かしい真鍮の玉と陽気に戯れた。可愛らしい鉄の格子も見えた。これはこの大都市の散歩道と枢密顧問官の所有地とを距てるものであった。この道と馬車や騎乗者や徒歩の者達の混雑を下方に眺め、この止むことのない多彩な奔流の尽きるのをいたずらに待っているのは、ハンス・ウンヴィルシュにとって、若干奇妙なことであった。この道の向こう側には、馬や、馬車、散歩者のために森に似た公園と真っ直ぐな並木道があった。この並木道はのぞき箱を見る具合に覗くことが出来た。まず木々が緑になったら、何とすべてのものが集うことであろう。まことにこの緑への希望のみが、すでに現在の灰色の中で、若干の慰めを保証していた。

緑の木亭の下僕が、このことを、少尉ゲッツ殿の挨拶と共に、聖職候補生殿の旅行バッグを持って来た。それで彼は窓からの眺めを止めた。コーレナウの支配人宛に残りの所有物のことで、手紙を書く必要があった。ハンスがテーブルに置いたギリシア語の新訳聖書のポケット版から名刺が落ちた。この名刺には上品に鋼凹版で印刷されて、こう読めた。

テオフィル・シュタイン博士

ヘートヴィヒ通り、25。3階

ハンス・ウンヴィルシュは、更に夢想している時間はなかった。彼は、人物や状況のこの混乱の中、自分の内部で可能な限り、良く考えなければならなかった。モーゼス・フロイデンシュタインとゲッツ少尉、モーゼス・フロイデンシュタインとフランツィスカ・ゲッツ、フランツィスカと恵み深い奥方、恵み深い奥方とクレオーフェア、枢密顧問官、緑と黄金色のジャン、一「万人の万人に対する戦い」[ホップス]、そしてハンス・ウンヴィルシュ、神学の聖職候補生にして家庭教師がこれらの中にいた。これは、目を縛られ

たまま、かなり長いこと、ぐるぐる円形に回されて、包帯が解かれた後、全くしっかりと両足で立てないないと思ひ、自分の周囲について更にどう考えていいか分からない者のように、額に手を当てざるを得ない人間のような状態であった。

ハンス・ウンヴィルシュも、自分の本性の若干のバネを更にもっと鋭く張り詰めて、その本性の若干のネジを締めてやろうという反駁し難い欲求を感じた。彼は新訳聖書のあある章を読んで、その後、エピクテトスのポケット版のある頁を読んだ。その後では覚悟がより大きく備わって、堂々たるジャンが午餐に降りて来るように伝え、白い手袋で午餐に現れるのが作法にかなっていると述べても、そのジャンの目の下に[臆せず]現れることが出来た。

初めてハンスは、新しい生活の仲間と日常の食事を共にした。再び彼は、自分の以前の生活に対する多くの質問に答えなければならなかった。自分の以前の生活では、この食卓に現れるものの多くが、まだ未知のものであった。恵み深い奥方は、この時でも、旧姓フォン・リヒテンハーン風であった。枢密顧問官も、その実体のままであった。クレオーフェアは微笑して、両肩をすくめた。エメは笑みはなく、無愛想であった。フレンツヘンはテーブルの末席に、聖職候補生ハンス・ウンヴィルシュの横に座っていた。

第六章

さて「新たな家庭教師」は枢密顧問官ゲッツの家で、出来るだけ上手に適応した。少尉殿とは再び正式に顔を合わすことはなかった。それで彼は最初ただ全く自分一人が頼りであった。この家の統治は恵み深い奥方の両手の中にあることは、この全く気後れした者の目にもやがて明瞭にならざるを得なかった。枢密顧問官は自分の機関では一つの権威であったかもしれないが、いずれにせよ家の中では権威ではなかった。

強力な手で、アウレーリア・ゲッツ、旧姓フォン・リヒテンハーンは王笏を習俗面ばかりでなく振るって、めったに自らに指図をさせなかった。クレオーフェアの領域の境界にまで、夫人は束縛されずに支配した。しかしながらかの境界を越えての併合戦争[1679-81、ルイ十四世]はいつも成果なく終わった。かくて母親と娘の間では、政治において武装した平和と呼ぶ状態になっていた。

クレオーフェアは家庭教師にとって、一つの奇蹟に思われた。実際幾多の点で、彼女はそうであった。尋常でなく美しく、その上に尋常でなく才能豊かであった。彼女は上手にスケッチし、描いた。しかし最も好んで戯画を描いた。彼女はピアノを弾き、歌った。もっとも彼女の声は必ずしも声量豊かではなかった。彼女は幾つもの言語を話し、書いた。しかし最も好むのはフランス語であった。彼女は沢山読んだ。しかしまた多く読み飛ばした。しかし若いレディーならば、むしろ読み飛ばすべき箇所を決して読み飛ばさなかった。ママに対する彼女の最も恐ろしい武器の一つは、人で一杯の社交室で、お茶のテーブルの人々全体を空中に吹き飛ばしかねない本や作家を極めて勝手に引用し得たという点である。あるレディーの茶話会で、その上敬虔な茶話会であって、ここでボッカチオや『デカメロン』を取り上げることは、雪山のアルプスで射撃するように、ママに対して作用するに違いなかったのである。すると雪崩が引き起こされた。しかしこぼれたのは若干のお茶碗でしかなかった。この罪深い女性の頭部はそう簡単に揺るがなかった。この輝かしい目

は、すべての冷え冷えとする埃っぽい渦の中、元気に光っていた。そしてこの驚いた人々の中で、このような具合に秘密を「暴く」ことの出来る一人の令嬢は、他の多くの事柄も出来るであろうと、年配の女性皆に思われていた。

このような出来事の後、枢密顧問官夫人ゲッツがどのように怒ろうとも、またそれがいかに正しいことであろうとも、しかし夫人は正しいことにならなかった。クレオーフェアは有能な雄弁家であって、この偉大な技にフロイデンシュタイン同様に通じていた。千もの愛敬ある意地悪さで、彼女は母親のすべての自衛を砕き、枢密顧問官夫人ゲッツと令嬢クレオーフェア・ゲッツの間の関係を承認するであろうような天使は天に見られなかった。

クレオーフェア[名声の父祖]は自分のママをすでに名前のせいで憎んでいた。この名前を母親から洗礼のとき、貰ったのであった。ごく若い時から、彼女はこの名前に敵対していた。彼女の今の性格展開において、多くのこと、とても多くのことが、この名前とこれに対する敵対から生じていた。

枢密顧問官夫人はとても教会を大事にしていた。自分の私室にはとても可愛く彫刻された祈祷台を置いていて、ここで、クレオーフェアは幼年時代、度々、とても長く、跪かなければならなかった。それで今ではこの祈祷台と、これに関連する一切とに復讐することを、ほとんど自分の義務と考えていた。彼女はその全き意味で、この家のアンファン・テリブル[恐るべき子供]となって、このような状態の下では、彼女の父親の機械仕掛けにおけるネジが彼女の生意気な指先から守られるかどうかは、元来心許ないものであった。枢密顧問官は顧問官夫人よりも更に影響力を有しなかった。父親にとって母親よりも有利な違いは、単に父親の方は自分の権威を通すことに格別熱心ではなかった点にあった。彼の妻を見て、彼はこれを学習していた。

自分の弟のことをクレオーフェアは少しも案じていなかった。彼女は弟を「反吐の出る小さなヒキガエル」と形容していて、弟はほとんど彼女に近寄ることが許されなかった。彼女は家の中で、この病弱な、甘やかされた子供の専制を甘受しない唯一の女性であった。勿論それで母親との関係は改善しなかった。

しかしこの家に慈悲心から受け入れられた哀れな親戚の女性に対するこの娘の関係は全く独自のものであった。最初クレオーフェアは彼女に対し、大きな好意と関心を抱いて接した。彼女は一人の同盟の女性を得たと思っていた。彼女は、この従姉妹と一緒に策謀することを楽しみにしていた。そしてこのフレンツヘンが最初の出会いの時間の後、一匹の「子羊」と見なさざるを得なくなると、更に一層幻滅を感じた。そこで彼女はこの従姉妹を一人の奴隷女に仕立てようとし、これは少なくとも部分的には成功した。他人の悲痛が見て取れないすべての事柄に関し、静かなフレンツヘンは、美しく威勢の良いクレオーフェアに完全に従属した。しかし時折、家の体制を混乱させるような諍い事には、何であれ、フランツィスカ・ゲッツは自分の手や加勢を差し出さなかった。それで彼女は、打ち明けられる女性となったり、その反対となったりし、愛撫され、甘やかされるかと思うと、次の瞬間には冷たく、軽蔑的に、脇へ押しやられた。この家の天の雲が変わるたびに、この娘の気まぐれな晴雨計が上昇したり下降したりするたびに、少尉のフレンツヘンは片隅から呼び寄せられたり、片隅に押し戻されたりした。常に善良で、静かに、好意的に、少尉のフレンツヘンは留まっていた。ただ鋭い目のみが、彼女の表情のしばしば苦痛

に満ちた表情を捉えることが出来た。人々は、クレオーフェアが思い描いていたようには、最初の出会いの時に、フランツィスカ・ゲッツの正体を捉えることは出来なかった。

この姪は、伯母から、必ずしも願わしく思われるほど、全面的に上手く扱われなかった。枢密顧問官夫人は二人の義理の兄弟とは、決して最適に調子を合わせられなかった。フェーリクスもルドルフも彼女の物の見方には合わなかった。彼女は兩人を「卑俗な質」と見なした。特にフェーリクスは、「追放された、やくざな、略奪者、ジャコバン主義者」と見なされ、— そしてルドルフは、「軽薄な乞食、不良の放浪者」と見なされた。にもかかわらず、彼女は孤児の姪を喜んで家に受け入れた。寄る辺ない女性に救助の手を差し伸べるのは、キリスト教徒の義務なのであった。「情けない、落ちぶれた生き物」を、社交の上品な圏内に留め置くよう試みることは親族の義務なのであった。この町全体で、枢密顧問官ゲッツ夫人ほどに、自分の義務について詳しく知っている女性はいなかった。しかしこれがどのように偉大な倫理的長所であろうとも、フランツィスカはだからと言って、この義務の温度の中でより幸福に思われなかった。この温度は — 冷え冷えとして、とても冷え冷えとしたものであった。 —

コーレナウから帳簿係はトランクを手紙付きで送って来た。この手紙の中で、こう知らせていた。新しい家庭教師が赴任しました、しかし自分は、— この帳簿係は、— 彼に対し何の投機もしないし、この教師は、額面でも、正味でも、義理の妹を除いて誰にも気に入られていない商品であります、と。こうしたこと一切で、ハンス・ウンヴィルシュの心は落ち着いた。彼は自分のトランクの荷解きをした。そしてその中に隠されていたすべての物品と共に、以前のより自由な、より幸せな時間の思い出が明るみに出て来ると、このお蔭で、枢密顧問官ゲッツの家での自分の部屋はより一層快適なものになった。彼には生来欠如するものが多かった。しかし生来、「自ら適応する」技が付与されていた。これは大きな資産であった。— 勿論教師が可愛いエメを教育するのが許されたのは、ママの目の下でのみであった。それで教師は授業のとき、生徒よりも汗をかくことになった。枢密顧問官夫人は哀れなハンスに対し幾多のことを非難した。彼の教育方法、彼の見解は、しばしば最高度に非難すべきものに映じていた。彼が神経熱を発症しなかったのは、単に彼の神経が尋常でなくタフであったからに過ぎない。

クレオーフェアも時々レッスンのとき、居合わせたのが、これもレッスンをより快適にするものではなかった。彼女は自分の仕事越しに、あるいは肩越しに覗く流儀であって、これは殊にママが話しているとき、容易に当惑をもたらすものであった。彼女は余りに美しく、他の人々は静かに座っておれなくなったり、彼女自らが静かに座っていなかったりするのであった。彼女の毘の糸玉は、偶然転がるのではなく、故意に部屋の中であちこち転がった。糸がしばしば大いなる手管で聖職候補生の両足に巻き付いて、聖職候補生にとってこれらの多彩な糸から逃れ出すことは大変難しかった。そして彼が教えるべき若いグラックスの母親[古代ローマのコルネリア]は、額に皺を寄せて、脅すように、彼のことを不思議に思っていた。フランツィスカがその部屋にいるかどうか、しばしばとても疑わしく思われた。大抵彼女が居合わせることは、側からの意見や、恵み深い奥方の冷淡に述べられる委託でようやく分かった。ハンス・ウンヴィルシュが別の合図により彼女が居合わせるのに気付くには、かなりの時間を要した。この時期、教師にとって最大の慰めは、自分の教え子の食い意地であった。エメはとても頻繁に超過労働をした、つまり過剰に食べた。

そのことに時間が費やされ、若干満腹過ぎると感ずる日々には、その教師は比較的気楽に思われた。いや、エメはそのときには折々、かの若々しい天使の一人に思われた。これは顎の所で終わっていて、他のすべての手足は、耳の背後に固定された対の翼で代替されているのである。このような或る日、彼もテオフィル・シュタイン博士が自分の手の中に押し付けた名刺を使ってみる機会と時間に恵まれた。この名刺は、自分がゲッツ少尉と同宿人フランツィスカに対し、[親しい者達同士の敵対という]危うい立場にあることから、大いに迷惑をかけかねないものであった。しかしモーゼス・フロイデンシュタインは、ハンスのような人間にとってとても面倒な葛藤の解決のために多大な貢献をなすであろうという考えも、勿論彼にとってまた段々と浮かんで来た。

一人の少年から逃れた一匹の甲虫のように、しかし自分が縛られている糸を脚に帯びて、ハンスは外に飛び出た。自由と自立という喜ばしい感情、この感情を抱いて彼は公園を通り過ぎ、町の最初の通りを歩んで行ったが、しかしこの感情は混雑の中に入って行くと次第に薄れて来た。ヘートヴィヒ通りの上品で近代的な建物の前、シュタイン博士がその三階に住んでいる所に立ったとき、彼はまたしてもとても重苦しい気分となり、かなりの時間、上の窓の方を凝視していた。そして、モーゼスかあるいはテオフィルスがその窓から外を覗いていて、こう呼ばないか、大いに期待していたことであろう。「おや、馴染みの奴、何をぼかんと見ている。その通り。私はここに住んでいる、上に上がって来い、ようこそ」と。

しかし二階の老レディーの他、誰も窓から外を見ていずに、そしてこの女性はとても威嚇的であって、それで結局ハンスにとって、この家の中に入り、階段を上に乗る他に仕様がなかった。この老いた、憤然としたレディーが、そのレディーの家の一角の蠟引き布の敷物を踏んで彼が歩き、あるいはむしろ爪先で忍んで行ったとき、ドアから眺めていなかったのは、幸運な印に思われた。このレディーが、彼は何を探しているのか、警察を呼ぼうかしらと彼に尋ねたら、自分は何と答えていいか、彼には分からなかったことであろう。ハンスは危険な目に遭わずに、三階に達した。そして陶磁器のプレートに青春の友の名前の記されたドアがあった。

彼はノックしたが、しかし上体を極めて特徴的に反らして、後ろに跳ねた。モーゼスではなく、元気な若々しい女性の声が「お入り」と叫んだのである。彼は今一度名前の表札を見つめた。全く間違いない。 — テオフィル・シュタイン博士である。ドアが内部から開けられなかったら、いかに長く彼は自分の疑念をあれこれ考量したことであろうか、我々は答えられない。しかしドアは開けられた。そしてとても黒い髪を、そして若干上向きに反った鼻の可愛く若いレディーが、廊下と黒服の神学生を覗いた。

彼女はこの神学生のことをとても笑っていた。しかし、時間に猶予がなくて、その理由は述べなかった。この陽気な令嬢の背後にテオフィルの顔が現れた。確かに若干当惑した表情であって、彼はこの若いレディーの振る舞いを不適切と見なしているようであり、彼女を部屋の中へ引き入れようとした。しかし彼は誰がノックしたか、その男のことを見分けると、両肩をすくめ、微笑した。

「いや、君か、ハンス。中へ入れ。君ならノックせずに入っても良かったのだ」。

彼はそれから若いレディーの耳許に何かとても真面目に、ほとんど意地悪く囁いた。しかしこの女性は再び両肩をすくめて、 — ほとんどクレオーフェア・ゲッツのよ

うで、一そして博士の言葉に余り注意を払わず、笑い、可愛い、薔薇色の小さな帽子を椅子から取って、それを鏡の前で被り、そして神学の聖職候補生ヨハネス・ウンヴィルシュがこの上なく驚いたことに、候補生にその鏡を通じて、手の接吻を投げ寄こした。これはまたテオフィル・シュタイン博士の気にとても入らないことであった。綺麗な大きな布の端をこの令嬢は、聖職候補生ウンヴィルシュに渡して、自分は彼の特別な手伝いがなければ、この布を可愛い肩に掛けられないと活気のある合図で彼に暗示した。聖職候補生は大いに当惑し、ショールの幅広い襷に勿論とても混乱して、この令嬢の陽気さは頂点に達した。テオフィル博士は、自ら、頼りない神学生からこの肩掛けを奪って、この騎士の奉仕を自分で行って、この件に終止符を打った。そこでこの令嬢は彼の前でとても深く厳かにお辞儀をしたが、しかし同時に先の陽気さに陥っていた。

再び彼女は手に、聖職候補生ウンヴィルシュに対する接吻をした。珍しいことに、彼女は彼に対し、彼は彼女に紹介されていなかったが、ドアの前でこう叫んだ。

「良イ昼ヲ、牧師殿」。

小鳥のように可愛く、彼女は去った。そしてシュタイン博士は彼女の後を追って通路に出た。なおしばらくハンスは彼女の明るい笑い声を耳にしていた。その間彼は自分の青春の友の部屋で周りを眺めていた。

「すげえー」と彼は思わず知らず、最初見て、言った。この学生らしい叫び声は全くこの場に合っていた。モーゼス・フロイデンシュタインは極めて豊かに教養ある男の贅を尽くしていた。この部屋に見られる無秩序は単に見せかけであった。どの家具もそれに相応しい箇所にあつて、快適さに貢献していた。二度目見たとき、勿論善良なハンスは頭を振った。幾多のものが、より仔細に観察すると、必ずしも全面的には彼の気に入らなかった。幾つかの絵画や彫像は、それどころか、彼にとって全く同意できないものであった。一 テーブルの豊かな朝食の残り物も、ティツィアーノのヴィーナスほどに彼の品性観を大いに損なうものではなかった。このヴィーナスはその寢床で大きな顔をしていた。

「裏切り者、消エナサイ」と外の通路で明るい声がした。そして一瞬後にモーゼスが部屋に入って来て、今や青春の仲間に極めて懇ろに挨拶した。

「やっと来たな、馴染みのハンス」と彼は叫んだ、「君はあの晩、君がギリシアの神のように雲間から現れたとき、私に君の名刺を渡してくれなかった。そうでなければ、私がいずれにせよ、自ら君の許に出掛けたことだろう。だって、君がどうしてあのワイン酒場とこの町[ベルリン]に来たのか、とても知りたくてたまらないからな。腰掛けな、お馴染みさん。朝食はまだ済んでないのだろう」。

ハンスはどんな身体的滋養も辞退した。彼の心は余りに満腹であった。昔からの思い出のために彼は他のすべてを忘れ、今この時には、モーゼスは彼に対する昔からの影響力を丸ごと取り戻していた。それに友の方も、彼の考えをまとめる時間を少しも与えなかった。

「丁度君の邪魔をしたのであれば、とても申し訳ない」とハンスは始めた。

「邪魔したと、とんでもない。君は他の誰よりも私には歓迎だ」。

「おそらく、君の親戚の女性なんだろう？」

「南方の色合い、黒い巻き毛に黒い目のせいでそう言うのか。抜け目ない君の間違いだ。フランス生まれの娘だ。一 生粋のパリ娘、つまり一人の 一人の哀れな孤

児、卑小な装身具女工だ。 — 知ルカ。 — この娘はパリで私が色々面倒を見てやって、この娘がこちらに来たのは、この町のレディー達の許で運試ししようと言うわけだ。私のことを余りにひどく考えないでくれ、敬虔なる育ちの君」。

この友が窮迫した状況の一人の哀れな孤児娘に援助の手を差し伸べているからと言って、どうしてこの友のことをより悪し様に考えられよう。彼は熱心に自分の全面的同意を表明して、自分はこの青春の仲間について少しも他のことは予期していなかったと言いつつ添えた。モーゼス・フロイデンシュタインは、神学者の意見を言い当てたことにとっても喜んでいて、会話はより重要なことに向かった。

さて本来ハンスが大方の質問をすべきであって、モーゼス・フロイデンシュタインがこれに然るべく返事をしなければならなかったが、すぐにモーゼスはこの関係を逆転させた。モーゼスが尋ねて、ハンスが答えた。

「それでは、馴染みの少年、君はどうしてクレッペル通りを見棄てることになったのだ。何故、奴等、俗物どもは、君を新町の町牧師にしなかったのだ。君はここで何をしている。君はどこに住んでいる、どうして暮らしているのだ」。

ハンスは、自分は枢密顧問官ゲッツの家庭教師であると報告した。友は高く仰ぎ見た。

「あそこか。本当か。すごい。ハンス・ウンヴィルシュよ、君は羨ましい若造と分かっているのか。まこと、この人間は自分の幸運が少しも分かっていると私は確信している。あの美しいクレオーフェアと同じ屋根の下に暮らしているとは。ハンスよ、ハンス、多くの者が君の立場になれるのであれば、金に糸目を付けないことだろう」。

深い溜め息を吐いて、この家庭教師は、どこにその大いなる幸運があるのか、自分には分からないと述べた。すると友はますます陽気になった。

「バックス神にかけて。君はいつも得がたい奴だった。ハンス、君は今でもそうだ。君がまさにこの家で君の教育実験をしていること、このことに対し私がどれほど君に恩義を感じているか、君には分かるまい。私は君の許に訪問していいだろう？」

「いいとも、いいとも。 — 私はそれを楽しみにしている。我々が君の父親の奥の部屋とか、後には大学で過ごしたかつてのタベのことを覚えているかい。君はよく私の額に不安の汗をかかせたものだ。しかし素晴らしい昔の時であった」。

「そうだな」とモーゼスは嘆息した、「とても素晴らしい時代だ。しかし現在も若干の価値はある。ハンス、私はきっとすぐに君のドアをノックするつもりだ」。

さて、しかし突然この教師は自分の椅子を引き下げて、友人を見つめた。

「モーゼスよ、君はすでに枢密顧問官殿の家で、一人の知人の女性を有している。この知人関係は長いこと私の心に重くのしかかっている。何故君は私宛に一通の手紙もくれなかったのだ。これはとても、とても君の不当な点だ。だから私は君を擁護しようとしても、君に連絡を取れなかった。 — 今それが出来るのは幸いだ。何故ルドルフ少尉は君に対して怒っているのか。君はその姪フランツィスカ嬢に何をしたのだ。彼女は今その親戚の家に住んでいるのだが」。

「ゲッツ少尉だと、フランツィスカ・ゲッツ令嬢だと」とモーゼスは全く不思議そうに尋ねた。

「そうなのだ、そうなのだ。ヴィントハイムの郵便宿駅亭で彼らは君の名を呼んで

いた。そして少尉殿はとても立腹して君のことを話していた。当時私が君のアドレスを知っていたら、大いに尽力したことだろう。君が私に一度も便りをくれなかったのは、はなはだ残念なことだ」。

そこでハンスは、いかにかつてゲッツ少尉が、パリでフロイデンシュタイン博士のことを承知していると主張したか、話した。モーゼスは濃い色の眉毛を引き締めて、哀れなハンスにとっても陰気な視線を投げかけた。しかし彼は自分の顔の表情を制御して、彼の顔は滑らかなものとなった。そして数瞬の後、いつものように微笑を浮かべた。平静に彼はハンスに語り終えさせ、それから言った。

「それではそのことだな。ハンス、いいかい、君に対しては私は出来る限り、自分を弁護しなければならない。他の人ならば、そのような質問を私にする権利を認めないことだろう。私はとても若くして、この世間に投げ出された。私はいつも自分の力しか頼りに出来なかったから、私が結局この世界についてとても誇張された概念を抱くようになったとしても、不思議ではない。それで、私は他のすべての不幸な人間の子同様、当然苦い経験もしなければならなかった。私は哲学博士としてパリに行ったけれども、まだ学ぶべきことは沢山あった。しかし真の哲学は学校のベンチで学ぶものではない。これについて自分の分を理解しようと思う者は、多分隅石に腰を下ろして、口をぼかんと開けて、英知が馬車や馬に乗って、あるいは徒歩で通り過ぎるまで、待つことだろう。それで私はパリに、余所と同じように腰掛けていた。私は、色々な人々と知り合いになった。多くの師に出会い、言ったように苦い経験もした。その苦い経験のかなりの部分は、君が先に話したその若いレディーの父親の場合だ。その男は酒飲みで、
— 一部ならず者の面がある。すべての活動的な若い精神にとっては危険なものになるに違いない性格の者であった。彼は多くのことを体験していて、酔っ払っていないときは、そのことを上手に話してくれた。彼はフェンシングのレッスンで生計を立てていて、大通りのカフェーや市門の酒場で若い人々を自分の許に惹き付ける独自の才を持っていた。彼はフェンシングのレッスンを自分の住まいでしたから、誰もが父親とも娘とも接触することになった。我らの中で高貴な性質の者はその哀れな苦難の娘を気の毒に思っていた。役立たずどもはその流儀で彼女に振る舞っていた。この名誉の騎士が、
— そう人々はこの男を呼んでいたが、
— 素面のときには、自分の六階と自分の子供の名誉を憤然と見張っていた。しかし彼はめったに素面ではなく、哀れなフランツィスカはそんなとき完全に自分一人が頼りであった。それで私は彼女が気の毒に思われ、彼女に接近した。彼女も知らないまま、私は何度か彼女を飢餓から守った。私がいなかったら、彼女の父親は、現実の時よりもっと早く悪魔に拉致されていたことだろう。この老いた我利我利亡者は譫妄状態で亡くなった。その子供は全く見棄てられていた。それで私がこの不幸な娘の面倒を見たのだ、ドイツからその伯父が連れ戻しに来るまでな。私はユダヤ人であったし、ハンス・ウンヴィルシュよ、私はその報酬を受け取ったのだ。私は境界を踏み越えた、と娘に言われた。私が弁護すると、私は侮辱され、軽蔑された。世間の報酬についての古い話だ。
— ちなみにその若いレディーに対しては私はこれっぽっちも非難できない。彼女はいつも天使であったし、今でもそうであろうと願っている。これで君の望みに十分に応えたであろう。私はこれ以上もはや古い話しを蒸し返したくない。
— 私はフランツィスカ・ゲッツ令嬢の目に臆することなく訪ねて行けるぞ」。

モーゼスは黙って、また陰気に友人を見つめた。ハンスは落ち着かず、椅子の上であちこち揺れた。今や彼は飛び上がって、部屋の中を歩き回った。友人の方を信ずべきか、それとも少尉の方か。彼は途方に暮れた。ハンスは、この巡回の間に自分がどのような具合にモーゼスから観察されているか、知っていたら、少尉の言を信じたことであろう。しかし今のところ、深い溜め息と共に、この頁をめくるしかなかった。

「ハンス、まあ座って」とようやく青春の友が叫んだ、「いいかい、この件は、君より重く、私の心を悩ませている。この件に耐えるのは辛い。我らの再会の最初の時間をこのような具合に苦いものにするのは、君の正しいやり方とは言えないぞ」。

「いや、モーゼスよ、モーゼス」。

「私をモーゼスと呼ばないでくれ。私はテオフィルだ、 — テオフィル・シュタイン。 — 私は父親の信仰を断念して、キリスト教徒になった。カトリックの信者だ」。

ハンス・ウンヴィルシュは、今や本当に座った。それも間近な安楽椅子であった。今までこれほどより根本的に一つの点から別の点に転換したことはなかった。自分がどもりながらも、こう言えるほどきちんと理解するまで、数分要した。

「君がか、君が、モーゼス・フロイデンシュタイン？君がカトリック教徒だと？君がキリスト教徒だと？」

クレッペル通りの古物商の俸をこれからいつも我々がこう呼ぶことが許されるテオフィルは頷いて、自分の安楽椅子で体を揺すっていた。

「私はカトリックのキリスト教徒だ。私こと、テオフィル・シュタイン、哲学博士は、近々、ことによると当地の大学のSEM語の助教授となるかもしれない。ハンス・ウンヴィルシュよ、私の人生は、君の人生よりも荒々しいものであった。それで折々の没落も、君よりも早いものであった。しかし私はこれらの渦巻きや回転から、つまり冥府から得がたい英知を得て、上昇して来たのだ」。

「それで君は本当に、本当に信仰しているのか。カトリック教会に宗旨替えしたのか」。

「唯一浄福にする教会[カトリック]にな」とテオフィルは言った、「私こと、ザームエルの息子、ユダヤ人古物商の息子は、確かな自分の五感と共に、完全な精神的自覚の許、そのことを行った。異教徒のウルリヒ・フォン・フッテン殿なら、正気と共に敢行したと言うであろうよにな」。

「いや、モーゼスよ、モーゼス」。

「テオフィルだよ、最愛の友。テオフィル・シュタインだ。古物商店からのあのモーゼス、クレッペル通りからのかのモーゼスは死んで、埋葬され、二度と復活しないことだろう」。

「君は、懐疑家なのに。疑念派なのに。私には分からない」とハンスは半ば絶望して叫んだ。

「お馴染みさんよ」とテオフィルは言った、「これはそう簡単には理解されない。君とて私の生涯については知ることが余りに少なく、即座に私と私の行路について判決を下せるものではない。しかし多分、君も明瞭に理解するであろう機会が出て来ることだろう。その時には、君の同意を当てにしている。今はこの点については我々も黙っていることにしよう。私はどうにこのことは決着済みだ」。

ハンス・ウンヴィルシュは言葉もなく、打ちのめされたようにそこに座っていた。彼が耳にしたこと、自分が聞かされたときのその流儀は全く彼の気に入らなかった。目眩を感じながら、彼は自分の足許の前に広がっている他人の人生の底知れぬ深みを覗き見た。彼は自分の不快さをどうしても抑えることが出来なかった。

再びシュタイン博士は会話を枢密顧問官ゲッツの家に向けた。彼はその家に関するすべてのことに並々ならぬ関心を示した。クレオーフェアについて、彼は次第に、ハンスが彼女について、その本性、実体について承知しているすべてを聞き知った。

「私はその娘とは、こちらの社交の場で時に出会ったことがある」とテオフィルは言った、「聖書に出てくる名前の[『イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパ<Klopa>の妻マリア』、ヨハネ 19, 25]、優しい嘲笑家の娘だが、いつでも、もっと親しく知り合いになりたいと特に私の気を引く具合に噂されている。ハンスよ、私をこの家で紹介しなくちゃいかんぞ」。

「私がか」と枢密顧問官夫人の許の家庭教師はこの上なく情けないお手上げの表現で言ったので、テオフィルは甲高く笑い声を上げた。

「哀れな奴だな、忘れていたよ。では私は君の許に訪問することにして、一
成り行きニ任セヨウ。秘かに花咲く堇に関しては、一　もう一人の若い奴だが、
一」。

「フランツィスカ嬢だろう」とハンスは叫んだ、「いや、モー、一　テオフィル
よ、頼むよ、そんな調子で彼女のことを言わないでくれ」。

「分かった、分かった、済まない。親愛なる少年、君は私の流儀を承知だろう。かの哀れな子は他の誰よりも、私から敬意を取り立てる権利を有している。何だと、君はもう出て行く気か」。

「私の時間はもうない。それに最も大事なことについて、君はもはや私と話す気はないだろう。それでは差し当たり達者でな。いや、モーゼス、一　テオフィルよ、
一　君は本当に変わってしまった」。

「少年は成人男性となるのだ、ハンス。君は相変わらず、いわば、君の時代の外部にいます。静かに座っていて、ただ遠方での大いなるざわめき、轟きを耳にしている。それに対し、私は嵐の最中で仕事をしているのだ。両足で立つことは、しばしば困難なことだ。では、差し当たり達者でな。直に再会しよう。私に好意を示す気があるならば、今のところ、家で私のことを話さないでくれ。さらば、幼馴染みよ」。

ハンスは去った。そしていずれにせよこの日は劣等な家庭教師となったことであろう。しかし幸い彼の技芸は要求されなかった。エメは消化に手間取っていて、相変わらず些細な精神的緊張に耐えられなかった。教師は自分の部屋に上がって、自分の背後でドアを閉めて、自分の友、モーゼス・フロイデンシュタインの人生行路について思案した。この友は今やテオフィル・シュタインと名乗って、ユダヤ教からカトリック教会に転向していたのである。彼の不安を掻き立てる想念の中に、鋭くクレオーフェアの声とピアノの音色が混じり合った。この若いレディーは、優れた技巧で、イタリア語のアリアを歌っていた。しかしこの歌声は、自分の青春の友の宗旨替え同様に家庭教師の気に入らなかった。

第七章

次の期間、万事、以前のままであった。家庭教師は自分の義務を出来るだけ上手に行った。恵み深い奥方は、彼のことをとても秘匿した奸計の性格であるとますます多く指摘した。クレオーフェアはフランツィスカに新しい名前を見つけて、彼女を眠ル水と呼び、ハンスに関しては戯画を描いた。それらの幾つかは彼の所有物となって、彼はそれらをいつも丁寧に自分の生涯のその他の記念帳やスケッチの中に保存した。フランツィスカの床歩きは以前同様ほとんど聞こえなかった。彼女の青白い、悩み多い顔は須臾の微笑で明るくなることはめったにしかなかった。少尉からは挨拶も知らせもなく、彼は消え失せたままであった。枢密顧問官については、枢密顧問官の家で話題になることが最も少なかった。ハンス・ウンヴィルシュは彼のことを日々更に悼んで、この夫が哀れな家庭教師を見下すときの荘重な身振りも羨ましいものではなかった。従者のジャンは、その主人よりもより自由な男であったが、この従者はこの家庭的な専制の絆からは、単にとっても嘆かわしい、阿呆な官僚的自惚れの中にもみ逃避できるに過ぎなかった。

この時期、クレッペル通り出身の神学の聖職候補生ヨハネス・ウンヴィルシュの魂の中は奇妙なものに見えていた。彼は自分がとても憧れていた営みの最中に立っていた。彼は下りて来ていた。すると大きな轟音が解き放たれた。そして好ましい声というよりも、もっと甲高くて、もっと意地悪な声を自分の周りに聞き取っていた。

彼は以前よりも満たされていない気がした。そして自分はこの世界に対する理解をまだ得ていないと自らに言わざるを得なかった。彼は自らに迫って来るすべての矛盾を解かなければならず、何事であれ、我が前から消えろ[Apage]で済ますことの出来ないかの不幸にして幸福な性質の者達の一人であった。彼はまさに、わずかな人間しか理解できず、容易に満足せず、ただ死によってのみ完全に満足させられるかの飢餓、つまり万物の尺度、均衡への飢餓を有していた。

かくて彼は自分の高い小部屋に座っていて、嘆息と共に、自らの遠くに去った静かな青春を考えていて、現在の不協和音に耳を傾けていた。嘆息と共に、彼は、これから、自分が昔父の家から見ていた霧の最中、いかに歩むことか考えていた。嘆息と共に、人生において、前進へのすべての歩みは、自分に単に新たな幻滅をもたらしたことで、自分は年月を重ねてもより一層幸せにはならなかったということを考えていた。そして彼の足許に、実存の色鮮やかな奔流が波打った。何時間も彼は、徒歩や車で通り過ぎて行ったり、あるいはよるめきながら、這って行ったりする未知の人々を見下ろしていた。彼はまた幾多の声高な笑い声を聞き、幾多の喜ばしい顔を見た。しかし群衆の全体的印象は悲しいものであった。個別の人影は、彼にとって次第により馴染みのものとなった。彼はその滑り過ぎて行くその姿から彼らの運命を読み取ろうと努めた。これはアブデラの処世訓[アブデラのデモクリトス(紀元前460頃-370頃)、笑う人、平静を求めた]よりもエペソスの男[ヘラクレイトス(紀元前六世紀末)、泣く哲学者]の哲学により引かれるハンス・ウンヴィルシュのような性格の者にとって、危険な類いの空想であった。この空想が彼を単に悲しませるだけで、辛辣なもの、怨念を抱かせなかったのはほとんど幸運と言えた。一般的なものから浮き上がって来る個別の点は、この一般的なものをはなはだ圧迫して、彼がこの一般的なものを見失うほどではなくて、それでこの一般的なものは、思考する人間をどのような状況下でも鬱ぎ込ませず、その魂を苦悶を通じてさえも拡大した。

そしてまた巡って来る春の徴候が次第に増加した。天はより青くなり、噴水の周りの草はより緑色になった。公園の梢の先は喜ばしい輝きが宿り、小鳥はそのためにより陽気に、より声高になった。クレオーフェアの冬の退屈さと素っ気なさについての嘆きの歌は、春の観察へと転換して、これらは複数の観点において、抒情的詩集の発露とは異なるもので、この令嬢がそのピアノの許で巧みに歌い上げる最初の董についての音楽的夢想とは必ずしも全面的に一致するとは限らなかった。彼女は好んで非難した。というのは洒落て非難するのは、洒落て称賛するよりもはるかに容易だからである。その他のどんな困窮に直面しても、ハンスはこの美しい娘が彼に仕掛けるどのような魔術も防ぐことが出来た。

フランツィスカは以前よりももっと物静かであった。

テオフィル・シュタイン博士が枢密顧問官ゲッツの家庭教師に最初の訪問をした。

ハンスは毎日彼を予期していた。しかし彼は四月の初めによく来た。そしてジャン、従者は、教師の部屋に同伴して彼を案内する前に、彼の名刺をまず恵み深い奥方の部屋に持参した。

ハンスは青春の仲間をはなはだ複雑な気持ちで受け入れた。しかしこの友の現存は直に昔からの影響力を発揮して、クレッペル通りのかのモーゼスのイメージに集積していた雲を四散させた。

シュタイン博士は、とても人を魅了し、愛敬があった。彼はもはや哀れなハンスの頼りなさや癖について嘲笑せず、それらを今や一種好意的なユーモアで扱った。このユーモアはハンスがこれまで彼の許で見たことのないもので、とても快適なものであった。この上品な博士は、新町の故郷と知人達について問い合わせた。そして博士が、この友の母親とその母親の生涯と死について話すときの作法、流儀は、これほど、親密さや同情を示すものはないものであった。博士は青春の仲間の小さな文庫の古い書籍を見つけて、自分がその名前とクリソストムス[345-407]の言葉を、悪の起源についての神学的論文に置いた日のことを思い出していた。「私ハ、居ヲ北方ニ構エ、至高ノ者ニ近クナリタイ」。しかし彼は自分がそのことで話しを自分のキリスト教徒への改宗に向けたことに気付くと、すぐに打ち切って、色々な質問をし始めた。最初は単にこの友の生活に一般的に関連する質問であったが、しかしそれから次第に枢密顧問官ゲッツの家庭教師としての生活にすます明確に固く関連するものになった。シュタイン博士は質問の間、とても注意深く、同時にまた気を散らしていた。どの答えも、彼は反復させる必要がなかったが、しかし彼は家の中のすべての物音、すべての足音やすべてのドアの開閉に耳を傾けていた。クレオーフェアが歌い始めると、彼は素早く立ち上がったが、しかし同様に素早くまた腰を下ろして、言った。

「これは、名誉の騎士、ゲッツ大尉の娘ではないか」。

「いや、クレオーフェアの声だ」。

「そうか」。

彼は数瞬、傾聴していた。それから質問を新たに始めた。そしてハンスは何度か不思議に思った。彼は家の建築様式について尋ね、二階の部屋の位置と設備について、壁の絵について、台所の給仕について尋ねた。枢密顧問官夫人の嗜好は彼にとって無関心ではなく、夫人の嫌悪については、更に無関心ではなかった。エメについても彼は同様に詳しい情報を求め、同様にこの家の主人についても尋ねた。ようやく彼は終わって、その内面

で自分のメモ帳を閉じて、一つの品のある結論を出して、それで哀れなハンスは、彼がこうした多くの質問をしたのは、単に青春の仲間の運命と現在の生活に対する関心から発したのであると固く確信した。

「親愛なるハンス」と彼は結論付けた、「君は多様ではないが、深く体験したな。君に対しては神々によってもっと幸運な道が予知されていたかもしれない。君は岸辺に留まっていた。波は君に対し、恵み深く戯れた。私は海の中に泳ぎ出た。自分を有能な泳ぎ手と思っていたからな。しかし幾つかの固い岩の角と遭遇せざるを得なかった。私が時折すぐには君の人生観には馴染まないようなことを言っても、私のことは勘弁して欲しいものだ」。

誰がこの者に抵抗出来よう。親密に感動して、ハンスは友人の両手を握って、目に涙を浮かべ、同伴して階段を下りて行き、オリンポスのジャンの視線で後へ退散させられなかったら、更に同伴して行ったことであろう。

再びハンス・ウンヴィルシュはテオフィル博士の魂の状態に更に深追いをすることをしなかった。しかし彼は幸せな時間を得ていた。その時間の余韻はやはり何ほどか価値があった。 —

昼食の食卓で、恵み深い奥方はその大きな目を家庭教師に向けた。

「ウンヴィルシュさん、今日貴方は訪問客があったのですか」。

「青春の友です、 — シュタイン博士です、 —」とハンスはお辞儀をしながら言った。

「承知しています」とレディーは語った。クレオーフェアはその大きな目をママよりもほとんど更に一層探るように、家庭教師に向けた。

「この町ではこのところこの殿方について大いに噂しています」と枢密顧問官夫人は続けた。「彼はとても才能があるそうで、大きな旅をしてきたと言われています。ウンヴィルシュさん、貴方はどうして知り合ったのですか」。

聖職候補生の心臓は、よく言われるように、舌に乗って、つまり思いがすぐ口に出た。初めて彼はこの家で、中断されることなく、語る事が許された。彼は自分がモーゼス・フロイデンシュタインについて語る術を心得ていることすべてを語った。彼はその善良な心を称え、その鋭い分別と、その博識を称えた。彼はその擁護に熱中して、残念ながら、少尉のフレンツヘンが、今日この家、つまり自分が庇護を求めてやって来たこの家に、誰が訪ねて来たか知ったとき、突然いかに青ざめたか、気付かなかった。最大の関心を抱いて、この家の主婦は、この著名な、いや有名なテオフィル・シュタイン博士とは誰であるか、聞いていた。 — クレオーフェアは無関心であった、あるいはそのように見えた。 — 枢密顧問官は、いつものようにただ肉体的に居合わせていた。

威勢の良いフランス人孤児の娘のことをハンスは何も語らなかった。シュタイン博士がなおも別れるとき、謙虚に冗談めかして、彼女について言及しないよう頼んでいたからである。

翌日フランツィスカは食卓に現れず、彼女は不調であった。丸一週間、彼女はベッドにいなければならず、ハンスは初めて、彼女の不在によって、彼を取り巻く一同の間に、どのような隙間が生ずるか、気付く機会を得た。彼女は食卓で彼の横に腰掛けていた。彼は彼女が近くにいる、心地良く、安全だと感じていた。クレオーフェアは彼を魅了すると

同時に彼を突き放していた。他の者達は彼に対して、冷たく、余所余所しく、敵対的に向き合っていた。彼をフレンツヘンと結び付けている感情は半ば無意識のものであった。さてフレンツヘンが不在となると、この感情が明瞭に意識に上がって来た。

この若い娘の状態については、単に定かならぬ情報が聖職候補生にもたらされた。何も言うべきことはない、 — とそう言われた、 — 軽い風邪である、取るに足りぬ神経発作で、やがてこの件は片付くであろう、と。

少尉ゲッツがその姪について聖職候補生に知らせたすべてをハンスは記憶に呼び寄せた。 — 突然彼は、モーゼス・フロイデンシュタインについての自分の卓話がこの哀れな娘の病気のせいかもしれないと思い付いた。そしてそう考えると、彼のすべての血が心臓に集中して、彼はほとんど呼吸ができなくなった。彼は自分の途方に暮れた寄る辺なさ、自分の不穩、不安が頂点に達したであろうと固く信じているとき、しかしながら同じ朝、快方を教えられた。

ジャンが彼の部屋に頭を差し入れて、見下すように、恵み深い奥方は、家庭教師殿と面会を願っています、至急、夫人の部屋へ下って行かれるよう、言付かっていますと伝えた。

さてハンスはこの折、余りに興奮していて、憂慮しており、この知らせを聞いても通例の気後れを感じなかった。彼は素早く身繕いを済ませて、階段を下りて行った。彼はドアで聞き耳を立てなかったが、しかし恵み深い奥方は一人つきりではないと聞き取った。中ではとても活発に話されていた。クレオーフェアが笑った。余所の殿方達が居合わせているのに違いない。ハンスはノックした。しかし彼のノックは聞き逃された。それで彼は敢えて、中に踏み込み、しかし死人ノ如ク、敷居に彼は立ち止まった。恵み深い奥方の側、クレオーフェアの安楽椅子に向かい合って、彼の友、テオフィルス・シュタイン、別名モーゼス・フロイデンシュタインが座っていて、小さなエメを膝の上で揺らしながら、極めて活発な会話を行っていた。黒い燕尾服の別の中年の紳士、長い、灰色の、後頭部へ梳った髪の持ち主が、その側に座っていて、微笑し、滑らかにそり上げた快適な顎を杖の黄金の握りに当て、それで撫でていた。

人々は神学の聖職候補生ウンヴィルシュについて話していた。これは人々が彼の方を振り向いて、彼を見つめるその流儀から分かった。

「いや、その彼が来た、 — 飢餓牧師だ」と博士は叫んで、かくて初めて我らのハンスに正式に肩書きを与えた。つまり我らがこの本の表題としたものである。「彼をご覧ください。恵み深い奥方、彼は自分が不可解なものに直面すると、いつもこのような具合になります。ヨハネス、目を覚ませ、生身の私だ」。

恵み深い奥方でさえ、わざわざ微笑してくださり、それから額に皺を寄せて、ドアを作法に反したまま余りに広く開け放たないよう自分の家庭教師に合図した。ハンスは間近に寄って、腰を下ろすことが許された。

キリストの髪分け目[額の真ん中からのオールバック]、白いネクタイ、杖の黄金の握りの紳士は、美学の教授、ブリューテミュラー博士と分かった。そして聖職候補生殿が、この時まで、彼のこと、彼の影響力について聞いたことがないと知ると、教授は驚いていた。それ故極めて正当に、教授はハンスの現存に少しも注意を払わず、彼の明かりを、つまり宝角のランタンという珍しい明かりを他の者達に向けた。

「シュタイン博士殿は、私どもに貴方の生涯から幾つかの事柄を話されました。とても面白いことです、ウンヴィルシュさん」と恵み深い奥方は言った、「貴方が私どもには単に貴方の以前の生活の外面の殻のみを話されたのは、良くありませんよ」。

さて、ハンス・ウンヴィルシュはこの言葉に対し、大いに反論出来たことであろう。しかし彼がこの一同の中で、このような非難に対し弁解すれば、自分の母親の墓を穢してしまうような感情に襲われた。

「シュタイン博士に対し、私について話したそのご好意すべてに感謝します。私の生涯のような人生について、何か気の利いたことを言うにはかなりの精神が必要になります」。

「牧歌については、まさに余り洒落は必要ないのだ」とテオフィルは答えた、「君の生涯は一つの牧歌だ、ヨハネス。私がすでに述べたことを繰り返すと、君はこの世で幸福な者達の一人だ」。

極めて不快な気持ちでヨハネスはこの弁者を見つめた。クレオーフェアは両肩をすくめ、美学の教授は安楽椅子を動かして、自分はこの家庭教師に背中を向けるようにして、恵み深い奥方の方を向いて、会話を個別の事から一般的なものにした。

彼は美しく生きる技について話し、このことについてとても見事に話したが、しかし全く学校風で、この男が話したいと思っているその意味は、極めて特殊な術語からのみようやく明らかになるもので、聖職候補生はしばしば把握に難渋した。ハンスは会話を理解するのに、惨めに躓き、かくて完全に聞き手の役に留まっていた。

ブリューテミュラー博士教授が、その袋を開け放った後、家のレディーが自分の袋を開けた。

彼女は一種の溜め息の出る情熱を抱いて、神の中でのキリスト教的美学的平静に至る道についての自分の見解を披露した。この神は、病的な流行の夢中な陶醉によって、そのロマン主義的な多彩な教会窓ガラスを通じて、「認識」されるもので、この神は、明るく、煌びやかで、理性的な太陽が天に昇っていて、明確に、煌びやかに、分別顔で世のすべての事物を人間にその真実の、純粹な、忠実な色合いと形姿で示すときには、見えないし、見たいとも思わないのである。

枢密顧問官夫人は、神の聖人達の行路に対し、その天上を眺める乙女達や、殉教者達、贈与者達の古いイタリアの絵画に対しても夢中になっていた。彼女は、テンペラや油絵具でかれらの絵を描いた浄福の画家達に対し、熱中陶醉していた。ブリューテミュラー教授は、彼女の恍惚に賛同し、これらの画家や贈与者がしばしば一体何という罰当たりの救い難いならず者や極道であったか、口に出さなかった。彼はまさに他の人々と同様に行っていた。つまり彼は自分が使用できない歴史の一面は、暗いままに放置していた。彼は実際、自分がメダル的一面のみを見せることで正教授としての給与を得ていたのである。それで他の学者が、別の教職で、この歴史的沼に打ちかかる時、この学者は、別の聴衆を前に、別の講義室で行っているわけである。この両面を合わせることは、誰もがする事柄ではない。

我々は確定的なことが言えない場合、テオフィル・シュタイン博士が、自分の青春の友に、すでにこの友はこの町の美術館を訪問したか、そして恵み深い奥方が話題にしている絵を見たか、尋ねたのは、それは背信行為ではなかったと人間性の名誉のためにそう

仮定したい。 — ハンス・ウンヴィルシュははすでに美術館を訪問していた。彼はその絵を見ていた。残念ながら、彼は自分に課された質問に答えて、自分がその絵について何を考え、どう思ったか話した。未熟なこの若い男の判断を真似て述べることは、我々としては勘弁願うことにしよう。我々が単に言えることは、テオフィル博士が自分の質問を、意地悪な、前もって仕組んだ意図により発したのであれば、その目的は完全に達成されたということである。恵み深い奥方の額はとても暗くなった。蒸し暑い雰囲気は突然、その部屋に充満したように見えた。雷が鳴らなかつたのは、このような轟音は、二人の余所の紳士が居合わせる立派な社交の場では、立派な調子とは言えないからという理由に過ぎなかつた。罪人に対して、それ故、雷は落とされなかつた。ただ若干遅れて轟いただけである。

さてシュタイン博士は前ラファエル派[ラファエル以前の十五世紀のイタリアの画家を手本にする一八四八年設立のイギリスの画家達の協会]についての立派な論考をこのささやかなサークルに振る舞って、自分の多読、芸術通、世知を豪華絢爛に披露した。機鋒豊かな視線を彼は人生のすべての面に投げかけた。自分が何かを得たいと願っている、そこに居合わせる人々の凡庸な考え、それどころか馬鹿げた考えを磨き上げて、それからその考えを人々に返すという偉大な技を、彼は申し分なく会得していた。すべての有り得る獣の捕獲の技を彼は解していて、最初枢密顧問官夫人、旧姓フォン・リヒテンハーンを捕らえた。しかし彼はその一つの捕獲を陸に引き上げる間、黄金のその鱗や、まだ自由に跳ねている深紅の鱗を目から離さなかつた。

その時まで、皆の中で、 — 家庭教師も例外でなく、 — 最も沈黙してそこに座っていたクレオーフェア・ゲッツが、今や動いて、ハンス・ウンヴィルシュがとても驚いたことに、こう言った。

「ある観点で、私は聖職候補生殿に賛同しなければなりません。 — 私も先ほど話題になったかの絵画は言いようもなく、汚らわしく、中国風です。ギリシアの、陽気な、裸の神々の世界は、 —」。

「まあ、クレオーフェア」と恵み深い奥方は呻いた。

「仕様がなんでしょう、最愛のママ。私は、私の縁者や友人を愛します。私は、彼らを好んで人々の前で称え、その美しさを誇りに思い、その陽気さを楽しみます。崇拜している最中の少年が見えますが、これは自分の球をまた掴みたいのだと私は思っています。その少年は私の弟、 — エメのようなものです。それで私も弟を膝に抱きたいと思いません、博士殿」。

博士殿は優しいエメを穏やかに自分の膝から滑り降りるようにさせて、少しばかり当惑して微笑した。しかしクレオーフェアは笑いながら続けた。

「恵み深いママ、そんなに怒って見ないでよ。私は自分の縁者とはどんなに陰気な雨の日でも仲良く暮らします。先の晩には、縁者の一群れが来ましたよ。メロス[ミロ]のヴィーナス、ベルヴェデーレのアポロ、アッティカのパルテノン神殿東破風の彫像、棘を引き抜く彫像、アンティノウス[皇帝ハドリアヌスの寵児]。この人々は私に呼びかけました。クレオーフェア、クレオーフェアと。そしてとてもこの名前に興じているように見えました。彼らは心から笑って、声高な不作法な笑い声で、楽しんでいたわ。私どもが話題にしたこと、これは話すわけに行きません。それに私のママは、そんなことをしたら、私の人

形に対する一匹のフクロウとなって、小型火刑を仕掛けることでしょうか。彼らは翼のある足裏で去って行きました。そして私のママによろしくと私に頼みました。それでここで話しているのです」。

若いレディーは自分の母親に礼をした。母親は痙攣発作を起こしそうであった。聖職候補生は、自分の内面ではなはだ縮み上がった。熱心にブリューテミュラー教授は、自分の顎を磨いていた。テオフィル・シュタイン博士の美しい、知的な顔は、この瞬間、クレオーフェアが自分の縁者や友人に数え上げたかの彫像の一つに属しているように見えた。その中では何の筋肉も動かず、美しい知的な顔のままであった。黄白色の大理石から出来ているかのように、どちらも鼻屑せずに、クレオーフェアからも母親からも平静に――眺められていた。

「聖職候補生殿、この少年を連れ出してください」と不安げな休止の後、恵み深い奥方は喘いで言った。「この少年を少しばかり自由な空気の中に、庭園に出してください、――この空気は窒息しそうです」。

更に小声で彼女は喘いだ、「嫌だわ、嫌だわ」。しかし彼女が更に言ったこと、クレオーフェアがそれに答えたこと、ブリューテミュラー教授が囁いたこと、シュタイン博士が述べたことは、この愛らしい少年エメが、自分の教師によって連れ出されたとき、発した悲鳴で聞こえなかった。

更に五分経ってから、両紳士は別れた。――それから枢密顧問官夫人も金切り声を上げた。それからクレオーフェアは物音を立てて、廊下を急いで、自分の部屋のドアを素早く閉めて、哀れなフランツィスカはびっくりして枕から飛び上がった。それからクレオーフェアは自分のピアノに身を投げたに違いなく、旋風の女神のように、トリルやパッセージを鍵盤の上下に走らせた。彼女がまた自分の「友人や縁者」の訪問を得て、この者達から「古典的休息」の利点や長所について注意して貰うことがとても必要であるように見えた。

公園の外れでハンスは、嫌がるエメを手で案内しながら、ブリューテミュラー教授と博士に出会った。

「ハンス、今回は無事我々は抜け出せたよ」と博士は笑いながら叫んだ。「風変りな家だ。しかしレディー達は魅惑的で、――それぞれがそれぞれの流儀でよろしい。友よ、とても可愛い子供だ。君にととてもなついているように見える。その点、羨ましい」。

「君と話すべきことがある、――沢山、とても沢山」とハンスは言った。いつもの親しさを込めていなかった。

「いつでも御意に従うよ、昔馴染みよ」と博士は微笑した。「いつ訪ねてくれる気かな。...ちなみに多分向こうの家でもまだ時々会えることだろう」。

「君の許に伺うつもりだ」とハンスは言った。

「それでは君と会うのを楽しみに待つとしよう」とテオフィルは別れながら言った。更に五十歩進んでから、彼は齒の間で呟いた。

「問題はたた、まず家にいる私に君が出会うかだな、愛しいハンス」。

教授の腕を取りながら、博士は笑って叫んだ。

「同僚殿、行きましょう、食事に。今日ご案内のお世話になり、はなはだ感謝申し上げます。あの娘は素晴らしい」。

「それに立派なパーティーだ」とブリューテミュラー教授は言って、マデイラ・ワインを一杯想像して味わった。

ハンスは自分のエメの手を痙攣しながら握っていて、二人の紳士を見送った。それが彼の出来るすべてであった。その際彼が若干愚鈍に見えたことは、否定できないことであった。

第八章

テオフィル・シュタイン博士が想像していたようになった。ハンスは何度か、彼のドアをノックした。しかし返事は得られないか、あるいは博士殿は在宅ではないという返事であった。その都度、彼は自分の不快な鳥籠に、一層不機嫌になり、一層打ちのめされて帰った。彼は今やこの牢獄の中で誰に対しても気まづい関係にあった。フランツィスカ・ゲッツに対してさえもそうであった。

少尉のフレンツヘンは以前よりもなお青ざめて、自分の小部屋から現れた。家の他の住人に対する彼女の振る舞いに何の変化もなかったとしても、ハンスは一層深く、一層痛々しく、彼女の内実がもはや彼に対して以前のままではないと感じていた。それに彼はその理由も正確に弁えていて、それでいてモーゼス・フロイデンシュタインが彼女の父親について語ったことは本当かどうか、彼女に尋ねることが出来なかった。彼はこのことを尋ねる権利を有しなかった。自分の心の中で日ごとに重くなって行くこの重荷に耐えなければならなかった。これまで彼女の近くにいると、それだけ一層平和や休息がもたらされていたのに、今やこの娘の側にいると、一層彼は心苦しく、不安に思われた。しかし彼は少尉ルドルフのこの哀れな姪に一層高い程度に注意を向けざるを得なかった。彼は今やいわば強制されて、彼女を不安げに緊張して注目した。そしてやがて彼はもはや自分の背後の微かな足音も聞き逃さなかった。そしてこの甘美な声のどの音程も、もはやこの家の甲高い不協和音の中で、彼は聞き逃さなかった。

輝かしいクレオーフェアは、聖職候補生ウンヴィルシュに対する影響力を、フランツィスカが獲得するほどに、喪失して行った。彼女の華麗さ、彼女の美貌、火花を散らす彼女の精神、家の不健康な体制に対する彼女の敵対は、愚かなハンスに眩惑を与えなくなった。彼を最初魔術的に魅了したのも、やはり彼を反撥させた。彼はますます、輝くものは必ずしも本物でないと悟り、この若いレディーの異議申し立ても、彼にとってやがてほとんど彼女が反対しているもの同様に、不当であるように見えた。彼はクレオーフェアも残念に思い始めたが、しかしフランツィスカとは別な理由からであった。しばしば彼は、かの素晴らしい女性にとって、すべての精神的肉体的長所がいつかこの上ない悲惨さを招くであろうという思いを消すことができなかった。

テオフィル・シュタイン博士は、枢密顧問官ゲッツの家を再訪した。今回彼はブリューテミュラー教授を伴っていなかった。そして聖職候補生ウンヴィルシュは彼への挨拶のためにサロンに呼ばれなかった。家の主人に対しても、博士はとても影響力のある筋から推薦されていた。それで主人は、夫人もそのために微笑しているが故に、自分のはなはだ熱帯的に仕上がっている性情に備わっているすべての温かさを込めて、博士を迎えた。

枢密顧問官は自分の仕事部屋から出て行く前に、自分の機械仕掛けのネジを回して

いた。そのため歯車仕掛け、バネ仕掛けはめったにないほど順調であったが、これは、
一 訪問客に専念した最初の十五分間だけであった。その後は勿論いつものように緩んで来て、この著名な法律家のことを知らない人は、その次の十五分間には彼に対し然るべき榮譽を与えなかったかもしれない。つまりパンデクテン[学説彙纂]と国法とを暗記していて、他のどの同僚諸氏よりも論争文献に通暁している人物に見えなかったことであろう。夫から失われた活気を完璧に枢密顧問官夫人が補った。クレオーフェアが居合わせなかったので、一 彼女は女友達を訪ねており、一 博士は邪魔されずに、夫人の意見や見解に「深い親近」の一致を表明でき、赤面せずにそれを行った。彼は、フランツィスカが部屋に入って来て、この訪問客を見て、縮み上がり、死人のように青ざめたときでも、赤面しなかった。彼は紹介の際、全く屈託がなくて、自分はパリですでにこの恵み深い令嬢と出会うという光栄に浴しましたと全く冷静に述べた。

枢密顧問官夫人の驚愕と仰天、枢密顧問官の突然の跳び上がりと傾聴とがこの釈明の結果であった。それから質問が矢継ぎ早になされ、これをテオフィルはメランコリックに頭を下げて、とても上品に避けていた。一方フランツィスカは唇を引き締めて、痛みと怒りで半ば気を失って立っていた。

「残念ながら、私どもが互いに知り合ったときの関係はとても痛ましいものでした」と博士は囁いた、「恵み深い令嬢の父親の病氣と死去、一 途方もない、情け容赦のない都会での恵み深い令嬢の寄り添えない状況の下で、一 いや、我が令嬢」。

フランツィスカ・ゲッツはドアの方へよろめいて、その途中、家具に掴まって、床に倒れないようにした。伯父は、口を開けて、彼女を見送っていて、伯母が鋭く彼女の名前を呼んだ。しかし彼女はそれを聞いていなかった。テオフィルは大きな関心を抱いて、自分の足許の絨毯の花々を観察していたが、それでも横目で恵み深い奥方と、フレンツヘンの背後で閉まるドアを見る機会を逃さなかった。

「何という情景でしょう。何ということです」と枢密顧問官夫人は叫んだ。「博士殿、この不思議な出来事について少しばかり私どもに明らかにしてくださる責務があります。あの娘はどうしたのです。いつ、どのような事情で貴方はパリの私の姪と出会ったのです。テーオドル、ドアに門をしてくださらない。博士殿、お話してください、知らなければ拷問台の苦しみです」。

テーオドルがドアに門をする間に、テオフィルは両手で、人間性に対するそのような犯罪、このようなレディーに対するそのような残酷さには手を染めたくない素振りをした。しかし彼がこの興奮を事実の速やかな明確な説明で収束させたかと言えば、これも然りとは言えない。彼は自分が令嬢にかくも痛々しい思い出を想起させてしまったことを、とても遺憾でありますと述べた。彼は、この家に二度と足を踏み入れないことを自分の義務と見なします、自分はすべての関係に責任があります、と述べ、それ故深く感動して、枢密顧問官のガラスのような目も覗いた。彼が結局自分の報告をかくもすらすらと述べたことはかなり奇妙なことだった。彼はその報告を無理矢理吐き出したと我々が言おうとしたら、それは全く間違った表現であろう。彼、テオフィル・シュタイン博士はとても良く物語った。彼のよく響く胸からの声は、悲劇的なことへのすべてのニュアンスを繊細に浮かび上がらせるのに全く適していた。一 我々はすでに他の箇所彼の技法について語った。その上、真実のこと、半ば真実のこと、偽りのことに、常に正しい照明が注がれて

いた。 — テオフィル博士ほどに明暗の技法に巧みな名手はいなかった。

枢密顧問官ゲッツとその夫人は、ハンス・ウンヴィルシュが耳にしたのと同じ話しを聞いた。しかしその色合いはそれぞれの関係の中で別様であった。テオフィル・シュタイン博士はこの家庭的悲劇に最大の関与をしていた。彼は、恵み深い夫人が自分の義弟の生死に関して感じざるを得ないことを、痛々しく追感した。彼は夫人と一緒に豎琴を柳の木々に掛けた[詩編 137、歌わず、彼は夫人と一緒に嘆いた]。彼はおよそ分別ある人間に対して理性的に要求し得る限り、至極真っ当に自分の思い出に圧倒されていた。はなはだ内に閉じこもって、目を手で影にしていた枢密顧問官に対して、彼はさほど注目しなかった。彼は直接この枢密顧問官に向けられていた見解を、枢密顧問官夫人に委ねて、これ以上ない効果を上げていた。

とても頻繁に恵み深い奥方は、テオフィルのメランコリックな報告を遮って、夫に尋ねていた。誰の言う通りでしたか、自分、 — アウレーリエ、旧姓フォン・リヒテンハーンは、 — このことを常々言っていなかったですか、等々、等々。

それから夫人は夫に請け合った、自分の辛抱の尺度はその縁まで来ていて満杯です、義兄のルドルフ殿はこの家に二度と足を踏み入れてはなりません。自分としては不幸極まるあのフランツィスカを路上に突き出す気はありません。しかしその代わりいつか事情が好転したら、全く法外の称賛と報酬とを頂きとう存じます、と。

枢密顧問官夫人はとても激しく、とても辛辣になった、 — 夫人は一瞬たりとも、自分の夫の家族について、とても軽蔑して、投げ棄てるように話していると自覚していなかった。夫人は自分の夫の二人の兄弟の生活から、自分が魔女のように雄弁にあれこれ攪拌して、テオフィル博士の響き渡る嘆き節の語りに混ぜ入れた多量の特徴を承知していた。山師と乞食の両者が然るべき評価となって、この山師の娘も応分の扱いとなった。

博士が最後に哀れなフェーリクススの貧民棺をドネ市門を通過して運び、ペール・ラシェーズ[墓地]の貧民街一角の惨めな墓に埋葬させると、これは枢密顧問官ゲッツにとって一つの真の救済に違いなかった。

「いや、そのことはルドルフから聞いていなかった」と枢密顧問官は呻いた。彼は額から手を下ろして、今彼を目にした者は、この男はもう全く機械仕掛けとは言えないと告白したに違いない。しかしそれ故、この男のことが気の毒に思えたに違いない。

「これが真実ですよ」と恵み深い奥方は叫んだ、「少尉ゲッツ殿は二度とこの家に足を踏み入れてはなりません」。

外であるざわめき音がして、トリル[顫音]が上がった。ドアがノックされた。

「クレオーフェアだわ」と母親が叫んだ、「テーオドル、門を外して。十分にお話しを伺ったと存じます。博士殿、貴方は私どもの家に関して大変貢献をなさっています。衷心からそのことに感謝致します」。

「悲しい貢献です」とテオフィルは嘆息した。手を心臓に置いていた。 — クレオーフェアが部屋に跳ねて来た。

彼女は自らと共に陽光と青春の陽気さをもたらした。彼女の目は輝き、彼女の赤い唇は笑っていて、ほとんど足は床に触れていなかった。彼女は博士に極上の可愛い皮肉な挨拶をした。彼女は一杯、些細な、意地悪な話しをし、この話しをととても上手に語った。彼女は尋常でなく上機嫌で、それ故また尋常でなく、間近の人々の感情を、些細な、優美

な、不実な当てこすりで傷付ける気分になっていた。そしてモーゼの慣習や立法とかに関して、旺盛の知識欲を表明した。しかし彼女にはママよりもテオフィル博士の方がもっと負けないことが判明した。彼はそう簡単には平静さを乱されなかった。そして早速自分の優美なライヴァルに一手を指した。

彼はユダヤ人世界について情熱的に話した。ユダヤ人達の、聖書の外にある歴史や伝承は、個々の英雄的度胸や、ストイックな死を恐れぬ特徴に無数に満ちています。他の民族では見られないほどに確固として揺るぎなさや信仰の誇りという特徴に満ちています。神殿の破壊の跡でも、散ったイスラエルには英雄や預言者が現れました。そして独自のその詩学について、感動的、魅力的逸話に満ちた一つの宝庫を、このとても悲劇的で未知の世界のことを立ち上げることのできる人物を紹介することが出来た。テオフィル・シュタイン博士は自分の民族の英雄譚、殉教者の話しを最も上手に展開する術を心得ていた。そして女達の魂は、逸話によって最も簡単に捉えることができるのであれば、博士は、お断りを物語るという技術を名手的にまで育て上げていたと博士に対して認めなければならなかった。彼はクレオーフェアまでも注意深い聞き手に変えた。そして彼は結論として、わざわざ恵み深い夫人のために、その熾天使的に白いカトリック改宗者の外套を飾り立てながら、謙虚に誇り高くお辞儀をして、辞去を告げ、自分の訪問の結末に満足できたのであった。

彼は自分が望んでいた者、 — 「家庭の友」となった。この時から彼は、自分の心身の不都合を言わずに、聖職候補生ハンス・ウンヴィルシュの訪問を受け入れることができるようになった。ハンスは自分にとってははや危険な者になり得ないと固く確信していた。彼は枢密顧問官の家の世論を支配したのである。それでやむを得ない場合、哀れなハンスをフレンツヘン、「些細なパリの知り合い」同様、ドアの外に出せるほどに、十分強力になったと感じていた。

さて春がその十全の華麗さでやって来た。枢密顧問官ゲッツの窓の前の散歩道での人の群れは倍増した、いや三倍となっていた。貧しい人々の子供達は素足で走り回り、より上の身分の子供達は、裸の脚[半ズボン]であった。公園は緑となり、珍しく小夜啼鳥まで見えた。しかしハンス・ウンヴィルシュは、自分が期待していて、いずれにせよ見いだされる筈であった慰めを、そこから引き出せなかった。

公園は緑になったかと思うと、青虫が再びそれを食って裸にした。この害虫は厭わしい品種であって、楽しんで生きていた。この害虫は、その数ではなはだ畏怖の念を与えながら、一本の木を裸にし、たらふくそれを食うと、美に対する洗練されたセンスを示した。この虫どもは、散策しているレディー達の頭やうなじに、木の枝から長い糸を引いて下りて来た。聖職候補生が窓から覗くと、グループや個々の夫人達や乙女達が、かのカリピュゴス[美しい尻]のヴィーナスの有名なポーズを取って、しかし別の顔の表情を浮かべて立っている姿を見ないわけに行かなかった。

しかしハンスは窓からさほど眺めなかった。彼はその時間がなかった。彼は、枢密顧問官夫人の好意や敬意が低くなるにつれ、夫人は彼の自分の持ち時間を一層少なくさせ、それだけ一層窮屈に彼を晒し台に縛り付け、一層鋭く彼を見張った。

彼女はとにかく犠牲を払っていた。そして「この人間」を自分の夫の願いで家に受け入れていた。そして毎日夫人は、自分のこの弱さを非難しなければならなかった。しか

し夫人にとって、自分がこのような状況下でも、母親としての義務を怠っていないと自らに言えるのは慰めであった。

力を倍増して、夫人は家庭教師の教育任務に介入した。夫人はすべての有害な影響に反対し、その成果は輝かしいものであった。我々がこの成果を放置出来るのは、我々にとっても読者にとっても一つの幸せである。誰もこのことに責任を負う必要はないのである。エメは、この本では、幸せであろうが、不幸せであろうが、我々にとってほとんど関係のない登場人物に過ぎない。

フレンツヘン、 — フレンツヘン・ゲッツよ、 — 憎しみや嫉妬、利己心、百もの同様の実務的世俗性を知らない、かの遠方の、遠方の神々の島からの愛しい音色のように、この名前は我らの耳と心に響いて来る。しかし同時に我々は、そのような所から、その音色に耳を傾け、その名前を真似て言わなければならないという深い憂愁の念に襲われる。そして聖職候補生はこれと同じ憂愁の念を口にすることになった。いや、この甘美な名前を、この冷たい、意地悪な、ポンペイ風な様式で描かれた壁の中で、再三反復しなければならぬというのは、この上ない慰めのないことであった。この音色は森の奥深くに相応しいもので、あるいはもっと良いのは、森の縁であろう。そこは涼しげで、愛しい影のすぐ側で、穀物畑の穂先が陽光の中、揺れており、故郷の鐘が谷から響き上がって来て、小川が、陽気に森から流れ出て、楽しげに若々しく喋りながら、谷の方へ跳ね下って行くのである。ハンス・ウンヴィルシュがこの荒涼たる現在の中、フレンツヘンの名前をすべての大切な思い出と一緒にますます固く結び付けたのは、どのようにして生じたのであろう。彼はフランツィスカの肖像をその中に浮かばせずには、自分の子供時代の月光の輝きを思い出すことが出来なかった。フレンツヘンは、知識や世間、人生への彼の大いなる飢餓と何の関係があるのか。彼の幻滅と何の関係があるのか。

すべてのことに、 — 彼の心のごく内密の片隅に彼女は迫って来た。シュロッターベックおばさんや、いや、グリュエネバウム伯父を、フランツィスカ、ルドルフ・ゲッツ少尉の姪、抜きに考えることは不可能であった。彼女は魔術的に輝くガラス玉の下、新町の低く、暗い部屋に座っていた。彼女は新町の墓地に、母親と父親の墓の側に座っていた。

異様なこと、見知らぬこと、見慣れぬことであった。聖職候補生ウンヴィルシュと少尉ゲッツの姪の間に、たとえ世間の海が波打って押し寄せて来ようとも、しかしこの二人がその海でこれほどにもっと遠ざけられることはなかったであろう。二人は、家の通路で互いに出会うと、黙って挨拶した。二人は黙って、自分達の席を隣同士に取った。クレッペル通りの古物商、ザームエル・フロイデンシュタインの息子の暗い影が二人の間にあった。 —

ハンスは再びテオフィル博士をその住まいに訪ねた。そして二度目の折、博士に対しとても恩義のあるフランス人孤児の娘と彼は出会った。彼女は階段を下りて来て、聖職候補生と出会い、今回は頭を垂れて、彼の側を通り過ぎた。彼女はもはや跳んだり笑ったりしなかった。彼女は重苦しく、階段の手摺りを支えにして、頭をととても垂らしていた。彼女はとても青白く見えた。彼女の外見は、以前の優美さをかなり失っていた。ハンス・ウンヴィルシュは博士にこの変貌の理由を尋ねるつもりでいたが、しかし他にも多くの質問があったので、そのことを忘れてしまっていた。

テオフィルは、ハンスが彼に問うたすべての質問に答えた。そして彼に好意を示し、彼の叱責を受け入れた。しかし彼が答えるときの流儀、作法は、敬虔で実直な心情の者にとってかなり物足りないものであった。

ハンスは、真面目な言葉で、枢密顧問官の家への彼の登場について、彼に問い合わせることを自分の責務と見なしていた。これに対し、シュタイン博士は、自分、一テオフィルは、少しも作法と教養の境界線を越えるつもりはない、しかしながらただ自分の独自の内面にある、一種電氣的明かりは、道を照らすために使って良かろうと答えた。

ハンスは半ば絶望して、フランツィスカ・ゲッツが庇護を求めた家に押しかけるのは、この友の思いやりに欠ける点であろうと非難した。そこでテオフィルは、こう請け合う気になった、つまり以前自分の一つまりテオフィルの一パリの屋根裏部屋での現存、救助、奉仕を却下せず、一いや、遠慮なく受け入れたこの令嬢は、愛している縁者達の現在の環境な中で、何ら「不当なこと」を、「恐れる」必要がないのである、と。

聖職候補生ウンヴィルシュがいつもより大きな声でこう叫ぶと、つまり自分はこの若い哀れな娘に対するこの縁者達の愛や好意に関して、疑念を抱く正当な理由があると言うと、博士はただ両肩をすくめて、キリスト教徒的愛故に黙っているのが正しいと自分は思うと述べた。しかしその際、一度また、モーゼス・フロイデンシュタインの流儀で両膝をこすり合わせていた。

テオフィル・シュタイン博士は、ハンスが玉虫色の[正体不明な]星、クレオーフェアに言及した最初の瞬間も黙っていた、一博士は独特の顔をした。

いや、この青坊主の言うこと、と彼は考えた。これほど抜け目がないとは思ってもみなかったぞ。大声で彼はこう言った。

「最愛の友よ、君はどういう気だ。その娘は美しい。機知に富んでいる。町中で一つの奇蹟と見なされている。何故私が皆に認められている長所を然るべく称えてはいけないのか。愛は犯罪かね。黒人は幸せになってはいけないのか」。

「しかし君がこの令嬢を相手に行っているのは、危険な遊びだ。彼女は鋭い精神とは言え、君には太刀打ちできない。モー[ゼス]、一テオフィルよ、私のことを悪く取らないで欲しいが、一私はいつも新たにこう考えるのだ、君はこの家には何の用もないはずだ、と。私はこの思いを断ち切ることができない、つまり君はこれらの人々に何らかの大きな不幸をもたらすに違いない、と」。

「君は何とも予感に恵まれた天使だな」[ふん、不思議に察しの好い子だあ、『ファウスト』、森鷗外訳、3494]と博士は笑った、「君の心配は極めて上等の心を証している。君がその心配を表明するとしても、私は君のことを悪く受け取らない。それどころか、君に対しその返礼をしよう。率直さには率直さで報いよう。そして君に対しとんでもなく素直に打ち明けよう。君にとって、私の幾多の点が気に入らないとしても、それは君の観点から見れば全く正当なことだ。私がカトリックに改宗した内奥の心の理由については、君は当然不分明であろう。分からないだろう」。

ハンスはめったに見せないようなエネルギーを発揮して、頷いた。

「では、我が息子よ、両耳をしっかりと開けて、聞き、そして君の同意を表明すべく開け給え。一飢餓の神聖な力が私を改宗に駆り立てたのだ」。

ハンス・ウンヴィルシュは、帽子に手を伸ばした。

「理想への飢餓だな」とテオフィルは溜め息を吐いた。そしてハンス・ウンヴィルシュはまた自分の帽子を下に置いた。

「私は国王陛下の内閣の上申顧問官になりたいのだ」と新町のクレッペル通り出身のモーゼス・フロイデンシュタインは結論付けた。そしてハンス・ウンヴィルシュは立ち上がり、額に手を当てた。あたかも突然、目眩に襲われたかのようにであった。

「ハンスよ、私は全く率直に語っている。私の意図は、クレオーフェア・ゲッツ嬢の好意を得て、後にその令嬢の小さな手に結婚を申し込むことにある。 — 水差しなら君の背後にある」。

「モーゼスよ、モーゼス」とハンス・ウンヴィルシュは叫んだ。

「いや、私をもはやモーゼスと呼ぶがいい。この名前と結び付いているすべての美しい思い出にかけて、君に切願する。 — 君のかの家での影響力を、君の青春の友に敵対して発揮しないで欲しいのだ。君はこの混乱した世間の潮流についていかに経験が少ないか、そして正しく裁くことがいかに難しいことか、とくと考えてくれ。不思議な運命の縁で、我々はまた出会うことになった。しかし若いときにすでに我らの中に見られた対立が陰しく顕著になっている。私が君にとって、偽りの明かりで照らされているように見えても、いつも心に手を当てて、正しく自分の心に問うて欲しいのだ、君が私の人生行路に十分に深く通暁していて、私に敵対して現れ、証言できるものであるか、どうか」。

これは称賛に値する話しぶりであった。青白いフレンツヘンに対する想いがなければ、神学の聖職候補生ヨハネス・ウンヴィルシュはこの日の晩のうちにも、新町とクレッペル通りの方向への鉄道チケットを購入していたことであろう。

第九章

公園の青虫どもは、その生涯での食卓での自分達の分を食い尽くした後、消えた。しかしシュタイン博士は、枢密顧問官ゲッツの家から消えなかった。彼は毎日やって来て、毎日恵み深い奥方から一層愛想の良い微笑で迎えられた。彼はレディー達と一緒に読み、レディー達と一緒に外出した。枢密顧問官夫人に対して、この興味深い知遇を羨ましがる多くの人々がこの町にはいた。というのは、博士はその名声がとても盛んになって行く男であったからである。人々は評判とかその類いに議論する資格が少しもなくても、人々はその名声が盛んになって行く声を耳にした。男女両性からなる或る選り抜きの聴衆の前で、彼は「人間社会における権利と義務」について講演をした。この講演は、人類の独占的で上品な部分にとって、彼らはこうした部分と見なしていたが、とても好評であった。シュタイン博士は、内容を力強くかき混ぜた後で、その袋を乱暴に、無茶に、吐き出さなかった。いや、清潔に、華奢に、可愛く、彼は権利と義務とを分類して、権利を優美に右手の蠟燭の側に置き、義務を周知の、良心をととても落ち着かせる溜め息と共に左手の明かりの側に置いた。それから彼は居合わせる聴衆に、どうぞお選びくださいと招いた。聴衆は快適に選んだ。しかし、これらの講演は印刷された。人々の噂では、政府内でこの講演について大いに話題にされたそうであった。いずれにせよ、枢密顧問官夫人はこの講演にとてもうっとりしていた。 — しかしクレオーフェアが反論を述べたが、博士はそれを奇貨として、百もの輝かしい畏を彼女の反抗的自我に投げかけた。テオフィルはクレオーフェア

ア・ゲッツには彼女の母親とは違うやり方で話した。「冒険的アフリカ人」が次のことについて話すとき、ただ優しい、穏やかなデスデモーナ[『オセロ』の夫人]が仕留められただけではない、つまり、

...広大な洞穴、荒れた草原、
石切り場、岩石、天まで届く山々について、
互いに殺し合う人食い人種について、
肩の下に頭の見える
共食いの人種、民族について、

不屈の、力強い、炎のような女性に、つまり反抗や不機嫌で、些細な関係に対し無益な心労をし、美しく立腹して、鎖を軽蔑して引っ張っている女性に対し、このような具合に嘘が語られると、その魔法は更に倍増する。このような状況下で一人の女性の心を捉えるには、さして労力を要しない。勿論殺し合いや攻囲についてテオフィルは語ることは出来なかった。それに彼も奴隷として売られたことはなかった。しかし彼は、「溜め息の出る世界」に自分も熟知していると主張できる他の事柄について語った。彼は自分の出自と暗い青春時代を資本にしていて、ハンス・ウンヴィルシュに負けず、悲歌的に感動的になった。彼の哀れな父親のお蔭で、世間への道は自分にとっていかに容易で平坦なものであったか、これについては彼は賢明に黙っていた。自らの男性的力、自らの男性的勇気によって、自分に対置されたすべての障害を、彼は勿論征服したのであった。彼は自分のシャツの襟をバイロン風に平襟にして、自分は、— 「主そのものであり、その遺産は受難であり」[Byron:Lara, 1814, I, 2]、必ずしも平坦な道を歩んできたのではなく、自分の胸には、深み、暗くて、黒い深みがあり、目眩を覚えぬには覗き込めない深淵があるのだと暗示した。彼は自分の過去の個々の時代について、率直に、しかしおぼろげな辛辣さを添えて語った。彼は人々の同情を要求しなかったが、しかし人々の非難にも甘んじなかった。彼は自分の清算を自ら行った。周囲には暗い雲が掛かっている、彼の内面は夜であった。しかし自分はまだ、明かりへの飢餓を失っていないのであり、それ故一人で、— 自分はまだ、生存の重荷によって片輪へと押し潰されることなく、存命の者達の間を遍歴できるのである。

クレオーフェアはその生涯全体の中で、この時期ほどに黙しがちであったことはなかった。枢密顧問官夫人は、博士が娘に及ぼして下さる好ましい影響について話し始めた。この時期、この家の主人が、自分の妻や娘とのテオフィルの交際についてどう考えていたか、彼に対してはその意見が求められなかったもので、これは何とも言えない。しかし彼が以前よりも深く考えに没頭しているように見え、珍しいことに、フランツィスカが彼に語りかけたり、あるいは単に他の人々に返事をしたりする時に、ようやく初めてその物思いから目覚めたというのは、一つの事実である。枢密顧問官は一般的に注目の対象とは言えなかったもので、それで家庭教師以外誰も、彼の夫人の部屋を通過して、おずおずと歩むこのフレンツヘンを彼が目で追うときの、悲しげな、不安げな視線に気付かなかった。あたかも彼は、自らがかくも寄る辺ない女性から、何らかの慰めを、一つの助けを期待しているかのように見えた。

ハンスに対するフレンツヘンの関係は何の変化もなかった。二人は互いにすれ違ったが、とても不幸であった。ルドルフ少尉は姿を見せなかった。ハンスが問い合わせた緑の木亭は、誰も彼の消息を知らなかった。枢密顧問官の家では彼の名前は決して言及されなかった。フランツィスカが少尉から知らせとか手紙を貰ったか、ハンスにとっては分からなかった。貰っている場合でも、いずれにせよそれは彼女にとって慰めの少ないものであったに違いない。ハンス・ウンヴィルシュは日々かの椋鳥に一層似てくると感じていた。ヨリックの『感傷旅行』[ローレンス・スターン作]で自分の鳥籠の棒を揺すって嘆く鳥である。「私は出られない、私は出られない」。

故郷の老いた人々を不安がらせないために、彼はこの人々にいつもこう伝えていた。自分は順調です、とても順調です。自分は望み通り、大都会で多くの人々の許、高貴な家に暮らしています、等々と。しかし彼は順調ではなかった。彼は運命によって引き込まれた魔法の圏内から出ることが出来なかった。自分がモーゼス・フロイデンシュタインを憎んで、フランツィスカ・ゲッツを、一愛するであろう時期が間近であろうと感じていた。そして自らの思考から永遠に逃走している状態にあった。哀れなハンスにとって、少しも順調でなかった。

この夏は寒くて、雨日和であった。シュタイン博士と約束していた湯治旅行を一家は諦めた。人々は家に留まって、うんざり退屈して、水滴の滴り落ちる公園と汚れた散歩道を覗いたり、あるいはテオフィル、ブリューテミュラー教授や、男女両性の一連の類いの知人や友人の長い列と一緒に、毎日を通常の冬のような行事で過ごした。クレオーフェアはテオフィル博士がいなければ、このような夏、自分を見失っていたことであろう。彼女はまず自分のママを、それから愛らしいエメを、最後に自分を殺害していたことであろう。しかしテオフィルは今や彼女に、ママが不在の折にはパリの話しをし、かくて彼女と愛しい両縁者に生气をもたらしていた。

枢密顧問官夫人の厳しい目の下、家庭教師は以前同様に、家の息子を教えて、恐ろしく我慢していた。彼は次第に、肉体的にも不調を感じ始め、目眩と頭痛に悩み、日毎に段々と憂鬱症患者となった。彼は心臓が痛み、そのことを自覚し、しかしまた次第に肺も病んでいると想像したが、しかしこれを少しも気かけなかった。彼はもはや何らかのことに飢餓を感じなくなっていた。ただフレンツヘンには自分の心を丸ごと明確に差し出したかったことであろう。しかしその後はどうなる、一その後は、同じことだ。死んでしまえば、楽だ。楽、つまり休息を、モーゼス・フロイデンシュタインが「飢餓牧師」と名付けた、このヨハネス・ウンヴィルシュは願った。

八月の終わりの日々の土曜日の午後のことであった。またしても早朝から絶えず雨が降って来た。

自分の小部屋の窓辺にハンスは座っていた。彼の頭痛は今日いつもより厳しくて、今日自分ではもはやレッスンをしなくていいことを神に感謝していた。教え子は母親の部屋にいて、シュタイン博士の足許で美しい絵本を引き裂いていた。この紳士がエメに対して持参した絵本であった。シュタイン博士はエメに対して、とても頻りに玩具とか類似のものをポケットに入れて来た。彼は外交には、何ら大きなものも、小さなものもないと承知していた。

この土曜日の午後、クレオーフェア・ゲッツは、テオフィルの機知豊かなお喋りに

もかかわらず、不機嫌であって、この日には聖職候補生ウンヴィルシュは、自分はやがて解体されると固く確信していて、この日には外ばかりでなく、彼の魂の奥深くまで雨が降っていたが、この土曜日の午後、聖職候補生ウンヴィルシュは郵便局から、新町からの小荷物を受け取った。技巧的に紐を掛けられ、封印のワニスばかりでなく、もっと用心のためにピッチでも塗られた小荷物であり、これをジャンは、反吐と軽蔑の気持ちを抱いて、ドアの側の椅子に置かせていた。

この小荷物には、牛革製の一足の新しい編み上げ靴と半ば枯れた花々の小箱、シュロッターベックおばさんからの一通の手紙、それにニコラウス・グリュエネバウム伯父からの一通の手紙があった。

伯父の書状は、次のように展開するものであった。

「いとも尊敬する甥殿、
殊の外、敬愛する神学の聖職候補生にして、
学級と家庭教師の尊台、

就中、雨模様の夏、永遠に雨が降り続き、うんざりしている中、親族としての愛情、好意を込めて、ここに二重底の一足の編み上げ靴を呈上し、これが健全に使い古されることを祈念申し上げる。親愛なるハンス、そなたがまだ元気旺盛であると聞いて、とても同慶の至りであるし、刺繍されたチョッキとムーア人国王の肖像画入り刻み煙草入れをご恵贈くださった好意に感謝している。私はからつきし元気ないし、からっけつ、日々馬齢を重ねている。胃はもはや働こうとしないし、目も役立たずだ。それで一昨日私が自分の眼鏡の上に鎮座して、それでこの手紙が読めなくなってしまったのであれば、申し訳ない。そなたの父親がこの嘆きの谷から早々と立ち去ったのは、まことに正解であった。人間はその最後の歯を乾いたパンの皮で折ってしまい、足痛風が足先でいたずらし出したら、この世でいかんともし難い。それで私は隣人のムルクスも足痛風で亡くなったと思い出し、オークションで彼の籐の杖を安く購入した次第。親愛なるハンス、その他は順調だ。あっぱれ陽気だ。しかし赤雄山羊亭の老ビール親父は、店を息子に譲って、それで店は、内装、外装怠りなくめかして、壁紙を貼り、黄金の縁飾りの絵画を大きな鏡の下に掛けてある。それでビールはまずくて、情緒も何もない。それで老公は当然悩んで、ポケットに綱を忍ばせて歩き、どこか適当で頑丈な釘がないか、探している。それで我々はワイン亭に移った。しかしこれは習慣になく、道から外れている。年を取ったら、昔のままが一番良い。政治もまた昔のままではなくなった。郵便急報でも、フランス語の辞書を引かなければ分からないであろう。勘弁してくれ。しかしフランスの憲法についてそなたの見解を聞くのはとても楽しみなことであったが、フランス人は多くの軍税と引き換えに沢山のことを約束したもので、しかし解放戦争では我らから多くの秘密を聞き出してよ、そして約束を守らなかった。私の主張は変わらない。悪魔には奇数も偶数も関係なしだ。そこで親愛なるハンス、シュロッターベックおばさんのことだが、相変わらずおばさんは、悪意、妙な癖、細かいこだわりを持っている。しかし私は金輪際この世ではおばさんと関わりたくない。彼女は独特な人物だ。しかし私を意のままに扱う。私を厳格に扱うかと思うと、温かく接してくれる。彼女がいなくても、どうしていいかわからない。彼女がすでに家のドアに門をして、ベッドにいるとき、その家の前に行ったら、危険なことになる。ただでは済まな

い、一 おばさんの口にはかなわない。生身の人間としてよりも、霊としてノックして、彼女が階段を下りて来るのを聞きたいくらいだ。

親愛なるハンスよ、家賃だが、これを親切に我ら老人に任せているが、これは相変わらず使い尽くされている。しかし我らが天に召されたら、我らはそなたにこのルイ金貨を永遠の世界から送ることにしよう。それは当てにして良いぞ。

編み上げ靴は魂を込めて作ったもので、良く保つものだ。そなたの上司殿がそなたの靴音を耳にされたら、大胆にこう言えば良い。伯父ニコラウス・グリュネバウムはこのようなものが天職の男です、と。それでは筆を擱く。

達者でな、直に便りを、そなたの鬱いだ老公伯父宛に頼む、

ニコラス・グリュネバウム」

シュロッターベックおばさんの手紙は以下の通り。

「親愛なる息子、

あなたがどんな具合で、どんな手伝いをしたらいいか、分かれば良いのだけど。あなたは確かに、とても順調に進んでいると書いていて、真心を込めて、私に温かいジャケットを冬用に送ってくださいました。でもあなたはそんな具合じゃないでしょう。順調ではないわよね。モーゼス・フロイデンシュタインのことも、あの人がキリスト教徒になって、自分の名前を変えて、あなたの方家によく出入りしているなんて。こんなこと私には理解できません。私には少しも気に入らない。惨めな状態でもまだ暮らしているあのエステル婆さん[家政婦]が昨晚私の窓の前まで足を引きずりながらやって来て、ノックし、とてもやつれていたけど、こう言いました。あのモーゼスは邪悪な人間で、ろくなことにならないだろう、と言いました。あの人の父親はあの人のせいで亡くなって、あの人はひどい人間だ。自分はそうだとは思っていなかったけど、老ザームエルが亡くなって、そう信ずるようになったと言いました。あなたにモーゼスのことを忠告するよう、エステルさんが頼んだのです。あの人の滑らかな言葉に用心なさい、あの人は骨の髄まで腐った人間だ、と。

親愛なる息子、分かるでしょう。更に他の人々が私の窓の前にやって来たり、あるいは私が路地で出会ったりするのです。その人々は、家々の前に立って、その家族の家の一人が死ぬか、あるいはその人々の許へ行くことになるので、その誰かを待っている様子なのです。あなたの母親とあなたの父親もよく最近現れました。そしてとても悲しげに見えて、頭を振っていました。だから私は、あなたは上手く行っていないと分かったのです。しかしあなたのどこが不調なのか分からないから、ひどく悲しんでいます。親愛なるヨハネス、心からのお願いです。すべての試練に打ち勝つことです。そしてモーゼスの言いなりになってはいけません。あなた達は若い時、仲の良い友達だったけど。ファクラー教授殿も、今では本当に年取って、憐れむべき状態だけど、オイゲーニエ[ア]嬢は結婚して、もう一人の娘が残っているけど、同じことを言っていました。その上ラテン語でも仰っていて、でも私はドイツ語しか分からないから、それで教授もこのモーゼスは好きになれなかった、と。まだ鞭を受ける教え子のときからのことで、あなたは付き合いを避けた方がいいということでした。

こちらでは今年、とても雨が降っています。あなた方の所でもやはり雨か、どうか便りをください。でも、私は窓辺に座って、昔のことを考えて、この人生がどんなに過ぎて行くか、一緒にクリスマス市に座っていたとき、どんなだったか、思い出すと退屈しません。伯父さんの仕事はさほど儲けはありません。今では更に少なくなっています。でももうこの方とは決着が着いています。それに年を取ると、人間は静かに座っているものです。ニクラス・グリュネバウムでさえもね。それで私は、あなたが牧師となったら、どんなお嫁さんを迎えるのだろうと、考えるのです。私は彼女、若い夫人を一目見てみようと願っています。石工は家賃の支払いが滞っています。雨模様で仕事が上手く行っていないのです。私どもはなるがまま、助け合っています。愛する息子、ヨハネス、私はあなたの所有物からのお金を送れません。でもあなたの両親のお墓から花束の一つ送ります。私は雨の中、摘みました。それで、長い道中、新鮮に保つことでしょうか。花々は遠くまで行けるのに、その上鉄道で行けるのに、私は座っていて、ただ想いだけに乗せることできるというのは、奇妙なことです。グリュネバウム親方も鉄道を見たいことでしょうか。でも鉄道はこちらまで来ないのであれば、それは余り感心しないものなんでしょう。親愛なる息子、ヨハネス、直にお便りください。そして見知らぬ名前のモーゼス・フロイデンシュタインが、新町の人々はこの人のことをどう考えているか尋ねられたら、私があなたに書き送ったことをありのまま話してやりなさい。愛する息子、この人にはくれぐれも用心して、あなたの忠実なシュロッターベックお婆さんのことを思い出さない。

追伸。伯父さんの編み上げ靴はただ湿気の多い天候のとき、履きなさい。多分きつと鼻風邪や他の悪寒から守ってくれることでしょうか。

忘れてはならないことです。私からあなたの上々の方々にどうぞよろしくとのご挨拶と、あなたに対するご配慮をお願いしますとの依頼を伝えてください。だってあなたは一人の孤児同然で、いつでも自分への注意を怠っていますからね。今一度別れの挨拶を送ります。

あなたのお婆さんより」

両手紙ともここに印刷されているほどに、簡単に読める原文ではなかった。必ずしもその中の文字はすべてが正しい箇所記述されているわけではなく、どの言葉もその意味が判然としているわけではない。手紙の記述者は、「生じてしまった」すべての染みを可愛く人差し指で消して、その為勿論文意がより明確になったわけではない。文字は、中で台風が吹き荒れている一つの森のように混乱していた。この荒野の中を読み進めるのは、簡単ではなかった。その上、肉体的に不調で、手紙の幾多の箇所で、深く感動、動揺させられたのである。聖職候補生がようやく頭をまた持ち上げたとき、彼の目の前は暗くなっていた。迫って来る黄昏だけのせいではなかった。聖職候補生の目の前の灰色のヴェールを通して、独自の明かりが揺れていた。彼は両手で頭を掴まなければならず、あたかも自分は碎けてしまうかのようで、鈍く、自分の耳許でどよめいた。あたかも自分のすぐ側で大きな鐘が鳴らされたかのようであった。彼は窓を開けるために、跳ね起きようとした。しかし出来なかった。一 彼は重篤の病気で、とてもひどい病気で、すべての悪寒が意識喪失の死んだ空無へと解体し、それから空想世界の霊的残忍な戯れに移行した。

ハンス・ウンヴィルシュは脳炎を患い、実際数日間、死の淵にいた。しかしまたこ

の病気の間、幻覚にも襲われた。この幻覚は、彼が甘受しなければならなかったどのような痛みにも勝る価値を得ることになった。

この家の女主人は、家庭教師が陥ったこの事故に、勿論至極、不愉快、不快であった。彼女は自分の心の奥底では、「このような危険な病気」の、このような「余所の人間」を家で面倒を見る責務はないと感じていた。しかしこの一番内奥の感情を聞き入れて、彼をドアから投げ飛ばして、病院へ運ばせるのは、他面世間体があつて、不愉快であった。彼女は一つのキャラを保つ必要があつた。彼女は敬虔なレディーなのである。彼女は自分には変更できないことを認めなければならなかった。そしてまたテオフィルス・シュタイン博士に大きな救いを見いだしていた。彼はすでに、この病人を自分の特別な庇護の下に置いて、この病人に関し、すべて必要な面倒を見ると釈明していた。

このテオフィルス・シュタインはハンス・ウンヴィルシュの幻覚に現れた一人であった。

高熱発作の二日目に、テオフィルスはこの病気の青春の友のベッドに一人っきりで現れた。 — 彼は自分は一人っきりで、注目されていないと思っていた。その前、外の通路で、フランツィスカ・ゲッツに嘲笑的お辞儀をして、通り抜け、今や聖職候補生の臥所に身を屈めていた。枢密顧問官夫人の願いで彼は来ていて、「この若い男はどうしているか」視察した。

ハンス・ウンヴィルシュの精神は混乱して見えた。彼の空想は珍しく明るい瞬間ごとに途切れていた。暗さ、薄明かり、そして明かり、現実と夢とが交互に続いた。故郷からの両手紙は、これを読む最中に病気はその有害な手を彼の頭に置いて、その効き目を発揮し、彼の魂を、ほとんど無用のことであつたが、過去の映像で満たした。おばさんの手紙は最近の精神的苦悩を肉体的に逼迫させて、真に恐るべき具合にかき回した。 — しかしテオフィルは自分は一人っきりであり、注目されていないと思っていた。

彼は、その前、病人の許へ上がる医師に同伴していた。医師は憂わしげに頭を振って、新たな処方箋を書き、去って行った。テオフィルは元来その理由は何もなかったが、残っていた。彼は一瞬、病人の熱で輝いている目を覗いた後、脇の方を向いて、同情の微笑を浮かべて、部屋の中を見回した。彼は、我々が承知しているように、とても好奇心が強かった。そして他人の事柄や案件でも、それがスムーズになされ、あるいはそれどころか有益となると、好んでそれを嗅ぎ回った。聖職候補生ウンヴィルシュの事柄や案件は、彼にとって勿論、更に特別な興味を喚起するものであつた。

かくて彼は小さな文庫を視察し、一冊か二冊の本を取りだし、中を一瞥し、微笑して、それからまた元の場所に戻した。彼は衣装戸棚を覗くことも、自分の品位に悖ると見なさなかつた。 — 最後に彼は書き物机に向かつた。

我々は、ハンスが病魔に襲われて次第を語つた。 — テオフィルは開いている引き出しの中を、そして開封されてそこにあつた手紙を覗くことも不作法と見なさなかつた。彼はシュロッターベックおばさんがアントンとクリスティーネのウンヴィルシュ夫妻の墓で摘み取つた枯れた花束を持ち上げ、鼻で嗅いで、それから軽蔑してまた投げ戻した。彼は愚直なグリュエバウム伯父の手紙を見つけ、それを快適に読んで調べた。それから彼はおばさんの書状を取り上げた。 — 彼はとうに片付けたかの世界からのこの音信に、快適に感動し、くすぐられるのを感じた。そして机に椅子を引き寄せて、快適に自分の心

地良い情緒に浸ることにした。彼はおばさんの手紙を開けながら、あくびをした。しかし彼は最初の数行を解読すると、すぐその後、口を閉じた。素早く彼は病人の方に向き直って、手の中で手紙をわしづかみにしてくしゃくしゃさせながら、半ば椅子から身を持ち上げた。ハンス・ウンヴィルシュは、低く呻き声を上げた。しかし彼はこのとき、目を閉ざして横たわっていた。テオフィルは自分の読書を妨害されずに終えることができた。

彼は読み、下唇を噛み、笑い声を上げた。彼は青春の友が目を新たに開けて、彼を高熱の凝固した、不気味な視線でじっと見つめていることを知らなかった。

「何ともすごい、何とも馬鹿げている、何とも阿呆な」とテオフィルは言った。書状を新調にまた平らにしていた。

「滑稽に風変わりだ」と彼は言って、両腕を胸の上で組んでいた。「しかしこの虚仮野郎、結局、虚仮の一念で不愉快な者になり得る。彼をこの家から追い出すのが最も良いであろう。まあそのうちだ。一 親愛なるハンス、覚悟しておけ。過剰なものはすべて危険なものになるに違いない。情緒でも過剰となればな」。

彼は立ち上がって、椅子をかなり激しく後へ押した。再び彼は病人のベッドに近寄った。完全に精神的に麻痺していると哀れなハンスのことを考えていたので、自分に何らかの構えを課すことを不必要と考えていた。しかし彼は間違っていた。ハンスは明瞭に見ていた。全く明瞭に、恐ろしく明瞭に見ていた。存在と非在の間、意識と無意識の間で、彼の認識は閃光のように生じた。彼は自分の前に立っているこの男の目が、一つの不幸を楽しく味わっている邪悪な霊の目のように輝くのを見た。自分がかつて自分の友と呼んだ男の全くの非情さがこの目の中、この薄笑いの中に明らかであった。ハンス・ウンヴィルシュは自分の生涯で初めて、憎しみとは何であるか感じた。彼は、ぬるぬると滑る、永遠に入れ替わって行く奴、かつてモーゼス・フロイデンシュタインと自称した奴を、この瞬間から全霊で憎んだ。彼は大声を上げたかったことであろう。しかし彼の舌は意のままにならなかった。彼は飛び上がって、このモーゼス・フロイデンシュタインに拳と歯とで噛みつきかかったことであろう。しかし彼の哀れな肉体は、自分の力が及ばない動かない塊であった。しかし彼は目でもって彼を掴まえることができた。テオフィル・シュタインは縮み上がって、後ずさった。彼はもはや微笑していなかった。一 ヨハネス・ウンヴィルシュは再度、高熱の空想の中に沈んだ。しかし自分は和解し難い敵を逮捕したという確信を抱いて、彼はこの空想の中へ移って行った。一

彼が新たに目覚めたとき、何日か経過していた。彼は自分の苦痛の臥所の側に二人の別の顔と姿とを目にした。ベッドの足許の方に、枢密顧問官ゲッツが、黄色く色褪せて、疲れて、苦悩に満ちて、全く機械仕掛けを捨てて、しかし屈み込んだ男として座っていた。彼は他人の窮状に同情を示していた。そして彼の横、一 彼の横には、彼の肩に手を置いて、一 フランツィスカが、一 あのフレンツヘンが、いつものように青白く、穏やかに、目に涙を浮かべて立っていた、ルドルフ少尉の可愛らしいフレンツヘンが。

しかしこのフレンツヘンは、いかに鋭くこの病人がこの瞬間見ているか、少しも気付いていなかった。彼女は普段は自分の表情について油断する女性ではなく、例えばこの家の女主人に対して、幾多の邪険な折、油断していなかった。しかしこの時、彼女は自分の表情に気を配るということを少しもしていなかった。

このフレンツヘンは果たして、とても驚いた。そして彼女は、ハンス・ウンヴィル

シュが目覚めて、見ていると突然気付くと、とても赤面した。ハンスは目を閉じなければならなかった。そして彼が目を再び開けると、――彼は時間を正しく数えられなかったが、――両人影ともはやなかった。彼らは病院からの老いた、粗野な看護の女性に席を譲っていた。しかし何ら害はなかった。

ハンス・ウンヴィルシュの魂の中に太陽が昇っていた。彼は自分は死なないであろうと分かった。それに彼はもっと大事なことが分かった。彼は、何故放浪の乞食少尉、ルドルフ・ゲッツが彼をこの家に、かくも大きな苛立ちと不快の家に連れて来たのか了解した。

邪悪な霊達は四方八方へ逃散した。少尉ルドルフ・ゲッツに祝福あれ、少尉のフレンツヘンに神の祝福あれ。聖職候補生ヨハネス・ウンヴィルシュの飢餓の魂に大きな歓呼が生じた。彼は今一度正気を失っても、何の害もなかった。万事無事であった。

高熱の空想は反復しなかった。快方へ向かう日々がやって来た。フランツィスカもテオフィル・シュタイン博士ももう病人の部屋に現れなかった。しかし枢密顧問官ゲッツはよく姿を見せ、それもとても好意的面を見せた。彼は自分の病気の家の同居人のベッドでは、自分の書斎とか、それどころか自分の妻の部屋にいるときは全く別の人間となった。この家とその同居人のことを段々と分かって来たと思っていたハンスは、この病気を通じて初めて、自分にはまだ幾多のことが未知であったと分かった。

いや、快方へ向かう孤独な、物思いに沈む、詮索三昧の日々刻々よ。――

家庭教師殿が、とても痩せて、若干目眩を覚えながら、階段を再び下りて、サロンへ入り、恵み深い奥方とクレオーフェアにこれまで寄せられた好意に感謝を述べる日がやって来た。この件はとても速やかに処理された。――枢密顧問官夫人の二、三の冷たい言葉と、この「事故」で家庭内で生じた色々な不都合について若干の当てこすりがなされて、――この関連で必要なことが話し合われた。クレオーフェアは全く何も言わなかった。しかしエメは自分の教師の再登場を個人的侮辱と見なしているように見えた。

翌日、恵み深い奥方は聖職候補生と二回目の話し合いをし、聖なるクリスマスの日までに現在の契約を解消したい願いを述べた。夫人は、自分としては聖職候補生の自分の息子に対する影響をさほど高く評価できないという趣旨で自分の意見を述べた。ハンスはこれに対して何の反論も言い得なかった。麻痺したように彼は自分の部屋によろめいて帰り、ただこの名前を呟いた、「フランツィスカ」。

第十章

とても多くのことが、聖職候補生ウンヴィルシュの病気の間に悪い方向に変わっていた。いかに枢密顧問官ゲッツの家での諸関係が更にずれて行ったことか、彼は次第に気付くことになった。しかしこの世が秋になったこと、このことには一瞥して驚愕して気付いた。公園の木々の下の芝や道は、すでに落葉で覆われていて、公園そのものが、多くの衣蛾を有する色褪せた絨毯に類似し始めていた。ハンスがそのことを気に病む時間を有しなかったのは、ほとんど一つの幸運と呼んで良かった。

テオフィル博士は、美しく機知豊かなクレオーフェアに対する賭けに完全に勝利していた。クレオーフェアはこの男を、彼女のような性質の女性にのみ可能な情熱をすべて

注いで愛していた。花で飾られた地面の下で燃えている火花に気付くには、繊細な感情が必要であった。しかしその火花はあって、その火花を通じて、その瞬間、庭園は一層素晴らしく華美になった。 — しかしそれはとても悲しくて、涙を誘う一つの話であった。

枢密顧問官は、ハンスがまた両足で立って以来、以前同様近寄りがたくなっていた。彼の妻は自分の意見を述べていた。そして彼は、 — 彼はこのより高次の力に従った。ハンスは、この夫では、自分の家に迫っている危険を回避できないであろう、それにいずれにしても警告しても救えないであろうし、ひょっとしたらそれどころか有害で、事態を更にこじらせかねないであろうと見ていた。恵み深い奥方の許で、テオフィルは的確に準備作業をしていて、この妻の側面からは皆目期待出来ないであろう。それにクレオーフェアは、この誇り高く、華美なクレオーフェアはきっと、この自分に最も固有な、最も内奥の案件に対するどのような介入の試みをも、この上なく軽蔑して、却下したことであろう。彼女は余りに頻繁に、テオフィルと一緒に、「飢餓牧師」のことを笑っていて、この牧師からの警告を受け入れる筈もなかった。偽造に、破廉恥な利己心、情けない弱点、強情な愚鈍さ、敬虔ぶった思い上がり、軽薄、尊大、高慢、すべての方面への嘲笑、嘲罵、 — いやまことにこれは、ここにいと飢餓を感じるために、つまり無垢や誠実、温和、愛情への飢餓を感じるための世界であった。

いや、フレンツヘン、フレンツヘン・ゲッツよ、何という穏やかで、甘美な明かりに包まれ、汝の可愛い姿は、この醜く歪んだ混乱の中、輝いていることか。汝の許以外、どこに平和、庇護、休息があろう。いや、フレンツヘン、フレンツヘン、どうして汝は、哀れなハンスにかくも大きな痛みを用意する羽目になったのであろう。どうして汝は、彼のことでかくも大きな苦痛に耐えなければならない羽目になったのであろう。何故汝ら二人は互いにかくも苦しめ合うことになったのか。その上退役少尉ルドルフ・ゲッツ殿の意志、善良な意図に全く反してまで？

いや、ルドルフ少尉は、全く摂理の協議に呼ばれなかったのだ。彼はしばしば自分のことで精一杯であった。運命は自らの経過を辿り、すべての試練期間は、いつかこの飢餓の地上の営みでは終了しなければならない。

聖職候補生が癒えて以来、フレンツヘンは彼のこともはや臆して避けることはなくなった。テオフィル・シュタイン博士がこの家で一層力を得るにつれ、この哀れな姪は、博士と善良なハンスの間の関係は、自分が想像していた関係とは必ずしも同じでないと更に明瞭に気付いた。伯母が聖職候補生にその家庭教師職を解雇したその当日、フレンツヘンは自分の部屋に座っていて、喜びの涙を流し、その上、自分の母親の名前を呟いた。これらの哀れな孤児の娘達は、大きな思いがけない幸運に出会うと、よくそうするものである。それから彼女は自分の涙を拭いて、最後の嗚咽と湿ったハンカチに対し笑い声を込めた。

「親愛なるルドルフ伯父さん、有り難う、有り難う。ほら、その通り、いや、そうよ。 — 有り難う、有り難う」。

それから彼女は下りて来て、昼食の自分の席に座った。この食事の間、精神的雰囲気はいつもより重苦しく、伯母はいつもより有毒に気分を害していたが、フレンツヘンの愛らしい心は久しく、長いこと経験したことがないほど自由に軽快に動悸した。それにあたかも聖職候補生ウンヴィルシュも、これを即座に感じているかのようであった。彼も周

りの人々をより屈託なく、心地良く見ていた。人々の言動はもはや以前の劣等な影響を彼に与えなかった。フレンツヘン・ゲッツはもはや彼の目を避けず、彼は自由に呼吸できた。

そうに違いなかった。 — かくも長い間、単調な窒息状態で醸成されたものは、結局その全く赤裸な、悲惨な姿で出現するに違いなかった。危機は間近の手の近さにあった。現在、その厄災が把握し得る確かな手触りの外観を有せずに進行していても、枢密顧問官殿の静かな高貴な家を最大規模の混乱に陥れ、町全体の話題とするような落雷は避けられなかったであろう。邪悪な拳が固められて、威嚇的に門を叩いて、すべての睡眠、すべての幻惑に終わりが告げられよう。 —

十月の最初の日々、長く厭わしい雨の後、自然がその不機嫌を後悔しているように見える何日かが続いた。倍加した愛想を振りまいて、快適に過ごそうと努めていた。太陽が雲間から覗いて、三十六時間という短い間、その一年はその年増の美貌を見せた。そしてこの愛らしい瞬間を利用する能力と意欲のある者は、 — 急ごうとしたかもしれない。というのは、何らかの後悔を全面的に信用することは難しいからである。

恵み深い奥方は、その夫に命じて、一日か二日休暇を取るようにさせ、夫と大事なエメを親しい或る家庭のさほど遠くない田舎の荘園に誘った。この一家は夙に告げられていた来訪を極めて高い蓋然性で喜んでいて。

クレオーフェアはこの誘いに乗らなかった。彼女は田舎を根本的に憎んでいて、この田舎で耕作している一家をほとんどそれ以上に憎んでいた。彼女は自然の美しさに対するセンスを有しなかったが、またこの敬意に値する家庭の結婚有資格者の長男に対しても自分の趣味ではないと思っていた。この長男はこの美しい娘を、その輝かしい、健康な、しかし若干出目気味の目とそのおずおずとした、大抵失敗に終わる会話の試みで死ぬほど退屈させていた。クレオーフェア・ゲッツは、自分の気まぐれ、気分、行き先、行き方について説明する習慣がなくて、家に留まり、彼女の両親が出発するのを満足の溜め息を吐いて見送り、午後は片頭痛を病み、テオフィル博士との面会を断らせ、夕方は自分と親しい一家とオペラに出掛け、そこではテオフィル博士を断ることができないでいた。頭痛が激しくなって、彼女は帰宅し、自分の部屋に閉じこもったが、部屋に入る前に、珍しく自分の従姉妹に一回接吻をして、従姉妹を「哀れな善良な娘」と呼んでいた。彼女は実際落ち着かない夜を過ごしたに違いなかった。というのは翌朝、彼女はとても遅く、とても虚脱して、神経質になって現れたからである。彼女はフレンツヘンから同情されて、高く昇った陽光に注意を向けさせられると、余計なことを、と釈明し、従姉妹のことを「単純な娘、受難する以外何の意志もない娘」と呼んだ。そう言いながら、彼女は泣いていて、しかし次の瞬間には、ピアノの許に座っていて、この上なく甲高いアリアの回転の中に没入していた。昼頃には彼女はほとんど放埒に陽気になっていて、食事の間、彼女はハンスにこう告白するよう要求した、自分[彼]は、知り合った最初の時、途方もなく彼女に惚れていましたが、自分の名誉正しい性格は次第に正しいものを見つけまして、今では「穏やかなフレンツヘン」に向かっています、と。彼女の頬はとても熱くなっていて、彼女は、自分が自分の食卓仲間を陥れた混乱のことで声高に笑い声を上げた。彼女はこましゃくれた肩のすくめ方をして自分の母親のことを話し、彼女の父親のことを「哀れな虫」と呼び、自分の弟を形容詞抜きで「虫」と呼んだ。彼女は従姉妹にこう告白するよう強要した、この家は自分[彼女]にとって一つの地獄でありました、と。そして聖職候補生にこう白状す

るように頼んだ、自分はより快適な箇所を色々、「一息つくために」存じております、と。彼女は筆舌に尽くしがたいほど激しく、待機している従者に当たり、従者を追い出して、こう告白した。自分はとても「不作法な娘」で、フランツィスカは「哀れな愛しい子」ですと。彼女はハンスとフレンツヘンの幸せを祈念して飲み、自分のことを大目に見て欲しいと頼んだ。それから彼女は新たに片頭痛に襲われ、再び自分の部屋に入り、門をした。五時頃、すでに黄昏始めた時、彼女は外出した。

ハンス・ウンヴィルシュは、午後ずっと自分の窓辺に座っていて、「何か理性的なことを企画する」ことが出来ずにいた。彼は一冊の本を開けた、しかしまた遠ざけて、秘かに震えながら、パイプに煙草を詰めた。それは自分のトランクの一番奥から取り出したものであった。しかしパイプは直にまた終わってしまった。この家では禁煙であることを、パイプも自覚しているかのようであった。下の方を通り過ぎて行く騎乗者や歩行者、馬車の混雑を彼は見下ろして、自分の注目をワートルロー勲章を付けた口髭の老手回しオルガン弾きに向けようとした。しかしこれも上手く行きそうになかった。彼は万事、再三、家の内部のことに引き戻された。ある抗しがたい力によって、彼は通路や階段での微かな物音に耳を澄ますよう強いられた。

彼女の軽快な足音かな。...違う、違う、単に侍女の忍び足だ。彼女はモール付きのジャン同様、家庭教師殿とそれにフランツィスカ嬢を鋭く見張り、何か事件があったら、詳しく報告するよう依頼されていたのである。

彼女の甘美な声かな。馬鹿な。外の並木道の一人の老婆の声で、燻製ニシンを愛好者に提供していたのである。

いや、溜め息がこの世界を改善出来るとしても、この世界は夙にもはや改善の能力はなかったであろう。いや何としばしば、何とはなはだ聖職候補生ウンヴィルシュはこの祝福された午後、溜め息を吐いたことか。彼は自分の部屋のドアを凝視した。そして妖精が呼ばれずとも、然るべき時にやって来るかの快適なお伽噺をすべて思い出していた。彼女が来ずに、彼は、自分は阿呆だと百回自分に言った後、窓辺に戻ることに五十回目となった、下の陽気な人生を眺めることになった。彼は額を窓ガラスに押し付け、また長いことそのように立っていた。しかし突然彼は後ずさって、より鋭く見やった。多彩な混雑の中、一人の人影が抜けて来た、黒っぽい色褪せた人影であった。木々の下からゆっくりと貧しい身なりの若い女性が現れ、枢密顧問官ゲッツの家に向かい合って静かに立ち止まり、その家の窓を見上げた。しかしハンス・ウンヴィルシュは、この女性を、この女性とは単に二回会っただけで、その時からすると随分変わっていたのであるが、すぐに見分けた。

それは、彼がシュタイン博士の住まいで出会った小さな、以前はとても陽気であったフランス人女性であった。あたかも彼女の目は、世にも悲痛な寄る辺なさの中、彼を、ハンス・ウンヴィルシュを探しているように見えた。彼はとても奇妙な不安を感じた。一 彼は自分の帽子に手を伸ばして、この感情の整理がまだ付かないうちに、階段に出ていた。彼は家から出て、素早く噴水と芝地の周りを回って歩き、車道を越えて、公園の木々の許へ歩んで行った。するとその黒い人影は消えていた。ハンスはその人影を探して見回したが無駄であった。自分の空想がまたしても錯覚へ導いたのであろうか。彼は一瞬、疑念を抱きながら立っていた。しかし陽は照っていて、大気はとても爽やかであった。

一 彼は家に戻らず、ゆっくりと木々の中を散策した。勿論彼は大抵の人々が歩いて

いる幅の広い道をすぐ後にした。藪の中を通じて曲がりくねった、人通りの少ない小道を彼は探した。この小道では、頭を垂らして歩いたり、好んで理由もなく立ち止まったりする人々がすべて最も多く見いだされるのである。しかしこの日にはほとんど、全く荒涼とした道はなかった。人々は皆外に出掛けていた、一 皆である。昼食を食べた人々がいて、余りに沢山食べた人々、それに昼食を全く食べてない人々がいた。更に馬車で行ける人々がいたし、松葉杖で行かなければならない人々がいた。輪の中を跳ぶことを、自分の品位に悖ると見なすませた子供がいたし、また好んで輪の中を跳ぶであろう子供っぽい老人もいたが、しかしこれは実際は出来ず、その代わり若い娘達に惚れた視線を送っていた。まだ人の座っていないベンチを見つけるのはとても難しかった。誰もが目にすることが出来る場所では、何も隠すものを持たないか、それどころかなお何か見せるものを持つ人々が座っていた。隠れた隅に恋人のカップルとか、自分達の劣等な服を恥じる人々が座っていた。ハンスがやっと空いていると思った唯一のベンチには、背もたれに正書法の乱れたメモが書かれていて、彼を追い払った。

鉛筆でこう書きなぐられていた。

「私はルイーゼのために、矢も楯もたまらず、アメリカへ発とうと思う。コーブレンツ出身のベルガーがこちらへやって来て、これを読んで、鐘路地の我が老親達にこの件をよろしく伝え、老親達が余り騒がずに、私の食事を待つ必要はないと計らってくれたら、友達甲斐のある奴と思おう」。

このやくたいもない男が、駆け落ちしようと、コーブレンツ出身のベルガーが鐘路地へ散歩しようと、聖職候補生がそのことを気にかける理性的理由は勿論何もなかった。一 しかし彼はこれを気にした。鐘路地へ出掛けて、コーブレンツ人がやって来たかどうか、そして老親達がもはや放蕩息子を食事もせず待っていないかどうか問い合わせることは自分の義務ではなかろうとしばらく熟慮した後で、彼は飛び上がり、別の席を探すことにした。このベンチに座っていることは、もはや我慢ならなかった。

或る短い小道を行くと、彼はかのロマンチックな水面、かの油っぽい緑色の運河に至った。これは公園の遠方の部分を美化し、顕微鏡や滴虫類のすべての愛好者の心をうっとりさせるとさせるに違いなく、いずれにせよ、新しい春のたびにいつも、まことファラオに対する蛙の群れ[出エジプト記、8]の楽しげな、メロディー豊かな生存を可能にする所である。

ここには、恋人のカップルが決して腰を下ろさない小さな場所があって、よく死体が陸地に引き上げられる、かなり深い水辺の前に一つのベンチがあった。まことに湿って、むっとする土地にある、まことに隠されたベンチで、すでに多くの木々や藪がその葉を落としているこの季節でさえ、簡単に見つからないベンチであった。そのベンチが全く突然眼前に現れた。狭い道が、密に鬱蒼とした茨の多い灌木の周りを回って、水辺で行き止まりに箇所である。そしてこの惨めで不快な印象を完璧なものにするために、動きのない沼のような流れを示す黒い横木付きの黒い支柱の他、何も欠けていなかった。一

頭を垂れて、ハンスは狭い道に従って行き、茂みの背後に出たが、しかし凝然とびっくりして立ち止まった。すぐ彼の眼前に半ば朽ちたベンチの上に、彼が自分の意志に反して探しているもの、先ほど彼を枢密顧問官ゲッツの家から誘い出したものが座っていた。一 あの小さなフランス人の、影絵になったような娘で、以前テオフィルの部屋で、彼の不器用さを明るく笑った娘であった。

疑いもなくあのフランス人の娘であった。しかし以前の面影はほとんど幾らも残っていなかった。彼女は病氣、本当に病氣であるように見えた。彼女はまだ手袋をしていた。しかし彼女の小さな、以前は可愛らしかった布靴同様、千切れていた。凍えからまとっていたショールは使い古され、色褪せていた。 — 彼女の同郷人、ジャン・ド・ラ・フォンタエヌ[寓話作家 1621-1695]の哀れなコオロギに似て、全くそっくりであった[コオロギと働き蟻の話]。

そして彼女は聖職候補生ウンヴィルシュを即座に見分けた。というのは素早く彼女は起き上がって、ショールを合わせて、急いでベンチの自分の横に置かれていたハンカチを握ったからである。不安に満ちた、若干芝居がかった怒りの様子で、彼女は聖職候補生ウンヴィルシュを見つめた。

「あら、あの折のムッシュー」。

彼女は彼の側を通り過ぎようとした。しかし彼はその道を遮り、彼女の黒い目の軽蔑した視線を静かに受け流した。

「ムッシュー、あなたの友達はならず者よ」と彼女は叫んだ、拳を固めていた。「あたしを行かせてください、 — 何のご用」。

「我がお嬢さん」とハンス・ウンヴィルシュは穏やかに悲しく言った。「あのテオフィル・シュタイン博士は私の友ではありません。お聞きください、我がお嬢さん」。

「あたしはあなたの言うこと、聞きとうありません。あなたなんか見とうない。何もこの世で見とうない、この水に映るあたしの姿以外何も」。

これは性急に、一種野蛮に叫ばれた。ハンスは思わず彼女の腕を握って、彼女が沼に飛び込まないようにした。しかし彼女は振り解いて、辛辣に笑い、それから両手で顔を覆い、そして同様に激しく泣いた。

「我がお嬢さん」とハンスは叫んだ、「貴女は私に厳しい言葉をかけられた。貴女は私をひどく責められた。私は貴女に対し何の負い目もありません。出来ることなら、貴女を助けたいのです。 — もう一度言います。私はシュタイン博士の友ではありません。 — もはや友ではないのです」。

彼女はゆっくりと両手を下ろして、もう一度聖職候補生の目を見た。

「貴女も、たった今貴女が発されたその人のことを告発しているのですか。彼の咎の一端をお話してください。それは私が引き受けましょう」とハンスは小声で言った。すると彼女は、 — 彼女は彼を頭から足先まで観察して、そして — とても奇妙であったが、 — 微かな微笑が彼女の苦悶に満ちた病的表情に浮かんだ。

「あなたは彼の友ではないのですか」と彼女は尋ねた。

「もはやそうではありません。私にとって辛いことです」。

このとき、このフランス人女性は聖職候補生の手を握った。彼女の指は鉄のようであった。

「牧師様、あたしは哀れな娘です。この異郷の地にただ一人っきりです。あたしは病気で、軽率に生きて来ました。ほんに小さな子供を授かって、でも死んでしまった。 — あたしはこの異郷の地で、ただ一人っきりにされてしまった。いや、ムッシュー、あの人は邪悪な人間です。あなたが彼の友でないのであれば、私がたった今言ったこと、許してください。 — コレ以上、何も言ウコトハ有リマセン」。

ハンスは、彼女のブローケンなドイツ語を余り理解せず、その素早いフランス語は全く分からなかった。しかし彼女の動作、彼女の表情の変化で、理解できない部分は補われた。彼は彼女をベンチに連れ戻した。そして彼が彼女の側に腰掛けて、彼女に穏やかに落ち着くように語りかけたとき、彼女は彼に手を委ねていた。五時であった。太陽は丁度木々の背後に沈んで、小さな池から白っぽい霧が昇った。冷たく薄明るくなった。ーそれは美しいクレオーフェア・ゲッツが彼女の両親の家を去った時間であった。

ハンスは、このフランス人の娘に、出来るだけ上手に、シュタイン博士に対する自分の関係について必要なことを語った。それから徐々に、彼女の人生の悲しい話と、クレッペル通り出身のモーゼス・フロイデンシュタインがその中で果たした厭わしい役割について知った。

アンリエット・トゥリュブレは、人生の極めて平坦な道を歩むよう定められていなかった。テオフィル博士も多分この観点では、彼女の運命を余り変えたわけではなかったであろう。彼女は両肩にアバンチュール好きな頭を乗せていて、ただ刹那的に生きていた。彼女はパリの女性洋裁師の助手であって、テオフィルと知り合い、その心を得た。彼女は元来彼を愛したわけではないが、彼のことは彼女の気に入った。それに博士のパリの男友達や、人生を享受する彼の流儀も彼女の好みに合っていた。彼女は一個の派手で陽気な花輪の玉虫色のリボンであった。そしてこの花輪がよくあるように壊れて、テオフィル博士がドイツへ戻ると、やがて彼女は博士が恋しくなった。彼女はこの哀れで善良な「ドイツ人」について、様々な奇妙な話を聞いていた。ドイツの地の人々は正直で、音楽好きで、とても金髪碧眼である。ーこの人々は多分文明化の点で遅れていよう、そして若干単純であろう。しかしこれは、阿呆で、背の高いイギリス人とは全く別様である。この善良なドイツ人ときたら、皆、帽子や頭巾、人造の花、シャンペンをパリから取り寄せる。だから「善良なフランス人」のすべての可愛くて利口な子供は自分の幸せを、そこのドイツ人の地で試さなければならない、すべての霧や氷、雪にもかかわらず、すべての狼や白熊、妖精の王[魔王]、妖精、その他の化け物にかかわらず。ある朝アンリエットはシュトラースブルクの駅に革トランク一つと、はなはだ多くの様々な小箱、筐を持って現れ、ーライン川への旅行ご一同様も見つけ、ーホムブルクやバーデンバーデン等々への「進め、祖国の子供らよ」ーあるいは「旗のある所、そこがフランスだ」とか、「住めば都、そこが我が祖国」の連中を見つけた。そしてある別な朝、テオフィル・シュタイン博士は、自分のドアに微かなノックの音を耳にした。アンリエット・トゥリュブレは、彼を「再発見」したのであった。

ここまでは万事異常なしであって、両者のどちらも相手に何も非難できなかった。しかしさて、別な天の下では、関係が別様になった。哀れなアンリエットは見棄てられ、助言も援助もなく、全くテオフィルの両手に委ねられてしまった。彼女は軽蔑され、虐待される玩具となった。そして彼女の軽薄な蝶の羽根を覆っていた儂い多彩な鱗粉は、直に拭き取られ、吹き飛ばされた。シュタイン博士は今や名声を保たなければならなかった。この博士は十分にひ弱で、この小さな哀れなパリ娘を自分の側から突き放すことは出来ないのであったが、しかしそれでも十分に強引で、彼女を深く下に押し付け、這いつくばらせて、彼女は彼に奉仕して、その言うことを聞かなければならず、その上決して、彼の諸計画や希望の邪魔をしてはならないのであった。彼の陰謀と咎のお蔭で、彼女は自分の洋

裁の手を発揮できなくされていた。ただ彼女が全く彼に依存するようにして、彼は彼女に対して自分の暴君ぶりを全面的に発揮していたのである。彼が彼女のことに飽きると、彼は彼女のことを全く砕けた、全く危険のないものと見なした。それ故彼は躊躇うことなく、彼女に門戸を閉ざして、彼女を自らの運命に任せた。病院で彼女は九月半ば頃に一人の子供を生んで、十月二日にこの子供を亡くした。それは邪悪なこの場所で、この動きのない緑色の水辺のベンチのことで、聖職候補生ウンヴィルシュは十月四日、哀れなアンリエット・トゥリュブレがそこに座っているのを見いだしたのである。

裏切り者、消エナサイ。

第十一章

アンリエット・トゥリュブレは、自分の話しを語った。聖職候補生ウンヴィルシュは、それを聞いて熱くなったり、冷たくなったりした。しかし彼が普通の事柄にかくも興奮してしまうこと、そしてどんな次の出来事であれ、滑稽なものとか無意味なことと思うことがとても難しかったということは、彼の不幸であった。彼は呆然として座っていたが、最後に突然このフランス人女性は跳び起きて、足で情熱的に地団駄踏みながら、叫んだ。

「いや、あの人、あたしを邪険に扱ったよ。でもあたしは精一杯復讐してやる。あの人のお世を邪魔してやる。たとえ手遅れになりそうでも。あの女の許に行くつもり。―― 絶対。その美しい御令嬢に、あの人のお世をばらしてやる。―― ユダよ、浅マシイ男。お世なんかさせない、――」。

「クレオーフェアか」とハンスは叫んだ、「いやはや、彼女のことだ、お嬢さん、お嬢さん。貴女はこの件のご存じか。いや、頭がクラクラする。―― 私は、我々は、貴女は、彼女の許へ行きなさい。彼女はこのことを知らなければならない。そうだ、そうだ、絶対そうだ。彼女は彼の手には落ちるはならん。彼女を救い出さなければならない。たとえ彼女の意志に反してでも」。

「あたし、あの人がおの美しくて若いレディーを追いかけているのを良く知っていた。向こうの公園側の家よ。あたしとても、彼女、―― 哀れな嬢ちゃんに嫉妬した。彼女の家の前にあたし立って、笑ってやった。何テコトデショウ。あたしの心は血まみれになった。とても腹が立って、意地悪になって、哀れな心。この男からあたし彼女を助けてやりたい。行キマショウ、牧師様」。

夕方は冷たく、薄暗くなった。晴れた天気は過ぎ去って、風が池の上の霧を動かし、小枝を揺すり始めた。ハンスは、彼が大学から母親の臨終の床へ向かったかの日のように、呻き、嘆息し始めた。遠方でざわめく物音がし、近くでは軋む音がし、木々の間で遠方の明かりやランタンが小枝のようにあちこち揺れるように見えた。黒い天での大都会の炎のような反映は、恐怖の最終深淵からの息吹のようであった。

さて散歩者達の雑踏は夙に散っていた。金持ちも貧乏人も引きこもっていて、まだ公園の通路をさまよっている影のような形姿は信用ならなかった。できれば彼らを避けるのが無難であろう。遠方の享樂の飲食店から風がダンスの音色を運んできた。断片的で、―― 千切れていた。聖職候補生のすぐ側にアンリエット・トゥリュブレは、歩み寄って、深く疲れて立ち止まったままでいると、彼が自分の腕を彼女に差し出した。ガス燈の

ランタンは木々を通じてますます明るく盛んに煌めいた。 — 通りが見えて、向こうに枢密顧問官ゲッツの家があった。

二人の徒歩の連れは一瞬立ち止まった。

ただ一つの窓に明かりがあった。

「あれは彼女の明かりではない。あそこに彼女はいない」とフランス人女性は言った。

ハンス・ウンヴィルシュは同意して頭を振った。彼はこの同伴のとき、フランツィスカの名前を発音できなかった。いや、この不穏に満ちた、禍々しい、暗黒の夜、この照らされた窓について何を言えよう。平安と憩い、 — このフレンツヘンに神の祝福あれ。聖職候補生は自分の頭を天の薄明の反映の方に上げた。それから彼は穏やかに哀れな女性の手を握った。この女性は木々の暗闇から出る際にまた彼の側から離れていた。

「行きましょう、 — 良い道を歩きましょう」と彼は言った。

二人は小さな庭園を通って行った。ハンスはドアの鐘を鳴らした。ジャンが開ける気になるまで、二人はかなりの時間待たなければならなかった。ようやくジャンが来て、彼は家庭教師の連れの女性にとっても驚いていた。しかしそれ以上にこうハンスに強調されて、この驚きの表明は吹き飛ばされた。

「恵み深い御令嬢は家にいますか」。

ジャンは凝視し、凝視し、黙った。しかし次の瞬間、聖職候補生の手が彼の肩章を掴んでいた。

「即刻御令嬢に私の面会を伝えてください、 — クレオーフェア御令嬢に」。

この前代未聞の厚かましきで、この上品な青年は数瞬、完全にいつもの不作法な平静さを失ってしまった。しかし彼がようやく正気に戻ると、果たして彼の怒りは際限もなかった。そして家政婦や恵み深い奥方の侍女が現れた。小さな料理番の娘は奥の隅のところでおずおずと見ていた。哀れなアンリエットは玄関の明かりから出来るだけ、奥の暗い所に引き下がっていた。ハンス・ウンヴィルシュは、皆の厚かましい疑わしげな視線を受けて、興奮と不機嫌の余り、ほとんど死ぬ思いであったが、声を上げて、クレオーフェアへの自分の問いかけを繰り返した。すると階段の手摺りの上から、フランツィスカ・ゲッツが身を乗り出した。彼女は手に小さな明かりを持っていた。

「恵み深い御令嬢は家にいません」とジャンはがらがら声で言った、「ちなみに御免こうむりたいことですが、 —」。

「可哀想ナ彼女」とフランス人女性は叫んだ。

「まあ、ウンヴィルシュさん、何が起きたのです。私の従姉妹がどうしたのです」とフレンツヘンは、下りて来ながら叫んだ。

「彼女は家にいないのですか。会って話す必要があります。いや、どこへ行ったのです」。

「彼女はどこへ行くとも話されなかった。黄昏時にこの家を出ました」。

「ではあなたが聞かなければなりません。あなたが何をすべきか私どもに言わなければなりません。多分その方が良いでしょう」。

フランツィスカも驚いてこの見知らぬ女性を見つめた。それから彼女は言った。

「私が、貴女に、 — 私の従姉妹の役に立つのであれば、 — あら、この人、

気を失いそう」。

フランス人女性は頭を振った。

「いえ、いえ、大丈夫です。 — 何デモアリマセン」。

「私の部屋にお出でください。何があったのです。何を私にお話ししたいのです。まあ、とても青ざめていらっしゃる。 — 私の腕に掴まってください」。

フランス人女性はまた頭を振った。彼女はこの静かな、愛らしい、無垢の人物に対して臆して引き下がり、ハンスの方を向いた。

「別の女性がいないのであれば、この家で何の用がございましょう。牧師様、そのことを彼女に伝えてください。この家にあたしは入りとうありません。あたしは去りたい」。

「駄目です、駄目、 — 貴女は残ってください、アンリエット・トゥリュブレ」とハンスは叫んだ。しかしその異国の女性は自分のショールをよりきつく自分に巻いて、聖職候補生に手を差し出した。

「さようなら、牧師様、あなた正直な男」。彼女はフランツィスカの方を向いて、頭を傾げて、小声でゆっくりと囁いた。

「私ノ為ニ祈ッテ下サイ」。

フランツィスカは手を彼女の肩に置いた。

「私はあなたをこのまま去らせはしません。あなたは不幸で病気です。逃げないでください。この家にあなたは良くない知らせを伝えに来ました。どうぞ上がって、私の腕に掴まってください。あなたも上がって、ウンヴィルシュさん。 — クレオーフェアはきつともうすぐ戻るでしょう」。

穏やかにフレンツヘンは窮状のアンリエットを導いて、階段を上がらせ、聖職候補生に付いて来るよう合図した。一方召使い達は頭を寄せ合って、肩をすくめていた。

初めてハンス・ウンヴィルシュは、フランツィスカがその伯父の家で住まいとしているその部屋に入った。彼は敷居を越えるとき、心臓が震えた。

それは夢のようであった。窓の前は風が呻いて、木々の葉擦れの音やざわめきがあり、 — すべては全くかつて、まず甘美なフレンツヘンの顔が暗闇から浮かび上がって、初めてルドルフ・ゲッツがモーゼス・フロイデンシュタイン博士を一人の悪漢と呼んだあの時と、つまりヴィントハイムの郵便宿駅亭と同じでなかったか。

今日の不安な夕べとかの夕べとの間にはどれほどの時の隔たりがあったろうか。

この劣等な使い古された服とショールのこの青白い、悲しみにやつれた異国の女性は誰か。どうして彼女はこちらのこの家に来たのか。彼女はこのフレンツヘンと何の関係があるのか。これは一体何という家か。

青春の友はどこにいる。どこにクレッペル通り出身のモーゼス・フロイデンシュタインはいるのだ。

ぞっとする、無慈悲で、冷たい外の風は、こうしたすべての質問に対する一つの答えのようであった。

「抵抗してみろ、抵抗してみろ。我々が勝つに決まっている。我々は春に勝つ、青春に勝つ。誠実と無垢に勝つ。おまえらの主人は、無常と利己心だ。抵抗してみろ、抵抗してみろ。おまえらが抵抗する姿は我らの楽しみだ」。

そして薄暗さがまたしても威嚇するように窓の中を覗いた。あたかも他のすべての

明かりを飲み込んで、フレンツヘンの小さなランプの輝きのみが、この世のすべての光輝と照明の中で残っているかのようにであった。ハンス・ウンヴィルシュは、このランプの狭い照明圏の中に立っていて、あたかもこのこのランプのみがすべての困窮の庇護となっており、ここでのみすべての飢餓の満ちが、ここでのみすべての痛みに対する慰めが見いだせるような気分であった。彼はほとんど息をする勇気がなかった。

テーブルの上に一冊の開かれた本があつて、それに女性の手仕事があつた。一 フレンツヘンが下りてくる前に座っていたかの椅子には、今異国の軽率な女性が座っていた。一 これは現実には見えない、一つの空想であろう、最近の高熱の時の空想の一つだ。

違う、違う。これはフレンツヘンの穏やかな甘美な声だ。そしてこのフレンツヘンが手を哀れなアンリエットの肩に置いた。アンリエットは震えて、嗚咽して、顔を隠している。フレンツヘン・ゲッツは哀れなアンリエット・トゥリュブレにフランス語を話した。するとハンスは、この言葉を単に書物からのみ知っているのであるが、彼女の言っていることが、分かった。そしてこの異国の女性は、母国語の最初の音声を耳にして、涙に濡れた目を上げて、全霊で聞き入り、それからフレンツヘンの手に接吻をした。フランス語で彼女は二度目の悲しい自分の物語を語った。

フランツィスカはこの物語の最中、ますます不安げに聖職候補生の方を見た。彼女は震える手で、自分が身の支えにしているテーブルを握った。

「まあ、ウンヴィルシュさん、そしてクレオーフェアは、クレオーフェアのことです。どこにクレオーフェアはいるのです。今帰って来て欲しいものです、この今」。

彼女は窓の所へ行って、窓を開けた。風は開き窓をほとんど彼女の手から奪い、荒々しく侵入してきて、ランプを明滅させた。公園の縁のガス燈の炎は、そのガラスの覆いの中で、あちこち揺れて、赤く、不確かに震える明かりを路上に投げていた。しかし通りは人影がなく、その転がる音が、耐え難いほど長く遠方に留まっていた一台の馬車が、停止することなく通り過ぎた。

「それに彼女の父親と母親のことです。何をしたらいいのでしょうか。何をしたら、ウンヴィルシュさん」。

ハンスは自分の時計を見た。

「九時です」と彼は言った、「フランツィスカ御令嬢、落ち着いてください。彼女はきっとこれ以上長くは外出なさらないでしょう。辛抱強く待たなければなりません。これが私どもの出来るすべてです」。

フレンツヘンは異国の女性の方を向いていた。自分の不安や興奮にもかかわらず、哀れなアンリエットを労る気持ちが十分に残っていた。彼女は小声でこの女性に囁きかけた。アンリエットは再三彼女の手を接吻した。ハンス・ウンヴィルシュは窓辺に立っていて、両女性の小声の言葉と嵐の声高な声に耳を傾けていた。ガス燈ランタンの揺らめく明かりを通じて、時折人影が過った。更に幾台かの馬車も通過した。しかしクレオーフェア・ゲッツは相変わらず帰って来そうになかった。

フランツィスカは暖炉の火を掻き起こした。彼女はドアを開けて、家政婦に、この女性は耳と目をかなり前から交互に鍵穴に当てていたのであるが、お茶と若干の食べ物を、半ば気を失っている異国の女性のために用意するよう頼んだ。夜は更に更けるにつれ、彼

女の不安は一層大きくなった。

食欲にアンリエット・トゥリュブレは、食べて飲んだ。それから凝固したガラスのような目で今一度部屋の中を見回し、それから頭を胸に垂らした。 — 彼女は眠った。

それは深く、疲れ果てた眠りであった。

「哀れな女[ひと]、不幸な女[ひと]」とフランツィスカは嘆息した、「何という夜でしょう。何という夜でしょう」。

彼女は眠っている女性が落ちないように、腕を女性の周りに回した。彼女の巻き毛がこの罪深い女性の額に触れた。たとえハンス・ウンヴィルシュが千年の年を迎えたとしても、彼はこのイメージを決して忘れることが出来なかったであろう。

彼女は彼の方を見やった。

「手を貸してください。この女性を寝椅子に寝かせましょう。しっ、 — この人何か言っています」。

この異国の女性は寝言を言った。 — ひょっとしたら彼女の母親の名前かもしれない。 — ひょっとしたら彼女の守護聖人の名前かもしれない。ハンスが彼女の腕を握って、小さなソファまで運んだとき、彼女は目を覚まさないままだった。

ソファでフレンツヘンは枕を整えてやり、この女性の外套とショールを掛けてやった。

十一時の時が打った。クレオーフェア・ゲッツは相変わらず戻って来なかった。

「何という夜でしょう。何という夜でしょう」とフレンツヘンは口ごもった、「私どもは何をしたらいいのでしょうか。何が出来ましょう」。

彼女は突然跳び上がって、拒むように両手を突き出した。

「二度と家に戻らないつもりで、出て行ったのであればどうしましょう。今夜両親の家から永久に出て行ったのであれば。嫌です、嫌。こう考えるととても恐ろしい」。

「彼女がそれほど目が眩んだ筈はありません。考えられません」とハンスは叫んだ。「本当にむちゃ過ぎます。 — 有り得ません」。

「まあ、不安でたまらない」とフランツィスカは口ごもった、「雨かしら」。

雨であった。最初はただパラパラと滴が窓ガラスに当たっていた。しかしやがてまた馴染みのざわざわという土砂降りになった。嵐は驟雨を陸地に、公園に、大都会に突き付けた。

「彼女の母親は、一切の成り行きにかかわらず、この人、 — このシュタイン博士との縁組みを決して認めなかったことでしょう」とフランツィスカは行った、「夫人は博士を好んでそのサロンに迎えました。でも夫人は気位の高い女性で、クレオーフェアの将来をすでに全く別の具合に算段していたと思います。夫人は旅立つ直前、いつもの夫人の流儀で、この『輝かしい縁談』について語っていました。私の従姉妹が、いつもの異論好きで、このようなステップに踏み込んだのであれば、恐ろしいことです。しっ、 — 一台の馬車です、 — 有り難い、彼女かもしれない」。

二人はまた耳を澄ました。 — 一瞬後、ハンスは頭を振った。フレンツヘンは心が折れて、椅子に沈んだ。アンリエット・トゥリュブレは、しっかりと深く眠っていた。

「彼女は全生涯を棒に振りそうだ」とハンスは自らに言った。しかしフランツィス

カはこの微かな言葉を聞いていた。彼女は縮み上がって、身震いし、頷いた。

「棒に振りそうです」。

「この男は、彼女の魂と体とを殺めてしまうことだろう。彼奴の正体がそうで、私がそのことを言明しなければならないのは、何とも情けない」。

フレンツヘンは再び椅子から立ち上がった。彼女は聖職候補生に歩み寄って、小さな震える手を彼の腕に置き、ほとんど聞き取れない声で囁いた。

「親愛なるウンヴィルシュさん、私は貴方に大変失礼なことをしていました。お許しくださいませんか。大目に見ていただけますか。それで私はとても辛い思いをしました。沢山の、沢山の涙を流して、眠れぬ夜を過ごしました。哀れな娘のこの誤解を許してください。私の伯父に免じて、私を許してください」。

ハンス・ウンヴィルシュは、両足がぐらついた。彼は彼女の前に跪いて、彼女の服の縁に接吻したい想いであった。

「いや、御令嬢、 — フランツィスカ」と彼はどもった、「私に失礼なことをしたのは貴女ではありません。私ども二人がこの世界の紛糾に巻き込まれていたのです。邪悪な力がその戯れに二人を拉致して、二人はこれに抵抗できなかったのです」。

「そうでしょう」とフレンツヘンは言った、「私どもには抵抗できないことでした」。

雨は奔流となって流れ落ちて来た。一頭の野獣のように、風が窓を揺すった。しかしこれらが夜と結託して、その悪さをし、脅しても、クレオーフェア・ゲッツが両親の家に戻って来ないこの夜でさえも、更にもっと恐ろしいこと、不気味なことをもたらしはしなかった。二人は神の愛する手の中という祝福にあって、もはや破滅や、死神、利己心の国を告げる深淵からの先触れではなかった。

風に真夜中になっていた。クレオーフェアは相変わらず戻らなかった。ハンスとフレンツヘンは眠っている異国の女性の側に座っていて、小声で互いに話し合っていた。いや、二人には話すべきことが沢山あった。

二人は愛について話していなかった。 — 二人はそんなことは毛頭考えていなかった。二人は単純に、これまでどのように生きて来たか語った。とても紛糾して見えていたすべてが簡単に解けてしまった。かくも暗くて脅威的であったすべてが、しばしばただ一つの言葉によって容易なもの、ただ慰撫するものとなった。

フランツィスカ・ゲッツは自分の父親について語った。この娘は父親について、少尉ルドルフ・ゲッツや、それどころかテオフィル・シュタイン博士とは全く別様に語った。娘の目は、自分の父親がいかに誇り高く勇敢であったか、いかに幾多の戦場で、自由のために自分の血を流したか語るとき、輝いていた。

自分の母親について、フレンツヘンは、いかに母親が愛らしく善良であったか、いかに多くの不安や不穏、困窮を、愚痴も言わずに、その変転する人生の中で耐えて来たか、そしていかにして最後、一八三六年に長い闘病の末、結核でパリで亡くなったか語った。

哀れなフレンツヘンは、いかに深くこの母親の死が父親に打撃を与えたか、そして彼が埋葬の後、元来もはや喜びの表情を見せなくなった次第を語った。彼女は善良な伯父ルドルフがこの埋葬に姿を見せたこと、そのとき小さな包みと太い節の多い杖を持った老傷病兵であったことを語った。彼女はこの両兄弟のパリでの奇妙な家政について、また更に多くの他の軍人達、すべての国々から、ドイツ人やフランス人、ポーランド人、イタリ

ア人、アメリカ人の出入りがあって、皆がフレンツヘンにとっても優しかったことを語った。彼女は両兄弟がレッスンをしたフェンシングの授業について、また二人が高等工業学校の若い生徒達や、パリの学生街[カルチェラタン]の学生達に市門前の中庭でピストル射撃のレッスンをしたことを語った。彼女は[ナポレオン一世]古参親衛隊の老いた退役のぶっきらぼうな者達について語った。彼らは両ドイツ人の知人で、カツバツハやライプツィヒ、ワートルローからの良き友達であって、彼女達と一緒にその屋根裏部屋で喫煙したり、飲酒したりしたのであった。

頭を垂れて、それから、彼女は、善良なルドルフ伯父がとうとうドイツへ郷愁を感じて、旅立った次第、それにその後の劣等な時代、悲惨さと苦悶に満ちた時代、邪悪なひどい時代について語った。ほとんど聞き取れない声でフランツィスカ・ゲッツは、自分の父親がとても弱って、救援の源泉が徐々に干涸らびて、父親がその慰謝をますます頻繁に度の強い飲み物での酩酊に求めるようになって、徐々に多くの劣等な悪巧みの連中が父親の許に押し寄せて来るようになった次第を語った。

最後にフランツィスカ・ゲッツは、更に小声で、テオフィル博士について、彼が同じ家に彼女らと一緒に住むようになったこと、彼が不幸な父親の弱みにおぞましいやり方でつけいろうと考えていたことの次第を語った。自分はどうしようもなく見棄てられていたとフレンツヘンは述べて、ハンス・ウンヴィルシュは唇を噛み、想像の中でクレッペル通り出身のモーゼス・フロイデンシュタインの喉を握り締めて、彼の体からその魂を絞り出した。

彼女の父親の死についてフランツィスカは語った。そしてこの上ない困窮の最中、ルドルフ伯父が、彼女を救うためにまたやって来た次第を語った。

テーオドル伯父の一通の手紙をフランツィスカは聖職候補生に見せた。枢密顧問官ゲッツは、彼の外見と話しぶりとは全く別様に書いていた。

ルドルフ・ゲッツ少尉はとても貧しくて、弟の孤児となった娘を自分が案内できるような故郷を持っていなかった。ハンスはこの時、初めて、この善良な老公がどのような暮らしをしているのか知った。彼は遊牧民風で、自分ノ財産ヲ全テ運ビナガラ[身一つの賢人]、あちこち移動し、ただ冬だけ、いづこかの同年齢の戦友の許、定まった宿に入り、大抵は遠くのバルト海沿岸のフォン・ブラウ大佐の許であるという次第を知った。

ルドルフ少尉は、孤児の娘をただパリから連れて来ることが出来るのみで、安全な家を彼女に提供できなかった。そこにテーオドルの手紙があった。これは枢密顧問官ゲッツ夫人の口述筆記によるものではなく、彼女の目の許で書かれたものでもなかった。そしてこの手紙を頼りに、少尉は姪を自分の弟テーオドルの家へ連れて行ったのである。

「それで、貴女とヴィントハイムの郵便宿駅で幸運に出会ったわけです」とハンス・ウンヴィルシュは叫んだ、「私は母親の臨終の床に向かっていました。そして少尉殿はモーゼスのことを悪漢と呼んで、嵐の風が吹いて、一そして貴女は、いや、フランツィスカ御令嬢、...何ということでしょう、何ということでしょう。それで私どもはここに座っていて、クレオーフェア御令嬢を待っているというのが一つの真実であり、一つの現実になっています」。

二人はこの名前で縮み上がり、黒い窓の方を見た。窓では相変わらず雨が流れ落ちていて、窓を相変わらず風が揺すっていた。二人はもはやこの不幸な女性の帰還を期待し

ていなかった。

フランス人女性が眠ったまま動いて、不安げにテオフィルの名前を叫んだ。フランツィスカは穏やかに、丁重に、慈悲深い手で外套をこの見棄てられた女性の肩の上まで掛け、それからまた席に着いた。

二人は自分達が最初出会ったかの晩のことを話した。フレンツヘンは、聖職候補生がいたクルドルフ伯父の気に入って、伯父がしばしば旅行の間、彼のことを話題にしたと語った。ハンス・ウンヴィルシュは、自分の母親の死と、伯父グリューネバウム、シュロッターベックおばさんについて語り、紙入れからこの両者の最新の手紙を探し出して、それをフレンツヘンに見せた。彼は、自分が、―― ハンス・ウンヴィルシュが、―― 高熱で横になっていたとき、テオフィル博士もこの手紙を読んだと語った。彼は、一つの視線、一つの閃光が、全き邪悪さと偽りの心のテオフィル博士を開示してくれた次第を語った。

さてフレンツヘンは一つの小箱を開けて、聖職候補生にルドルフ伯父のすべて揃った手紙の列を見せた。―― すべてはグリューネバウム伯父の手紙同様ほとんど判読し難いものであった。そして最近のものはすべて、バルト海沿岸のグルンツェノーからの日付であった。グルンツェノーの、フォン・ブラウ大佐の荘園に少尉は夏以来、痛風の大きな痛みの中、臥せっていて、フレンツヘンは、目に涙を浮かべて告白した。自分は、哀れな伯父さんに、ただ陽気で、快活で、満ち足りた風の手紙を書きました。どんなことがあっても、それ以外には書けなかったのです、と。そこでハンスはまた、再三また、この小さな、勇敢な、祝福に満ちた手に接吻をしたくなった。しかし彼はその勇気がなかった。しかしそれがまた最善であったろう。しかし自分自身に立腹して、彼は、自分がある時期、姿を消した少尉に対し追送した[不満の]祝福を後悔した。殊に彼が少尉のかの手紙、つまりこの老兵がいつかまた一人の教師を、悪魔の願いではなく、―― 自分の願いで、あの「恵み深い義理の妹」の家に案内し、密輸しようとするくらいなら、むしろ悪魔の祖母と一緒に逃げ出したいと惨めに白状しているかの手紙を読んだとき、深く、深く後悔した。

「貴方はかの晩に、伯父さんの心をすべて掴んだのです、ウンヴィルシュさん」とフレンツヘンは言った、「伯父はこちらへの私どもの旅の折、沢山貴方のことを話していました。そして私は―― 私も貴方のことをそれ以降の年、すっかり忘れてしまうことはなかったのです。いえ、私は沢山の時間、私に親切にしてくださった人々すべてを思い出していましたし、とても思い出す必要があったのです。いえ、ウンヴィルシュさん、私ども二人はこの家で幸せには暮らせなかった。でも私の運命はどんな重荷にも耐えることです。私はしばしば、しょっちゅう、親切なお顔、優しい言葉に、何とというかとても飢餓を感じていました。何らかの方策で自分のパンを自ら得るために、私はこの家から出たかったのですが、でも伯母はお許しにならなかった。でも貴方はすべてご存じでしょう。ウンヴィルシュさん、―― これについてもっと話していいでしょうか。やはり、この瞬間、ただ自分達自身のことばかり考えるのは不当でしょう」。

「不当ではありません」と全く普段見慣れないエネルギーを込めてハンスは叫んだ。「いや、フランツィスカ御令嬢、多分この時間、自分達自身のことを話すことは許されましょう。苛酷な冷たい世界が、私どもを生存のごく内実の中心点にまで押し詰めたのです。―― 私どもは、自らを救うために、自分達自身について語る事が許されます。この夜は

過ぎて行き、新しい一日がやって来ることでしょう。この一日が何をもたらすことでしょうか。新しい一日は多分私どもを全く新しい関係に導きましょう。明日この家は、どのように見えることでしょうか。私は去らなければなりません。しかし貴女は、— 貴女、フランツィスカ御令嬢、貴女は何をなさり、何を苦しむことになりましょうか。この家は明日、何と陰気に、恐ろしく荒涼として、死滅したものとなることでしょうか。この家での生活と比べたら、他の生存は何であれ、一つの浄福でありましょう。いや、フランツィスカ御令嬢、明日伯父殿に、少尉殿に手紙を書くことです。それとも、— いや、私に彼宛に書かせてください。貴女はここに留まらないことです。この家に留まらないことです。ここの空気は致命的です。— いや、フレンツヘン、フレンツヘン、私に少尉殿への手紙を書かせてください」。

フランツィスカは穏やかに頭を振って、簡潔に言った。

「私は留まらなければなりません。以前私が去って行けなかったのであれば、今でも私は許されません。私はこの家で楽しくはなかった。でも私を守ってくれました。それにテーオドル伯父は、—— いや、駄目です、今この哀れなテーオドル伯父を見棄てられましょうか。勿論、今、私の頭はくらくらしています。でも私は留まらなければなりません。— 私の判断は間違っていない。これが正しいことでしょうか、それに私は何も不当なことをしたくないのです。友の方、私はルドルフ伯父に、私をここから連れ去って欲しいと書くことは許されません。貴方もやはり許されません。それが正しいことだろうと、私には分かります」。

ハンス・ウンヴィルシュは敢えて行った、— つまり彼はその小さな穏やかな誠実な手に、彼に対してもおずおずと、しかし犯しがたい力で差し出された手に接吻した。熱い涙が彼の両頬に流れた。

そう、彼女の言う通りだ。彼女はいつも正しい。彼女に祝福あれ。一つの美しく愛らしい奇蹟のように、彼女はこの嵐の夜、この悲惨さと墮落の夜、フランス人娘の側に座っていて、その純潔で無垢な手を、その娘の熱い、熱病のような額に置いた。いや、いや、彼女は慈悲深く、とても善良である。彼女はこの慰謝の欠けた家に留まらなければならぬまい。

とうに二時が過ぎていた。

「友の方、これでお別れとしましょう」とフレンツヘンは言った、「彼女は帰って来ません。— 彼女は自分の運命を自分で引き受けたのです。神様がそのことをお許しになりますように、そして彼女の暗い道、彼女を守ってくださいますように。友の方、今はお別れとしましょう。私はこの哀れな女性をここで見守るつもりです。明日早朝、その他すべてのことを更に話し合ひましょう」。

「明日早朝ですね」とハンスは言った、「この夜は終わりが無いような気がします。この朝が怖くなります。こうしたすべての疑念にもかかわらず、明日は来るはずであると承知しているからです。いや、フレンツヘン御令嬢、とても長くて、しかし短い、短い夜でした。この夜は恐ろしい、しかし一杯甘美でもありました。フランツィスカ、神の祝福が貴女にありますように。— いや、何と言ったらいいか、— 新しい一日が来たら、私どもはどんな風になることでしょうか」。

フランツィスカは深く頭を垂れて、黙って聖職候補生ウンヴィルシュに手を差し出

した。大きな痛みの中、二人は互いに別れた。二人は、この暗黒の不気味な夜が二人にもたらした祝福をまだ完全には把握できていなかった。二人は互いに別れた。そして二人の心臓は音高く動悸していた。

第十二章

灰色の霧に包まれて朝がやって来た。公園の葉の落ちた梢は靄と小ぬか雨の中、浮かび上がって来た。この小枝には千切れた水滴がくっついていて、そしてこの小枝から絶えず滴っていた。この世の多くのもの同様、この朝もいつの間にか来ていた。ハンスもフレンツヘンも東の最初の陰鬱な光輝を見ていなかった。二人が推測する以前に朝は来ていて、両人は頭を上げて、凍えながら二人は窓辺に近寄って、影が消え去って行くのを見た。

二人は眠っていなかった。二人は眠りの可能性すら考えていなかった。二人は鈍く麻痺して座っていて、一連の明確な思考、判断、結論をまとめようと骨折って、空しかった。二人はそれが出来なかった。そして二人が、熱病的落ち着きの無さと混乱の中、朝になったことに気付き、それを認めたとき、二人が数時間前にとても恐れていたものは、二人にとって、しかし、一つの慰謝となっていた。二人は深呼吸をして、感謝して、灰色の明かりを歓迎した。この明かりは二人に初めて、全く新しい人生が二人にとって始まったのだという全き確信をもたらした。二人はもはや、ただ邪悪に二人を注視していた環境の中で、孤独ではなかった。 — 沢山、沢山、ハンスとフレンツヘンは、この夜、クレオーフェア・ゲッツが自分の父親の家を去った夜、獲得していた。 —

いつもより早く、この朝、家の下の領域では活気付いていた。家政婦、お上品なジャン、料理番の娘、それに侍女が、昨日の夕方以来、静まらぬ興奮状態にあって、ドアに聞き耳を立てることと、自分達の感情や情感を交換すること、この二つのこと以外他は何も出来ないでいた。我々はこの二つに関知する必要がなくて、これは我々にとって一つの慰めである。

七時にフランス人女性はその死んだような眠りから目覚めた。自分がどこにいるか、自分がどのようにしてこの部屋に来たのか、彼女が完全に理解するまでには、かなりの時間を要した。この一切がまた彼女にとって明瞭になると、彼女は激しく泣き始めて、フレンツヘンの前で跪こうとした。そしてフレンツヘンはこのことに驚いて、それをさせずにいたが、しかしこの異国の女性のことを恐れてもいなかったし、この家の人々、それにこの家の付近の人々が言うことや、言うであろうことを恐れてもいなかった。フレンツヘンは哀れなアンリエット・トゥリュブレと一緒に色々な事柄について優しく語っていた。つまりこの見棄てられた娘が耳にしても泣かないであろうと彼女が思った事柄で、自分の青春とか、美しくて大きくて、活気のある町パリとか、サン・クルーの噴水とか、シャンゼリゼ街である。そしてこのフランス人の血がまた素早く温かく血管の中を流れるようになると、彼女は真面目に、力を込めて未来について語った。するとアンリエットは、新たに両手を揉み始めて、嗚咽して言った。自分は祖国に帰りたい、善良になって、立派に働き、自分の仕事によって、神の御意志を得て、自活して行きたい、と。するとフレンツヘン・ゲッツは、この女性の空の手に、すべての自分の世俗的宝物を与えた。そのとき、 — そのとき牧師様[ハンス]がドアをノックした。それでまたフレンツヘン・ゲッツ

ははなはだ驚き、このフランス人女性に対し、懇願する身振りで手を口に当てた。しかしこのフランス人女性は黙っていることが出来なかった。彼女は片言のドイツ語で、聖職候補生ウンヴィルシュも同様に、「この天国からの天使」の女性に対し、こう言うように頼んだ。つまり自分 — アンリエット・トゥリュブレ、劣等で、邪悪で、軽率な女アンリエットは、 — この金を受け取れません、ましてやこの黄金の十字架付きのネックレスや、石榴石の腕輪、銀製の指貫、ボリビア共和国の記念銀貨は貰えません、と。

しかしハンス・ウンヴィルシュはフレンツヘンを見た。そしてこのフレンツヘンは彼の目を見た。ハンス・ウンヴィルシュはフランス人の娘に対し、頭を振って、自分はこのような件での仲裁は下手であると示した。彼は自分の父親の尊い、珍しい時計を取り出し、それをフランツィスカの宝物に加えて、同様にまた五枚のターラー銀貨とわずかな小貨幣の入った財布を添えた。彼が短いパイプの銀の金具を思い出していたら、これは以前ニコラウス・グリューネバウム伯父が彼にプレゼントしたもののだが、これも同様に彼は取って来たことだろう。しかし彼はこれを思い出さなかった。

アンリエットにとって、自分がこの兩人にかくも沢山恩恵に与ることは、とても申し訳ないことであつたし、二人の意志に抵抗することは、一層難しいことであつて、彼女は結局もはや抵抗できなくなった。彼女はすべてを受け取らざるを得なくなった。震える両手で彼女はそれを貰った。

八時にアンリエット・トゥリュブレはまた枢密顧問官ゲッツの家から出て来た。ハンスとフランツィスカは、庭園と通りとを分かつ格子の所まで、彼女に同行した。少なくとも召使い達の言葉から彼女を守るためであつた。召使い達の視線から彼女を守ることは出来なかった。

この異国の女性は頭を垂れて進んで行つたが、今や彼女は頭を上げた、 — その姿全体が直立したように見えた。固い、揺るぎない決心の推進力を受けているかのようであつた。彼女はハンスとフレンツヘンの前で礼をして、言った。

「良き神様がお二人に、あたしにお二人が示された御厚意のお返しをされますように。あたしはお二人のこと、いつまでも忘れません。これから去って、タフに暮らします。彼らを探し、見つけます。昨夜のこと、お二人のこと、心に留めます。アノ男ニハ、天罰アレ」。

あたかも彼女は誰からか強引に身を離すかのようであつた。彼女は急いで、軟弱になつて汚れた車道の上を走り、公園の最初の本々の所で振り返つて見た。それから彼女は濃い霧の中に消えた。そして今仮にクレオーフェア・ゲッツが窓を開けて、聖職候補生ウンヴィルシュとフランツィスカに対し、 — この「飢餓牧師」と「眠れる池」に対し、 — いつもの彼女の流儀で挨拶していたら、兩人とも自らをたつた今日覚めた夢遊病者と見なして、自分達の五感のどの一つも、自らの情感や判断のどの一つももはや信じなかつたことであらう。

しかしクレオーフェアは窓から巫山戯て、馬鹿にした風に見ていなかった。ただジャンと家政婦が、ハンスとフレンツヘンが向き直ると、若干当惑して、玄関のドアから跳びすきつた。

ハンスとフレンツヘンは、十八時間も、苦く甘美に夢を見ていたわけではなかつた。 — 外は寒く、厳しく寒く、また雨が降り始めた。この朝は一つの真実であり、霧も一つ

の真実であった。霧に消えた人影も一つの真実であった。そして町の郵便配達人も真実で、彼は、急いでやって来て、その革カバンを開けて、聖職候補生ウンヴィルシュに一通の手紙を渡した。それはクレオーフェアが書いていたもので、その宛先は彼女の父親であった。

その手紙は、その重さから判断すると、倍額重量の手紙に見え、郵便スタンプによれば、昨日の夕方、郵便ポストに投函されたに違いなかった。その手紙は聖職候補生の手の中で炎のように燃えており、フランツィスカは危険な獣を目にしているかのように、その手紙から臆して後ずさった。

二人は物も言わず、家の中へ戻った。そして玄関の間に、召使い一同が牛乳配達の人、ゼンメルパン配達の人を含めて固唾を呑んで一箇所に集合しているのが分かった。

ハンスは静かに従者に合図した。

「ジャン、一緒に来てください。貴方と話して、貴方に頼みたいことがあります」。

ジャンはいつになく、「丁重さ」と仕事への意欲を示して、お辞儀をし、侍女に肩越しに含みの多い視線を投げかけ、今回は、この「学校教師」と「ミスの子」に従って、階段を上がりサロンに入っても、それを自分の品位に悖ることと見なさず、二人が彼に告げなければならないことを聞いてやることにした。

広い部屋は不快なほど寒かった。あたかも目に見えぬ一つの死体がそこにあるかのようであった。灰色の朝は、カーテンが下がったままで、幽霊のように見え、開いたままのピアノも、譜面が、つまりクレオーフェアの曲、サロンの情景、黄金の夢、滝、組鐘、夜想曲、花の曲、たまゆらのトロイメライ、修道院の鐘がその上に散らばっていて、幽霊のようであった。絨毯にあるエメの壊れた木馬も幽霊のようで、とりわけピアノの上の油絵に描かれたパリサイ人の頭部は幽霊的で、これは救世主に対し一枚の銀貨[貢の銭]を探るように差し出していた[マタイ、22, 17ff. ティツィアーノ作]。

「貴方の御領主夫妻に急いで知らせなければならないことがあります、ジャン」とハンスは言った、「向こうへ一通の手紙を届けるのに、どれほどの時間を要しますか」。

ジャンは一瞬、天井の方を見て、それから立派な馬の助けがあれば、一時までに恵み深い奥方に、ご依頼のものをすべてお渡しできましょし、あるいは口頭で報告できましょし。天候は芳しくありませんが、自分はこの仕事を喜んでお引き受けいたしますと述べた。そこでハンスは彼に、馬車と馬の手配をし、自ら支度をするように頼んだ。

九時にジャンは、クレオーフェアの書状とフランツィスカの一通の手紙を含む小包を持って出発した。 — 午後四時には両親は遠出から戻って来られよう。

フレンツヘンは聖職候補生に手を差し出して、言った。

「友の方、それでは静かに待つことにしましょし」。

ハンスはこの小さな手の上に身を屈めて言った。

「辛抱して待つことにしましょし」。

そこで二人は互いに別れ、それぞれ自分の部屋に閉じこもった。二人は疲れたまま静かに座っていて、自身の胸の内奥のことに没頭していた。

正午頃、天は少しばかり晴れてきて、上流の人々が気晴らしに馬車で来たりして、その中の一部には、枢密顧問官ゲッツの家での出来事について、漠然と、混乱した噂が流れていた。左右の近隣の家では、ブラインドや花鉢の奥から、気の毒がって詮索するか、あるいは不幸を満喫する思いでこの家を覗いており、また通りかかる馬車から、訝しげな

視線がこの家に投げかけられていた。ここは何かありそうだな、話題になることだろう。ハンスとフレンツヘンはもはや窓辺に姿を見せなかった。ー フレンツヘンは凍えて、縮こまって、自分の小さな寝椅子に横になっていて、一枚のスカーフを頭の上まで引き上げていた。ハンスはシュロッターベックおばさん宛に手紙を書いて、善良なおばさんがよく読めるよう、文字の筆記に大いに注意を払っていた。

彼は書いた。

「親愛なる誠実な魂の方、

私は先の週の日々ほどに、過去のことを考えざるを得なかったことは、自分の生涯でかつてなかったことです。私の周りにはまことに漆黒の夜となってしまうました。多くの不安や苦悶に耐えなければならなかったのです。私はおそらくもう一度父親の輝くガラス玉を暗闇の中に吊した方がよかろうと思ひまして、そしてこの敬虔な穏やかな輝きの中で自らを救出し、このような時、このようなことが出来ないすべての人々を気の毒に思ったものです。いや、親愛なるおばさん、モーゼスに関しては、おばさんとエステル夫人の多分仰有る通りでありました。そして親愛なるおばさん、おばさんがその心配なさったお心で考えられ、お見通しになったこと、これを私は残念ながら否定できません。私は病気になって、看病されました。そしてモーゼス・フロイデンシュタインは偽者と判明しました。彼は自分に大きな不正を積み重ねています。そして彼は、今私が厄介になっている家に大きな厄災をもたらしました。彼は私にとって死んだも同然です。私は彼のことがとても残念でなりません。彼のことはとても胸が痛みます。

私は昨夜、過去について熟慮し、このような友情から軽蔑が生じざるを得なくなったのは何故かと考えました。私は暗い迷路を通るようにして、クレッペル通りの我らの父親達の家まで手探りで戻りました。そして自分の探していたものを、溜め息と共に見いだしました。我々二人、つまりモーゼス・フロイデンシュタインとハンス・ウンヴィルシュをこの世に駆り立てて来たもの、つまり飢餓が、モーゼスを現にそうであるモーゼスにしています。これは私にとって苦い教訓です。知識を求めて、そして幸福を求めて、我々二人は外に出て行きました。我々は、暗い貧しい小屋に生まれ、育ちました。そして低い屋根の隙間や裂け目から見える明かりに我々は誘われました。私が長い間、我々はこの明かりを目指して同じ道を歩んでいると長いこと思っていたのは、奇妙なことです。しかしそうではなかったのです。揺り籠の時から、我々の道は分かっていたのです。私は今このことが明瞭に分かります。邪悪な霊が哀れなモーゼスの揺り籠の周りに立っていました。私の揺り籠の周りは善良な霊のみでした。彼は自分の道を開いた、澄んだ、鋭い目で進みました。私は夢見ているように進みました。彼の飢餓はいつでも満たされて、自分が望むものをいつでも得ました。この時間でも彼は、自分の欲するものを得ています。これは良くありません。これは今恐ろしいことです。私の飢餓は、彼の飢餓ほどには満たされなかった。いや、私はしばしば、自分が何を欲しているか分からなかった。そして今でもまだしばしば分かっていません。人間の心は奇妙な代物です。人間の心は正しく憧れるとき、大いにしばしば最も幸せに感ずることでしょう。哀れなモーゼスは決して憧れることがなかった。彼は単に計算していた。そして彼の例題はいつも正しく割り切れました。私の心はその際、出血していた。ー 私はおばさんの許に帰ったら、小さなブリキの明かりを、

父親のガラス玉で、夕方、鎧戸を閉める時になったら、照らし出すことにしましょう。そして一緒にまず私の父親と母親、それに教会墓地について話し、それから私の心に掛かっている諸々一切について話し、腹藏なく話すことにしましょう。だからお婆さん、今はもはやお婆さんは私について何も案ずることはないとだけ書いておきます、 — あのモーゼスについて私は差し当たり何も書くわけに行きません。私の心は余りに沢山苦いことを経験し、周辺は一切が余りに混乱しています。できるだけまた早くお婆さんに報告するつもりです」。

更に聖職候補生ウンヴィルシュは、伯父ニコラウスに、シュロッターベックお婆さんを通じて、挨拶を送り、彼にも次回詳しい手紙を書くことと約束した。それから彼は両老人に忠実なヨハネス・ウンヴィルシュより、敬具の結びの言葉を書いて、 — いや、すると彼はまたびっくりして跳び上がったが、彼は自分がどれほど眠っていたか分からなかったのである。

ある苦悶で興奮して徹夜して過ごした後のこの眠り、何ら爽やかな目覚めももたらさないまま、我々に襲来し、我々を圧倒するこの眠りを知らない人があろうか。最短の時間であっても、我々の意識を完全には奪わないまま、どんな長い夜でも見られないほど、脳を混乱したイメージで満たすこの眠りを知らない人があろうか。

一時間ハンス・ウンヴィルシュは眠った。そしてこの時間ほとんどいわばかの[イスラム教の]サルタン、つまり、魔法使いの水盤に頭を浸けたところ、一人の女となり、一人の浮浪者と結婚し、七人の子供を生んで、沢山打擲され、そして頭をまたこの水盤から持ち上げたとき、とても立腹して、この賢い魔法使いの首を刎ねさせようと思ったかのサルタンのような夢を見たのであった。

漂う玉はやがて明るく輝き、やがて昼となり、やがて黄昏となり、夜となった。通りや広場、教会、明と暗の各部屋、小部屋、緑の木々や雪の野原が渾然としてきた。クリスマス市や貧民教師ジルバーレップフェルの教室が見えたり、消えたりした。 — 子供っぽい歓喜や子供っぽい不安が交互に続いた。魔法使いが棒を振って、夢の円を描いた。それから魔法使いはその夢を示して別の箇所にした。ハンス・ウンヴィルシュは一人の少年であった。モーゼス・フロイデンシュタインも一人の少年であった。ハンスは両手両足を使って、クレッペル通りの少年達に対しこのモーゼスを守った。路地の雪と混雑の中から古物商店の暗闇の中に下っていた。出血し、殴られて、階段を下に、ザームエル親方の両腕の中に落ちた。しかしザームエル親方はもう死んでいた。そしてモーゼスが腕を組んで、この死者の臥床の側に立っていた。砂時計が空になった。小さなゾフィーも亡くなった。 — 彼女ではなかったか。どうして彼女もこの古物商の地下室に来ているのか。そして何故指を、かくも真面目に美しく、口に当てているのか。これは小さな死んだゾフィー、この世で真なるもの、善なるもの、美しいものは死にませんと言っているゾフィーではないか。人間は憧れで生きていると言っている亡きゾフィーではないか。ハンス・ウンヴィルシュはこの小さなゾフィーのことは良く知っているのだ。自分は彼女が棺の中で、蠟製の人形のように見えたのを覚えている。かくも美しく、かくも真面目に、自分とテオフィル・シュタイン博士、以前のモーゼス・フロイデンシュタインの間に立っているのは、本当に彼女であらうか。

「フランツィスカ、フレンツヘン」とハンス・ウンヴィルシュは叫んだ。そしてこの叫び声と共に彼は目覚めた。

差し当たりもはや雨は降っていなかった。しかし日中はだからといって、より明るくはならなかった。それどころかもっと暗くなり、雲がもっと低く、より圧迫して垂れ込めて来るように見えた。ゆっくりとゆっくりと時間が過ぎ去った。聖職候補生の文庫には、ほんの分秒単位でも時間の経過を速めてくれるような本は一冊もなかった。ハンスはあちこち歩き回った。そしてただ家政婦か侍女かが動いているだけと知っていたが、この家で物音がするたびに、立ち止まって耳を澄ました。

正午となった。彼の所に食事が運ばれた。彼は強いて、何か食べようとした。しかし時計が一時を打つのを耳にすると、彼はナイフとフォークを置いた。今、ジャンが目的地に到着して、クレオーフェアの手紙が両親の手に渡されたに違いない。ひょっとしたら両親はすでに帰路に就いているかもしれない。上品なジャンは腕を組んで、御者の横に立っているかも。そしてこの御者も、きっとこの家で何が起きたか知っていて、両頬を引っ込めて、口笛を吹くのだ。空は灰色で、道はひどくて、雲は低く田畑に垂れ込めている。更にこの帰路の間、エメとその振る舞いを聖職候補生は考えざるを得なかった。彼はもはや自分の空想を制御できなかった。空想は、彼が逆らっても、フランツィスカの小部屋から、彼を再三外へ拉致した。

何時間もフレンツヘンは自分のスカーフの下、小さな寝椅子の上に横たわっていたが、一時に彼女は起きて、様々な家政の仕事の手配をし、その際、世間がすでに多種多様な口実を設けて、「委細を知る」ためにこの家に侵入して来たことを聞いた。

人々はあれこれのことを問い合わせ、借りていた本や楽譜を返しに来た。人々は、一 つまり一人の「親密な」女友達だが、一 それどころかクレオーフェア令嬢をお茶に招待したいと言って寄こしてきた。ブリューテミュラー教授は、自らやって来て、恵み深い奥方は遠出からいつ戻られるであろうか尋ねた。彼はロバの耳の名刺[角の折れた名刺、儀礼ではなく、用件がある意味]を出して、よしなにとの挨拶を残した。

家政婦と他の召使い達も尋常でなく関心を募らせ、囁きながら爪先だって、忍び歩いた。二時に枢密顧問官の書斎と恵み深い奥方の部屋の暖炉が点され、三時から四時の間に、領主一家が帰って来た。

喜んで興奮しているときであれ、痛みを伴っているときであれ、長いこと出来事の到来や、至高の願いの実現、一つの打撃の終了が待たれているとき、人々は、この予期されていたことが到着すると、人間の人生は何という須臾の時間から成り立っていることか、正しく了解することになる。落ち着かない過去が一つの瞬間に凝固する。そして雨の日、国中を飛ぶ稲妻であれ、我々が期待したり、あるいは恐怖したりする時間よりも早く過ぎるものではない。

ハンス・ウンヴィルシュは窓辺に立って、枢密顧問官の泥を浴びた馬車が近寄って来るのを見た。ジャンは実際、御者席の御者の側に、自分の価値を自覚している一人の男のように座っていた。ハンスは、自分がこの瞬間でも従者の表情に注目が行くことに、奇妙な感じがした。しかしそれが現実であった。

家ではドアが開けられ、そして閉められた。馬車が止まり、召使い達が駆け出して、ジャンは飛び下りて、馬車の扉を開け、降車する者達の手伝いをした。枢密顧問官ゲッツ

が最初に出て来た。彼に従って、その妻が深くヴェールを被って現れた。彼女は少年の手を引いて、素早く確かな足取りで、急いで近寄る姪に気を止めず、最初に家に入った。

枢密顧問官は一瞬立ち止まって、突然目眩に襲われた者のように、ドアの前でよろめいた。彼はジャンの腕を払い除け、フランツィスカの手を求め、握った。フレンツヘンを頼りにして、彼はゆっくりと覚束なく階段を上がって行った。そして彼は廊下で聖職候補生に出会ったが、同様に会っていた恵み深い奥方の方は、嵐のように候補生の側を通り過ぎていた。

枢密顧問官はその毛皮にもかかわらず、細身で、黒く、人影のようにこの時も見えた。いや、まこと彼の内面のバネ仕掛けは今や完全に瓦解していた。ハンスはそのことにはなはだ驚かざるを得なかった。いや、枢密顧問官は法外に、不幸に、寄る辺なく、周囲を見回していた。彼は家庭教師に手を差し出したが、熱病のときのように震えていた。そして、元気な聖職候補生殿に会えて嬉しい、とても不気味な天候だと言った。するとこの瞬間、恵み深い奥方の鐘が、激しい思いで鳴らされて、家中に響き、彼は縮み上がって、フレンツヘンの腕をよりしっかりと握って、囁いた。

「クレオーフェア、哀れなクレオーフェア、他に仕様がなかったのか、一哀れなクレオーフェア」。

目に涙を浮かべて、ハンス・ウンヴィルシュは階段の最下段にたって、フレンツヘンがこの打ちひしがれた男を支え、案内する姿を見送った。

(第二巻の終わり)

第三卷

第一章

我々が我々の本の第二巻を終了したとき、雨が降っていたとすれば、この本の第三巻を開始したときも、それに劣らず降っていた。何か少しでも雨傘に類似しているものを所有している人は、それを開いて、恥ずかしいとも思わず、その下を歩いた。すべての犬が耳を垂れ、尾を後足の間に入れて、すべての窓辺に掛けられた賃貸物件の札が風に舞って回転し、あるときは前面を、あるときは背面を見せていた。十月の六日であった。朝の九時である。グリンゼ[にやにや笑い]路地の角にこのような天候の時に、住まいを探す不運な個人が現れた。一 ヨハネス・ウンヴィルシュで、新町、クレッペル通り出身の神学の候補生であった。

上着のカラーを高く立てて、帽子を額に押し付けて、開いた傘をうなじの方へ下げ、鼻を求めるように、探るように、高く空中に上げ、彼はこちらへと吹き寄せられて、グリンゼ路地のすべての雨樋が彼を陽気にぴちゃぴちゃと音立てて迎えていた。このような天候のとき、ドアの前に立たされて、余所のドアを探さなければならないのは、全く快適ではなかった。このようなことを考えると、ちょっと脱線をして許されそうな気分になる。

我らの旦那[我らの領主、我が主]、この両言葉の抑揚は、極めて多様なニュアンスの許にある。ある種の党派の人々は別様に発音するし、敬虔な人々はまた違い、従者達はまた違い、かなり大きな都会の困窮した家庭の人々、つまりほとんどかつかつと、ほとんど足りないの間の境界線上にあって、その金銭の状況を、故郷を離れた独身者を誘って、掴まえ、自分達の住まいの家具付き、あるいは家具なしの部屋を賃貸することで改善しようとする人々もまた違う。「我らの旦那」とは、自らのねぐらを持たずにやって来て、自分の手持ちが許す時や許す程度に応じて忍び込み、やって来たときと同様に、ほんのわずかな、劣等な痕跡だけを残してまた消えて行くかの渡り鳥のことである。困窮した家庭は、このしばしば堅実とは言えないこの渡り鳥に対して、元来はただ、この小役人や職人の妻を通じて、あるいは主婦そのものである「実直な未亡人」を通じて、要するに、「マダム」を通じてのみ対応させる。この女性が思惑の結論を下すのである。この女性が我らの旦那を称えたり、この旦那を罵ったり、地区の警察少尉に訴えるぞとこの旦那を脅したりするのである。この女性が、我らの旦那が冬まさに凍えて逝かないように気を配るのである。この女性が旦那の備蓄を検査して、ハプスブルク家出身のかのドイツの皇帝が、ロレーヌ地方やアルザス地方、その他、その他を遊興に使い、自らを「帝国の常時拡大者」と称するのとまさに同じ権利で、この旦那の家政婦と自称するのである。この女性が最後に、求めに応じて、毎朝かの桁違いのごった混ぜを用意するのであって、これを我らの旦那は「コーヒー」の名前の下、最も好んで、一 窓から廃棄したい思いになるのである。

我らの旦那は、その賃貸物件札を目に留めて、この物件の状況と財布の中身を思案した。彼は一つの結論に達し、その家の中に入った。無数の子供達の上、彼は用心して階を上がって行った。彼はそこに自分の将来の故郷を見いだそうと願い、多くのドアのあるさほど明るくない玄関に達した。そこの各ドアにはごく多様な生活者達の表札が貼られて

いた。この故郷喪失者は行き当たりばつりに一つの鐘の紐を引いて、数分返事を待ったが、得られなかった。彼は別のドアの別の鐘を引いた。そしてこちらでは一つの住まいが借りられますかという問いかけに対し、一人の阿呆から粗野な否認の返事を得た。我らの旦那は三回目の鐘を引きたいかと思い、しばらく躊躇った後、その決心をした。今回は女性の頭巾が薄明かりの中、浮かび上がり、その問いかけが反復され、返事が響いて、肯定のものであった。我らの旦那は、胸の奥底から安堵の嘆息をして、お入りなさいと言ったこのレディーの後に従った。彼は薄明かりの中から白日の明かりの中に進み、彼の人相骨格が、閃光のように、頭から両足まで尋常でない鋭い鑑定を受けた。彼はこっそりとう質問してもおかしくなかったであろう、元来この女性には国の警察の委託を任せたらいいのではないかと。 — この鑑定が合格とされて、かくて我らの旦那は貸し出される各部屋へ案内された。彼は、数分間見回すことが許された。この家賃に対する質問には、一種表現しがたい微笑を伴って、返事がなされた。この微笑は厚かましい苦い丸菓の周りの模造金箔のようであった。すぐに入居できますかという質問には、肯定の膝曲げがあった。この住まいを借りますとの嘆息には、二回目の膝曲げがあつて、この上なく快適で気楽である旨のうわごとのような描写があつた。これを聞いて、我らの旦那は、「そうですね」と答えて、とても心が冷えた。しかし我らの旦那は、今や本当に我らの旦那となっていて、家具や壁の絵画をより詳しく眺める権利を得た。家具については、文句を言おうと思えば、言いたくなる箇所がかなり沢山あつた。絵画は劣等な金縁のある女性像の幾つかのどぎつい色合いの石版画であつた。これらの美人達はとてもゆったりとした服で、愛玩犬を撫でていたり、花卉を筆っていたり、メランコリーに陥って、とても青い海を凝視していたりしていた。「クロティルデ」、 — 「憧憬」、 — 「私を愛しているかしら」、 — 「ルーツィア」とかそれに類するものがその下に書かれていた。そして我らの旦那は、良い趣味のごく少量の火花しか有しなかつたのであるが、それでも言った。

「しかし、マダム、私はこれらの美術品を壁から撤去して頂きたい」。

マダムは最初、今度の我らの旦那に怒った。「私どもの先の殿方はこれらの絵画がとてもお気に入りでした」と彼女は若干無愛想に言った、「でも老嬢に引き取って貰いましょう、お望み通りに」。

「感謝申し上げます」と我らの今度の旦那は言って、付け加えた。「たった今空の辻馬車が止まりました。これから私の荷物を取って来ます。三十分で戻ります。それで、 — 家の番号は？」

「二十二番です」とマダムは言った。「貴方が戻られたら、万事すべてが整っていることでしょう。どうぞ、頭をぶつけないようにしてください。ドアが少し低いのです」。

すでにぶつけていた我らの旦那は、また鼻の方から帽子を高く上げて、階段を急いで駆け下り、呼び止めた辻馬車に身を投げ、そこからはがらと去った。マダムは窓から彼を見送って、それから部屋の中央に戻った。頭を一回揺すって、これは我らの旦那に余り良いことを意味していなかつたが、彼からどのような儲けを引き出そうか計算をして、彼の弱点について詮索した。愛玩犬と一緒にクロティルデは壁から愚かしく微笑していた。憧憬は海の青い斑点を奇妙に鼻風邪気味にじろじろ見ていた。グレーチェンはその星形の花を筆っていた。あの人を私を愛している、愛していない、愛している、と。「我らの旦那は、私の絵を愛していない」とマダムは叫んだ、「バーカ、カールよ、カール、こちら

へ来て。また一人の旦那が見つかったよ」。

夫のカールはおずおずとドアの敷居に表れた。一群の子供達を連れていた。混乱した物音がして、叫び声が繰り返された。「また一人の旦那が見つかった。また一人の旦那が見つかった」と部屋に充満した。それから逼迫していた家族は痙攣性の興奮の中で作業にかかり、賃貸された住まいを住み得る状態に変えた。家の鍵がドアの背後に掛けられ、水を一杯に詰めた瓶がサイドテーブルの上、グラスの横に置かれた。壁からは亡命のレディー達が下ろされることになって、その代わりに色褪せた壁紙には、四個の黒々とした染みが出現した。これもやはり我らの旦那の美的感覚には余り合うものではなかった。

「我らの旦那だ、我らの旦那だ」と突然、夫が叫んだ。「我らの旦那だ、我らの旦那だ」と子供達が皆叫んだ。一台の辻馬車がまた家の玄関前で止まった。御者は御者席に座ってはず、その正式の席を占拠している革トランクの上に座っていた。魔法の杖の一振りのように忽然と家族は我らの旦那の部屋から消え、ただマダムだけが、さも自分の義務や権利であるかのように、立ち止まっていた。一人の捕まった怠け者が、我らの旦那の所有物を階段を上へ引きずってきた。我らの旦那は御者に支払いをしていた。この怠け者は先に言及されたトランクを一回膝曲げをし、床に置き、喘ぎ、呻き、はなはだひどい息をした。我らの旦那も同様に現れ、片方の手に旅行袋を、もう一方の手に、帽子箱を持ち、パイプの束や、散歩用杖、雨傘、細身の長剣を腋に抱えていた。一 我らの旦那がやって来た。我らの旦那が入室した、一 我らの主が逝った、我らの主、万歳。王様ガ死ンダ、[新]王様、万歳[パリの国王戴冠式]。一 ちなみに以下はいとも尊い警察が、その書類に異常を認めず、滞在許可証を発行したときの言葉である。我らの殿方、新町出身の聖職候補生ハンス・ウンヴィルシュ、生存可[万歳]。彼はグリーンゼ路地で、自分で探しているもの、屋根裏部屋を珍しく安い値段で見つけて、即刻入居し、この年の終わりまで枢密顧問官夫人ゲッツの家で留まれるという自分の権利を行使しなかった。これについては、彼を無事屋根裏まで連れて行ったら、もっと説明しなければならないだろう。

とても耳の遠い、しかし実直な未亡人が、この小部屋を貸すことになっていた。この小部屋の贅と輝きは、聖職候補生の財産と釣り合っていた。彼女に至るまでの道は危険がないわけではなかった。たった一つの窓がこの板部屋を明るくしていた。しかし屋根越しに見える眺望は立派であった。壁では女性に対する石版画による目と心の罪なハラスメントは消えていた。壁は何もなく、荒涼としていた。家具を見て、快適な印象を受けるのは、シニカルな哲学者のみであったろう。しかしハンス・ウンヴィルシュは、耳の遠い老婆が家具を見つめるときの誇りを感じていて、その清潔さが心地良かった。彼はただ、自分がベッドとテーブル、椅子の一時的な所有者となる賃貸契約を結んで、自分がこれまで手に持っていた三、四枚の葉の付いた木蔦の蔓をテーブルに置いて、占有してみたとき、全く軽い溜め息を吐いた。それから彼も自分の持ち物をすでに言及したやり方で取って来て、整えた。これで自立した男になったという気持ちには、一抹の憂愁の念が混じっていたが、しかしやはりまことに爽快であった。あの緑と黄金色のジャンが、このドアにはその生意気な顔と頬髭を特別な許可なしには差し入れることができないと考えるだけで、若干有り難い。整理が終わって、各々の品がその場に落ち着き、聖職候補生が、テーブルを前に自分の椅子に腰を下ろすと、学生時代以来覚えのなかった、ある快感に襲われた。錠の具合の悪い窓からしゅっと入って来る隙間風は自由の息吹であった。ボックスドルフやコーレ

ナウ、そして枢密顧問官ゲッツのすべての快適さや贅沢な食事は、自分がたどり着いたストイックな喜ばしい肌寒さで置き換えられた。これまでどのように枢密顧問官の家での状況は進展して来たのか、我々はようやく語ることになる。聖職候補生が、温かくはないが、しかし濡れずに座っていて、雨は彼の頭上で屋根を力なく叩いているからである。

クレオーフェアの父親がよるめいて自分の部屋に入ったとき、家中に甲高く響いた鐘は、この母親の陥った気分を家の一同にはなほだ明瞭に告げていた。痙攣と無気力がクレオーフェアの手紙の最初の結果であった。町へ向かう帰路では、恵み深い奥方は馬車の隅に無気力な物思いの放心状態にあった。帰宅してからはこの女性の情熱は禍々しい復讐の女神に変貌した。枢密顧問官夫人は荒れ狂った。彼女に近寄ることは危険であって、このことを家の者のほとんど皆が順次経験して行った。「世間」体を考えることでさえ、彼女に対し願わしい自制心を取り戻させることが、最初は出来なかった。このレディーの痛みや怒りは元来、ただこの「世間」体を中心に回っていたのであるが。娘が墜落した運命ではなく、このおぞましい出来事が引き起こすに違いなく、疑いもなくすでに引き起こされてしまったセンセーションが、この母親をほとんど狂気に駆り立てていた。彼女は自分がその憤懣のはげ口とすることの出来る誰かを探していた。そして一つの憤懣に対して二人見つけた。

一人はフレンツヘンで、この女性は自分に言われることを、拝聴しなければならなかった。もう一人は家庭教師、聖職候補生のウンヴィルシュで、彼はそれどころか面罵され、この恥ずかしい裏切り者、シュタイン博士、ユダヤ人を連れてきた張本人、罪の責任者であるとされた。枢密顧問官夫人は、哀れなハンスにこの忌まわしいスキャンダルの全責任を負わせる能力があつて、これは医学的観点からすると、夫人にとつた大きな幸運であった。ハンス・ウンヴィルシュは今回、力の限り防戦したが、この夫人を相手にしては、それにこの時点では、正当性を主張しようとすることは、出来ないと悟った。彼は自らこの不興の嵐を甘受した。つまりフレンツヘンが自分よりもこの件ではるかにひどい目に遭っていると考えたのである。フレンツヘンに対する自分の不安な思いが他のすべてに勝った。

すべての肢体を叩き潰されて、すべての感覚が麻痺して、ペしゃんこにされ、ばらばらに細断されて、そして一つの糸玉に丸められてしまったという思いで、ハンスは恵み深い奥方の部屋を去って、自分の部屋に上がり、夕方の黄昏の中、自分のトランクをまとめた。翌朝きつと自分はこの家を去らなければならないと思った。そして翌朝まで、従者を除いて、もはや家の誰とも会わなかった。フレンツヘンとも会わなかった。彼はその夜ほとんど眠れず、翌朝目覚め、服を着た。八時にジャンが現れ、枢密顧問官殿が彼との面会をお望みですと告げた。遅滞なく彼は枢密顧問官の書斎へ下りて行った。

彼はノックして、誰も返事をしなかったが、入って、そして入ってから数瞬、啞然としてドアの許に立っていた。中には誰もいないと思ったからでざる。

そこには途方もなく大きな書類籠があつて、そこにはすでに多くの無用に書き記された書類が放棄されていた。しかしそこにテオドール・ゲッツは世間に対する泣き言の文書をまだ差し込んでいなかった。ひょっとしたらこの籠にはそれがもっとましであったかもしれないが。そこには数多くの法学関係の本が、戸棚と引き出しに、長く、干涸らびて並んでいた。そこには緑色に貼られた巨大な書き物机が、山のように高い文書の堆積

を載せていて、この文書の堆積の背後に、ハンスは、自分が爪先だって見たとき、枢密顧問官が、黒い燕尾服を着て、白い襟飾りをして、いつものように座っているのを見つけた。そしてこの男の腕は机の上であって、頭はその両腕の上であった。それはまことに薄く生えた灰色の髪の毛であって、悲嘆に暮れた頭で、聖職候補生は深く痛ましく思わざるを得なかった。ハンスは数歩、近寄った。枢密顧問官は顔を上げたが、しかしその表情は全く空ろに目が据わって、苦悶にやつれ、無反応で、ハンスは自分のいることがすでに認知されているとは、信じられなかった。

彼は今一步近寄って、言った。

「枢密顧問官殿、私です。 — 貴方に別れを告げるために参りました。貴方から、 — あのう —」。

彼は何を言ったらいいか、さっぱり分からなかった。しかし更に話す必要はなくなって、彼は不都合ではなくなった。枢密顧問官殿は凝固から目覚めて、安楽椅子から起き上がった。一時間車裂き刑に遭っていた被処刑者が下から起き上がって来る按配であった。

彼は、ハンスには決して忘れられない頼りなげな身振りで、また沈み込み、溜め息を吐いた。

「いや、貴方は出て行かれるのか。承知している。貴方はやはり正しい。この家に何の用がある。この家では呼吸も苦しい、いや、ウンヴィルシュさん」。

彼は目に手を当てた。ハンスは今や彼のすぐ側に立っていて、彼が今まで一通の手紙を書き、その手紙が最前まで置かれていたと察した。彼がその手紙に封蝋をしたときの明かりは、まだ燃えていた。再び彼は先ほどの物思いに沈み込んだように見えた。先の家庭教師がこれから何を言って、何をしたらいいか、何も思い浮かばないという若干痛々しい間が生じた。しかしこの間は長くは続かなかった。クレオーフェアの父親は、突然、聖職候補生の手を握って、きっと彼の仕事仲間の上司には見せたことのないような、同じく彼の妻でも本当に経験したことはないであろうような親密さを込めて言った。

「ウンヴィルシュ、ウンヴィルシュさん、貴方が去られるのはとても残念です。私は、 — 私どもは貴方に対しこの家を快適な居場所にして差し上げることが出来なかった。いや、私ども自身がこの家で快適に暮らせたわけではない。私は、貴方が私の息子に対して果たそうとなさった誠実なお仕事に感謝申し上げます。早くに見切りを付けて去られなかったことに、感謝致します。貴方が昨日、私どもの家を代表してなさったその処置に感謝しています。 — 私の姪、フランツィスカが私にすべてを報告しています。衷心からそのことに感謝しています。私の姪のフランツィスカも同様に、貴方が去られることをとても残念に思っています。私の兄のルドルフもそうです。ウンヴィルシュさん、いかに重く、私の娘の急な、不正な行状が、私の心にのしかかっているか、貴方にはお分かり頂けないでしょう。しかし娘はごく初期の若い頃から、我が儘な娘でした。私どもの躰は、苦い果実となりました。これは気質の中に種として蒔かれていたものです。私は、私の哀れな娘の道行きに怒りの非難を送りつける権利を有していません。私どもはこの咎を、能う限り、引き受けなければなりません。ウンヴィルシュさん、娘はパリに行きました。娘はこのことを昨日通知して来ました。私は昨日の夜と、今朝また娘宛に書いて、娘に娘の結婚に対する私の同意を記しました。私には他に行動の仕様がありません。娘に神の御加護のあらんことを。私どもの娘を誘拐したかの男が、自らの、ちなみに私にとっては全く

謎めいたその意図をより明確に述べてくれるようであれば、より詳しいことが分かりましょう。しかし私がこの件を考えてみるに、彼はいずれ私の妻と交渉しなければならなくなりましょう。私どもの財産は妻からのものですから。この関連での私の影響は取るに足りないものです。私は自らの力では何一つ出来ない。いや、ウンヴィルシュさん、私は病気の弱い男です。私は自分の世界をこの四つの壁にある書籍の列から作らざるを得なかった。多分貴方も夙に察知なさっていたであろうことを貴方に隠して何になりましょう。貴方は外に出られても、この虚弱な阿呆のことは嘲笑なさないでしょう。自分の人生でかくも多くの苦悶を飲み込まなければならなかった男のことを気の毒に思われることでしょうか。お達者で、ウンヴィルシュさん、貴方の弥栄を衷心より祈っています。そしてより幸せな地とより賢明で、より力強い人々を見いだされたら、思い出して、 — いや、忘れてください、ここで経験なさったことを、とりわけ、この私、孤独で、見棄てられた男のことを忘れてください」。

「まあ、孤独とか、 — 見棄てられたとか、いけません」と優しい、親密な声が叫んだ。そして深く感動した聖職候補生の側をフランツィスカ・ゲッツが滑るように通過して、屈み込んだ伯父の許へ行き、泣きながら両腕で抱いた。

「孤独で、見棄てられてなんかいません。愛する、愛する伯父さん、そんなこと仰有らないで、そうなのはいけません。考えてください、どれほど多くの誠実な愛を私はこれまで頂いたことか。しっかりと、まことにしっかりと支え合ひましょう。だから孤独とか、見棄てられたと話してはなりません」。

伯父も同様にフレンツヘンに腕を回した。

「そなたか、哀れな娘」と彼は言った、「いや、そなたは善良で、辛抱強い。いや、そなたに見つめられると、私にはこの上なく苦い非難を浴びる思いがする。いや、我々はそなたの若い人生を、とても辛く、悲しいものにしてしまった。そなたこそは全く寄り添えず、この地を他のどこかと替えることもできない」。

「替えたいとは思いません。本当に少しも替えたいとは思いません」とフレンツヘンは叫んだ。「伯父さん、伯父さんの許が今、私の居場所です。伯父さんが私をここから突き飛ばして、私を女家庭教師へと邪険に追い出そうとなさない限り、だから、 — それで伯父さんの許に私をよろしくお願いします」。

彼女は最後の言葉のとき、涙声となって微笑した。そして伯父は自分の萎びた、冷たい物書きの指の間に掴まえている小さな手に接吻をした。それは奇妙な眺めであった。

クレオーフェア宛の郵便は、彼女からその住所の指示があり次第、すぐに発送するようにとそのことが話された。それから聖職候補生ウンヴィルシュの諸計画について話された。枢密顧問官は最後の学期のレッスン料に豪華な支払いをした。そしてこのことはフレンツヘンの居合わせる所でなされたので、ハンスはとても心地良かった。というのはこの追い出された家庭教師は、首となったが、当面は飢え死にという情けない展開は避けられたと彼女も察知できたからである。ハンス・ウンヴィルシュは、自分は早急に教師として新しい職を探すつもりはありません、この冬はこの町にフリーの男として暮らし、 — 一冊の本を書くつもりです、と述べた。

赤面して彼は最後のことを述べた。彼はこれを元来はただフレンツヘンに対して述べたのであった。フレンツヘンも可愛く驚いて、聖職候補生を見上げて、見つめていた。

「私はとても多くのことを体験しました」とハンスは続けた、「しかし私の中ではとりとめもなく見えます。それで私は今が集中して、反省するその時となっています。それで私は春まで一部屋借りて、そこに静かに座り、いかなる次第になるか見守るつもりです。私は自分で書きたいことを多分すでに把握していると思いますが、いかなる表現になるか、天のみ知ることです」。

フレンツヘンは微笑して頷き、手を心臓に押し当て、それからその手を、目を潤ませて、馴染みの素朴なハンスに差し出した。枢密顧問官ゲッツも彼に手を差し出し、自分の安楽椅子から二回目起き上がって、彼の現在の計画が、それにその他すべての点で、首尾良く行くよう衷心より祈念した。ハンス・ウンヴィルシュはこの家を去って嬉しかった。しかしこの兩人からの別れはまことに心が重かった。この家の奥方に彼はもはや面会出来なかった。彼の教え子にも同様出来なかった。召使い一行は、かれを嘲りの目でじろじろ見たかったことであろう。しかし彼はにやにや笑いを受けていたが、これに対し望み通り、苛立って気付いてはくれなかった。

彼は軋む砂利道を通って、丸い芝地と水の涸れた噴水の縁を歩いて行った。噴水には輝かしい真鍮の玉が浮かんでいるのをしばしば窓から彼は覗いたのであった。彼は自分がよく、この水の勢いを生命欲や青春の力と比較し、光る玉を青春の玉虫色の希望と比較したことを思い出した。それから、— それから彼は可愛らしい鉄製の庭の門の向こう側で、雨傘を開け、雨傘の下から、この家を振り返って見上げた。彼は乞食少尉のルドルフ・ゲッツが、自分をこのドアの中へ押し込んだかの朝のことを思い出した。そして彼は自分がこの男に対し、よくこのことで呪わしく思ったことを思い出した。今やもはや彼のことを呪わしく思わない。— 熱い感謝の念で彼はルドルフ少尉のことを思い出した。彼は更に、鉄製の格子に巻き付いていた一本の小さな木蔦の蔓を折り取った。それから彼は更に歩いた。彼は自立した男であったが、しかし自分の心の支配者ではもはやなかった。彼は歩き、探し、そしてグリーンゼ路地の住まいを見つけて、その木蔦の蔓を、自分が自分の「本」を書こうと思うテーブルに、立派な、幸運な、祝福の印として置いた。それがいかなることになるか、実際天のみが知ることであろう。しかしやはりこれで十分である。

第二章

長年ファラオに仕えた後[ヨゼフ、創世記 39 以降]、ようやく自立した男となって、十四平方シュー[約 2.5 畝]を論駁の余地なき領国、所有地と命名してよろしいというのは、独自の気持ちとなるものがあつた。このわずかな言葉には、何とすべてのことが込められていることか。つまり、自立した男である。何と何百万もの、あるいは数百万もの、多かれ少なかれ、悩み多い、多かれ少なかれ、思索的人間が、この言葉を深い溜め息と共に発することか。何と何百万もの人間が、すべての身分、寿命を合算しても、ほんの短期間でさえ、「自立する」ことが出来ないでいることか。いかに多くが、老いて白髪になり、疲れて、打ちのめされて、墓場へ沈み、その鎖と共に、クリストフ・コロンブスが捕縛されて亡くなったように[1506]、埋葬されることか。しかしまた何と多くの者が、生涯を自由と見なしながらも、しかし実際は自分達がひよつとしたらわざと自分達の家来や部下に押し付けていたかもしれないすべての束縛よりも何千倍も強く重い束縛を帯びたまま、墓場

に向かっていることか。これは悲しいテーマである。これについては多くのことが言われるであろう。しかし我々はむしろ口をつぐみたい。我々は最近ずっと、もう十分に、いやというほど、悲しい事柄を相手にしなければならなかったからである。この幾つもの他の屋根裏部屋が見える窓への立派な眺望を有するこの屋根裏部屋、三脚のゆらゆらする椅子と、スパルタ風ベッド、赤褐色の樫材のテーブルを有し、このテーブルの前には自由な男ハンス・ウンヴィルシュのいる部屋は立派すぎるものである。

ハンスが自分の部屋を占有し、とても耳の遠い貸主の女性が「新しい畳敷席での幸運と御多幸」とを衷心から祈って別れると、そしてトランクが届いて、それが隅に置かれると、ハンスは今一度窓から雨模様を眺めて、それから用心してドアに門をし、テーブルで、お伽噺のような、途方もない、無限の総額、百二十五ターラー貨幣を数えて、この無尽蔵の宝の前に長いこと、極めて敬虔な考察に耽っていた。どの銀貨も彼の建てる空中楼閣の強力な建築石材へ変身して、そしてまさにこの空中楼閣の屋根は紙幣で豪華に葺かれた。肉体的栄養部門に関して、自ら配慮しなければならないというのは、束縛の期間の後では、一つの歓喜であった。奔流の雨の中、外出し、一本のインク瓶、半連[全紙240枚]の原稿用紙、一束の鷲ペンを文芸用必需品として購入するために外出することは、言いようもない満足であった。この上ない興奮のうちに、この日は過ぎて、黄昏と共により落ち着いた熟慮の時が来た。

ハンス・ウンヴィルシュは、新たに自分のドアに門をした。彼は自分の新しい滞在地についてかなり詳しくなっていた。今や、自分の周りがとても静かになって、向かい側の屋根裏部屋の明かりが自分の部屋を照らして、彼はその明かりを受けて、浸透して来る夜の中、室内を歩き回った。 — 今や彼は自分の内部世界を支配している無秩序や混乱を相手にしなければならなかった。そして八時が打たれたとき、自分はすぐには腰を下ろして、『飢餓の書』の原稿に取り掛かることはできないと夙に承知していた。

彼が肉体的に落ち着いて来たとき、彼の魂の中で騒動が始まって、興奮した精霊は、すべての沈静化の試みを嘲笑っていた。

三日間、聖職候補生ウンヴィルシュは自分の部屋に閉じこもって、単に極めて狭いドアの隙間越しに、自分の女将と会話して、この善良な女性の胸に、自分の「旦那」の精神状態と国家権力に対する彼の関係について、奇怪な心配を惹起してしまった。勿論善良なこの女性は、聖職候補生ウンヴィルシュがこの風変わりな三日間に、自分の人生の昨年の損得について概算をして、この期間は得の結果であったと結論付けたと知るよしもなかった。

その多彩な夢を有する青春は、今や勿論彼の背後にあった。幾多の花が彼の魂の中で折れてしまい、この世の幾多の明るい光輝が色褪せた。ハンス・ウンヴィルシュが大きな飢餓を抱いて求めていた幾多の事が、今や彼をはなはだむかつかせた。しかしたとえ白や赤の花々や花卉が散っても、ゆっくりと幾多の立派な果実が実った。貧しく混迷の世界のすべてが必ずしも間違った微光や微明ではなかった。最大の最も深い憧れは静められなかった。これが最善のことであった。彼の瞑想の三日目、この憧れが部屋の剥き出しの荒涼たる空間を完全に変えた。ハンス・ウンヴィルシュはその屋根裏部屋で理想をもてなした。耳の遠い女将夫人が、自分の借間人は少しばかり「いかれている」と思ったとすれば、その点は正しかった。

飢餓牧師は、完全にロマン主義的気分に襲われた。全く警察には厭わしい気分で、つまりこの気分になると、人が崇高で、荘重で、陽気な本、『聡明なラ・マンチャの騎士ドン・キホーテ』を開くときと同じで、苦い、苦い涙を流すのである。これは、ミゲル・セルバンテス・デ・サアベドラが、「悲哀に練達して」、牢獄で書き始めて、貧窮と悲惨さの中、水症を患いながら完成させたものである。

愛らしい王女がいて、その王女は、天まで届く壁に囲まれた侵入し難い魔法の宮殿に閉じ込められていて、その入口には厳しい見張りとおそろしい悪霊が監視しているのである。一人の若い騎士がいて、この騎士がこの王女を一つの奇蹟と壁の中の隙間を通じて見つけ、その甘美な声を聞いたのである。すると彼も魔法をかけられてしまった。勿論彼は固く幽閉されたわけではなく、好きなように周囲を行ったり、駆けたりすることが許された。彼はアメリカへ行こうと思えば、それは自由に許されたことであろう。しかし彼はただ令嬢がその暗い隅に座って、一辛抱しているその塔の周りのみを行って。さてこの騎士は、塔の周りを行きながら、すべての魔法、すべての幻惑化、並びに「それに関連する」諸本について熟考した。一とても有益な仕事で、これは多分に人間的性質の諸関係に解明をもたらすものであった。この騎士は心に憧れを抱いて自分の道を行きながら、多くの他人の足跡に注意を払わなければならなかった。そして彼は「ある者は、野心という広大な平野を悠然と歩き、別の者は従僕的、卑屈なお世辞という抜け道を行き、また更に別の者は、偽善者の欺瞞者の道を行く」[『ドン・キホーテ』後篇、32]という次第が分かった。そして彼は、穏やかな、可愛らしい王女の魔法の城の周りという自分の円を行きながら、より良い者、より誠実な者、より男らしい者となった。それは狭い円ではなく、一その中には、人間の中、人間の周りで純なるもの、真なるもの、美しいものとして育つものすべての空間を有していた。この塔の令嬢は、救い出されるに違いないと[騎士が]確信するだけで、この輪は永遠にまで広がって、狭小さやすべての發育不全を免れた。飢餓牧師の書くべき原稿も同様にこの円の中に属していることは、疑いの余地がないように見えた。しかしこれがどのような結果になったか、我々はすぐにも知ることになる。

ハンス・ウンヴィルシュがグリーンゼ路地に入場した後の、三日目の夕方、天候は晴れた。人々は雨傘なしに外出出来た。聖職候補生は新鮮な空気を味わうために出て来た。勿論彼は公園通りへの道に導かれた。その家は今日の黄昏の中、いつものこの季節、この日時と変わらずに見えた。しかし木々の間を忍び歩くハンスにとって、それは死んで、言いようもなく死滅して見えた。彼の勇気ははなはだ消えた。一まだ一時間前まで彼は屋根裏部屋で放恣な夢を描いていて、誠実な騎士が邪悪な勢力との賭けに勝って、魔法にかけられた、薔薇色の令嬢を、暗い隅から陽光の中、薔薇の生垣、小鳥のさえずる木々の下、ざわめく泉、湧き水の許に誘い出していたのである。ところが公園通りの庭のドアや玄関のドアは固く閉ざされ、鐘の紐を引いたところで、守衛のジャンが現れ、これは面白くないことであつたらう。そして薔薇の生垣は緑がなく、木々に小鳥のさえずりも全くなく、噴水は藁を巻かれて、陽気な噴出の約束は今年を終了となっていた。

家の窓辺には誰も見えず、クレオーフェアのピアノは黙っていた。黄昏に立っていて、突然、「話しかける小鳥」、つまり鸚鵡の声だけを耳にするのは、まことに悲しい感情であつた。この鸚鵡は忌まわしいしゃがれた声で、自分の現存を告げ、とても元気に見えた。

ハンスは公園の脇道へ退いた。しかし彼はアンリエット・トゥリュブレを見つけたかのベンチの間近に来ると、すぐに向きを変えて、今晚は原稿を書き始めても、空しく終わることだろうと固く確信して、寒々と、急いで帰った。嘆息して彼はランプに火を点して、優に一時間してから、「本」の最初の一全紙を切り離した。それにはこの無垢の紙に三本の大きな十字架しか描かれていなかった。

彼はシュロッターベックおばさんとグリュネバウム伯父宛に書いた。

最初おばさん宛に彼は今やかなり詳細に、最近起きたことすべてを伝えた。この手紙がかなりメランコリックな調子になったのは間違いなかった。実直な伯父さん宛には彼は陽気な筆致にして、この調子に彼は後で自ら驚いていた。翌日彼は三本の十字架の全紙を新たに持ち上げて、一頁書き、これは朝のうちとても気に入っていたが、しかし夕方になるとまた破棄した。十月二十日に彼は原稿用紙の最初の全紙を破棄して、「将来に対するとても素晴らしい希望」[ラーベの学校作文評価]のうちには勘定されない或る気分陥った。彼は金の備蓄も数えて見て、自分の空中楼阁の中央翼は崩壊間近であり、この建物の土台はまことに頼りないという確信が次第に兆してきた。

充足の中、飢餓について書き、同時に冬に春のことを書くこと、そして自由な男として、黒いインクの壺から、黄金と銀の糸を紡ぎ出すことを、とても素敵なこととして彼は思い描いていた。しかし寒くなった。彼は自分の薪の備蓄に関し、自分の女将の正直さに疑念を抱く十分に根拠のある理由を有していた。雪片は一夜にして灰色の雲から舞い降り、吹雪いて、かくて快適な空想の実現の為に応分の手伝いをしたものであろう。しかし舞い降り、吹雪く想念は、きちんとおとなしく、原稿用紙に定着しようとしなかった。腹を空かせて、ハンスはそれらの狩猟に出掛けた。然るに雀どもは、その食べ物に関し、ますますえり好みしなくなった。「飢餓牧師」が、想念に狩り立てられては、想念を狩ろうとしても無益であると察知する時が来るに違いなかった。彼が大学町の山々や森で小鳥達や木々、花々、雲々に対し、気持ちが溢れるがままに、容易に美辞の説法を行った時代は過ぎていた。以前生徒として理解している時よりも、世間について更に多くのことを経験して来た男は、もはやそのような具合に話しは出来ないし、書けもしない。血と肉の備わった人物、現実の生きた関係、要するに現実のままの事物は、心の中で完全な革命をもたらしていた。ハンス・ウンヴィルシュのように完全に主観的性情の者は、この試みの前に想定されていたほど、簡単に紙上に定着されなかった。そして、十月二十一日、郵便配達人が一通の手紙をもたらした。それは、心配、憂愁、反吐に見舞われていたこの著述家を完全に混乱させ、原稿の完成に全くの疑問符を突き付けた。

それは霧状の午後で、屋根の上の天には、鋭い輪郭の雲の像は一つも見つからず、ゆっくりとした雲の列とか、急ぎの列を追うことのない午後であった。不安な気持ちでハンスはまた自分の財布を覗いた。自分は、一 二週間前に信じたような百万長者ではないという嘆かわしい確信から救出してくれるような神は存在しなかった。

すべての病的気分に応じて、そのたびに適切、的確な天候を処方することが可能でありさえしたら、この気分を処理することはとても容易になろう。ハンスがこの午後、何ら澄んだ青空も、陽気な雪吹雪も注文することが出来なかったのは、とても残念であった。この霧は彼をますます深くメランコリーに追い込んだ。

窓辺に彼は座って、片手で頭を支えて、向かいの窓前にあって、乾く予定の洗濯物

を凝視した。そして地球での苛立ちについて瞑想した。本当にハンスは不調であった。そして自分は自由のためには、完全に無益であるという考えが、とても辛いものとして明らかになった。聖職候補生は、望みの自由を得て、何を始めたか。三日間彼は空中楼阁を築いた。それから彼は毎朝、昼近くまで眠った。とても安い煙草をとてもまずいコーヒーに合わせて吸った。そして自分の「本」の最初の全紙を破棄した。十月二十一日、ハンス・ウンヴィルシュは、自分の飢餓演説で有名な男となり、フレンツヘンの求婚者となる考えは、実用的でなく、とんでもなく馬鹿げていて、彼に一人の出版者が自分の観点を明確にするまでもなかった。ドアをノックした郵便配達人の固い指関節がこの快活とは言えない考察から彼を目覚めさせた。

しかしこの郵便配達人と共にまたしても運命が彼のドアにノックした。二度目、ニクラス・グリュエネバウム伯父が、しわがれ声の不吉の鳥として、彼の甥を一つの臨終の床に呼んでいた。次のように彼は書いて来た。

「いとも寵愛する甥殿、
尊敬おく能わざる聖職候補生殿、
我が愛する少年、

そなたが牧師として、立派な希望の許にあり、敬虔な人間として悪気のある人間ではないし、そなたの伯父に仕返しをするようなことはないと承知しているが故に、そなたにこのことを知らせることにしよう。我々はそなたの手紙を受け取って、とても喜び、また驚きもした。私は、そなたがかくも高貴な家、その立派な賄いや世話から離れたということ、軽く考えていない。しかしお婆さんは、それを良いことと言ったし、私もそう思う。自分がどのような仕事に向いているか、そなたが最も良く知っていよう。しかし私はお婆さんのことではやはり頭をぶん殴られた思いでいる。一昨日お婆さんは私の両手の下で身罷りそうと思ったからだ。お婆さんは今もなお息をしていますが、お婆さんの九回目の人生はいずれにせよ間もなく終わりそうだ。どんな猫にもそれ以上の生命はないし、誰もこの地上でそれ以上を要求できない。最愛のハンスよ、お婆さんは一体どんな人であるか、お婆さんは人に説教が出来るし、相手がお婆さんの思うようにしなかったら、どんなに強情にくっついてかかるか知っていよう。事が家の鍵のこととか、それに強力酒精分、その他人間の心を喜ばせるものになったら、お婆さんは残酷な人間、暴君となるものだった。私はお婆さんのために救済を神に請わない。それはほとんど私の心が反撥する。しかしお婆さんは正直な女性であったし、まことに気転が利いて、実直に、私が困窮し、困惑しているときに助けてくれた。それで私はお婆さんがヴィーナスであっても、これほどお婆さんのことで悲しくは思わないだろう。お婆さんはヴィーナスではなかったし、誰もそうだと主張しない。愛するハンスよ、名付けの子にして甥よ、私はそなたをそなたの母親の床に呼んだが、今度もまたそなたをこちらに呼ばなければならぬ。死神は誰をも待ってくれないし、老婆に対しては、私が経験上知っているように、少しも待たない。ドクトルは老衰であると言っている。多分そうであろう。しかし何であれ、長くは靴も保たない。練達の親方なら、どんな編み上げ靴でも、もはや修繕が効かない時がやって来て、称えるべきギルド全体でもそのほころびに手を打てなくなると知っている。ご立派な衆生や尊い貴族はなかなか信じようとせず、新しい一足を求めないとしてもな。

最愛のハンスよ、私は新たな行を書き始めている。自分の気持ちが圧倒されてしまった、これも不思議なこととは言えない。悪魔が奇数も偶数も奪って、真っ先に真っ直ぐな者達を奪うと悟ることは悲しいことだ。お婆さんは私を完全に支配していたが、これはお婆さんが私のために良かれと思ってしたことだ。お婆さんが私の人生行状に鳴り物入りで盛大に咎め立てして、もはや私を吊り仕上げ、しばき上げ、リンチにかけて、私を謙虚にし、憂鬱にさせてくれなくなったら、私はこれからどうしていいかわからない。私はお婆さんの人生に対して一文も出さない。しかし三倍のルイ金貨十万枚払っても、私には安い値段であろう。愛するハンスよ、そなたにはもはや定職も、契約も、上司もないのであれば、誰にも心配をかけていないし、そしてそなたも誰のことも心配せず、幸い先立つものしか欠けていないのであれば、我々の許に帰って来て、お婆さんがその人生でとても気にかけていた精霊達の許に逝く前に、哀れな老いたこの魂を慰めてやってくれ。お婆さんは、私がそなたを大学から呼び寄せたときのそなたの母親とほとんど変わらず、そなたを求めている。我々は皆、そなたをこの目で見てみたいと尋常でなく願っている。シュロッターベックお婆さんは急を要する。これ以上言う必要はないだろう。

一週間前から私はもはやこの家から出ていない、老お婆さんの最後を待っている。それにお婆さんとの別れを惜しむ良き魂が他にまだ多い。しかしこのニクラス・グリューネバウム伯父は、皆を慈しんで、愛想良く感謝し、礼儀正しく受け入れている。専ら女連中が多い。専らまたこのお婆さん連中なんだが、このお婆さん達が昔からお茶や有害な飲み物でお婆さんの体の内蔵を相当痛めつけたと私は睨んでいるのだが、この私の他には、このことに気付いて、腹を立てているのはいないだろう。

それでは、大事な甥、義弟の息子よ、この善良な魂と、そなたのしばかれて、不幸に泣き言を述べている後見人兼伯父に対し、好意を示して、お婆さんの最後の時をそなたの聖職者らしい姿と慰めの言葉で甘美なものにしてくれ。口頭で更に言えそうなことは、差し当たりまだ保留している。手紙がとても長くなって、私はもう驚いているが、しかしこのことでもそなたは私の悲しみについて気付いてくれようし、毎日お婆さんの側に座っていて、この穴蔵から出られないのだ。

健康に留意され、私のことは何も心配ご無用に願いたい。

大きな苦悶の中にいるが、よろしく。 そなたの伯父

ニクラス・グリューネバウム

靴製造親方

追伸、私用に一ポンドのルイジアナ煙草を持参してくれ。こちらの人間や商人はもはや誰も信用できない。ビールも全然駄目だ。人間はすべて立派なものを台無しにする。人間はいつも余りに沢山発明すると、私は固く信じている。このまま進むと、百年後はどうも結構な代物の醸造となる。唯一の慰めは、もう生きていないということだ。

大きな嘆きの中

そなたの伯父、ニクラス、G.」

この書状の全体の意味をハンスが明瞭に理解するまでには、それなりの時間がかかった。彼が陥った硬直から目覚めるには、それなりの時間がかかった。彼は昔、自分を母

親の臨終の床へ呼んだときと同様に、この手紙に従わなければならない。愛情の相当分がまた彼の人生から一層乏しくなった。またこれまで明かりであった一つの箇所が暗くなった。自分は出来るだけ早く、旅立たなければならないと、彼は理解した。しかし彼はこの都市の屋根裏部屋から、以前学生宿から出て行った具合には出て行けないという確信も生じた。彼は昔、大学にいたときよりも、今自らの背後に多く残していた。彼の魂は公園通りの家に縛られていた。そしてまさに自分には越えがたい柵でこの家から遠ざけられていたので、更に遠くへ出掛けるという考えは、一層恐ろしく思えた。どのようにして、あのフレンツヘンに運命のこの打撃について連絡したら良からう。彼女にこのことを連絡せずに、この町を去ることは出来ない。しかしどのようにして ー どのようにして去らせられよう。

彼は額をこすった。新たな苦悶に襲われ、彼は自らに辛辣な非難をした。ルドルフ少尉によって託された信頼に少しも応えていない、と。ハンス・ウンヴィルシュがグリューネバウム伯父の泣き声の呼びかけに応じず、臨終のシュロッターベックおばさんを慰めず、自分の現在いる所に留まり、これから先も、魔法の城と、同じく魔法をかけられた原稿の周りを回り続けるぞと固く決意した一瞬があったと、我々は残念ながら認めなければならない。しかしこの一瞬は、有り難や、一刹那で過ぎ去った。邪悪な精霊は逃げ去って、ハンスは自分のなすべきことを承知していた。彼は老ムゼーウスの沈黙の恋[Stumme Liebe]の華麗な物語の惚れた若者、ブレーメンザーのようには、一人の「旅行者」に代わり、諸教会で祈りを捧げさせなかった。彼は単に手紙を書いた。そして単に枢密顧問官夫人の観点から見れば書く動機はないのであったが、枢密顧問官宛に書いた。顧問官ならば、まだ以前の生活仲間に対し関心を抱いてくださるであろうと信じて、一人の男宛に手紙を書く按配であった。この手紙をこの晩のうちにも間近の郵便ポストに投函して、それから旅立ちの準備をした。フレンツヘンは彼の逗留について知らせを受けるであろうと、彼は分かっていた。かくて彼は自分の魂を今や全面的に昔の故郷に向けることが出来た。両親の居間に掛かっていた輝く玉が、そのすべての明かりを取り戻して、彼の心のすべての深みに、その穏やかな輝きが届いた。耳の遠い女将は間もなく旅立ちのことが知らされた。翌朝五時に、ハンス・ウンヴィルシュは新町への途上にあった。つまり彼は、暗闇の中、準備を整えて、寒さに震えながら、公園通りの鉄製庭園格子の前に立って、枢密顧問官の家から黙って別れたのである。彼が利用しなければならない鉄道は、五時半が始発であった。グッツ令嬢はまだ眠っていて、夢見ていた。彼女は夢の中で、海のざわめきに似た音を耳にした。そして夢の中で、彼女の知らない誰かが、それはやはり海ですと言った。

第三章

聖職候補生ウンヴィルシュが息を切らして、全速力で駆けて、駅に着いたとき、すでに乗車への鈴が鳴っていたが、チケットを買い、列車に駆け込み、一人の太った、寒さのため十分に防寒をしたレディーの膝に飛び込んだ。このレディーは後に見世物動物所有者と判明したが、彼は倫理的憤怒以上の力で揺らされ、突き飛ばされ、向かい側の気難しい外見の紳士の方へ飛んで、それでこの紳士にこう質問された、おたくは奥インドの弾性ゴムとして木から飛んで来たが、このような「跳ね上がり飛び」をしてよろしいという警

察の許可証を呈示できますかな、と。更に車両の天井の陰気な明かりが、彼の額と危険な接触圏に迫った後、彼はようやく二人の頑丈な令嬢達の中に居心地の悪い席を見つけた。この令嬢達は、一種珍しい浸透性の野獣の臭いを自らに有していて、その一方の令嬢は、膝に寒さでガタガタ震えているティティモンキー亜科、別名リス猿を十分に覆いをした箱に持っていた。古帽を被り、独特なフランス語化した隠語を話す編み紐上着の風変わりな他の民族が、この車両の別の区画を占拠していて、その中に点在している数少ない普通の人々を、放浪者風自在な身振りや理屈で魂消させていた。

聖職候補生ウンヴィルシュはこのような現今の気分するとき運命によってこれ以上にましな一行に遭遇することはなかったであろう。それは耐え難いものであった。やがてこの動物調教者の一行とは夕方まで離れられないと判明すると、更に一層耐え難くなった。この一行はハンスと同じ道を進んでいて、どこかの大きな年の市とか見本市に自ら出現して、花を添えるのであった。辛抱が肝心であった。

ハンスの周りでは輪状に入り乱れて、お喋りがべちゃくちやなされた。温まるための飲み物の瓶が手から手へ渡され、しばしば手柄となる話しが語られた。この遍歴の野獣の女支配人、太った毛皮のレディーは、停留所のたびに、列車の貨物車両の動物の箱を見張っている人々から、その興味深い怪物についての報告を受け、ドイツ語であれ、フランス語であれ、同じような流暢さで罵っていた。ティティモンキー亜科を持った若いレディー達がこの点もっとも上手に支援していた。気難し屋の紳士は、多分に白熊と褐色熊の混血であったが、駅ごとに鉄道員と喧嘩して、横目で睨みながら、極めて蔑んだ見解を述べて楽しんで、「車両が満員だでよと言っても理解できない出しゃばり賤民」と。

聖職候補生ウンヴィルシュにとっても、ガラガラ蛇の箱が無事自分の座席に下に密輸されたでよと知ることは、とても快適とは言えなかった。彼はまもなくとても気落ちしてしまって、それで別の若いレディーがこのスカンクの類いを入念に世話するために、彼の両腕に入れても、ほとんど抵抗しなかったことであろう。天候はこの旅の一行ほどに全く居心地の良くないものではなかったとしても、このような状況下ではほとんど関係なかった。膝に両手を置いて、ハンスは、動かずに、座っていて、列車は日中、ガタガタ急いで進み、あたかも列車自らが、進行を早く終えて、今の荷を片付けることに腐心している風であった。アフリカのライオンがその檻の中で呻り、アジアの豹が吠えた。そして神学者のドイツ人聖職候補生は、ようやく夕方六時に駅に到着したとき、神に感謝した。その駅から郵便馬車が更に新町へ向かうのであった。

しかし郵便馬車はようやく翌朝出発であった。ハンス・ウンヴィルシュは、やむを得ず、短すぎる宿のベッドで落ち着かぬ眠りを眠ることになった。彼は早朝目覚めて、そのときには昨日の鉄道と旅の一行のことをほとんど忘れていた。故郷が近いという思いに全く彼の心は囚われていて、数時間したら、自分が若くて幸せに過ごした神聖な大地、自分の両親の眠る地に、幾多の不穏な年月の後、また足を踏み入れるという考えに、他の一切は圧倒されていた。自分の部屋の窓辺にハンスは立って、この小さな町のマルクト広場を覗いて、メランコリックな欣喜雀躍状態でその朝を待った。昨日は列車の中で、十分に時間があって、青春の馴染みの女友達である、善良な老シュロッターベックお婆さんのことを不安にまた痛々しく思い出していた。少なくともその際、周りの喧噪は支障とならなかった。 — この朝も彼は確かに相変わらずお婆さんのことを考えていたが、しかし昨

日とは違った風に考えていた。彼はもはやおばさんについて不安な心配をしなかった。誠実なこの留守番女性の姿が明瞭に、静かに彼の精神の前に浮かび上がって、彼は固くこう確信した。おばさんは、伯父が書いて来たような病気では全くない、あるいはもはやそれほど重くはない、と。彼は自分の心が全く自由に軽快になるのを感じ、もはや実直な伯父ニクラスの手紙をそれほど信じなかった。シュロッターベックおばさんは伯父が泣き言を言って描いたようには、それほど重篤には思えなかった。

聖職候補生は故郷に向かって徒歩で出発したかったであろう。しかしぬかるんだ道を考慮して我慢し、郵便馬車に乗った。連れとなる乗客が乗り込むたびに、彼は昔からの知人が一人いるかもしれないと思った。しかし結局周囲の人々は皆知らない人ばかりと分かって、ほとんど心が痛くなった。自分の父祖の町前の最後の遮断棒に着いたとき、彼はもはや我慢できず、馬車から降り、自分の席を、誰であれ、御者が彼の代わりに受け入れようと思う不正乗客に喜んで構わず譲ることにした。

彼は徒歩でこの先を進んで行った。ぬかるんだ街道に、太陽はこの季節、願ってもないほど晴れて輝いていた。

いかに道端では先へ歩むにつれ馴染みのものが増えて来たことか、いかにこの良き小都市の諸塔が浮かび上がって来たことか、いかに聖職候補生が最後の高台に静かに立ったときに、ほとんど自分の感動を抑えることが出来なかったことか、多分誰でも想像でき、追感出来よう。

さて通り過ぎて行く道の側に、教会墓地の壁があった。壁越しに黒い十字架や墓の骨壺の蓋つまみや木々と藪の葉の落ちた枝が見えた。故郷旅路のハンスは壁越しに見ていた。かなりすぐ自分の手前に、新たに掘られた墓穴が見えた。しかし彼の両親の墓は地面が盛り上がっていて、彼の目には見えなかった。墓地の扉は閉まっていた。この徒歩の旅人は、自分の父親と母親、小さなゾフィー、貧民学校教師ジルバーレツフェル、その他多くの者達が眠っている箇所に向かって一礼した後、更に進んで行った。彼は父親の飢餓と貧民教師の飢餓とを考え、それからこの新しい墓は誰のためのものであろうかと考えるに至った。この新しい墓塚には不安を抱かされた。彼はまさに今このとき、新町の町から誰一人喪いたくなかった。ひょっとしたら自分の知っているかもしれない人が埋葬されなければならないというのはとても悲しい。 — 帰郷のこの瞬間に埋葬されるとは。

こう考えながら彼は更に急いで歩いた。そして以前グリュエネバウム伯父が立って、彼とモーゼス・フロイデンシュタインとを、二人が大学へ向かうとき、見送ってくれた古い市門のアーチがその影を彼に投げかけた。彼はその影が自分の頭上にある間、モーゼス・フロイデンシュタインのことを考えて、それから陽射しの明るい路地へ入り、ヴァーレンティーン教会塔の鐘が三時を打った。鐘は、彼が今やテオフィル・シュタインと名乗るかの男のことをもはやそれ以上考え続けることを許さなかった。

さて彼は、自分が良く知っている様々な人と出会った。しかし誰も彼を見分けなかった。新町はほとんど変わっていなかった。ただマルクト広場沿いの一軒の家が焼け落ちていた。その箇所には新しい家が建てられていた。その他はすべて一つのガラスの鐘の下にあるかのように保存されていた。人間達の方が建物よりも変貌しているのは、ほとんど一つの不思議に見えた。

今や彼はクレッペル通りの自分の家へと引き寄せられて、彼は誰かに見分けられ、引き留められることを恐れて、視線を上げずにいた。素早く彼は家々の間近を歩み過ぎて、最後の通りの角を曲がった。この角のせいで、彼が生まれ育った低い屋根の家はみえないままであった。彼はそこでとてもゆっくりと歩いて、そして自分の家の戸口前に子供達が集まって、玄関の間を凝視していることを訝しく思った。彼は子供達の頭越しに、ドアの中を覗いて、一つの棺の周りに四本の明かりが燃えているのを見た。シュロッターベックおばさんは亡くなっていて、彼に対しグリュネバウム伯父を通じて挨拶を残して、また更に他の幾つかのことも伯父を通じて言い残していた。棺はすでに朝方釘打ちされていて、葬儀は午後の四時と定められていた。ハンス・ウンヴィルシュが墓地で目にした墓穴は善良な老シュロッターベックおばさん用であった。万事遺漏なく整えられていた。しかしハンスはこの必然性がやはり理解出来なかった。

グリュネバウム伯父はいた。彼は甥のことが見分けられず、伯父がこの殿方は誰であり、誰が伯父とミス・シュロッターベックにかくも弔意を表しているのか明瞭に分かるまでかなりの時間を要した。伯父のことを、自分の五感の大半を飲み過ぎて喪失してしまった一人の靴屋と見なすような人々が多くいたかもしれない。しかしこれは不当である。伯父はその人生で確かに多くの渇きを覚えて、しばしばそれを静めて来た。しかし彼は「体の中に一つの心臓」も有していて、これが彼に「今や痛棒を加えた」のであった。ニコラウス・グリュネバウム伯父は、脆い、半ば子供っぽい老人となっていた。彼は片隅に座って、めそめそ泣き、おばさんを求めた。

更に他の人々も居合わせた。石工とその家族、また多くの近所隣人の男女で、彼らは葬儀振る舞いの菓子類を味わっていたが、今や半ば当惑し、半ば厚かましく、聖職候補生の周りに集まって、亡きおばさんを称え、そして天が間もなくグリュネバウム親方も受け入れることになれば、結構であろうとの主旨で自分達の意見を述べた。ハンスはこの家から追い出すわけに行かないこの惨めな雑踏の中から、半ば強引に善良な伯父を引き出した。彼は伯父を、丁寧に、善良な息子の如く、階段を上り小部屋まで案内した。そこはかつてアントン・ウンヴィルシュと伯父とがハンス誕生のとき、一緒に座っていたところで、それからこの生徒の勉強部屋となり、最後に伯父のベッドが置かれたのである。ここに甥は老公を座らせ、彼に向かい合って座り、彼を出来るだけ上手に慰め、ここで次第に伯父はまた、最近の日々の出来事を明確に思い出せるようになった。

おばさんは前もって伯父に、ハンスが到着したら彼にこう伝言するように依頼した後、穏やかに痛みもなく眠りに就いたのであった。つまりおばさんはハンスをとて、とても愛していました、ハンスのことをおばさんはいつも考えていたし、ハンスのことを思わない日はなかったのであり、おばさんは永遠の生命の中で、ハンスの人生が上手く行くようハンスのために祈るつもりです、と。更におばさんはこう伝言していた。ハンスが今おばさんに嘆いていることは良い結果になるに違いありません、でもどのようにしてなるかは言えません、と。

「いや、我が少年、我々は大いにそなたのことを話題にした」とグリュネバウム伯父は言った。「我々はその為に然るべき時間を設けて、話しがそなたのことになったら、すべての縫い目を解いて虚心に語った。二人が互いにしたたかに口げんかしていても、そなたのことになったら、一つ穴で覗いた。私が無邪気な少年のそなたを膝に抱いていると

きには、考えもしなかったことだが。いや、最愛のハンス、いっばしの靴屋が今の私のようにかくも足腰が弱るとは思いもしなかった。グリュエネバウム伯父はお仕舞いだ。そなたがおばさんの死に目に間に合わなかったとしても、私の場合には間に合っている。これはそれ自体私には嬉しい。いや、おばさんよ、おばさん、おばさん。胸甲を着けた人物で、本能的に十時の鐘が分かり、過たず就寝していた。私はおばさんがいないとやって行けん。おばさんの棺は下の方ですでに釘付けされている。私はここに座っているが、信じられないことだ。それでまともに話せる話し相手はこの世にもはや誰一人いない。あのアントンもクリスティーネも亡くなった。ベンチの上にいる友達の数はずっと少なくなって、最良の友が真っ先にずり落ちる。ハンス、私も埋葬される番になっている。私はそなたをもはや肩に担げない。そなたは確かに良い奴で、聖職者の牧師だ。しかしそなたはやはりそなたの道を行くし、それに恋をしているのだろう。おばさんはそのことを今際のときに嗅ぎつけたのだ。道標の所で、兄弟よ、おばさんにお別れを言うことにしよう。そして大きな宿での再会を祈念して、最後の一杯を頂くことにしよう。親方、老職人、職人、徒弟が一つテーブルの下に足を入れる宿での再会を祈念して」。

ハンスは老伯父を勇気付け、元気づけようとして空しかった。伯父は慰めを聞き入れようとせず、どのような警告にもただ首を振った。彼は目下打ちのめされており、昔同様、頑固で片意地であった。

「悪魔は奇数も偶数も奪う」と彼は言った、「まず悪魔はシュロッターベックおばさんのジャケットを掴んだ。今や私に足をかけている。しかし一方の者に正当なことは、他の者にも公正なことだ。ハンス、行こう、皆が下の方でお待ちかねだ、聞こえるぞ。老いたおばさんに決着を付けてやり、静かに休ませよう」。 —

多くの人間がシュロッターベックおばさんのお供をして、墓穴まで向かった。ハンスが墓地で見かけた墓穴である。ハンスは棺のすぐ後に伯父グリュエネバウムを配置して、同道した。

町ではすでに、聖職候補生ウンヴィルシュが到着したと聞いていて、町の人々が彼に視線を向ける中、その通りを葬列は練り歩いて行った。幾人かの昔からの知人が葬列に加わった。そして墓地ではヴァーレンティーン教会の副牧師が、故人とグリュエネバウム伯父、若い聖職者の同僚[ハンス]について好意的な説教を行い、この二人の服喪者と握手した。葬儀の後、多くの者が近寄って来て、その中にはハンスと一緒に並んで貧民学校ジルバーレップフェルやあるいはファクラー教授の教えを受けた者が何人かいた。

さて伯父とヨハネスはまた家に戻って、石工とその家族には、少なくともしばらくの間、ご遠慮を願って、亡きおばさんの小さな居間のドアに門がなされた。伯父はおばさんの安楽椅子に腰掛け、苦悶と疲労とで、眠り込んだ。聖職候補生ウンヴィルシュは、帰郷して以来初めて、自分一人に向き合うことになって、ここは自分が生まれた家であり、ここには輝く玉が掛かっている、ここで自分は静かで、豊かな青春を過ごしたのだという実感を初めて味わうことが出来た。

彼はおばさんの部屋を見回して、それぞれの物品をまた見分けた。ガラス玉も天井から下がっていた。夕陽の条光がそれに差し込んでいた。安楽椅子の老いた男は本当にグリュエネバウム伯父に違いない。ここは、クレッペル通りだ、 — 間違いない。それに間違いない。そして向こうの古い、朽ちた家、狭く低いドアが付いて、ドアには鉄製のア

ームと鉤がある。すべては昔のままだ、ただ、ヴェストファーレン王室の従僕服はない。その服はハンスがまだ若くて、新米の学生だった時にもうなくなっていた。

さて若い時がすっかりまた活気付いて戻って来た。ハンス・ウンヴィルシュは、シュロッターベックおばさんなら生前会うことを楽しみにしていたようなクレッペル通りの多くの人々[精霊]を目に浮かべた。彼らが登場して来て、去って行った。彼らはまた戻って来て、沈み、また近くか遠方で浮かび上がった。次第に多く、ますます多くが迫って来て、
— この「一杯の顔」にほとんど息苦しくなってきた。思い浮かべておれば、自らと現在の時を忘却できよう。ようやく伯父が一つの動きをして、聖職候補生は現実に引き戻された。黄昏であった。伯父グリュエネバウムは肘掛け椅子から飛び上がって、妙に不気味な声で叫んだ。

「靴屋の諸君、皆集まれ、最後の勝負を見たい者は、全員集合。シュロッターベックおばさん、おばさんの言う通りだ。陽気に生きて、浄福に身罷る。その他自余のことはもはや関知しない。ハンス、まだいるのか。こちらに來い、私と握手だ。我らは良き仲間、親戚であった。しかしひょっとしたら、そなたは靴屋になっていたら、もっと良かったかもしれないぞ、他のグリュエネバウムの者ども、ウンヴィルシュの者ども皆がそうであったようにな。あたら牧師だ。シュロッターベックおばさん、今日はです。貴女との気心の知れた快適なお付き合いは、忝くも名誉なものでございます。ハンスよ、そなたが父親と母親に言付けたいことがあるなら、早くそれを申せ。いつも言っていたようにだ、さらばでござる。それに悪魔と来たら、
— いや、そなたは承知だな、少年、達者でな。ま、騒ぐな。ご機嫌麗しゅうな。アーメン。さあ、編み上げ靴が一丁上がり、アーメン、編み上げ靴が一丁上がり」。

ハンスはびっくりして跳び起きて、明かりと助けを求めて叫んだ。石工が家族と共に門の掛けられたドアをノックした。ハンスは震える手で開けた。グリュエネバウム伯父が照らし出された。伯父グリュエネバウムはその言葉通りの状態になっていた。彼はシュロッターベックおばさんの後を追ったのであった。しかし彼は、この世で肉体として、また他の所有物として残すものには、それほど頓着したくないのであった。

医者が呼ばれたが空しかった。ニコラウス・グリュエネバウム伯父は、亡くなっていて、人間の技術では、彼を再び目覚めさせることは出来なかった。彼は何年もおばさんと口げんかした後、おばさんの死で彼の心は潰れてしまった。つむじ曲がりの靴屋は長い間くたばらなかつた。そしてこの男のことをより間近に知っていて、この死去を耳にした者は、誰でも、手で髪を梳いて、両肩を高くすくめて、自分の意見を大方こう述べた。それは人間の心にとってばかりでなく、人間の目にとっても一つの損失です、と。ハンス・ウンヴィルシュは大変弔意を受けて、何人かの人々がこの喪の期間、手伝いを申し出た。そして石工は、自分は今、「お二人のご老人が逝去されましたので」、クレッペル通りの家を安くない値段で購入する意向でありますと彼に述べた。

そして再びヨハネスは墓地に立った。しかし今回は全く一人っきりであった。伯父に最後の別れとして敬意を表しに来た葬儀のお供が散った。ハンス・ウンヴィルシュは、墓掘り人に、墓地の鍵は、墓掘り人の窓辺に置くように致しますと約束していた。
— ハンス・ウンヴィルシュは一人残っていて、その鍵が手の中で重かつた。

彼の足許の黄色色の、かき回された土壌の中に今や、以前、各人各様に、誠実に、親

切に、そして固く、彼と現実の苛酷で冷たい世間との間に立っていた人々が皆横たわっていた。塚の下に彼の青春の番人達が横たわっていた。そして彼は、以前かくも強力に憧れて、彼らの圏外へ出たがっていたのに、もはや遠くに憧れていなかった、彼は今も立って、また憧れてもいたのであるが。彼の手の中の錆びた鍵が彼をほとんど下の大地へ引き寄せていた。世間の重みはこの鍵の重みとは比較にならなかった。この鍵の開ける門の背後ではすべてが完成していた。そしてハンス・ウンヴィルシュは、他の者達に従って、その深みへ下って行きたい思いであった。

しかし彼を取り巻く、この暗闇と困窮の中から、一人の明るい人影が歩み寄って来た。この人影が彼を押し止め、そしてこの人影のことを思って、彼は自分の潮時はまだ来ていないと言った。彼は墓の上に最後の視線を投げかけ、それから去り、墓地の小門を出てから、約束していたように鍵を掛けた。彼は、何度も使用されているのに、錆びてしまっているその鍵を、墓掘り人の住まいの、笑っている可愛い一人の子供に渡した。その子供は、鍵を父親に渡すと約束した。その日の残りど夜とをどのように過ごしたか、彼は後々正確には思い出せなかった。 — 彼はシュロッターベックお婆さんの居間の肘掛け椅子に座って、この椅子でグリューネバウム伯父は亡くなったのであるが、子供時代自分を照らしてくれたランプがガラス玉の反射を受けて輝く様を見ていた。彼はランプが次第に消えて行くのを見、そして朝が向かいの家の上から白み始めるのを目にした。かつて古物商ザームエル・フロイデンシュタインが住んでいた家である。

それから後の日々、彼は子供時代の思い出と関連するすべての地を訪ねた。そして以前親しく接してくれた多くの人々の許へも行った。ファクラー教授は今や老いた男となっていて、同様に少しばかり子供っぽくなっていた。彼は聖職候補生ウンヴィルシュの名前を覚えていず、モーゼス・フロイデンシュタインのことはすっかり忘れていた。彼の妻は亡くなっていて、しかしそのことも時折失念し、自分の末の娘をこの怖い妻のファーストネームで呼んでいた。官房長官トリュフラーは夙に無常の祝福を受けていて、彼の子孫もこの町を後にしていた。貧しいユダヤ人家屋の入口でハンスはエステル、古物商フロイデンシュタインの家政婦とも会った。彼女は彼の目には百歳に見えた。しかし彼女の目はまだ澄んでいて、彼女の精神もまだ鋭く、明瞭であった。しかしハンスに対して、彼女がザームエルの息子モーゼスについてどのような風に語ったか、これについてハンスは決して漏らさなかった。

かつて法学を専攻していて、今は新町で、クーシュナッペルでの貧民弁護士ジーベンケースと類似の仕事[ジャン・パウル作]をしている同級生がその間、聖職候補生の資産状況を整理してくれた。クレッペル通りの家は競売にかけられ、石工が現金三百ターラーで落札した。現金五十枚のピカピカのターラー貨幣がシュロッターベックお婆さんとグリューネバウム伯父の動産から得られた。しかしガラス玉は売りに出さなかった。ハンス・ウンヴィルシュは一つのテーブルの上にかくも多くの金の集積を見たことがなかった。しかしまたかつてこれほどの山積を見て、心がすさみ、不幸な思いがしたこともなかった。あたかも自分の最も甘美な、最も愛する思い出をすべて金に換えたかのように思えたに違いない。この富をどのような側面から見てみようとも、そしてこの件をどんなに理性的に正しく分別して思い描こうとも、彼の感情は変わらなかった。そしてたとえ誰かがその金を盗んだり、だまし取ったりしても、彼はきっと警察には届けず、むしろこの阿呆に感謝し

たかもしれない。

ハンス・ウンヴィルシュがもはや自分の父祖の町にいても何もすることのない一日がやって来た。一 雪模様になりそうな十一月の一日であった。一 彼は自分に都合の良い時に出発して良かった。彼は背後に大きな空漠を残していた。墓地の墓には精一杯配慮した。彼は死者達、それに生きている者達に別れを告げた。弁護士が郵便宿駅まで同伴して、彼を見送り、弁護士は凍えて帰り、その十五分後にはもはや彼のことを考えていなかった。郵便馬車がゆっくりと高台まで駆け上がったとき、本当に雪が降り始めた。馬車の背面の丸窓を通じて、ハンスは自分の故郷が霧と霧の中に沈むのを見た。彼は馬車の中一人っきりであって、熟考のための時間も機会もあった。しかし彼は熟考出来なかった。ただ多様な体験や思考、映像の混乱した断片のみが彼の精神の中を過った。肉体的、精神的に揺さぶられ、震動され、彼は正午に鉄道の駅に着き、最初の乗客として空の車両に這うようにして入ったが、しかし数瞬すると、「満員」となった。様々な紳士淑女が乗車して来た。これは聖職候補生ウンヴィルシュが既に知っている人々であった。ティティモンキー亜科の箱が、かの大きな野蛮人、無礼な意見を述べていたあの男の腋に抱えられて届いた。野獣の臭いのかの二人のレディーも行方不明ではなかった。就中、遍歴の動物園の女支配人、男のような声とご立派な毛皮コートの太ったマダムが出現した。ハンスの往路をととても心地良いものにしてくれたすべてが何一つ帰路でも欠けていなかった。この一行は警察の一斉手入力で商売が上手く行かず、その上アライグマを肺癆で喪っていたので、気分がなお一層陽気で愛想が良かったのかもしれない。

真夜中にハンスはグリーンゼ路地に着いて、自分の住まいが必ずしも整然としていないのに気付いた。中で多くの子供の洗濯物が干されていて、とても嫌な臭いがこもっていた。激しい頭痛に襲われて、ハンスはベッドの縁に座っていた。その間、耳の遠い女将がその部屋を人間の滞在可能な地に変えていた。しかしフォン・ブラウ大佐が聖職候補生に対して残していた名刺のことを、彼女は勿論忘れていて、彼女がそれを思い出したのはようやく翌朝になってからであった。

翌朝ハンスは名刺を受け取ると、勿論椅子から飛び上がり、この善良な女性に、この名刺を持って来た人のこと、何時に持って来たのか、そしてこの人は何と言ったのかと矢継ぎ早に質問をした。

女将はこの質問がなされるときの性急さに少なからず驚いていた。彼女は報告した、一週間か二週間前、白い口髭の老紳士がお見えになってですね、この人、階段のこと、階段の暗さのことをひどく呪っておいでで、ドアの前の洗濯樽で膝を打って怒っておいででしたね。子供達は不安に思って大きな声で叫びましたですね。でもどの子にも四グロッシェン上げなされたですね、それから聖職候補生のことをお尋ねになり、そのときとても怖い顔に見えましたですね。聖職候補生殿は旅立っていますと聞きなされたらですね、また呪い声を上げられて、テーブルに名刺を投げられて、こう言われましたですね。聖職候補生ウンヴィルシュが帰って来たら、緑の木亭へご足労願う、そこで委細を承知されたい、と。その後、私、女将は、ランプに火を点して、このご老人が階段を下りる際、照らさなければならなかったですね。明るい日中だというのに。通りでこの方仰有いましたですね、そなたは悪魔の許に失せやがれと。グリーンゼ路地すべての人がこの殿方にはびっくりしていましたですね。何もびっくりするほどのことじゃない。

緑の木亭へ行くべし。そう、フレンツヘン・ゲッツのことだ。

第四章

「フォン・ブラウ大佐のことですか」とレンメルト、緑の木亭の兵士風亭主は言った。朝食を摂らないままのハンスが全く息を切らして、彼の前に現れたときのことである。彼はとても懶そうに繰り返した。

「いや、フォン・ブラウ大佐ですな」。

「彼はこちらに来られなかったですか。私に何か伝言はありませんか」とハンスは叫んだ。彼は亭主が冷めている分、その分だけ熱くなっているように見えた。

「貴方は聖職候補生ウンヴィルシュ殿で、こちらへは一度ゲッツ少尉殿と一緒にお出ででしたな」。

「その通りです、一 それで心当たりは、一」。

「貴方が聖職候補生ウンヴィルシュ殿であれば、当たりです。ですが、しかし、一 フォン・ブラウ大佐殿はもはやここにはいらっしやらない」。

「しかしひょっとしたらここに私宛の言付けを残しているかもしれないのです。私はこちらへ伺うよう言われています」。

新たにレンメルトは神学生を頭の天辺から足許まで見つめて、奇天烈の言葉を飲み込み、悠然と言った。

「ひょっとしたらこのねぐらの殿方らは何かご存じかもしれません。聖職候補生殿が今晚、馴染みの時間にすっ飛んで来られましたら、当方も殿方も光栄に[快適に]存じましょう」。

ハンス・ウンヴィルシュには、亭主の確言にもかかわらず、今晚九人殺害者達[モズ]の一行と興ずることは、それほど快適なこととは思えなかった。彼は亭主を屈託して見つめ、亭主は彼を屈託なく見つめて、言った。

「聖職候補生殿は若干、強心剤や健胃剤を服用なさったら、この冷たい朝、このようなお顔の色の場合、効き目がありませんよ」。

「いや、参ります。そうしなければなりません。多分他に手段はないことでしょう」とハンスは嘆息した。レンメルトの人に優しい勘ぐりを聞き逃していた。彼は緑の木亭の亭主に別れを告げた。亭主は、先ほど意中の言葉を口にしなかったが、今や出した。

「とても奇天烈」と彼は言った、頭を振りながら聖職候補生を見送っていた、「このような変わり者がまさに我々には欠けている」。

亭主は自分の宿の中に戻って、「怠け者の給仕人」の頭を締め付けることにした。ハンス・ウンヴィルシュは、相変わらず空腹のまま、公園の方、公園通り、枢密顧問官の家へ急いだ。

するとまたこの家があった。相変わらず、寒々と優美であった。そして臆してハンスはこっそり通り過ぎ、自分自身が以前住んでいた部屋の窓の方を見、そしてもう一つの窓の方を見た。狂った希望が彼の頭を過った。誰かがノックして、彼を中へ招き入れるようにしてくれるに違いない、と。しかしこのことは起きず、彼はあり得ないことだと自らに言い、忍び出て、公園を横切り、また町中へ戻って、そして良く読まれている新聞の発

行所を調べ、広告を出すことにした。

彼はこの首都、君主居城都市の住民と、一 公園通りの家のフレンツヘンのためにシュロッターベックおばさんとグリュネバウム伯父の死去を掲載させた。それから彼は菓子店喫茶でコーヒーを飲んだ。それからどこかで、三百ターラーを有していると鈍く思いながら、昼食を摂った。それから帰宅して、夕方を待った。彼はとても疲れていて、飢餓の書の内容に新たに掛かろうと考えもしなかった。彼は死者達のこと、そしてフレンツヘンのことを考えた。彼はテーブルに上がって、天井に一本の釘を打った。この釘に彼はガラス玉を掛けた。この玉の反映を受けて、彼の父親は靴と詩を作ったのであり、この玉の反映の下、彼の母親は座して、その子守歌を歌ったのである。この玉の反映の下、シュロッターベックおばさんはその低い床几にしゃがみ込み、そのお伽噺を語ったのである。多くのことを彼は子供のとき、そして青年のとき、この壊れやすい物の表面で見えて来た。そして今や彼は成人男性として座っていて、変わってしまったこと、そして変わらずにいることのすべてを沈思していた。それから彼は立ち上がって、より平静になって、緑の木亭へ出掛け、九人殺害者達[モズ]の誰かから、フォン・ブラウ大佐から彼への言付けを聞き出すことにした。

彼は激しい風と闘いながらその道を進まなければならなかった。しかし幸い最後には目的地にたどり着いて、以前多くの珍しい話しを傾聴したかの部屋のドアの中に立っていることになった。すべてが全く以前と変わらなかった。一 暖炉には賢い異教徒のソクラテスがいて、壁には老スウェーデン人、レーブレヒト・ブリュヒャーがいた。嗜好のための煙草の煙や、ポンス酒、グログ酒、その他の温かい飲み物の上品な香りが立ちこめていた。六人ほどの九人殺害者達[モズ]がにやにや笑いの円卓の周りにいて、荒れたナイセ川と飢餓に苦しむ百姓民家の「実直」なお話しの片腕の殿方が議長席に座っていた。

「聖職候補生ルムヴィッシュ[騒反古]殿です」とレンメルトは煙の中に叫び入れた。呆然としたハンスに背を向けていた者が振り返って、目の前の煙を払い除けて、聖職候補生を凝視した。

「おやま」と片腕の殿方が叫んだ、「入りなさい、ドアを閉めて、レンメルトは退場、一 万事、O.K. こちらへ牧師殿」。

そこには、あるときは右側、あるときは左側になる殿方がいた。また奇妙な咳の気さくな殿方がいた。更に聖職候補生がこれまで会ったことのない様々な他の殿方もいた。この人々に彼はこの際紹介されて、それも、「約束する以上に遵守することが出来て、将来まことに有益な従軍牧師となるであろう若い男」として紹介された。

彼らは皆九人殺害者達の流儀で、彼に挨拶し、誰もが熱い石炭を、聖職候補生の頭に集めず、彼の足許に置いた[寛大に接して恥じ入らせず、気安く接した]。

「貴方は我が心にかなう男だ」と片腕の殿方が言った、「まあ、お掛けなさい。一杯のグログ酒を味わって頂こう。お掛けなさい。まこと何か温かいものがとてもしっくり合いそうなご様子です」。

「いや、大尉殿」とハンスは叫んだ、「フォン・ブラウ大佐殿とゲッツ少尉殿からの知らせを私にお伝え願います。この両殿方から私宛の伝言を教えてください願います。私は最近とても嫌なこと、悲しいことを体験しまして、ほとんどこれにどう抵抗したら良いのかほとんどまだ分かりません。私に必要なものは、温かいものではありません」。

ません。昨夜私は自分の生誕の町から、こちらへ戻りました。向こうでは、私の最後の親戚の者達を埋葬しました。 ― お願いです。私への伝言をご存じでしたら、お知らせください」。

「しかし、我が少年」と片腕の殿方は叫んだ、「まこと我が魂にかけて申しませう。こちらへ来て、お掛けなさい。実際ひどいご様子だ。冗談じゃないようですな。一体どうなさった、どうされました。当方として言うべきことはただ、貴方は向こうへ呼びつけられておりますということだけです」。

「向こうへ呼びつけられておる？どこへです。誰の許です」。

「それはな、そもさん、グルンツェノーの戦友ゲッツの許だ。大佐は即刻貴方を一緒に連れて行く所存であったが、貴方が貴方の住まいに不在で、相当当たり散らしていた。大佐は貴方のご足労を私に依頼された。しかしこれが私の言えることすべてだ。貴方が出来るだけ迅速に出立されたら、ひょっとしたら戦友ゲッツにとっては有り難いことなのかもしれない。哀れな奴さんは、何年か前、パリから連れ戻した小さな娘、彼の姪のことでとても行き詰まって、大変困惑しているように見えた。貴方はこの事情には、私や、こちらのこのねぐらの他の誰よりも、詳しくご存じであらう。最近ユダヤ人と駆け落ちした令嬢が枢密顧問官ゲッツの家 にいたし、その他更に諸々の事がある。我々はこの点について様々耳にした。しかし我々は戦友の家庭の事情に、その件が深刻なもので、ただの冗談では済まされない場合、軽々に首を突っ込むことを礼儀正しいこととは思わない。グルンツェノーの古参の健気な仲間の許へ出掛けられたい。貴方からどんな慰めの言葉を期待しているのか、神のみぞ知ることだ」。

「明日行きます、明日」とハンスは叫んだ。大尉は彼に手を差し出した。それはカツバッハでの戦闘の後、滋養物や珍味の道に転ずることのなかった方の手であった。

「それは結構。貴方は実直な少年だ。全く珍しく私の心にかなう方だ。それでもです、何か温かいものを飲んで頂きましょう。それから貴方自身のモヤモヤをはき出してください。テーブルの周りにいるこの我々皆が背囊に一片の苦悩を隠しています。笑ってテーブルを叩きながら、何人かの者が心の中でしょげていると思います。聖職候補生殿、乾杯。それでは、貴方の苦渋をどうぞお話しになって、 ― 発砲」。

ハンスは、この九人殺害者達の情緒的関心を断ち切ることは無理であろうと察した。それ故彼は簡潔な言葉で、新町への自分の旅とおばさんと伯父の死について語った。彼が終えると、居合わせる九人殺害者達の全員が、おばさんと伯父の冥福を祈るために、テーブルの上で音高くグラスを合わせて、献杯した。彼らはこのようにして、すでに何人かの戦友に対して「最後の献杯」を行っていた。ハンス・ウンヴィルシュは、シュロッターベックおばさんとグリューネバウム伯父の名において感謝するしかなかった。この件はそれ自体何ら滑稽なことも、奇矯なこともなかった。 ― 聖職候補生は目に涙を浮かべて、自分の感謝を述べた。

「いや、貴方は椅子の上でとても揺れていらっしゃる、若い方」と荒れるナイセ川の片腕の大尉は言った。「貴方をここに縛り付けておこうとするのは、やはり不当でありませう。出発の準備をなさって、グルンツェノーへお出かけください。人間は幾多の戦場を元気に行軍して行けるものです。その戦場で朽ちて行くに違いない亡き戦友達を十分に誠実に偲びながらも、その人間がその傍ら、次の宿営のことを思い描く、それが乾燥し

ていて、快適な所か、糧食は十分であろうかと考えても、誰もその人間のことを悪く咎めません。聖職候補生殿、未来にご幸運のあらんことを。グルンツェノーに行軍して行き、二人の老戦友、向こうの極道者、九人殺害者によろしくこうお伝えください。我々はまだ皆小枝に健在であるが、しかし戦友のエクスラーが吹き飛ばされて、一昨日お見送りしました、と」。

ハンスはテーブルを回った。九人殺害者の皆が彼と握手をした。レンメルトは、彼が外套を着る際、自ら手伝った後、玄関まで彼に同伴した。

「牧師殿、世にも珍しく名誉なことでございます」と彼は言った、「お元気なお姿で、もっと良い天候のときに、またお目にかかることを楽しみにしています。少尉殿と大佐殿にくれぐれもよろしくとお伝え願います」。

緑の木亭の亭主殿ともハンスは握手して、家に帰って初めて彼は気付いた。何と重い物が帰路ずっと太股に対して当たっていたことか、と。古いラム酒の十分にピッチの封をされた瓶で、白い一枚の全紙に包まれていて、レンメルトの筆跡でこう記されていた。

「道中、慰みに飲まれて、英気を養われたし」。

グルンツェノーへだ、グルンツェノーへ。すべての疲労が消え失せた。肢体のすべての強張りが解けた。大股でハンス・ウンヴィルシュは、浮かんだ玉の微光の下、部屋の中を行きつ戻りつし、考えた。ルドルフ・ゲッツ少尉と一緒に、フレンツェンについて、また枢密顧問官の家について話すという考えが、彼の心の中でとても明るく燃えて、それでそれ以外のものすべてが、多かれ少なかれ暗闇へ退いた。いや、これが正しい、グルンツェノーへ行く、グルンツェノーのルドルフ少尉の許へ行くことが正しい。そこに助言と救済がある。そこからこれらの混乱はすべて解けるに違いない。この時のように心がかくも軽くなったことは、「飢餓牧師」にとって、長いことなかった。

この晩のうちにも耳の遠い女将は新しい旅について知らされた。彼女は相応しい驚きを明白にした。ハンス・ウンヴィルシュは新たに旅の荷物をまとめた。そして翌日の正午に彼はルドルフ・ゲッツ少尉の呼びかけに応じていたが、その前にもう一度枢密顧問官ゲッツと面会しようと無駄な試みをしていた。無礼に彼は従者のジャンから、顧問官は不在という口実で拒絶されていた。彼が残していった名刺は、その任務の宛先には同様に届かなかった。ジャンはその名刺を、先の家庭教師に対する以前からの愛着に基づいて、自分自身の部屋の鏡に差し込んだ。そこでその名刺は、一本の孔雀の羽、本年印刷の六つの新しく美しい歌謡、料理番女の恋文の横で間違っ生きてきたのである。

今回聖職候補生ウンヴィルシュの道は北東へ向かっていた。蒸気機関車の車輪がどのように速く回転しようとも、この車輪は飢餓状態のハンスにとって十分に速く前進しているものではなかった。彼は熱くグルンツェノーと痛風病みの老「乞食少尉」に憧れていた。少尉はそこでフォン・ブラウ大佐の「お情けで生きて」いた。

この時の同乗の旅の一行について、彼は後々少しも覚えていなかった。ただ分かったのは、ここにはティティモンキー亜科やがらがら蛇の箱の人々はいなかったということと、先の口の悪い殿方を自分の興奮の水差し屋としてほとんどその出現が願わしく思われたことであった。

一体少尉に何をすべて語るべきなのか。少尉はあれこれの事に関し何と云うだろうか、少尉は枢密顧問官の家での彼の振る舞いについてどのように思うことだろう。

その間にまた思いは、新町の両棺と墓塚のこと、自分が教会墓地で手に握っていたあの重い鍵のこと、今や他人のものとなっているクレッペル通りの古い家のことに至り、自分はそこに生まれて、自分の縁者はすべてその家の中で死んだのだけど、と思ったりした。

まことに思いは、車輪がその軸の周りを回転するよりも素早く円を描いていた。この道中、ハンス・ウンヴィルシュは、冷たさも飢餓も感じていなかった。緑の木亭の実直な亭主差し入れの慰め用、英気養いの瓶を彼はグリーンゼ通りに忘れて来ていて、飢餓の本原稿同様もはやこの瓶のことも考えなかった。しかしヴィントハイムの郵便宿駅亭でのかの晩のことを彼は多分忘れず、大いに考えていたことであろう。その晩彼は自分の人生で初めてゲッツ少尉とフレンツヘンに出会ったのであった。それからまたコーレナウでの陰鬱な日々のこと、そして自分が唐檜の林の中に座っていて、幸運を待っていて、少尉殿が森の角から騎乗して来るのを目にしたかの日のことを考えた。また大都市へのかの旅のことを考えた。かの旅の途次、彼は初めて詳細にゲッツ三兄弟とフレンツヘンの話を聞いたのであった。新たな夜となって、車両の窓の前を滑り過ぎて行く風景が目に見えなくなると、彼はかの丘のことを考えた。その丘に彼はルドルフ少尉と一緒に立って、不安げに熱い明かりと何十万もの人々の動きとを見下ろしたのであった。

こうした一切が彼の背後、何と遠方に退いてしまったことか。何とそれ以来、人間や事物、自らの自我、それに世間が変化してしまったことか。このとき飢餓状態の聖職候補生ウンヴィルシュは、一種真面目な非難めいたものに襲われた。つまり自分はこれまで何としばしば、自分が勇敢に度胸を出して、自らと、自分の感情、そして自分が真なるもの、善なるもの、美なるものと思うものを、どんな敵にも対抗して擁護しなければならなかったときに、臆して、心折れて、引きこもってしまったことか、と。彼は自分が必ずしも自分の見解や願望のために、正義のために相応しいほどには、自覚して肩入れしたわけではないと告白せざるを得なかった。彼はモーゼス・フロイデンシュタインの不屈の意志を考えて、頭を下げ、自らの軟弱さを恥じた。列車が止まると、彼は実直なルドルフ少尉が用意してくれるであろう接待に対しかなり憂慮の念を抱いた。そして居心地の悪い旅館の部屋で、夜通し、不安な夢に苦しめられた。この夢の中で、少尉は彼、聖職候補生に鋭い試問をして、この試問は必ずしも候補生にとって有利な結果とはならなかったのである。

翌朝この目覚めた夢想家はまた郵便馬車に乗った。それも夜明け早朝であった。郵便宿駅のランタンも、車掌や馬丁、御者の手の中のランタンも、他の明かりや炎の輝きの場合感じられる神秘的魅力が何も感じられなかった。郵便宿駅の風は厭わしく厚かましく、乗客室の雰囲気も言いようもなく厭わしかった。空中に個々の雪片が舞った。どの面から見ても、旅をしている人間にとって不愉快に感ずる理由が十分にあった。聖職候補生ウンヴィルシュは凍えた。しかし意気揚々と感じて、男らしく天候や人間どものすべての無礼に抵抗した。無様な齒車箱風馬車が宿駅から走り出したとき、彼はどっしりと自分の席に腰掛けた。多くの縮こまって汚い小都市、市場町、村々を彼は目にした。またあらゆる身分の、入れ替わる旅の一行を目にした。黒いカフタン[丈の長い前開き服]の長い巻き毛の男達が途中、乗車して下車し、快適とは言えない臭いを放った。ハンスは彼らとヘブライ語で話した。

旅は長かった。大気中の雪片が増加し、所々、泥地で動けなくなり、力を合わせ精

力的にまた抜け出した。ポーランド語とドイツ語で、ひどい悪態が吐かれ、一人のユダヤ人が馬・夫役の百姓ども[封建制のこの地の残滓]によって殴られた。ハンスも殴られそうになった。しかし彼はこの度も状況に対処出来た。彼は彼の襟を掴んだ若い衆にラテン語とギリシア語で語った。すると柄の悪い若い衆は敬意を示して、彼らの汚らしい拳を襟から放した。

更に疲れた駄馬達も、果てしない針葉樹の森の中を頑張って進み、正午頃、荒涼たる不毛の荒地にある小都市に達した。こちらまでは「郵便馬車が通じていた」、しかしその先は通じていなかった。王室の郵便宿駅と鉄道管理部はグルンツェノー、フォン・ブラウ大佐とゲッツ少尉について何も把握していなかった。

聖職候補生ウンヴィルシュは、郵便馬車から降りたとき、このいとも立派な共同体の広場で、膝の高さまで汚物に沈んだ。彼の姿は、この郵便馬車の周りを取り囲んだ原住民の間でばかりでなく、またマルクト広場の周りの家々の住民達の間でも大きな人目を引いた。

この地はフロイデンシュタット [喜びの町]と言った。しかしどこから、何故まさにこの名前を得たのか、祖国の歴史に通じた男の誰一人、解明出来なかった。当地に生まれ、当地に関する事万般にわたって権威である税検査官でさえ、このフロイデンシュタットの税検査官でさえ、この人は二十年以上前から偶像トリグラフ[ポメルン地方のスラヴ人の神]について出版しようと思っていたが、彼でさえこの点は分からず、嘆息して自分の妻、当地生まれではない妻にこう白状していた。フロイデンシュタット[喜びの町]はいずれにせよ教養ある人間、精神的営為を志す人士の滞在地ではない、と。

マルクト広場の沼[流レヌ波]から聖職候補生は苦勞して、かろうじて、より高い地に抜け出して、そこの所でグルンツェノーへの道を彼は尋ねることが出来た。蟻集していた人々が彼の周りに来て、一斉に口を開け、彼に望みの情報を与えようとした。しかし人間に対し必ずしも好意的とは限らない運命の悪戯で、その質問は必ずしも適した瞬間の質問にはならなかった。フロイデンシュタットの教会塔で十二時が打たれた。フロイデンシュタットの居合わせている全住民が一気に返答のために開けていた咀嚼と嚥下の器官を閉ざして、一気に両踵を回転させて、去った、 — 返事をせずに、誰もが昼食に向かった。しかしハンス・ウンヴィルシュは口を開けて立っていて、彼らを見送った。この時間厳守が彼に及ぼした影響はまことに圧倒的であった。たとえ古くて傾いだ切妻の家々が同様に回転して、食事に向かって行軍しても、彼の賛嘆の念が更に高まることはなかったであろう。

しかしながら古くて傾いだ家々は、その場所に立ったままで、聖職候補生を見つめていた。しかし彼は気を取り直し、用心して四角のマルクト広場の半分、泥土を進み、一軒の家を目指した。それは看板から判断するに、一軒の旅館に違いなく、果たして、ポーランドの雄山羊亭と分かった。彼は入った。すると誰もが作業をしていた。彼らは皆食べていた。そして誰もが余所者にほんの一瞥でもする時間がなかった。かの疲れた旅人であっても、つまり一つの魔法の言葉でその全住民が石に変貌したというかの町に到着した旅人であっても、この日の丁度十二時にフロイデンシュタットに現れたハンスほど当惑し、見棄てられた思いはしなかったであろう。それだけに、偶然魔法の呪文を口にする事になった彼にとっては、一層珍しい事になって、この呪文が、呪縛を、少なくともポーラ

ンドの雄山羊亭では解いた。

ブラウ大佐の名前が少なくとも精霊を一瞬物質[食べ物]の束縛から解放し、咀嚼過程を一時的に停止させた。

この名前を聞いて、ポーランドの雄山羊亭の亭主の手から大きなスプーンが落ちた。口を開けて彼は聖職候補生を見つめた。候補生は、魔法のランプをこすって、精霊が現れ、御主人様何のご用ですと尋ねられているアラジンのように立っていた。

自分の宿の召使い達の中の席からポーランドの雄山羊亭の亭主は立ち上がった。これは極めて高い蓋然性でグリュネバウム伯父の気に入るであろうと思われる男であった。

「いや、フォン・ブラウ大佐ですか。私が知っているかですと。勿論存じ上げています。何を仰有る。旦那、町を遠くまで尋ねて回らないかぎり、フォン・ブラウ大佐を存じ上げない者はいやしません。町中で、大佐に侮辱されなかった犬どもは、一匹もいません。そのように丁重で、快適で、悪辣な旦那です、高貴な旦那です、よくポーランドの雄山羊亭にお越しです。いや、旦那がフォン・ブラウ大佐にご用なら、何故そのことをすぐに仰有らねえのです。トツフェル、トリーネ、ルイス、この旦那は名士の部屋で昼食をお召し上がりだ、その間に馬を用意しろ。私どもは特別なワインを大佐殿には用意させて頂いております。それをお試してください」。

ほとんど自分の意志に反して、ハンスは亭主の力強い両手で名士の部屋へ押し込まれた。そこにはすでに何人かの未婚の、執筆身分の、フロイデンシュタット人が同様に両手を美味しく用意されている饗応に上げて、この立派な食べ物から目を離さずにいた。ここで話されている主題に関しては、我らの読者の耳を汚さずには、漏らすことができない。一丁度一時に、空の、大丈夫かと不安になる馬車がドアの前に止まって、一時十分に、ハンスはフロイデンシュタットの本通りを通って、更にもっと大丈夫かと不安になる舗石の上、グルンツェノーへ通ずる市門へ向かった。亭主はそのフォン・ブラウ大佐への遜った挨拶をポーランドの雄山羊亭からよろしくと彼に託した。一

剥き出しの田畑や、石ころの荒野、そして針葉樹の森が再び優美に交互に入れ替わった。しかし聖職候補生の心臓は高く動悸した。彼は自分の鼻を高く上に上げた。北の方から一つの風が彼に吹いて来た。すると彼の横に座って、両駄馬を御しているフロイデンシュタットの男が言った。これは海風でして、後できっと舌先に塩分を感じますことでしょう、と。

海だ、海。

ハンス・ウンヴィルシュは海に向かって進んでいた。幾多の他の物同様、彼は海にも憧れていた。

道に幻惑された。道端の恐ろしく、荒れ果てた村々に幻惑された。聖職候補生の魂は一種名状しがたい不安に襲われていて、この不安は、むごく陽気なフォン・ブラウ大佐に対してのみ感じていたのではなく、ルドルフ・ゲッツ少尉から尋ねられるかもしれない質問に対しても感じていた。海もまたこの戦慄を引き起こしていた。

さてブナの森は樅の森と入れ替わり、多くの折れて、葉の落ちた小枝が地面を覆っていた。そして御者は「一週間前の大きな風」について語り始めた。

剥き出しの丘状の陸地を道は旋回していた。そして御者は奇妙に積み重なった岩塊

を示した。それは灰色の空に高台として暗く浮き上がっていた。

「あそこで異教徒の時代、居人族が多くの人間どもや国王どもを屠殺したのです」と彼は報告した。

森のざわめきが背後で反響した。微かに風が、丘の乾いたヒースの中をシュッと吹き抜けた。見知らぬ鳥が空中で輪を描いていた。御者はそれらをカモメと呼んだ。

御者はパイプに煙草を詰めた。しかしハンスは馬車の中で真っ直ぐに立ち上がり、すぐにまた馬車が動いて、自分は感情のままに動いてはいけないと教えられた。

再び剥き出しの高台となり、その向こう側に鈍い物音が聞こえた、一風の音でもなく森の音でもなく、海の音であった、海の声であった。

「御主人が今下車なされば、四肢の健康にもよろしく、私の馬にとっても都合の良いことになりましょう」と御者は言った、「これから苔を抜けてかなりの距離です。一週間の嵐でとんでもないことになったのです。真っ直ぐに『海の方』へ向かうことです。御主人はしっかり両耳を開けておれば、間違いありません。向こうの右手の歩道から真っ直ぐグルンツェノーへ道が通じています。手前どもは、御主人が着かれるまで、見守るしかありません」。

ハンスは大いにその気になって、御者の願いに従い、馬車から飛び下りた。彼は座っているのが単に苦痛になっていた。徒歩で速やかにこのざわめきと轟きとに向かって歩むのがはるかにましであった。

十五分間、彼は指示された歩道を前進した。段々と高く海の声が響いて来た。最後に一つ丘をよじ登る必要があった。彼が、息を上げて、咳をしつつ上に立つと、彼の前に海が横たわっていた。夕方の色褪せた明かりの中、海は広がっていて、霧が水平線を飲み込み、海面を、荒れた浜辺へ向かって、回転して来た。浜辺の右下のより奥深く、グルンツェノーの小屋の窓の明かりがちらちら光っていた。

ハンスは海をそんな風には想像していなかった。明るい日中、果てしなく広がり、現世で能う限りの至高の光輝で閃光を放っているというのが、彼の夢の中での海であった。一 さてこれは別様であり、全く別様である。しかし自分は手を心臓に当てざるを得ない。そして彼の胸の中で呼吸が止まった。

第五章

霧と共に夜はより素早く陸地に広がり、ほとんど、恐がっている子供に似て、聖職候補生は丘からの下り、丸い砂利や軋む砂の上を駆けて、最後にただなおもグルンツェノーの位置を暗示している明かりの方へ向かった。彼は間もなく、タールや魚油の雰囲気に包まれた漁師村の中に陥った。そして何度か浜辺のざわめく波の間近に来て、臆して脇へ退き、顔に波の飛沫を受けた気がした。ようやく彼は当地の最初の小屋群に達し、混乱し、乾くよう干してあった網に一度ならず引っかかった。しかし周りに人影は何も見えなかった。ドアの背後で一匹の犬が吠えた。若干躊躇った後、この旅人は窓の一つをノックして、勿論、同時に部屋の中を覗き、そして自分は船乗りの一家全員をはなはだびっくりさせていると察した。六人ほどの子供達はおずおずと母親とおぼしき女性の周りに集まり、一人の白髭の老男性は、大きな開かれた聖書から驚いて宙を見つめ、船乗りに用長靴の若い方の

男がその椅子から立ち上がった。ただ蒼古たるおっ母さんだけが静かに暖炉側で糸紡ぎを続けていた。

「ノックしたんは誰じゃ」と若い方の男が方言で叫んだ。彼は窓を開けた。ハンスはこの男に領主のことを尋ねながら、とても丁重に挨拶した。この獵師はさほど丁重に挨拶に答えなかった。しかしとても身軽に仕事に取りかかり、素早く自分の家のドアの前に現れ、この余所者に対応した。彼は、短いパイプを口にくわえたまま、一言も言わずに、動作にかかって、この余所者の方を振り向きもせず、夜の中へ駆けて行った。彼は幾つかの家の角を曲がり、道の中であって、彼にはよく周知の、しかしハンス・ウンヴィルシュには未知の、幾つかの物体の上を越えて行った。聖職候補生はよろめきながら、落ちたり、立ち上がったたりして、彼の後を行き、この愚直な、しかし風変わりな案内者が、少しばかり上の丘に向かって道を進んだ後、突然立ち止まって、多分パイプの先で、不規則な影の塊を示しながら、こう言ったとき、とても安堵した。

「あそこじゃ」。

「どこです」とハンスは尋ねた。しかし彼の問いかけは夜の中に木霊して、ただ海だけがそれに返事をした、しかし覚束ない返事であった。案内者は自分の責務を果たしたと思い、正午の食事時の鐘の際のフロイデンシュタット人の如く、背を向けていた。彼はそのパイプとそのカラフルなとがり帽子と共に駆け去った。おいおい、ハローと言っても、彼は戻らなかった。

用心してハンスは、パイプの先端でこの海に詳しい男が教えてくれた黒い塊の方への道を探って行った。彼の額が正しく、大きな、しかし閉ざされた屋敷門に突き当たり、彼がノッカーを見つけて、それを樫の厚板にぶつけると、この世でまだ聞いたことのないような犬の咆哮が勃発した。この憤慨した家畜はすべての音階で息抜きをした。若干ふくらはぎに来ていた男は、不快ながらもこのコンサートに聴き入って良かった。

数分不安げに待っていると、誰かが鞭を持って、今や吠え始めた四本足の無法者達の中に向かって来た。誰かがひどい呪い声を上げて、重々しい足取りが門に近寄って来た。門ががらがり言い、錠が軋み、明かりが夜の中に差し込まれた。この明かりはランタンからか、それともこのランタンの持ち手の鼻からなのか、分明でなかった。深紅の服の女王のように、この鼻は風雨に晒された顔の中に鎮座していて、この顔が今や屋敷門から覗き、暗闇の中の聖職候補生ウンヴィルシュを探していた。

「誰だ」と全くこの鼻に似合いのがらがり声が言った、「人ではないのか。いや、一 そこに、一 こちらに、おい、どうした。何のつもりだ、旦那、何のご用」。

ハンスは、自分は誰々であり、フォン・ブラウ大佐殿とゲッツ少尉殿のご要望、ご命令でこちらへ参り、ノック致しましたと伝えた。

「待つてな。ご報告だ」とランタンの男は言って、ドアを聖職候補生の鼻先で閉めた。新たに犬どもはその声を上げて、ハンスはこの接待を少なくとも「尋常ではない」と思った。時間は次の数分の間、彼にとってとても長く思われた。そして思わず知らず彼は自分の子供時代の様々なメルヘンを思い出していた。それらは同じ具合に始まって、そして誰かが人食い鬼とか人狼の暴力に屈して、食べられてしまうという結末になるのであった。しかし今や壁と門の向こう側で、幾人かの声が聞こえて来て、再度、門が開かれ、再度、鼻の男がそのランタンを夜の中に突き出した。そして緑色の毛皮の狩獵服と丈の高い

雨靴のフォン・ブラウ大佐が、聖職候補生を握り、掴まえて、彼を門の中へ引き入れ、叫んだ。

「間違いない、彼だ。この夜、この霧というのに。 — まあ、満更気に入らぬでもない。 — 入り給え。グルンツェノーへようこそ。徒歩か、馬車か、それとも箒の柄に乗ってか」。

ハンスは手短に、どこで馬車を降りたか報告した。そしてこの同じ瞬間、村に馬車が転がって来る音を耳にした。

「とても結構」と大佐は叫んだ、「聖職候補生、中に入り給え。グリプスよ、ぼろ馬車の面倒を見ろ。我が息子よ、進めだ。少尉は自分の椅子に座って、跳ねている、辛子軟膏の上にいる按配だ。聖職候補生殿、貴方は私にとって良い声の雄鶏だ。あの老公は貴方のことを大事に思っている。貴方に彼は思いの丈を述べることだろう」。

かなり広大に見える中庭を通じて、フォン・ブラウ大佐は客人を家の中、グルンツェノーの宮殿、あるいは城砦の中へ案内した。そこは十分野蛮に見えた。大きな石造りのホールに現れた召使い達は、公園通りの華奢なジャンをいずれにせよ手荒に驚かせて思い知らせていたことであろう。辛辣な連中であつた。壁にはあらゆる種類の狩猟具、漁師具が掛けられていた。その間のここかしこに、朽ちた男系、女系のブラウ一族の古い肖像画が見られた。犬は過剰にいて、ホールに横たわり、あくびをし、呻っていた。犬どもは開けられた暗いドアから覗いたり、階段を上がる聖職候補生の後を忍び足で付いて来たりした。それにこのような階段もまだハンスは見たことがなかった。馬に乗って駆け上がった者もいたかもしれない。三十年戦争のとき、一人のブラウ家の者がその芸当をして見せたという伝説があつた。大佐の轟くバスの声が廊下に響いて、最深の地下室までグルンツェノー一家に反響を引き起こした。

「ゲッツ、万歳。彼を掴まえたぞ、本当に彼だ。しかし日干しのヒラメのように痩せて黄色くなっており、流出瘤腫の馬のように膝がやられている。ティレニウスよ、こちらに同僚の黒い服がいるぞ。今やグルンツェノーには生命が死に絶えても、悪魔がこうほざくかもしれない、わしゃ命狙いは諦めたと」。

一つのドアがある若造によって開け放たれた。彼はこの家の一同のように、三分の一が海の男、三分の一が山の男、残りの三分の一が戦いの男であるように見えた。大佐の手に押された客人は部屋の中央に進み出た。そこではルドルフ・ゲッツ少尉ととても老いた聖職者の殿方がカルタやグラスで一杯のテーブルを前に座っていた。

「彼が来たのか」と少尉は叫んで、高い背もたれの安楽椅子から起き上がろうとした。

彼は苦痛の溜め息を吐いて、また沈み込んだ。彼の両脚はクッションと毛皮でよく包まれていた。そして彼の左足は低い床几の上に重々しく休んでいた。少尉はとても変貌していた。短期間のうちにはるかに老けていて、ハンスはその外見に驚かざるを得なかった。

「我が子の、我がフレンツヘンはどんな具合だ」と彼は震える声で叫んだ、「私はそれを知りたい、それを知りたい」と彼は叫んで、激しく松葉杖で床を叩いた。グルンツェノーの牧師、尊師ティレニウスは、宥めるように両手を上げた。

「いや、いや、 — 私はそれを知りたい」と少尉は叫んだ、「ここに嘆きの男の

わしが座っている。心配の嚙り虫を取り除いてくれ。 — ハンス、そなたの手を差し出せ。 — いいか、そなたの心の中にあるものをすべて吐き出せ」。

ハンス・ウンヴィルシュは心痛の余り、ぐらぐら一本足で立っている思いであったが、少尉の両足がまだ萎えているとしても、これは彼の拳についてはそう言えなかった。このしっかり握る拳は手痛風とは何の関係もなかった。聖職候補生は自分が知っていることをすべて話すつもりで、グルンツェノーへ来たわけではなくても、この固い鉄のような握りの中では、告解を、少尉の要望するであろうことすべてを告解せざるを得なかったであろう。

幸い修道同朋が、若い同僚に対し助け船を出すことを自分の責務、負い目と見なししていた。

「しかし少尉殿」と彼は言った、「暴君の真似は止めなされ。何と乱暴なことをなさっている。若い殿方には一服して貰いましょう。腹も減って、喉も渴いていることでしょう。万事順を追ってです。大佐、私を聖職候補生殿に紹介して頂きたい。 — 万事順を追ってです」。

「いや、牧師殿、万事順を追ってだ。その通りだ」とフォン・ブラウ大佐は叫んだ。「じゃ、聖職候補生殿、九人殺害者達の許から私のことは承知だし、少尉もご存じだな。こちらは我らの従軍牧師で、この世での友であり、あの世での我らの導師だ。そしてまたグルンツェノーの牧師、多くの面で器用な男で、どんな教区監督であれ太刀打ちできる。それでこちら、尊師ヨジーアス・ティレニウスを、 — 尊師ハンス・ウンヴィルシュ、よろしく、そしてその逆だな。そこで互いに接吻をされたい。おやグリプスがキッチンから復命だ」。

両神学者は接吻をしなかった。しかし互いに心から握手をした。グルンツェノーの牧師の外見はとても聖職候補生の気に入った。 — 「この男は八十二歳だ、そう見えるか」と大佐は言い、尋ねた。

老ヨジーアスは足腰がしっかりしていた。彼の目はまだ鋭く、澄んでいて、勿論その顔は少しばかり赤みを帯びて、ほのかに輝いていた。しかし髪の毛はそれだけ一層白かった。この老ヨジーアス・ティレニウスは真の船乗り牧師であって、強力な嵐の風にも持ち堪えた。彼は全く嵐に負けぬブラウ大佐とルドルフ・ゲッツ少尉とに似合っていた。三人は一つ屋根の下に類似のものは見だし難いクローバーの葉で、その家政もまた十分に風変わりで野蛮であった。

さて、女房役のグリプスは、カルタを脇に退けた後、ビフテキをテーブル・クロスのない卓に置き、その横に別の鉢を置き、皿やナイフ、フォークを不器用に、また精力的にがちゃがちゃ言わせた。すべての居合わせる犬どもが、その鼻を出来るだけ高く持ち上げた。

「各々方、かかれ」と大佐は司令した、「ルドルフ、姿勢休め。若者は充填しないうちは、発砲せんだろう。グリプス、ワイン瓶籠をこちらへ持って来て、各グラスに注いでくれ。…聖職候補生ウンヴィルシュ殿、グルンツェノー荘園へようこそと申し上げる。家にいるつもりで寛がりたい。めかすことはない。長寿と健康を祈念して、 — 乾杯」。

これまでの車の旅や行軍にもかかわらず、ハンスはゲッツ少尉同様、ほとんど食欲

がなかった。少尉は彼の真向かいに座り、彼を目から離さなかった。しかし他の二人の浜辺の住民は、檜のテーブル上の立派な品々を快適に堪能していて、犬どもは骨を貰っていた。それからグリプスが食卓を片付け、殿方達のパイプを持って来た。

「それでは順を追ってだ」と大佐は言った、「神学の聖職候補生ウンヴィルシュよ、貴方は私が貴方を訪ねても無駄足で、私が貴方の階段ですねに傷を受けた時、どこに隠れていたのだ」。

「私は故郷の町にいまして、私の二人の最後の縁者を埋葬していました」。

「そうか」と大佐は言い、太い煙草の煙を吹き出した。しかし少尉はパイプを下に置き、言った。

「誰を亡くしたのだ、ウンヴィルシュ」。

ハンスはシュロッターベックお婆さんとグリューネバウム伯父の死去と埋葬について短く報告した。グルンツェノーの三人の古参の少年達は注意深く聞いていて、慎重に頭を振っていた。報告が終わると、大佐は言った。

「ルドルフ、思うに、彼は哨所を離れたこの点に関しては申し開きがなされているな」。

「私もそう思います」と牧師は言った、「父親と母親を敬うべし、一」

「お婆も、伯父も、他の親族もだ」と大佐は口を挿んだ、「汝の弥栄のために、云々。少尉、前進。更に彼を問い質せ。主要部隊はまだ隘路にいる」。

「いや、ハンス・ウンヴィルシュよ」と少尉ゲッツは情けなく叫んだ。「私は貴方を見損なった。私はとても貴方を見損なった。何のために私は貴方をあんなにも苦勞して私の弟の、一つまり私の義理の妹の家に送り込んだのだ。貴方は私のフレンツヘン、私の哀れなフレンツヘンに留意するよう、重々私が手厳しく言い付けなかったか。貴方は何をなさった。貴方は何をなさった。貴方はあの狼を家に招き入れた、私には一言も断りなく、その挙げ句貴方は何の抵抗もせず、家から追い出され、そして貴方の靴の埃を払いなされた。私は貴方をフレンツヘンの支えともなり、相談相手にもなれる立派な、害もない若者と思っていたのだ。しかし貴方は、あのフレンツヘン以上に虐待される始末だ。立派なパトロンでござるな。私はここの拷問椅子に座っていて、何も聞こえてこない。あの娘は私に哀れな愛らしい手紙をくれるだけで、明白活字のような嘘を言っている。あの娘の伯母の家での全生活がただ一つのクリスマスのお祝いなんだとさ。くそつたれ、実に有り難いお話しになっている。三百万の青い悪魔にかけて、いいか、私はすでに昔ヴィントハイムで言ったろう、貴方ご推奨のその友は、ならず者だと。そやつが私のフレンツヘンと同じ家で同じ空気を吸うなんて、よくも貴方は我慢できなさった。即刻この痛風が私の胃にまで上がってくるところだ、それでもまだ私はお陀仏にはならんかもしれんが。しかし彼女はそれに耐えたのだ。そして静かに泣いたことだろう。ドジで間抜けな私はここに固まっていなければならず、何の情報も入らない。ところがこの旦那は、ただ口を開けて、いっばし男らしく見えさえすれば、フレンツヘンと私のことで、神様のご褒美に与えると思ってなさる。こんなが善良な男であってたまるか。しかしそれ以外何のために神学を勉強なさった。老いぼれの、退役の、時代遅れの乞食少尉の乞食の姪御がどうなろうと、この人、関心なからうもん。それでシャボン玉が弾けて、ユダヤ人が清潔好きなクレオーフェア嬢と逐電すると、勿論我が教師殿も言い逃れをなさって、それでグルンツェノ

一のゲッツ少尉は、かろうじて古い新聞を通じて、その弟の家での出来事を読む始末だ。私が誓って本当だと言わない限り、誰も信じないであろう出来事だ。フレンツヘンは涙の染み、思索線[ダッシュ]、汚れで一杯の手紙を書いて来て、こう伝えた。テーオドール伯父はご機嫌麗しくなく、一 私もそうだろうと思う、一 伯母は、一 これはどうでも良いが、一 伯母は大抵自分の部屋に閉じこもっています、そして聖職候補生ウンヴィルシュ殿は、クレオーフェアの乱心の所行の後、すぐに家を去りました、と。そして私はここに丸太のように横たわっていて、哀れな小虫、私のフレンツヘン救助のために駆けつけられず、じたばたするだけで、それでどうとう大佐殿が見るに見かねて勘弁してくれとなったのだ。それで大佐殿は馬車に荷を積み、夜霧の中、調査に出発された。然るに屋敷に馬で戻られると、空の袋を披露された。枢密顧問官ゲッツ夫人の玄関口では上品にはぐらかされて、九人殺害者達が知っていることは、市中の皆が知っていることだけで、それに聖職候補生ウンヴィルシュは、一」

「家に不在であった」と大佐はしかつめらしく言った。

「そう、彼は不在であった。しかし今ここにいる。私是一個のレモンのように絞ってやるつもりだ」と少尉は叫んだ、「ハンス・ウンヴィルシュ、言いたいことがあるなら、言ってみろ。そなたのせいで私は発言させられた。そなたも発言せい」。

ハンスはグルンツェノーの館の三人の住人を一人ずつ見て行った。自分の心根をぶちまけたい思いに駆られていたが、しかし全くその端緒を掴めなかった。

牧師ティレニウスは、今や、そのパイプを口から外して、言った。

「同僚殿はその心情を、ゲッツ、君の許で内密に吐露した方が良いのではないか。この件を正当に見てみれば、大佐と私は、この場合、余計な傍観者に見えるのだが」。

「違う、違う」と少尉は叫んだ、「貴方ら兩人とも、この状況を私自身と同じように良く承知している。私はお二人に我が嘆き節を歌って聞かせたものだ。ここに留まって、聖職候補生殿の言い分を聞いてくれ。片輪の私はお二人の助言や加勢がないと何も出来ない」。

「グリプス、少尉殿に火付け紙縫いを頼む」と大佐は言った、「それからそなたは神殿から失せろ[マタイ、21, 12]。前進」。

「行軍」とグリプスは自らに司令して、退去した。

「少尉殿」と聖職候補生ウンヴィルシュは始めた、「貴方は私に同じような風に話されるであろうと分かっていました。私はここまでの道中ずっとそのことが気がかりで、貴方にどのように答えたら良いか、深く考えても来ませんでした。いや、少尉殿、今年は私の人生で最も辛い年でした。少尉殿、貴方、貴方が私を一切の混乱の渦に突き落とされたのです。この渦と私は戦わなければならなかったし、今も戦っています。私は偶然貴方に街道で出会いました。そして貴方はこの哀れな、経験の浅い学生に好意を寄せられました。貴方は後に同じようにこの経験の浅い家庭教師を、貴方御自身が無力な所へ送り込みました。貴方は私自身がどのようになろうが、ほとんどお考えではなかった。貴方は姪の御令嬢のために、御自身と弟君の家の間での一人の仲介者を置こうとお考えでした。この仲介役の者が自分に割り振られた役についてひょっとして何も予感していなくても、かえってその方が一層都合が良かろう。いや、少尉殿、私ども兩人は外交官の柄ではなかったのです。二人とも事物の流れを何一つ変えられなかった。そして運命は邪悪な霊どもを出現させま

した。私ども二人とも思ってもいなかった霊どもです。貴方は、少尉殿、私がテオフィル・シュタイン博士に敵対しなかったと非難されました。これはその大部分が貴方の責任です。だって、貴方は私に私の役目を説明せずに、私の役目を割り振られたからです。そして私の関係を知らずに、余所の関係に私を押し込まれました。私どもが最初出会った際、貴方は後にテオフィル・シュタイン博士と自称する者のことをきつい言葉で難じられました。しかし何故そう難ずるに至ったのか、私には説明されなかった。しかしかの男は私と一緒に育って、教育を受けたのです。私は彼を私の友とっていて、余所の人のかりそめの言葉だけで烙印は押せなかったのです、しかも殊に彼は遠方において、自己弁護が出来なかったのですから。私は、彼が間違っており、誠実でもなく、利己主義者で、神々しいもの、人間的なものの軽蔑者であると分かってから、彼を私の心から追い出しました。そして彼の名前は、私にとってただの空疎な響きとなりました。私は自分の信頼故に、重く重く苦しんだのです。少尉殿、貴方のお蔭で、あのフレンツは — 貴方の姪御さんは私のことをあのモーゼス・フロイデンシュタインと同類で、間違っており、偽善者であると見なさなければならなかったのです。だって貴方は、私には自己弁護が出来ない一つの状況に私を導いたのですから。いかに私が貴方の弟君の家で苦しんだことか、言えるものではありません。しかし多分これ以上の申し開きをまだ述べるよう私に要求なさる権限はきつと貴方にはありますまい」。

こう話しながら、クレッペル通り出身のハンス・ウンヴィルシュは、自分の修業時代が無駄に過ぎたわけではないことを示していた。彼はいっばしの男のようにルドルフ・ゲッツ少尉の前に立っていた。そして少尉並びに他の両殿方への彼の言葉の印象はめざましいものがあった。

今や三人は皆、その陶器のパイプを脇に置いて、この弁舌者を何か全く新しいものを見ているかのように凝視した。

その賛嘆から最初に覚めた者は、フォン・ブラウ大佐であった。

「いや、びっくり、ルドルフ」と彼は叫んだ、「このうちの幾つか、ポケットに収めたらいいぞ、ティレニウス。これはしたり、次の日曜日、我々はこの若者に一つ説教をして貰おう。でかした、聖職候補生殿、まことに流暢なものだ。何度か言い得て妙であった。よっしゃ、ゲッツ、沈香が焚かれたわい。 — 戦友、君の意見はどうだ」。

少尉は、自分の深い胸の中から溜め息を吐き出して、垂れた灰色の髪を持ち上げずに言った。

「私は知っていながら人間に不正なことをするつもりはない。しかし私がそんなことをしていたのであれば、その人には喜んで許しを請いたい。いや、今私は頭が混乱して、目眩がする。まずはまだ私には言うべきことがあるか、よくよく考えなければならない。ハンスよ、私に手を差し出してくれ。明日正確に、私の弟の家でそなたの身に生じたことを話してくれ。一人の老いた病人のことは大目に見て欲しい。 — いや、フレンツヘンよ、フレンツヘン」。

ハンス・ウンヴィルシュは深く感動して、自分に差し出された、今やとても震えている手を握った。彼はその手を自分の唇に押し付け、 — いや、まだこの老人には沢山言いたかった。自分は彼に対して跪いて、彼が自分の魂に引き受けているすべての不穩、憂慮に対し、すべての不和、苦悶、苦痛に対し感謝しなければならないのです、

と言いたかった。そして自分、飢餓のハンス・ウンヴィルシュの、最も美しい、最も高貴な飢餓、その最も美しい、最も高貴な憧れは、彼、この老いた誠実なエックルト、つまりルドルフ・ゲッツのお蔭なのです、と言いたかった。彼は沢山、自らとフレンツヘンについて語りたかった。しかしそう出来なかった。その時がまだ来ていなかった。

船乗り牧師ティレニウスは頭を振りながら、少尉を見ていた。少尉はこの折とこの一行の場から全く逸脱しているように見えた。それから彼はハンスに言った。

「ウンヴィルシュさん、貴方は旅で疲れていなさることだろう。グリプスに貴方の部屋を割り当てて貰いましょう。貴方がこちらにもっと長く滞在なさったら、私どもは腹藏ない友となりましょう。海を渡って来る風は肌を荒く厳しく鍛えます。しかし内側の人間には、思われるほどさほど影響はありません。お休みを言う前に、握手致しましょう。私も私のねぐらに帰るつもりです。貴方は多分初めて、海のざわめきを聞きながら眠るのではないですか。 — その最初の諸々の夢には注意なさったらい。波の歌を聞きながら眠るのは乙なものです」。

「ティレニウス、良く眠ることだ」と大佐は叫んだ、「貴方の家政婦に私からよろしく。屋敷からランタンを持った若者を連れて行き、濠の所は右側に行くことだ。 — 男は用心が肝腎、この道は四十年前から承知していてもな」。

「お休み、ルドルフ」と老牧師は、少尉の肩に穏やかに手を置きながら、言った、「頭を上げろ、我が老公。明日は晴れた日になるう」。

「そう願うことにしよう」とゲッツは言った、「グリプス、私の車椅子を穴蔵まで押して行ってくれ。お休み、諸兄、お休み、ハンス・ウンヴィルシュ、我が少年。そなたは私のベッドに固い胡桃を入れてくれた。そなた自身は、牧師の言葉を守って、穏やかに海の歌で眠るがいい」。

尊師ヨジーアス・ティレニウス、グルンツェノーの牧師はよろめきながら去った。グリプスは車椅子の少尉ゲッツをドアの外へ押し出した。今や、フォン・ブラウ大佐がテーブルの明かりを取り上げて、言った。

「私自身が貴方を部屋に案内しよう、聖職候補生殿、もう一度貴方に衷心からグルンツェノーへようこそと申し上げる。貴方には幾分荒っぽく見えるかもしれないが、不届きなどと思わんでくれ。我々はこちらでは常在戦場の暮らした。そしてできるだけ脂粉の女達を遠ざけている。だから仔細に隅の埃を点検しないでくれ。無骨な男連中、兵士どもの家政なのだ。こっここっ、鶏君」。

ハンス・ウンヴィルシュは、グルンツェノーの城主に従って、長いアーチ状の通路を通過して、部屋へ向かった。

大佐は明かりをテーブルに置き、再度客人と握手した。そしてハンスは一人っきりになった。彼は、彼のホストの重々しい、兵士らしい足音の響きを聞いていた。彼は更に何度か遠方でドアが音高く閉められるのを聞いていた。彼は窓辺の方に聞き耳を立て、額の上に手を滑らせて、上下左右見回したが、しかし大佐が助言をしたように隅の方は見なかった。

部屋はただ必要最低限の調度であった。椅子やテーブル、濃い樫の木の戸棚はモダンな家を倒壊させたかもしれなかった。壁には太古の革の壁紙の襤褸切れが掛かっていた。ベッドはスパルタ風に簡素なものであった。しかしこの部屋でも太古のオランダ式暖炉が

快適な温かさを保っていた。ベッドの側の小卓には、夜間の飲み物として一本のボルドー・ワインがあった。しかし聖職候補生殿は厭わしそうにそれを眺めた。彼は窓辺に歩み寄って、両窓の間に一つのドアを見つけた。それは小さなバルコニーに通じていて、このバルコニーは石造りの防弾胸壁で囲まれていた。冷たい刺すような夜風の中に彼は立っていて、目にするもの、耳にするものに幻惑されていた。左手に、今や何の微光も見られない村が黙して横たわっていた。彼の前に浜辺が剥き出しに広がっていて、その上に最前までの黄昏の時間の間に軽く雪が降り積もっていて、浜辺は広い弧を描いて靄と霧の中に消えていた。しかし村と浜辺の向こう側で海が動揺していて、月の明かりを受けていた。月は雲でおぼろになっていて、沈む方向にあった。海は — 「襦袢に包まれるように、暗闇の中雲をまとっていた」。

「いや、フレンツヘン」とハンスは言っていて、何故そう言ったのか分かっていなかった。それからこの古い領主館で彼の過ごした最初の夜が、思っていたよりも平静に、のどかに、静かに過ぎ去った。彼は最深の眠りの中でも入って来る海の音を聞いた。しかしそれは脅かすような、不幸を告げるものではなかった。海の精霊達は、ティレニウス牧師の予告通りには、澄んで明確な夢をもたらさなかった。様々な像や形姿を彼は再三見た。彼は大いに哀れなクレオーフェアのことを思い出さざるを得なかった。彼が目覚めたとき、朝となっていて、そして彼を起こしたのは、岩や砂丘に打ち寄せる波ではなくて、グリプスであった。彼は拳で彼のドアを叩いて、朝食の用意が出来ましたと職務上告げたのであった。

第六章

数週間が今や過ぎ去って、その中で聖職候補生ウンヴィルシュは、海とグルンツェノーの村、フォン・ブラウ大佐、それにヨジーアス・ティレニウス牧師とより親しく知り合いになり、ルドルフ・ゲッツ少尉の百もの、更に百もの質問に答える羽目になったのであった。彼はこの老公に枢密顧問官ゲッツの家での家庭教師生活について、ごく些細な点についてまで報告し、そして彼に対しては、自分の最も内密な高貴で大切な秘密であって、これに関しては他人の誰にも話せず、自分を相手にしてさえほとんど話す勇気のないこと、これを除いて、すべて話した。しかし彼は求められるといつでも大いにフレンツヘンについて少尉に語った。それは無尽蔵のテーマであった。しかしこの傷病兵のパイプは、感動の余り、しばしば火が消えた。しかしルドルフ少尉もハンスも、どのようにしたらフレンツヘンを救い出せるか、答えられなかった。彼女はテーオドル伯父の許を去りたくないと言っていたからである。大佐も牧師も、そのような事情であれば、助言出来なかった。彼らはただ頭を振るばかりであった。こうしたからと言って、この世で事態が改善した験しはない。

ちなみにこのような状況下では、老人達の方が若者達よりもひどい目に遭うものである。ハンス・ウンヴィルシュは、少尉同様途方に暮れていたが、しかし彼は未来に希望を抱いて、海の浜辺を散歩できた。然るにこの老傷病兵の考えは、至高の高みに達しても、短い飛行の後決まって、小さな教会墓地に沈み込んだ。そこにグルンツェノーの人々は自分の物故者達や、浜辺に打ち上げられた余所の人々を埋葬するのであった。

ハンス・ウンヴィルシュは海が極めて多様な気分を呈することを知った。静かな海を見たし、怒りの海を見た。悲シミノ中デ陽気ナ、陽気ナ中デ悲シダ海を見た。彼は子供のように、海自身には飽きが来ている多彩な玩具を拾った。彼は貝殻を集めた。しかし彼は思索も集めた。フォン・ブラウ大佐はこの荒れた地帯の自然のことを彼に教えてくれた。牧師ティレニウスは、この荒涼たる不毛の地所に住みながら、ただ海から採取するもので暮らしていて、このはなはだ気まぐれな自然との常に苛酷で危険な戦い故に、とても真面目で、寡黙で、粗野で、辛抱強くなっている人々のことを教えてくれた。聖職候補生ウンヴィルシュにとって、自分が緑の野原や希望に溢れた穀物畑の中から息吹や光輝に満ちた飢餓の書を書き上げようとしたことが、ほとんど一片の夢に思えて来た。今や彼は全く別な世界に立っていた。砂漠での説教職候補生であり、彼が足を踏み入れる固い大地は、新町の神聖な大地とも、大都市の寄せ木張りの床や舗石道路とも全く別の響きを発した。

聖職候補生は牧師館への毎日の客となった。彼はそこで、とても旧式で簡素な家政が、一人の老いた家政婦の管理の下、行われているのを見た。彼はこの老ヨジーアスがもうもうたる煙草の煙に包まれ、ナイトガウンを厚く羽織って、熱心に蒼古たる神学に従って蒼古たる二つ折判をめくって、彼の言うには、「遅れを取らないように」しているのを見た。しかしこの「遅れを取らない」世界は独自なものであった。彼は神学の授業ノートをすでにとうの昔、解放戦争前に失っていた。新しい文書は簡単にはグルンツェノーに到着しなかった。それで彼の学術装置は、自分の前任者達が百五十年前から牧師館に残している諸本に限定されていた。これらの本は一人の牧師が前任者の死去により引き継いで行くもので、これは普通実直な未亡人も、前任者の夫の他の動産と共に引き継がれるようなものである。グルンツェノーの牧師職を授与する役目の[フォン・]ブラウの領主達は、この文庫に絶大な敬意を払っていて、グルンツェノーの船乗りの民は更に絶大な敬意を払っていた。しかし入れ替わり牧師館に入って来る聖職者達は、この文庫に各人各様に対処していた。この文庫はある牧師には軽く見られたり、また別な牧師にはアルプスのように重く肩にかかるように思われた。実直な牧師、ヨジーアス・ティレニウスは後者の一人であった。この老人は、若い時、従軍牧師として一七九三年フランス戦役に従事したとき、多くのことを体験し、目にした。彼は正直で善良な男で、好意的に人に接し、どの人からも、しかしとりわけグルンツェノーのパトロンの領主から好かれるに違いなかった。ブラウとティレニウスは一緒に陣営の篝火の許で横になった。その後二人は同じ竈の許に寄り添った。領主は牧師館の暖炉の側で居心地良く感じ、牧師は領主屋敷の暖炉の側でそう感じた。遍歴のルドルフ・ゲッツがこのクローバーの[三つ]葉を完成させ、少尉が落ち着かない血に急かされて遠方へ行くと、とても寂しく思われた。大佐が浜辺のこの定席[本拠地]を離れるのは、単に時折緑の木亭をねぐらとする九人殺害者達を訪うためであった。しかしヨジーアス・ティレニウスはこの付き合いの中で、夙に世間との関係を断っていた。この二人の友が居合わせないときには、村の人々がいて、海の眺め、彼のパイプ、彼の思い出があれば、彼にとって十分であった。二人が戻って来ると、遠くの世間の喧噪についての二人の語りで十分であった。彼以上にもっと洞察の深い哲学者や牧師が海辺の彼の書齋に座ったことはまだ一度もなく、かくも珍しい文庫と格闘して、海の波の単調なざわめきから英知を学び取った者もいなかった。この文庫から離れた所で、彼は自分の長い人生、長い職務経験の中、全く次第漸次に、ほとんど予感することなく、自分独自の神学、世界観と

神直感の独自の体系を築き上げていた。そしてこの体系には、しばしば聖職候補生ウンヴィルシュが感動し、しばしば驚き、更にしばしば賛嘆して眺めることになる事物が収まっていた。ハンス・ウンヴィルシュはこの老人の人生を覗くと、一つの鏡の中を覗く思いがした。はるかに離れた、肥沃な実り多い土地にいる老人の同僚達は、この老人を「飢餓牧師」と呼んでいたのであり、つまりこの老人には、テオフィル・シュタイン博士が以前枢密顧問官ゲッツ夫人のサロンで自分の青春の友の添え名としたのと同じ名前が与えられていたのである。

「我が愛する息子よ」とこの老人は言った、「私は無学な男だ。私は今日呼び出されて、いとも尊い宗教局役員会の前で試験を受けることになったら、この海辺で神の言葉を説教することは、許されなくなってしまうことだろう。向こうの本は私には頭が痛くなり、大いに不安になる。私はこれらに太刀打ちできない。私はこれらの本と格闘することになったら、いつも手短に済ませている。私が学校のベンチに座っていたのは、はるか昔のことだ。私は次第にこんな老いぼれの若造になってしまっていて、私がただ早口になり言い間違えてばかりで、息が上がってしまうのも、全く不思議ではない。私は他の人々がようやく学問を始める所で、そこで立ち止まったままであった。そして学ぶ時間が出来たときには、野蛮な人生故にすでにそんなことは出来なくなっていた。私はあらゆる熱中、疾風怒濤といったおよそ人間の感じ得るものを、自分の心でも感じた。しかしまたすべての人間的悲惨さも目にし、自分の中でも感知した。するといつも私の中では活字や文字の行間に思い出が蘇り、私の注意力を脱線させ、思索をごちゃごちゃにした。私はどうしてもなくて、穴蔵から這い出して、どこかの暖炉側のベンチや、村の小屋のドアの前のベンチに座って、歩哨をするか、あるいはカモメを見守るかしかなかった。浜辺の周りを飛んだり、波の上を矢のように飛んで行くカモメだ。いいかな、聖職候補生殿、貴方は若い方で、全く別の時代に生きてなさる。しかしこの地上では、思いがけず、かなり多くのことが似たようなものだ。青春時代の我らの進路もそうだ。私の道はひどい天候の中、殺害と死神の中を行くものであった。貴殿の道は静寂の中を行くものだ。しかしこの異なる路上でも、我々は沢山類似の思考を有してきた。貴方がいつか私と同じ年になってみたら、その類似はもっと大きなものではないか、しれたものじゃないぞ。我ら兩人とも我らの途上でまさしく憧れた。学問に憧れ、世間に憧れ、恋愛に憧れた。私は戦争によって本を手から叩き落とされた。世間を私は目撃してきた。しかし男[戦士]と馬[軍馬]と馬車[戦車]によって踏み潰され、赤い血を流し、松明で傷付けられた。恋愛の方は」（ここで老公は黒い小帽を少し浮かせた）「私の恋愛は、　　—　　そうだな、その死すべき定め部分を私は向こうの陸地の緑の教会墓地に埋葬した。とうの昔のことだ。さて今や私は休息を望んでいる。恋愛の不滅の部分が私の死をより甘美なものにしてくれよう。それで私の人生が穏やかなものになって、すべての仕事が些細な、容易なものになったようにな。陸地の奥の方で、私は飢餓牧師と呼ばれているが、それは多分正しいのかもしれない。私は人生で大きな飢餓に苦しんで来た。今や日が陰って来ており、私はこのことを素直に主に感謝している。夕方になって初めて人間は、日中の労苦の際に支援してくれたもののことが良く分かるようになるものだ。修道同朋の方、貴方は若い。私より平静な道を歩んで来られた。しかし短く静かな道でも多くのことを経験できよう。貴方は野蛮な時代が本を奪うことはなかった。知識への貴方の渇きを静めるときに、邪魔をする者はいなかったことだろう。

しかし貴方はたとえその作業を諦めたことはなく、諦めていなくても、しかしその知識に幸せと安らぎを見いだせはしなかったことだろう。そして広大な世間への貴方の憧れ、これも貴方を人間達の多彩な戯れや営為の中に追い立てた。 — いや、ヨハネス・ウンヴィルシュの艱難ト苦悩ヨ。貴方は確かに沢山の立派な説教のためのネタを仕入れたことであろう。しかし、 — しかしこれも悲しい実体だ。貴方は貴方の若い友達が、その飢餓の中、自らの道を進むのを目にした。その他にも卑小なこと、無意味なことを目にし、経験して来た。死神が貴方の最後の縁者を奪った。一方の人間なら容易に耐え、振り払うもの、これが別な人間には、自分を大地に押し潰す、自分では振り払えない大きな重荷になるものだ。そなたは、ヨハネスよ、陰鬱になってもおかしくなく、その権利がある、そなたは人間どもの戦場を知らないし、花嫁の墓も知らないけど、な。 — — それで最後の憧れについてそなたに話そうか。根本的にはどの飢餓もこれに根差しているのだが」。

ハンス・ウンヴィルシュは返事出来なかった。彼はただ頷いて、自分の手で老人の手を握った。しかしグルンツェノーの聖職でのその前任者の文庫と難しい格闘をしてきて、すべての半ば朽ちた駄本には見られないような、とても多くのことを悟っている牧師ヨーアス・ティレニウスは — この牧師ティレニウスはその話しを結論まで導くことが出来なかった。誰かが忙しく窓を叩いた。ランタンを持ったグリプスが外の雪と冷たい夕方の風の中に立っていて、両聖職者を領主屋敷に呼んでいて、こう言い添えたのである。新聞に何かとんでもないことが載っているに違いありません。大佐殿と少尉殿が「尋常でなく興奮」なさっていて、フロイデンシュタットからあのクリストフが新聞を持って来てからのことなのです。一八一五年の話し以来、自分 — グリプスは — そのようなことを目にしたことがありません、と。

ハンスとグルンツェノー牧師は問うように見つめ合った。

「何でしょうか。何が起きたのでしょうか」。

「不思議なことだ」と尊師ティレニウスは言った、「二人の老いた友は、二人っきりで奇妙な老残兵政治を行っているから、いずれにせよ、二人の地平線上に戦闘的狼煙が上がって来たのであろう。ただ残念なのは、ようやく新聞がグルンツェノーに達した時には、通常、世間の方は一週間か二週間分先に進んでいて、より賢く承知しているものなのだ。しかしヨハネス、向かうとしよう。私は準備が出来ている。実際、あの二人の古参兵の目立った徳操の一つに、辛抱強さが上げられることはないからの」。

ランタンを持ってグリプスは重々しく両聖職者を従えて、雪の中を歩いて行った。かなりの嵐となって、海は盛大に荒れて、雪は歩行者や村の小屋に吹き付けていた。ハンスはとても興奮した気分であった。彼は、グルンツェノーの城砦に到着したのは、政治的ニュースであるとは信じられなかった。自分自身の生活にも深い影響を及ぼすであろう何事かが起きたのに違いないという漠然とした予感がした。様々な混乱した想いや問いかけが彼の意識の中を駆け抜けたが、その間、彼は丁重にティレニウス牧師を案内して雪の中を進んだ。しかし公園通りの家からの知らせが届いている筈という想いを捨てきれず、そしてその通りだと判明した。 —

両手を背中に置いて、フォン・ブラウ大佐は、我々がすでに知っている部屋の中をあちこち歩き回っていて、クリストフがフロイデンシュタットから持参して来た新聞が彼の前のテーブルにあった。

二人の老殿方はとても真剣であった。少尉は時々深く辛く嘆息して、大佐は時折自分の歩みを止めて、頭を振りながら友人にして戦友を見つめた。時々彼、つまりフォン・ブラウ大佐は同情して呻り、言った。「さて、さて」とか「辛いことだ」とか「頭を上げて」とか「深呼吸」等々の言葉であった。ようやく彼は立ち止まったまま、それどころか、力強く、「こん畜生のあほんだら」と言って、こう言い添え、「坊主どもは必要なときには、いないものだ」と息抜きした。

数分後にグリプスが二人の聖職者にドアを開けたのは幸いであった。

ゲッツ少尉は見つめて、ハンス・ウンヴィルシュは自分の予感通りであったと今や察知した。新聞記事は枢密顧問官の家に関係し、
— フレンツヘンに関係していた。

「一体何があったのだ、ブラウ」と牧師は大佐に小声で尋ねた。

「新聞に載っている。
— 誕生欄、訃報欄だ」。

「後生だ、何があった。誰が新聞に載っているのか。誰が生まれ、誰が死んだ」。

「哀れな奴だ」とフォン・ブラウ大佐は溜め息を吐いた、「勿論彼の弟だ、
— 心臓麻痺だ、
— 静かな弔意を、喪主の未亡人、アウレーリエ・ゲッツ、旧姓フォン・リヒテンハーンは願っている」。

牧師はすでに少尉の側に寄っていて、彼の手を握った。ルドルフ・ゲッツは新聞紙を聖職候補生ウンヴィルシュに渡した。

「読んでみろ、読んでみろ」。

ハンスは興奮していて、かなりの間、新聞の欄を探して空しかったが、ようやく広告を見つけて読んだ。

「訃報、一八某々年、十二月十日、昨日朝、思いがけず心臓麻痺の結果により速やかに私の愛する夫、枢密顧問官テオドール・フリードリヒ・フェルディナント・ゲッツ、騎士等々は身罷りました。

涙に暮れてはいますが、しかし主を知らなかった者の涙ではありません。涙に暮れてはいますが、しかし主を知ろうとしない者の涙ではありません。

アウレーリエ・ゲッツ、旧姓フォン・リヒテンハーン」。

「ルドルフ、慰謝もないわけではないだろう」と大佐は言った、「この哀れな奴はとても幸せなのかもしれない。彼の人生での喜びは余りなかった。今や彼の娘に関する出来事、苦悶は清算された。
— 明白だ。
— 彼は、その陰鬱な事務官生活の後、立派な固い眠りを得られていよう。戦友、頭を上げるのだ。君にはまだ他に考えるべきことがあるだろう」。

「そうだ、フレンツヘンだ、フレンツヘン。我がフレンツヘンはどうなったのだ。我がフレンツヘンはどうなっていよう」と少尉は叫んだ。彼は足痛風にもかかわらず、突然両足で立った。しかし痛みで、すぐにまた安楽椅子に投げ返された。

「死亡広告は十二月十日付けで、今日は十九日だ。あの娘はこの短い期間に相当な目に遭っていよう」と大佐は言った、「今晚にもこちらに見えているハンス・ウンヴィルシュが背囊を担げばいい。我々が頼りに出来る若い人間だ。我々にはグリプスがいて、櫓

がある。フロイデンシュタットからは郵便馬車があるし、その先は鉄道がある。フレンツヘンをどうするか。聖職候補生がグルンツェノーへこの娘を連れて来るのだ。娘っ子が豚小屋や海や剥き出しの浜辺をさほど恐がらないのであれば、今やこの案に反対する理由はあるまい。この娘はグルンツェノーでは、春や陽光に劣らず歓迎されるということは、閻魔様にかけて、言うまでもないことであろう。ルドルフ、君の意見はどうだ。それに老従軍牧師よ、我々老人どもがかくも可愛い優美な夢に浸れたことはなかろう。神は退役の竜騎兵の馬を見捨てない。ましてや、我々のようなこんな三人の清潔な若造や無鉄砲者をお見捨てになることは更に少ない。死者達の塚の上には礼砲を放ち、生きている者達を騎行させよ。それでだ、手を打て、戦友ゲッツよ、どんなに対処すればいいか、分かるだろう。この若い[神学者の]黒い服の男に、君の命令と君の祝福を与え、彼を我らの娘っ子の所へ送るのだ。この娘っ子がグルンツェノーの古い門を通過して入場したら、我々にとって幸福な一日となるろう」。

「愛する老公、我々はどのように対処したらいいか、まことに合点が行った」とゲッツ少尉は言った。二粒の大きな涙が、霜白の髭に流れ落ちた。「ハンス・ウンヴィルシュ、君はどう思うか。我がフレンツヘンをその難しい部署から解き放ち、グルンツェノーへ連れて来る気があるか」。

ハンス・ウンヴィルシュは答えなかった。彼は稲妻に打たれたかのように立っていた。彼は動かず立っていて、無言のまま立っていた。

牧師ティレニウスは彼を腕で抱いて、少しばかり彼を揺すった。

「目を覚ましなさい、ヨハネス。少尉は貴方に質問をされた。返事をしなさい。一 貴方は要請されたことを、する気があるかどうか言いなさい。ヨハネス、どうした」。

聖職候補生は額の上を手で梳き上げて、少尉の椅子に一層近寄った。

「少尉殿」と彼は言った、「私は、貴方に貴方の令弟の家での私の滞在について総括を申し上げたかの晩に、すべてのことを申し上げた訳ではありませんし、またすべてを申し上げることは出来なかったのです。そこで貴方のご依頼を受け入れる前に、お話しをせざるを得ません。貴方は私の足取りをある進路へと導くためにいらした時、かくも多くのことを考え尽くされていた訳ではありません。人間の魂は、他の時に増して困窮の時には互いにより容易に理解し合い、より固く支え合うものですが、このこともお考えになっていた訳ではありません。そのような次第になりまして、もはやそれに敵対するものはなかったのです。一 私は貴方の姪御さんの一支援者の定めでしたが、今や私はこのフレンツヘンを愛しています。私はこの娘を永遠に愛します。この世での私の支点は、フレンツヘンの許にあります。貴方らが今それでもこの娘を私に要請なさるのでなければ、私はこの娘をグルンツェノーへ連れて来ないかもしれないのです」。

牧師ヨジーアス・ティレニウスは目を手で影にしたが、しかし彼は微笑していた。フォン・ブラウ大佐は上機嫌で高笑いをして、呟いていた。「そう来なくちゃ。見ろよ、一 若い身空は結構なものだ」。しかしルドルフ・ゲッツ少尉は、笑ったものか、泣いたものか、祝福したものか、呪詛したものか分かっていなかった。

「我が愛しい娘よ」と彼は最後に言った、「これは勿論シャンペンの栓を抜くことだが。... ブラウにティレニウス、一 君らの意見は」。

「魂消て乾杯だな」と大佐は言った。しかしグルンツェノーの老牧師は少尉に跪い

て、手を彼の肩に穏やかに置いて、言った。

「私はフレンツヘンを迎えに彼を行かせる。彼はここの飢餓牧師職の副牧師になって貰おう。その子供達に我らの墓守になって貰おう」。

「ではハンス・ウンヴィルシュ、こちらへ来なさい。私に一廉の男のように手を差し出して、私の両目を見て、自由に語ってくれ、私の娘っ子がこちらへ喜んで進んで向かうようそなたは段取りを付けてくれるか、どうか」。

聖職候補生は老人の車椅子の側に跪いた。彼の述べたことは、ブラウ大佐はもティレニウス牧師も理解できなかったが、しかし少尉は彼の頭に手を置いて、ほとんど同様に小声で言った。

「では行って、彼女にそなたの言いたいことを言うがいい。そして彼女を連れて来るのだ。そなたらの道に祝福あれ」。 —

この晩グリプスは牧師ティレニウスに同伴して、牧師館まで行かなかった。ハンス・ウンヴィルシュがこの老公を案内して、ランタンを持っていた。

「いいかな、我が愛する少年、このことはそなたの魂が解していることだど十分承知しているがな。人間の心を理解するためには、必ずしも世間の一切の混濁に付き合う必要のないことだ。浜辺に座っていて、波の戯れを眺め、聞き入り、そして自分自身の人生で生じたこと、あるいは周辺の小屋の一塊の人間生活に関することを考えてみれば、多くのことが経験される。私が以前から耳にしていたこと、それにそなたが到着した晩に善良なルドルフ少尉に語ったこと、これだけで、私の結論を引き出すには十分であった。しかしさて、そなたはこの砂漠、つまりこの荒涼たる岸辺に追放されたわけだ、ハンス・ウンヴィルシュよ。そなたの輝かしく若い夢や希望はどんなことになったかな」。

「現実になりました、現実には」とハンスは叫んだ、「いや我が神よ、私どもが今一緒に歩んでいるこの道に比べれば、一切の夢や希望は何ほどのものでありましょう」。

「ヨハネス、一度休もう」と老人は言った、「この風は本当に息が出来ない。海はますます荒れて来るように見える。ここの片隅で私に一息つかせてくれ、我が子よ」。

二人は小さな家の壁際に近寄った。この家の窓からは何の明かりの微光もなく、全く人がないように見えた。

「この家の持ち主の女将に対し、私はそなたの到着よりそう遠くない前に、埋葬の辞を述べたものだ」と牧師は語った。「グルンツェノーの飢餓牧師職に就くことは、必ずしも簡単なことではない。この小屋には、立派な、健気な一家が住んでいた。 — 父親と母親と六人の息子達だ。長男はハンブルクのブルグ[二本マスト帆船]でガラパゴス諸島に出掛け、行方不明になった。次男はイギリスの船に乗って、アヘン戦争[1840-42]で中国人の矢に倒れた。父親は四人の残りの息子達と一緒に、先年、村人の見ている前で溺死した。船乗りや漁師達に対し説教壇から語りかける牧師は、海の波のざわめきに負けない言葉を話すよう、他のどの牧師よりも辛抱強さや逞しさの点で鍛えなければならない。いつもその湿った濠に壊れやすいボートで漂う民は、犁や鎌を持って耕地や野原に行く民とは全く異なるものだ。海辺の説教師は沢山の愛を注ぐことが出来なければならないし、自分の教会の周りの小屋のためには、自らの幸福の多くを犠牲に出来なければならない。人間をこのような地所のために十分鍛えてくれるのは、ただ愛への最も神聖な飢餓に他ならない。それでは行くことにしよう、我が愛する息子よ」。

ハンス・ウンヴィルシュは手を誰も住んでいない小屋の壁に置いた。彼は自分の魂をフレンツヘン・ゲッツと結婚させていた。彼は今や自分の魂をグルンツェノーの飢餓の浜辺と結婚させた。

「それでは私を家まで案内してくれ、それから帰って、良く眠るがいい、我が子よ」と尊師ティレニウスは言った、「どんな手荒な海の音楽でもそなたが目覚めない時がやって来ることだろう。私は明日早朝そなたを見送れないと想う。それで差し当たり、我々の別離としよう。この老ヨジーアスからもそなたのフレンツヘンによるしくな。すぐに連れて来ておくれ。その娘に楽しい居場所を準備することにしよう。このグルンツェノーの野蛮な浜辺で穏やかに休んで貰うことにしよう」。

第七章

日の出と共に橇がグルンツェノーの屋敷[荘園]中庭に止まった。嵐は収まっていたが、しかし雪はかなり高く積もっていた。

「快適な道中とはならんだろう」とフォン・ブラウ大佐は客人に別れの手を差し伸べながら言った、「しかしグリプスと駄馬どもはどのように進めばいいか承知している。万事異常ないか。忘れ物はないか。パイプに火は点っているか。それじゃ、砲兵中隊一同、神の御名において出発進行。ハンス・ウンヴィルシュよ、余り長く待たせるでないぞ」。

少尉は出来る限り窓から身を乗り出して、自分の古い軍帽を振って、この上なく興奮していて、出発するハンスに一連の長い行動訓示を繰り返した。しかしこれはすべてこう終わるものであった。そなたに命令しておく、フレンツヘンに対して、わしの目の玉同様注意するのだ。

「急いでくれ。いい加減止めろ」と大佐は叫んだ、「フレンツヘンに万歳だ。
— そしてもう一度、 — さらにもう一度、 — 万歳」。

すべての荘園の人々が一緒に叫び、すべての犬どもがその声を上げた。橇は屋敷門から鈴を鳴らして出て行き、フロイデンシュタットへの道へ折れた。冬の朝の冷たさのせいだけで、聖職候補生は目に涙を浮かべたのではなかった。彼は長年、本当の故郷というものを有していなかった。しかし今やそのような故郷を見いだしたのである。グルンツェノーの塔が砂丘の背後に消え、海の声が次第に薄れ弱まり、最後に全く聞こえなくなったとき、彼の心が激しく動揺したのも不思議ではない。そして今やグリプスと橇、それに二頭の黒い馬のみが、差し当たり海辺の魔法の宮殿の名残となっていた。 —

我々は今回、聖職候補生の旅を描写するつもりはない。この旅は十分に難儀なものであった。フロイデンシュタットの奥の最短の鉄道駅までの道は様々な障害が待ち受けていた。道路が雪崩で通行不可になっている所があるかと思うと、郵便馬車の車輪が一つ壊れたこともあった。旅立って二日目の夕方、ようやくハンス・ウンヴィルシュは大都會の上に広がる熱い靄の雲を新たに目にした。列車がホールに止まり、機関車がしゅっしゅっとその蒸気を吐き出して、ハンスが旅人の混雑の中から野外への自分の道を見いだしたとき、すでにもう遅すぎて、その日のうちに枢密顧問官ゲッツ夫人の家へ訪問し、フレンツヘンを連れ出すことは出来なくなっていた。

しかし旅行バッグを肩に掛けて、聖職候補生は雪の積もった公園を抜けて、その家

の側を通り過ぎた。アフリカの国から魔法使いが来て、魔法のランプをこすって、ランプの精霊に、美しい王女のいる建物を持ち上げて、満州に据えるよう命令することはなかった。その家はまだ昔の地点に留まっていたが、しかしその家のどの窓にも明かりは見えなかった。あたかも主人の消滅と共に楽しげな活気の最後の微光も消滅したかのようであった。聖職候補生は凍えた。それでも彼は呼び鈴を引きたかった。そして哀れなフレンツヘンを即刻この暗い建物と枢密顧問官夫人の許から呼び出したかった。

しかし彼は自制した。彼は直に町の人混みの中に紛れていて、そしてグリンゼ路地の自分の住まいに向かっていて。再度彼は突然出現して、自分の部屋の女将を、この上なく仰天させた。しかし今回、洗濯物や子供達の臭いは彼の部屋になかった。

彼は今や部屋の中央に立っていた。窓ガラスには水の結晶が見られた。女将によって点されたランプはほとんどテーブルの甲板を照らし出さず、ガラス玉は暗く天井に掛かっていた。

冷たい旅の後、ここに長く立っていて、変貌した人生のこと、フレンツヘンのことを考えるのは、とても奇妙なこと、法外に奇妙なことであった。ここのこの惨めな部屋に目覚めて、完全に明瞭な意識で立っていながら、しかしバルト海が窓辺の前で揺れているのか、それとも大都会なのか不分明なのは奇妙なことで、法外に奇妙なことであった。それでも聖職候補生ハンス・ウンヴィルシュは、自分は差し当たりまず再び慣れた白昼夢に耽らないよう自らに約束していたことを思い出した。しかし彼は想いと情感のこの戯れに抵抗することが出来なかった。彼は冷たさも疲労も感じていなかった。 — いや、しかし何と世界は、自分の世界はかの晩以来変貌してしまったことか、かの晩、つまり新町の教会墓地から戻って来て、フォン・ブラウ大佐の名刺を受け取って、九人殺害者[モズ]の緑の木亭で、この名刺の説明を求めた晩以来のことである。

しかし今や彼が落ち着いて腰を下ろし、自覚することになる瞬間がやって来た。しかし彼は落ち着くことが出来ず、再三新たに衝動に駆られ、「あたかも誰かを撲殺したかの如く」、胸騒ぎがして、この落ち着きのなさが刻々と募った。

何故公園通りの家はあのように真っ暗だったのか、一体最近の日々、何が起きたのか。

すると旅の至福の感情、思索、映像の後に、反動が生じた。しばしば人間の杯は、唇に当てる前に壊れてしまうものである。花輪は、しばしば格闘者の手がそれに触れる瞬間千切れてしまうものである。

この動揺、秘められた厄災に対する鈍い恐怖といったものが耐え難くなって来た。 — ハンス・ウンヴィルシュは再び路地に出て、枢密顧問官ゲッツの家の情報、フレンツヘンについての情報を知っていそうな人間を探すことにせざるを得なくなった。

彼は緑の木亭の九人殺害者達の中に、町の出来事に通じた男達がいることを思い出した。フォン・ブラウ大佐は、この変わり者達に対し袋一杯の挨拶の言葉を彼に預けていた。 — ハンスは緑の木亭に急いだ。彼がレンメルトとその「ねぐら」からいつもの満足げな好意の歓迎挨拶を受けたとき、丁度十一時の時が打たれた。 — しかし彼は質問を許される前に、長いこと、自ら答えなければならなかった。それから彼が短い言葉でも聞き知ったことは、勿論、九人殺害者達の縁遠いお喋り世界に無邪気に没入することを全く不可能にするに十分であった。枢密顧問官ゲッツの以前の同僚、年金生活者の試補

ヴァイツェルは、聖職候補生ウンヴィルシュに公園通りの家について極めて確かな情報を教えてくれた。今日は「嘘の夕べ」ではないから、彼の知らせは完全に信用出来るものであった。

フランツィスカ・ゲッツはもはや彼女の伯母の家にはいない。この試補がその純度の高い情報源から承知していることによれば、彼女は伯父の葬儀の日に家を出たか、家を出ざるを得なかったのである。彼女がどこへ向かったか、試補の九人殺害者ヴァイツェルは証言出来なかった。公園通りの家は、ちなみに目下のところ閉鎖されています、とこの試補は語った。同僚ゲッツの未亡人は、最初喪の期間を息子さんと一緒にある別の、辺鄙な市の一角にあるとても敬虔な親戚の老女性宅に隠棲されていました。町の人々のひそひそ話しでは、彼女、一 枢密顧問官夫人は、一 世間と折り合えず、ご機嫌麗しくないと囁かれています。この試補は、自分の話しに更に幾つか添加しようとしたが、しかし彼はフレンツヘンについてそれ以上何も知らず、それでハンスは、それに聞き入り、それを評価することが出来なかった。聖職候補生ウンヴィルシュはこの晩、彼の手短な別れ方と頓狂な駆け去りで、九人殺害者達のクラブでかなり人目を引くことになった。この変わり者達全員が、大きな叫び声を上げて、彼に尋ねた。汝はタラントウラ[毒蜘蛛]に刺されたのか、それとも蓋を持って走るからには、野戦炊事車に雨が降り込むというのか、と。しかし彼らは聖職候補生に分からせるために、更に大声で叫ぶ必要があったであろう。彼は駆け去ったが、多くの瓶やグラスを載せた盆を持って部屋に入ろうとしている亭主レンメルトをほとんど投げ倒す勢いであった。彼は玄関前の雪の中に飛び出た。彼は素早く駆けて、あたかも出来るだけ素早く脚を動かせば、運命に対し先手を打てる本当に確信している風であった。しかし彼は単に息を切らすことになって、咳き込みながらある交差点で立ち止まった。駆けても甲斐はなかった。真夜中が過ぎ去っていた。ゆっくりとまたハンスは自分のグリンゼ路地に着いた。彼はその前に、ある通りの隅で、夜間陶酔者、酩酊者、盗人を見張っている警察官から、不審に思われながらも、確言を得ていた。つまり警察署の中にはある部署があり、そこでは2.5グロッシェン銀貨の手数料で、この町に滞在しているすべての人間の住所について情報を得ることが出来る、と。

聖職候補生はどのようにしてこの夜の残りを過ごしたか、我々は描写できない。彼はベッドに身を投げては、また飛び起きた。どんなに努めても、彼は自分の籠の外れた空想を落ち着かせることができなかった。一瞬ごとに、彼は不安げな情けない助けての叫び声を耳にした。いつもそれはフレンツヘンで、彼女はこの世のすべてから見棄てられ、病気で飢えて、凍えて、暗闇の中で嘆いていた。

ようやく、ようやく朝が白んだ。ようやく、ようやく最初の牛乳車が、二頭の不機嫌な犬に引かれて、グリンゼ路地の角を転がって来た。ようやく、ようやく陽光が昇り、ハンスはフレンツヘン探しを開始することが出来た。

彼は勿論、ヴァイツェル試補の報告にもかかわらず、まず公園通りへ出掛け、庭園門扉の呼び鈴を引き、動悸しながら立っていて、耳を澄ました。彼は立っていて、耳を澄ましたが、甲斐はなかった。ジャンも別な者も現れなかった。その家は雪の積もった芝地の雪の積もった噴水同様、黙して、死滅していた。ゼンメルパンの籠を運んでいるパン屋の少年が、試補の話しを裏付けた。パン屋の少年は予約を解約されていると説明し、牛乳屋の女将も同じ説明をした。郵便配達人がクレオーフェアの手紙を持って、ドアの所まで

来て、この手紙をまた肩をすくめながら、自分の革バッグに収めた。ハンス・ウンヴィルシュは、緑色の鸚鵡の叫び声を耳にしていたら、何とか手を尽くしたことであろう。しかし鸚鵡も同様に亡くなっていたか、あるいは恵み深い奥方と一緒に老従姉妹の許へ越していた。

早朝の辻馬車に聖職候補生は乗って、興奮していてもたってもおれないのに、悠然としたスピードであったが、警察署まで向かって貰った。クレオーフェアの手紙は、宛先をちらと見て分かったのであるが、まだ父親宛であった。郵便スタンプにはパリの字があった。聖職候補生は、汚れた通りを進んで行くがたがた揺れるこの馬車に乗って、公園通りの家のドアがやはり開かず迎え入れられなかったこの手紙、つまりもはやこの宛先に届くことのない手紙のことを考えていて、更に一層凍えて来た。

我々はこの中央警察署を別の機会の折[『森からの人々』第一章]、しかし同じような天候の際に描写しており、従ってもう一度描く必要はない。幾度か質問し、この建物の果てしない迷路のような通路をかなりの間さまよった後、ハンスは望みのドアを見つけ、そして自分だけが、ある関係者の滞在地を知りたいと思っているわけではないと知ることになった。

はなはだ多くの人間が、どこにまたはなはだ多くの人間が住んでいるのか、知らないのである。債権者達は極上の丁重さで、その負債者達の隠れ家を訪ねている。若い娘達は泣きはらした目で、突然全く理由もなくそのねぐらを替えてしまった若い男達のことを尋ねている。子供を連れていたり、いなくなったりするやつれた女達も現れている。時間給の召使い達がいる。異邦人がいる。 — あらゆる階層の民からの民である。質問は何千もの作法様相を呈し、それにまたこのいとも尊い警察が、応分の仕事をしないまま、手数料を取ること、少しも稀ではない。警察でさえ、某々の男性、某々の女性がどこに滞在しているか、しばしば把握していない。自らと自らの滞在地をすべての警察や、その他の探索から逃れるのに、大変器用な技法を發揮する多くの人々がいるのである。

優に一時間ハンスは立って、待っていると、彼の番となった。それで彼は自分の問い合わせの紙片を役人の格子へ渡して、更に十五分して、問い合わせに対する返事と共にその紙片が戻って来た。

「アンネン通り、三十四番、五階、ブランドウアー未亡人の許、洗濯女」。

紙片は灰色で、警察官の悪筆は最高度に能筆ではなかった。しかしその双方とも聖職候補生の手の中で輝かしい光輝を放った。彼は心臓の辺りが静かに温かくなった。すべての不安、不穏が消えた。 — これは、安心、確実だ。 — これは自由なフレンツヘン、公園通りの家の圧迫する絆から解放されたフレンツヘンだ。

「アンネン通り、三十四番地、五階」。彼の背後の男が憤然と突いて、聖職候補生は自分の恍惚から目覚めた。彼は自分がどこにいるのかまた了解した。そして急いで去った。この場所でこの紙片に接吻する勇氣はなかった。屋根の上の夢遊病者のように、ハンスはアンネン通りへの道を正しく進んだ。彼が警察官の悪筆を読んだ瞬間と、彼がフレンツヘンがその中に住んでいる筈のドアをノックした瞬間との間に時間の経過はなかった。最初のノックと二回目のノックの間には一世紀があった。そして十五分後、彼は静かにフレンツヘンの側に座っていて、フレンツヘンの両手を自分の手に握っていた。そして、 — 最も重要なことが言われていた。彼はそれどころかすでにフレンツヘンに接吻も

していた。大地はまだ存続していて、天も落ちていない。しかし太陽は冬の雲の背後から輝かしく出現していなかった。即刻春となったわけではなかった。フレンツヘンの黒い喪服も、歓喜の明るい青の衣装に変わっていなかった。

二人は互いに話すことが沢山あった。たとえ最も大事なことは、ほんの数瞬のうちに話され得たとしても、しかし一日経とうと、一週間、一ヵ月経とうと話さきれない多くのことが、実に多くのことが残っていた。

ハンスの報告すべき点に関しては、我々は把握している。これから我々は、聖職候補生ウンヴィルシュが枢密顧問官ゲッツの家を去って以来、フレンツヘンに生じたこと、彼女の生活ぶりを追って語ることにしよう。しかしフレンツヘンは自分のことを少しも話さず、ただ他人について語るので、この話しは一層厄介である。

クレオーフェアが自分の両親の家で振りまいていた活気は、不自然な活気であった。彼女の存在が周囲に及ぼしていた輝く明かりは、不健康な鬼火のようなものであった。しかしこの活気と明かりの双方が永久に消えると、沈黙、冷氣、暗闇がこの楽しみのない竈に脅すように沈降して来て、頓狂な軽薄さ、この駆け落ち娘の多彩で華麗な過ちはすべてほとんど徳操のように見えることになった。潑刺とした声、軽快な足取り、絹の服の急ぎ足の衣擦れ音が、階段や廊下で反響していた。しかし哀れな父親とフレンツヘンは、何らかの物音を行方不明のこの女性の足音と想うたびに、座ったまま、耳を傾け、そして頭を垂れることになった。この娘の逐電の後、三日目に母親はまた自分の部屋から出て来た。母親は以前、世俗的虚栄心の幾つかの顕著な特徴を身に帯びていたが、今や母親はこれを完全に捨て去っていた。母親は少しばかり更に痩せて、更に黄色くなっていた。しかし彼女は自分の魂も清掃していた。彼女の顔は微動だにしなくなっていた。彼女の声は少しばかり空ろになった。しかしこれもすべての罪深い情熱から浄化されていて、やむを得ない時、抑揚なく、世間に対し、最後の審判の開始とすべての被造物の九割の墮落を告げるのであった。しかし一時的に恵み深い奥方は、自分の夫、自分の姪、その他の家の者達にただ、自分の娘の名前をもはや自分の耳の聞こえる所で呼んではならないと告げた。母親は、クレオーフェアが彼女の出奔の直後、書き寄越した手紙を夫から貰い受け、その手紙を家の召使い達の前で破り捨てた。自分は、クレオーフェアの墮落した性格形成に関し、一切咎めを受ける筋合いがありません。だから自分は今後完全に彼女との縁を絶ちます。自分、
一 アウレーリエ・フォン・リヒテンハーンが信奉している神はこのことを諒とされましよう。この母親はシュタイン博士に対しては、とうに自分の娘に対するほどには怒っていなかった。そしてこの娘に対する怒りの中には、それどころか、一種の満足感、一種の恐るべき勝利が混じっていた。この母親は娘に反感を抱いていたが、それはまさに正しかったのである。娘に降りかかるかもしれないすべての屈辱、すべての悲惨さは、ただこの内密の満足感を高めるだけであろう。枢密顧問官夫人は自分の側に莫大な貸しが残る具合に世間との清算をした。かくて彼女は世間と片を付け、世を棄てた。

クレオーフェアの父親も人生の清算をした。しかし彼を助けることの出来る者は誰もいなかった。彼自身が最も出来なかった。彼は破産してしまった。そしてそのことを否認しなかった。彼はその苦難の人生で無益な仕事を沢山してきた。そして今や自分の墓に苦悶しながら飢えて向かっていた。彼の唯一の頼りは、誠実で、穏やかなフレンツヘンの手であった。今や彼はこの手を握った。頓狂なフェーリクスがその晩年の苦痛の日々、握

っていたようなものである。このフレンツヘンがこの両男性の臨終のベッドの側に座っていたことは、この地上で起きた悲劇的奇蹟の一つである。この両人は異なる小道を歩みながら、同様に破綻してしまい、赤貧となって、空の手、空の心となって、自分自身と世間とを放棄して、その存在の終点に到着したのである。二人の最後の時に投げかけられた明かりはすべてフレンツヘンからのものであった。彼女は、この渴した二人にその最後の時、最後の涼しい水の一滴を運んだ天使であった。二人は、それぞれがその流儀で、懸命に努力して、両人ともそれぞれ沢山獲得しようと欲して来た。そして喜捨として両人にこの娘の心が贈られたのである。

クレオーフェアはフレンツヘン宛に手紙を書いていた。そしてハンスはこの手紙を読んだ。この走り書きの行間からはまだ昔からのクレオーフェアの語りが感じられた。しかし所々すでに、思いの丈を描写しながら、ある堅苦しさ、囚われが見られた。これらは以前のクレオーフェアにはなかったものである。

テオフィル・シュタイン博士の妻は、現今の慌ただしい生活の最中に、従姉妹との遠い昔の無邪気な付き合いの個々の点を幾つか思い出していて、フレンツヘンはこのことに自分の心がとても重くならざるを得なかった。クレオーフェア・シュタインはこのような「些細な事」を思い出しますと、「孤独で、心脆くなった折」のことと書いていて、それから続く文章で、フレンツヘンに、パパに接吻して、こう述べて欲しいと頼んでいた。自分は父親のことを「とても沢山、とても沢山」思い出して、夜、夢の中でその書齋に立っている父親を見て、父親のことで涙しています、と。これに続いて、ルーブル宮での輝かしい舞踏会とムリリョ[画家、1617-1682]の描写があり、それからパリの小伯爵や市民王ルイ・フィリップ[1773-1850]、並びにその雨傘についての素描があり、これに関連して、エメはその姉を失ってどんな具合か尋ねていた。手紙全体の中で、母親については言及がなく、シュタイン博士は全く末尾近くになってようやく登場していた。彼については、彼はパリで知人達や友人達の大きなサークルを有していて、そのため若い妻には余り好ましくないほど、しばしば長く家から離れていることがあります、しかし自分、
一
クレオーフェアはそのことには理解があり、幸せに思っていますと書かれていた。更にこの発信者の女性は、ドイツの町での博士の成功とその町での結び付きに触れていた。すべての紛糾は直にお互いの歩み寄りで解決するであろうし、「薔薇色の未来」への希望を棄ててはなりませんと固い確信を表明していた。この追伸では、「愛想の良い」ヨハネス・ウンヴィルシュ殿にどうぞよろしくとの挨拶が述べられ、こう付記されていた。「あの方には色々お詫びを申し上げなければなりません」、そして「そのために将来落ち着いて小一時間お目にかかりたいものです」と。手紙は鬱々した気分で締め括られていて、フレンツヘンに千もの、更に千もの挨拶と接吻の許、「この愚かな、無益な、悪筆を」引き千切り、四方のすべての風に任せるよう依頼がなされていた。他のすべての「哀れなクレオーフェアの妄念妄想が、これも破綻して、四方の風に吹き飛ばされ、舞い散っている」具合になればいいのです、と。

フランツィスカは同様にまた長い手紙をこの従姉妹宛に書いて、この手紙の中で、涙ながらに、クレオーフェアの両親の家での諸状況を誠実に知らせた。フレンツヘンは、心から出血しながら、父親と母親のことについて書いた。しかしテオフィル博士に言及することは出来なかった。しかし将来についてはフレンツヘンも同じように書いた。人生の

どんな苦境に遭おうとも、フレンツヘンがいつも、共感し、共苦するためにいること、慰め、出来る限り助けるためにいることを忘れないでと従姉妹に頼んでいた。

この手紙をフランツィスカは大変心配しながら全く秘かに書き上げて、そしてかなり経ってから、ようやく機会を見つけて、郵便局に届けた。というのは伯母は世間から引きこもっているものの、何事かを伯母の意志に反して実行し、敢行するのは、容易なことではなかったからである。枢密顧問官ゲッツ夫人は、自分の家の誰かが、出奔した娘と文通することを望んでいなかったのである。 —

フレンツヘンはこの伯母のせいで、人生が自分にとってどんなに辛いものになったか話さなかった。しかしどんなに微かな暗示でも、聖職候補生にはそれで十分であった。哀れなこの娘が耐え忍ばなければならなかったことを想像すると、彼は熱い思いと冷たい思いに襲われた。自分はグリーンゼ路地の自分の部屋で、口にパイプをくわえて、空想に耽って、あちこち歩き回っており、そして自分の思念の中で、フレンツヘンのことや、 —

かの偉大な原稿のことを考えていたのである。伯父グリュエネバウムの最後の手紙を貰ってから枢密顧問官宛に書いた便りを顧問官は得ていなかった。ジャンがそれを受け取っていて、恵み深い奥方は、夫と姪にその便りについて伝達することを不必要と見なしていた。これに対しシュロッターベックおばさんとグリュエネバウム伯父の逝去をフランツィスカは新聞を通じて正しく知っていた。ハンスとフレンツヘンはアンネン通りでこの善良なおばさんと愚直な伯父について語り合った。

「私どもには死がもはや目新しいことではありません」とフレンツヘンは言った、「私ども兩人ともしばしばその冷たい翼の音を自らの頭上や傍らで耳にしてきました。側の幾つかの場が空になっています。とても悲しいことです。列を詰めよ、と戦友をまたしても一人亡くしたと聞くと、パリで私の父を訪ねて来ている老兵士達は言うものでした。これは戦闘では良くない司令官の言葉です。だって向かって来る弾は、再三詰められた縦列を貫通しますから。でもそれは人生では良い言葉です。 — 列を詰めよ、私どもは死者に対し墓場へ一緒に持って行く愛を、生きている者達から奪ってはなりません」。

「奪ってはならんだろう」とハンスは叫んだ、「そうすべきではなかろう。死者達がすべての愛を墓場へ自らと共に持ち去ったら、何と惨めな世界になることだろう。地球の時が終末を迎えたら、そうなるかもしれない。その場合には仕方ないかもしれない。しかしそうなったら、すべての太陽や星々もその輝く目を背けることだろう。薄暗くなって、寒く、ますます暗く、寒くなることだろう。 — そのときにはすべての飢餓が、すべての憧れが終了し、すべての愛と一緒に棺に埋葬されて然るべきであろう。その時には、庭の最後の花々も死者の花輪へと折られていいだろう。 — 花々を愛でるような人は誰も残っていないだろうから」。

「あの善良な老おばさんが路地で目にした亡き人達は、それではもはや憧れもない世界にいるのでしょうか。すべてが調停されている世界です」とフランツィスカは言った、「そのときには太陽や星々がその新しい世界にその顔を向けることでしょうか。この地上のすべての小夜啼鳥が向こうではまた雲雀として舞い上がることでしょうか」。 —

兩人は今やテーオドル伯父の死去について語った。フランツィスカは彼の力が日毎に減退して行った様子、しかしまた日毎に以前の袴を着けた本性をも失って行き、また

好んで自分の両親の家のこと、二人の兄弟のことを語るようになって、ルドルフ伯父宛に一通の手紙を書き始め、しかし書き終えることが出来なかった様子について語った。フレンツィスカはテーオドル伯父がクレオーフェアからの手紙を貰い受け、その手紙を臨終の時まで自分の燕尾服の胸ポケットに収めていた様子について語った。これはアンリエット・トゥリュブレが公園通りの家を去った日に届いた例の最初の手紙が奥方によって引き千切られたその後のことである。

十二月九日、朝八時に、ジャンは自分の主人が完全に盛装して、黒い燕尾服と白い胸襟を着用して、自分の書き物机の前に死んで座っているのを見つけ、大きな叫び声をこの家中に響かせたのであった。枢密顧問官夫人はやって来て、はなはだ冷静であった。彼女はかかりつけの医者と呼びにやり、医者は、枢密顧問官殿は亡くなっていますと、言えるのみであった。それから夫人は公証人と呼び寄せた。エメは人々が彼に父親の最後の姿を見せようとする、手足をばたつかせた。召使い達は初めてフレンツヘンに逆らわず、従った。―― フレンツヘンは伯母のアウレーリエから葬儀の手配を任されていた。そして召使い達は、哀れなエメ同様、似たような具合に死者に対して臆していた。

書き物机には、その側に座って枢密顧問官ゲッツは亡くなったのであるが、痙攣しながらなおペンを握っていて、冷たくなってしまったその手の下に一枚のスタンプ入りの紙片があって、こう記されていた。

「私は許す――」

それから死神に打たれた手の中のペンは、この紙片に一本の線を引いていた。枢密顧問官は、誰に何を自分は許すのか、書くことが出来ないままであった。彼の未亡人はその紙片についての自分の感想を言わずに、紙片を自分の許に仕舞った。更に彼女、未亡人は、親戚にはこの死去を新聞で知らせれば十分でありましようと言明した。

フレンツヘンがこの枢密顧問官の葬儀について述べなかったのは残念である。というのは最高級の葬儀様式で執り行われたからである。社会や法曹界のトップが自ら出席し、あるいは少なくとも彼らの馬車を出したからである。しかしフレンツヘンは家に、伯父の書斎に座っていて、泣いていた。彼女一人が本当に泣いた。他の人々はすべて、単に薫香粉や石灰[晒し粉]の香りで少しばかり麻痺していた。

第八章

アンネン通りのかくも上階、ブランダウアー夫人の許に座っていて、―― 手に手を取り合って、―― また雪が降り始める間に、万般にわたって、将来のことについても、話すことは、すべての奇蹟を越える一つの奇蹟であった。

「哀れな娘だ、何と辛抱したことか」とハンスは叫んだ、「しかしこの部屋にどうしてたどり着いたのです、どのような暮らしだったのです。話してください。―― 一いやはや、最近の日々、どのような暮らしだったのか。とても冷たい冬だ、どんな取るに足りない小鳥でさえも、寒さから守ってくれる巣があるというのに。そなたは外に追い出されてしまって、――」。

フレンツィスカは微笑しながら、憂鬱そうに頭を振った。

「私は自分の意志で出たのです」と彼女は言った、「窓が開けられて、こう叫ばれ

たわけではありません。さあ飛んで行け、ヨーロッパ駒鳥、と。私は自発的に出ました。誰も私をあの家引き留めることは出来なかったことでしょう。私が自分の心と手で貢献できることは多くなかったのです。そしてこの善良な伯父の葬儀の後、この家がまた落ち着きを取り戻したとき、私にはもはやすることがなくなりました。私は伯父の書斎でとても凍えていて、この家で私のための他の居場所はもはやなくなりました。私の小部屋は、伯母の従姉妹から慰め相手として派遣された老嬢のために譲らなければならなくなりました。この老嬢が、以前私に任されていたすべての役目を引き受けたのです。伯母に私はほとんどお目にかかれなくなりました。伯父が亡くなってから、私はこの家に住む権利がなくなりました。私は去りました」。

「ではそなたに助言したり、そなたを助けてくれる者は誰もいなかったのか」とハンスは叫んだ。しかしフレンツヘンは初めて全く陽気に微笑した。

「私はね、哀れなアンリエット・トゥリュブにほとんど負けない勇敢な有能なパリ娘ではないのかしら。全く一文無しというわけではなく、それに私はゲッツ隊長の子供、向こう見ずな兵士、自由のための戦士の娘です。私が自分の道を見いだせなかったら、私にとって不名誉なことになりましょう。いや、神様、伯父のために深い哀悼を感じていながらも、私は自分のことを、自由になった、自らの主人だと想っていたのです。自分と自分の感情の間にもはや誰の容喙も受け入れない、と。すべての重たい鎖が私から外れました。私が傘を差して、自分用の片隅を探しに外出したあの日は、私の中の若干の父親譲りの荒々しい勇気と精神のお蔭でしょう。私はその片隅を見つけ、この最近の日々ずっと座っていて、私の若い生活に関し、善良なブランダウアー夫人の沢山の風変わりな質問に答えなければならなかったのです。でも私どもはお互いに了解し合って、互いをきちんと大事にすることにしました。私はクレオーフェア宛と大好きなルドルフ伯父宛に書きました。今頃手紙は届いていることでしょう。あら、今はクレオーフェアの許にいたらと想います」。二人は小声でテオフィル・シュタイン博士について、彼はどのように振る舞うであろうか、今や彼の妻は資産豊かな母親から縁切りにされ、遺産を奪われているのだと語った。フレンツヘンは不吉不幸なクレオーフェアの運命に激しく泣いた。外では雪がますます募っていた。苛酷で邪悪な冬が世間にやって来ることであろう。 —

二人は今や窓辺に立って、吹雪を眺め、かなりの間、黙って立っていた。

「グルンツェノーまでの道は遠い」とハンスは言った、「それに難儀な道ともなろう。愛しいそなた、この労苦への覚悟があるかな。自分に魔法のマントがあって、そなたを包んで、温かく、この白い冬景色の土地を越えて運び出せたらと今は願われる」。

フレンツヘンは小顔を友に持ち上げて、涙越しに微笑した。クレオーフェア・シュタインのために泣いていた涙であった。

「あなたの愛が、私をあなたの心に抱き寄せてくださったマントです。あなたの胸元で、あなたに愛されて、どうして凍えることがありましょうか。その上かの土地が一つの故郷となる定めです。今まで本当の故郷というものがなかった私にとって、人生から手荒に、欠乏と過剰故に、あらゆる混乱と軋轢故に、あちこち突き飛ばされて来た私にとって。どうして、あなたのマントの許、ヨハネス、あなたの心の許で、この雪や冬を恐れましょう」。

「いや、愛しいそなた、愛しいそなた」とハンスは叫んだ、「いや、そなたの言う

通りだ。我々はどんな大地の冷たさにも、大地の嵐にも備えは出来ている。風の轟音を耳にはするが、風を感じてはいない、一」。

「それにルドルフ伯父に会いたいのです。一 ようやく、ようやく、伯父に再会します。あの伯父の胸元でも私はとても安心して想われます。伯父に神様の祝福がありますように」とフレンツヘンは続けた、「それに善良な大佐、善良な老牧師にも私は会いたいのです。まあ、ヨハネス、何とこの方々に私どもは恩義のあることでしょう。お伽噺のように素敵。いや、神様、一番素敵なのは、そうしたことへの子供の願いが天から下界にまた実現していることです。いや、クレオーフェアはいないけど、明るい純な子供の喜びがまた下界に見られることでしょう。一 まあ、ヨハネス、ヨハネス、私のことを本当に好きに、本当に本当に好きになってください」。

ヨハネス・ウンヴィルシュはフレンツヘンのこの最後の言葉に答えなかった。単純な理由で、彼はそれが出来なかったのである。彼はただより一層強く花嫁を両腕に抱き締めて、彼女は顔を彼の胸に隠した。

しばらくしてようやく二人は更にクリスマスの雪について、つまりこの雪を恐れることは正しくないだろう、と語った。二人はルドルフ伯父とフォン・ブラウ大佐、大佐のグリプスと大佐の犬どもについて語った。二人は立派な牧師ヨジーアス・ティレニウスについて語り、そしてハンスは微細な点まで、バルト海沿岸のグルンツェノーの土地と人々について精一杯描写した。とりわけ彼は、自分が海について感じた印象を伝えようとした。

「私は海を恐れていません」とフランツィスカは言った、「時々私には海がまるで夢の中のことのように想われます。あるときは私の母親の腕の中のことで、ほんの小さな娘の時です。あるときはその黒々とした海に月が昇るのを目にしています。そのときは生き生きとした踊るような光の道が水平線まで通じていました。陽光の中の海の記憶がないのは、不思議なことです。何度かモンテビデオ[南米]からハバディグレイス[アメリカ]までの長い航海の際、目にしたに違いないのに。とても恐ろしい嵐に遭遇したこともあったのに、その嵐の記憶もありません。父が私に後で語って聞かせたのです。その船はアンフィトリオンと言って、私どもは二十八年か二十九年にパリへ戻ったのです。私は海をとっても楽しみにしています。海は私の最も幼い子供時代に、とても穏やかに私を揺すってくれました」。

「愛しいそなた、そなたはとても沢山目にし、とても沢山経験している」とハンスは意気消沈して言った、「そなたは半ば世界周航者で、パリのそなたの部屋の窓辺前では、何とあらゆる事象が過ぎ去ったことであろうか。そなたは多様な色々な人生を知っている。しかし私がそなたは連れて行く所は、極貧の最も孤独な所で、そこにはただ昔からの友と貧しい漁師達、海、それに我々二人しか見当たらないのだ」。

「まあ、何と贅沢なんでしょう。何という広大な、広大な世界なんでしょう」とフレンツヘンは、両手を組み合わせて言った、「かくも広大な影響圏の中で、かくもこの上なく贅沢に、言いようもなく幸福に暮らしたいと、私は最も大胆な夢の中でさえ希望したことがあったかしら。いや、私ども両人がかくも幸せになれるなんて、誰が想像したことがありましよう。私どもはただこの二人だけで利己的に生きようとしたら罰があたりましよう。私どもの心は二人の愛の中で料簡の狭いものになってはいけません。一 私どもの愛と幸せを人々に分かちましよう。二人してよりつまらない者になってはいけま

せん」。

「それを目指そう」とハンスは厳かに言った。そして彼はそう想いつつ、再び夜間吹雪の中、グルンツェノーの牧師と共に、もはや明かりのない暗い小屋の壁の前に立っていた。そこの籠の火は、生命が永久に消えて、もはや微光を発しなくなっていたのである。

—

雪はますます楽しげに積もった。路地の子供達は、渦巻く吹雪の中、飛び回り、歓声を上げていた。屋根の上を一羽の黒いカラスが飛んで、ある煙突に下りて、翼の雪を払い落とし、かすれた声で世間に自らの快感を告げていた。ハンスは自分のフレンツヘンを抱き締めていて、ますます深く、すべての暗い予兆や目印石が二人の最近往来した路上に沈んで行った。新たな墓塚にもかかわらず、哀れなクレオーフェアにもかかわらず、ハンスとフレンツヘンは次第にますます幸福なより安心な静けさに包まれていた。

ハンスは自分の花嫁の小部屋で周囲を見回し、この部屋を自分のグリーンゼ路地の居場所と比較した。彼ははなはだ立派な注意深い家政管理人、観察者の風貌を見せていたが、フレンツヘンは偉大な原稿のことを尋ねて、彼をはなはだげんなりさせた。

彼は最初出来るだけ質問を逸らそうとしたが、とうとう笑ったり赤面したりしながら、このご立派な原稿の進捗状況はいかなるもので、この原稿をこれまでしばしば何度も破棄した次第を白状した。

しかしフレンツヘンが、この著名な、しかし残念ながらまだ出版されていない作品に肩入れして言及したのは、とても可愛いことであった。

聖職候補生ウンヴィルシュはただグルンツェノーでの閑暇を小声で仄めかして、再度この原稿の完成可能性に関するすべての疑念を払拭してから、この面でも立派な楽しい展望を心地良く描くに留めた。

さて階段で、余り軽快でない足取りが聞こえて、ドアがノックされ、お入りの声を待たずに、まことに遠慮のない目つきの女性が入って来て、重い買い物籠を下ろして、少なからず、自分の「令嬢」への訪問客のことで驚いていた。しかし彼女はこの「若い殿方」の名前、身分、その他の属性、品性を知らされると、彼女の眼差しは快活になり、聖職候補生に挨拶として彼女は手を差し出した。この手は自分の母親の仕事好きな手をまざまざと思い出させた。ブランダウアー夫人がこの部屋にもたらした石鹸と新鮮な洗濯物の臭いも彼にとって同様に全く懐かしいものに違いなかった。ハンスは、フレンツヘンが立派な手の世話になっていること、運命が好意的にフレンツヘンを気遣っていることを大いに自分の喜びとして伝達した。

彼はブランダウアー夫人に自分とゲッツ少尉殿の謝辞を述べたが、しかしはなはだ粗野に罵倒され、尋ねられた。このような令嬢は、国王の子供と同じで、天から呉々もよろしくと頼まれています、何をお考えです、と。

ブランダウアー夫人としては、ゲッツ少尉殿と聖職候補生ウンヴィルシュ殿の謝辞を望んでいるわけではありません。しかし自分は少尉殿の謝辞は受け入れ、「その恵み深い御厚意」を多とし、こうお伝え願います、自分としては、愛しい神様がこの愛らしい令嬢に託して貸与なさったお宝に少尉殿は感謝なされるであろうと希望しております、と。

その後夫人はとても憤慨して、聖職候補生の襟をほとんど締め付ける勢いであった。「恥知らずにも、このような季節、このような天候のときに、このような哀れな、優

しい若いレディーをモンゴル人ども、タタール人ども、ラップランド人どもの所に有無を言わさず引きずって行こうとなさっているから」と。彼女はフレンツヘンにこの件を三度熟考するように頼んだ。こちらは暖炉も温かいし、どんなヒアシンスでも、このような天候のときには窓から雪を眺めているのが最良なのです、と。「そこの上手には」、更にそれどころか狼や熊がいると夫人は思い付いて、その母親らしい心配症の感情に圧倒されて、夫人は聖職候補生とフレンツヘンがどのように慰めて保証しようとも、心が安まらなかった。ただ、ヨハネス殿を昼食に招待することが出来るか質問を受けて、ようやくまた夫人は正気に戻って、地に足が着くようになった。

招待出来るに違いありません、出来ますよ。哀れな、飢餓の聖職候補生にとって、これまで彼の人生でかくも貴重な、かくも浄福な食事が用意されたことはなかった。この世はますますメルヘンチックになって来るぞ、――　　――　　ますますメルヘンチックだ。この部屋の、そしてこのテーブルのごく取るに足りない調度でも、善良な妖精達の、善良な森の女将の家政からの一片の用具のようであった。――　　――　　すべてにそれ自体に曰くが感じられて、工房や工場、商人の店舗由来のものではなかった。磁器の塩入れがスープ鉢の周りで踊りを始めても、スープ鉢が彼と花嫁にその鉢底から賀詞を述べて、また先ほど煙突へ下りて来て、翼の雪を振るい落としたカラスが窓辺にやって来て、新婚の二人に小人の世界からの挨拶を言上し、山の精達の王様からの二個の黄金の指輪を渡しても、ハンス・ウンヴィルシュは少しも奇異に想わなかったであろう。

彼、――　　――　　ハンス・ウンヴィルシュは、その際、同様にフレンツヘンの側に座っていても、しかし枢密顧問官ゲッツ夫人の食卓に座っていたあの時代のことを考えざるを得なかった。しかしこのこともただ今の時の魔力を強めるだけであった。かの忌まわしい日々から何週間も隔たっていたわけではなく、それでこの花咲く現在の中にそれらの日々が幽霊のように出現しないわけではなかった。しかしこの身の毛のよだつことも、他のすべてと同様、快適なメルヘンに属していた。

さてグルンツェノーへの旅の詳細が打ち合わされた。ブランダウアー夫人もその最良の助言を述べた。しかし出発の時刻が確定すると、後はそれほど話し合うことはなかった。フレンツヘンの所有物は小さなトランクに収まっていた。彼女はハンスよりも荷が少なかった。彼女はこの碩学のテーベ人[テーベのあるポイオーティア人は無教養、『リア王』、Ⅲ, 4で流布]のように、文庫を引きずる生活をしていなかった。彼女は、真に兵士の子供で、ごく短い合図でも、どこなりと行軍して行く用意があった。

いや、この小さなトランクときたら。このトランクが聖職候補生ウンヴィルシュに披露された。聖職候補生ウンヴィルシュはその側に立って、トランクとフレンツヘンを見つめていた。フレンツヘンは跪いて、その蓋を外して、友に彼女の母親の細密画と彼女の父親の携帯していた白い鷲のポーランド勲章を見せた。いや、この哀れな、小さなトランクときたら。かくも優美に滑らかに細い襷が付いていて、かくも丁寧に分割されていて、そしてすべてがその中に巧みに埋め込まれているように見えた。このトランクは、三人の舞踏会服と、御者、走者、従僕を備えた六頭立ての馬車を蔵している魔法の胡桃のようであった。――　　――　　総括的に快適な、良く整理された、静かで平和の家政というものがこれを見て聖職候補生の空想の中で広がった。そして百もの好意的小妖精が舞い上がり、」聖職候補生の頭の周りでぶんぶん言い、海や、グルンツェノーの荘園屋敷、牧師館について、

冬の夕べの弾けて燃える炎、暑い夏の午後の牧師館庭園の乱れた植込みについて、あれやこれ、色々と彼の耳許で落ちないことが囁かれて、彼は間近の椅子に腰掛けなければならなかった。彼の頭と心は余りに平衡感覚を失っていたからである。

早速翌日の正午の列車で、フレンツヘンが聖職候補生に従ってグルンツェノーへ出発するに当たって、支障となりそうなことは、何も見つからなかった。一 人生はより鮮明に、より単純に象られるにつれ、人生はますますメルヘンチックに、次第にメルヘンチックになる。さてハンスが花嫁を連れて、兩人にとってかくもほとんど好ましく喜ばしい日々を恵まずにいて、しかし兩人の人生で至高の幸福を恵んでくれたこの町から出発する瞬間までの時間を数えるばかりになった。さて、夕方となり、明かりがアンネン通りに点されて、すべての窓から白い雪が照らし出された。雪は足音や馬車の車輪の回転の音を抑えていた。同じようにブランダウアー夫人もその小さなランプに明かりを点した。聖職候補生ウンヴィルシュにとって、とても大きな不穏、混乱、不安の中で始まった一日が、浄福にそして極めて甘美に穏やかにその終末へと傾斜していた。

「仕方ないわね」とブランダウアー夫人は溜め息を吐いた、「若い人達は自らの道を行きなさる。とにかくそれは自然な流れだから。愛しいお嬢様、貴女が最近、とてもこっそりと、こっそりと私のドアをノックしてですよ、ここに新聞に載っている部屋がありますかとお尋ねになってですよ、思いもしなかった、貴女がこの部屋と老いて愚かなブランダウアー未亡人の許からこんなにもまたすぐに背を向けなさるとは思いもしなかった。まあ、何と申しましょう、聖職候補生殿、一 ドアの所にお嬢様が黒い服を着て、天使のように立っていなさってですよ、お手もお足も冷たいままでね、そして私どもは二人して立って見つめ合っていて、そしたら天から私の背中にこつんと来ましてね、私は膝屈めの礼をして言いましたですよ。はい、隣人のグリルマン、奥の、通路の反対側のグリルマンが新聞に載せる手伝いをしたのです、と。そしてからにこれまでの週、二人仲良く暮らしてきたのです。いや、何と申しましょう。いつも最良のものが、一番早く消えます。とうに私の夏は冬より長くは続きません。どうしようもないことです。明日からまた私は一人つきりです。そしてこの部屋は冬の薔薇の咲き終わった古い空の植木鉢となります」。

「お互い忘れないようにしましょう」とフランツィスカは善良な夫人の手を感動して握り締めながら言った。「愛しい神様が私をこちらへ導かれたのです。母親が見棄てられた娘を受け入れるように、あなたは余所者の私を迎えてくださいました。私も娘のようにいつも、親愛なる、親愛なるブランダウアー夫人、あなたのことを思い出すことに致します」。

善良なる未亡人は笑って、泣き、そしてフレンツヘンに接吻した。

「大事なあなた、私があなたの幸せの邪魔をしたら、一番良くないことでしょう。一 とても小さな、不安げな、迫害された小鳥のあなたに対して。聖職候補生殿、神様は貴方に慈悲の眼差しを向けています。だから神様は貴方に立派な心も恵まれたことと願っています。一 では神様の御名において、お嬢様をお連れなさい。神様がこれから先もお二人を守り、目下は雪に対し、更には永遠の浄福に至るまでのこの人生に対して御加護されますよう祈ります。私は賛美歌本にするように、この人生で目印を付けたと思って、これまでの日々と週を振り返るつもりです」。

ハンスは善良な夫人に対して、衷心から夫人の信頼と夫人の良き願いに対し、感謝

した。しかしそれから隣人達のこと、特にかなり詮索好きな、賢しらなパトロンであるように思われるグリルマンのことを考えて、差し当たり今晚の別れを述べざるを得なかった。アンネン通り三十四番地の五階の小部屋からの別れがいかに辛いものであったことか、ここで述べようとは思わない。それからいかに彼が雪の中に立って、手を歓呼する心臓に当て、高みの明かりの方を見つめていたか、これは読者の想像力に任せることにしよう。いかに彼が幸福に酩酊していても、グリーンゼ通りを見つけることが出来て、いかにして自分の耳の遠い女将に住まいの引き払いを告げて、自分の側での荷造りを行って、父親のガラス玉を用心して天井から外して、いかにしてグリーンゼ通りの最後の夜、眠ったか、
— こうした一切を読者は同様に思い描けばいいであろう。朝、彼は目覚めて、興奮して、旅の用意が仕上がった。正午に彼は鉄道列車の中、フレンツヘンの側にいた。

そして太陽が雪を照らしていた。とても寒くて、車掌と旅行者達はとても赤い鼻をしていた。ブランダウアー夫人は赤く泣きはらした目をしていて、夫人はハンカチで別れの合図をした。

いや、若い人達は自らの道を行きなさる。アンネン通りの健気な夫人に対する最後の挨拶がなされ、
— 残っている人混みに対し最後の一瞥がなされた。
— 「出発、進行」。

第九章

十二月二十四日であった。すべての若いレディー達は、スリッパや煙草ケース、背中に当てる枕やクッションに刺繍を施して、預言者エゼキエルの言葉、第十三章、十七から十八節に従って[災いだ、人々の魂を捕らえようとして、どの手首にも呪術のひもを縫い付け、…]、老若の男性の心を捉えようとしていたが、その手仕事が終わって、彼女達は次に生ずる事柄を待っていた。多くの人々が、
— 大人も子供も、
— 次の良き事柄を待っていた。
— 天は朝方と正午、願ってももないほどにとっても青色で、太陽は煌びやかに白いクリスマス世界に光を放ち、ようやく午後、上昇して来る霧の中に落下して血のように赤く染まり始めた。あたかも太陽は数十万のクリスマスツリーが、その日没を待っているのを承知しているかのように思われた。あたかも太陽は上機嫌で、その軌跡を速めているかのようにであった。四時五分に最後の一片の炎の黄金が、地平線の背後に沈んだ。
— 聖なるイヴがやって来た。何百万もの子供の心がかくも長くそのイヴに憧れた後、ようやくやって来た。五時に国中の鐘が祭日の開始を告げて、ケーキが出来上がった。磨き上げるのが命の主婦であっても、その胸に平安が訪れた。六時にすべての祝祭用に飾られた樅の木が万遍なく光り輝いて立っていた。およそ楽しく幸せに思える人は、きっとこの時刻にはそうになっていたことであろう。この時刻には、子供同様そこに居合わせる人々の天上界がどんな陰気な視線に対しても開かれ、どんなに暗い心をも明るく照らすのである。

これは旅の日だ。故郷へ急ぐ日だ。ハンス・ウンヴィルシュとゲッツ令嬢は、もはや魔法のマントも、超自然の救援手段をも必要としなかった。二人をフロイデンシュタットへ案内する郵便馬車とか、あるいはむしろ郵便櫃が、それ自体魔法の乗り物であって、これは大胆にオベロン[ヴィーラント作]の空飛ぶ貝殻や、アラビアの童話の空飛ぶトランク、あるいは騎士ペーターが銀の鍵を持って美しいマゲローネ姫[民衆本、1527]と騎乗する木製

の馬に比肩し得るのであった。ハンスは、鉄道旅行の際も、某旅館での昨夜のときも、極めて有能な旅行随行者と判明した。この夜、旅館で彼はフレンツヘンを高貴な女将夫人の特別な庇護の下に置いて、令嬢にはこの世でこれ以上安心して快適な宿での眠りはない風にお休み頂きますと好意的確約を得ていた。翌朝令嬢はまさに満足して、快適な気分を引き渡された。二人はこの実直な女将から別れたが、女将は更にフレンツヘンのために熱い砂の一袋を「足が冷たい折に」と郵便宿駅まで届けてくれた。二人は郵便橇に座ることになり、澄んだ青空に雲雀が上がればと願うことなく、十二月二十四日の旅を行った。

まことに郵便橇とフロイデンシュタットへの道は魅惑的であった。ハンス・ウンヴィルシュはこの双方をかなり良く知っていたが、この双方はまた様子が異なった。ユダヤ人はこのような寒さの中、旅しないように見えた。途中乗り降りする乗客は、その多様な小箱や籠と共に、極めて快活なクリスマス気分であった。陽気な老紳士の胸ポケットから道化師が見えて、これは今晚孫を喜ばせるつものもので、この老紳士一人でも旅は楽しいものになった。

道は立派であった。粗野な百姓が替え馬を出して夫役に就く必要もなかった。橇は滑らかな走路を矢のように素早く飛んだ。そして御者は倦むことなく、自分のクリスマス気分を鞭の音や機嫌の良い郵便ホルンの音色で告知していた。郵便橇は通過するすべての地で、サンタクロースの出迎えを受けて、誰もが出来るだけ長くサンタクロースを見送っていたいかにように見えた。駅舎のどんな邪悪な馬丁もその顔がにやけて緩んでいて、これの最終的理由は法外に贅沢なチップといったもののせいではなかったことであろう。

このような日には教会墓地の十字架を含む陰気な過去についてのこれまでの想念も胸から退却せざるを得ない。純白な雪の覆いが墓塚に広がっていて、その上に陽光が注いでいた。一 死者達は低い丘の向こう側、それにまた陽光の向こう側で、永遠のクリスマス祝っていた。アントンとクリスティエーネ・ウンヴィルシュ、シュロッターベックおばさん、グリュエネバウム伯父、枢密顧問官テーオドル・ゲッツ、フェーリクス・ゲッツ、それにフレンツヘンの母親が何ら異を称えずにいる中、ハンスとフレンツヘンは、子供達の祭典の時、子供達のように、快活に浄福に現世のクリスマスの喜びに心を開いていた。

すると大きな針葉樹の森が見えて来て、今日これらの森は、聖職候補生がこれらの森を初めて通過したあの暗い日とは全く別様に見えた。森の縁からブーブー鳴きながら駆け戻る猪、滑稽に急いで雪の上をぴょんぴょん跳ぶ兎ども、大声を上げて森の上を飛ぶ白雁の群れ、一 すべてが情緒に快適な印象を与えた。最初のグルンツェノーへの旅の折、馬車がぬかるみに立ち往生したその箇所を今日フレンツヘンに教えるのは楽しいことであった。そのときには怒った替え馬夫役の百姓がまずユダヤ人をボコボコ殴って、それから神の御言葉たる聖職候補生ウンヴィルシュの襟を掴んだのであった。

陽光に輝くクリスマスの雪の中の荒野は、十一月の霧に覆われた荒野とは何と別物であることか。十二月二十四日の町フロイデンシュタットは、風の月、霜の月の陰鬱な日とは何と別物であることか。その陰鬱な日、聖職候補生ウンヴィルシュは初めて光栄にも、その町の教会の塔が地平線上に浮かぶのを目にしたのであった。

いや、これはフロイデンシュタットの町だ。市門の前に見張りとして強壮な雪だるまがあった。そこに集まっていた若者達皆が鈴を鳴らして来る郵便橇を長く反響する歓声

で迎えた。フロイデンシュタットの市門を通過して、またここでも旅人をサンタクロースが出迎えた。王立の郵便檣ホルンの音の響く路地のその窓辺の奥から現れて、郵便檣を珍しげに見送る顔もサンタクロースを見たに違いない。するとフロイデンシュタットのマルクト広場に到着した。――「さあ、さあ、戦友よ、馬に飛び乗れ、馬に[シラーの詩に作曲]」と御者は吹き鳴らした。――そして一気に馬を郵便馬車時刻表で観客に知らせてある十分前に止めた。――十二月二十四日であった。

ハンス・ウンヴィルシュは、正午十二時のフロイデンシュタット住民の珍しい時間厳守について思い出し、それをフレンツヘンに知らせる時間がなかった。

誰が雪の中、郵便宿駅のドアの前に立っているのか。

全くサンタクロースに見える男で、いずれにせよ、サンタクロースの従兄弟か、あるいはその他の近い縁者であった。丈の高い雨靴に、毛皮の上着、毛皮の帽子の男で、毛皮の手袋にもくもく煙の出ている短いパイプの男、聖職候補生ウンヴィルシュを一目見るとはなはだ満足げな高度にご満悦な紛れもない様子を見せた男であるが、この男を聖職候補生は一目見ると、フランツィスカの手を握って、叫んだ。

「フォン・ブラウ大佐殿」。

「いや、ご本人だぞ。万歳、この娘はどうした。この娘か。こちらへ来なさい、愛しい娘。どうぞこちらへ、可愛い娘。フレンツヘン・ゲッツかな、万歳、もう一度更に、万歳。ようこそ、何千回もようこそだ。――これは魂消たな、そなたは大地からの生まれではないのか」。

最後の質問は説明の要があろう。――大佐は郵便檣の扉を開け放って、フレンツヘンを両腕に抱き、彼女に接吻をして、下車の面倒を省いてやろうとした。そこで彼はこの軽い荷を空中に持ち上げるようになって、大地に下ろす前にびっくりしたのであった。それにフレンツヘンは彼の手荒な愛情表現に少しも逆らわなかった。

「愛しい娘、本当にそなたか」とフォン・ブラウ大佐は叫んだ。「これはクリスマスプレゼントだ。少尉ルドルフ・ゲッツとフレンツヘンに対して万歳だな。鈍器劣根も一緒に叫べ」。

この要請はフロイデンシュタットの集まっている住民に向けられており、人々が唱和した。

さて大佐は聖職候補生とも握手した。彼に何回か好意的な含みの多い肘鉄をして、ルドルフ伯父は「足先まで元気になろう」、そしてグリプスと一緒にグルンツェノーの館は大騒ぎだろうと告げた。朝食はポーランドの雄山羊亭で用意されており、グルンツェノーの檣もそこに待機していると告げた。騎士的優美さで彼はフレンツヘンを案内して、フロイデンシュタットのマルクト広場を横切って行った。フロイデンシュタットの名士達はこの老兵士と余所のレディーを目にして最大規模の興奮に陥った。二人について珍妙な推測がなされた。しかしながらすべてのレディー達はやがてこう見解が一致した、つまり大佐は一人暮らしに飽きが来て、哀れな若い花嫁がやって来て、「グルンツェノーの異教徒風家政を目の当たりにすることになった」と。善良な人々はフレンツヘンのことをとても気の毒がった。しかし彼らの意見がポーランドの雄山羊亭での大佐の食欲を減退させたとしても、きっとこの実直な兵士は、フロイデンシュタットに着いたときよりもかくも魂が満ち足りてこの町から去ったことはなかったであろう。

さて、しかし、何故ポーランドの雄山羊亭の亭主は、大佐の名前にかくも畏敬の念を抱いているのか、それが明らかになった。このような客人はこの世のどの料亭にとっても一つの祝福に違いない。このような客人はキッチンや貯蔵庫を点検するために、必ずしも毎日やって来るわけではない。

ポーランドの雄山羊亭は、棒の一撃を食らった、あるいは足蹴にされた蟻の巣のような興奮状態になった。ポーランドの雄山羊亭は良い匂いがして、栄養豊かになった。ハンスとフランツィスカがフォン・ブラウ大佐の朝食に少しばかり驚いたのも無理はない。大佐は二人の空腹を過大に評価していた。

クリスマスだ、クリスマスだ。この立派な朝食の際に、フレンツヘンと大佐とをより親密になるように計らって、この二人と聖職候補生とに先回りして、海辺のグルンツェノーへ急ぐことにしよう。そこではルドルフ少尉が苛立って死ぬ思いであり、誠実なグリプスは人生が苦くなっていた。

クリスマスの陽光を浴びた海はまた心を拡張させることの出来る一つのイメージである。グルンツェノーの村にもサンタクロースは歩んでいて、船乗りの民の小屋で緑の樅の枝を振る舞っていた。煙突から冷たい空に上がる煙は、他の日々とは異なっていることを示したいかのようであった。海鳥や子供達、老人達、それに尊師ヨジーアス・ティレニウス牧師は、この日の務めを承知していた。牧師は村を歩きながら、ほとんどどの家の戸口でも立ち止まっていた。

我々が、この村を後にして、牧師の後を行きながら、領主の館に上がって、この領主の中庭に足を踏み入れると、我々は、一感嘆して凝然と立ち止まることになる。

グルンツェノーの中庭にも巨大な雪だるまが立っていて、緑の樅の木と樅の小枝から工芸的に制作された凱旋門の前で見張りをしていた。その上にはなおも暗い透視面でフレンツヘンと聖職候補生歓迎の文字が記されていた。家の召使い達は熱病に罹っているように見え、犬どもも明らかに、何か異常なことが発生していると承知していた。ゲッツ少尉の極度の興奮は限度を知らず、この状況に馴染みのない人は誰でも由々しい事態に思えたに違いない。

少尉の肉体状態はかなり改善されていて、この愚直な兵士は松葉杖の助けを借りて、詰め物入りの毛皮靴であちこち動いていた。これは大きな幸運であった。というのは車椅子では今日のような日、耐え難いことであつたらうからである。朝の四時から彼は両脚で立っていて、城砦でまだ転倒状態にあるものを正常に据えていた。その際グリプスが野蛮な家の郎党の先頭となって、彼に手を貸していて、一方大佐はフロイデンシュタットへ出掛ける準備をしていた。

グルンツェノーの館は、ハンス・ウンヴィルシュがフレンツヘンを迎えに去って以来、見ちがえるようになっていた。「女房連中を迎え入れた」のであり、女房連中が箒やブラシを持って、灰汁や石鹼を持って、お湯や水を持って、そして蛮行や罪業、恥辱に終止符を打つ最良の決意を持ってやって来た。この布告が村に届くと、この布告を運んだグリプスはほとんどこの布告の犠牲者となるころであった。女達は彼に対し、夜行性のフクロウに日中の鳥が襲いかからんばかりに、ほとんど彼を窒息させた。このフクロウは不用心に正午、自分の住み処を離れたのである。女達は自分達に告げられたことを信じようとしなかったし、信ずることが出来なかった。しかし彼は彼女達の叫び声を毛嫌いしてい

て、耳に栓をしていて、肘を上げて、圧倒的攻勢に抵抗出来なかった。幸い尊師ヨジース・ティレニウスが彼の救助に出現して、そして長い行列の女どもが、先に描写した具合に武装して屋敷にやって来たのである。そして大佐と少尉にとって、再びまた、人が小指を渡してしまった悪魔についての立派な昔からの格言の正しさが立証されたのである。[庇を貸して、母屋を取られる]。

グルンツェノーの館を磨くことは、些細なことではなかったのである。一年代が威厳を付与するとすれば、この汚れ、埃、黴、虫糞、蜘蛛の巣も確かに最高度に威厳を与えていたのであるが、しかしこれを取り除くにはただ頑強執拗な攻撃があるのみである。すべての階段で水の奔流のざわめきが聞かれ、すべての部屋で埃が舞い、女どもは呻って遠く離れた隅へ這って行き、箒を避けた。下僕達は呪い声を上げて、小屋に這い集まり、大佐と少尉は、「この件をそんな風に予想していず」、ワイン瓶の一杯詰まった籠とそれに巨大な安煙草の備蓄と共に、牧師館へ避難して、すべてのトリトン[半人半魚の神、ホラ貝を持つ]の中の最も憤慨した者としてグリプスが水の女達の間に残されて、「方舟がまた陸地に収まり次第」、その旨、「伝達する」という委託を受けていた。二日間グリプスは階段手摺りにいて、この嘆き節での感謝をホラ貝よりは、真の古いジュニーバ[オランダ製のジン]の太鼓胴の瓶に求めていた。二日目の終わりに水が引いた。そして三日目の正午頃にこの「器用貧乏」が牧師館に現れ、「家が綺麗になり、獣臭は除かれ、女房達が撤収しました」と告げた。

「御領主方、こう申しては何ですが」とグリプスは言った、「綺麗になりました。しかし以前の臭いの方がやはりましです。大佐殿、生の石鱈です、少尉殿、連隊洗浄です。とても綺麗です。一匹の犬ももはや堂々と歩けません」。

「グリプスよ」とフォン・ブラウ大佐は言った、「グリプス、人間と老兵士には何が相応しいか、神様が最も良くご存じだ。清潔さは快適な美德だ」。

「程々に、一 畏まりました、大佐殿」とグリプスは重々しく答えた。少尉は空の瓶籠と共にまた櫓に乗せられた。二人の老殿方が牧師に伴われてまた古い城砦に入り、二本足、四本足の家の住民達はその隠れていた穴から慄然とまためそめそと這い出て来た。

「べらぼうめ、べらぼうめ」と大佐はある部屋から次の部屋へ歩きながら何度も叫んだ。

「すべての昔の領主方が壁で背を向けたいことでしょう」とグリプスは嘆息した。憂鬱そうにブラウ家の先祖の諸肖像画を見上げて頷いた。

「しかしレディー方だ、グリプスよ、レディー方」と尊師ヨジース・ティレニウスは楽しげに笑って、両手をこすり合わせた。「グリプスよ、レディー方を見なされ。私が光栄に御面識を得て以来、レディー方がかくも生き生きと楽しそうに見えたことはない。まことに、ブラウよ、このように一度大掃除することが、貴殿の建物には必要だ」。

「屋敷の壁際に置かれています」とグリプスが溜め息を吐いた、「三フーデルと一シェップェルの煙草の灰が集められています。一 惨めな代物だ、しかし大した量だ」。

「王女様でも床に腰掛けられようぞ」と大佐は叫んだ。突然恍惚となっていた、「万歳、ルドルフ、これなら黒い服の娘も入って来られよう。万歳、これからグルンツェノーに日が昇る」。

少尉は、あたかも足痛風をその名前すら知らないかのように両足で立っていた。彼

は松葉杖と帽子を振って、同様に喉一杯の声で、万歳と叫んだ。しかし彼の目に涙が浮かんでいた。牧師も目を輝かせて、床から天上を見、灰色髪の両戦友を代わる代わる見ていた。

「我々の晩年に結構な地が用意されました」と彼は小声で言った、「戦友、手打ちです。我々は仲良く暮らしてきました、最後までこうありたいものです」。

三人の老雄鶏が精力的に握手して、それから大佐は、女どもは貯蔵庫を覗いてはおるまいかと尋ねて、グリプスが、その鍵は私のポケットから出ておりませんと保証して安心させた。湯気の出るポンス酒一ボウルで、グルンツェノーの清掃が祝われて、これを飲みながら、フレンツヘンの砂漠での滞在を快適にすべく、これから何を始めるべきか、戦術会議が開かれた。今回は牧師がはまり役で、彼の意見が決め手となった。彼は陸と海とを广大に見通せる角の部屋を、フレンツヘンに最も親密さを感じさせるであろう部屋として推薦した。この部屋の置くべき家具を上げて、自分の牧師館からこの部屋に寄贈すると約束した。

少尉の脳も沸騰して煮立った。彼も城砦の美化、快適性向上のために色々の提案を述べた。しかし大佐の計画同様にこの計画は大抵奇抜すぎる点が見られ、しばしば牧師の極めて機嫌の良い微笑を誘っていた。

グリプスがフロイデンシュタットへ送られて、様々な必需品を運んだ。彼は荷を高く積んだ櫓で戻って来て、趣味の良い男であることを証していたが、しかしわずかばかり「派手」過ぎると分かった。彼はグルンツェノーの館で大いに重宝され、こき使われた。女性の下働きも増員され、改善された。十二月二十三日にフレンツヘン受け入れの用意が万事整って、聖職候補生、間もなく副牧師たるハンス・ウンヴィルシュが飢餓牧師館に住む予定の小部屋も同様に極上の掃除がなされ、整えられた。

十二月二十四日の朝、大佐はフロイデンシュタットへ向かって、当地に到着する二人を迎えることになった。一方少尉と牧師、グリプスは雪だるまと凱旋門の作製を目指し、また他の重要な準備に当たった。

そわそわして落ち着かない、忙しく興奮した状態で、ゲッツ少尉はその日を過ごした。これからは自分にまたフレンツヘンが委ねられることになると思い、もはや誰も自分と哀れな娘の間に割って入ることは許されないと考えると、その都度自分の安楽椅子から高みへ押し上げられ、その都度、窓辺かドアの前まで駆け寄った。車椅子は克服された立脚点、あるいはむしろ座席点となっていた。「希望と喜びは最良の医師」とまた明らかになった。ルドルフ・ゲッツ少尉は我を忘れていた。そして彼の落ち着きのなさのため、牧師のティレニウスばかりでなく、実用的で、動揺しないグリプスでさえバランスを崩していた。

牧師が牧師の文庫から引用して、自制や自覚、辛抱を説き警告しても無駄であった。一　グリプスが、時間は「早送り出来ない」ことであり、雪だるまの頭のランタン、透視画の背後のランプ、大広間のクリスマスの樅の木の明かりは点火の用意が出来ていた、祝砲は装填され、ペーターゼンとゲルト・クラッセンは点火の準備が出来ていますと説明しても無駄であった。牧師の警告も、グルンツェノーの執事の請け合いも少尉を落ち着かせることが出来なかった。そしてまだ三時なのに、こう思い付いて、つまりフレンツヘンは若い坊主を「袖に」したかもしれない、フォン・ブラウ大佐はフロイデンシュタットから

「単身」で帰って来るかもしれないと述べて、尊師ヨジーアス・ティレニウスは、すべての雄弁術と説得術を駆使して、ルドルフ伯父の髪むしり取りを控えさせる必要があった。

それ行け。フォン・ブラウ大佐の黒馬はポーランドの雄山羊亭で、その主人同様、丁重な扱いを受けていた。その上この主人は、自ら馬小屋でその世話ぶりを監視する習慣であった。それ行け。喜ばしげにいなないて、黒馬は滑らかな走路を駆歩していて、橇の鞭の音も、大佐のハローの呼び声も威嚇と見なしていなかった。これはポーランドの雄山羊亭の亭主の惨めな受難馬車での行路とは別の行路であった。大佐は極上の気分であった。フレンツヘンはすでに彼の魂全体を勝ち取っていた。彼はフレンツヘンを自分の子供、自分の愛しい子、自分の子羊と呼んでいた。自分とルドルフ伯父と「あそこの奴」のかくも野蛮な、砂漠のねぐらに付いて来ても、そなたは決して後悔しないだろうなとこの娘に何度も尋ねていた。彼は娘が、自分、つまり大佐、それにルドルフ伯父、ティレニウス牧師をかくも長くとどや海の妖怪どもの許につれなく放置していたと叱った。彼は五分おきに聖職候補生ウンヴィルシュ殿の肋骨を突いて、彼を「出来星の若造」と呼んだ。彼はハンスの耳を引っ張って、にやりと笑って、最近少尉に述べた弁舌を思い出させた。 —
フォン・ブラウ大佐が橇を転倒させず、聖職候補生とフレンツヘンを雪の中に投げ飛ばさなかったのは、一つの奇蹟であった。

さて、赤い太陽の円盤が白いヒース[荒野]の奥に沈む瞬間となっていた。

「まあ、ご覧、ヨハネス、何と素敵なこと」とフランツィスカが叫んで、巨人塚の背後に月が昇った。夢の中でのようにハンス・ウンヴィルシュが語った。

「何人もの人間や国王がそこで虐殺されたのだ、 — 巨人達の巨人時代に」。

そして再び黄昏の中、海の声が反響した。最初は鈍くはるか遠方であったが、それから次第に間近に、より声高になった。

さて、国中のすべてのクリスマスツリーが明るく煌めく時間となった。 —
新しく、幸せな生存圏に喜びに満ちて、感謝で感動した心と共に入場する最適の時となった。すでに心配事や病気、憎悪、嫉妬、それに死神が居座ってはいないと判断されるどの家にも歓喜が天から居座っていた。まことに平和と愛とを飢餓希求しながら、故郷に凱旋する時であった。

邪悪な沼地は、この旅人達の背後にあって、馬どもは鼻息を荒くして、最後の丘の連なりを奮闘していた。ハンスはフレンツヘンに腕を回した。次第にとても寒くなって、大気はとても澄み、月はとても明るく輝き、遠くまですべての対象物が雪に覆われた大地の上に極めて明瞭に浮き出ている。

道端すぐの最後の砂丘に一人の暗い人影が見えた。 —

「こん畜生のあほんだら」とフォン・ブラウ大佐が叫んだ。手綱を全力で掴んでいた。一閃光が走り、爆音がした。これはグルンツェノー家の祝砲の一つであった。暗い人影は、橇が近付いたら知らせようグリップスが配置していた歩哨であった。

駄馬どもは棒立ちになって、蹴った。馬を宥めるには、馬に詳しい大佐のすべての手管が必要になった。 —

「出て来い、誰がぶっ放したのだ」と大佐は叫んだ。暗い人影が素早く橇まで駆けつけて来て、名乗った。

「グルンツェノー万歳だ」と大佐は叫んだ。砂丘の屋根の向こう側から一つの狼煙

が上がった。郎党を連れてグリプスが同様に名乗り出た。 — 櫓は道の高みに達した。月光の中の白い岸边、海、それにグルンツェノーの明るい小屋の窓がフレンツヘンの視界の前にあった。

「さあ、着いたぞ、我が家によろこそだ、愛しい子」と大佐は叫んで、若い娘に再度衷心からの接吻をして、これに対し娘はまたも拒まなかった。砂丘を下ることになった。 — 村を櫓の鈴の音が響いた。 — クリスマスだ、クリスマス。 — すべての窓からクリスマスの光輝と明かりが見られた。

グルンツェノーの屋敷の門は大きく開かれていた。ハンス・ウンヴィルシュが以前とても長くノックしなければならなかった門である。憤然と雪だるまの目や口からランタンが輝いていた。 — 歓迎[よろこそ]と大道芸人グリプスの凱旋門の炎の文字が叫んでいた。 — よろこそと屋敷の召使い達の粗野な喉が吠えた。祝砲が音高く放たれ、犬どもが吠えた。 — ルドルフ・ゲッツ少尉は、フレンツヘンを両腕に抱いて、ほとんど圧死、窒息死させるところであった。尊師ヨジーアス・ティレニウスは聖職候補生ウンヴィルシュを我が物として、彼の耳許で叫んだ、

「いや、はや、ヨハネス・ウンヴィルシュの汗の結晶と十字架よ、いや、はや、いや、はや、あれが彼女か、あれが彼女か、ハンス、でかした、あれが彼女か」。

「はい、はい、あれが彼女です」とハンス・ウンヴィルシュは叫んだ。そしてルドルフ少尉は同じ言葉を繰り返して、フレンツヘンをグルンツェノーの老牧師の両腕に預けた。

大佐は一人一人に歩み寄って、友と握手して、ほとんど手を振り切りそうであった。グリプスにはやりと笑って、口が両耳まで裂けそうであり、感動した端役として一同を照らしていた。 —

そこはグルンツェノー家の大きな古い広間であった。二台の巨大なオランダ製タイル張り暖炉が燃えていて、 — 巨大なクリスマスツリーが数百もの蠟の明かりを受けて輝いていた。 — クリスマスだ、クリスマス。このようなクリスマス祭をグルンツェノー一家は数百年前から体験したことがなかった。

このクリスマスの樅の木の下に、フレンツヘン・ゲッツは座っていた。三人の老いた男達に囲まれていて、愛らしい光景であった。壁紙の年代物の黒ずんだ猟師の絵は、微笑しているように見えた。その暗い額縁の中から、フォン・ブラウ家の厳めしい殿方達や可愛らしい夫人達が微笑しており、ハンス・ウンヴィルシュも微笑していた、しかし涙越しであった。

さて、大いに話されることになった。 — 過去のこと将来のこと、 — しかし今はフォン・ブラウ大佐が言うように、万のこと、生死のために時間を見いだす必要がある。クリスマスだ、クリスマス。 — バルト海沿いのグルンツェノーのクリスマスツリーの下にフレンツヘン。聖職候補生が、翌朝グリーンゼ路地の五階の部屋で目覚めなければ、彼の幸福の輪は閉ざされることであろう。

第十章

海が翌朝、ハンス・ウンヴィルシュの窓前でざわめいて波打っていて、大都会のざ

わめきではなかった。しかし彼は最初それが信じられなかった。彼が目覚める随分前から海は彼の夢の中に語りかけていた。彼は奇妙な夢を見た。夜の間ずっと彼は謎めいたざわめく物音に身構えていた。この音は遠方で生じていて、こちらへ高く打ち寄せて来て、彼を窒息させそうであった。一晩中彼は何千また何千ものこの神秘的何ものか、この混乱と闘った。この混乱の中で、自分自身の声は最も荒れ狂うハリケーンのとき、子供の救いを求める声同様に響いた。彼がようやく目覚めて、自分は海の声を聞いているのであって、自分が辿って来た生涯の道中の世間の物音を聞いているのではないと疑念の余地がもはやなくなったとき、それは一つの救済のようであった。

自分はグルンツェノーの飢餓牧師館の屋根の下にいて、グリーンゼ路地とか、それどころか公園通りの家にいるのではないと、確信を抱いた後、それでもまだ彼は長いこと目を閉ざして、より安心な幸せという快適な感情や、甘く物憂い想念や思い出に浸っていた。これらの想念はますます緊密に先の感情と結び付いていた。人間に対しその獲得を示してくれる瞬間は、また極めて鮮明にその損失も認識するよう導く。この最良の時には、いつも何と多くの大切な心や温かい手が我々の許から失われていることか。

ハンスが目覚めたとき、まだ全く暗かった。ただ雪だけが少しばかり夜の暗さを照らしていた。ハンスは死者達の声や蘇らすために、死者達の影に血を注ぐ必要はなかった。彼は死者達に呼びかける必要はなかった。死者達は自発的にやって来た。しかし彼はこのクリスマスの朝、彼らに弁明した。

彼の精神的目の前に、猫背の痩せた男、温和な真面目で快活な顔の者が立っていた。 — アントン・ウンヴィルシュ親方で、彼は明かりへの大きな飢餓を抱いていて、その息子の中に、自分の実存、自分の願望と希望の完成を見たいと願っていた。

「いや、父上」とヨハネスは言った、「私は父上が私に示された道を歩きました。そして真実を掴むために、厳しく勉強に励みました。私は大いに迷って、度々途方に暮れたり、意気消沈したりしました。 — 私は絶えず歩いて前進して行くことは出来なかった。世間は私にとって、余りに大きな驚異に満ちていて、それで私は他の人々のように大胆不敵にそのヴェールや外皮を掴むことは出来なかった。 — 世間は私にとって、余りに真面目で厳かで、それで私はこの世間を他の人々のように微笑して近寄っては行けなかった。父上、我々のかくも貧しく、卑しい家の出身の者は、その最初の道りをただ臆しておずおずと進むとしても、また偽りの幻影に惑わされて、鬼火に誘われるとしても、これは非難されるべきことではありません。父上、我々のように底辺の生まれの者は、善きことにしろ、悪しきことにしろ、強靱な心を持つ必要があります。それは、最初の一歩の後、上昇したら、また後退することのないよう、そして底辺の中、その薄暗い人生を更に続けることのないようするためです。この者の獲得した最初の知識や経験は、ただこの者の本性の調和を破壊することのみ貢献しました。それらの知識はこの者を幸福にしなかった。他のすべての懐疑に加えて、それらは更に自分自身に対する懐疑も目覚めさせました。いや、父上よ、父上。正しい人間になること、そしてすべての物事に正しい尺度を与えることは、難しいことです。しかしその憧れを持って底辺に生まれた者は、むしろ頂上と下賤の間で目覚めて、自らにとって上流も下流も等しく未知で、無関心のままである者よりも、むしろ速やかに到着するものです。底辺から人類の解放者は上がって来ます。そして泉のように、深みから来て、陸地を豊饒にするように、そのように人類の耕作地は

永遠に底辺から新鮮化されます。いや、父上、人間にとってこの上方への痛々しい努力より他にましなものはありません。この努力なしでは、人間はいつまでの大地のままで、大地に隷属しています。この努力の中、この努力を通じて、人間は塵の隷属状態から身を起し、すべての天上的諸力に対し手を差し出します。この努力の中、人間はほんのわずかな土塊の上に、ごく狭小な圏内で、無限の領域の支配者として立ちます。懐疑もその生涯での獲得物と言えます。痛みもとても高貴なもので、――しばしば幸福や歓喜よりも高貴です。父上、私はあ痛みの中、わが道を歩きました。しかし私は真実を発見しました。真正なもの無益なものとを、現実と仮象とを区別することを私は学びました。私はもはや物事に恐れません。私の側には愛があるからです。――父上、息子に対しその将来の道を祝福してください。そしてこの息子をこれまで導いて来た飢餓が、息子の存命の間、息子の許から去ることのないよう、息子のために祈ってください」。

すべての自分の故人達と、ハンス・ウンヴィルシュはこの薄暗いクリスマスの朝、白み始める前に、話し合った。故人達は長い列となって通り過ぎた。彼は各人に、自分がその人から人生の道での贈り物として受け取ったものに対し感謝した。母親と小さなゾフィー、貧民教師のカール・ジルバーレップフェル、シュロッターベックお婆さん、それに伯父のニコラウス・グリュエネバウムが通り過ぎて行き、彼に微笑して頷いた。これは不思議なことではない。しかしほとんど不思議に思えたのは、他に幾人もの人々が暗闇から出現して、彼の成長への自らの関与の分を要求したことである。いかに多くの地に彼の成長の歴史は関係していて、しばしばすべての魂の励起の出発点はいかに遠くの地に淵源していることか、ほとんど一つの不思議[驚異]であった。この瞬間にようやくハンスは、いかに自分のこれまでの人生は豊かなものであったか、正しく理解した。その豊かさを彼は自分の青春の凋落した世界から、シュロッターベックお婆さんと伯父の共に凋落した新町の世界から、また自分の遍歴時代の凋落した世界から共にバルト海沿岸でのグルンツェノーの新しい生活へ引き継いでいるものである。絶えず新たな、絶えず交替する映像や形姿が、通り過ぎ、上昇して行った。そのとき、グルンツェノーの教会の鐘が鳴り始めた。

新しい故郷、グルンツェノーの鐘である。クリスマスの教会の鐘である。自分の臥所に真っ直ぐにハンス・ウンヴィルシュは座っていて、聞き耳を立てた。――彼の心臓は動悸し、すべての脈拍が脈打った。心臓と脳髄のすべての血が迫って来た。――いや、フレンツヘン、フレンツヘン。

すべての幼年時代の感情がこの男の胸の中で目覚めて来た。彼は階段を下りる前に、跪いて数分間、黙って顔を両手の中に隠した。ドアが自分の背後で開いたとき、彼はそれを耳にしていなかった。

黒い説教者の服を着て、老ヨジーアスが寝室に入って来て、自分が持っていた明かりを聖職候補生の明かりの横にこっそりと置いた。小鐘が鳴る間、そしてヨハネス・ウンヴィルシュがベッドの横で跪いている間、彼は動かずに立っていた。鐘が黙して、若い家の同居人が頭を再び上げたとき、ヨジーアスは手を彼の肩に置き、彼の許に屈み込んで、感動して言った。

「このような鐘の音の許で、新しい仕事、新しい心配事、新しい生活に目覚めることは、幸せな合図だ。我が親愛なる、親愛なる息子よ、ようこそ、この貧しい、しかし豊かな、この限定されているが、しかし無限の影響圏の中によくぞ参った。この浜辺に、こ

の小屋の下に、この屋根の下に、神の力と祝福の宿らんことを、神がそなたの幸福を守り給い、苦しみのときもそなたを祝福されんことを」。

ハンスが灰色髪の方の側で階段を上ったとき、二回目の鐘が鳴った。この階段は牧師館の裏側を通過して、村の教会墓地に通じていた。墓地を横切って、道は教会に達して、白い墓塚や黒い十字架の間に、これらはまたすべて雪の帽子を被っていたが、二人の聖職者は立ち止まって、村の方を振り返って見つめた。暗闇の中、海がざわめいていた。しかし村ではほとんどの窓辺に明かりが見られて、活気ある生命が教会のこの道では感じられた。その小屋から漁師の人々が教会へ参詣に来た。一 老人達や男達、女達、子供達である。彼らはランタンや明かりを持ってやって来て、大人達や中年の者達が通りすがりに、親密な畏敬の作法で、彼らの牧師に挨拶をすると、ほとんどどの子供も牧師に近寄って、牧師に手を差し出した。しかし牧師は彼らの名前をすべて承知していて、彼らのささやかな短い生活史を知っていて、ほとんどどの子供に対してもそれぞれ異なる愛撫の言葉をかけていた。時々大人の一人がその途次躊躇ったり、あるいは脇の方を向いたりして、自分のランタンを下ろして、雪の積もった墓塚の一つに屈み込んでいた。するとグルンツェノーの牧師は、墓参者の側に立って、彼らに小声で話しかけ、星々が黒い冬の天で微笑していた。あたかも海はより穏やかに打ち寄せるかのように思われた。

グルンツェノーの寺男が三回目、鐘の紐を引いた。再びかなり大勢のグループが教会墓地門に入って来た。このときランタンを差し出していたのはグリプスであった。騎士的にフォン・ブラウ大佐がその廷臣達の先頭に立って、フレンツヘンを導いていて、ハンス・ウンヴィルシュが大佐の前に立って、グリプスがそのランタンを持ち上げて、その挨拶を照らし出すと、こう言った。

「人間は、自分がどんなに幸せであるか言えないとき、そんな風に見えるものだ。聖職候補生殿、ここに貴殿のフレンツヘンがいる。お二人に楽しい祭日と多くの喜びを願っている」。

ハンスとフレンツヘンは手に手を取り合って、グルンツェノーの他の人々と一緒に小さな教会の中に入った。そこではすでに寺男がオルガンの前に座っていた。短いその路上で、フランツィスカは婚約者に対し、ハンスは花嫁に対し、実際自分達はどんな気分か言えなかった。しかし二人とも分かっていた。しかしフレンツヘンはルドルフ伯父に伯父からの極上の挨拶を予約していた。伯父は城砦のクリスマスツリーの下、パイプをくわえて座っていて、他の皆と同様、立派にクリスマスの考えを抱いていた。

多分に数百もの明かりが小さな教会を照らしていた。誰もが入場するとき、自分のランプを吹き消さず、不思議に厳かにこの海辺の教区の集会は思われた。

祭壇と説教壇のすぐ近くの最前列のベンチの一つに聖職候補生ウンヴィルシュはフレンツヘンとフォン・ブラウ大佐の横に座って、獵師達の粗いコーラスの中、古いクリスマスの歌を最後まで歌った。するとオルガンと歌声の最後の音節の間に、尊師ヨジーアス・ティレニウスが説教壇に登場して、そのクリスマスの説教を行った。遂に日焼けした、嵐や風雪で鍛えられた男達の顔が皆、女達の真面目な顔が皆、子供達の目が皆、老いた誠実な助言者、慰安者に対して持ち上げられた。ハンスが大都市で聴講した著名で愛好されている雄弁家の誰一人として、大学でハンスに対し多くの立派な教義を授けてくれた有名な教授の誰一人として、グルンツェノーの飢餓牧師館のこの老人よりも的確な演説を行う

ことが出来なかったであろう。この老人は自分の前任者の文庫で得心することは出来ず、神学の近代的学問は七つの封印をされた本として不案内のままであったのである。

現世では何もそれに勝るものはない、天使達のかの挨拶で彼は教区民に挨拶をした、「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」[ルカ、2,14]。それから彼は皆に対し、青年並びに高齢者、老人達並びに子供達に、尊い祭日に当たり、多幸を祈った。以前ハンス・ウンヴィルシュに対し、海が牧師の言葉に混入して響くとき、それは珍しいことになるかと述べたのは、その通りのことであった。彼は一年前このクリスマス祝ってから生じた善きこと、悪しきことについて語った。彼は喪中の者達に対し、また慶事の者達に対し一言述べた。彼は自分の比喻を遠い陸地の、今やはり説教壇に立っている同僚牧師のように、農夫の仕事からその比喻を援用できなかった。彼は播種や開花、結実、衰枯について語れなかった。 — 海のざわめきが彼の言葉にあった。

彼は今異国に船出している教区民の縁者達について語った。彼らに関しては、生きているのか死んでいるのかその縁者達は分からないのである。北極から南極に至る地球が彼の説教での言及空間でなければならなかった。彼は数年前から家でその席が欠けたままになっている行方不明者達について語り、二人の流涕している母親の名前を呼び、そしてこの世が存在する限り、誰も、誰も行方不明にはならないと約束して、二人を慰めた。神は海をその窪んだ手に保持していると書かれていますから、と。彼はいつか皆が、全員がその下に集うであろう永遠の大きなクリスマスツリーについて語った。

ハンス・ウンヴィルシュは、自分がグリーンゼ路地で書こうと思っていた飢餓説教のことを思い出した。それを印刷して名を上げ、数千人の者達をそれで感動させ、昂揚させるつもりであった。彼はこの老人の演説を前に頭を垂れた。この演説はきっと印刷されはしなかったろうが、しかし聞き手の最深部の心臓にまで浸透して行くものであった。フレンツヘンは彼の側で泣いた。フォン・ブラウ大佐は時々、物思いに沈んだ咳払いをして、その灰色髭の中で呟いていた。漁師の民は溜め息を吐いて、嗚咽した。 — 聖職候補生ウンヴィルシュは、自分の原稿への思い出やグリーンゼ路地のことを更に思い浮かべる暇を有しなかった。

尊師ヨジーアス・ティレニウスはその村の各々の小屋のクリスマスツリーに歩み寄った。そして今や彼は突然、世界史の木の影に立っていて、その木の枝を通じて、告知の星がベツレヘムの飼葉桶を照らし出すことになった。単純な、この上なく感動的なやり方で、彼は教区民に語った。天使達はその挨拶を天上から下界にもたらしたとき、地上ではどのような具合であったかを。彼はローマの町について語り、ローマの皇帝アウグストゥス、気位の高い神殿、気位の高い賢人達や兵士達、詩人達について語った。彼は当時いかなる太陽や月、すべての星座が、今日と同様に恵み豊かにその軌道を描いていたか、いかに地球はその果実を運び、海はその宝物を今と同様、善意に恵んでいたか語った。彼は当時人々はその時代どのような制度を設けていたか、物語った。彼はいかに関税が要求され、支払われていたか、いかに湖水や河川、海は船で一杯で、街道には遍歴者が、市場には商人達が一杯いたか、物語った。彼は諸国家の宝物がどのような行き来で交易されていたか報告し、それから、 — それから彼はこの世の大いなる飢餓について語った。

立派な諸神殿の美しい神々の像は、何の生命もない仮面だったのです。そしてこれらに仕える司祭達は、これらと、自分達の前で跪いている民衆とを嘲っていました。しか

し賢人達や賢い者達は、神々と司祭達のことを恥じていました。世界はもはや支点のない一つの混乱状態に陥っていました。人間は自分の心の中にも、家の中にも、外の市場でも平和を見いだせなかったのです。ローマの皇帝世界では、人類は自らの許で失われていて、人類は、その出血して砕かれた肢体を覆っている緋色の外套の下、鎖に繋がれていました。天は人類の上に暗くかかっている、人類の黄金の天冠から発せられる明かりは、死神の夜の中の色褪せた光明に過ぎなかったのです。生命のすべての華美、運動にもかかわらず、大地は、天地創造の言葉以前のように、荒涼として空虚であったのです。尊師ヨジーアス・ティレニウスは、これらのことをその教区民の理解する言葉で語った。

誰も敢えて動こうとしなかった。ただ聴講者達のより速い息遣いの音のみが聞こえた。そしてほぼ百歳になろうかという曾祖母のマルガレーテ・ヨーレンゼン膝から、この女性のみが集会の中で微睡んでいて、説教者の以前の命令で、どんな場合でも目覚めさせることを禁じられていて、大きな賛美歌の本が滑り落ちて、床に落ちたとき、どの人の心にも突然の驚きのようなものが走って、鍛え抜かれた船乗り達も縮み上がった。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」[ルカ、2, 14]。あたかもこの言葉が、昔全人類の束縛を解いたように、グルンツェノーの民を縛っていた呪縛を解いたかのようであった。

ベツレヘムの小屋の上に救済の星が見えました。救世主が飢餓のこの世に生まれました。人類の慰謝の息子で、神の子、その母の罪を自ら引き受ける定めの子が出現したのです。畑から哀れな羊飼いが駆けてやって来て、その後ようやく国王達や賢人達が遅れて続くのですが、飼いや葉桶の子供に挨拶しました。この子供はアウグストゥス皇帝が作成させたローマ帝国の住民台帳に登録され得たのです。それから時が満ちて、神の帝国が出現したのです。「神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである」[ヨハネ、6, 33]、それで飢餓の人類は両手をそのパンの方へ差し出しました。とても陰気で空虚であった天が、地上の子ら、民の上で開きました。すべての民衆がその偉大な光を目にしました。一 人類は卑下したその頭から王冠を投げ、その両肩から緋色の外套を脱ぎました。人類はその出血している傷口、その束縛されている砕かれた肢体をもはや恥ずかしく思わなくなり、人類は跪き、耳を澄ました。「真実」、と日の出の地から歓呼の聲がしました。「自由」、と日没の地から歓呼の聲がしました。一 「愛」、とダヴィデの種族の娘マリアとナザレの大工、ヨゼフとが、その世に生まれた子供を羊飼いや達に見せているその小屋の周りで天使達が歌いました。尊師ヨジーアス・ティレニウスは、今やその御子を村の子供達に示した。というのはクリスマス祭は子供の祭典であって、子供は最初の真実の痛みを思いを巡らせられないうちは、崇高な復活祭も縁遠いものに留まるからである。しかし老説教家が子供達に語る言葉には、新しい一日が薄明かりの状態で見られた。小さな教会の窓の前は白み始めていた。そしてランプや蠟燭の明かりは、冬の空に昇って行く薔薇色の微光を前にすると色褪せた。再びオルガンが響いて、グルンツェノーの教区民はクリスマスの歌の最終詩行を歌った。教会は終了した。

ハンスとフレンツヘンは牧師と老犬佐の側、教会墓地に立っていた。そしてまた村へ下って行くために、二人の側を通り過ぎて行くすべてのグルンツェノー人が二人に会釈したり、あるいは二人に手を差し出して、中央にいる二人によろこそと声をかけるために近寄って来たりもした。天は次第に赤みを増して来た。村の明かりはこの薄明かりの中、

教会の明かり同様消えた。オルガンが黙して、寺男が、これも微笑して内気に、聖職候補生に対して挨拶するためにやって来た。朝となった。しかし海の声は消えて行かなかった。

村の最後の住民達も遠ざかった。尊師ヨジーアス・ティレニウスは婚約のカップルを見て、それから言った。

「大佐殿、参りましょう。いつものように貴方の腕を私に任せる必要があります。若い二人はその道をきっと二人だけで進みたかろう」。

フォン・ブラウ大佐はハンスとフレンツヘンを見て、老いた友の手を自分の腕の下へ導いた。

牧師とフォン・ブラウ大佐も教会墓地から下りて行った。 — ハンスとフレンツヘンは二人っきりで雪に覆われた墓塚の間に立っていた。二人は立っていて、互いにしっかりと抱き合っていた。同時に二人は、二人ともいつかこの小さな教会墓地に横たわり眠るであろうと同じ考えを抱いていた。しかし二人とも微笑して、去ることに憧れていなかった。

仕事をして、愛すること、と二人の心の中で震えが走った。二人はこの両者が委ねられていると了解した。朝は東から晴れた。海の上の霧は散った。 — 海は自由について歌い、太陽は真実について歌った。世間は、かつてモーゼス・フロイデンシュタインと呼ばれていたテオフィル・シュタイン博士のものではないのだ。貧しいグルンツェノーの墓塚の上にヨハネスとフランツィスカは立っていて、愛し合う中で、生をも死をも恐れていなかった。

第十一章

秋である。

すべての高台に
私は登りたいと思い、
すべての底辺に
私は降りて行きたいと思った。
近場と遠方とを
私は訪ねたかったし、
極秘の驚異を
私は確かめたかった。
強烈な憧憬、
無限の彷徨、
永遠の努力の中、
決して到達出来ず、
これが私の人生だった。

さて事がなされた、 —
すべての空間から
私は優しい夢を
獲得した。
今や広大な物事が
狭小な指輪の中に
最も静かな心の中に
閉じ込められた。
明るい青色のヴェールが
こっそりと沈んで来た。
愛の織りなす
黄金の魔法圈、
これが私の人生だ。

これらの韻文は、散文の途切れた文章や、あらゆる種類の思考断片、ギリシア語やヘブライ語の片言隻句やその他のペン字草書と共に同一紙片に記されたものである。しか

しこの紙片は、副牧師ウンヴィルシュの書き物机上にあって、これを前にして副牧師は座っていて、片手で額を支えて、開いた窓を通じて、薄いヴェールに包まれた陽光の輝く海を眺めており、海上では白い斑点が、一 つまりグルンツェノーの漁師の小舟の帆が一 あちこちに滑っていた。

秋である。

ヴェールを被せられた教会墓地から今年のクリスマスの朝、ハンスとフレンツヘンは仕事と愛との静かで幸福な時節に降りて来た。グルンツェノーの荘園では、若い娘の愛らしい影響で生活がはなはだ変化して、良き利点となっていた。そしてこの野蛮な民は、やがてこの令嬢のためとあらば、水難も火災も恐れなくなったであろう。額縁の中の肖像画の老殿方達はその薄暗くなった顔を壁の方に向けなくなっていた。グリプスが今や、この殿方らは、側にその夫人方が掛かっているかのように、微笑されていますと主張したとしても、さほど間違いではなかったろう。グリプスはこの村や城砦のすべての住民達同様にフレンツヘンの呪縛に陥っていた。彼の言葉では、彼は「魅惑されて」いた。そして我々は彼を称えて、こう言わなければならなかったであろう、彼はこの魔力に憤然と喜んで耐えて、そしてフレンツヘンの声が依頼するように、あるいは感謝しているように響くとき、またその小さな手で合図するときにして、彼がその軍人的重々しさを失念することはなかった、と。

このような具合に従者達が魔法的影響下に陥っていたとすれば、いかにその生活が大佐と伯父にとって、この「娘」を通じて容易なものとなったか、誰でも容易に察せよう。フォン・ブラウ大佐はまたしても「そんな風に思っていなかった」。彼は幸せで、ただ少しばかり少尉に嫉妬していた。少尉は幸せ過ぎたのである。いかに優しくこの両老軍人達がフレンツヘンと付き合い、いかに一方が他方を配慮や注目の点で出し抜こうと考えていたか、そして両人がグルンツェノーの館をこの娘のために、「別の地へ移す」ことのないよう、いかにこの「愛娘」は抵抗しなければならなかったことか、こうしたことを見たり、感じたりすることは感動的であった。大佐の頭は、いかにしたらこの砂漠のねぐらが楽園に生まれ変わるか、その奇妙極まる計画や提案でぶんぶん呻っていた。夜ごとに彼は「何か」を思い付いて、毎朝彼は「何か」を吐き出した。これは彼が考えるほどには、必ずしもとても実用的で、快適、容易に遂行できるものではなかった。グリプスは手先の器用な男で、「器用貧乏」であったが、この時ほど自分の主人から重宝がられたことはなかった。絵画、日曜大工、園芸、かなり高度の装飾技術への彼の才能は毎回要請された。フォン・ブラウ大佐は自ら色彩センスを磨いて、あり得ない事物を対象に出来るだけカラフルに塗り上げた。彼の城砦がこのときほど自分の持ち家であったことはなかった。大佐はフロイデンシュタットのポーランドの雄山羊亭を忘れたばかりでなく、それどころかそのねぐらにいる九人殺害者達をも忘れた。

ルドルフ少尉の毛皮靴は喫煙室に運ばれ、衣蛾から守られることになった。車椅子は物置にまで転がされた。足痛風は外出して、その歴訪がより相応しい人々の許へ越して行った。少尉は青年のように元気よく辺りを行軍して、自分のフレンツヘンと自分の生活を喜んだ。快活な現在となって、彼は過去のすべての陰鬱なことをあっさり忘れた。彼は自分の弟のことを哀悼すると同時にその救済のために祈った。クレオーフェアについて彼は余り語らず、しかし言及するときには、決して憎悪を込めず、遺憾に思いながら、穏や

かに許容していた。ただ義理の妹やテオフィルの名前が呼ばれると、彼は激昂して、憤怒、憤懣、軽蔑を露わにした。しかしグルンツェノーでは、未亡人の枢密顧問官ゲッツ夫人、旧姓リヒテンハーン、並びにシュタイン博士について余り話されなかった。この老紳士の、その姪の婚約者に対する感情や吐露は、最初とても変わりやすい性質のもので、ようやく夏至の頃に調和の取れた情緒に落ち着いた。彼は少しばかり大佐に対し嫉妬していたとすれば、哀れなハンスに対してははなはだ嫉妬していた。この抜け目ない老公がとても上手に賭けに挿入したカルタをととても輝かしく利用して微笑している神は、きっとまたルドルフ少尉の示す魂の過程に微笑していることであろう。果てしもない感嘆に続いて、自分自身と世間に対する息の長い、懐疑的驚きが見られた。起きたことは変更されがたいという賢明な洞察に続いて、周知の哲学的試み、つまり事物を適正かつ最良の明かりの下で眺める試みがあった。最初の昼夜等分[春分の日]の頃、ようやくルドルフ伯父は自分の証明力が進化してきて、自分は威勢良く、自らと世間に対し、こう主張できようと言えるまでになった、つまり自分が聖職候補生ハンス・ウンヴィルシュをコーレナウから連れて来て、弟の家に案内したのは、ハンスがフレンツヘンに、そしてフレンツヘンがハンスに惚れるようにするためであった、と。彼がこのようにして自己克服の梯子を登って行くと、その若い一年の日中が長く増大するにつれ、彼の陽気さと自己満足も生長し、それで夏至のとき以降、同様にこの両者はもはや増大しなくなった。

秋である。 — この章の冒頭にあるその詩句の中でハンス・ウンヴィルシュは、本来、我々がバルト海沿岸での彼の新生について報告できることすべてを語っている。しかしたとえ彼の人生が、「狭小な指輪」に縮んだとしても、しかし窮屈な人生ではなかった。彼はそれまでとても正当で甲斐ある仕事に懂れていて、今や彼はその立派な、充実した一部に到達していて、真の男なら果たすべきである具合に自分の義務を果たしていた。いとも尊い上級宗教局と政府が彼の副牧師職を認めた後、老人のティレニウスは微笑して、彼の職責の一部を彼の背中に委ねた。ハンス・ウンヴィルシュはまだこれほど率直に責務を引き受けたことがなかった。彼は内陸育ちの男であったが、船乗りの民は彼の説教に満足して、彼を好いてくれた。彼は初めて子供を洗礼し、大地に初めて死体を埋葬した。彼は初めてカップルを祝福し、尊師ヨジーアス・ティレニウスに、彼 — 尊師ヨジーアスも、 — グルンツェノーの人々も、彼の、 — つまり副牧師の言うことが理解できなかったと指摘されるようなことはほんの稀にしかなかった。

グルンツェノーに彼が住んだ最初の祝福された一年のような、このような春とか夏を彼はまだ体験したことがなかった。どんなに素晴らしい夢でも、バルト海沿岸での彼の婚約者身分のこれらの黄金の日々の現実に及ばなかった。彼は人生を明瞭に勇敢に覗き込んだ。自然と運命とが彼の性格の中に設定したすべての不確かなもの、揺れ動くものを彼は男性的意志で投げ棄てようとした。彼は多くの幸運のお蔭に負っていたが、誠実な努力やごく真面目な尽力で更に多くのことに値するようになった。彼の青春時代の不確かな飢餓は、今や落ち着いて、熟慮されて、静かに持続する努力に変わった。この努力は、数百万人に作用しながら、人類のその軌道を保ち、更に導くものである。ヨハネス・ウンヴィルシュは多分、良いことであれ、悪いことであれ、人生を熟知して来たことであろう。今や彼の遍歴して来た生活圏は、すべての愛しい形姿や、恐ろしい形姿と共に沈んでしまった。彼は今や、彼の活動が満たすべきこの指輪の中に立っていた。もはや自分を故郷の街に縛

り付ける束縛はないこと、そして自分はクレッペル通りから新しい生活に甘美で物憂い思い出と自分の父親のテーブル上に掛かっていた輝くガラス玉の他には何も持ち込めなかったということは、彼にとってどうでも良いことではなかった。このガラス玉が今やその光輝を、アントン・ウンヴィルシュ親方がこの地上での至高の生活についての夢想の中で築いていた生活の上に放っていた。しかし人間のどの世代であれ、次の世代の十分先にまで到達して、その世代が自分の理想が実現しているのを目にすることはないし、その理想がなお十全たる理想となっていることはめったにしかない。

秋である。

春の日々や夏の日々が過ぎた。しかし秋の陽光は以前同様に愛らしく輝いて、陸と海はその陽光を喜んでいた。しかし開いた窓辺の副牧師は、どんなに優美であっても、その陽光に注意を向ける必要のない権利を有していた。今日は九月七日で、明日は九月八日、彼の結婚式の日である。彼はその韻文を、異なる思考片言隻句の間に収めたその瞬間の時に仕上げたのではなかった。

牧師ティレニウスが結婚式の日を選んで、定めていた。ティレニウス牧師がルドルフ伯父とフォン・ブラウ大佐から、この両老殿方達が同意を撤回しようと思ひ、フレンツヘンをその城砦から出そうとしないときに、その同意を十分策謀的に、外交官的に誘い出し、固定させたのであった。牧師ティレニウスは、使徒的命題、「だから監督は、一人の妻の夫であり」[テモテ、3,2]を援用して、この両頑固な、片意地張った軍人達に自分の主張を通したのであった。フレンツヘンはグルンツェノー一家を去って、飢餓牧師館に移らなければならないと定められた。一 実際、フレンツヘンも同様にそれに同意をしたのであった。これが根本的にはやはり最も大事であった。

秋である。春や夏のすべての歓喜は、秋が約束している浄福と比べると何ほどのものであろう。国のすべての渡り鳥が留まって、結婚式と蜜月とを一緒に祝わなければならないかのように思われた。

グルンツェノーの館が変更しがたいものへ帰依した後は、この必然性から無限の楽しみ事が引き出され、すべてを放擲した熱意と共に、この祭日への準備に邁進した。大佐は日夜熱に浮かされた状態で、少尉も同様であった。しかしグリプスはまさに偉大であった。何でもこなす男であった。

「誰がこの男の賢い手を十分に称えているか」。あるときは、この手は余りに「理解のとろい」少年馬丁に「びんたを」食らわしていた。あるときは熟慮して一本の釘を打ち込み、自らくねっている花綵模様がそれに可愛く掛かるようにした。グリプスはその遠征で若干のことを習得していたわけである。

村でも同様に興奮していた。老いも若きも、自分に出来ることをして、九月八日をグルンツェノーの年代記での記念日にしようとした。一 その何週も前から夫人達や少女達が動き始めていて、その何週も前から寺男は、愛する若者二人のために結婚カンタータを練習していて、内的緊張の余り、また成功と栄光の、あるいは失敗と恥辱、悲惨の活発過ぎる夢想の余り、ほとんど余り眠れない状態に陥っていた。

導師ヨジーアス・ティレニウスは結婚式辞を仕上げている。彼は自分自身の生活で、最も美しい、また最も悲しくもある思い出を、彼の心の全体を、善良で、老いた、一杯の心をその式辞のために用いたので、起草せずとも、また暗記しなくても、立派なものとな

った。

九月七日にすべての用意が完了した。グルンツェノーの館では料理も飲み物も揃っていた。門や柱は花輪で飾られ、ドアは開け放たれ、結婚式の歓声を呼び込み、花嫁を追い出すことになっていた。

明るい青色のヴェールが
こっそりと沈んで来た。
愛の織りなす
黄金の魔法圈、
これが私の人生だ。

と新郎は飢餓牧師館の小書齋で紙片に引っ掻いて記していた。すべてが整って、フレンツヘンはこっそりと手を婚約者の肩に置いて、彼の前の紙片を微笑して覗き、彼を牧師館から、海の浜辺の彼女のお気に入りの場所に案内した。

そこは一つの高台で、そこでは岩と動きやすい砂丘の砂の間に、低い灌木や、何本かの風で奇妙な形に千切れたかなり高い木々がめげずに何とかその生長を、固い土壌や吹き付ける砂や嵐に抵抗して勝ち取っているのであった。人気のない地点で、陸や海と、雲やカモメと、更には内密の考えと十分対話を行える場所であった。ここにグリプスは令嬢のために簡素な席を造っていて、ここにハンス・ウンヴィルシュとフランツィスカ・ゲッツは二人の結婚式の前日の夕方、座って、二人の運命やクレオーフェアについて語り、夕陽の沈むのを眺めた。

二人は大いにクレオーフェアについて語り、その間、海を眺めた。海の上には美しく輝かしい一日の後、霧が立ちこめていた。哀れなクレオーフェアは行方不明であった。フレンツヘンが一年の経過の中で彼女宛に書き送った手紙に対し、そのどの一つにも返事がなかった。婚約者二人は、彼女について何も知らなかった。 — 二人がまさにこの夕べ、絶えず新たに彼女の肖像が眼前に浮かんで来るのを見て、二人の考えが自らの幸福に留まろうとしなかったのは、奇妙なことであった。ハンスとフランツィスカは、クレオーフェア・シュタインを乗せた船が、波の上に立ち込めるこの灰色の霧の背後に浮かんでいることを知らなかった。導師ヨジーアス・ティレニウスが翌日、二人の手を時間と永遠のために組み合わせるといふ時、クレオーフェアが海上を進んでいるということを二人は知らなかった。

九月八日、太陽は一日中、姿を見せようとしなかった。太陽はその前日の夕方、船乗りの言葉では、袋の中に没していた。これは翌日の陰気な天候を意味していた。そよとも風が動かない蒸し暑い一日となって、この日には同じ陰鬱な灰色が天と地を覆い、このような日には、結婚式の日でなかったならば、人々はしたたかな驟雨を願いたくなつたろう。

フレンツヘンの花嫁の冠には、雨は降らなかった。牧師ティレニウスの的確な弁舌に雨は降らなかった。ルドルフ伯父とフォン・ブラウ大佐の憤然とした感動に雨は降らなかった。グルンツェノーの館と村の熱狂にも雨は降らなかった。ヨハネス・ウンヴィルシュとフランツィスカ・ゲッツは心を交換したように、両手を取り合った。牧師の新郎新婦への説教式辞の後、ゲッツ少尉が祝辞を述べて、寺男のオルガンの音とカンタータが続いて、陽気にフロイデンシュタットの町の音楽家達のダンス音楽となった。これはフォ

ン・ブラウ大佐が一台の干し草馬車で呼び寄せたものであった。大佐はその城砦で村の人々を皆もてなした。グリプスが宮宰、趣味の判定者として、ありのままの彼としてではなく、ありえる彼として出現した。彼は愛想良く、気を利かせて、女性に対しては優しく、男性に対しては丁重に振る舞った。

大広間で舞踏が行われた。大佐が若い花嫁と舞踏を開始すると、果てしない喝采が聞こえた。今や少尉の輝く目を覗くことは楽しいことであった。牧師ヨジーアス・ティレニウスが母親ヨーレンゼンと会話している姿を見るのは楽しいことであった。「枢要の楽しいこと」は、副牧師にして新郎のハンス・ウンヴィルシュが目眩を起こさせる女神テルプシコレー[舞踏の女神]の手に落ちて、居合わせる老練な船乗り達の表現を使えば、広間を「横揺れしながら」進む様を見ることであった。どんな年寄りの人々も、曾祖母のマルガレーテ・ヨーレンゼンでさえも、このような一日は記憶になかった。陽気さは刻一刻と募って、老いも若きも拉致されて行った。半ば麻痺して、新婚カップルは雑踏を眺めていた。二人はかろうじて静かな片隅に避難していた。 —

「海火事だ」、誰かが叫んだ。誰が叫んだのだ。

「海火事だ、海火事だ」 — 電気ショックのように祭典の中をその声が走った。音楽が止み、踊っている者達は呪縛されたように、立ち止まった。飲食中の者はその椅子から飛び上がり、そして老いた、片腕の甲板長、シュテッフェン・グローテは、マライの歌を丁度少人数の通の人々に座興として供していたが、喉に半ば詰まってしまった。

ハンスとフランツィスカも、二人とも最初、そのパニック的驚きの原因が分からずにいたが、飛び起きていた。大佐は広間の人混みを縫ってドアの方へ進み、大佐の後を、その男性の客人達の大部分が追いかけた。残っている者達は興奮してあちこち走ったり、海に面している窓辺に駆け寄ったりした。フランツィスカは牧師ティレニウスの腕を掴んだ。

「まあ、一体どうしたのです。何が起きたのです」

「向こうだ、向こう。本当に。いや、神様、憐れみ給え」と老人は叫んで、窓を開け放って、海を指さした。「一艘の船が火事だ、 — 向こうだ、向こう」。

若いカップルの視線は震える手の先を追った。致命的衝撃を受けて、心臓の血が止まった。 —

「向こうだ、向こう」。

半ば黄昏となっていて、灰色の一日からの移行が人知れず進行していて、楽しい結婚式の人々はこれに気付いていなかった。陸地と海上に居座っていて水平線を完全に覆っている靄を、まだ一陣の風も移動させていなかった。ただ浜辺の住民達は、海上の赤い輝きは何を意味するか承知していた。内陸地育ちの新郎新婦はこの未知の恐ろしさに遭遇して、心臓がそれだけ荒く鼓動することになった。

船が燃えている。何百人もの人々が忌まわしい死の苦しみの最中にある。感覚がこの物思いで、また脳内を駆け巡る数百ものすさまじいイメージで、混乱した。

グルンツェノーの館は客人達が空になった。女達も通路を抜けて行き、下の浜辺へ急いだ。尊師ヨジーアス・ティレニウスとハンス、それにフレンツヘンがボートの接岸地に着くと、漁師、並びにフォン・ブラウ大佐、少尉、それに廷臣が、万事出航の準備という厳しい仕事に従事しているのが見られた。一方女達は熱に浮かされたように興奮して走

り回り、叫び声を上げて、北西の明かりの方へ合図したり、身振りで示したりしていた。ハンス・ウンヴィルシュは男衆の中に混じって、他の男衆と一緒に引いたり、押したりした。牧師は女達を正気付かせたり、少なくとも落ち着かせようとしていて、その際フランツィスカが出来る限りの手伝いをした。幸い最も適した時間に風が南から生じて、神のまことの天使となって、その翼を広げ、グルンツェノーのボートの帆を捉えた。ただ最長老の男達や、女達、子供達のみが浜辺に残り、一方若い男衆は救助のために出航した。浜辺から最初に離れたボートには、大佐と副牧師が乗っていた。ルドルフ・ゲッツ少尉は死ぬほど疲れて休んでいた。彼の姪が彼の側に跪いて、その白髪のを膝に休ませていた。

一 しかし遠方のすさまじい輝きは次第により鮮明になって行った。

「あれは蒸気船だな。そうでないと、この風ではこちらに進んで来られない」と残らざるを得なかった老いた船乗りの何人かが叫んだ。

「この浜辺に着岸するつもりだ」と別の男が言った。

この船の進路について様々な憶測がなされた。ある者達はその船をストックホルムへ行く途中のシュテッティーンの船と見なした。しかしこれには多くの反論が生じた。別の者達は、リュエバックからクロンシュタット[ペテルスブルク近郊]へ航行中のペテルスブルクの荷物船と述べた。この見解には大方が賛同して、その中には牧師ティレニウスもいた。

グルンツェノーの諸ボートはとうに暗闇が増えて見えなくなっていた。人々は浜辺に燃料となる材木を引きずって来て、強力な火を熾し、岸辺と小屋の双方で、燃えている船の乗員乗客が

一 グルンツェノーの男衆によって連れて来られた場合に備えた。

「我が子よ、我が静かな心よ、そなたに神の祝福のあらんことを」と尊師ヨジーアスはフレンツヘンの手を握って、言った。「そなたの結婚式の日はひどい終わり方となった。しかしそなたは漁師の牧師の妻としての的確な育ちをしている。そなたは立派にそなたの職務を果たしている。そなたに神が、長い、博愛に満ちた、勇敢な人生を恵まれんことを」。

ゲッツ少尉は、逆さに向けられた小舟の上に座っていた。疼痛がまた生じて来て、彼は足を手で掴み、痛みの余り歯を食いしばった。

「そうだな、老公」と彼は叫んだ、「我々不具者は砂の中において、口をぼかんと開けて見ている。フレンツェル、私を外套の中に入れて、家へ案内し、スープを一鉢作ってくれ。畜生。ブラウは私より二歳上というのに」。

人々の叫び声がこの少尉の情けない見解を遮った。海上の火事の輝きはかなり急速にその明るさを失って、突然全く消えた。恐ろしい叫び声に続いて、小声の静寂が続いた。このときそれでもなされた見解は最も低い囁き声の調子であった。誰も大きく呼吸する勇氣がないように見えた。

「彼らは救助されるか、一 絶望かだ」とようやく老牧師が言って、帽子を取って、両手を組み合わせた。彼は難破船の乗員乗客のために祈りの言葉を述べた。男達や女達、子供達が、熱心に一緒に祈った。しかし祈っている高齢者の父祖らは、とてもおぞましいことであったが、引き上げ作業権を有効と認めていて、それを実行するという前科があった。

致命的に不安な時間が経過して、それからまた暗闇の中、海上に明かりが浮かんだ。

それは帰って来るボートの松明であった。すると再び皆が、まだその声を上げられる限り、叫び声を上げた。とてもつらい待機の三十分後に、最初一杯載せた小舟が接岸地に着いた。 —

「助かった、助かった。ソーヴェ、ソーヴェ」とドイツ語とフランス語で混然と叫ばれた。半ば狂ったように歓喜して、救助された第一団が跪き、引きつったような笑い声と泣き声の中、大地の固い地面に接吻して、グルンツェノーの人々を抱擁し、接吻した。グルンツェノーの人々は甲斐甲斐しく、考えられるあらゆる飲み物、救助となるものを差し出して、彼らに押し寄せていた。

フォン・ブラウ大佐と副牧師はこの最初のボートには乗っていなかった。しかしこのとき人々は、燃えた船は、ハバディグレイス[アメリカ]の「アデレード[オーストラリアに同名の都市]」と言い、フランス・ワインを積んで、何人かの乗客をペテルスブルクに運ぶ予定であったと聞くことになった。しかしまだ興奮が余りに過ぎて、火災の個々の詳細について尋ねたり、知ることは出来なかった。

六十四人の不幸な、一部は負傷した人々を、グルンツェノーの人々は陸地に連れて来た。残るのはわずかに大佐とハンス・ウンヴィルシュの最後の漁師の小舟だけとなった。

「彼らは船長と女達を連れて来る」とフレンツヘンの不安げな問い合わせに対して返事があった。「彼らはすぐに到着すると思う。何も事故は生じていない」。

フランツィスカ・ウンヴィルシュは手を心臓に押し当てて、再び自分の職務に戻った。彼女はフランス人の船の乗員達とグルンツェノーの村との間の通訳者とならなければならなかった。救いと慰めをもたらす天使のように、彼女は混乱して荒々しい人混みの中を歩き回った。同じようにまだすっかりフランス語を忘れたわけではないドルフ伯父であったが、しかし自分の姪よりももっとどぎまぎしていた。

新たな叫び声が最後の小舟の到着を知らせたとき、彼女は丁度、両足を骨折していた髭面の、半裸のプロヴァンス出身の水夫の側で跪いていた。このプロヴァンス人は痛みの余り、彼女の両手をしっかり握っていて、彼女は離れようと思っても、離れられない状況であった。彼女は自分の夫の方へ振り向くことすら出来なかった。しかし彼女はこの哀れな負傷者に慰めの言葉をかけてやりながら、集中して、突然全く静かになった接岸地のことを考えていた。

魂をすべて傾注して、彼女が聞き耳を立てていると、人々の間である動きがあった。澄んだ女性の声が外国語風な詛りで叫んだ。

「彼女はどこなの、ねえ、彼女はどこなの」。

プロヴァンス人はこれまで自分がしっかり握っていた慈悲深い、穏やかな手を放した。 — 一人の女性がフレンツヘンの側で跪いて、荒々しく体を抱き締め、彼女の服や彼女の手を接吻し、嗚咽し、叫んだ。燃え上がる薪の山と松明が、揺らめく明かりをこの興奮した異国の女性に投げかけた。ハンスも青白く、感動して、妻の許へ屈み込んだ。 — 夢のようだ、本当に夢のようだ。 — どうしてアンリエット・トゥリュブレがグルンツェノーの浜辺にいるのか。

「彼女だわ、彼女だ。すべての聖人にかけて。まあ、お嬢様、まあ、令夫人。愛しい方、この優しいお顔に祝福あれ。有り難や。奇蹟だ、奇蹟。彼女だわ」。

「アンリエット、アンリエット・トゥリュブレ」とフレンツヘンは、疑わしげに、

凝固した目をこのフランス人に据えて、口ごもった。

「そうです、哀れなアンリエットです。もう一人います、もう一人」。

ハンス・ウンヴィルシュは妻を腕に抱いて、その顔を自分の胸に引き寄せた。

「愛しい方よ、この陸地に誰を連れて来たと思うかい」。

彼は穏やかに彼女を下の岸辺へ連れて行った。彼女は激しく震えて、無言で、彼女は夫とフランス人娘の間に挟まれて、土地の人々や異国の人々の中を抜けて行った。人々は彼女に恭しく通りを開けた。

一つの岩の上に、「アデレード」の船長が座っていて、両手で頭を支えていた。彼の側に真面目に、黙って、フォン・ブラウ大佐が立っていた。しかしルドルフ・ゲッツ少尉は砂の中に跪いていて、その膝に意識を失っている女性の頭部を載せていた。 —

「クレオーフェア、クレオーフェア」とフランツィスカは叫んだ。両手を組んで、失神している女性の側にくずおれた。

「そう、クレオーフェアだ」と少尉は叫んだ。そして歯ぎしりしながら付け加えた。

「彼女は一人っきりだ、有り難や」。

第十二章

このように運命は実現した。とても理解しがたく、奇妙に、万事当初は見えたと違いないが、とても単純に、自然に生起したのであった。突然空中から死んで我らの足許に落下する小鳥の運命は、我々がその小さな亡骸をしばらく手の中に収めてしまわないうちは、信じられないものである。 — しかしその後は信じられるものとなる。

人々は哀れなクレオーフェアを牧師館に運んだ。そしてまず彼女のために、海の方に位置している部屋に臥所が用意された。しかし彼女は海の声に耐えられず、高熱の夢にうなされながら、彼女はこの箇所から離れることを慄いて頼んだ。波の音が余り聞こえない別の部屋にベッドは用意されなければならなかった。

そこに彼女は一週間以上、呆然と意識を失って横たわっていた。彼女が高熱の中、呼んだ友人達がかくも間近にいることに気付いていなかった。彼女は全く徐々に意識を取り戻して行った。更に何日も彼女にとって、フランツィスカやルドルフ少尉、ハンス・ウンヴィルシュは単に夢の中の人物に過ぎず、これらが現実側に実存していることを彼女は信ずることが出来ずにいた。

フランツィスカ・ウンヴィルシュはこの病気の女性の臥所から離れなかった。そして — 彼女一人のお蔭で、以前かくも生命欲に満ちて、美しく、華麗であったクレオーフェアのくずおれた生命の炎が今一度、しかしほんの束の間、消滅前に保持され得たのである。錯誤の時は過ぎていた。砂は流れ散っていた。以前はかくも誇り高い人物の剥き出しの寄る辺ない自我が震えて、出血して横たわっていた。そして最後の暗い時間を待機する中、クレオーフェア・シュタインはその心を出来るだけすべての現世的なものから解き放った。以前、彼女の優美な頭上に、彼女の笑う人生の上に被されていたカラフルなヴェール、彼女がその下からかくも悪戯っぽく、軽薄に嘘を重ねていたすべてのヴェールが千切れて、引き裂かれていた。人生の容赦ない嵐が旋回しながら彼女を拉致して行った。クレオーフェアは、自分の両親の家を去ってからの、過ぎた年月について、抑揚もなく、希

望もなく、疲れて語り、それは慄然とするものであった。しかし彼女の話す間、彼女の頭はフレンツヘンの胸元にあって、おして彼女は她的手を副牧師に差し出していた。

— ただハンスとフレンツヘンを相手に彼女はすべてを語った。

「いや、私を私の両親の家から追い立てたものは、ただ野蛮極まる憧れでした。私は自分に対して何一つ、何一つ申し開きできない。私の心はとても冷たく、荒涼としていて、何という劣等な、邪悪な気分有的时候に、あの、— あの男の後を追いかけたことか考えると怖気がします。いや、何という私だったのでしょうか。何という死を迎えることか。あなた方二人は、私が私の母親の家でどんな風であったか、ご存じです。私が愛について何を知っていたのでしょうか。私は恋愛のために家を出たのではありません。— そうでしょう、私はテオフィル・シュタイン博士に余りに良く似合っていたのです。— だからあの人には何一つ非難すべきことはありません。そのようになる必然があったのですし、私がそれを望んだのです。私の中にある悪霊が、その荒々しい飢餓の中でその同類を求めたのです。そしてこの悪霊は自分の求めているのを見つけ出すと、この野獣同士歯でもってつかみ合ったのです。いや、哀れな女、私が結局一番ひどい目に遭いました」。

ハンスとフランツィスカはこの恐ろしい嘆きの語り方に慄然とした。しかし同じ瞬間、あたかもこの哀れな病気の女性の以前の活気ある優美さの一部が戻って来たように思われた。彼女は微笑して起き上がり、副牧師の手を一層固く握って、言った。

「私は何とお二人のことを苦しめたことでしょうか。何とお二人のことを笑ったことでしょうか。いや、フレンツヘン、フレンツヘン、公園通りに一緒にいたのはつい昨日のことです。— 眠れる池、— 飢餓牧師、— 哀れな小さなエメ。何と私はお二人を苦しめて、何とお二人に罰当たりなことをしたのでしょうか。— とても滑稽なことで、誰もがとても苦り切った顔をして、墓石でも笑い出すに違いなかったわ」。

クレオーフェアの顔から微笑は消えて、彼女はその顔を枕に隠して、小声で嗚咽した。フランツィスカが穏やかな宥める言葉で彼女に屈み込むと、彼女はフランツィスカを突き放して、叫んだ。

「私を放っておいて、出て行って。私を一人っきりで死なせてください。私は誰の愛にも値しません。それに私は自分の父親を殺してしまった。私が父親を殺したと二人はご存じないのですか。何故私を自分の考えと一人っきりにさせてくれないの。私は考えるだけで十分死ねるのです。—」

別の日に、ハンスとフレンツヘンはこの不幸な女性のパリでの生活についてもっと知ることになった。テオフィル・シュタイン博士は、自分の想定が間違っていたことをより明確に悟るにつれ、彼が自分の妻を扱う流儀、作法は、一層惨めなものになっていった。枢密顧問官ゲッツ夫人が決して家出した娘を許さないであろうことが確信に変わると、シュタイン博士のような性格の者からは、微笑の仮面を被るという責務はすべて消えた。彼は金を持っていて、沢山金を稼ぎたいと思っていたのに、それは得られず、ただ一つの重荷を背負うことになった。この重荷は、自分の承知している人生でのすべての歩みをこの上なく困難にするに違いないものであった。彼がドイツの大都会で上品に獲得した土壌、土台、その上にはとても上手に堅牢に築かれたものがあったのに、この間違っ指した一手によって、この土壌、土台をすべて失ってしまった。彼は自分の儲けを計算するたびに、歯ぎしりした。というのは彼はすべての蓋然性をとても上手に計算して来たのであって、

的確に「チャンスの計算」を弁えていたからである。結果、無一物。今や彼はパリにいて、彼の妻は、彼女の父親の手紙を彼に渡すだけである。彼女を許すと彼女に告げている手紙である。滑稽なことであったが、しかしまた狂ったようにもなった。

「彼はその手紙を引き裂いて、私の足許にその細片を投げ付けました」とクレオーフェアはグルンツェノーの牧師館で語った。「そこで私は、―― 私はこう考えました。私が彼の主人となろう、私の方が強くて、私の意志を通す、私の頭を使う、と。私は家では罰せられずに外出したし、だって家では誰も私を束縛する力のある人はいなかったのですから。それでこう考えていました。人生は私の母の家と同じようなものだ、一つの笑い声だけで、一つの唇の動きだけで、一つの両肩すくめだけで動かせる、と。私は母親を涙で動かそうと試みなければならなくなりました。それで、出来る限りのことをしてみました。信じて貰えるでしょう。でも上手く行かなかった。私はよく思ったものです。私のようなこんな惨めな、道化た、愚かな、単純な娘が、まだマレ地区の六階に住んで、鏡相手に嘆いた例はない、と。私は沢山、沢山学びました。フレンツェン・ウンヴィルシュ夫人、でも私があくびの仕方を忘れてしまうであろうと、私の母親の家で思ったことはなかったわ。私はパリでは退屈な目に遭わなかった。私は黒い喪服を亡き父親のために縫わなければならない、その喪服を―― 夫の意見に反して弁護し着用しました。いや、私の夫の交際範囲は大きくて、皆して黒い服が好みでない多くの人々がやって来ました。とんでもない生活でした。私の愚かな、混乱して、痛みの強い頭さえなければ、私ならとても好みの役を演じられそうだと思います。厳密に言ってとても名誉を重んじて来た生活とは言えません。とてもお金が入用だから、滑稽な偏見に囚われてはやって行けない。私どもはドイツでの色々な珍しい高位の人々と文通をしていて、手紙を書けば、その手紙に対してとても立派な報酬を頂きました。様々な政府の依頼で、故郷では評判の良くない何人かの同郷人の身边を調査しました。私どもはとても重宝がられました。だって私どもはとても飢えていたから。―― 私は二人の人に対して恥じています。私どもはパーティーを開いて、大袈裟に吹聴されました。私どもの許に人々が良く集まりました。―― 不面目なこと寸前まで行って、私は自分が夫ほど遊泳が上手くないのをただ残念に思いました。―― まあ、私を一人っきりにさせて、一人っきりにさせてよ」。

燃えた「アデレード」号の乗員は今や次第にグルンツェノー村を去って、陸地を経由して、次の港町へ向かった。負傷者は治癒して、千もの祝福の言葉を浴びながら、フォン・ブラウ大佐から別れた最後の負傷者は、足を骨折したプロヴァンス人であった。グリプスが彼をフロイデンシュタットまで馬車で運び、そこから膨らんだ財布と共に郵便馬車に乗せた。ただ牧師館だけが客人を残していた。―― それもしばらくの間で、そしてこの期間、アンリエット・トゥリュブレはやはり沢山、沢山話すことがあった。彼女は自分の約束を守って、テオフィル・シュタイン博士とクレオーフェアとを探し、二人を見つけたのであった。

「いいですか」と彼女は言った、「私はこの世の果てまで二人を追いかけたことでしょう。でも二人はただパリまで来ていただけでした。いや、牧師様、お嬢様、―― 令夫人、私をあなた方の許へかの晩導いた善良な神様、この神様がまた困ったとき、私を哀れな子とひどい男の許に導いて、この娘のために一肌脱ぐことが出来、私の約束を守ることが出来るようにしてくださったのです、―― いいですか。私はたとえ千年生きよう

と、あの夜のことは忘れません。あの夜、あなたはあなたの外套を私にかけてくださり、私にあなたの手を差し出して、あなたの心から私の心へと話しかけてくださった。そして私はあなた方のお金で私の祖国に、パリに戻って来られました。私は思いました。ドイツでは夢を見たのだ、と。 — 本当に、とてもひどい夢を。パリでは私の友人達が現れて、パレ・ロワイヤルに、チュイルリー宮、子猫に子犬、シャンゼリーゼ、アルチュールにアルベール、その他ね。私は水を得た魚となった。でも私はコオロギと蟻の寓話、ドイツのこと、牧師様と天使のようなお嬢様のことを忘れずに、鼠のように静かに座っていて、ファッションの仕事をしてながら、ただならず者のテオフィル殿と哀れなレディーを探しました。これを見つけるのは難しくはなかった。アルベールがいたし、セレスティーナにアルマン、ドゥ・ラ・デラテリー子爵、それに私の若輩銀行員がいて、彼らに路地で尋ねました。直に知りたいことが分かりました。いや、神様、すると黒い服の可愛い娘がいました。とても青ざめていて、その目ときたら。私の心から血が流れました。でも勇気を出せと私は言って、守衛に、そして守衛の妻に問い合わせて、それで私は自分のしなければならぬことが分かりました。アルマンの許で私は青い服を着ていました。お兄さんと私は言いました。私はひどいドイツから帰ったばかり。パリ万歳、我が愛しのお兄さん、ご機嫌いかが。これから何をしようか。何して楽しみましょうか。テオフィルも戻って来て、それどころか一人の妻と一緒にです。彼と私の関係、どんなだったか承知でしょう。私は復讐します。私は昔同様あなた方の仲間です。私をテオフィルの許へ連れて行ってよ。アルマンは狂った者のように笑った。私どもは互いに握手をした。次の晩、私はピエールの宴会に騎士修道会管区長[モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』]のように現れて、アルマンはきっと私の哀れな心臓が階段でどんなに動悸しているか知らなかったでしょう。ムッシュー・アルマンです、それにアンリエット・トゥリュブレ令嬢です、 — 他の人々もいて、喪服の青ざめた可愛いレディーとテオフィルがいました。いや、牧師様、私はこの人相手に一泡吹かせました。この人に啖呵を切って見せたのです」。

フレンツヘンとハンスはびっくりしてクレオーフェアを見つめた。しかしクレオーフェアはただ頷いて、力なく微笑して、言った。

「結構なことでした。彼女の善良な心に神様の御加護がありますように。 — 彼女は丁度良い時に来ました。 — でも本当に面白い場面でした。一同はとても私どものことを笑いました。勿論当初私は少し面食らったことを否定出来ませんし、自分がその夜を正常に過ごせたかとても疑わしいものです。でも私が愚かな失神から覚めて、アンリエットの腕の中で目覚めて、そしてフレンツヘンに頼まれて来ましたと彼女から呼びかけられたとき、 — そして彼女が私のことを哀れな可愛い子羊と呼んで、爪を振り上げて私の夫殿に迫って行ったとき、私は自分の状況が分かったのです。とても愉快でした、愉快。そうでしょう、アンリエット」。

アンリエットはとても激しく泣いて、その質問に答えることが出来なかった。彼女はただ頭を振って、それから情熱的に興奮して、病気の女性の臥所の側で跪いて、再び、再三、口と両手に接吻をした。

それからクレオーフェアは彼女の流儀で、いかにこの晩からテオフィルが彼女の生活をますます地獄にして行ったか、語った。いかに彼女は日々、無為に呆然と悩む中で過ごしたか、いかに彼女は震えながら夜の時刻を数え、階段に恐れている足音が戻って来る

のに聞き耳を立てていたか語った。彼女はアンリエットとの秘密の、内密の出会いと、この耐え難い恐ろしい生活から逃げ出す無茶な計画について、死んだ方がましだと思ったことの次第について、また最後に逃走の考えが浮上して、固まり、決心に至ったことの次第について語った。ペテルスブルクから一通のひどくたどたどしい、誤字の多い手紙がアンリエットの青春の女友達であるオイフロジネ[エフロシニヤ]・ルシャルジョン令嬢から届いたのであった。この女友達は、パリのファッション通のお嬢達が「モンゴル人」の間で成功している幸運について夢中になって書いており、自分、オイフロジネ・ルシャルジョンはある立派な機関の女主人となっていて、一オフ、一オフ、一スキー、一エフ、一イエフ等々のあらゆる考えられる限りの御領主達の引っ張りだこになっていて、オイラーリエも、ヴェロニークも、ヴァレリも、ジョルジェットも暮らし向きは悪くなく、そしてフィリップーネが輝かしい縁組みをして、ティモテウス・トゥリヒノヴィッチ・レゾノフスキー大佐と結婚したと記していた。

「ダッタンに旅しましょう」とアンリエットが叫んだのであった、「クレオーフェア夫人には宝石があり、私には三十五フランの貯金があります。進め、世界の果てまで。この裏切り者、山師、劣等なユダヤ人から逃げなきゃ。この気障な奴と同じ空気を吸うより、エスキモーの殿方らの許で乞食をする方がましよ。一緒に二人の姉妹のように旅をし、一緒に仕事を始めましょう。白熊の見世物をしたり、ロシアに空中楼阁を築くのよ。出発、進行、冒険万歳」。

クレオーフェアはこの逃亡の考えを、長い、悲惨な週の間、持ち歩いてきた。この考えを押さえ込もうとして適わず、この考えは再三新たに生じて、この不幸な女性がこの夫に縛られている鎖はますます耐え難いものとなった。クレッペル通り出身のテオフィル博士が自分の妻に手を上げて、妻を殴る日がやって来た。次の夜、クレオーフェアは逃亡して、遠くへの旅の準備が整うまで、アンリエットの屋根裏部屋に潜んだ。

「私はただモルグ[パリの死体安置所]でのみ探されたことでしょう」とグルンツェノーの牧師館で、モーゼス・フロイデンシュタインの妻は語った。

パリからハバディグレイス[アメリカ]へ行く、それから、海、船、船旅。すべては未定で、漠然、不分明、不明瞭。

「ドイツの岸边へ」

その叫び声が骨の髄まで染みた。哀れな故郷喪失者の遍歴の魂。でも静かに、そこで墓に休めたら、向こうに、暗く、霧の多い土地、ドイツの岸边が水平線上に見えるところで。あたかも一度、固い、緑の大地、緑の木々から、緑の静かな平和な教会墓地からある歌を耳にして、そのメロディーをもはやはっきりと思い出せず、それでもずっとそのメロディーを思い出そうと努めているかのようであった。船がその航路を呻きつつ、喘いで進んだ。再び夕刻となり、故郷の沿岸は黄昏の中に消えた。 — 古い悲しいメロディーは相変わらず思い浮かべられず、そして船は一晚中、呻きつつ、喘いで進み、更に新しい一日、灰色のヴェールに包まれた一日を進んで行った。

船の端にクレオーフェアは動かずに凭れていて、海上の靄の中を覗き、古いメロディーを探していた。人々から彼女は聞いていた、ドイツの海岸がまたとても間近になっている、霧がなければ、とうにその海岸が見えていただろうに、と。

アンリエット・トゥリュブレは、クレオーフェアが火災の勃発の十五分前、目を閉

じて、意識を失って船の端に凭れているのを自分が発見した次第を、そしてそれに続く、あらゆる凶事の間もクレオーフェアはこの状態のままであった次第を語った。グルンツェノーの牧師館で、フレンツヘンの腕の中でようやくクレオーフェアは目覚めたのであった。

その丘からバルト海の海面を見下ろしている牧師館に対して、いかに大波が寄せていることか。海の大波は、この哀れな小さな建物に届かない。いかに大波が時に憤然と荒れても、建物に大波は何も悪さを出来ない。大波は島々を、村や、町、灯台、教会、教会墓地を飲み込むことがある。大波はとうに埋葬されていた世代の朽ちた棺を掘りだして、その棺を慄然とする現在の足許に、海藻を巻き付けて、泥土で覆って投げ寄こすことがある。大きな海の大波は憤然と、まことに憤然となる場合がある。しかし貧しい村グルンツェノーの教会の丘のこの小さな家は冒されない。この家は安定した基盤に立っていて、この低い屋根の下に避難する者は、大丈夫、守られている。しかしとりわけ丈夫に守られているのは、クレオーフェアの哀れな、迷っている心であった。 — これはとりわけ休息が許された。

冬の最中まで、モーゼス・フロイデンシュタインの妻は静かに、平和に横たわっていて、もはや何も恐れていなかった。最近の過去の残酷な映像は色褪せた。神様は美しいクレオーフェアに立派な死を贈った。

人は海の声に慣れてしまうと、それを聞きながら全く穏やかに眠りに入れる。あたかも永遠が、大地の子らを眠りに誘う歌のために舌を有したかのようである。

老ドルフ伯父が、その姪の臥所から離れようとせず、伯父が姪の頭をその胸に抱いて、伯父が姪と話す様子、 — そして伯父がそのドアの前で泣く様子は感動的であった。彼らは皆、哀れな、美しいクレオーフェアのために泣いた。牧師ティレニウスが、副牧師ハンス・ウンヴィルシュが、フレンツヘン・ウンヴィルシュが、アンリエット・トゥリュブレが、フォン・ブラウ大佐が、皆が皆、泣いた。

今一度クレオーフェアは母親宛に書いた。しかしこの手紙も開封されずに戻って来た。これは、この追放された心が受け取った最後の傷であった。テオフィル・シュタイン博士宛にハンス・ウンヴィルシュが書いた。この書状は戻って来なかったとしても、しかし返事はなかった。グルンツェノーで、クレッペル通りでモーゼス・フロイデンシュタインと言ったテオフィル・シュタイン博士についてまた何か耳にしたのは、ようやく一八五二年のことで、この時彼は、彼を利用した者達によって軽蔑されながら、また彼が利用されたその相手によって軽蔑されながら、枢密宮廷顧問官[秘密の顧問官]の称号を得ていて、その言葉の最も残酷な意味で市民的に死[法の埒外、追放、outcast]を迎えたのである。

グルンツェノーの小さな教会墓地に半ば沈んだ墓塚があつて、そこに或る未知の女性が眠っていたが、その死骸は長い、長い以前の昔に、大波がこちらの浜辺へ掠って行った。この丘の隣りにクレオーフェアは埋葬された。彼女はバルト海よりも荒々しい海によってこちらへ投げ寄せられたのであった。フレンツヘンがこの哀れな海難者のためにこの場所に決めた。これよりもっと相応しい場所は、広大な世界全体を探しても、見つけられ無かつたであろう。埋葬の辞は、ヨハネス・ウンヴィルシュが述べた。しかし彼は言うべきことが沢山あつたけれども、ほとんど言葉にすることが出来なかつた。しかし棺と開いた墓穴の間近に立っていた人々は皆、彼の言葉を理解した。

クレオーフェアの墓塚の良き世話人、園芸係はフランツィスカ・ウンヴィルシュであった。普段はこの荒涼たる浜辺では育つことが難しく、これまでグルンツェノーの村ではその存在も知られていなかった幾つもの花が、彼女の上手な手によって、海風からこの丘を守っている教会墓地の壁の背後で花咲いた。

フレンツヘンは上手な手を有して、すべてが彼女の許で、一 飢餓牧師館が、城砦が、村が栄えた。

ルドルフ・ゲッツ少尉はただゆっくりと彼の姪の死によって彼の中に呼び起こされた深甚の震撼から回復した。長いこと彼はまたその肘掛け椅子に閉じ込められていて、必ずしもフレンツヘンは彼がテオフィル・シュタイン博士に発するすべての呪詛を彼の唇から接吻して取り除くことは出来なかった。大佐は次第に女性に対し優雅になって、彼の城砦はますます住みやすくなり、彼はますます、「世界は女達がいなければ一発の銃声にも値しない」と了解して行った。運命は彼にもルドルフ少尉に劣らず、同様になお幾年かの立派な猶予の年を残してくれた。

アンリエット・トゥリュブレは、ただ次の春まで、グルンツェノーに辛抱していた。最初の燕達が到来すると、パリ人の血が騒いだ。人々が彼女に、「世間」への彼女の憧れを満たす手段を与えていなかったら、彼女は嘆いて絶えていたことであろう。彼女は別れの時、とても泣いて、この別れを越えて生き残れない風情であった。しかし陽気に飛び去って、無事陸路、ペテルスブルクのオイフロジーネ嬢の許に達し、そこで翌年、とても豊かなドイツ人パン屋と結婚をして、この夫を彼女の力の及ぶ限り、幸せにした。

その翌年の春、穏やかに、病氣もせず、老ヨジーアス・ティレニウスが、長く、素敵な、祝福の多い生活の後、身罷った。そして厳しい、風雪に耐えた、船乗り達がいつか牧師ウンヴィルシュの棺の許でも、この老人の棺の許同様に泣くのであれば、彼はこの海の岸边でのその職務を十分に果たしたと言えよう。 一

飢餓牧師の仕事机の上には、ガラス玉が掛かっている。このガラス玉を通じて、アントン・ウンヴィルシュ親方の仕事机にかくも風変わりな明かりが投じられていたもので、その輝きの許、クレッペル通りの貧しい職人は、その同職のヤーコプ・ベーメ同様、人生の端緒と終末とを「思い出した」のであった。ヨハネスはペンを置いた。そのペンで、彼は印刷して世間に知らせるために自分の生活と自分の飢餓について記述したのではなく、自分の息子のために書いたのであった。彼は深く物思いに沈んで、フレンツヘンがその坊やのために歌っている揺り籠の歌に聴き入っていた。輝く玉の明かりはこの少年の小さな頭をも照らしていた。大きな、訝しげな目で、少年はこの玉を見上げていた。少年は明かりに驚いていた。

夜中、外では、海が怒って、荒々しく唸り声を上げており、そして父親と母親は時々不安げに耳を澄ましていた。外の暗闇では、邪悪な霊がさまよっている。輝く玉の明かりの圏内では、居場所のない霊である。父親と母親は、自分達の子供もこの悪霊との戦いに出て行かなければならない時節のことを考えている。やがて海の声が母親の歌より声高になるであろう時が来る。 一 その時が、戦いの端緒となろう。

何と子供の目は輝く玉に向けられていることか。すでに世間を破壊し、そして再建するあの飢餓がもう蠢動しているのか。

人間の世代は次々に代わる。一つの世代が人生の武器を更に別の世代に渡す。「人

間の子よ、帰れ」[詩篇、90,3]の叫び声が最後となって響くとき、この子と共に最後の飢餓が生み出されるであろう。クレッペル通り出身の二人の少年がこの世を通じて導かれたその飢餓である。

ハンス・ウンヴィルシュよ、汝の武器を更に手渡すがいい。

(第三卷、最終卷の終わり)

今回ドイツの小説家ヴィルヘルム・ラーベ Wilhelm Raabe(1831-1910)を選んだのは、ジャン・パウルの後継者と普通に目されている、ケラー、シュティフター、ラーベのこの三人の中で、一番邦訳が少ないように思われたからであるし、フライタークの『貸しと借り』を2021年訳したとき、ラーベの『飢餓牧師』は、この『貸しと借り』と共に Antisemitismus[反ユダヤ主義]をドイツ人の中で醸成した問題の書であると知ったからである。ドイツでは戦後、親ナチや反ユダヤ主義は御法度である。フライタークは愛国者であるが、出身は現ポーランドで、フライターク協会は解散である。ラーベはどうか。ラーベは愛国者で、出身は元々現ドイツで、ラーベ協会は存続している。多分『飢餓牧師』の反ユダヤ主義の部分は余り論じない、寝た子は起こさない流れであろう。戦後ドイツでは、いや、日本のドイツ文学界では、面倒な反ユダヤと関与するよりは、ユダヤ人を対象にしておれば、無難という面もあってか、作家ではカフカ、評論家ではベンヤミンが主役である。オーストリアではヨーゼフ・ロート。ドイツではジャン・パウルの現代への影響を青年ドイツ派のベルネの言葉、「Er aber steht geduldig an der Pforte des zwanzigsten Jahrhunderts und wartet lächelnd, bis sein schleichend Volk ihm nachkomme.彼は辛抱強く二十世紀の門の所に立っていて、その遅い歩みの民族が自分に追い付くのを待っています」で締め括る場合が多いが、勿論これはこの言が至当であるからであっても、しかし勘ぐれば、ラーベの言を持って来るよりは、元はユダヤ人のベルネを持って来て、ユダヤ人問題ではジャン・パウルの無罪だと言外に言いたいのかもしれない。フライタークとかラーベといった正当に諧謔を生真面目なドイツ人にもたらしたこの二人が、反ユダヤ主義をも同時に無意識にしる醸成したベストセラー作家となれば、ジャン・パウルの黒に見えかねないのである。

ラーベの書は一冊も有しなかったが、メールの記録では、2023年2月、高橋麻帆書店から東ドイツ Aufbau 書店の『Raabes Werke』(五巻本、1976等)を入手している。その後、ブラウンシュヴァイク版の全集21巻本を「ヤフオク」で入手している。安かったのはやはり研究者の数の減少のせいか。初めはブラウンシュヴァイク版の全集本を底本とする意気込みであったが、年齢的に五冊程度が妥当で、これに従って訳せば、選定の労もない。そこで、東ドイツの Aufbau 書店版に従うことにした。ドイツ統合前ならば、底本にしなかったかもしれない本であっても、統合して見れば、シュタージ等問題のあった東ドイツも、建前は結構な所があるし、数多いラーベの作品の中からの選定も社会的視点を主にしている筈であるから、底本にして悪くはないだろうと判断したように思う。注釈に関しては、両方の版を参照した。聖書やその他

の引用等、いつもながらドイツ人学者の勤勉さには辟易しながらも感謝するしかない。それで訳出したのは、第一巻の『雀路地年代記』、『黒いガレー船』、『ビュッツォーの鷺鳥』、それに第二巻の『飢餓牧師』である。最初『飢餓牧師』を訳して、その後、第一巻を訳した。感想はやはり文学史に残る作家は興味深い、知らずに失礼しましたである。

解説を書くにしても、ただ翻訳しての感想しか手持ちはないので、専門家の定説紹介も何も有しない。そこで今回訳して、印象に残った点を列挙して行きたい。ドイツ文学研究の場合、一応その作品を研究する上で方法論なるものが決められている。私の場合、これまで公表したことはないが、自分では解釈学派と思っている。記号論とか、実証主義、社会主義理論派とか、フロイト学派とか色々あるらしいが、解釈学派はディルタイを始祖とするとか学生時代聞いたような気がする程度で、細かいことは忘れており、日本では高齢者は忘れるのが礼儀という有り難い風潮もある（「今は忘れにけり」と言ひてありなん、『徒然草』）。とにかく解釈学派は、これまでの読書、人生経験の総体を持って、作品を検証するのであるというわけで、有り体に言えば、私の場合、小中学生が読書感想文を書かされる場合と変わらない

1. 恋愛小説

個別の紹介する前に、まず個々の作品を通じて共通して言えるものは何かというと、これは C.F.マイヤーのとき、すべてその観点から見て済ましたように、昔の作家は大體恋愛小説を書けば、売れて、それで生活し得たのであろうと推定される。以下、今回訳した短篇も含む四作品を恋愛小説の観点からまとめて見る。

『雀路地年代記』(1856)、これは主に、主人公の失恋、そしてこの主人公が育てる、主人公は振られたけれども、仲の良い夫婦の遺児[娘]の恋愛話しが中心で、その他、ナポレオン解放戦争で二人の息子を亡くした大家夫婦のなりそめから、その息子二人喪失の打撃、新聞で筆禍事件を起こしてミュンヘンへ去った友人の結婚話し等が語られている。

『黒いガレー船』(1861)、これは時代背景が「一五九九年の十一月はじめの暗い、嵐の夜であった」と始まるように、スペインに占領されていた時代のオランダ、ネーデルラントの話である。アントワープの昔は豊かな商会の幼馴染みのカップルに、横恋慕するスペイン・カトリック側の船長とその友レオーネ。このカップルは反乱鎮圧の際、拉致されて船内に閉じ込められるが、脱出した若者[海上ゴイセン]の方が、深夜仲間を連れて「黒いガレー船」で許嫁を奪還に来て、復讐する。ネーデルラント独立運動と恋愛劇を絡めた勧善懲悪の小説で、余り饒舌な箇所はなく、よく教科書に採択されて来たものらしい。訳者は先に訳した C.F.マイヤーの『護符』に似た偶然の因果と偶然にしろ正義が勝つ風の面白みを感じた。

『ビュッツォーの鷺鳥』(1866)、これはフランス革命のパロディーで、恋愛は主ではないが、しかし革命に恋愛は付きもので、恋愛話しもパロディとは言え、無視できない。語り手はビュッツォーというメクレンブルクの田舎の退職校長。その町では鷺鳥がうるさい、取り締まれということになり、法を制定して取り締まることになった。しかし女性陣には不評。そこでホルンボルステル嬢という富裕な令嬢が画策し、弁護士のヴェプケ博士と臨時教師のアルブス学士が反対演説を町長ハーネ博士に対し居酒屋で演説し、二人は排除された。しかし民衆の不满は収まらず、遂にメクレンブルクのお上の部隊が鎮圧に向かった。町長はこの部隊の少尉を元恋人、今は不仲のホルンボルステル嬢の家に宿営させて、意趣返しとするが、令嬢はこの少尉と婚約、町長はこれを聞いて卒中で倒れた。この令嬢に弁護士のヴェプケ博士と臨時教師のアルブス学士は甘い希望を抱いて、その指示に従っていたのであった。この小説では、これまで影の薄かった臨時教師が突如雄弁を奮うのが見所、そしてその後現実を知るのも面白い。

『飢餓牧師』(1864)、これは主人公の成長を語る発展小説とされるが、教養小説の範疇に入るものであろう。恋愛小説として見れば、単純で、靴屋の息子が学問への飢えを感じて、ギムナジウムに入り、その後大学で神学を学び、牧師を目指す。同じ町の同じ通りで生まれたユダヤ人の息子と共に成長するが、このユダヤ人の若者は学問の飢えは金銭と栄達の飢えと一如である。主人公は先に C.F.マイヤーの『説教壇からの射撃』で滑稽な響きがあると紹介した聖職候補生である。昔の牧師は、人事権を教区領主に握られているせいで、牧師職と同時に、嫁さんまで、教区領主の意向次第という面のある職業である。海に面した僻地グルンツェノーの牧師に主人公は落ち着きそうであるが、そこは図書も余りない牧師館で次のように形容されている。

<新しい文書は簡単にはグルンツェノーに到着しなかった。それで彼の学術装置は、自分の前任者達が百五十年前から牧師館に残している諸本に限定されていた。これらの本は一人の牧師が前任者の死去により引き継いで行くもので、これは普通実直な未亡人も、前任者の夫の他の動産と共に引き継がれるようなものである。グルンツェノーの牧師職を授与する役目の[フォン・]ブラウの領主達は、この文庫に絶大な敬意を払っていて、グルンツェノーの船乗りの民は更に絶大な敬意を払っていた>[412 頁以下、引用は拙訳 pdf ファイル]。

ところがここの老牧師は独り身であり、領主のフォン・ブラウ大佐は人が良く、主人公を引き立ててくれる落魄少尉の庇護者である。この落魄少尉の姪と作者は主人公を結ばせる算段で、後は二人の恋情が上手く育つようにすればいいわけである。そして悪役のユダヤ人は、この姪が父親の死によりバリで困窮しているとき、具体的には分からないが、とても嫌なことをしたと落魄少尉に証言されている。悪役のユダヤ人

は、この落魄少尉の弟の娘、富裕の娘と駆け落ちをする。この娘の母親は、しかし駆け落ちした娘を許さず、娘は夫の許から逃げる途中、主人公達の海辺の村で死ぬ。ユダヤ人は枢密顧問官、実はこれは綽名で、ただ秘密の人物情報をたれ込む顧問官として結局追放される。

精神の飢えも金銭、物質への飢えも作者はすべて飢餓という語で説明しようと試みており、すべてを煩惱と見るようなもので、一つの飢餓哲学が感じられる。これは新しい見方ではあるが、しかし神学をパンの学問とし、パンとは直結しないその他の文学研究を純粹学問と見るようなシラーの就任演説的見方も便利で、その妥当性はともかく、まだ神学専攻は昔のドイツでは就職に恵まれた方であろう。

2. ジャン・パウルとの関連

文学史ではケラー、シュティフター、ラーベをジャン・パウルの影響を受けた作家に上げている。ケラー、シュティフターは、確かにジャン・パウルの影響を認めているが、全体としては、若い頃は夢中になったが、次第に別の境地を目指したという印象である。ケラーの「我がジャン・パウルで学んだ諧謔で飾り立てたが」という『緑のハインリヒ』での表現 (mit dem bei meinem Jean Paul gelernten Humor zu verbrämen: Keller: Der grüne Heinrich)、「本来およそジャン・パウルとは異質なシュティフターの資性」(吉田正勝:「シュティフターの<ジャン・パウル体験>」1970)と言った言葉で明らかであろう。しかし、ラーベの特徴は、素直にジャン・パウルの面白さを認めている点であろう。ケラーやシュティフターには、やはり均整の取れた晩年のゲーテの境地を意識している面があって、その境地を理想としているのかもしれない。文学史家のマルティニによると、『詩的リアリズム』は、体験方法や文体形式の面でゲーテが手本であると分かって、作家とその生活彫造家の新たな認識を導入した。(シュティフター、ケラー、ヘッベル、ラーベ) (『ドイツ文学史』270頁)。それで各作家はジャン・パウルへの愛好を余り公にしたがらないでいた気がする。フォンターネやC.F.マイヤー、フライタークと最近訳して来た十九世紀の作家もジャン・パウルを良く読んでいたと最近知って、意外な気がしている。その上、文学史家達はゲーテ顕彰には積極的で、ジャン・パウル顕彰は限定的であるように思われる。

作品の中で直接ラーベがジャン・パウルの名前を挙げている箇所は検索すると五回である。その内、三回は『雀路地年代記』

<ジャン・ジャック・ルソーはある屋根裏部屋で極めて輝かしい世を震撼させる書物を書いた。ジャン・パウル[1763-1825]は、屋根裏部屋で貧民弁護士『ジーベンケース』[1796]の描写の術を学び、学校教師『ヴッツ』[1793]と『フィーベルの生涯』[1812]の描写法を学んだ。—>[7頁]

<クリスマスの季節には私はよくこのような玩具を手許に置いていた。この時期、白髪になったジャン・パウルも木製の子供用ラッパの絵具の香りを喜んだものである

>。[27 頁]

<ジャン・パウルの詩のように、この月[四月]はその宝物に手を伸ばし> [99 頁]
後の二回は「Goethe, Jean Paul」(Abu Telfan)、「Lessing, Herder, Schiller, Goethe und Jean Paul」(Der Schüdderump) と名前の列挙である。しかしゲーテと対等である。

その他、作品への言及、これは今回訳したものだけ、検索している。47 頁の他：
<クーシュナッペルでの貧民弁護士ジーベンケースと類似の仕事[ジャン・パウル作]
> (『飢餓牧師』394 頁)

片隅でのぬくもりとか子供時代の思い出、確かにジャン・パウル風である。また単に単語でも、「黄縁蛺蝶 Trauermantel」(『雀路地年代記』50 頁)は『ジーベンケース』、『巨人』で訳者には印象的であった蝶であり、「我が軽快な羽根付きの、胃のない[蝶の]伝令よ、そなたは赤い目玉模様と呼ばれている」(『雀路地年代記』50 頁)も「蚕が青むしとしては味覚はあっても目がなく、蝶としては味覚がなくても目があるようなものである」『ヘスペルス』とか、「孔雀の眼状斑紋 Pfauenspiegel」『巨人』を連想させる。

その他ジャン・パウル風語彙、Herostrat[33 頁]、後世[140 頁冒頭他]、コリント合金[101 頁]、ロベスピエールの尻尾[145 頁]、ホドヴィエツィキー殿[1726-1801][188 頁]、子供の友[Kinderfreund、201 頁]、長歌[Streckversen、261 頁]、見本料理[285 頁]、脱線[376 頁]、墓塚の恋人達[441 頁]

ラーベ研究の先達、千代正一郎先生の説を引くと、「両者(ジャン・パウルとラーベ)のあいだには幾多の類似点が見いだされる」、「好んで平凡人を描く傾向はいうに及ばず、フモール、多読癖ならびに引用の豊富など、文体にいたるまで非常によく似ている」。

「僅か 14 才にして突然父を失い、精神的にも物質的にも早くから人生の苦勞を体験しなければならなかったということが、ラーベの作家としての傾向を決定する重要な契機となったに違いない。ジャン・パウルも 16 才のときギムナジウムに移ってまもなく父を失い、彼の家族は極度の貧困に陥った。そのため彼も家庭教師や小学校教師として随分窮した生活をしなければならなかった。相似た傾向をもつ二人の作家がその境遇まで似ているということは、偶然の一致であるにしても、興味深い事実である。単に偶然の一致であると片付けるよりも、むしろ相似た境遇が同じような傾向を生み出したと見るべきではないだろうか」(以上、162 頁と 164 頁、6. ラーベ研究序説：千代正一郎、『ドイツ語教育五十年』、郁文堂、1982 年)

細かいことだが、ジャン・パウルは家庭教師はしたが、正規の小学校教師はしていない。また、筆者は全体、フモールや文体は似ているかもしれないが、やはり異なる味わいと思うので、全体の概括は千代先生に従いつつ、以下簡単にただ二巻訳した感想を記す。

『飢餓牧師』、これは普通に読みやすく、文体的には余り凝っているとは思わなかった。ジャン・パウルの特長は読者が主人公と言われるように、特に初期の作品は読者の目を見つめている趣きのある文体である。『飢餓牧師』ではそれほど脱線というか、著者の奇想は感じられない。また諧謔にしても、主人公が自分の伝記の類いを執筆して大いに成功したいと思い、実際は上手く書けない作中の執筆箇所は確かにジャン・パウル風なものである。しかしモズ[九人殺害者]クラブの会員が語る法螺話[後で引用]はどちらかと言うとミュンヒハウゼン風なナンセンス噺で、例えばスターンの影響を受けた漱石が、『我が輩は猫である』で、「首縊りの力学と云う脱俗超凡な演題」を弁ずるような理科の教科書のパロディと少し違う。ジャン・パウルではこのスターン風な学問のパロディをしばしば見かける。もっともモズクラブのモズ Neuntöter はジャン・パウル好みの単語で、『書齋』と『レヴァーナ』で使用されている。注で、「モズは周知のように九匹の昆虫を常に茨に張り付ける」とジャン・パウル自身が書いている。それに勿論諧謔の違いは微妙で、「冬凍った悪口が春に解ける」といったジャン・パウルの笑いはミュンヒハウゼン風でもある。

『雀路地年代記』、これは老人の回想で、現在と過去の話しが混在していて、この語り口が当時は珍しくて評価されたものらしい。ジャン・パウルとの関連では、脱線形式という面で共通すると見てよかろう。

また家の宝珠に大事な書類等隠すのは、ジャン・パウルの『フィクスライン』のエピソードを思い出させる。大家の老夫人の逸話で、くしばしば風が古い風見を軋ませ、回転させると、多分彼女は宝珠のこの紙片を下の方で思い出し、夫を思い出したかもしれない。夫はこの紙片を書いた人で、今や彼もすでにとうに亡くなっており、埋葬されているのである > [55 頁]。その紙片の内容は < 「...更に我が最愛の女性に挨拶と接吻を送り、春には燕達と共にやって来て、我が至宝の女性と喜びの結婚式を挙行したいと念じ、至宝の女性に思慕を添えて挨拶し、接吻します。衷心より愛する/ゴットフリート・カルステン/指物師職人」 > [55 頁]。ここのテーマは、無常迅速で、やはりジャン・パウル風。ちなみに棺の語はこのファイルでは 39 回。主な作家収録の CD-Rom で検索してみると、Sarg(Sarge)[棺]は Fontane (約 190)、Raabe(71)、Jean Paul(63)、Goethe(52)、Schiller(19)、Keller(28)、Stifter(11)、E.T.A. Hoffmann(12)、Freytag(5)、Heine(39)、Kafka(0)である。

Leiche(Leichen)[死体]は Fontane (57)、Raabe(42)、Jean Paul(101)、Goethe(24)、

Schiller(22)、Keller(23)、Stifter(17)、E.T.A. Hoffmann(36)、Freitag(8)、Heine(80)、Kafka(6)である。葬儀の場面等でジャン・パウルとラーベは関係深そうであり、フォスターネ、ハイネは独自の分析が必要かもしれない。

『黒いガレー船』これは、短篇として良くまとまっており、ジャン・パウルには書けない類いであるように思われる。

『ビュッツォー鷺鳥』、これは翻訳するとき、小品であるが、最も頻繁に注を参照した。「多読癖」というジャン・パウル風のもので、この作品で最も良く感じられた。またジャン・パウルとの関連では、矛盾語法と言うような諧謔的言い回しが散見された。これは例えばジャン・パウルでは「がっかりした」を稀に、「嬉しかった」と記すようなものである。一例、<不安に慄きながら、彼[首席牧師]はその魂の奥底で歌っていた。「私の今際の時が間近であれば、一」、そしてかなり慰められたことに、首席夫人からかなり辛辣な、嫌味たっぷりの慣用句を聞き取ることが出来た>[185 頁]。訳者が下手で、「かなり慰められた」のではないことが一目瞭然でないが、ここは誤訳と言われないよう用心が過ぎるのかもしれない。

今回訳した中で引用の多い作家を検索して見ると、ゲーテ、6回、『ファウスト』、9回、シラー、15回、ホラティウス、Oden、8回である、ディケンズ、2回、クラウディウス、2回、その他訳者は初めて知るような作家も多かった。引用5回のジャン・パウルを論ずるのは、それだけ珍しいからと言えるであろう。シラーは、日本人にはやはり翻訳を通じてでは、その響きの良さが伝わらないのかも知れない。日本人が調子の良い和歌や、俳句を文中に挟むようなもので、ドイツ人はゲーテやシラーの詩句を自然に思い出すのであろう。十九世紀のドイツ語圏の作家は、三十年戦争やオランダ独立運動のシラー教授の歴史研究も良く読んでいたようである。しかし第二次大戦を経験した後では、ネーデルラントの勇気付けられる話しも牧歌的に感じられるのかもしれない。現代でも歴史を俯瞰すれば、『雀路地年代記』の老人のように、<「いつも破壊だ、破壊するばかりだ」>[101 頁]と言わざるを得ないのは、残念なことである。ジャン・パウルの平和論で、注釈に、中世イタリアの戦場では、「フィレンツェとミラノの間での有名なアンギアーリの戦では自分の馬の蹄の下に落ちた一人の騎士が倒れてだけであった」という文を読むとほっとする。

3.印象的な箇所

以下個々の作品を翻訳しながら、その都度感じたことを列挙する。勿論一行ごとに感ずることがあったが、大方は省略することになる。

『雀路地年代記』、これはすでに邦訳されており、岩波文庫『雀横町年代記』伊藤武

雄訳を参照した。自分で訳して、その後、自己採点というような具合になる。既訳があるととても助かる。既訳を参照しながらも、それでも誤訳になるかもしれないのは、不徳の致すところであるが、しかしミスが生ずるのは人間的なことで、仕方ない。伊藤先生の訳で疑問に感じた箇所は余りない。以下に呈示する程度の問題である。

<「貴方は女嫌いですか」。

「全然、その反対です。私はフランス人の言葉、『一人ノ女ノ望ムコトハ、全テ神ノ意志』に全く抵抗しません。しかし、一 まさにそれ故に 一 同様に燃えるよう要求しないで、我々のために燃えてくれるそれほど要求がましくない葉巻の方が好きですし、葉巻は、興味を持って貰いたいと望まないでいて、興味深いものでありますし、更にまた云々なのです」>[18頁]。

»Keineswegs; im Gegenteil, ich beuge mich ganz und gar dem französischen Wort ›Ce que femme veut, Dieu le veut‹ und ziehe – deshalb gerade – die nicht so anspruchsvolle Zigarre vor, die für uns glüht, ohne das gleiche zu verlangen, die interessant ist, ohne interessiert sein zu wollen, und so weiter, und so weiter!«

<「どう致しまして。反対ですよ。僕は女の望むもの、神これを望むというフランスの諺の前には全く頭を下げます 一 さればこそ、われわれに対して求むところの少い葉巻を、寧ろ選ぶのです。葉巻なるものは、われわれのために燃えて、われわれの燃えることを求めず、われわれを楽しませて、われわれが楽しませることを求めず、等々ではありませんか」>。(岩波文庫『雀横町年代記』伊藤武雄訳 49頁)

伊藤武雄先生の訳は名訳と思う反面、少し合点が行かなかった。先に示した訳に一応したが、ここの部分は考えるほど、分からない。余り考えずに訳するのが正解かもしれないが、あれこれ考えているうちに、1月半ば、罰があたったのか、訳者は「帯状疱疹」になり、この病気の分、伊藤先生は正解であろう、しかし、苦しんだ分、拙訳として残すことにした。帝大生は半玉相手に楽しんだことだろう、と伊藤先生を羨望しながらの病床であった。

多分筆者には女性に或る固定観念があって、トーマス・マンは、ゲーテの『親和力』でオッティリエの描写を激賞していたと思うが、それはエードアルトが一目見てオッティリエを気に入って、「あの娘は話しが面白い」と言ったところ、それを聞いた妻のシャルロッテが、「あの娘は何も話していませんよ」と返事した箇所のことであつたと思う。多分この評論が頭にあつてか、後年『シャルロッテ・フォン・カルプ』の評伝を読んだとき、この評伝の作者は次のように論評していた。「この小説[カルプの『コルネリア』]では控え目ながらも再三、大抵の女性に生まれついている、あるいは刷り込まれている願ひ、つまり外面だけで、ただ姿を現すだけで作用し、心を獲得したいという願ひが顕わになっており、美しい衣装に対する喜び、モードへのセンスが顕わ

になっている。しかしシャルロッテに出会い、その出合いを語る人は彼女の〈内実〉を大抵注目に値するものと見なして、彼女の快適な、しかし（大きな目を除いては）さほど人目を引かない外見のことは内実故に全く忘れられている。これは多分彼女の自らの計画には合うものであったが、しかしやはり傷つくもので、決し告白されることのない不安の源泉であった」（Ursula Naumann：Charlotte von Kalb. Metzler. 1985.S.60）筆者は男性であり、このような発想は全然なく、女性はこんなことを考えているのかと新鮮に驚いた思い出がある。

名前について

＜「リーゼ、リースヘン、エリーゼ」と私は叫んだ。しかしエリーゼ・ヨハンネ・ラルフ令嬢は聞くような娘ではない＞[67 頁]。

外国文学に余り慣れていない人のために書くと、リースヘンのヘンは「指小形」と言うのか、「ちゃん」と言った意味である。リーゼはエリーゼのこと。従って、リーゼ、リースヘン、エリーゼは皆同一人物である。若い頃、日本語訳でドストエフスキーを読んで名前の同定に手こずった思い出があり、それからドイツ語が読めるようになってから、ドイツ語訳のドストエフスキーを読むと、横文字のせい、随分名前の飲み込みが楽であった記憶がある。chen はなまると ken になる、Amanda は Mandchen とか Mandeken と呼ばれたり、Sophie は Fieken と呼ばれたりする。『嵐の前』で Hoppenmarieken という侏儒の女性は通称なのであろう。また昔 Bettina von Arnim というゲーテゆかりの人物は、Bettine と呼ばれる。どちらでも良いそうである。例えば、ルイーゼとルイーザ[51 頁]、レギーナとレギーネ[152 頁]。『雀路地年代記』、『飢餓牧師』で、ハンスはヨハネスでもある。またドイツでは国王の名前はドイツ語化される。Heinrich はイギリス王ならば、ヘンリーで、フランスならアンリである。また名前は発音記号通りに日本で定着するとは限らない。Benjamin はベンヤミンであるが、私はこう表記する勇気はない。Berlin もベルリンで、in はマルクの地名では長い場合が多い。一番驚いたのは地名 Lehnin、発音辞典ではレニーンである。

愛国者のラーベ

多分アメリカへのドイツ人移民に心を痛めている。（40 頁に言及の他、101 頁にもある）。

＜間近に迫って来る歌声で、突然私は目覚めた。私は見上げた。轟々と、鼻息荒く、黄色の奔流を強引に鞭打ちながら、あの「ヘルマン号」がヴェーザー川を下って来た。船長が外車囲いの上に立っていて、一船がきつと通過するとき、挨拶して帽子に手をやった。蒸気船が何百人もの移住者を私の側、運んで行った。本流を下ってで、この本流は昔、多くのローマ人の死体も北海へ転がして行ったのである。或る男性コーラスが歌った。「ドイツ人の祖国はどこか」。そして古い櫂の木々は悲しげに梢を揺す

っているように見えた。木々はこれに返事する術を知らなかった。そして船は更に飛び過ぎて行った。ヴェーザー川はもはや異国人の死体を北海へ運ぶことはないが、しかし悲嘆の声を上げながら、自らの不幸な息子達や娘達を運んでいよう>[90 頁]。

トイトブルクの戦いの思い出と現在の状況。

<ドイツの大地の何という地点か。向こうにはかの青く、高台の列が見える。トイトブルクの森である[紀元 9 年、アルミニウス(ヘルマンとも)率いるゲルマン人がローマ軍を破った]。向こうにはかのほっそりした諸塔が見える。一 偉大なゲルマン人の文化の地、修道院コルヴァイである。また向こうにはかの山脈の群れ、イートだ、ソノ名前ハ Idistaviso イディスタヴィーズとタキトゥスは言っている[年代記Ⅱ、16、ヴェーザー右岸の盆地、ここで 16 年ローマの将軍ゲルマニクスはアルミニウスに勝利した]。私はその地帯を前世の人々の姿で一杯にした>[90 頁]。

<しかし人形はどこか[アルミニウス(ヘルマン)記念像、金不足で 1875 年やっと完成]>[91 頁]。

<どこにもヘルマン像の痕跡がない。私が見ることのできた一切は、カッセル近郊のクリストツフェル[ヘラクレス記念碑]で、軽く私は呪いを発して、空中の展望台から下りて来た>[91 頁]。<多くの健気なカッテン族[ヘッセン人の祖とされる]が血税を支払ったあの偉大なクリストツフェルに立腹しないで済んだらうに。[ヘッセン・カッセル方伯はアメリカ独立戦争の際イギリスに兵士二万人を売った]>[91 頁]。

ナポレオン解放戦争の傷跡、二人の息子を亡くした大家夫婦。

<古い教会には壁に一枚の黒板が掛けられていて、その黒板にはこの街区出身のフランス戦役戦没者の名前が記されていて、その中に私の二人の息子もありました。ルートヴィヒ・フリードリヒ・カール・カルステンとヴィルヘルム・ヨハネス・アルベルト・カルステンです。その黒板は私どもの教会椅子の丁度向かい側にありました。日曜日には、私どもはいつもそれを見つめて、私どもの健気な若者を偲びました。私の連れ合いはこの黒板が誇りで、私もそうでした>[61 頁]。

その教会が焼ける。<「母さん、有り難いことに、黒板が焼け落ちた、お母さん、もはや黒板を見つめられなかったのだ、一 お休み、お母さん」>[61 頁]。

<「何故カルステン親方がもはや黒板を見ておれなかったのか、私には分かる」と突然、声量豊かな男の声が叫んだ。それで皆がほとんど驚愕して見上げた。それは古参の職人、ルドルフで、彼はその隅で立ち上がっていた。

「私も分かる」とベルンハルト、二番目の職人が、その同僚の肩に手を置きながら、叫んだ>[62 頁]。

死後はどうなるか、人間には分からない。ある子供の死の場面。

<その子供は休めない眠りの中、呻き声を上げる。死神の手が重く、より重く、小

さな何も知らない心を圧迫している。この子供の心に間もなく、この世のすべての英知も手に届かない或る秘密が開示されようとしている>[76頁]。

良く生まれ変わったらとか話題にするが、筆者は時々、生まれ変わりとか真面目に考えることがある。昔の道元先生の言は迫力がある。「是れほどの心ろ発らずして、仏道の一念に生死の輪廻を切る大事をば如何が成ぜん」(『正法眼蔵随聞記』、岩波書店)。しかしなかなかこの方法は分からない。結局は他力。

昔のドイツの恋人達の口喧嘩と仲直り

<「あの人は　―　つまり、グスタフさんは言いました、―　自分が彼女に踊る相手を紹介派遣して、彼女のために宣伝に努めなければ(そう言ったと私は思います)、彼女は一生涯自分以外誰も見つけれないだろう。だから彼女は有り難く、忝く思っ、自分に対し愛想良くしなければならんぞ、と」。

驚きの叫び声が皆から生じた。

「リースヘン、天使のような従姉妹ラルフ、おまえに誓って申し上げる、聞いてくれ。―　おまえは思うかい、おまえが儂い喜びのかの舞台に背を向けた後、私がダンスを続けた、と。それは違う、それは違う。私は、自分の罪を償うために、立派な仕事を続けたのだ。―　ホルツマンよ、こちらへやって来て、私に炎の涙の箱を渡してくれ。―　この高貴なホルツマンを私は復讐にいぎり立つクリッペンシュターペルの爪から救出したのだ。テークラ・シュティッヘル令嬢を私はあらゆる姿勢の中で最も楽しい姿勢、あるいはむしろ座りっぱなしから引き上げた。コントロールダンスの最中、志願兵のブライミュラーのズボンの裾ストラップが外れて、彼の膝まで名を呼ぶわけに行かないものが縮んだとき、私は彼のために辻馬車を口笛で呼んだのだ。要するに、涙を乾かす必要のあるとき、私は参上して、―　申したように、単に我が罪を償うためのことをしたのだ。さて、ここにリースヘン、(ホルツマンよ、その箱を渡してくれ)、私は涙を乾かしてやったばかりでなく、涙をも集めたのだ。―　ご覧、リースヘン」。

訝しさと歓喜の一つの叫び声が、その憤懣にもかかわらず、エリーゼから漏れた。この悪漢がその箱の内容物を彼女の膝に撒くと、無数の煌めき、輝く蛍が彼女の周りに這って、ぶーんと舞った>[84頁以下]。

『黒いガレー船』

(参照翻訳：斎藤栄治訳「黒い船」、『ドイツ名作集』、中央公論社、1967年)

作品の舞台がスペイン支配下のアントワープである、主に名前のカタカナ表記で苦労した。オランダの地名や名前、スペイン人やイタリア人の頻出で、ドイツ人は自分達の読みで済ませるのであろうが、日本人は律儀であるから、できるだけ現地語と思われるものにしたが、中途半端な部分もあろう。ゴッホはホッホらしい。ダンケルク

(Dunkerque) がこう表記されるのは初めて知った有様である。

ネーデルラントの海上ゴイセンが最後歌う歌が面白い。「坊主[カトリック]よりもトルコ人がましだ」の言葉が良く見られたが[111,124,130,133,137 頁]、新教のドイツは「トルコ人」よりも勿論もっとましなのであろう。ネーデルラント人に「血筋はドイツ人」と歌わせるのだから、『黒いガレー船』は、ドイツでは教科書になる筈である。新教とカトリックの対立は根深いようで、『嵐の前』を訳して以来、新教に理解のあるフランスのアンリ四世がドイツ人にとって大事であるのが分かり、小栗浩先生が大著『アンリ四世』関係を翻訳された理由が何となく分かって来た。

<「我はナッサウのヴィルヘルム、
血筋はドイツ人。
死に至るまで、我は、
祖国に忠誠を尽くす、一」>[134 頁]

<「これはドイツ国民の独自性の一つに数えられます。常に厳かに義務忠誠の誓い
がなされます。それに対しふさわしい象徴が与えられます。皇太子陛下が国王の、つ
まり父親の御手ずから頂いた貴重な指輪に、更に忠誠を守るよう直の要請が、刻み込
まれた格言、あるいは聖書の言葉の形で添えられていなかったら、私には驚きだと言
ってよろしいでしょう。例えば『死に至るまで忠実であれ』とか類似な風に」。> (フ
ォンターネ 『嵐の前』 : Fontane: Vor dem Sturm, dtv.1983.S.449)

C.F.マイヤーを翻訳して、アングロ・サクソンのサクソンはザクセン人と知ったが、
ラーベを翻訳して、ドイツはイギリスで the Fatherland と呼ばれると知った。それ
でも両国は戦争をしたのであるから、人間は因業なものである。

<イギリスの文書ではしばしばドイツはもっぱら「祖国」[the Fatherland]と書かれ
る。確かにある種の「嘲り」が混じっているが、しかし我らの国民にとっては、一つ
の名誉であり、我々はこれを誇りに思っている>[『雀路地年代記』 101 頁]。

『ビュッツォーの鷺鳥』(参照翻訳：荒川道夫訳「ビュッツォーのガチョウ」、ラーベ
作『ドイツ果てしなき苦悩』所収、東銀座出版社、1991)

これは翻訳するとき、最も頻繁に注釈を参照した作品である。多読癖という点で
ジャン・パウルと共通する。戯作派のいたずらな多弁と類似している。その他印象と
しては、ホルンボルステル嬢を目当てに男どもが張り切っている点、革命、事件の裏
に女ありとか、記述者のアイリングがアルブス学士を助ける男気、窮鳥懐に入れば獵
師も殺さずといった感想を抱いた。「同僚」殿の同僚の使い方はドイツ的。ここではア

ルプス学士の言説を、作者の「多読癖」の例として挙げる。

＜「同僚のアイリング殿」とアルプス学士は、憤懣と憤怒の陰気な歌を歌った。「同僚殿、神々は死すべき定めの上の住民にそのオリンポスを見せるとき、この住民に神酒に酔った至福を一瞥させるとき、奸計や策謀を秘かに企み、この住民を出来るだけ深く泥土の中に押し込むつもりであることは、太古からの真理です。巨人族や半神達はこのようなことを経験して来ましたし、哀れな、内気な学校教師でもこの轍は免れません。ご覧ください。私はここに惨めなその証明書として座っています。私は、昨日の朝、ラムラーに従って、[不幸な者よ、希望に酔って、大洋の支配者たる者、Ramler1725-98:Glaucus' Wahrsagung]、まだ希望に酔った大洋の支配者でした。ユーリアは私を彼女の復讐者として選んでいました。ザハリッサは約束したのです。私は最も美しい希望の王座に就きました。ヤンテは自らを私の人生行路での伴侶に申し出ました。私がゆっくりとウゴリーノ[1220-89:餓死した、ダンテによる他、Gerstenberg のドラマ]の死を死んでいた教師職などなんぼのものでしょうか。私は自分の年金で暮らせるようになり、騎士領を請け負ったり、買ったりできるようになり、男爵と称せられるようになります。ラナッセは、高慢な町の支配者、デブの金満主人への恭順の代わりに、私に求婚をしたのです。そして彼女の足許で、私は恐ろしい誓いを立てたのです、彼女とそのカピトルの丘の鳥のために復讐をすること、町長を踏みにじること、第二のフィエスコとしてこのジェノヴァからアンドレーア・ドーリアを肅正することを、そして今日は緋色の勝利の服を着て、太陽の昇るのを目にする、と。この意味で私は日中を夢中になって過ごしました。この意味で私は夕方、アブデラ[愚昧]の人々の中に進み出て、そして同僚殿、貴殿が私の証人となって頂けますように、ローマの執政官の誰一人、アテネの第一人者の誰一人、カルタゴの高官の誰一人、私のデモステネス風雄弁でハーネ博士が卒中の間際に追い込まれたほどに、かつて敵対者の演説でかくも追い込まれたことはなかったのです。同僚殿、町長は私にそんな能力があると思っていなかったでしょう。私自身が自分に驚いています。トテモ上手ニ、私は語り、勝利しました。しかし私はまだ私の偉大な無分別の端緒に立っていただけです＞[173 頁]。

『飢餓牧師』

諧謔の例、ミュンヒハウゼン風。

モズ[九人殺害者]クラブ、いわば落研の話題。

クラブの規約：<どの構成員も、その結社の夕べの語りのたびに、一定量の血を流す権利を有していた。しかし規約の第八条項により、話し手は九人の死者よりも多くを語ってはならないのであった。これがこのクラブのとても素敵な名前の由来である>[307 頁]。

＜最初彼は、自分の不器用な従者ハンスを赤ら顔の、頬のふっくらして、卒中気味

の、九人殺害者[モズ]の前に連れて行った。この男の主要な性質は、親切な好意、快活さ、そして奇妙な咳であった。快活さ、好意、そして咳は、その内面で絶えず戦っているように見え、その瞠目すべき腹を交互に揺すっていた。この殿方は昔、砲兵隊に所属していて、この夕べはバール・シュル・オーブ近郊[1814年]での敵の大砲についてとても面白い話しをした。この球は、自分 — 話し手 — 自身の大砲の砲口に分別臭く飛んで来て、規則通りに火薬装填に収まって、それで — 「私が正しく手玉に取りと命名することが生じました。どんと我々は敵にまた送ったのです。敵はすでに尻を向けていたので、それで最悪のことになりました。この冗談で敵は十一本の脚を失いました。これは後に我々がその場に来たとき、一山となって発見されました」。「十一、 — 十一本の脚か」とフォン・ブラウ大佐は叫んだ。眉を憂わしげに高くつり上げていた。「すべて右の脚か、それともすべて左の脚か、戦友殿」。「六本の右脚と五本の左脚です、戦友殿」と砲兵は遅滞なく答えて、窮地を脱した。「合計六人」と大佐は計算した。そしてすべての九人殺害者[モズ]がこの話しに「合格点」を与えた>[308頁]。

町中でベンチに書かれていた落書き。十九世紀ドイツでの落書きの例。

<「私はルイーゼのために、矢も楯もたまらず、アメリカへ発とうと思う。コーブレンツ出身のベルガーがこちらへやって来て、これを読んで、鐘路地の我が老親達にこの件をよろしく伝え、老親達が余り騒がずに、私の食事を待つ必要はないと計らってくれたら、友達甲斐のある奴と思おう」>[357頁]。

主人公はギムナジウムに通いたいと言う、しかし靴職人の伯父が反対する。

<「ラテン語だと。おまえの父親がラテン語ができたか。私がラテン語ができるか。それでも我らは親方で、雄弁な人間なのだ。...」>[227頁]。

しかし主人公は単身、ギムナジウムの教授宅に行き、話しを進める。すると後、この伯父は、次のように変わる。

<彼は最初、周知の渋い顔をしていた後、今や自分の立場を変えて、自分の住まいでも、クリスティーネ夫人の屋根の下でも、赤雄山羊亭でも、自分、ニコラウス・グリュネバウムこそが、甥に対し、「お学者」という履歴に踏み込むよう、最初の一突き、一押しをしてやったのだと主張した。自分、 — ニコラウス・グリュネバウムこそが、甥の抗う鼻を、ラテン語とギリシア語の「繁文縟礼御殿」に押し込んだのである、と。彼は恐ろしくハンスのことを自慢し始めて、フォクラー教授には常にある種の日配せをして挨拶した。およそこう意味する日配せであった。「私の申した通りでござんしょう。私の言った通りでござんしょう。この若者が貴方の英知で一杯の鉢を朝食に頂かないのであれば、私を[不吉な]縫い糸として靴に縫い付けたらよろしい。あの若者が靴屋に向いていましょうや。いやいや、将来が楽しみでございます」

と>[240 頁以下]。

後年、落魄少尉は、自分の可愛がっていた姪と主人公が良い仲になっているのを知って、自分の気持ちを整理するために、次のような思想変換をする。

<彼は少しばかり大佐に対し嫉妬していたとすれば、哀れなハンスに対してははなはだ嫉妬していた。この抜け目ない老公がとても上手に賭けに挿入したカルタをととも輝かしく利用して微笑している神は、きっとまたルドルフ少尉の示す魂の過程に微笑していることであろう。果てしもない感嘆に続いて、自分自身と世間に対する息の長い、懐疑の驚きが見られた。起きたことは変更されがたいという賢明な洞察に続いて、周知の哲学的試み、つまり事物を適正かつ最良の明かりの下で眺める試みがあった。最初の昼夜等分[春分の日]の頃、ようやくルドルフ伯父は自分の証明力が進化してきて、自分は威勢良く、自らと世間に対し、こう主張できようと言えるまでになった、つまり自分が聖職候補生ハンス・ウンヴィルシュをコーレナウから連れて来て、弟の家に案内したのは、ハンスがフレンツヘンに、そしてフレンツヘンがハンスに惚れるようにするためであった、と>[446 頁]。

この二人の人物に見られる、思想変換は誰しも知らず識らずやっているかもしれない。他に『黒いガレー船』のレオーネの横恋慕の思想変換、「戦時の幸運[愛]」[127 頁]。例えば筆者は、翻訳を本に出来なかったのは、自分が本にしなかったのであって、リポジトリに発表した方が、日本の文化の発展にはるかに寄与し、且つ無料なのだ、と言った風に無能を有能に思想変換している。もっともこれは、「部分的には、時に手の届かぬブドウを酸っぱく思う狐達」[152 頁]の思想変換に似ていなくもない。

クレオーフェアは女性らしく、駆け落ちする前、情緒不安になっていて、多弁になっている。次の引用は、男性の恋心に敏感な当時の若い女性の心を巧みに表現しているように思われる。

<というのは翌朝、彼女はとても遅く、とても虚脱して、神経質になって現れたからである。彼女はフレンツヘンから同情されて、高く昇った陽光に注意を向けさせられると、余計なことを、と釈明し、従姉妹のことを「単純な娘、受難する以外何の意志もない娘」と呼んだ。そう言いながら、彼女は泣いていて、しかし次の瞬間には、ピアノの許に座っていて、この上なく甲高いアリアの回転の中に没入していた。昼頃には彼女はほとんど放埒に陽気になっていて、食事の間、彼女はハンスにこう告白するよう要求した、自分[彼]は、知り合った最初の時、途方もなく彼女に惚れていましたが、自分の名誉正しい性格は次第に正しいものを見つけまして、今では「穏やかなフレンツヘン」に向かっております、と>[355 頁]。

反ユダヤ主義の言説について。

『飢餓牧師』では、主人公と同じ日に生まれたユダヤ人少年は、確かに頭脳は優秀

であるが、金銭欲のある倫理的に好ましくない人物として描かれている。クレオーフェアを誘惑して、金が入らないとなると冷たくなる男である。彼の最後はこう描写される。

＜グルンツェノーで、クレッペル通りでモーゼス・フロイデンシュタインと言ったテオフィル・シュタイン博士についてまた何か耳にしたのは、ようやく一八五二年のことで、この時彼は、彼を利用した者達によって軽蔑されながら、また彼が利用されたその相手によって軽蔑されながら、枢密宮廷顧問官[秘密の顧問官]の称号を得ていて、その言葉の最も残酷な意味で市民的に死[法の埒外、追放、outcast]を迎えたのである＞[457頁]。

この人物の描写については、以下の論評をネットで見つけたので、それを紹介する。筆者も大体そんなものであろうと思う。

Neben Gustav Freytags „Soll und Haben“ gehört Wilhelm Raabes „Der Hungerpastor“ von 1864 zu den bekanntesten Romanen mit antisemitischen Stereotypen. Angeblich soll aber Raabe gar keine judenfeindlichen Positionen vertreten haben. Um Bestsellerautor zu werden, baute er solche aber wohl in die Handlung seines Romans ein. (Von Armin Pfahl-Traughber)

「グスタフ・フライタークの『貸しと借り』に並んで、ウィルヘルム・ラーベの『飢餓牧師』(1864年)は反ユダヤ主義のステレオタイプを有する最も著名な作品である。しかしラーベは全くユダヤ人に敵対する立場を表明したことはないとされている。しかしベストセラー作家となるために、多分このような立場をその長編小説の筋に取り入れたものであろう」(文責 Armin Pfahl-Traughber)。

単に表題部分だけを紹介したが、言わんとすることは明瞭であろう。この作家は売り上げで生活している。無意識に売れそうな筋の設定をしている、無意識に大衆の反ユダヤ意識を利用しているというものであろう。

筆者の感想を付言すると、ユダヤ人として現実に博士号を取ったベルネは、新教に改宗して、健筆を奮っている。思想的に論争はあろうが、人格を攻撃されることはないだろう。しかし『飢餓牧師』の作中人物は、博士号を取得し、処世上都合が良いからとカトリックに改宗しながら、博士号を取得する知性を有効活用していない。しかもベルネのことは作者も意識していて、作中、ハイネと共に言及されている[263頁]。フィクションだから、現実に「枢密顧問官」に出世させても良いわけである。しかし作者は、結局人物情報を売り込むしかない人格低劣な人間にしている。『貸しと借り』のユダヤ人は、確かに金銭欲の強いユダヤ人として描かれている。しかしこれは、生き残るための高利貸し業として描かれていて、普通の間人でも、貧窮の中で育てばそうなるであろう、と納得が行く。しかし『飢餓牧師』のユダヤ人は、抜群の知性と劣等な人格である。このような人間は困ると誰でも思うであろう。そして行き着く先は、ユダヤ人は嫌だ、シャイロックが博士号を取得したら、とんでもないぞとなろう。も

っともこれは後年のユダヤ人虐殺からの反省である。

主人公は最後牧師となるが、その前任者が理想の人物として描かれている。

<彼以上にもっと洞察の深い哲学者や牧師が海辺の彼の書齋に座ったことはまだ一度もなく、かくも珍しい文庫と格闘して、海の波の単調なざわめきから英知を学び取った者もいなかった。この文庫から離れた所で、彼は自分の長い人生、長い職務経験の中、全く次第漸次に、ほとんど予感することなく、自分独自の神学、世界観と神直感の独自の体系を築き上げていた。そしてこの体系には、しばしば聖職候補生ウンヴィルシュが感動し、しばしば驚き、更にしばしば賛嘆して眺めることになる事物が収まっていた。ハンス・ウンヴィルシュはこの老人の人生を覗くと、一つの鏡の中を覗く思いがした。はるかに離れた、肥沃な実り多い土地にいる老人の同僚達は、この老人を「飢餓牧師」と呼んでいたのであり、つまりこの老人には、テオフィル・シュタイン博士が以前枢密顧問官ゲッツ夫人のサロンで自分の青春の友の添え名としたのと同じ名前が与えられていたのである>[412 頁]。

<「我が愛する息子よ」とこの老人は言った、「私は無学な男だ。私は今日呼び出されて、いとも尊い宗教局役員会の前で試験を受けることになったら、この海辺で神の言葉を説教することは、許されなくなってしまうことだろう。向こうの本は私には頭が痛くなり、大いに不安になる。私はこれらに太刀打ちできない。私はこれらの本と格闘することになったら、いつも手短に済ませている。...」>[413 頁]

この老人の言葉は、私にとって意外なものであった。ドイツ人もこんな言葉を吐くとは思っていなかった。ドイツ人は、本も、漫画なんかではなく、分厚い哲学的文章を好む、生来大学教授向きの民族といわばステレオタイプに思っていたからである。この老人は東洋人風である。私はヘッセをほとんど知らないが、ヘッセに近いのかもしれない。

あとがき

重宝していたノートパソコンが突然起動しなくなった。初校が半分ほど済んだ段階で、後は何とか継ぎ接ぎで仕上げた。一太郎とワードの混在する PDF となった。応急の仕上げとなった。

今回の翻訳では、訳者にとっては、まずユダヤ人問題が印象に残った。フライタークの『貸しと借り』のエーレンタールとイツィヒ、それにラーベの『飢餓牧師』のモーゼス・フロイデンシュタインはシェークスピアのシャイロックに劣らず、昔のドイツ人の脳内にユダヤ人イメージとして定着していたものと思われる。イツィヒは witzig と韻が合い、差別語となっているらしい。

また言うまでもなく、パソコンは便利である。地図、人物、絵画、音楽の検索、注釈に有り難い。武将では昔、ブリュヒャー将軍、藪から出るツィーテンとか、人気が高かったことが分かった。音楽では昔、デッサウ行進曲をよく若者が口笛で吹いている。「お月さん、あなたの歩みはとても静か Guter Mond, du gehst so stille」、これも検索して見ると、曲が出て来る。ラーベの作中人物が聞いた曲が今も聞ける。やはり便利な世の中である。

「付録」は『雀路地年代記』の冒頭、マティアス・クラウディウスが出て来る。それで彼の息子宛の手紙を思い出し、付録とした。これは訳者が最初岡山大学に赴任した時、そのドイツ語共同研究室にレコードとして、クライストの逸話と一緒に吹き込まれていた。レコードになるほどだから、「良いもの」であろうと判断した次第。ユダヤ人を虐殺したり、立派な説教をしたり、人間は両面である。手紙の出典は、Projekt Gutenberg であったと思う。

2024年6月5日

恒吉法海

[付録]

Brief von Matthias Claudius an seinen Sohn Johannes

息子ヨハネス宛のマティアス・クラウディウスの手紙

An meinen Sohn Johannes, 1799

我が息子ヨハネス宛、 1799 年

Gold und Silber habe ich nicht;
was ich aber habe, gebe ich dir.
金や銀は有さない、
しかし私の有するものを与えよう。

Lieber Johannes!

愛するヨハネスよ。

Die Zeit kömmt allgemach heran, dass ich den Weg gehen muss, den man nicht wieder kömmt. Ich kann dich nicht mitnehmen und lasse dich in einer Welt zurück, wo guter Rat nicht überflüssig ist.

誰もまた戻って来ることのない道を行かなければならい時が次第に近くなった。お前を連れて行くことはできないし、良き助言が多すぎるわけではない世界にお前を残すことになる。

Niemand ist weise von Mutterleibe an; Zeit und Erfahrung lehren hier und fegen die Tenne.

誰も母親の胎の中から賢いわけではない。時と経験がここでは師で、打穀場を掃くことになる。

Ich habe die Welt länger gesehen als du.

私はお前よりも長く世間を見てきた。

Es ist nicht alles Gold, lieber Sohn, was glänzet, und ich habe manchen Stern vorn Himmel fallen und manchen Stab, auf den man sich verließ, brechen sehen.

愛する息子よ、輝くものすべてが金ではない。私は幾多の星が天から落ちるのを見たし、安心してた幾多の棒が折れるのを見た。

Darum will ich dir einigen Rat geben und dir sagen, was ich funden habe und was die Zeit mich gelehret hat.

それ故お前に若干の助言を与え、私が見出したこと、時が私に教えてくれたことをお前に伝えることにしよう。

Es ist nichts groß, was nicht gut ist; und nichts wahr, was nicht besteht.

善なるものでないものは、何も偉大なものではない、存続しないものは、何も真実ではない。

Der Mensch ist hier nicht zu Hause, und er geht hier nicht von ungefähr in dem schlechten Rock umher. Denn siehe nur, alle andre Dinge hier mit und neben ihm sind und gehen dahin, ohne es zu wissen; der Mensch ist sich bewusst und wie eine hohe bleibende Wand, an der die Schatten vorüber gehen. Alle Dinge mit und neben ihm gehen dahin, einer fremden Willkür und Macht unterworfen, er ist sich selbst anvertraut und trägt sein Leben in seiner Hand.

人間は現世が住処ではない、人間は現世に偶然劣等な服で歩き回っているわけではない。見てごらん、他のすべてのもの [動物]は、人間と一緒に、人間の傍らで、それと知らずに生きており、死んで行く。人間は自覚しており、高く留まっている壁のようなもので、その壁の許で影どもは移ろって行く。人間と一緒に人間の傍らのすべてのものは消えて行き、見知らぬものの恣意や力に隷属している。人間は自ら自らを恃んでおり、自分の人生を自らの手で運んでいる。

Und es ist nicht für ihn gleichgültig, ob er rechts oder links gehe.

人間にとって右側に行くか、左側に行くか、どうでもいいことではない。

Lass dir nicht weismachen, dass er sich raten könne und selbst seinen Weg wisse.

人間は自分に助言でき、自らの道は分かると、過信しないことだ。

Diese Welt ist für ihn zu wenig, und die unsichtbare siehet er nicht und kennet sie nicht.

現世は人間にとって余りにわずかなもので、見えない世界を人間は見ないし、その世界を知らない。

Spare dir denn vergebliche Mühe, und dir kein Leid, und besinne dich dein.

それで甲斐のない苦勞はしないことだ。取り越し苦勞はやめて、自分の責務を考えなさい。

Halte dich zu gut, Böses zu tun.

高く持して、悪いことはしないこと。

Hänge dein Herz an kein vergänglich Ding.

儂い事柄に執着しないこと。

Die Wahrheit richtet sich nicht nach uns, lieber Sohn, sondern wir müssen uns nach ihr richten.

愛する息子よ、真理は我々に従って創られるのではなく、我々が真理に従わなければならない。

Was du sehen kannst, das siehe, und brauche deine Augen, und über das Unsichtbare und Ewige halte dich an Gottes Wort.

お前が見てとれるもの、それを見なさい。自分の目を使うこと。そして目に見えないもの、永遠のものについては神の言葉を信じなさい。

Bleibe der Religion deiner Väter getreu und hasse die theologischen Kannengießer.

お前の父祖の宗教を大事にして、神学的説教家を退けなさい。

Scheue niemand so viel als dich selbst. Inwendig in uns wohnt der Richter, der nicht trägt, und an dessen Stimme uns mehr gelegen ist als an dem Beifall der ganzen Welt und der Weisheit der Griechen und Ägypter. Nimm es dir vor, Sohn, nicht wider seine Stimme zu tun; und was du sinnest und vorhast, schlage zuvor an deine Stirne und frage ihn um Rat. Er spricht anfangs nur leise und stammelt wie ein unschuldiges Kind doch wenn du seine Unschuld ehrst, löset er gemach seine Zunge und wird dir vernehmlicher sprechen.

誰に対しても自分自身と同様恐れることはない。自分の中に欺くことのない裁判官が宿っていて、その声が我々にとっては全世界の喝采よりも、ギリシア人やエジプト人の英知よりも大事なのだ。息子よ、その声に反することのないように心がけなさい。お前が思い、計画することは、まずお前の額に相談し、助言を求めなさい。その裁判官は最初ただ小声で、無邪気な子供のようにどもって語ることだろう、しかしお前がその無邪気を尊重するなら、次第にその舌を緩めて、お前にもっと聞き取りやすく話すようになることだろう。

Lerne gerne von andern, und wo von Weisheit, Menschenglück, Licht, Freiheit, Tugend

etc. geredet wird, da höre fleißig zu. Doch traue nicht flugs und allerdings, denn die Wolken haben nicht alle Wasser, und es gibt mancherlei Weise. Sie meinen auch, dass sie die Sache hätten, wenn sie davon reden können und davon reden. Das ist aber nicht, Sohn. Man hat darum die Sache nicht, dass man davon reden kann und davon redet. Worte sind nur Worte, und wo sie so gar leicht und behände dahin fahren, da sei auf deiner Hut, denn die Pferde, die den Wagen mit Gütern hinter sich haben, gehen langsameren Schritts.

他人から喜んで学びなさい。英知や人間の幸せ、啓蒙、自由、徳操等について話される所では、熱心に耳を傾けなさい。しかしむやみに盲信してはいけない。雲はみな水を含んでいるとはかぎらないから。いろいろな賢人がいる。それについて話すことができるからといって、その件を心得ているという人もいる。しかしそうではないのだ、息子よ。その件について話せるからといって、その件が分かっているわけではない。言葉は言葉にすぎない。とても軽々と速やかに言葉が語られる所では、用心することだ。財宝を積んだ馬車を引く馬は、もっとゆっくりとした足取りで進むものだ。

Erwarte nichts vom Treiben und den Treibern; und wo Geräusch auf der Gassen ist, da gehe fürbass.

騒ぎ立てるようなことからは何も期待するな。路地が騒がしいときは、さっさと進め。

Wenn dich jemand will Weisheit lehren, da siehe in sein Angesicht. Dünket er sich noch, und sei er noch so gelehrt und noch so berühmt, lass ihn und gehe seiner Kundschaft müßig. Was einer nicht hat, das kann er auch nicht geben. Und der ist nicht frei, der da will tun können, was er will, sondern der ist frei, der da wollen kann, was er tun soll. Und der ist nicht weise, der sich dünket, dass er wisse; sondern der ist weise, der seiner Unwissenheit inne geworden und durch die Sache des Dünkels genesen ist.

お前に誰かが知恵を授けるときには、その顔を覗くことだ。自惚れが見えたら、どんなに学があろうと、有名であろうと、放っておいて聞き入れるな。自分が有しないものを与えることはできない。自分が欲することを言うことができると言いほす者は、自由な人間ではない。自分のなすべきことを欲することができる者が自由な人間だ。自分は知っていると言ふ者は賢くない。自分が知らないことを自覚していて、自惚れることがない人間が賢いのだ。

Was im Hirn ist, das ist im Hirn; und Existenz ist die erste aller Eigenschaften.

頭の中にあるものは、頭の中にしかない。実在がすべての特性の第一の特性だ。

Wenn es dir um Weisheit zu tun ist, so suche sie und nicht das deine, und brich deinen Willen und erwarte geduldig die Folgen.

英知が問題となったときは、それを探し、私欲を去り、私意を捨て、辛抱強く結果を待ちなさい。

Denke oft an heilige Dinge und sei gewiss, dass es nicht ohne Vorteil für dich abgehe und der Sauerteig den ganzen Teig durchsäuere.

しばしば神聖なことを考え、自分にとって利とならないはずはない、パン種は生地をすべてパンにすると確信するがいい。

Verachte keine Religion, denn sie ist dem Geist gemeint, und du weißt nicht, was unter unansehnlichen Bildern verborgen sein könne.

宗教を馬鹿にするな。宗教は精神ためのものだ。見栄えのしない諸像の中に何が隠されているかお前には分からないのだから。

Es ist leicht zu verachten, Sohn; und verstehen ist viel besser.

軽蔑することは易しい。しかし理解することがはるかにより良い。

Lehre nicht andre, bis du selbst gelehrt bist.

自らが学を修めるまでは、他人に教えないこと。

Nimm dich der Wahrheit an, wenn du kannst und lass dich gerne ihretwegen hassen; doch wisse, dass deine Sache nicht die Sache der Wahrheit ist, und hüte, dass sie nicht ineinander fließen, sonst hast du deinen Lohn dahin. Tue das Gute vor dich hin, und bekümmre dich nicht, was daraus werden wird.

できるものならば、真理に仕えなさい。そして真理のせいで甘んじて憎まれなさい。しかし私事は真理の件とは関係ないと心得て、私事と真理とを混同しないこと。さもないと甲斐がなくなる。思わず知らず良きことをして、その結果がどうなろうと案じないこと。

Wolle nur einerlei, und das wolle von Herzen.

ただ同じことを欲して、そのことを心から欲すること。

Sorge für Deinen Leib, doch nicht so, als wenn er deine Seele wäre.

体は大事に、しかし魂であるかのように案じなくてもよろしい。

Gehorche der Obrigkeit, und lass die andern über sie streiten.

お上には従うこと。お上のことでの喧嘩は他人に任せなさい。

Sei rechtschaffen gegen jedermann, doch vertraue dich schwerlich.

誰に対しても正直に。しかし簡単に信じてはいけない。

Mische dich nicht in fremde Dinge, aber die deinigen tue mit Fleiß.

他人のことに介入しないこと。自分の義務は忠実に。

Schmeichle niemand, und lass dir nicht schmeicheln. Ehre einen jeden nach seinem Stande, und lass ihn sich schämen, wenn er's nicht verdient.

誰にも取り入るな。誰にも取り入らせないこと。どの人もその立場に応じて敬うこと。それに相応しくない人は恥じ入らせるとよい。

Werde niemand nichts schuldig; doch sei zuvorkommend, als ob sie alle deine Gläubiger wären.

誰にも借りを作るな。しかし皆自分の債権者であるかのように愛想よくすること。

Wolle nicht immer großmütig sein, aber gerecht sei immer.

必ずしも大判振る舞いしなくていい。しかしいつも公正にいなさい。

Mache niemand graue Haare, doch wenn du Recht tust, hast du um die Haare nicht zu sorgen.

誰にも悲痛な思いを [白髪に] させるな。しかし自分が正しいときには、白髪にさせることを気にしなくていい。

Misstraue der Gestikulation, und gebärde dich schlecht und recht.

所作に煩わされるな。不細工に正しく振舞いなさい。

Hilf und gib gerne, wenn du hast, und dünke dir darum nicht mehr; und wenn du nicht hast, so habe den Trunk kalten Wassers zur Hand, und dünke dir darum nicht weniger. 自分が有するときには、喜んで助け、与えなさい。だからといってそれ以上自惚れてはいけない。有しないときには、冷たい水を一杯手にとって、だからといってそれ以上卑下しないこと。

Tue keinem Mädchen Leides und denke, dass deine Mutter auch ein Mädchen gewesen

ist.

娘さんに辛い思いをさせないこと。お前のお母さんもかつては娘であったことを考えなさい。

Sage nicht alles, was du weißt, aber wisse immer, was du sagest.

知っていることは必ずしもすべて言う必要はない。しかし言うときにはいつも内容を承知していなさい。

Hänge dich an keinen Großen.

偉い人に寄りかからないこと。

Sitze nicht, wo die Spötter sitzen, denn sie sind die elendesten unter allen Kreaturen.

嘲笑家の座っている席に座ってはいけない。嘲笑家はすべての被造物の中で最もみじめなものだ。

Nicht die frömmelnden, aber die frommen Menschen achte und gehe ihnen nach. Ein Mensch, der wahre Gottesfurcht im Herzen hat, ist wie die Sonne, die da scheint und wärmt, wenn sie auch nicht redet.

信心ぶった人ではなく、敬虔な人間を尊重し、付いて行きなさい。心に真の神への畏敬の念を有する人間は、輝き温める太陽のようなものだ、たとえ語らなくても。

Tue was des Lohnes wert ist, und begehre keinen. Wenn du Not hast, so klage sie dir und keinem andern.

何か甲斐のあることをしなさい、そして報酬を求めないこと。苦しい目にあったら、自らに嘆いて、他人には嘆かないこと。

Habe immer etwas Gutes im Sinn.

いつも心に何か善意を抱いていること。

Wenn ich gestorben bin, so drücke mir die Augen zu und beweine mich nicht.

私が亡くなったら、目を閉じさせなさい。そして私のことを泣かないこと。

Stehe deiner Mutter bei und ehre sie so lange sie lebt und begrabe sie neben mir.

お前のお母さんを助けて、生涯尊重し、私の隣に埋葬させなさい。

Und sinne täglich nach über Tod und Leben, ob du es finden möchtest, und habe einen

freudigen Mut; und gehe nicht aus der Welt, ohne deine Liebe und Ehrfurcht für den Stifter des Christentums durch irgendetwas öffentlich bezeuget zu haben.

日々生と死について、自分にそれが分かるか考えなさい。明るい勇気を抱いて、キリスト教界の創始者に対するお前の愛と畏敬の念を、何らかのことで通じて、明らかなものにしてから、この世界を去りなさい。

Dein treuer Vater.

お前の忠実な父より。